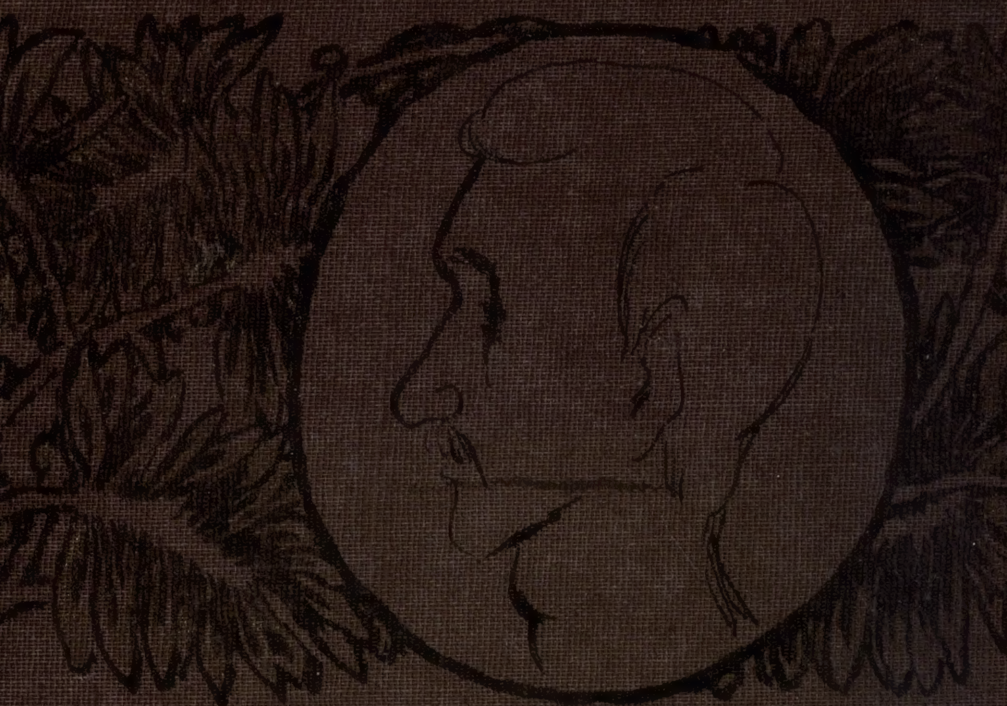












抱月全集

第一巻


LIBRARY
FEB 16 1968
UNIVERSITY OF TORONTO



大正六年時代の島村抱月

抱月島村瀧太郎先生小傳

先生、本姓は佐々山氏、明治四年正月十日島根縣那賀郡久佐村に生る。父は名を佐々山一平と云ひ、初め其の地にありて製鐵を業とせしが、後破產して商業其他諸種の業務に從事して諸所に轉住し、更に晩年に至りては家を散じて、獨り那賀郡波佐村柚根に孤住せしも、明治三十八年一月同所にて酔餘火災に罹りて燒死す。母はキセと稱し、同縣美濃郡益田村大谷氏の出なり 嘉永二年同村に生れ、晩年病むこと殆んど十餘年にして、明治二十八年十二月同村にありて歿す。先生、二弟一妹あり。雅一、寛一及びイチ之れなり。共に健在す。

先生の出生地久佐村は濱田港を奧に入る少許の處にあり。そこにありし佐々山氏の工塲に於て製造せられたる物品は馬の背に積まれて濱田港に運ばれ、港よりは自家の所有船によりて下ノ關を經て大阪の市塲に運ばるゝを常とせり。先生の幼年時代は實に斯の如き繁劇なる家業の醸す空氣のうちに過されたるなりき。而も先生の性たるや、幼にして既に寡默沈毅、衆と喧騷を共にするを好まず、獨り靜かに書を讀み物を思ふを樂しみたりしが如し。そは先生の弟君佐々山雅一氏が先生の逝去に際し往時を追懷して語りし左の如き談片によりても、想像し得る所なり。

「兄は學問好きで、小學校なども一番の席を獨占してゐた。それに就いては餘談に入るが、餘り兄が成績が好いので學校中の生徒の嫉みを買つた。そして彼が卒業しようとする間際になつてからにひどい目に遭はされた。それは或る森に誘はれて袋叩きにされたのであつた。常から兄は斯うした嫉みから酷い目に遭はされてはゐたが、手向ひをするでもなく、なすがまゝにさしてゐた。此の時でも矢張りその通りで兄は酷い目に遭つたことなどは何一つ口外はしなかつたが、伜が袋叩きにされたと云ふことを聞き知つた父は酷く怒つてその生徒等の家へ押掛けて行つたりした。兄は矢張り一番で卒業することになつた。」

斯くの如く先生は優等の成績を以て小學校の業を卒へたりしが、慘ましき家運の衰頽は先生をしてそれ以上脩學の志を得しめず、却て先生をして濱田町のとある病院の藥局生としての貧しく苦しき獨立の生活に入らしめざるを得ざりき。而もその當時に於ける先生は、其の貧しき獨立生活を通じて、將來自ら醫師として世に立たん事を望みつゝありしが如しとさへ云はるゝにも拘らず、間もなく其處を去つて、其の地の裁判所に給仕として勤むることゝなれるなり。之れ先生が十五六歳の頃なりとす。

かよはき自己の力により辛うじて糊口の資を得つゝも、先生は嘗て脩學の志を斷つことなく、勤めの傍ら夜とある私塾に通ひて、漢文英語數學等を修む。就中先生の最も好んで學びしは漢文と英語とにして、漢文は早くも「日本外史」「史記」「文章軌範」等に精通し、英語はリーダーの初歩より初めて濱田町にありし間に變則ながらも中學の上級程度の讀書力を得たりしと云へば、其の獨學自習の如何に熱心なるものなりしかをおもふに足る。當時先生と同じく濱田裁判所に在勤せる同僚中に後の東京地方裁判所檢事伊勢元一郎氏、後の北海道長官俵孫一郎氏、及び潮常太郎、村上其太郎の諸氏あり。而も此等の

友人等は間もなく相追うて上京し、或は高等商業學校に、或は慶應義塾に、それ〴〵脩學の途に就けるを見る。さらでだに向學の念夙に衆に超えたりし先生が、自己　前途に對して當時如何に激しき焦燥を感じたりしかは、蓋し想像に餘りある所なり。

時恰も先生の前途に向つて一導の光明をもたらせるものを、當時濱田裁判所の檢事たりし故島村文耕となす。文耕、もと太田姓、伊豫の人、神奈川縣都筑郡都田村大字池邊に巡査奉職中同村島村タツ方へ入夫して島村姓を冒す、後檢事に任じ、晩年職を辭して辯護士となり横濱市に開業、明治三十七年九月五日同處に於て五十一歳を以て病歿す。明治二十二年文耕松江市より轉じて濱田裁判所に檢事たるや、はやく既に先生の非凡を認め、後援鞭韃に努むること切なり。當時先生は給仕より進んで、雇書記たり。文耕つひに先生にすゝむるに東京遊學のことを以てし、毎月五圓宛の學資を給せんことを約す。先生意を決していよ〳〵明治二十三年二月上京す。即ち先生が二十歳の時なり。而して翌二十四年、先生更に島村氏の懇望を容れ、父君と合意の上、文耕の養子となり、六月十三日入籍して島村姓を冒すに至れり。之より先、島村家より再三先生を養子として貰ひ受けたき旨の交渉ありしが、先生の父君に其の意なかりしより其都度破談に終り、爲めに或時の如きは島村家より先生へ給しつゝありし學費の暫く杜絶せしこと等あり、東京にありし先生の境遇極めて困難なる時期もありしが如し。而もかゝる窮境にありし間と雖、先生は永く病床に苦しみつゝありし郷里の母君へ小遣錢などを送りたりしと云ふ一事、以て先生の美しき性情の一端を窺ふべし。

先生の東京に出づるや、初め東京物理學校、日本英學院、私立商業學校等に、英、數、理科等を學びたりしが、明治二十四年十月つひに東京專門學校文學部に入り、同二十七年七月其業を卒ふるに至れり。但し上京の當初に於て先生の目的とし

たりしところ、又は其後如何なる內外の經過を辿りて特に東京專門學校の文學部を選んで入學するに至りしか等の事に關しては、今日之れを知るによしなきを遺憾とす。先生早稻田の學園にあること滿三年、豫備教育に於て甚だ不完全なるものありしに拘らず、學力群を拔き、常に級の首位を占めたり。學生時代の先生は、依然寡默沈思の風を變へず、加ふるに操守甚だ嚴格、又非常なる勉强家にして、出席なども極めて規則正しき方なりき。當時の先生は又其風采の甚だ見すぼらしき點に於て同級生間の注意を惹き、中島半次郎氏と共に「敝袴先生の二幅對」を以て稱せらる。之れ一面に於て當時の先生の苦學の狀を語るものなりと雖、他面に於て外形に拘泥せざりし先生其の人の性情を語る好話柄たり。在學中、先生何れの學課に於ても拔群の成績を示したりしと雖、就中先生の研究と思索とに努めしは哲學、特に美學上の問題に關してなりき。而して卒業に際し先生の提出したる「美の意識」(?)と題する論文は、時の教授坪內雄藏、大西祝の二先生をして驚嘆措く能はざらしめしと云ふ。又先生が二年級の時、上級の金子馬治、中桐確太郎、紀淑雄の三氏、同級の中島半次郎、後藤寅之助(宙外)の二氏、及び下級の朝河貫一、綱島榮一郎(故梁川)、五十嵐力の三氏等と共に哲學會と稱する團體を組織し、坪內、大西兩先生監督の下に大に自治的研究に努むるところあり。此の會今日なほ一種の親睦機關として存續す。なほ先生が卒業當時に於ける思想、抱負等の如何なるものなりしかにつきては、卒業に際して先生自ら編輯の任に當りし同窓紀念錄と題する小冊子中の自記の告白、最もよく之を語る。

　島村瀧太郎

明治四年一月十日、島根縣石見國那賀郡小國村に生る、氏は本佐々山。

平生愛讀する所は、陶淵明の採菊詩、歸去來辭、東坡の赤壁賦、鴨長明の方丈記、上田秋成の雨月物語、新古今の戀の

部、平家物語、ゴールドスミスの荒村詩、エマルソン文集など。

希望を語らんか、身を修め家を齊へて斯生を厚くするの餘、願はくは學者として哲學特に美學の研窮を全くし、著述家として評論的日本文學史の大成を期し、以て眞理の顯揚に幾分の力を効すを得む。誠實事に處して而も偏狹ならざる點に於て孔子の如きは景慕するに堪へたり。他より思想の自由を制せらるゝことなき限りは、如何に喧擾の裡と雖ども、我が欲するに從ひて、或は靜かに思索に耽り得べく、或は周圍の些末なる事件にまで看察を馳せ得べく、意を一理に集中せしむると共に、多方に分注することも略ぼ心の儘なる自から得意とする所なり。

我が信仰の當體は未だ名くべからず。信仰なりや否やをも自から知らざれど、唯我れの心底に何ものかの存するをば疑はず。

人々、意志正確、知性英明、同情深切、三者調和して以て事々理性の示す所に從ひ行へば、天下おのづから寧し。之れわが主義なり。

我が嗜み食ふ所は菓子、餅、梨子、柿子、甘酒、赤飯の茶漬、其他凡て脂氣强からざるもの。我が好愛する所は、殘月、秋山、牽牛花、小兒、或る種類の夢、狗兒、詩歌、小說、音樂劇。

失題

秋山を染むるしぐれは一色の
もみぢや千々の心なりけむ

早稻田の學園における三年間の學生々活に於て、先生が最も深大なる感化を蒙りたる人を坪内雄藏先生となす。而して此

の坪内先生との間に交ばれたる師弟の關係は、更に卒業後に至りて益々深く且厚きを加へぬ。之れより先き坪内氏東京專門學校に講師たる傍、雜誌『早稻田文學』を刊行して大にわが文學界思想界の啓發に努む。而して先生の學校を出づるや、先づ選ばれて之れが編輯の任に當ることゝなりぬ。當時『早稻田文學』は實にわが文學雜誌界一方の權威を以て目せられ、わが思想界乃至文藝界に貢献するところ甚だ大なり。先生、坪內氏の下に之れが編輯に從ふ傍、東京專門學校文學科講義錄講師として美學講義の執筆に努む。明治二十八年、先生神奈川縣都筑郡都田村字池邊島村瀧藏二女イチ子を迎へて家を成す。時に先生年二十五、イチ子は二十一歲なり。

先生が『早稻田文學』記者として初め最も力を致したるは、『早稻田文學』獨特の記事として重要視せられし「彙報」の作製にありしが如し。そは每一ケ月間に起りたる文壇の諸現象に關する材料を、或は新聞、雜誌等の記事により、或は訪問によりて蒐集し、更に之れを分類し、整理し、時には批判を加へて紹介するにあり。『早稻田文學』の此の獨特なる記實的批評が、當時乃至爾後の文壇に與へたる裨益は誠に多大なるものなるが、同時にそは坪內氏指導の下に自ら此の事に從ひし人々にとりて、得易からざる研究實修の好機會なりき。之れ後年先生自ら當時を追懷して、その所謂「彙報つくり」が先生自身にとりて三年間の學校生活以上の價値ある修業なりし事を、常に後進者に向つて語りしによつても知らる。

斯くの如く、先生の『早稻田文學』記者たるや、一方に於てかの「彙報」作製その他の編輯事務に從ひつゝ、他方に於て種々なる哲學上文藝上の問題に關する評論に筆を染め、引續き同誌上に發表す。當時の文壇先生によつて啓發さるゝところ甚だ多く、隨て文壇に於ける先生の地位漸く高きを占むるに至る。明治三十三年四月刊行せられたる『風雲集』（抱月、宙外、靑々園三氏合著）に收められたる「西鶴論」「音樂美の價値」「伊達競阿國劇場を觀て所謂夢幻劇を論ず」「悲劇と人生觀」「氣韻生

動」「變化の統一と想の化現」等の諸篇はいづれも其の折の所産なり。先生又其の頃『早稻田文學』同人等を中心とせる數氏と共に近松研究會を組織し、主として近松の戲曲を研究し、その感化を蒙ること少なからざりしが如し。明治三十年四月、先生更に後藤宙外、小杉天外、伊原靑々園、水谷不倒の諸氏と文藝雜誌『新著月刊』を發行し、その創刊號に小說「白あらし」を揭ぐ。之れ先生が創作を公にしたる始めとす。『新著月刊』の發行は僅に一ケ年ほどにして止みしが、その間先生は每號同誌上に潑溂たる時評を揭げ、當時小說壇に覇を稱しつゝありし硯友社、根岸派などの先輩を目標として戰ひ、大にわが小說界に於ける新領域の開拓に努むるところありしと同時に、自らも一方に於て小說の創作に力を致し、前記「白あらし」を始めとして「筐すべり」「めをと波」「白蓮華」「ながれ星」「月がさ日がさ」「夏の夢」「佛ぞろへ」等の作を引續き發表して、批評家として以外更に創作家としての非凡なる才能を認めらるゝに至る。明治三十九年一月刊行せられたる『亂雲集』一卷に收められたる小說の多くはその頃の創作にかゝるものなり。而して先生の此の創作上の才能は、既に早稻田在學當時より同級生間の廻覽雜誌『友垣草紙』を通して師友間に認められつゝありしところなりと云ふ。

明治三十一年『早稻田文學』休刊し、先生は讀賣新聞社に入り、三面主任記者たり。同年九月より新たに東京專門學校文學科講師となり、一年生の爲めに美辭學、二年生の爲めに支那文學史、三年生の爲めに西洋美學史を講じ、傍ら讀賣新聞月曜附錄を主宰す。明治三十二年讀賣新聞社を辭して、書肆三省堂編輯部の一員たり、專ら辭書編纂の事に從ふ。明治三十三年四月、寅外、靑々園二氏と合著の『風雲集』出版、同八月三省堂を辭し、同九月より翌三十四年十二月まで早稻田中學校敎員となり英語及び倫理を講ず。明治三十五年、『新美辭學』の著あり、斯學の方面に於ける空前の大著として學界の推讃を受くること甚だ大なり。此の年三月、東京專門學校海外留學生として選ばれ、英吉利及び獨逸に派せらる。先生、その送別會の

席上に於て述べて曰く、「近來洋行して歸朝する者、多く何等かの土産をもたらす。曰く何、曰く何、曰く何。余若し能ふべくんば歐洲文明の背景とも名づくべきものを觀且味はひて持ち歸らんことを希ふ。」と。以て當時に於ける先生の抱負の一端を窺ふべし。

先生先づ英吉利に赴き、明治三十五年十月より翌々三十七年六月までオクスフォード大學に在りてE. de Selincourt 講師の英文學講義、同じく Examination School に於いて G. J. Stout 教授の心理學講義、同じく Ashenorean Museum に於て P. Gardner 教授の希臘彫刻講義等を聽講す。其間、先生は一面書窓裡の人として讀書と研鑽と思索とに努むること非常なるものありしと共に、他面彼の地の演劇と美術とに深大なる興味を感じ、或は劇場に、或は美術館に、或は展覽會に出入すること繁く、わけてもそれらのうちの或るものを通して近代文化の精神に味到することいよ〱深し。而も亦或時は純粹に倫敦人を以て組織されたる旅行隊に加はつて、かの有名なる湖畔地方に遊び、秀麗なる其の地の自然裡に立つてワーヅワース等湖畔詩人の生活と藝術とを回想し、或時は唯一人かのストラットフォード、オン、エヴンを訪ねて沙翁その人の偉大と共に藝術そのものゝ偉大なる生命を痛感し、更に又或時は大學を中心として程遠からぬ田舍の村々をさまようて、昔ながらの風俗と淳樸との存する其の地の人々の生活に、限りなき愛慕を寄す。斯くの如くして、先生の學殖識見が著しき進歩を得たるは勿論、先生その人の精神的生活は廓然として新らしき生彩を帶び來れるなりき。明治三十九年七月出版せられたる「滯歐文壇」一卷中に收められたる印象錄の多くは、此の英吉利留學中に於ける執筆に係るものなり。而して先生が遠く祖國の文壇に寄せたる此等の印象錄が、當時わが文壇に與へたる刺戟と啓發とは、實に大なるものなりき。英吉利にある事滿二年にして、明治三十七年十月更に進んで獨逸に移り、伯林大學に入りて H. Wolfflin 教授の十九世紀藝術史講義、Max

Desoir 教授の美學原論講義に出席す。伯林に於ける先生の生活も亦倫敦に於けるそれと異ならざりき。伯林は勿論、時にはミュンヘン、ウヰン等にも赴きて、其の地の造形美術、演劇、歌劇等を鑑賞し研究することは、先生の最も重なる仕事の一つなりき。かくて翌三十八年六月、先生つひに歸朝の途に就き、歸途佛蘭西に遊び、同年九月再び祖國の土を踏むこととなれり。

先生が足掛四年の滯歐中、故國に於ては先生の養父君と實父君と相次いで他界の人となれり。就中明治三十八年一月實父君が不遇孤獨の生活裡に於て醉餘燒死したりしと云ふ凶報は、旅中の先生にとりては一層の悲痛事たりしや疑ひなし。更に先生の滯歐中、祖國空前の大事件たりし日露戰役の勃發せしこと、而してそれに關しては歐洲人の間にありて特に見聞せし事々物々も、先生にとりては豫期せざる貴き經驗たりしなるべし。

歸朝の年十月、先生東京專門學校改稱早稻田大學文學科講師として、美學、近代英文學史、歐洲近代文藝史、文學概論等を講じ、傍ら東京日々新聞の月曜文壇を主宰す。翌三十九年一月、諸氏と共に坪内博士を助けて文藝協會組織の任に當り、その機關として再興せる雜誌『早稻田文學』の主幹たり。而して其の初號に歸朝後最初の力作たる「囚はれたる文藝」と題する評論を掲げ、それによりて泰西文藝思潮の主流に關する一家の識見を示す。次ぎて「沙翁の墓に詣づる記」を四月號に、ヴェルサイユ宮殿のロココ藝術を論じたる「ルイ王家の夢の跡」を九月號に掲げ、沈滯に傾きつゝありし當時の批評界に目ざましき波動を與ふ。同年十月東京日々新聞の月曜文壇を退く。翌四十年九月、早稻田大學英文學科教務主任に、更に翌四十一年より同大學維持員に就任す。當時居を牛込區藥王寺前町二十番地に占む。その家の庭墓地に接するところより、時に自ら對墓庵と號す。

明治四十年より二三年間は、わが文壇空前の大波動とも稱すべき自然主義運動の旺盛を極めたる時期なりき。歸朝後日なほ淺くして夙く既に此の運動の勃興の氣運の我が文藝界に閃めきつゝあるを觀取したる先生は、勢ひを新たにして之れが促進と誘導とに力を致すに至りぬ。而も先生が此の運動に於ける大いなる役割は、その當初にありては決して單なる猪進的唱導者のそれにあらずして、寧ろ最も聰明なる、而して最も有力なる說明者、指導者のそれなりき。即ち我が文藝界に於ける其の新しき思潮と努力とに對する深き理解と同情とに基き、之れを歐洲文藝界に於ける主潮に結び付け、以て其の意義と價値とを明らかにせんとすることが、先生の事業の眼目たりしなり。之れ明治四十一年一月號の『早稻田文學』に掲げたる「文藝上の自然主義」を始めとして、同年九月同じ誌上に現れたる「藝術と實生活との間に横はる一線」に至る間の先生の多くの評論を味讀する者の、何人も認むるところなるべし。而も明治四十二年六月、歸朝後に成れる各種の評論を集めて一卷となし、之れを『近代文藝の研究』と題して出版するに際し、先生は此の書を以て自然主義論を中心とし、最も複雜曲折を極めたる自家の藝術論に一段落をつけんと欲するものなることを自白し、更に新たに卷頭に添ふるに「序に代へて人生觀上の自然主義論を論ず」の一篇を以てし、人生に對する自己の懷疑的心狀を告白し、懷疑哲學とも稱すべき一種の思想傾向の閃めきを示したり。

此の年二月、かねて組織せられたる文藝協會新たに演劇研究科を設置するに當り、之れが指導教師となる。而して之れを動機として先生の演劇に對する興味頓に激增し、爾來專ら力を此の方面に致すに至る。隨て其の頃より文筆の人としての先生の努力の文壇に示さるゝもの漸く其の量を減じ、剩へそれらの多くに於て先生自らの懷疑的主觀の陰影時を追うて彌々濃きを見る。同年六月、雜誌『太陽』新進廿五名大家の投票を發表するや、先生は文藝界泰斗の第四位に當選し、金製頌德盃を

受く。なほ此の年、或は仙臺第二高等學校に、或は名古屋に於ける早稻田大學校友會に、或は東京に於ける近松祭に、或は東亞協會講演會に、その他市內及び各地に於て催されたる諸種の講演會に講師として聘せらること甚だ多し。

明治四十三年一月、「早稻田文學」にイブセン劇「人形の家」の飜譯を掲ぐ。之れより前、此の飜譯執筆中肋膜炎に冒され、飜譯完了と同時に床に就く。病やゝ癒え、二月相州小田原に轉地して療養につとむ。初夏全癒、歸京す、翌四十四年五月、文部省文藝調査會を設くるに當り、先生又選ばれて同委員に任ぜらる。同年九月、郊外戶塚村諏訪の新居に移る。此の年、「清盛」「運命の丘」等戲曲の創作に努む。又此の年、「人形の家」を文藝協會試演場に實演するに際し、先生その舞臺監督として大に努め、多大の反響あり。同九月、更に之れを東京帝國劇場に於ける文藝協會公演に上場、劇壇爲めに動く。演劇に對する先生の興味愈々熾烈にして、漸く他を顧みざるの風あり。翌四十五年五月、ズーダーマンの戲曲「故鄕」を飜譯し、之れを東京有樂座に於ける文藝協會公演に上す。是に於て、演劇に對する先生の好尙殆んど其の極度に達せんとする傾ありしと同時に、先生その人の懷疑的苦悶的心狀も亦殆んど其の極に達せんとするの觀あり。十一月、飄然として奈良及び京都地方の旅に出づ。翌大正二年五月、つひに文藝協會幹事を辭す。此の年、新たにメーテルリンク劇に興味を感じ、「ペレアスとメリサンド」「モンナ・ワンナ」等の飜譯を公にす。同年九月、女優松井須磨子（本名小林政子）等と共に藝術座と稱する演劇團體を組織し、東京有樂座に其の第一回公演を催し、「モンナ・ワンナ」を上演し、十月藝術座一行を率ゐて大阪及び神戶を巡演す。藝術家として及び人としての兩方面より、先生の行動に關する世間の論評之れより盛んなり。同年十一月、早稻田大學英文學科敎務主任及敎授を辭し、改めて講師となる。それより後、先生の生活の殆んど全部は、藝術座によつてなさるる演劇事業の爲めに捧げらる。大正四年八月、東京牛込區橫寺町に藝術座所屬の藝術俱樂部を新築し、同時に家庭を離れて

獨り居をその内に移す。かくて藝術座創設以來歳を經ること六年、其の上演せる脚本は「モンナ・ワンナ」「内部」「サロメ」「海の夫人」「熊」「復活」等を初めとして凡そ四十種、東京に於ける公試演の外に一回乃至數回に及びて巡演せる場所は、遠くは浦鹽斯徳、臺灣、滿洲、朝鮮、北海道に至るまで殆んど日本全土に遍ねく、その數二百ヶ所に近し。而して斯くの如き藝術座の世間的活動は、即ち先生その人の活動なりき。四十歳に至るまで專ら靜かなる書窓裡の人たりし先生と、此の數年間に於ける世間的活動の人としての先生とを較べ觀る時、何人かその間の甚だしき相違に驚かざらん。而も斯くの如くして歳を重ぬる事六年の久しきに及びしが、大正七年八月に至り、新たに藝術座の經營を松竹會社に委托し、別に脚本研究會を組織して先生自ら之れを統率し、從來の如き煩雜なる世間的活動を離れて純藝術的の立場よりその方面の研究に努めむことを誓ふを見るや、文壇の誰彼此の一事を以て再び書齋裡の人としての先生の生活の復活を豫想し、新たなる眼を以て其の將來を期待するもの少なからず。即ち最近數年間に於ける實際社會との交渉によりて得たる先生の經驗の豐富と觀察力の鋭敏とを思ふ者は、何人も先生が這般の境遇の變化を以て、正しく先生の生涯に一時期を劃するに至らん事を期したるなりき。

然るに、同年十月下旬、明治座十一月興行の「綠の朝」の稽古を指導しつゝありし間に、圖らずも惡性なる流行感冒の冒すところとなり、同月三十日藝術倶樂部の私室に臥床せしが、病勢日に募り、やがて肺炎を併發し、つひに大正七年十一月五日午前二時心臟痲痺を以て孤獨裡に逝く。享年四十八。同月七日午後四時青山齋場に於て、眞言宗の式を以て盛大なる葬儀を執行し、八日午後二時雜司ヶ谷墓地に葬る。法名安祥院實相抱月居士。

先生、イチ子夫人との間に、四男三女を擧ぐ。第三男、第四男夭折し、長男震也、次男夏雄、長女ハル子、次女キミ子、三女トシ子健在す。

先生の生涯は、劃然として二期に分たる。前期は即ち四十歳に至るまでの永き年月を以て充たされ、後期は四十二三歳の交より最後に至るまでの數年なり。而して此の二期の區分に於て、我等は殆んど全く相異なりたるが如き二個の先生その人を見たるなり。前期にありては、先生は一貫して實に寡默堅忍の人なりき。抑制、柔和、冷靜の人なりき。而して此の四十年に近き先生の前期の生活は、殆んど全く靜寂なる書窓裡に於て營まれたりき。此の永き期間に於ける先生は、終始一貫して純然たる一個の學徒なりき、教師なりき、批評家なりき。觀察と分析と推理と考察との諸點に於て卓越せる頭腦と、稀有なる天與の味感、直覺、洞察の力と相俟つて、批評家としての先生をして實に渾然たる一個の風格を成さしめたりき。豐富なる趣味、廣汎なる味識、機敏犀利なる觀察、明快にして周到なる批判、いづれに於ても先生は眞に批評家として優秀非凡なる資格を具備したるを稱せられたりき。就中、批評家としての先生の存在をして一世に高からしめたる所以のものは、其の溫き同情の伴ひたる深き洞察の力と、聰明なる理知によりて整頓され琢磨されたる其の美しき表現の力となりき。「對境に向つて豐かなる同情を注ぎながら同時に其の眞相精髓中心意義を攫取し、之れを情理兼備の味はひある言葉に表現する」――之れ實に先生が天より稟け得たる無類の資質技倆なりとせられたりき。此の秀でたる資質と技倆とを以て、先生は批評家として立ち、教師として立てり。而して批評家として又教師としての先生が、常に自己の直感的鑑賞を聰明なる理知の力を以て整理して表現することを之れ努めたるが如く、人としての先生も亦常に自己の情意を理性の力を以て統御することを怠らざりき。東京專門學校卒業に際して其の同窓記念錄に自記して「身を修め家を齊へて斯生を厚くするの餘、願はくは學者として」大成を期せんと云ひ、「誠實事に處して而も偏狹ならざる點に於て孔子の如きは景慕するに堪へたり」と云ひしが如く、修身齊家出世之れ第一に人としての先生の目標たりしに似たり。由來身を奉ずるに極めて儉素、毫も享樂遊逸の氣なき

は、先生の最も顯著なる性情なりき。加ふるに寡默隱忍、好んで靜居獨座を求めしも、先生が生來の傾向たりしと云はる。斯くの如くして先生の生活の前期は、そが四十年の永き歲月の生活は、宛然古へのストア學徒のそれの如くなりき。而も又先生自ら夙く既にかの同窓記念錄に記して「我が信仰の當體は未だ名づくべからず」と云ひし如く、更に後年自ら公に宗敎的信仰に對する自己の懷疑的心狀を告白し、若くは或友人に向つて「余は神とか絕對とか云ふ事に關しては一種の不可知論を取る者なるが、若し强ひて自己の感じの上よりのみ云ふならば、宇宙の本體は何となく一種のグルーミーなる暗黑なるものゝ恐ろしき渦を卷きつゝあるものゝ如し、神か惡魔か、兎に角非常に物凄きものゝ如く思はる」と告白せしと云はるゝが如く、先生の內部には終始一貫して一種の厭世思想が深く根ざしつゝありしが如し。斯くの如くして、先生の生活は一面に於て公人としてのプリ、アンシーを示し、私人としての均整と典雅と靜肅とを示しつゝも、他面に於て隱密のうちに底知れぬ暗陰を藏しつゝありしなりき。而もかくして歲を閱すること多年、齋家と立身との世間的欲望に向つての先生の努力の外的効果が、彌々顯著に擧げられつゝありしに反し、先生の胸奧に於ける陰影は年を追うてます〳〵其の暗さを增すが如く感じられたるに似たり。而して其の所謂內部の何ものかは、つひに何等かの動機を俟つて、奔騰せずんば止まざるの急を、先生自らに向つて告げつゝありしが如し。

斯くの如くして、一面種々なる運命に追ひ立てられ、他面先生自身の內的必然の歸向として、先生はつひに懷疑と苦悶とのどん底に陷るの止むを得ざるに至りぬ。之れ先生が四十一二歲の頃の事となす。而して先生の生涯の此の短かき期間を以て假りに名づくれば、即ち之れ前期より後期への過渡期なりとすべけむ。げにや、此の陰慘の極をきはめしが如き懷疑的苦悶の時期を境界として、先生の生活は實に劃然たる新局面を展開したるなりき。之れ即ち大正二年夏以降、死に至るまでの

先生の生活なりとす。家庭を離れ、書齋を捨て、講壇を去つて、驀焉に演劇界の喧噪裡に突進せし人、赤裸々に自己そのものを投げ出してあらゆる運命に向つて勇敢なる戰ひを戰はんとせし人、「鞭を浴び石に打たれて傷き、血まみれになつて」倒れんまでも活世間のたゞ中に自己の大道を開いて進まんとの覺悟を示せし人――後期即ち晩年數歳に於て我等の前に現れたる先生は、實に斯くの如き悲劇的英雄なりき。嗚呼、昨の先生を知り、更に今の先生に接せし者、誰か其の急激なる變轉に向つて一種の驚異を感ぜざりしものあらん。誠に之れ身を以て書かれたる一個嚴肅なる啓示なり。血を以て描かれたる一個深刻なる藝術なり。

初七日の追悼會席上、先生の舊友の一人語つて云ふ、「男子の四十二は厄歳と云へど、そは單に肉體的の危機のみを意味するものにあらずして、同時に精神的の危險期なるが如し、余はこれ迄大なる野心を抱き、それが爲めに禁慾的、克己的なる生涯を送り來りしが、人間の定命五十歳もやがて遠からざる今日に於て日暮道遠を思ふにつけ、これよりは一つ思ひ切りたる事をして死にたきものなり――これ先年島村君の余に語りしところなり」と。その言の何ぞ悲痛なるや。惟ふに、先生をしてつひに此の態度に出でざるを得ざらしめし所以のものは、一面に於て先生その人の獨自なる個性の力、隱れたる魂の力によるものなること論を俟たずと雖も、而も亦他面に於て先生その人の環境と運命との力によるものあらずんばあるべからず。之れ先生の生活のヒロイックにして同時に悲劇的なる所以なり。一面より見れば先生の生涯は、實に慘ましき受難者の生涯なりき。而も同時に他面より見れば先生の生涯は、正に勇敢なる偉大なる鬪士の生涯なりしなり。先生は實に、虐げられつゝも最後まで憶せず怯れず勇敢に、正直に、運命と鬪ひて倒れたる勇士なりき。而も其の晩年數歳に亙りて、人として又事業家として、先生その人の支拂ふべく餘儀なくせられたりし餘りに高き血税の値を思ふとき、我等はつひに何を以てか

先生の靈魂を慰むべきを知らざるなり。

まことに、先生は稀有なる淋しき魂の所有者なりき。批評家としての先生が示せる如く、先生の趣味は極めて豐富なりき。文學に、繪畫に、彫刻に、建築に、演劇に、而して自然に、あらゆる方面に向つて、先生は異常なる鑑賞と審美と感味との能力を示しぬ、而も先生はつひに何物によりても醉ひ得ざる人なりき。醉ふべくあまりに明らかなる、あまりにすぐれたる理智を稟けたる人なりき。單に美に醉ひ得ざりしのみならず、先生は實に理想にも、神にも、燃え得ざりしなり。最もよく先生を識りし一人の友は云ふ、「そこに氏の無限の孤獨がある、無底の寂寞がある、勿論あらゆる哲人、あらゆる詩人は皆此孤獨と寂寞の心の秘密境に味到しない者はない、詩も哲學も要するに、此の味到の境地から產れて來ると云つてもよい、而も氏が敏感と銳覺とを兼ね惠まれた心は、詩人と哲學者とを一身に兼ねた人でなければ到底知り得ない孤獨の天地　寂寞の深淵を窺ひ得たやうに思はれる。氏はそれに堪へ切れずして亂雜な喧噪な、又熱狂的な所謂生のオーケストラの中に身を投じたが、併しそれも或意味では徒勞であつた、詩人の孤獨と、哲人の寂寞とは、終生、心身を襲ひつゞけたのである、而もそこにやがて氏の磨すべからざる偉大さがある、氏の滅すべからざる純な個性の光がある」と。誠に然り、而して此の意味に於て、先生の生涯は謂ふところの近代生活そのものゝ一面を、最も鮮やかに、最も純に、最も暗示深く示したる一個の活藝術ならずや。

美の鑑賞に於て、非凡なる纖細の神經と、驚くべく銳敏なる感覺との所有者たりしにも拘らず、實際生活に於ける先生の周圍は、終始一貫して色彩なく、光澤なく、實に無味乾燥たりき。衣服に於て、食物に於て、調度に於て、娛樂に於て、おそらく先生の如く無頓着なりし人は少なかるべし。醉うて己れを忘れず、遊んで自ら樂しむことなく、常に眼を自己の內面

に向け、凝視省察瞬時も逸せざりしは、生涯を通じて變らざりし先生が生活の姿なりき。孤獨、寂寞、荒凉――自己に奉せし先生の生涯は、誠にその境致を脱するの時なかりしなり。而も自ら奉ずるに爾かく薄かりし先生は、他に對して――就中己れに親める者に對しては、常に變ることなき温情の人なりき、柔和の人なりき、深切なる人なりき。わけても師として後進に對する時、先生は常に聊かの衒ひも城壁もなき彼等の友なりき。先生の師として後進を導くや、先づ温き同情を以て彼等自らの持てるものを洞察し理解し説明し批判し、而して更に彼等自らをして最も聰明に彼等自らの道を進ましめんことを要としたりき。之れ先生のうちに見出されたる美點中の美點なりとす。而して先生のかの常にさびしき微笑を漂はしつゝ慧知と温情とに富める眼、低く沈めるうちに一味の底力ある聲、如何なる塲合にも逼らざりし沈静なる態度、少なけれども要を得てしかし美しく整頓されたる言葉、無造作に打ちくつろぎながらも頽れず亂れざりし擧止――此等の表現と相俟つて、先生の人格そのものゝうちには、何ものとも知れず常に接する者を魅する力の存したりし事は、生前先生に親める者の終に忘れ得ざる懐しき印象なるべし。而も斯くの如き先生そい人の印象の示すが如く、先生は人に對しても、事に對しても、亦思想に對しても、決して情熱を以て進む人にてはなかりき。時に對他的に闘士の風を示し、強く己れを固守するが如き傾を示しゝ事なきにあらざるも、そこにはつひに高くあがれる情熱の伴ふことなかりき。頗る強き執着の力はありき、己れを持する自尊の念は高かりき、而も激越の餘自己を忘るゝが如き情熱の熾烈はつひに先生のものにはあらざりき。かの晩年數歳に亙れる先生の英雄的生活に於てすら、我等はつひにいづこにも先生が高くあがれる情熱に乘じたる勇姿を見出すこと能はず、進んで自ら闘ひを宣したるが如き壯觀を認むる能はず。寧ろ到るところに痛刻を極めたる運命の受難者としての悲壯なる先生を見しのみ。此の意味に於て、先生の偉大は實に最も強き受難者の偉大なりき、苦痛のどん底までも味ひ盡さんとし

たる一堪へ忍べる者」の偉大なりき。而も又隱忍つひに毫も他人を傷くるの擧に出でず、獨り能く自己の運命を甘受しつゝ終りし先生の强く且いたましき生涯は、他面に於て實に美しく尊き受難者の風を示すものなり。棺を蔽うて後、先生の光輝をして却て頓にその美しさを增さしめたる所以のもの、此の先生の隱れたる德の力蓋し少なからずとすべからずや。更に又あらゆる困難、あらゆる苦痛を一身に擔つて、決して他を怨みず、天を恨みず、人に憐れみを乞はず、世に訴ふることなく、最後に至るまでも自ら破ることなく、傷くることなく、棄つることなく、獨り深く自己内部の眞實に活きんとせし先生の男らしき堅忍と獨立自尊の精神に至つては、まことに之れ讃嘆に堪へざるところなり。先生の最後は此上もなく孤獨なりき。巷のうちに於ける先生の死は實に曠野の死の如く淋しかりき。而もかくして孤獨はつひに先生の生涯に純一曇りなき個性の光を與へぬ。

先生は又種々なる方面に於て、一種の考案者又は劃策者としての才能の凡ならざるを思はしめたりき。敎育者として、雜誌經營者として、又は劇團經營者として、先生が常に聰明なる計畫者なりし事は、多くの人々の認めて以て推服したりしところなり。而も之れが實施者として直接自ら其の衝に當るべく、先生はやゝ其の資質に缺くるところありしが如し。先生自ら此の事を知りしや否やは明らかならざれども、或る一事の實行に從ひつゝある間に於てすら、先生は既に他の新らしき何事かの工夫考案に從ふ事多く、且甚だその事を好みたりしに似たり。或は早稻田大學英文學科主任として、或は『早稻田文學』經營者として、或は文藝協會の主腦の一人として、更に最後に藝術座の經營者として、種々なる方面に於て先生の示したる經營者的技倆は何人と雖多少の驚嘆を禁じ得ざるところなれども、而も先生は孜々として一事業に終始すべく、あまりに現在に滿足し能はざるの氣風ありき。極めて沈靜なるが如き先生の態度の奥には、絕えず現在に滿足せずして「彼方へ彼方へ」

と進まんとする欲求の甚だしきものありき。加之、何事に對しても、常に先生の規模はあまりに大なりき。狹き一方面の事業の計畫に當りても、先生は常に之れを廣汎なる文化事業の一部として考慮せずしては止み得ざりき。時代の文化に對して先生の持ちたる抱負は常にあまりに大なりしなり。若し劃策者としての先生の才能と、實施者としての先生の技倆との間に甚だしき距離ありしと云ふべくば、そは蓋し其の一點に因由せるところ多かるべし。而も終始を一貫して、先生が文學藝術を以て現代に於けるあらゆる文化事業の中に最高位を占むべきものと考へたりし一事は、あらゆる先生の活動をして自らに對し、又他に對して常に權威あらしめたる根本の覺悟として、永久に滅すべからざる先生の美點なりとす。然り、先生は常に此の覺悟を以て自らを鞭ち勵まし、他を教へ導きたりき。おそらく先生自ら生に對する苦悶のどん底に沈みたりし刹那に於てすら、此の强大なる覺悟を支柱として復び起ち上りし事、屢々なりしならん。之れ一面より考ふれば大なる矛盾なるが如くして、而も先生その人の生涯にありては不思議にも一個の權威ある事實なりしなり。

生來心臟に痼疾を有したりき、而してその故を以て先生が決して長生を得る能はざる人なる事は、十數年前既に親しき醫師の豫言せしところなりしとは坪内博士の談なり。科學的見地よりすれば、先生の一生は或はむしろ長かりしとすべけん。然りと雖も、先生にとりては時に天才の濫費とさへ見えたる劇團經營の苦慮今や漸く一段落を告げ、加ふるに最近に於ける實際社會との交渉によつて得られたる經驗の豐富が先生の批評的天才を强大且鋭敏ならしめたるを思はしめ、文壇の視聽新たに此の圓熟期の先生に向つて大なる期待を寄せんとする時に當りて、不慮先生の長逝に會す。誠にこれ「一大喬木の俄に倒れ、一巨星の忽焉として地に墮ちたる利那の光景」たらずんばあらず。その憾みやまことに長く盡きざるなり。

敎授として學者としての先生の貢獻、文壇の人としての先生の光輝、劇界革新者としての先生の効績——それらについて

は我等は玆に云はず。本集に輯錄したる遺著八卷、以て先生の光輝を永久に傳へん事を期す。

凡例

一、本集は故島村抱月氏の文藝上の業績を永久に傳へるために編纂したものである。

二、本集はすべて八巻　第一巻及第二巻『文藝評論』第三巻『美學及歐洲文藝史』第四巻『新美辭學及文學概論』第五巻『藝評』第六巻『創作』第七巻『文藝雜纂』第八巻『隨筆日記書簡』の順序である。

三、本集全體の編輯について金子馬治氏を顧問とし中村吉藏、片上伸、相馬昌治、中村星湖、本間久雄の五名各その勞を分つた。

但し第一巻所載の「抱月島村瀧太郎先生小傳」は相馬昌治の筆になつたものである。

又第一巻の編輯は片上伸主としてこれに當つた。

四、本集の出版については高田早苗、坪內雄藏兩先生を始め早稲田大學出版部、春陽堂、新潮社、金尾文淵堂、南北社、忠誠堂等の厚志を受けたところが多い。こゝに明記して謝意を表する。

第一卷『文藝評論』の編纂について

前後二十五年にあまる評論家としての抱月先生の事業は、やはり先生の一生を通じて最も重大な本質的な部分を成すものである。この全集には、在來單行本として刊行せられてゐた先生の評論文の他に、諸方の新聞雜誌に掲げられた先生執筆の評論文乃至談話の筆記までも、力の及ぶかぎり探しあつめた。平生何事にも身邊の事に無頓着であつた先生には、それ等の切拔なども取りまとめて保存せられてゐなかつたやうである。隨つてこの第一卷編纂後に發見せられ淨寫せられたものはすべてこれを第二卷へまはす外なかつたのである。尙評論文のうち、文章修辭乃至彫刻、繪畫など、美術上の諸論文、その他美學方面に關するものは、すべて『美學及び文藝思想史』の卷にあはせ收めることにして、こゝには文學、思想、一般社會生活などに關する評論文を專らあつめた。

先生の評論家としての態度、思想、乃至文章には、これを年次によつて見ておのづから變遷のあとが辿られる。かりに舊早稻田文學時代から海外留學より歸朝せられるまでを大別して第一期とするなら、明治三十八年の秋歸朝後、殊に三十九年一月早稻田文學再興後、また更に自然主義論の盛んとなつた後、藝術座組織までが第二期であり、藝術座組織後晚年に至る時期を第三期とも見られる。先生の評論家として最もその光輝ある特色を示されたのは第二期であつて、第一期に於いてもまた儁銳なる覇氣の人に迫るものがある。これ等の時期區分を配列の上に明かにする豫定もあつたが、印刷其の他の都合上年代順に配列するに止めた。この自然の配列のうちに、讀者は自づから先生の評論家としての面目の變化と文壇の推移とを

看取されるであらう。

この卷の材料の蒐集、淨書、及び校正に就いては、細田源吉君を主として、數名の早稻田大學文學科學生諸君もまた少なからぬ助力を與へられ、編輯責任者たる私の勞を省いてくれられたところまことに多大であつた。記して謝意を表する。

大正八年六月十九日

片上　伸

抱月全集第壹卷目次

西鶴論

（人に答ふる書に擬す）

紛々たるかな西鶴の是非、或時はわけの聖（ひじり）とたゝへられ、或時は文盲にして書法を知らずと嘲けられ、此の人、肚裏に一字の文學なしと卑むものあれば、好色の書を作りて活計の謀としたる罪人と誹るものあり。『日本文學史』の著者は西鶴を評して「深遠なる學識あるにあらず高雅なる思想を有するにあらず從うて其の作何れも猥雜卑陋にして後世識者の譏を免れず」といひ、『好色五人女』の飜刻者は「さはれ西鶴は一箇の詩腦を蓄へしが故に閭巷の些事を見るも凡そ眼に觸るゝもの總て自家の詩材に供へしかど、彼は小說家にも物語作者にもあらねば、元より彼の手腕をもて京傳或は馬琴と比ぶべくもあらず、彼が述作は足利時代の小話を一轉し、分明に一種の浮世草紙派なるものを起し、小說世界の一紀源を開きしかど、悉く端物にして廣く人間を觀察せしも社會の一部に過ぎず、殊に性情を面白く寫せしも其變化流轉する所以を詳かにせず、深く世態と人情との關係する處を說明せしに非ず、又最高の理想あつて是を人事に寓せしにもあらず。されば小說家として是を尊ぶこと頗る疑はしく京傳馬琴以上にあるべくも思はれず、思はれざるも彼が價値は毫も減せざるなり」といひ、また「西鶴と芭

蕉は以て元祿の社會を代表すべし。共に厭世家にして高く超然たりしが、西鶴は放縱に流れし故に、唯俳諧に滿足せずして其奇才を驅て卑猥なる社會を毫も假借する處なく有りのまゝに描寫して獨り樂み獨り笑ひ、一般の我が文學者と全じく社會的觀念は微塵もなく、破天荒の浮世草子は偏更色道の隱微に渡りき」といへり、其の他彼れを樂天的といふものあり、彼れの理想を粹の一字に留むべしと論ずるものあり、知らず、西鶴の眞價畢竟幾何ぞ。案ずるに貴諭質さるゝの主意は以上の如くに候ふべし。本より西鶴を一個人としてその人品を論せんは、彼れの生涯を明めたる後の事、且つ道德上より見ると文學上より見るとは、其の間多少の區別もあることに候へば、玆には社會的に西鶴をあげつらふを止め、旨と文學上より彼れが價値につきて立論いたすべく候。中にも

浮世草紙の西鶴

是れ彼れの本面目に御坐候。御存知の如く西鶴の浮世草紙に筆を染めしは、五代將軍常憲公の二年、天和二年に出でし『好色一代男』を始と致し、越えて二年、貞享元年『好色二代男』成り、同じ三年『好色一代女』『好色五人女』『本朝二十不孝』成り候へど、翌貞享四年には浮世草紙の面目一變して『男色大鑑』『武道傳來記』『武家義理物語』等となり、相尋ぎて『日本永代藏』『新可笑記』『本朝櫻陰比事』『胸算用』のたぐひ見はれ申候。今假に天和二年より元祿六年西鶴の死せしまで凡そ十二年間を彼れの浮世草紙時代といたさば、件の變化を界として文學者西鶴の一代はおのづから前後の兩期に分かれ申すべきか、即ち前期は『一代男』『二代男』を經て『一代女』『五人女』に其の圓熟の極を示し、後期は『武道傳來記』『武家義理物語』『永代藏』『胸算用』などに代表せらるゝ義に御座候。試に之れを色分けいたさば、無論一は好色氣質を本とし、

他は武家氣質、商人氣質を素とするものと申すべく、而して『男色大鑑』は一種の異彩として其の間に挾まれ、兩者を糊塗するが如き觀有之候。この他西鶴の死後世に出でしものにては、『俗つれ〲』『萬の文反古』など或は僞作なるべしと論ずる向も有之、且つ思想露骨、文調淺俗のふしもなきにあらねば、僞作ならぬまでも之れにより西鶴の眞價を窺はんは如何と存候。さて西鶴のいかに人生を觀ぜしかを尋ぬるに先ちて辯ずべきは

西鶴が浮世草紙

の性質に御座候。概して申さば浮世草紙は今日いふ所の小說に候はず、小話或は短き記事文といはゞ相當たり候はんか、固より此處にて、小說といへるに嚴正の定義を下さんとには候はねど、假にも小說と名け得ん限は、脚色を匠みて事柄を面白く叙し候ふか、性情の發展人間の運命を描き候ふか、何れといたすも單に一塲の出來事、一時の心ざまを記述するのみにては、飽き足らぬ心地いたし申候。例へば『一代男』『二代男』『三代男』『一代女』など、表面は主人公ありて首尾一貫するに似たれど、其實主人公を因として事柄を之れに湊合せしむといふにも候はねば、さりとて每段別に一の首尾結構を具ふと定まれるにも候はず、申さば切れ〲の記事を無秩序に綴り合はせたるに過ぎず、『男色大鑑』『二十不孝』以下の作に至りては、全く小話集の性質を顯し申し候。ひとり『五人女』のみは、五種の短篇を集めたるものなれど、每篇略〻小說の態をなし、西鶴物中にての異色と見え申し候。要するに浮世草紙の性質は小話集にて、西鶴は人間の全運命を觀じて之れを描破せるよりも、寧ろ人間の一部の運命を描破して眞に達せるものと申すべく候。語を更へて申さば所謂氣質を緯として雜多の事件を織りはへたるものにて、西鶴の作は何れか氣質物に候はざらん、とりわけ好色氣質其の主なる部分を占め、武家氣質、

商人氣質など之れに亞ぎ候ふべし、只後の仕讀、自笑等の如く特に親父氣質娘氣質と取り出でゝ申さゞりしのみ。まづ『一代男』に就きて御覧あるべし、七歳より六十歳の老人となるまでに三千七百四十二人の女に戯れ、七百二十五人の少人を弄びきといふ世之介が好色の行狀五十四條は其の事柄こそさま〴〵なれ、畢竟同轍に候はずや、作者の自白せる如く、世之介生れ落つるより黠しきこと十歳の翁と申すべく

女是非なく、御心にかなふやうにもてなし、其後小箱をさがし芥子人形、おきあがり、雲雀笛を取そろへ、これ〳〵大事の物ながら、様に何惜かるべき、御なぐさみにたてまつるゝ、此れにてたらせども、嬉しさうなる氣色もなく、頓て手を持つたらば之れに泣きやます物にもなるぞかし、此のおきあがりが其方に惚れたかして倒けかくるといひさま、膝枕してなはおとなしきところあり

といへる九歳の少年は、やがて、あれこそ譯知りの世之介さまと持て囃され、廣き世界の遊女町殘らず眺め廻れる當年の世之介と何の擇ぶ所か候はん。例を擧げて論ずるまでもなく、好色道の極意、粹の一字が權化して世之介となりたるものと申さば事足るべく候。旣に粹といへる一性情の權化なるからに之れを火に投ずるも、水に委ぬるも變化の妙なく、五十四條の複雜なる事柄は、一條にも納むべく五十四條にも別かつべく虛靈なる人間の精神が一貫の特性を具しながら尙五十四境の變化をなすとは趣を別にする次第に御座候。思ふに西鶴が落筆當時の用意も恐らく人間の性情を根本より描破せんなど申す高尙のものにあらずして、只そが好色界に發現したる結果を面白く寫すにありしものと存じ候、他語にて申さば、西鶴は『一代男』の主人公を描かんとせるにあらず、むしろ世之介といへる一箇の粹客を觀察者の地位に立てゝ、其が周圍に蝟集し來たる好色界の現象を觀察せしめたるもの、而して世之介はやがて西鶴自身かと存ぜられ候。勿論西鶴の平生を審にせざれば、此等悉く彼れの實驗譚なりや否やは明めかね候へど、その中幾分は確に聞觀實歷の事柄に材料を取りたるものと見え申

し候。さて斯の如く世之介は單に粋の權化とも申すべき言はゞ變通虛靈の性なき人物にして其はまた西鶴の偏なりといたさば、一見西鶴の心はしかく狹隘にして單調なるものかとの御疑も生ずべし、されどこは怪むに足らず候、世之介を西鶴の作りたる完き人間もしくは西鶴自身の全體と申さばこそ惡しけれ、萬般の好色的現象を一に統べんため總て是等を包容して之が軸となるに堪ふべき圓滿の好色家すなはち理想的好色氣質を混成化了したるものといはゞよろしかるべく候。西鶴の理想を器に譬ふれば、之に好色を盛りたるが粋にして世之介はこれなるべく、更に盛るに武道を以てすれば武家氣質となり、財事を以てすれば商人氣質と相成るべし。さればまた一方より言ふときは武家氣質も理想なれば、好色氣質も理想にて、何れも西鶴の一部なれど全體には候はず西鶴を掩ふの理想は一段大なるものならざるべからずと存じ候。隨うて彼れの人間觀は彼れの氣質と別なることと申すまでもなし。次に『一代女』はた『一代男』と同調にて、女主人公が十一歲より六十五歲までのいたづらを書き連ねたるものに御座候。但し主人公の女性なるだけ、此方の事柄及びそが觀察の、彼方のと別趣なること二者相違の第一點に御座候。又種々の好色事件を統轄すべき極致、彼方にては粋又は大通など申す男性的のものに歸し、此方にては遊女氣質とも申すべき複雜なる女性的のものに歸すること、二者相違の第二點に御座候。此等を除き候はゞ『一代男』も『一代女』も共に作者が好色氣質といへる中央點に立ちて周圍の好色界を眺むるものなること、相同じく候。兩書の性質既にかく候上は、之れによりて一面、西鶴の好色的極致を窺ふとゝもに、他面にはそを軸として群り來たる事柄につき彼れが人間觀の片々をも尋ね難からずと存じ候。『五人女』に至りて西鶴の本領は最も圓滿に見はれたりと申すべきか、この作、『一代男』『一代女』の如く切れ〳〵なる事柄を強ひて結びつけし嫌なく、每篇主人公と境遇と、因緣兼ね到りて個人の性情おもひ〳〵の發展を遂ぐる所、五篇の短小說と申すべく、幾分か今日所謂小說の體面を具へ申し候。作者みづからは此

の書にも得意の好色の二字を冠し候へど、實は夫の支離滅裂の事柄を狹隘なる好色氣質の埒にて結び廻したる如き『一代男』『一代女』など﹅異なりて覺束なきながらも人間の全局其の裡に髣髴せられ申し候。西鶴が小說家としての技倆及び彼れの纒まりたる人間觀を示すは此の書を第一と致すべきか、さればこゝにては、西鶴が色道の極致とせるものにしてまた幾分か彼れの個なる好色氣質を說明いたすに『一代男』『一代女』を以てし小說家として人間の運命を描ける彼れを觀察いたすに主として『五人女』を以てすべく候。其の他女色界を去りながらも猶好色の味忘られず、顧みて武道に恰好なる男色に指を染め、之れをもて、武士氣質を彩れるもの『男色大鑑』に候はずや。西鶴の前期と後期とを點綴すとは此の意に御座候。この書、體裁は一章一事の純然たる小話にて、其の中より抽象いたさば、一種の武家氣質を得べく候。更に進みて後期の諸作につきて申さば、『武道傳來記』『武家義理物語』の武士氣質に於ける『日本永代藏』『胸算用』の商人氣質に於ける、何れも漸く色道とは相遠かり候へど、略〻おなじ型と御承知下さるべし。而して武士氣質は義理をいのちと致し、商人氣質は財貨集散の秘訣、遣り繰り懸け引きの利巧を眼目と致すとは申せ、此れらはさまで複雜ならぬものに候へば、取り出でゝ論ずるまでも候まじきか。尤も義理と申すには說あり。西鶴の描ける義理は後の作家が勸懲の窓より觀せし義理とかはりて、極めて純潔のものと存せられ候その故は、後世の義理は眞吾の底より流れ出づるものに候はで、只々世間體とか外見とか申す點より割り出し候もの、即ち形式的人爲的のものに過ぎず、申さば輕薄なる義理に候へど西鶴のは然らず、眞に我が本然の性より煥發するもの西鶴の義理にして、彼れの之れを寫し候や、單調ながらも靈氣淋漓、深く人心に通徹する所有之候。蓋しかゝる相違は之れを時勢の上にも認めがたからず、西鶴の義理はまた

元祿的

と申すも不可なかるべしと存じ候。德川氏のはじめ文運未だ盛ならず、雲の如く林の如き參河武士が創痕斑々の腕骨を撫して、一番槍の功名談に餘念なかりし世は、人々眞率、意を着けて正義を衒はざるも動作おのづから義理を離れず候ひつれど元祿の一關を越えてのち、文漸く質に勝ち淫靡蕩敗の餘弊は人を虚儀虚飾の奴隷と化せしめ候ひぬ。あはれ武道の精英は發して元祿武士と匂ひしまゝ名殘を此に留めて日に月に銷磨し行き候。劃と何時頃を境とは定めかね候へど、およそ天和元祿の際を德川氏治平の頂上といたさば、此の時代はまさに、質をもて優れる慶長元和の氣象、寛文延寶の頃を經て文の衣を着し文質調和の實を示せるものと申すべく、人皆泰平にして殆ど無缺とも見えけん現實の世界に滿足して他を思はず、世を擧げて醉生夢死、いはゆる「花に寐て夢よりちきに死なんかな」の境に彷徨へる有樣に候ひき。されば一方より見る時は此のうち既に不健全の萠芽を含み候こと勿論なれど、かゝるは歴史が示す必然の數にして、圓熟の極はやがて腐敗の端なること、有限の人世には免れがたき所に御座候。元祿は圓熟の極なり、その後は腐敗の端なり、圓熟と腐敗と相接するのゆゑをもて圓熟を誹議せんとするは燎くを恐れて火を廢するの愚と擇び候はんや。天和元祿の社會は固より淫逸華奢に候ひき、しかも淫逸といひ華奢といふの性質おのづから後世のものと異なりて、眞摯なり、一徹なり、眞面目なり、天和元祿の人の花に戲るゝは、花に戲ると申すよりも、花に狂すと申すべく、彼等の月に浮かるゝは月に浮かると申すよりも月に淫すと申すべく、凡そ其の境に入るときは即ち滿腔の熱誠を捧げて顧みざること當時の狀態と存じ候。要するに天和元祿の社會は情熱的、狂氣的とも評し候はんか、比較を英のエリザベス時代に取るものあるも此のゆゑに候。今より見れば、丹前姿に六方を蹈みき

といふ元祿の伊達男は狂に似たれど、しかも彼等は澁面つくりて之れをなしゝに候はずや。はたエリザ朝の紳士淑女は靴尖を延ばして膝に餘り、帽子に帆を張り二重三重に及べるものありしに候はずや。而して此等の稚態却りて可憐の心地するは、畢竟眞心流露して虛僞ならず輕薄ならざるに因り候。この至情一轉して他方に向ふときは、道義金鐵の元祿的武士氣質を成すも怪むに足らず候。天地の美は常に一元を姿とし人心の本然はた二元を惡むの理を會得候はゞ、元祿の社會其の物の甚だ惡むべきにあらぬを知るに難からずと存じ候。元祿以後の社會はすなはち然らず、彼等は表面に義理を說きながら內心必しも之れに應ぜず、もしくは衷心私に憚る所ありながら煩惱の犬制し盡くされずして遂に蕩淫身を敗る、何れか輕浮の心根に候はざらん、元祿以上にありては、世間の知ると知らざるとに論なく自家の信ずる所に從ひて義理をも行ひ淫逸にも耽ける社會的眼光を以ていたさば不善に候べし、しかも尙その自己のために自己の信ずる所を行ふの形式は美に候。元祿以下にありて義理も世間のために行ひ、淫逸も世間のために抑ふ、時に結果の善に似たるもの有之も、所詮醜態を免れず候。元祿を境としてかく義理の性質を分かち、さて西鶴を件の潮ざかひに立てるものと致さば、彼れの振りかへりて寫せるは勿論元祿以上のものに候。而して其の善惡ともに滿身の熱誠を捧げて一往直前、他を顧みざるは、之れを元祿的と申すべく、西鶴の作全部に通徹するはこの風に御座候。以下章を改めて西鶴の好色氣質及び彼れの人間觀に論及すべく候。

好色氣質

好色氣質に新說なし、たゞ少しく巨細に論究いたすまでに御座候、之れを內分して粹人氣質、遊女氣質の二といたすことは前に申上げたるが如し。或は粹人氣質など申す事、用語未熟の嫌有之やも計られねど、其はしばらく御見ゆるし下さるべく

候。まづ粹人氣質は如何。春のや氏がひとむかし前の戯文の一節に

(前略)世に粹といふことあれども其傳來も鮮かならねば其本義もまた定かならず或は所謂通をいふ或は今いふ意氣なる者を指す九太夫か由良どんを呼んで粹め々々といふは通人めといふ心なるべく母親の粹な捌といへるも亦同様なる心なるべししかして粹な姿といひ粹な調子の爪彈などいへば今の所謂いきな姿いきな調子を指したるに似たり曲亭翁嘗ていはく、萬事に心きゝたる者を乖といふ由は柏案驚奇に見えたり水滸傳に乖覺とあるも同意なり國俗は粹とかくもあり乖は元明の頃よりの俗語ならんか又案ずるに乖は伶の俗省伶は乖の本字にて乖と異なり」といへり云々

また同じく

(前略)故に粹には三原素あり曰く酌情曰く寛恕曰く自敬即ち是なり此三原素を幷有して錬熟其妙に入りたる者是之を大通と云ふ大通は恬惔無爲大聖のごとく大知識の如し得て名狀すべくもあらず老子の曰く大徳は德とせずこゝをもつて德ありと大通もまた然り外に求むる所なくして自ら守る是大通の形といふべし世人或は粹と通とを混じ或は花柳界の事に明き者を以て直に通となす者あり蓋し誤れりといふべし通は萬事に通ずるをいふ花柳事情に通ずるものは單に老練の標本なるのみいかでか通といふべけんや如何となれば花柳事情に通ずるもの未だかならずしも粹ならず粹なるも亦必しも花柳事情に通ぜざるも可なればなり

といへる、片々たる戯文字に候へど、粹、通など申すものゝ義は略〻相通じ申候。たゞし通の本義はしかく廣しといたさんも、其を花柳界に應用したるものやがて粹かとも存せられ候へば、こゝには粹と通とを分かたず、むしろ粹を花柳界の事とし之れと意氣とを對せしめて立言いたすべく候。春のや氏の說の外、鷗外氏は嘗て

意氣の我を以て彼の領地を犯すものなることは復た疑ふべからず、唯その人を凌ぐや體面を傷らず、唯その我を以て彼の領地を犯すや極

味を損せず、意氣と云ひ粹と云ひまた通といふ、其秘鑰蓋しこゝにあり

世に大通と稱するものあり、說をなすものは通より大通に至り、意氣より大通に至るといふ。其說は平淡を以て絢爛の極なりとするものにおなじ、絢爛豈平淡の前階級ならむや、意氣豈大通の前階級ならむや、大通は始より人を凌ぐ心なし。大通は意氣にあらず、通にあらず、野暮にして偏屈ならざるをいふなり、上品なるをいふなり、高等なるをいふなり。

といひまた…………

といはれたれどこれ亦精しからず、餘事は姑く措き好色界にて粹と申すは、言はゞ斯の道の極致にして、鷗外氏のいはゆる通、意氣など申す境を通り拔け優に大通の域に入りたるものに候。蓋し鷗外氏の通若くは意氣とは、着意して通を利かし粹を衒ふもの、したがひて着意の底には利己排他の一念潛むを免れず、所謂通の通くさく、味噌の味噌くさき物に候はんか。眞の粹、大通の通はさに候はじ、野暮はたしかに未だ意氣ならざるの名、意氣は着意して粹ならんとするの名、粹は乃ち野暮と意氣との上に逸出したるものと存じ候。語を換へて申さば好色道にての野暮とは、未だ意氣の何ものなるかを知らず、隨ひて意氣ならんの意をも有せざる心ざまに御座候、之れを作文に譬ふれば、些も鍛錬修飾を加へざる稚き文章の如きものに候、若しくは粉脂を解せざる垂髫乙女の無邪氣なるに比べ候はんか、要するに其の道にかけては猶無緣地にありて全く無心無意識なるものと申すべし。しかもやうやく見聞の廣まり行き候とともに心やゝ動きはじめて全盛の羨むべきを思ふに至るは人心の自然に候、斯くして陰に陽に虛實を盡くして全盛あたりを拂ふの用意に汲々たるを意氣の時代とは名け候、文章にてはまさに絢爛綺麗、辭のために辭を聯ぬるものに相當すべく、鞦韆の下、春風泣くの少女が長眉畫くべく粧奩親むべきを知れるたぐひに御座候、すなはち、意識して極致を眞似るの狀態にして、凡そ何の社會たるを問はず、それ〴〵の道

に入る第一歩は常にかゝるべしと存候。更に粋に至りては此等の兩端を沒入して意識無意識の外に優遊するものと申すべく候、又は其のあとを尋ぬれば、意識を追ふの極、意識の盡くさゞるものあるを曉りて不用意自然の我れに還れるものとも見なされ候はん、又は意識の表にては平々淡々他の野暮漢の云爲する所に異ならざるも、しかも應對おのづから節に合して、櫻に霞める春の月、紗に裹める夜光の璧の含蓄限りなきが如きものに候はん。要は着意して奇を求めざるも奇自然に會し、斯の道に於て他より尊ばれ、さもあるべしと思はるゝ諸性質期せずして一身に湊まるにあり。經驗を極め差別を悉して其を自己の躰といたすにあり、意氣の中より着意の分子、我執の塵を淸め去りて無意不識なる姿趣の復び野暮に似寄るにあり、野暮と意氣とを沒するにあり、自他の城壁を拔くにあり、本然の我れに還るにあり、同情にあり。眞の同情に滯るものは、野暮來たるとき野暮をも容れ、意氣來たるとき意氣をも容れ、偏執なく端徼なく、事々すべて無碍なるのさかひに出入す、之れ粋の奥義にしてまた大通の實諦かと存じ候。さてかく形式の上にては一わたり粋人氣質の何物なるかを辯明いたし候へど、これのみにては物色いまだ定かならず、いでや粋とは如何なるものに候やらん、取りわけ西鶴の眼に映せし所はいかに。

生まれながら聖なるものに候はゞ知らず、凡下のものにありては、何事によらず、修行を積み精進を重ねたる後にこそ始めて即身即法の三昧地に達し得るものに候へば、粋と通とはた此の數には漏れ候はじ。而してその修行地に入るの第一歩は、粋を極めたる人のおのづから他より尊仰せらるゝを見て己れも之れに傚はんの意を起すにあること、凡夫の免れざる所に御座候、所謂意氣の始は是れに候べし、すなはち粋を銜ひて他を凌ぎ他より敬愛せられんとするに外ならず候。これにも差等あれど『一代女』に

今の世のよねのすきぬる風俗は千筋染の黄無垢の上に黒羽二重の紋付裾短かに、帶は龍門の薄かば、羽織は紅とびにして八丈紬のひつかへし、素足に藁草履はきすて座敷つきゆたかに脇差すこし抜出し扇つかへして袖より風を入れしばしありて手水に立ち石鉢に水はありとも改めて水をかへさせて靜に口中などあらひ禿いひやりて供のものに持たせ置きし白き奉書包の煙草とりよせ呑むなど、のべの鼻紙膝近く置きてかりそめにつかひすて引舟女郎を招きよせ手を少し借りたいと袂より内に入れさせけんべけにすゑたる灸をかゝせ太鼓女郎に加賀節のぞみて謠うてひくをそれをも心をとめて聞かず小歌の半に末社に咄しかけ昨日の和布刈の脇は高安はだしと褒め此のぢうの古歌を大納言どのにお尋ね申したが拙者聞いた通り在原の元方に極まりたなどいたり物語二つ三つ、かしらにそゝらずして萬事おとしつけて居たる客には太夫氣をのまれて我れと身にたしなみ心の出來て其の男するほどの事賢く見えて恐ろしく位とる事は脇になりて機嫌を取る事になりぬ。

と申すは意氣の上乘なるもの、强ち身に粹骨なきも態度の表だけは粹の形を摸し得たるものと申すべく候。單に嫖客氣質のみにつきていはゞ、此のあたりを其の頂點といたすべくや。一面より申さば、『一代男』『一代女』『二代男』『三代男』など、要するにかゝる心意氣を躰する淺薄なる人物と、やゝ複雜なる傾城氣質と相觸れて生ずる事件を寫せるものに外ならず、まことの粹は一段高きものと存じ候。西鶴はいかにしてまことの粹の消息を傳へ候ひしか、『一代男』五十四條の何れを見候も、表面に現れたるは意氣全盛の事柄のみにて、まだ〳〵粹の彼岸は遠しと申すべし。さはれ一人壇上に立ちて瞰すとき、眼下に集まり來たるものゝ己れより矮きを怪み候はんや、作者が一段高き處より知らず〳〵主人公の上に放つ光明にこそ、『一代男』の粹は留め申すべけれ。世之介十八歲まで部屋住の色ぐるひ、十九歲勘當せられて凡そ色界の貧しきかたを漁り盡くし、三十四歲にして歸參、「心のまゝ此銀つかへと母親氣を通して二萬五千貫目確に渡しける」に「何時なりとも御用次第に大夫

さまへ進じ申すべし日ごろの願今なり思ふものうけ出し又は名高き女郎殘らず此の時買はいでは弓矢八幡白二十の末社どもを集めて大大大盡」の豪奢の緒を開き候までは、さしたる事もなけれど、之れより後の世之介は、全盛以外に分明に一種の光彩を發し申候。例へば或時は「今日は譯知りの世之介さまなれば何隱すべき各々の科にはと申すうちに夜更けて介さまのお越と申す大夫只今の首尾を語れば其れこそ女郎の本意なれわれ見捨てじと其の夜俄に揉み立て吉野を受出し」或時は「女の心入を驚き樣子を聞けば隱れもなき人の御息女なり請出して直に丹波へ送り」、「戀は互の思ひやり自然に身に備はり「人の男を取らるゝ事此のちうの仕出しなり此の心入のいやな所はさら〳〵戀にあらず紋日缺かさぬ程の大じんにばかり其仕方ぞかし」と噂せらるゝ惡女郎には「四五度も忍び會うてから、正月の入用御無心の書簡拜しまゐらせ時分がら忝くぞんじ候金を出して女郎狂ひ仕れば御存じの通り此方に好き申す大夫と久々申しかはし候貴樣よりは只のやうに御申越候程に戀の暇のなき身なれども折節合力にあうて進じ申候餘人を御かせぎあるべし日貸の金子御貸しなされ候はゞ肝いり申すべく候」と眞向より責めつくる類、一方より見れば所謂俠にも通ふべき振舞と申さんか。勿論俠と申すにも等ありて、市井の俠は、大俠の根本より正義を體とするに異なりとは申せ、俠と粹とは畢竟同じ水脈の別なる噴井かと存じ候、大にしては大和魂など申すも矢張り同呼吸に候べし。所詮粹は好色界の俠骨、好色界の大和魂なり、つぶさに色道の坎坷、人情の曲折を經歷して酸きも甘きも嚙み分けたる上、其を斟酌するに濁なき同情の淨味を以てするものに候。尋常の塲合にては、何事にまれ己れ事にせんとすれば他を壓するに至ること避けがたき結果に候へど、ひとり粹は然らず、粹は此の際に處して能く自他を調和し、己れ遊興を盡くすも他を犯さず、隨うて他をして己れをも犯さしめず、却りて己れの欲する所直に他の樂ふ所に合するものに御座候。哲學者の口氣を假りて申さば、好色界全體の目的とする所と、其内の一員の目的とする所と、所謂平等想と差別

想との相即せるおもむき、之れ粹に候。粹を衒ふの徒は藉りて以て他を壓するの具と致せど、粹其の物は、他より尊仰せらるゝの性をこそ有すれ、他を壓せんとはいたさず候。

以上粹の辨稍々贅に似たれど、然らずと存じ候、其のゆゑは、後の作者の粹を描き候や、多くは外形に泥みて、命脈の繋がる所を觀ず、西鶴の死後二十年ならずして世に出で、善く西鶴の骨を得たりと稱せらるゝ八文字舍の「傾城禁短氣」すら既に色道の粹を解して澄空一點の雲氣あるを免れず候、況や其の以下の作者をや。「傾城禁短氣」に

法師さらにせかずしてあくる四ッ過に來たられ何を騷がしうするぞ山伏などの所で行くものにあらず我れらが粹の秘密にて此の狂氣をなほして見すべしと座敷へ通り給へば眼すはり息ざし荒く美しき姿はなくて凄じき體也、鐵漿つけし齒を鳴らしてさましの寢言聞くに身の毛もよだつばかり法師は少しも騷がず煙草盆ひきよせ心靜かに一服煙らせおとしつけて是れ八雲、所に居て多くの客に揉まれてもまだ粹といふ人を見しられぬと見へたりなぜ打ちわつて我が身には深い言い交はせの男あればおなさけに其れに添はせてたまはれと包まず心底をあかし我が手前を首尾ようひまは貰はれずして騷がしい狂言をはじめ飽かれてひまを取らうとはそりや前方なる若手の男にして見せたがよい筈この古法師はそんなちよろい手をくふ事にあらず念ごろな男は廓にあるか客にあるかありやうに白狀めされ出しおくれになつて長狂言せらるゝと其方が身は買切ておいた物なれば死なるゝまで座敷牢に押こめ置き月日の光を見せぬがなんと八雲返事はどうじやと居をくはされ覺へず足手が一所へじんじとよつてほろりと涙をこぼし何事も今までおなさけに御免ありて御機嫌ようおいとま下さるべし深間の男と申すはいたづらものにあらず我れゆえに代々の家を潰して淺ましくなられし丹波橋の少六といふ大臣に添はいでは心中立たず樣子は是れにと少六文を懷より出だし涙片手に見せければ見るまでもなし外に心ある女を不便がるはらうのわれてある煙管で煙草のむやうなもので煙が傍へもれて我が口の慰にはならず其方ゆゑ身代つぶしたる男を忍ぶは情の最上即ち今より暇をやると二念なくひまをやられし法師の捌き天晴至極の譯知りと今につたへてわるうは言はず

とある、何條心からの粋に候べき。化性を見拔ける法師の眼力は淒きほどなれど、我れ粋顏の手捌きは輕薄とや申さん。まことに不便の心あらば、始より何にも言はずにひまやることそ粋の極意に候はめ、若し又奸計憎しと思はゞ飽くまでも懲らすが眞の人情に候はずや、何れともつかぬ鼠色は、必竟下地に名聞利己のにごりあればに候べし。此等は未だ意氣の範域を脫せざるものにて、味ひ來れば、色ばかり醇に似たる直し酒のひりゝと舌に障る心地いたし候。此のきわを超して醇乎醇の妙境に入れるは獨り西鶴あるのみ、西鶴が好色氣質の貴きはこのゆゑに候。兩刀手挾んでは元祿武士となり、拔き鬢に六方踏みては男伊達となり、腰纏萬貫狹斜に豪放しては粋大通となれるもの、これ豈一代に燦爛たりし元祿の花に候はずや。爾來德川のながれ淵瀨うつろひ、逝く水杳然春を載せ去りて回らず、我等は只々西鶴の描破せる所によりて其の一端を想望いたすのみに御座候。」次は遊女氣質の說に候。總じて西鶴の好色氣質を寫し候や、女性の方に密にして男性のかたに疎なるの傾有之候。これは作者が觀察の自然にも由るべけれど、また實際嫖客氣質のみにては、さまで多趣なるものならぬにも由り候べし之れに反して吳郎を送り越客を迎へ、朝夕境遇の變に處し、一人の心もて萬人の心を操る傾城の氣質は勢、複雜ならざるを得ざる義と存じ候。さて「京の女郎に江戶の張を持たせ大坂の揚屋で會はゞ此の上何かあるべき」と『一代男』の好みもさることにて、西鶴の寫せる傾城はおのづから江戶と上方との二色に分かれ申候。『一代男』に

（前略　秋まで殘る螢を數つゝみて禿に遣はし蚊帳の內に飛ばして水草の花桶入れて心の凉しきようなして都の人の野とや見るらんと（中略）假にもさもしきことはいはず可愛さのまゝ人のほしがる物は是ぞと巾着にあるほど打明けて物數四十ばかり包みて袖に投げ入るれば取敢へず夜も明けて別かれさまに旅の道心者の志うけたきといふ彼の女郎袖の包金を共まゝとらせける

といへる、作者の意は由緒ある身の上を示すにあれど、却りてこれ優にやさしき遊女の心意氣とや申さん。同じく

妓に吉原の名物吉田といへる口舌の上手あり（中略）萬賢きこと思の外なり山の手のさる御方殊更不便がらせ給ひ數々恭き御みなし否といはれず外をやめて指に疵などつけてまことの心になつて御いとしさも增すときさる太夫を戀ひ初め吉田の退き端を色々仕かけ給へども一つも憎むべき事あらず或暮方に小柄屋の小兵衞ばかり召連れられ何によらず今日は限りに離儀を申かけ手をよく引きて遊をかへるぞ急げと淸十郎方に行きて太夫に會ひてそも〳〵より橫を行けばはや合點して少しも氣やぶらず常の酒振り重ね飲みになつて無理を肴になすぞかし（中略）花も火ともす時分になつて太夫勝手へたちさまに廊下を半すぎて取はづされて其の音に疑なし世之介も小兵衞も橫手を打つて面白の春邊やな天晴口說の本たて重ねて出たらば座敷が臭うて居れぬといはう、いや兩人共に鼻塞ぎてあの方からあらためるときに今日よきにほひを嗅ぎに來たと申せ之れを待てども出でずよもや出らるゝ所でないと大笑して見るに衣裝仕替へて樓一本待ちながら立出づるより二人目をつけて居るに最前屁をこきたる板敷まで來て此所にて心を着け障子を明けて疊の上へ廻らるゝこそ一代の大事こゝなれ小兵衞も聊爾申てはとしばし之れを默りぬ世之介も二の足を踏みてかの板敷步めども鳴らざりしされども出し遲れてゐる中に吉田方より申し出して此のちらの御仕方總じてよめぬ事のみ始より飽かるゝまでとの御際へ成程今日切りて飽ました御見も今より後はと申し捨て表の見・世に出て、犬にさんたさせて遊ばるゝこそ少しは心憎けれ

大人しき態度、利發なる取り捌き、善きかたより申す傾城の心がけは此の邊に候べし。此には假に之れを傾城の上方氣質と名くべく、江戸氣質の張り强きものと照り合うて一段の風情有之候。『一代男』に太夫高橋の意氣地を叙して

それ程急な人には會うて面白からずと亮右衞門方に戾りぬ七左方より呼び立つれども歸らず世之介も戀は互と思ひ太夫を諫め是非行けと申せば今日に限つて日本の神ぞ〳〵行かぬと申すよく〳〵分別を極めよもや先にも此のまゝは措かじ摑みに來る時腰半分切つてやつて顚此方に置くかと申すいかにも覺悟と世之介にひかせて膝枕してさても命はと投げぶし聞いて居られぬ所ぞと尾張の大脇刀拔きながら切つてかゝれど目も遣らずして聲も振はせず唄ひけるめい〳〵取付き樣々扱へども聞かず兩揚屋町中袴着て兩方の詫ことゝ入り亂れて親方かけ

つけ今日は尾張のお客へも世之介殿へも賣らぬとて高橋がたぶさを取つて宿に歸るそれにも飽かず世之介さらばといふこそ心强き女此の男あやかりものぞかし

といひ太夫小紫の豪奢と俠氣とを記して

紫さまお一つまゐれと暴くおさへて襟から膝くだり打ちこぼしたんと氣の毒がる顔つきおかし太夫苦しからぬと座をたちて行水取れとて湯殿に入り最前の衣裳つき少しも變らず肌は白綸子中は紅鹿子のひつかへし上は黄八丈の八たんかけ召しかへられける又上方女郎のせぬ事なり(中略)世之介重ねてたづねければ樣子見るに少し足らぬ人を賭にして遣はしけるとさながら見えますによつて先さまの人憎しあんな男に逢うてとらしましたといふ

といへる、さては『一代女』の主人公の、己れに敵するものには飽くまで悍に、己れに與するものには飽くまで情深き一種の氣象、「此の男嫌うて振るにはあらずかしらに粋顔をせらるゝによつて此方からもむつかしく仕掛」くるまけじ魂、正しく町の髮結らしく思はるゝ供の男が全盛顔の憎さに一旦は振りたれど、其の男の優しさに心和ぎかけし途端「大臣の聲して、夜の明くるに程なしわれは先へ歸れ、髮結ふ人も待ちかねんと何の遠慮もなく起こされける之れを聞くと又こゝろざし替はり先に見立てし職の人なればかさねて浮名の出づることをうたてく其の通りに起きわかれぬる」「情より名聞」の念、およそ是れらを江戸女郎のいのちといたし候はゞ、上方氣質と江戸氣質と、相通ずる節も候へど、概して彼方はたしなみ深く利發に、此方は意氣地、名聞を最後の行留まりといたす。藤なみの細く長う風に靡くを執ねしと見候はゞ、雪折竹の雪に一夜の宿をだにおしむは無情とも見え候はん、されど亦細く長う續くは情に深入りせぬ故にて、太く短く一夜に折るゝものこそなかく〳〵に熱情とも申すべく候へ。外に「いかなる粋もいやとはいはぬ」遊女の手錬、「客からのつけ次第にして傲る」遊女の

威、遊女の薄情、遊女の莫連、いまさら例を擧げて論ずるにも及ばずと存じ候。要するに、一代女の生涯は即ち遊女氣質の始終にして、上に論せし諸性質は其が根じめとなれるもの丶一斑に候。されば遊女氣質、粹人氣質と異なれるは、一は女性だけに我れといふ城廓を胸に構へ、絶えず其を振りかへり見るの風あれど、他は同情の面より此城廓を脱却し、時に放焉として本來平等の天地に遊ぶを得るの點に候。縱令しか意識せざるまでも偏狹は女性の常に候へば、審美上に所謂同情、忘我等の境には長く停まるを得ず、動々もすれば我れの身上に立ち還らんとする傾有之候。意氣地といひ、名聞といひ、たしなみといひ、利發といふ、何れか此の我執の影に候はざらん。粹は此處を通り拔けたるものにして、粹人氣質と遊女氣質との相違はやがて男性と女性との差別と申して可然候。

好色論の終に申添ふべきは粹、傾城などすべて好色氣質を躰とするものと、眞の戀との逆行する一事に候『五人女』は眞の戀を描かんとせるが故に好色の範圍を逸し、『一代女』は好色を寫せるが故に其の戀一も眞の戀となり申さず、此の關係は次章西鶴の人生觀を論ずるくだりにて細述いたすべく候。

西鶴の人間觀

人間觀、人生觀など申すと、此の頃の流行語にて何人も口にする所に候へど、其の本氣はさる簡易のものに候はず、近松が心中物のあはれを寫したるの故をもて彼を厭世詩人といひ、西鶴が好色界の快樂を描きたる故をもて彼れを樂世詩人といふの類は勿論據なき說に候。本來は人間を何と解し現世相を如何さまに觀ずべきかと尋ぬる前に、先づ人生の果たして解了せらるべきものなりや否やを論じ、兼ねて智識の性質を明め、造化の秘密は約そ何分通りまで人智の思量をゆるすものなる

かを研究致したるのち、人生觀の厭世といひ樂世といふが如き感情的のものに分かるゝ所以を說くが至當の順序に候へど、煩はしければ、他日に讓り、此には直に西鶴の人間を觀せし次第に論及いたすべく候。

西鶴が作の原來小說にあらずして短き記事文なる由は既に申上候、隨ひて作者の理想を加へて結構せるもの少く多くは俗にいはゆる寫實に候。されど一方より申すときは却りて頗る理想派に近き點もなきにあらず、『一代男』『一代女』など、全躰より見るときは即ちこれに候、其ゆゑは此等の作の表にては、人生は全く好色氣質の獨舞臺にして何程蕩淫を極むるも社會的制裁とか周圍の係累とか申すことは殆どなく好色者流の理想鄕も斯くやと思はるゝ有樣に候へば也、すなはち個々の事柄は寫實なりといたすも、全局の上よりいふときは實際にあるまじき世界に候へば也。『一代男』『一代女』の描ける所は好色といふ目安より割り出だせる一種の理想的社會にしてまた西鶴が好色の窓より觀せる人生の極致に候。さもあらばあれ是れ彼れが人生觀の一部のみ、之れを以て全西鶴を掩はんとするは僻事に候べし夫の西鶴を譯の聖といひ又は高上の理想なき野人といふが如きは、貴ぶも賤むも、ともにこの間の消息を會得せざるに由るものと存じ候。或は西鶴の何故にしかく不健全なる理想世間を不健全と知りつゝ描きしかと訝る者も候はんか、そは戯作者の本意を餘りに重く見たる論と申すべし。昔時は戯作者の筆をとり候や、まづ念頭に浮ぶは讀者を娛ましめんの一事にあり。『一代男』『一代女』の成れる、はた此の目的にしたがへるに外ならぬ候。されば西鶴のはじめより人生に對する己れの感情を歌はんとせるにあらざるは申すに及ばず、彼れは人生の圓滿を夢想して之れを髣髴せんとせるにも候はず、否、圓滿を髣髴せんとは致したれど、其の圓滿は人生の圓滿にあらずして歡樂の圓滿に候ひしなり、就中强大の勢力ある色欲的歡樂の圓滿に候ひしなり。而して西鶴の之れを擇ぶに至りしは、彼れの時勢と彼れの地位との所以にして、猶馬琴が勸懲の眼鏡により仁義世界の圓滿を想望せるがごときものに

候。たゞ馬琴は一途道念の滿足を得んと欲して煩惱の念を拒斥し、之れを以て人生の圓滿と心得候へど、西鶴が色慾の滿足をもて直に人生の圓滿と觀せしにあらざるは『一代女』『五人女』などの中に勸懲の口氣を帶べる節少からぬを見ても知らるべく候、殊に自然自由なる『一代女』を讀み卒へたる眼を『五人女』に移すときは此の事實最も著く見えずき申候。『五人女』は即ち西鶴の觀せし人間の全相なるからに、其の中なるは、色も戀も、『一代女』と異なり極めて窮屈にして煩惱の傍に常に何物かの看守するが如き心地いたし申候、例へば等しく肉慾の戀を寫し候も、『一代女』にありては靑天白日誰れ憚る所なきに引きかへ、『五人女』にありては、お夏と淸十郎、お仙と長左衞門、おさんと茂右衞門、お七と吉三郎、何れも其の戀密事の性を有せるたぐひ、若しくは「世に神ありむくひあり隱してもしるべし人おそるべきは此の道なり」「あしき事はのがれずあなおそろしの世や」等の評語を以てせるなど、明に西鶴が描ける人間の煩惱一偏に非ざりしを證するに候はずや。『八犬傳』は其の偏狹なる不健全なる道義界を以て人生を掩はんとするが故に、結果は娯樂(プレジュア)よりも驚嘆(アドミレーション)を主とするに至りたれど『一代男』『一代女』は娯樂を主として驚嘆を求めず、是れ前者の動もすれば說理に終らんとする所以後者の知らずしらず美術の肯綮に觸れ得る所以に候。近松は乃ち能く美術の本旨の娯樂にあるを忘れざると共に其の娯樂の單に煩惱に媚び肉感を充たすにあらざるを知り、人間の全相を活寫して始より同情の娯樂に訴へんとせるものに候。佛の批評家テーンが嘗てミルトンの驚嘆シェークスピアの創造、スヰフトの打破バイロンの挑戰スペンサーの夢想を並稱せるに倣ひて上の三家を品隲致さば、馬琴は驚嘆するを好み、近松は同感するを好み、西鶴は娯樂するを好みきとも申さんか。要するに元祿の社會にありて西鶴が娯樂の頂點を好色界に求めしは怪むに足らず、一歩を進めて無意識のうちに審美の域に參せしは彼れの偉なる所以に候。西鶴の詩人としての技倆は彼れに取りては寧ろ無意識的に候、但し美術の成るはすべて無意識と意識との

兩面の作用によるものとも見らるべくハルトマンの

無意識的概念によりて能く部分を全に統理し渾成し、同じく無意識の所産なる自然體と比肩するを得るに至るは天才なり（中略）此のゆゑにセリングス及び其の流派の人々は一切の美術的作業には意識無意識の兩作用の不斷錯綜して相助け相濟するあるを要すと説けり

といへるも此の理に候へど、此は西鶴の塲合に意識無意識と申すとは別にて、直接に美を目的とし美術のために美術を營むものにつきての事に候、即ち美を成せんと意識して靑を點し丹を施せども、これのみにては未だ美ならず、此の上に美趣の橫溢し來たるは別に無意識の作用によれりとの義に候、近松の如きは之に候べし。他に勸誨を直接の目的とする馬琴の如き、娛樂を直接の目的とする西鶴の如き、感慨を遣るを直接の目的とする詩歌辭賦の如きも有之候て、此等は其の直接の目的より更に審美的同情といふが如き間接の目的に移るの手數を要し候、西鶴を無意識と申すは此の際にて、彼れは意識内にては單に娛樂又勸誨といへる淺俗なる目的に停まりたれど、無意不識の間に高尙なる審美的同情を目的とするに至りたるものと存じ候、約言すれば西鶴の浮世草紙を作れる趣意はたゞ面しろをかしく讀ましめんといふにありたれど、何時か人間の眞相を描破して同情に訴ふるの呼吸を默會したるものと申すべし『一代女』には片々ながらもこの穗影銳く見れ『五人女』には稍々含蓄の態をなして圓滿に顯れ申候。或は西鶴の意ことさらに社會の浮猥を暴露して之れを刺るにありきといひ、或は西鶴冷に世相を觀じて獨り筆にし獨り笑めるのみといふが如きは、恐らくは聖海上人が社前の獅子のたぐひかと存じ候。斯く西鶴の悟入は無意識に近かりきといへども、されども悟入は悟入にて其の此處に到れる天才の効は沒すべくも候はず、若し西鶴が好みて不健全なる色界の歡樂を題目とせるに罪あらば、それは肉躰の快樂と精神の快樂との調和し圓熟せる醉生夢死の社會の全般に渉れる罪にして西鶴は社會の見たりしに過ぎず候。

西鶴の人生觀を論ずるはやがて『五人女』を評するも同じ事に候、まづ大躰の點より申さんに『五人女』の動因も『一代男』『一代女』の動因も等しく色情なれど『一代男』『一代女』には只々色慾ありて戀愛なし、眞の戀愛は『五人女』にはじまり申候、之れ明に西鶴が『五人女』に一轉歩をなせし證にて、好色に執する限は戀愛に筆を着くるの餘地なかりしこと當然に候。好色と戀愛とは一方に於て相類し他方に於て相背くものにて、精しく申さば好色も我れを中心とし、戀愛も我れを中心とし、兩者差別見に立脚する點に於ては同一に候へど、また好色の我れは全く我れ一人なり、戀愛の我れは我れと我が愛する人とを合したるや〻廣き我れなるの相違有之候。此の相違こそ好色と戀愛とを背馳せしむる根本にして、好色は我れに不利なるもの〻すべてを排し候へど、戀愛は戀人の爲にのみは我れの不利をも顧みず多淫浮薄は好色のいのちにして實意獻身は戀愛の面目と存じ候、二者の併立せざるは此れにて相知れ申すべし。『五人女』に好色の二字を冠せしは單に市らんためか、はた好色戀愛の別などには無心なりしためか、知りがたく候へど、實際の上にて正しく西鶴は『一代女』と『五人女』との間に一頓悟いたし候。而して頓悟して好色と戀愛との別を辨へ、戀愛の本性を描破し到底戀愛の、道念の制抒以外に獨立するを得ざる所以を示せしもの、『五人女』の心中悲劇に候。

總じて古今心中物の精粹は近松の世話淨瑠璃に鍾まれりと申候へど、其の發端は西鶴の『五人女』にあらんと存じ候。心中物とは必竟戀愛といへる一種の煩惱と、義理とか世間とかいへる道念と、即ち哲學者のいはゆる差別と平等との衝突に基くものにて、何故に衝突の此世にあるかは姑く別問題といたすも、本來萬物存在の大原理は件の兩端の調和にあり、之れに正反對なる衝突は存在すべからざるもの即ち自滅すべきものたり、心中悲劇とは此の衝突の調和するを得ずして遂に自滅するものに外ならず、一切の悲劇は此の原則に依りて生ずるものに候。ただ此に注意すべきは斯く心中悲劇のみが盛に我國最

大詩人の手に描かれたる所以に候、勿論シェークスピアにも『ロメオ、エンド、ジユリエット』『アントニー　エンド　クレオパトラ』以下心中悲劇に近きものなきに候はねど、其の趣も異なり、且つ我が國ほど多からず。『ロメオ、エンド、ジユリエツト』のみは其の社會の我が國のに似たりしため稍々我が心中物と同調にして近松よりもむしろ西鶴に近似せる節有之候、蓋し後に論ずるが如く、西鶴の作はすべて元祿を寫し候へば、南方伊太利を寫して批評家をして

啻に事柄のみならず語句の形までも南方より來れるを見る、其の抒情的音節、其の盲情熱、其の殷豊なる活氣を見、燦爛たる想像を見、放膽なる措辭を見て誰れか伊太利を想はざるものあらん。

といはしめたる『ロメオ、エンド、ジユリエツト』の西鶴に似たるも無理ならぬ義に候はんか。さて立ちかへりて案ずるに、心中悲劇の我が國に行はれしは東洋の社會の特質に由來せしものに候はんか、西洋にては蚤く個人といふ思想發生して、差別を重ずるの風行はれ候ひしより、社會を統制し行く平等すなはち道念もさまで差別に酷ならず、啻に酷ならざるのみならず、兎もすれば差別の方跋扈して、政治に宗教に哲學文學美術に、善惡ともに差別の勝てるより來たるもの多き傾候ひき。此に於てや、差別見に立つ戀愛の如きも、一擧一動道念に掣肘せらるゝの累なく却りて神聖視せらるゝまでに相成り申候。東洋は之れに反して古より萬事平等を先とするの傾向強く、隨つて道義の如きも差別的個人的の所業を酷遇するの嫌あるを免れず、萬國史家が亞洲國民の特質を擧げて個人の感識薄く自由の想念に乏しなど申すは口惜しけれども致しかたなき事に候、これ我が國にて戀愛の動々もすれば義理と衝突して心中悲劇を釀す所以に候べし、西洋の戀愛の何處となく白晝公然の趣あるに引きかへ、東洋の戀愛の多く秘事隱密の性あるもゆゑある事に候。或は東洋の戀い肉感に流れ易きを譏るものも候へど、こは西洋とても同轍にて、永く精神上の戀にのみ停留するは寧ろ變例に候、詩人の好みて精神上の戀愛を寫

すは之れを盛行ならしめんためにて強ち戀愛の肉感に終るを咎むる譯は候はず、精神の作用はやがて肉躰の作用にして體、心畢竟は二致なく、愛の極は必ず肉躰の觸接に終るべきこと心理學の證する所に候。但し實際世間の上にても詩歌美術の上にても肉感を前驅として愛の跡を摸するもの丶賤むべきは勿論に候。

心中悲劇の由來以上のごとしといたし、さて等しく此の地盤に立てる近松、西鶴兩家の殊なる所を考ふるに、まづ目に留まり候は、悲案を結ぶべき最後の破裂すなはち主人公の滅亡のさまの、彼れ此れ著く相違することに候。單に此く申し候のみにては些々たる表面の事柄のやうに思ひ做されんも計りがたく候へど、決して然らず、其の裏面の意味はたしかに兩家の人間觀の相違といふことに候。近松の情死は『曾根崎心中』『天の網島』を首とし多く男女の主人公が現世の覊約に堪へ得ずして厭離穢土、欣求淨土の念に驅られ、相携へて自滅する心中悲劇の態を具へ候へど、西鶴にありては、現世の覊約、煩は煩なれども、之れが爲に直に厭欣の一念に驅られみづから殄滅の淵に赴くといふことなし、西鶴の人間は斯かる塲合に處しても猶現世を見捨てんとは致さず、動々もすれば却りて平等旨を破り、道義の網を潛りても、煩惱の慾を追うて現世にながらへんとす、此をもて必然の結果として他人の手に逼まられ不承ながらに死地に就くもの比々是れに候。設ひ一時は來世を樂ふの氣分となることあらんも、其は刹那の出來心にして、根柢を叩けば何處までもこの世を捨て丶他界に快樂を求めんの覺悟なく、會々自殺せんとすれば他の手に囚られたる絶躰絶命の塲合のみなることと、おなつ清十郎もおせん長左衛門もおさんも茂右衛門もお七も吉三郎も皆同様に候。凡そ煩惱と道念、差別と平等とが一旦衝突の端を啓き候上は特別の事情によりて之れを調和する喜劇、例へば『伊達染手綱』『夕霧阿波鳴渡』などの外は、主人公の滅亡は必定免れざるものにして滅亡の模様に三種ありと存じ候、一は飽までも差別に執して平等の法に抗せんとするため遂に社會の手に強迫せられて死するもの

にて、西鶴の人間は此のかたに傾けるものに候。二は一に反し平等の前に慴伏して差別の欲を捨て形骸ほどは殘せど有餘の涅槃に入りしも同然、情あり熱ある世間の存在を亡じて白眼世を看るの人となるものにて、馬琴の人間は往々之れに近づき候、三は差別の欲も捨てられず、さりとて平等の法をも破り得ず、悶又悶、遂に自滅の途に就くものにて、近松の人間は之れに外ならず候。近松にありては「難波土産」に「某が憂はみな義理をもつぱらとす」と申せし如く常に差別と平等、煩惱と道念とを幷べ掲げて彼れに五分、此れに五分の重さを持たせ候へど西鶴にありては差別のかた七八分を占め、やゝもすれば批評家の眼に映じけんシェークスピアの人間の如く、人間の本相は煩惱我、煩惱狂にあるかと疑はれ申候。同一社會を寫しながら、近松と西鶴と其の觀せし心中物の人物のかくの如く相違いたすは何故に候べきか、蓋しこれ前に申し述べたる、近松の意識的と西鶴の無識的とのまた一を理想的ならしめ他を寫實的ならしめ、一をして眞を先とせしめ他をして實を先とせしめたるに由るものと存じ候。審に申せば近松は現實世間の人間の昏々として歡樂に耽けるの外二念なきを見、而して其の終に自滅に就くの必至なるを見て差別我、煩惱我の傍常に平等、道念の看守するものなかるべからざるを察し、且つ此の兩端、時により處によりて互に消長はあれど古今東西に通じて觀るときは兩々端峙して何れを重しとも定め難く、衝突するの已むべからざるものたるを曉り、此の人生不朽の眞相を描破して詩人の本分を完うせんといたせしものに候、すなはち現實の世相は如何あらんも、之れを醇化して眞に近からしめ以て一段明に天の人間を作れる本意即ち造化の極致、即ち天の理想を發揮せんとせる者之れ近松に候、近松もし西鶴に比して高き者あらば正に此の點に候べし、彼れの「大まかなる所あるが結句人の愛する種子とはなるなり」と申せしは善く其の理想的なりし趣意を表し申候。西鶴は之れと異なりて現實の世相を現實のまゝに觀じ候ひぬ、現實の世相とは如何なる者に候ひしぞ、曰はく社會の組織圓熟して差別平等一諦に歸し、人々現世の

外をおもはず、打ち見たる所天地は現實の生活、差別我の働作に盡きたらんが如く、無邊に流行する平等の大法力には夢にだに想及せざりし者、これ元祿以上の世相に候、一言以て掩はゞ樂世的なりきとも申さんか、但し樂世的と申すには二義ありて佛家のいはゆる常見外道の樂世と、斷見を經由し斷常二見を空したる後の樂世とは、おのづから別に候、前者は無意識に只わけもなく此の世樂しと觀ずるもの、後者は此の世の外に淨土なく煩惱即菩提なるを意識して此の世を樂しとするものに候。元祿社會の樂世は固より前者にて、何の代の泰平か夫の藹々たる蒼生をして悉く悟後の樂世に達せしむるを得候はんや、此に於てか元祿の社會は動々もすれば平等の畏るべきを知らずして差別の一偏に走るの病あり、悲劇の芽ざす所此にありと存じ候、換言すれば、ひたすら差別界の歡樂を極めんとするが故に平等之れを責めて、尋ぐに哀傷を以てするもの、やがて元祿の心中悲劇に候。西鶴は實にかゝる社會を現實のまゝに描寫するに出で立ちしものにて深く此の奧に踏み入らんとはいたさゞりきと存じ候、彼れは煩惱に狂せる人間が盲奔して遂に道義の大法に觸れて滅する次第を描くに能事了ると思量いたせしものに候、近松は時空を超して其の此の如くなる所以の眞相を此の上に達觀いたせしなり。されば西鶴は元祿といへる一定の社會に實現したる人間を描き、近松は此の囿を取り除きたる人間を描けるものと申すべく、近松の寫せる所は直に不朽といふを得れど、西鶴は全部其のまゝを不朽といはんこと難く候。西鶴の人間觀は元祿の社會を悉すも明治の社會とは全くかなはずといふ如きこともあるべし、近松の人間觀は元祿の現社會をも明治の現社會をも必然掩ひ盡くすとは限られねど、また元祿も明治も彼れの埒外には逸し得ざるものに候。時により處により西鶴に同感するを得ざるもあるべく馬琴に同感するを得ざるものもあるべし而も何人か近松に同感し得ぬもの候はんや。序ながら近松の人間の情熱的なるを元祿の產物といふは異存なけれど、近松の心中物をもて直に元祿を描けるものといたすが如きは淺膚の見たるを免れず候、近松の心中物

出でて之に造られ感化せられし以後の社會は知らず、近松を造りし以前の社會は決して近松の心中物其儘の社會にあらざりし義と存じ候。勿論時に一二の近松的なる人物事件はありきといたさんも、大躰は近松よりも寧ろ西鶴に似、道念と煩惱との衝突に苦みて自殺するよりも煩惱に驅られて盲進し自滅することこそ元祿社會全般の本調に候ひつらめ、これより近松に至らんには尙一際平等を炳焉たらしめ差別との權衡を保たしめざるべからず、近松の理想的なるは此のゆゑに候、西鶴の寫實的なる所以もまた此れにて明瞭と存じ候。

以上西鶴の人間觀の基く所を概說して近松の人間觀と幷べ論じたれば、以下『五人女』の總評に移りてさらに事實の面より之れを明め申すべく候、而して、『五人女』中五の卷は姑く措き、餘の四卷の壓卷は第三と存じ候へば之れを骨子といたして立言いたすべく候。『五人女』飜刻者は「就中四の卷は西鶴作中屈指の文字彼れを代表するに足る」と申し候へど、我等の見る所は然らず候。さて『五人女』は其の名の示せる如く、女主人公の悲劇にして、一の卷お夏清十郎、四の卷お七吉三郎は共に無分別なる若氣の戀、二の卷おせん長左右衛門、三の卷おさん茂右衛門は共にやゝ差別つきたる年増婦人の戀にして、後の二者は何れも其戀の性質極めて複雜、眞箇千古の好詩題と見え申候。然るに西鶴は二の卷にては可惜筆をそらして枝葉の事柄に卷の半をうづめ、要所をば卷尾にちらと叙述し去りたるに止まれば見るに足らず、眞に悲劇の面目を具へたるは三の卷のみと相成申し候。又近松の筆に上りて『戀八卦柱曆』の名篇となりしも之れに候。そも〳〵此の悲劇の主人公は如何なる人物にして其が戀愛は如何にして始まり如何にして終りしか。申す迄もなく西鶴にては茂右衛門は一の配色たるに過ぎず候へば、兩人の戀愛より其破滅に及ぶまで一切の動因はおさんに歸する義に候。而しておさん茂右衛門と全く意外の契を結び夢おどろきて「わけもなきことに心はづかしく成てよもや此の事人にしれざることあらじ此のうへは身をすて命

かぎりに名を立て茂右衛門と死出の旅路の道づれと倚やめがたく」遂に邪徑に迷ひ入りし刹那の心機こそ全運命の要にして如何樣にも解せらるべき微妙の問題に候へ。稍々同轍ながらも二の卷おせんの戀は又別樣の所ありて「おもへば〳〵憎き心中とてもぬれたる袂なればこのうへは是非に及ばずあの長左衛門殿になさけをかけあんな女に鼻あかせんと思ひそめしより格別のこゝろざし程なく戀となり」しものに候へば始はさら〳〵長左衛門いとしとの愛着心より起これるに候はず、唯々我れに辛き女に鼻あけさせんの面あて心、即ち意地、即ち戀と異方面なる一種の煩惱心、差別心より來たれるものにて、終には必然之れに伴生すべき長左衛門への同感も交り眞の戀となりしものと存じ候、されば自然と才覺づき人たる人の娘はかくありたきものと褒められたる發明女の、たゞ一筋に柔和なるのみにあらで、何處にか意地もありて申さば遊女氣質の幾分に女房氣質の肉を被せたらんが如きおせんの性格もよく相見え申候、且つ此の何處にか遊女氣質の名殘の失せかぬるは西鶴が描ける女主人公の一貫の風格にしてまた元祿女の特質ならんかと存じ候。おさんにありては其の心緒の複雜なることおせんの比にあらず、おさんが奇禍身を汚して今さら退きも進みもならぬ大窮地に陷れるあはれもさることに候へど、彼れが心機窮まりて而して革まり、老陰再び陽に徃きて正に背を決して天堂、地獄の岐頭に立てる一髮裡こそ千萬の人間観を容れて餘あるの地ならめと存じ候。馬琴をして此の際に處せしめば如何、特別の事情なき限は彼れの人間は恐らくは直に刄に伏して心の潔白を證し候はん。近松をして此れに當たらしめば如何、『戀八卦柱曆』は答へて申すらく、近松のおさんは流石にしかく單調子ならず、結ばれてなまなかつらき亂れ苧の解くに解かれぬ義理人情に縛られ夢にだに戀せぬ中の戀となり「ア、おろかしい事いふ人じや我れひとり生きながらへ言譯が立つほどなれば二人生きても同じ事とりちがへうがどうしようが以春と云ふ男持ちながら其方と肌ふれ寐たは定、かたちは生まれ替つても此の惡名は削られぬ」と自死の以て罪跡を淸むるに足

らざるを知るとともに、絶えず良心の呵責に苦むさまは表面に相見え候へど紆餘曲折は之れに盡きず、さらに裏面に一大秘密の潛むもの候はざらんや、縱令身に悋氣といへる缺點ありきとは申せ、當初の心根は微塵曇のなかりしものを斯くまで酷き周圍なか〳〵に怨めしく心ともなく振りかへりて茂兵衛の方を見れば這はそもいかに、おさんの胸底には實に夢にだに知らざりし一道の異光漏れ來て兩人の行手を照すに似たり、あはれおさんが無意識的に茂兵衛に寄せし同感は由來遠かれど此に至りて形をなすまでに成長いたせしなり、而して成長いたせる同感は周圍に對する諸多の感情及び危害を避くる生類の本能と混じて一團となり、おさんを刺擊して茂兵衛と共に一往夢路を辿らしめ候ひぬ、即ち一方には我れを責むるの道念儼として存し、他方には責めらるゝの煩惱我無意識裡に蟠り以て『戀八卦柱暦』の悲劇を成せるものと存じ候。最後に西鶴のおさんは近松のとも異なり、近松にありては道念の手にさいなまれての墮落に候へど、西鶴にては濡れぬ前こそ露をも厭への意氣ほの見え道義世界に絶望せし極終に「此のうへは身をすて命かぎりに名を立」てんと一直線に煩惱に走れるおもむき有之候。斯くなるには自暴自棄の底に既に知らず〳〵の戀の萠芽も潛みしか、其處までは今は研究いたさゞるも、自暴自棄に流れ易き性格より察するも西鶴が人間を觀ずるの本意は大抵相知れ申候。彼れに取りては道念の覊は以て狂へる意馬を制するに足らず、隙だにあらば驀地煩惱に馳せんとするを人間の本相とせるものに候、されば西鶴は毎々人間を惡しく卑しき方より觀ずるの風あり、石山寺の開帳に都の袖をつらぬるは「どれがひとり後世わきまへてまうでけるとは見えざりき皆衣裳くらべの姿自慢此の心ざし觀音さまもおかしかるべし」と笑ひ、尾上の櫻咲く頃は「人の妻の樣子自慢、色ある娘は母の親ひけらかして花は見ずに見られ行くは今の世の人心なり」と嘲り、なべての世のさまを觀じては「人はみなうつり氣なる物ぞかし」「一切の女うつり氣にして」など罵れるたぐひ皆之れより割り出だせるものに候。さはいへ理想の歡樂郷にあらざ

る限は人生は哀傷は逃れぬものに候へば、西鶴の描ける人間とて固より煩惱一偏なるを得ず。

其の頃おさんも茂右衛門つれてお寺にまいり、花はいのちにたとへて何時散るべきも定めがたし、此浦山を又見る事の知れざれば、今日のおもひ出にと、勢田より手ぐり舟をかりて、長橋の瀨をかけても、短きは我々がたのしみと、浪は枕のとこの山、あらはるゝまでの亂髮、もの思ひせし顏ばせを鏡の山も曇る世に、鰐の御崎の逃れがたく、堅田の舟よばひも若しやは京よりの追手かと心のたまも沈みて、ながらへて長柄山我が年のほども此處にたとへて、都の富士二十にもたらずして頓て消ゆべき雪ならばと幾たび袖をぬらし、志賀の都はむかし語と我もなるべき身の果ぞと一しほに悲しく、龍灯のあかるとき白髭の宮所につきて神いのるにぞいとゞ身の上はかなし、兎角世にながらへる程つれなき事こそまされ、此の湖に身を投げて長く佛國のかたらひ。

といひ

切戸の文珠堂につやしてまどろみしに夜半ともおもふ時あらたに靈夢あり、汝等世になきいたづらして何國までか其の難をのがれがたしされどもかへらぬ昔より向後浮世の姿をやめて惜きとおもふ黑髮を切り出家となり二人わかれ〳〵に住みて惡心去つて菩提の道に入らば人も命を助くべしとありがたき夢心。

といへる、又はやゝ首尾透徹の致を缺けども末章茂右衛門が心の上の悲劇に筆を移せるくだり、茂右衛門が案內知りたる京の町の忍びあるきにも十七夜の影法師に胸をひやし、雜談の立聞に身をふるはし、おさんの舊夫を一目見るや「たましひ消えて地獄の上の一足飛び玉なる汗をかきて木戸口にかけ出」づるなど何れか緒に觸れて閃發する道念の光に候はざらん、されど苅り盡くさゞる雜草は茂り易く、間もなく煩惱の蔭さしてくらぶ山もとの闇路を復たどりそめ最後の淵に急ぐばかりに候。五百兩の金子を持ち出だして家を走りしそも〳〵より、入水と見せかけて身を逃れ愈々罪科を重ねて顧みず「うれしや命にかへての男じやもの」といふにいたりて全然不義煩惱の犬となり了れる箇のおさんは豈近松の描かんとして描くに

忍びざる所、馬琴の夢にだも想像し得ざる所に候はずや、取りわけ文珠堂の靈夢はやがて我が道念の影なるに之れに對して、

何にならうともかましやるな、こちや之れが好きにて身にかへての臨心文珠さまは衆道ばかりの御合點、女道は曾てしろしめさるまじよいふかと思へば嬉た夢さめて橋立の松の風ふけば塵の世じやものとなほ〳〵やむ事のなかりし。

といへる煩惱心の强梁なる、此の一節にて西鶴の人間觀を悉すに足らんと存じ候。「粟田口の露草とはなりぬ九月廿二日の曙の夢さら〳〵最期いやしからず世語とはなりぬ今も淺草の小袖の面かげ見るやうに名は殘りし」と西鶴の筆はうつくしけれど、おさん茂右衛門が最後決して潔しとは申されず、之れも煩惱我の是非なしとや申さん。要するに西鶴が一代の述作は一面に武士氣質、好色氣質、商人氣質のさま〳〵を寫しておのづから其の骨髓となれる一道の氣魄を髣髴せしめぬ、大和魂とは之れに候べし。而して他面には元祿を寫實して其の奥に伏する煩惱狂の人間を描き候ひぬ。右に日本左に元祿の人間を束ね し西鶴が手腕亦巨ならずと申さんや。近松の世話物は乃ち元祿を門として横に不朽の堂奥に通れるものと申すべく、之れに時代物を幷べ觀るときは、近松の手には右に不朽の人間宿り左に日本國民藏れぬと見え申候。ついでながら申上ぐべきは近松を理想的と申すに疑を挾むものあることに候、此は恐らくは理想の本義を解せざるに由り候はんか。近松は實よりも眞を理想とせるが故に其の作厭世樂世の二端を絶して孰れにも近づきぬ、これ理想の本義に候はん。天地の眞は本來無邊なり、其の定着せる意味はカントのいはゆる意匠と申す一形式の外說明すべからず、說明すべきものは既に實にして眞に候はず、西鶴は固より意識して理想せんとせざりしが故に、此に論ずる限に候はねど、かの馬琴の人間を觀じて煩惱は何時も道念の下には屈し易きものとせるが如きは理想の小なるもの、其れ唯小なるがゆゑに樂世とか厭世とか黑とか白とか說明するを得る義に候、近松の厭欣黒白の矛盾を包藏して場合により何れとも見らるべき所殆ど無理想に似たるは其の大に理想的

なる所以に候はずや。尙近松の論は盡きねど他日に讓り申候。

終に拾ひ申上ぐべきは西鶴が神佛不思議に對する觀念の著く現世的人間的なりしことに候、之れはた彼れの人間觀の自然の結果に候はんか。西鶴は不思議を寫せども心より之れを信じたるものとは見えず、隨うて神佛と申すも神々しき所なく其の言ふ所は皆西鶴自身の語氣にして前に擧げたる文珠の告の外

老翁の神に立たせ給ひあらたなる御告なり、汝我が言ふことを善く聞くべし總じて世間の人、身のかなしき時いたつて無理なる願、此の明神がまゝにもならぬなり、俄に福德をいのり、人の女をしのび、惡しき者を取り殺しての、降る雨を日和にしたいの、生れつきたる鼻を高うしてほしいのと、さまざまのおもひ事、とても叶はぬに無用の神佛を祈り、厄介をかける、過にし祭にも參詣のともがら一萬八千十六人、いづれにても大欲に身のうへを祈らざるはなし、聞いておかしけれども散錢投げるがうれしく、神の役に聞くなり、此のまいりの中に只一人信心の者あり、高砂の炭屋の下女、何心もなく足手息災にて又まいりましたよと拜みて立ちしが、小戻りして、私もよき男を持たして下さりませと申す、其れは出雲の大社を賴め、こちらは知らぬ事と云ふたれど得聞かずに下向しけり、その方も親兄次第に男を持てば別の事もないに、色を好みて其の身もかゝる迷惑なるぞ汝おしまぬ命はながく、命をおしむ時分は頓て最期ぞとありありの夢かなしく云々。

といへるなど、粹なる親爺の口小言とも聞こえて可笑しく候。何れの世にか斯かる道化たる神佛のおはしまさんや。或はまた此等の神佛の、作者の化現とも見ゆると共に、之れに出會へる人物の心とも見らるゝより考ふれば、穿ち過ぎたる說かは存せねど、西鶴は一切の神佛不思議を主觀的のものとし、我れの心の影と解釋せるにあらざるか。『一代女』夜發附聲の章に、

一生の間さまざまのたはぶれせしを思ひ出だして觀念の窓より覗けば、蓮の葉の笠を着たるやうなる子供の面かげ腰より下は血に染みて九十五六ほど立ちならび、聲のあやぎれもなく負りよ負りよと泣きぬ、是れかや聞きつたへし孕女なるべしと氣を留めて見しうちに、むご

いかか様とめい〳〵に恨み申すにぞ、扨ては昔血荒をせし親なし子かと悲し、無事に育て見ば和田の一門より多くて目出たかるべきものをと過ぎし事ども懐かし、しばらくあつて消えて跡はなかりき、是れを見るにいよ〳〵世を限とおもひしに、其の夜明くれば、つれなや命の捨てがたく想はれし。

といへるは何等凄涼の筆に候ぞ、今日の智識より見るも優に幽を闡くの文字と申すべし。更に「總じて五百の佛を心靜に見とめしに皆々逢馴れし人の姿に思ひあたらぬは一人もなし」といへる「皆思謂五百羅漢」の條は『一代女』の掉尾の絶唱、此等に見ば思半に過ぐるもの候はん。

西鶴の文章と、西鶴の人生觀に關係ある滑稽諧謔とは他日別に一題として論ずるの價値あるべければ此には省き候。たゞ彼れの小說家としての技藝につきては到底幼稚と斷せざるを得ず、人物の主客を轉倒し記事の繁簡を亂し、意匠脚色の單純に失する等、今日より言へば未だ小說の形を成さずと申すべし。西鶴に取る所は其の人間觀の深刻にして、衣を剝ぎ皮を剝ぎたる元祿の煩惱社會を忌憚なく活寫せる點に御座候、是れのみにて西鶴は近松馬琴と幷べ論ずるの價値十分と存じ候匆々不宣。（明治二十八年）

「伊達競阿國劇場」を觀て所謂夢幻劇を論ず

なべての事物、此處に一短あれば彼處に一長あり、夢幻劇もまたこの數には洩れず。頃日歌舞伎座に團十郎、九藏の兩俳優相會して舊劇中の精華たる『伊達競阿國劇場』を演ずるや、觀客の歡迎、近年稀に觀る所なり。固より客脚の繁きと人氣の熾なるとを見て、直に當社會の好尙を議せんは非なり、彼等の多數は俗客のみ、眞に美を味ふに足るの好尙あるにあらず、彼等の劇を觀るは、劇を觀るにあらずして藝を見るなり、否藝を觀るにあらずして俳優を觀るなり、此を以て團洲場に上れば狂呼し、九藏場に上れば喝采す、而して其の他を知らざるなり。いかにぞこれを以て劇に對する社會の好尙を判ずべけんや。さはれ觀客悉くかくの如くなるにあらず、彼等の幾分は劇其の物にも興を感ず、夫の多少見識あるものにして頗に夢幻劇の妙を喋々するは大抵此部分に屬するなり。但し此等の人々と雖も多くは審美的標準を欠き往々夢幻劇の弊處をだに和唱するの嫌あり。隨うて間々夢幻劇を以て劇の極致の如く言ひ做し、其の弊や我が國劇をして發達進暢する能はざらしめんとす。畢竟は夢幻劇のいまだ嘗て評定せられざるが爲也。逍遙氏嘗て本誌（早稻田文學）に於て夢幻劇の利弊を論じたりしが世間の大かたは其旨を誤解せるに似たり。同志吾人の再び筆を援るまた已むを得ざるにいづるなり。

所謂夢幻劇の美とは何ぞや

劇はもと人間を主題とするの美術なり、此の故に之れが極致を求むれば、精神と事柄と、内外具足したる人間の全相を活現せんを要す、然れども此は夢幻劇の能くする所にあらず、夢幻劇の美は僅に其の一面を具するのみ。凡そ事柄と精神と相岐かるるや、精神は飄然として作家の主觀に歸り、事柄のみ冷なる形骸となりて客觀に殘留す。而して主觀に歸れる精神は、作家の影となりて、或時は抒情詩中に寓し、或時は叙事詩中に寓す。客觀に殘れる事柄は乃ち叙事詩を織り成すの根原なり、夢幻劇の美の立脚地はこの以下にあり。夢幻劇は事柄の美を生命となす。しかも單純なる事柄の美は淺弱にして長く人心を繫ぐに足らず、こゝに於てや夢幻劇は其の補給を上下兩面に需めたり。一は一場一時の事柄にあらゆる手段を加へて、悲しき事柄はあくまでも悲しく、凄き事柄はあくまでも凄からしめ、以て全壁の上に荒める觀客の同情を零碎の裡に收めんとする是なり。他は人事の自然の發展を外にし、人事を畵家の丹青と同視し、之れを材料として變化の上に變化を構へ、單に目前の變化といふことによりて形式上の美を織り成し、以て觀客を喜ばしめんとする是れなり。されば夢幻劇特有の美は主として(一)凄し悲しなどいふ斷片的感情の閃發すること、(二)目前の變化の華やかなることの二點に存すといふべし。

其の價値

之れを『伊達競阿國劇場』に見る、「竹の間御殿の場」に於ては、忠義心といふ一種の概念を代表せる政岡を中心とし、これを杜ぐに同じく殘忍邪曲なる女性といふ概念を代表せる八汐を以てし、これを通ずるに其の場の最大權力者たる無邪氣なれど君主の心ある鶴喜代を以てし、以て一種の漠然たる感激、即ち概念的感情を挑發するを主眼とせり。されば只感激の情と其を起さんと苦心する作者の技巧とが主となりて殆ど個々の人物なし、箇の政岡だになし、況や其の他の人物をや。「飯焚

の場」はた然り、同じく忠義心の塊たる政岡が親を滅せざるを得ざる悲哀の情(煩悩)と、其を激成すべき具とはこれあるも、個人的政岡なく、其の他の人物もなし。要するにこれらは皆一時一處の感情美のみ、これらとても人間美の斷片たるには相違なければ、斷片に一指頭を染めしのみにて大鼎の美味を悉せりとおもふは誤れり。夫の劇を觀了して觀棚を出でしとき、又は同一劇を觀ること再三に及べるとき、懷裡淡然として水の如く、餘情の恍惚たるものなきは、其の美の彼れが如く稀薄なるに由らずんばあらず、一時一處の人間美は繪書尙よく之れを現ずべし、劇の面目豈此にあらんや。而して夢幻劇は常に此美を頂點とす。『伊達競阿國劇場』の作の本意は一半此にあり。

淨瑠璃『伽羅千代萩』の如きこの意ますく著きを見る。因に記す、幸堂氏が考證の一節に曰はく、

御承知之通「伊達競阿國戲場」は安永八年の作「伽羅千代萩」は天明五年の作此間七年あり阿國戲場は(三浦屋)(高尾殺し)(豆腐屋)(御殿の毒味)(緣下)(女之助切腹)(埴生村)(同堤場)(對決)等也(今千代萩は手元になし)累の狂言は古くよりあれど此時阿國戲場に組込みたるなるべし此阿國戲場は操より歌舞伎にうつりたるものにあらず却て歌舞伎より操にうつりたるものなり其譯は安永七年の壬七月中村座にて「伊達競阿國劇場」と云ふ名題を以て興行せり此狂言中には不破名古屋浮世又平などを加へたり其他の役割は丸本の通り伊達騷動の狂言は是まで必ず仕組てあるものならんか明かならず伊達何々といふ名題に赤松則祐の役割あるは多分原田の變名なるべし又其前にも山名細川仁木彈正渡邊民部荒獅子男之助などいふ名前はあれど伊達の事とは思はれずされば安永七年の阿國戲場が匂ひの高き伊達騷動成べし又伽羅先代萩の方は結城座の操芝居に書卸したるものか併し是は其頃伊達騷動實に近く作りて態と役名を違へたるものか或は又貝田勘解由が事實に緣ある名か是は江戶淨瑠璃でありながら江戶歌舞伎には此名題を文政頃まで見ず大阪にては寬政末頃より此名題役名を用ひたり尤も江戶歌舞伎にても名題を替て此筋を用たるものはあるべし既に飯焚は千代萩の方にあるべし阿國劇場にはなし乳母は外記左衞門の娘月岡なり

先代萩貝田勘解由は黒仕立の忍び姿が仕來りと見えて大阪の團十郎と呼ばれたる團藏(四代五代共)此拵らへなり阿國劇場の方は緣下に仁木は出ず修驗者貴藏院なり(先頃明治座にて左團治の勤めたるは則ち是なり)長上下の仁木は先代萩の勘解由を直したるものなるべし尤も鼠色の好みにしたるは五代目松本幸四郎(和泉町)にて頃は文政年中ならんと思はる(此調は今閑暇なければ暗記のまゝ)此役は尾上松緑が黒の長上下にて勤めし事あれば夫を手本として幸四郎が鼠色に工夫せしか或は工夫者の松緑の事ゆゑ既に鼠色を用ひし事ありしか尙考ふべし云々

次に惡人と見えしお槇の忽にして善人となり、泥溝鼠の倏爾として人間に化するなどは夢幻劇の慣用手段、此方に丹裝火の如き男之助あれば彼方に蒼顏死に似たる仁木あり、沙庭上に長袴踏みしだきて入り來たる勝元の優長は髯毛を拔きて印影を割らんとする彈正の(實際あるまじき)細慧に對照して、宛然一幅の好錦畵をなす、正に是れ夢幻劇得意の處、一意目前の華やかならんを願へる結果なり。この種の形式美の人間に對するは、猶金朱燦爛たる極彩色畵の圓山、狩野の名畵に於けるが如し、その相距たるの遠きは言を須たず、しかも舊劇の作意の一半は此にあり、以て前の感情美と雙びて夢幻劇の美を全うす。

夢幻劇の美は改善し得べきか

總べて美は一等進むごとに下等なるものを打破して自家内に沒了せんとするの傾あり、在來の夢幻劇を修正補綴して人間美に接せしむるを得とせば、之れと同時に、夢幻劇の眼目たる感情美(感激、悲哀など)と形式美(變化多態のおもむき)とは漸く薄れゆかざるを得ず。吾人は固より夢幻劇に戀々とするものならねば、之れに代ふべき眞の劇美をだに得ば、何ぞ

劣等美の廢るを傷まんや。然れども、今日の夢幻劇を僅に補修したるのみにて夢幻劇の域を脫せしめんとするは、彼の紛璧を藉りて和尾を洋風に擬せんとするのたぐひ、殆ど望むべからざるに似たり。若し此の務を成ずるに足るの大手腕出でたりとせば、シエークスピア、ギヨオテのプルータ―ク、ボッカチオ等に於けるが如く、之れを材料として寧ろ新劇を創すべきのみ、何を苦みてか補綴の蔭に踟躇するを要ひん、他人の作を補修して名什を成せるものは古來稀なり。所詮夢幻劇は永く夢幻劇として保全するを得策となすに似たり、若し之れに改善すべき點ありとせば、其の標準は一處々々の感情を切ならしむるにあるべし、若しくは眼界を單調子ならしめざるにあるべし、約言すれば益々夢幻劇の本意を發揮するにあるべし。既に成れるの夢幻劇を取りて寫實劇に調和せんとするが如きは、中庸を成ずるの道に背けり。更に之れを全と分との上より見るときは、部分に重を置きて全體の統一を輕ずるを夢幻劇の本色とす、彼の全劇の筋をば觀者に預けて、面白き齣のみを選り出で演ずる弊風の如きも、畢竟此に根せるなり。全體を直うせんために部分の曲折を矯め、論理をもて現實をもて夢幻劇の律せんとするときは、夢幻劇の美は亡ずべく、而して眞正なる劇の美は來たらざらん。吾人は櫻痴居士の新作劇に往々斯かる傾あるを見る、今回の中幕『向井將監』の如きも、縱令舞踊を眼目とすとはいへ、其の一なり。或は以爲へらく、かくの如く論下するときは、夢幻劇は毎々大時代の摸型を株守して寸毫も移るを得ざるべしと。何ぞそれ然らんや、俳優にして當役の精神あり當劇の本意を解するを得ば、之れに因きて時の好尙と推移し行くは必然の數なり。花道の仁木の黑裝束いつしか長上下となり、更に一轉して鼠色とあらたまれるが如きは、趣味を損せざるのみならず、却りて之れを增すの妙あるもの、要は夢幻劇の美を失はざるにあり、此の際に鼠と人間と同じかるべき謂なし等の理窟を挿むべけんや。吾人はこの點に於て團十郎一派の活歷主義に不平なり、及び故なくして忽ち活歷を讃し忽ち之れを貶する劇評家に慊らず。

歌舞伎座所觀

明治の現在はおのづから德川の過去の繼續と異なり、世を擧げて夢幻劇の外を知らざりし時は既に去り了んぬ。今日の社會は明に一轉步して性格劇をさへ欲望せんとす。今もし性格劇を望むの心を以て全く別の礎に立てる舊劇を改竄せんとせば、其の弊や必ず舊美を失ひて新美をも得ざらん。團十郎一派の諸優が舊劇を演ずるに當たりて漫に寫實の分子を加へんとするは、見識に似て却りて見識ならず。勿論團洲の熟錬と精神とを以てせるがゆゑに、夢幻劇の趣味を損せざる限に於ては、其の注意改良の結果めでたかりしもの「竹の場」「飯焚場」中の處々に見えざるにあらず。されども、勝元一人は滿足の技を演じながら全舞臺の呼吸合せずして、華やかなる對決場の活氣を挫きたるが如き、又は長袴の裾を括りての出は、理に合ふにもせよ、目に訴へし前人の意匠を破壞せしまでにてさしたる益なきが如き、又は仁木落命の場の餘りに多人數なりしため、凄しといふ感を薄くせるが如き、又はさなきだに貫目なき瀧十郎に近世の寫眞鬘を被らせて彌々貫目を減じたるが如き、（仁木の夢幻劇を許さば山名も鬼貫も共に舊夢幻鬘を用ひて見る目をよくするがかゝる劇の本意ならずや、尤もかゝる似面非改良は今にはじまりたる事にはあらねど）此等は皆なまなかに現實を摸せんとして却りて美趣を損し、いはゆる角を矯めて牛を殺すに終れるものなり。或は對決の場に於て三猿に精神の闕けたりしを咎むるものあり、げに團洲に比すればこの非難あるべし、されど夢幻劇の舞臺に立てるものとしてはさまでの事なし、彈正、勝元、音響呼應の妙を缺きしは、畢竟一は舊劇の精神を以てし、他は寫實の心を以てするに由るか。縱令また此の間仁木其の他をして勝元と同呼吸ならしめたりとせんも、斯くては德川法廷の實況をこそ寫さめど、其の全局に美神の宿るや否やは覺束なし、況やさらに之れを他の幕と連絡せしめたる全劇の美に於てをや。活歷派の弊處數へ來たらば尚他にもあるべし、自己一人寫

實の旨を實行して他を顧みず、甚しきに至りては、他と折合はずと知りつゝ我見を押し遂ぐるが如き、團十郎の三省すべき所なり。俳優は劇を演ずるよりも自家の藝を誇示せん覺悟にて塲に上り、觀客はた同じ意を以て之れを迎ふ、此の如くにして斯道の進歩を希ふは難いかな。（明治二十八年）

「不言不語」を讀みて所感を記す

「不言不語」はもと飜案なりといふ、されど吾人は之を既往に徴して全部紅葉の述作する所と見做すの妥當なるべきを信ず、何となれば、飜案といふといへども、唯僅に想の彼方此方を彼れに取れるまでにして、之れにて肉し之れに皮するはすべて葉の技倆に屬すればなり。「不言不語」に若干の妙所あらば、これ紅葉の妙所なるべし、多少の缺點あらば、之れはた紅葉紅甘じて責に任せざるべからざる所。

さて「不言不語」を評するにあたりて、冒頭第一に提起すべき問題は、此の篇の趣意とする所如何といふにあるべし。換言すれば、作者は此の篇に於て、何事を描き、如何にして讀者を娯ましめんとせしか、『不言不語』一部の生命は何れにあるか。或は答へて云はく、笠原といへる素封家の夫妻、はじめは壘の上の鴛鴦とまでいはれし二人の仲、不思議にも三年このかた荒み果て、夫は妻を疎じ、妻は夫を恐るゝさまとなれる怪しき家内のいはれを、環といへる侍女とともに讀者が探らんとするの興味、之れ此の篇の命脈なりと。或はまた云はく、一篇の主人公たる笠原夫人が罪過を胸に藏して良心の呵責に苦む悶悶々の狀を、侍女環によりて寫し出だせるもの、やがてこの篇の悲劇なりと。前說は夫人の罪過を朧げにして之れを探知せしめんとするの探偵小說なりといふにあり、後說はこの罪過以後に於ける夫人が心內の苦悶を描ける悲哀小說なりといふにあ

り。よりて思ふに、探偵的と悲劇的との本篇に於けるは猶楯の兩面の如きか、夫人の心中の悲劇を寫して讀者に同感の涙を求むると共に、結構を奇にして同感以外のおもしろさを感ぜしめんとするは本作者が當初の用意なるべし。さもあらばあれ、本篇の結果よりいふときは、件の立案は果たして成就せしや否や。吾人の見る所を以てするときは、決して成功せりといふべからざるに似たり、否、探偵的の一面に於ては成功せりといへども、悲劇の面にせるものといふべきなり。吾人をして先づ其の成功せる方面より觀せしめよ。

吾人は第二回はじめて笠原家の有樣を點出せる條に讀み到りて「此家の內には何等の仔細かありてかくは恐しき心地するにはあらざるか」といへるに、まづ何等かの秘密を提出して解釋を求めらるゝ心地しぬ、及び之れと共に氣味惡しとの漠然たる一種の感情浮びぬ。而して讀みもて行くにしたがひ一家の此の不思議は、春月の曇れる所あるが如く怪しき夫人の顏色、さては人目をも憚らでむごたらしう餘所〳〵しき主人の待遇、主人を懼れて繼子の片隅に潛むが如き夫人の樣子と密に關係するものなるを見る。赤子といひ、兄の亡兒といひ、「三箇日か七種の內に誰やらむ歿くなられし人のありしやうなり」といふ、畢竟すべて一の不思議をしてますます複雜ならしむるの用をなすにあらざるはなし。斯くして讀者一たび環とともに作者が布きし八陣の裡に迷ひ入らば、怪異また怪異、局を窮めざれば巳む能はざるに至らん、之れ探偵小說の本色なり。されど「不言不語」の探偵的方面は之れに盡きず。それ人不思議に會ふときは即ち疑懼の心を生じ、疑懼の心はやがて不安の念を生ず、凄し、淋し、氣味惡しなどいへる感情はすべて之れに外ならず。作者は巧に此の理を應用して、一方に不思議をますます不思議ならしむると共に、他方に努めて凄涼の感を挑發せんとせり。固より時に擧を倩ひ酒を倩ひ、お增を倩ひ、以て秋風蕭殺のうちに一道の春光を點じ事に變化あらしめたる作者の技倆は之れありといへども、要するに第六回までは、こ

の不思議と之れに伴へる慘凄荒涼の感とを中心として筆を下せるものといふの外なし。就中凄涼の感といへるに意を用ひ、『源氏』夕顔の卷の筆致を學びて、たゞ〳〵不思議を探知せんとする露なる好奇的趣向を傑さんとせる所、普通の探偵小説にはなき用意なり。若し夫の探偵小説をして感情界に片脚を投ずる眞正の美文たらしめんとせば、極致は思ふに此の邊にあらんか、たゞ此の篇にありては悲劇といへる他の目的に制せられて探偵的結構を十分に複雜ならしめ得ざりき。詮ずるに『不言不語』は不思議を探らんとするの好奇心に訴ふることと、及び怪異不思議に伴ふべき一種の感情を刺戟することに於て成功せり、之れを稱して此の篇の探偵小説的方面といふ。但し第七回に本篇中の花形役者たる民之助の出現せしより第十一回までは正に紅葉得意の艶舞臺にして、「秘密」の一縷は僅に草蛇灰線の運命を保てるのみ、此の際に不思議なく凄涼の感なく同情の涙なし、あるものは唯春光融々花飛び蝶舞ふの歡樂郷なり。作者の本意は或は其の光明を假りて彼の暗黑を寫さんとせるものならんも、主客の分轉倒して、讀者は眞に笑の底に湛へたるの涙を認むる能はざるなり。第十二回より結末までは掉尾の大波瀾にして、紛糾し來たれる秘密の解釋とも見るべく「笠原家の鉅萬の富をば旦那樣に襲せまほしき御心の迷より御家督なりし兄樣の御遺子をば陰に毒害し參らせしをその乳母の獨り知りて病死の際に旦那樣に密告せしより然しも心ならぬ御不和は起りしなり」といふに至りて探偵小説一部の首尾全し。

　次に失敗せる方面、すなはち悲劇の側より本篇を論せんか。最もよく本篇を讀みて、深く主人公の悲哀に同感するものは侍女環に如くなし、今渠れが同感の模樣を案ずるに、或は夫に疎んせられて「腸斷れぬべき思を唇に咬緊めつゝ秋の草葉よりも繁く露の宿る眼」、或は此方よりは「かくまで深く思はせ給ふものを如何なる御憎惡のありてか知らねども旦那樣のなされ方の餘りとや鬼々しきが我れまでも怨めしき程なる」、或は「不圖御心の惱劇しき折節は御顏の凄く蒼白めて涙を含ませ給

ひ時ならぬに身悶あそばし今にも蠢然と起ちてあらぬ事など口走らせたまふかと見ゆるまで」なる或は「實に我身ほど世に淺ましきは無し合手にせんとて頼みたる其方をばやがて看病人に爲むことはかねて此の身の願なり（中畧）其方を看病人に頼むからは逐次一七日の香花まで氣の毒ながら其方の手に懸りたき意ぞと我面を懷しげに瞶めたまひて嗟我は此世に死ぬるより外には何の望もあらぬ身なりと其聲太く顫ひて」顔の蒼めたる、或は胸底の秘密を問はれ慄然として人にいふべき事ならず人の聞くべき事ならず迚も因果の我れひとりを苦むる覺悟と坐にも堪へかぬる氣色、或は叢竹の風に鳴るを赤子の泣聲と聞き桃色絹の手帕を産衣の寢姿と見るなど、之等のすべてが環をして不便、氣の毒と想はしめしものなり。一般の讀者もまた面のあたりかゝる事情に會してはそゞろ哀れと感ずべし。しかも此等の一切は因縁なくして結果あるの事情なり、因縁なきにあらざるも讀者の知り得ざる底の事情なり、首尾通徹せざる一時限りの事情なり。此をもて之れに同感することあるも、輕浮なる當座限りのものにして、譬へば婦女子の些細なる涙話にも泣きて同情を表するがごとく、到底深刻なるを得ざるべし。蓋し此の篇の悲哀を描ける詩として人を動かすの命根は、人間の運命に同感を求むといふ點にあらずして、單に刹那のセンチメンタリズムを目的とするにあり。言ひかふれば、人に同情せずして事に同情するを此の本篇の劇となす、吾人は二たび三たび讀みかへしたれども、篇中たゞ悲むべく憐むべき事柄を認めしのみにて、一も悲哀の人間を見ざるなり。茲に一婦人ありて、其が性格の趣向または境遇の自然に制せられ、夫に對する愛のため、乃至其の他の事情のために罪過を犯し、夫に疎せられ、良心に呵責せられ、さりとて退きも進みも得せで、ひとり心中に苦悶するとせよ、罪過に陷るまの經行をつぶさに描きてこそ、罪過後の主人公が心內心外の悲慘の光景と映發して罪業應報の理をも深く感じ得るなれ。さるを本篇はことさらに此の前半を隱して、後半に筆を密にせり、此に於てか隱れたるを探らんとする探偵的興趣をば贏ち得たり

といへども、遂に人間の運命を描きて全幅活動の妙致あるを得ざりき。之れ豈「不言不語」の悲劇として失敗せる所以にあらずや。而してかく悲劇的方面に於て人に同情せずして事に同情するの感は探偵的方面に於ける慘凄荒涼の感と相通じて環の心象に「氣味惡し」との念と「譯は知らねど氣の毒」との念とを留めたり。されど唯之れのみ、若し篇中より一重に秘密を探知せんとするの興味、即ち知力上の美を引き去らば、剩す所は此の外になけん、「不言不語」の價値知るべきなり。

假に悲劇を以て罪と罰との關係を描くものとせば、其罰の後半を寫して罪の如何なるものなるかを語らず、以て人の好奇心に訴へ傍ら悲劇の効を收めんとするは、近時一種の作家間に見ゆる風潮なりといふ、即ち探偵的と悲劇的との兩面を一に抱合せしめんとするなり。詩の究竟目的よりいふときは、斯かる計畫は甚だ喜ぶべきものにあらずといへども、眞に之を成し得ば、必しも咎むべきにあらざらん、憾むらくは紅葉の「不言不語」の失敗に終りしことを、されどまた一方よりいふときは、紅葉の此の失敗は自然の數なるべきか、知力の上の美と情緒の上の美と、道を分かち鑣を揚げて相戕ふなからしむるは古來人の難ずる所、知情はもと相寄り相纏綿して存すといへども、また知を主とする所に情ありがたく、情を主とする所に知ありがたきは心理上の事實なり。二端を調和し得ずして彼れに偏し此れに偏するが如きは、始より調和を企てざるのまされるに若かず。しかも彼れに偏して悲劇を成さば倘可、此れに偏して探偵小説以上に多く地を拔き得ざることあらば惜むべからずや。況や彼れをも得ず此れをも失ひて所謂虻蜂取らずの弊に陷るに於いてをや。

以上は總躰につきての論なり、細節にわたりていふときは指摘すべき點尙少からず。秘密々々といひながら、小兒を點出しさま〴〵の手段によりて暗に繼子殺しといふがごとき漠然たる觀念を讀者に起こさしむる所、隱なるが如く隱ならざるが如く、おのづから悲劇としての全躰の結構と相應じて、作者が經營の迹を見る。たゞ此の事、悲劇に恰合すると共に探偵小

說に不利なるを如何せん。また最尾の一節、秘密の次第を語り出づる條は、探偵小說として可なるも、悲劇としては輕躁且つ疎略に過ぎたり、むしろ全く之れを明言せずして餘韻を隱約の間に遺したらんには、一段の風致ありしなるべし。其の他民之助を除きては、環の言動の世慣れ過ぎたる、笠原夫人の此の罪を犯すべき性格に合せざる、笠原夫人の深沈を缺きて眞趣なき人物となれるなど、本編の人物上の瑕疵なり。今は取りいでて言はざるべし。

最後に注意すべきは此篇の文章なり、

御意とあれば此指の折れむまでもと申せば大事の妹の指は折らせじと愛らしき眼して我をば見たまひけり、勿體なき事ながら日頃の御情のほどに甘えて心には奥様をば姉様とも思ひて私無く册き參らするに此誠徹かざるにや御所爲に妹を袖にしたまひて恨めしき所ありと申せば奥様は屹となり給ひて其怨言は我方の誠こそ通らざるなれ、袖にせしとは曾て覺無し、ありとならば聞かせむと膝を進ませたまふ我は俯きて琴の緒を緊めつゝ御主に御怨勿體なし怨させたまへと頭を下ぐれば、奥齒に物の介りたる其挨拶我等の間に恕す怨さぬなどいふ事無し思ふよしあらば何なりとも言はるゝが結局嬉しきと卌捨には爲給はざる奥様の氣色なり

以て紅葉の文の變調を見るべく、また古文研究の結果の如何なりしかを窺ふべし。吾人は斯かる文躰を喜ぶものにあらずといへども、「給ふ」「ざるこそれ」などを紅葉一派の文脈に加味してさまで目立たざるを得しは紅葉の技藝なり、鍜錬推敲の勞想ふべし。（明治二十八年）

「新浦島」を評す

敍事詩的、抒情詩的、劇詩的の三者は何の處にも存し得べき分類にして、客觀なる淺膚の事柄を敍するものは之れを客觀的ともいふべく、主觀なる作家一個の感想を抒するものは之れを主觀的ともいふべく、作家ならざる個々人の感想を純ら客觀的に寫すものは之れを純客觀的ともいふべし。されば人事を主題とするの小說必ずしも人間を客觀的乃至純客觀的に描き出だすの他なきものとは限らず、時に作家が自己の感想を抒べて作中に自家の影を宿すこともあるも異しむに足らざるなり。例へば地の文にあらはに作者の思想を述べたるもの、之れを主觀の見えたる第一種とせば、第二種は人物の性格に作者の氣風の見えたるもの、第三種は一篇の趣意すべて作者自身の思想感情を活寫せるものともいふべし。而して我が過去の小說界は客觀派、敍事派乃至第一種主觀派の臭味を帶べるもの滔々皆是れにして、此の以上に拔んでて眞詩趣をたもてるものは極めて稀なりき。吾人は露伴が作の幾分かこの稀なる地歩を占めたるを見て、平生私に重きを露伴に置きぬ。『風流佛』の如き『五重塔』の如き、其の主人公なる珠運、重兵衛等の性格中に作者が詩人的狂熱の面目躍々として現せるは勿論、周圍の人物事件一として作者の感慨を反映せしむるの用をなすにあらざるはなし。曩に『國會新聞』に出で、今『文藝俱樂部』に出で

たる新作『新浦島』の如きまた此の點に於て同轍なり。醜猥卑陋の社會に厭きて仙を欲し、却りて魔道に入れる浦島家百代の當主浦島次郎の性格は、露伴みづからが一點の靈火によりて熱沸々仙に迴まり魔に迴まり、人をも世をも燒き盡くして、此の人の前には、人天すべて一團猛火と化せんとす。其の他次郎の父母も侍魔も情婦も毘奈耶伽王も畢竟露伴自身が感慨を抒するの道具たるに過ぎず、魔王は是れ露伴の魔王、男女は是れ露伴の男女、否魔王も男女も露伴の化身分身のみ、燃ゆるが如き作者の息はやがて作物全躰の生命なり。されども此等はこれ例の俗おどかしの癖と共に露伴が作の全般に渉れる特色なり、『新浦島』の他と異なる所は別に之れあり。

まづ其の結構につきて觀よ。『風流佛』『五重塔』などの描ける所は、露伴の人間ながらも尙人間の事たるを失はず、即ち肉と靈とを具へたる日常聞覩の人界外に出でず。然るに『新浦島』に至りては形骸の羈絆を脱越し想像の翼を羽うちて自在に超人間界不思議に翺翔するの趣あり。他の諸作にも不思議を不思議として寫せるものなきにあらずといへども、其は此篇の初より不思議を可思議として描き出だせるとは別樣なり。それたゞ不思議を可思議とす、此に於てか尋常一樣の世相を以て足らずとし、徑に人間以上の仙道魔法に指を染めて怪ます。ミルトンの『パラダイスロースト』に於ける、ギヨオテの『ファウスト』に於ける用意は知らずといへども、露伴は此の篇に於て魔道の通力を假り最も自在に自家の感想を發揮したるものといふべし。其の『いさなとり』の彦右衛門が海上に妖を見、『風流佛』の珠運が木像の活ける聲容に接せるなどの不思議の、一念凝つたる人にあり得べき事實として寫されたるものなる即ち之れによりて却りて自然の人心の微妙なるの作用を描けるものなると趣を異にせる所以明なり。

斯く『新浦島』は結構に於て他の諸作と異なりて超人間の趣を具す。されど結構の超人間なると共に想もまた超人間的な

りとは勿論言はれず、此の篇の想も、等しく一個の人間が或境遇に應じて感じ想ひ欲する所を描けるものなるに於て他の諸作と異なる所なし、想の異同は別に之れあるなり。蓋し彼れも此れも共に人間を主題とはすれども、彼れは露伴の人間を主とし此れは露伴みづからを主とする點に於て差別あり、『五重塔』の重兵衛に或は露伴の影あるべし、しかもこれ露伴が作れる他の露伴的人間なり。露伴的人間が露伴以外の境遇に處して露伴以外の活動をなす、此に於てか性格の底に露伴の影ありとは知りながら尙讀者は作者露伴といふ名を忘れて之れに同感す。すなはち此篇には露伴なくして重兵衛あるなり、前に擧げたる第二主觀派に屬して眞の詩境に到れるなり。然るに『新浦島』を讀むに及びては、誰れかまた露伴を忘れて次郎に同感し得るものあらん、此處には露伴ありて次郎なきなり。次郎の名は記しつゝも、氣昂り情暢ぶに際しては覺えず詩中に咄々露伴の聲を聞く、露伴みづから露伴の境遇に處りて、或時は感愴し或時は憤慨し或時は怡々として眉を展ぶ、此等の感情思想を撮りて一揮　文字に附與したるものは此の篇の詩想なり。而して其の情の騰奔する所、直に之れを小說と結象せしめて、十分遺すところなきを得んには、材を人間以上の事に取るの最好方便なる所以も詢に本篇の如くなるべし。塵世の煩はしきに厭きて「足りて足らなか足らぬで足りよ」の淡生活を望むの心をあらはすは浦島次郎乃至老夫婦が朝三暮四の尋常事を以てするも事足るべけれど、一躍して輕佻浮薄なる現世の罪惡以上に身を置かんと願ふの情は、作者の想像を驅りて仙界魔道に脚を着くるの已むを得ざるに至らしむ。かたはら、世に人間以上なる不可知の勢力ありやなしやの問題に考到して、作者はまづ老夫婦の死に不思議を見せ、尋いで紅白の舍利に神符祈禱の不思議を見せ、毘奈耶伽王の出現より同須の分身に至るまで、歩一歩人世外に游離して、遂に全く魔界、むしろ夢の如く幻の如き空想界に入り了はんぬ。この空想界にては既に不可知の大自在力を前定したるが故に、人は想像の脚によりて縱橫に奔馳し、如何に不思議の所行も曾て不思議とならず、

慾前に敵者なく慾前に理網なく聖賢も斫つて捨つべき人倫も燒いて滅ぼすべき魔道の甲斐なさは、貪嗔愛惡を離るべき身を以て、反りて瑞相女妙相女に取り縋られ勇菊が昔の戀に着きまつはれ、到底自業の果を受けて自ら紅蓮淵の石と化し永く生死の境を脱するの外なきに終る。即ち是れ、無悟の悟は眞の悟にして佛を願ひ魔を願ふの間未だ轉迷開悟の域に一關を隔つるものなる所以を具象的に言表せるものなり。電光影裡の春風、生死巖頭の大自在、作者が一旦忽然として悟りしもの若しあらば此れに外ならざるべし。

要するに『新浦島』の想は、露伴といへる一人が現世の汚濁と戰ひて顧りて知足淨土を願ひ仙を願ひ魔を願ひし悶々の末、遂に眞の悟は仙を願はず魔をも願はず生もなく死もなき處にありといふことを認めたる心の經過を詩に描き出だすにあり。而して其の結構の超人間的なるは、畢竟想の幽にして大なるがためにして、斯かる感想を曲ぐる所なく發揮せんには、全然抒情歌の體を藉るの外は、勢ひ本篇の如くならざるを得ざるに由るか。吾人は此處に露伴の哲學を叩きて其の思想の健全不健全を問ふが如きことなかるべし。たゞ此の作が抒情歌に入るべき想を捉らへて强ひて一部の小說となせるものなる事、及び其のため形の頗る常律以外に馳せたるにも拘はらず、讀むものをして能く形を忘れて想に同感せしむるの詩的生命ある事に於て『新浦島』が近來の佳作なるべきを信ず。珠運や重兵衞や、彼等は性格に於て露伴の脈を受けたり、譬へば露伴の子と謂はんか、此の意味にて『風流佛』『五重塔』は主觀的なり。『新浦島』は乃ち、露伴自身世に處して得たる幾條の感慨を、象を假りて詩化せしめたるの故をもて主觀的なり。單に小說といふものゝ標準よりいふときは、前者或は優るべし、後者の妙は一種の別味として妙なるなり。且つや後者の、乾燥なる議論、寓言、比喩談の類となりて詩的價値を失ふは往々凡作者の上に見る所、『新浦島』の然らざるを得たるは露伴の技倆なるべし。

以上の外、細節に渉るの評は省きぬ。(明治二十八年)

新體詩の形に就いて

一

文學博士外山正一氏の自ら稱して新體詩といふもの、其の近著『新體詩歌集』中に見えしより、文壇復た新體詩形を如何すべきといふの問題を論ずるものあらんとす。蓋し氏が所謂新體詩の形の如何にも亂雜なると、其の自序中の議論の甚だ覺束なきとは、讀者をして自[illegible]この際に挾むの已むを得ざるに至らしめしものか。吾人は詩の形想關係論に論着するに先だち、之れにかゝはる一二論者の説を聞かんとす。

外山氏の序文の一節に曰はく

明治十年代に新體詩を創始せるものは明治廿年代に亦新體詩を創始するの特權あるものと自認し數年前より又一種の新體詩を試作することを勉めたり本書に載するは即ち斯くの如きものなり云々予が斯くの如き新體を用ふるは他の故あるに非ず予の思想予の感情を感情的に語らむ爲の方便となすものなり七五若しくは五七の調は抵抗力少く平穩に輕々と舌の動く爲に便利なるも種々の變化ある思想及び情緒は到底斯る一定窮屈なる體形を以て常に適當に云ひ表はし得べきものに非ず却て種々の變化ある體形を使用するこそ適當なるべけれ云々

新體詩を創始するの特權は、よし姑く外山氏の占むるにまかすとせんも、其のいはゆる變化ある體形とはそも〳〵何の謂ぞ。五七、七五の舊調のみが、複雜極なき今人の感想を吐露すべき唯一の形にあらざるは勿論の事なれど、さりとて翻りて一切の韻律を排し盡くし、散漫無規律を以て規律となさんとするに至りては、一大誤謬の其の間に伏するものなからんや。出來韻律的詩形の上に於て、變化といふことゝ體形といふことゝが如何なる關係を有するかを、外山氏は知れりや否や。氏が將來大に行はれんと信ずるの詩形はこれ、通常いふ所の詩形、即ち韻律ある詩形にあらずして、一種の散文體なること、今また多言を須たじ、すなはち、律語の範圍に於ける詩形の詩形たる本色は既に亡じたるものなり。外山氏若し微塵だも韻律あるものを以て抒情的詩歌即ち所謂新體詩の本體と認め、而して自家の近作が其の埒内に於て能く從來の詩形の單調子を救ひ得たりと考ふるが如きことあらば、其は大なる僻事なるべし。蓋し音の抑揚に基ける律格に平起、仄起、抑揚、揚抑等の變化あるが如く、音數に基ける律格にも亦た五七あるべく七五あるべく、一二三四乃至八九音の何れもあるべし、眞情發露の自然の節奏にだにかなはゞ、此の間にいかばかり複雜の變化あるも固より怪むに足らじ、唯之れをして變化あらしむると共に益々一律に歸せしむるの工風は必ず無かるべからず。全局の音に律ありて而も自在に長短句を用ひ得るは、律語の律語たる所以の價値なり、此の意味にて五七、七五の舊形以外に新體形を要すといふに、誰れか異議を挾まんや。然り、七五、五七以外の變化は吾れ人共に望む所、しかもこれが爲に直に律語といへる根柢の躰形を捨てんとするに至りては、寧ろ無謀の嫌なきを得ざるなり。七五、五七の外を許さずといはゞこそ、僅々二個の材料を以て限なき變化に應ぜんこと難しともいふべけれど、調諧し得んかぎり三音、四音、五五、七七、長短抑揚のいづれをも自由に抽き來るを得させば、何を苦みてか匆卒にも強ひて異を樹てゝ東西三千年の歷史が實存を證せる詩の根本を覆さんとはするぞ。或はおもふ、論者の意は如何な

る句法を以てするも到底音數を本とするの律には十分變化の餘地なしといふにあるか、若し然りとせば、吾人は斯かる結論に到達せる論者の說を聞かんを願ふと共に、更に韻法、抑揚法の如き他の豐富なる律格を擇ぶの順當ならざりしかを疑ふ。さもあれ此はこれ選擇の上の論のみ、韻法、抑揚法は所詮我が國語に適せずとして、又は他に若干の理由ありて、これをも斥けたりとせんか、歸する所、論者は、我が律語の範域に於ては變化と統一とは到底并行し得ざるものと斷定し、變化のために統一を犧牲にして、論者のいはゆる變化ある體形、即ち韻律なき體形を採るに至れるなり。それ藝術界にありて變化のために統一を害し、統一のために變化を沒するは、凡庸手腕の已むを得ざる所、常人の見て矛盾となす此の二原理を融和せしめて、一個渾然の美相を成ずるは、玄妙なる天才の陶冶に竢たざるべからず。今外山氏は、單に十年前に新體詩を創し得たりといふの故を以て、輕々此の難問題を解し去り、律語は新體詩の變化自在を妨碍するものとす、吾人を以て之れを見れば、頗る早計に似たり。私に疑ふ、外山氏は、此の論斷を形づくるに當り、嘗て種々の變化と一定の躰形との如何なる關係を有するものなるかに想ひ及びしや否やを。

然れどもまたおもふに、外山氏の意、或は夫の具象的一元論（コンクリートモニズム）の本旨と其の由つて來たる所とを曲解して、ひたすら形式美の意味を亡みせんとする一派の極端論に援取する所あるにあらざるか。若し然りとせば、これ詩形を全く內容の奴隸となすの論者なり。惜いかな、氏は斯く一切の體形を斥くべき地に立ちながら、却て自ら創する所の新體形を以て他を律せんとするの、自家撞着に陷れるものなるを。若し一切の形式を豫定することなく、たゞ〳〵題に應じ人に從ひて隨時に之れを擇ばしむべしといはゞ、否、既に擇ぶといふも不可、詩想をして自ら之れを作らしむべしといはゞ、氏は何を以てか其の所創の口演體、朗讀體をして將來大に行はれしめんといふか。詩形の豫定を拒むものは、自家また一體を創して他を制するの權

利なきなり。啻に他を制すべからざるのみならず、自家といふとも豫め一定の形を設けて之れを律するの必要なし、何となれば、想はおのづから其が恰好の形を擇ぶべければなり。又以爲へらく、外山氏の新體形は律語以內の體形にあらずして、無律文すなはち散文界に於ける一種の文體ともいふべきもの、隨ひて、體を創め形を定むといふも、律語界にての意味とは異なりて、やゝ外山氏的文體を定むといひ、外山氏的段落法を定むといふの義に近し。されど、其の文體たり段落法たるの故を以てこれのみ、前記內容論の矛盾以外に立つを得べしといふの理由はあらず、一定普遍の形を豫定するの無用なるは、詩形も文體も嘗てかはることなきなり。外山氏は、果たして斯かる撞着の論に坐して顧みざるものなるか。

而して、世には此種の議論をすら、己が學ぶ所の學理に牽强して、敢て曲庇の辯を試み、世の心盲の徒を威嚇せんとするものありといふ、驚くべきの至ならずや。吾人は稿を續けて、近刊『帝國文學』に見えたる、林斧太（高齋林良と同じ人の隱れたる名か）と名のる人の論旨を許し、而してのち希臘の昔より近世獨乙の一元論に亘りて依然決せざるこの形想關係論に言ひ及ぶべきなり。

二

前段の論をつぐに先だち、明め置くべき事二あり、通常新體詩といふの意義、これ一、通常詩形といふの意義、これ二。まづ其の新體詩といふの本義に就きて說かん。

そも〳〵新體詩とは何ぞや。今日わが國にて詩といふ語の、漢詩以外に廣く美を目的とする文字の總名となれるは、言ふまでなき事實にして、シエークスピア、ゲーテ、ユーゴー、ゾラ、シエレー、ヲルヅヲルスなど、漸く將にわが文壇の通り名

たらんとすると共に、國詩に劇詩あり、小說あり、漢詩、和歌、俳諧はいふに及ばず、新體詩また其の一に加はんね。新體詩とは發句、長短歌、今樣等の舊律格に對し、同じく律語以内に於て別に一格を創せんとするものなり、舊體ならぬ律語詩なり、之れ世間の同意する所、されどもこれのみにては未だ盡きず。和歌は即ち五七五七七音を以て一篇を成すもの、又は五七音七五音等若干を重積して一篇を成すもの、發句は五七五音を以て一篇を成し漢詩は漢文法漢律格にしたがひて作らる、而も此等みな律語詩たるに於ては、嘗て新體詩と差別なきなり。劇詩といひ、小說といひ、物語といふたぐひの區分はた之に準じて頗る不備のものたるを免れず。斯かる分類は、通俗なる一種の分類法として便利なることなきにあらざれど、精確なる理論の上には甚だ益なし、吾人は顧みて他の分類法に參酌し來たらざるを得ず。凡そ詩の分類法の重なるもの四あり。第一は之れを質の上より見て敍事的、抒情的、劇詩的の三となす、されど此は彼の律語詩内に於ける敍事詩、抒情詩、戲曲詩等の分類と混じ易き恐あり、唯詩の全體につきて其が實質上より見たるものなることを忘るべからざるのみ。第二は、同じく質の上より見たる主觀詩、客觀詩の別是れなり。第三は上の三者と異なりて、單に形の側より見るもの、律語詩、現文詩といふの目は之れより來たれり。第四はすなはち、前に擧げたる小說、劇詩、新體詩などいふ、極めて漠然たる極めて通俗なる區別にして、之れまた形の上の沙汰なること言ふまでもなし。それ然り、しかして今の場合に要すべき結論は、此等諸種類中の一なる新體詩といふことが、他の分類法に對して如何なる關係を保つか、主觀詩に入るか、客觀詩に入るか、律語詩、散文詩の何れに如何にして交涉するか、といふ點にあり、これ新體詩の性質を明かにする所以なり。おもふに廣義にいふ詩を、其の主とする所の質にしたがひて、敍事的、抒情的、劇詩的の三とするときは、新體詩は當に其のいづれに屬せしむべきか。其の人と事とを併寫して全人間相を活描するを主觀とする、劇詩的のものにあらざるは勿論なるべし。また

單に一事件の發展を先にして、その間に個人の性格をも認めねば作者自身の之れに對する感情を揮灑し來たるにもあらざる叙事的のもの、之れも新體詩の本色にはあらざるべし。稱して新體詩といふもの〻第一義は、其の抒情的なる所にあるに似たり。勿論抒情的といふも、其の範圍廣大なれば、夫の修辭學者等が形の上より又は題の上より分かつときの叙事詩は、之れを抒情的といふ中に編入して不可なく、(劇詩は抒情叙事間接に兼ね至るものなるがゆゑに單に抒情的といひ難きと共に抒情的ならずとも言ひ難し)小說物語などの叙事的なるものとは自ら別樣の色を帶ぶ。『實用修辭學』の著者クラルクが數へし叙事詩の六要件の如きも歸する所は詩を抒情的ならしむるもの、若しくは抒情の範域に於て之れを運轉すべきものなり。但し踏襲の久しき、時に或は例外なきにあらず、我が新體詩に相當する西洋のポエトリー(狹義)にてもミルトンの『パラダイス、ロースト』は叙事詩といふといへども猶質に於て抒情たるを失はざること人の知る所なれど、スコットの『レデー、オブ、ゼ、レーク』『マーミオン』の如きに至りては、頗る抒情の本意を離れて、律語的物語といふ別稱をさへ附せらる〻に至れり。事を叙するは可、之れを抒情の壺に投じて洗錬一番するは抒情詩歌の本色なるべく、今の新體詩の根底また此處にあるべし、尙叙事抒情、劇詩の區別につきては論あれど、玆には新體詩の本領の抒情的なるべきことを斷定し置くをもて足れりとす。されど抒情的といふの惑ひ易きを恐る〻ものあらば、吾人はさらに之れを主觀詩なりといふべし。主觀詩、客觀詩の別につきても言ふべき節は多けれど、要するに詩人がその作りあげたる心內の美象を、假感假象ともに客觀に圓現せしめたるもの、若しくは假象の一邊のみを物語的に描寫せるもの、即ち所謂劇詩的、叙事的、之れを總稱して客觀詩といひ、詩人が美象中の象の方を疎にして、感の一方を直に圖に上し音に上し歌ひ出だせるものを主觀詩といはゞ、略々足るべし。美象中の象と感とを圓具するものを劇詩とせば、之れを引き離して、象の方を物語るに重きを置くは叙事的也、感の方を歌ひ出

づるに重きを置くは抒情的也。新體詩の面目は直に感を歌ひ情を抒ぶるにあるの理、試に古今東西の妙詩の、暗に今の新體詩に比類せらるゝものを取りて、諷誦し來たらば、または此の種の詩の始めて人間に發生せし所以に考へ到らば、おのづから明なるべし。詮ずる所、新體詩の實質は主觀詩的なり、抒情的なり。さらば更に之れを形式の上より見て、律語詩か散文詩かといふ、其の韻律諧和のものたるは多言を須たざるなり。固より將來常に斯かるべきか否かは本問題の眼目にして、論の終に至らざれば知りがたしといへども、此れまでの文壇にありては新體詩と許さるゝものは、凡て律語の形をもてり。されば吾人は爰に内外をすべて、新體詩といふときは、主觀詩の質を具して律語の形を被れるものと斷言するを憚らざるなり。抒情的の想は主として律語の形を擇ぶべし、律語詩は常に抒情的の想に嫁すべし、敍情的のものには、作家が修辭の才をためんために律語を取るは自由なれど、最も適當なる形は物語體散文體なるべし。外山氏はすなはち、其の新體詩といふものに於て、質は流石に抒情的主觀詩的の本領を離れざらんとしたれど、形はわざと律語的ならざらんとしゐ、此に於てか、想と形との關係、すなはち抒情的詩想と律語との關係、本問題の中堅として現じ來たる。一言以て之れを掩へば、曰はく抒情詩的詩想を圓に發揮する最好方法は律語にあらざるか、又は、律語は抒情詩の場合に於て想と同等の價値を有することなきか、讀者請ふ吾人が論の發足點の、常に此處にあることを忘るゝ勿れ。

新體詩の意義以上の如し、したがひて、詩形とは何ぞといふの問題も、既にこれに連りて提起せられたるを見る。尙審にいはんか。美術上にて內容といひ外形といひ、想といひ形といふは、その義極めて廣漠にして、主觀の心內に成立する美象を內容とし、之れを客觀に實在して停留せしむる材料を外形とするも一說なり、作物中の形式美の方を外形といひ、內容美の方を內容といふも一說なり、意味名目を凡て外形に下して其が含蓄せる理を內容と稱するも一說なり。されど此等の細論

は後段律語と抒情的想との關係を說く條に讓り、此處には普通なる詩形の種類を一言すべし。芭蕉が「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」の句に着きて言はんに、其が定式の律を有して散文ならざるところ是れ一の詩形なり、その律の五七五音にして其の他の音數ならざる點に於ても一の詩形なり、其風格の何處となく閑寂の趣を具するに於ても一の詩形なり。即ち詩形は、第一之れを律語と散文とに分かつべく、第二之れを律語中の種々體に分かつべく、第三之を作者の文致と題の性質とによりて分かつべし。其の他用語によりても分かつべく、長短によりても分かつべく、題目によりても分かつべく、要するに雜多なれど、斯かる分類の學理上に用なきは、前にいへるが如し。而して上に陳べたる三種の詩形中、第三者は到底前以て取捨選擇を加ふべきものにあらず、人は各々其の特有の文致を題に應じて發洩し來たるべく、想をして自在に之れを作らしむるの外なし。隨ひて此の意にての形は本問題と直接に相關することなし。また第二なる律の種類も、先づ律か非律かの問題決せられたる後に來たるべき論點として、しばらく之れを措き、當面、新體詩に必要なりや否やと問ふの詩形は、第一なる律語に外ならず。新體詩想は必ず律語によりて現すべきものにあらざるか、否、新體詩想を現すに最も恰好なる詩形は律語にあらざるか、繰り返していふ、是れ本論の主眼なりと而して外山氏は議論の上にては兎も角も、實際の上にて、之れを少くとも我が邦に不適當と斷じたる人なり。

一步を進めて、理論の上より全稱的に律語を否定せんとするものを、林斧太といふ人の論とす。其の意におもへらく、形は內容の必然自然の發表なるが故に

(一)凡て形式を以て詩の特質となすものは誤れり。(二)若し假りに從來の詩が此の一定の形式を有するの故を以て歸納的に是の形式を以て詩の特質となしたりとせば、是れ實際的時の方便としては或は不可なきも素より以て詩學上に根據せる原理となすに足らず、(三)まし

てや文化の進歩と人心の發達とに伴ひ思想發表の手段に於ても亦不斷の變遷を見るべきは素より見易きの道理なるを以て一定頑固の標準を以て之れを束縛するは將來の詩歌の　歩を沮害するの虞れあり。（四）之を要するに形式は内容の自ら之れを擇び之れを造るに一任すべきなり。

と。何ぞ其の論の無造作なるや。詩の本來が内容にあることは、げにも論者の言の如くなるべしといへどもこの内容の趣くまに／＼現じ來たる詩形、論者のいはゆる内容の自々の發表は、本問題の律非律といふときの詩形にあらずして、寧ろ前揭第三種の詩形に近きものならざるべからず、然るに論者は深く詩の内容といひ外形といふの意を究めず、淺膚なる論文家の用例にならひて漫然語をやり、遂に一大謬論に陷れるに似たり。吾人は普通にいはゆる詩想詩形の外に、一段深く詩の内容外形の由來を研究せざるべからず。

「我邦將來の詩形を如何にすべき」これ論者が提出せる第一の問題なり。その所謂詩形とは何の義なるか。脚本も詩なり、小說も詩なり、脚本には脚本の形を要し、小說には小說の形を要す、言者の意は恐らく此等の凡てを一括して、さて將來之れを如何にすべきかと問へるにあらざるべし。前後の關係より案ずるに、此に詩といへるは明に、從來新體詩に屬せる種類の詩を指せるなり、隨つてその形とは、新體詩に特有なる韻律の調に外ならず。詩形を如何にすべきといふは、やがて新體詩の律格を如何にすべきといふの意に歸す。啻に然るのみならず、仔細に考ふるときは、新體詩の律格を如何にすべきといふ中にはまた、第一、新體詩の律を如何に定むべきかといふと、第二、新體詩の律格は本來必要なるか否かといふとの二義を含めり。第一項に對しては、論者はまづ七五、五七等の「其用語如何に妙なるも、其配列如何に巧なるも、所詮今日の人情を表白する適當の詩形に非ざることは今や國民が多年の實驗によりて殆ど爭ふべからざるの事實なりと普く信ぜらるゝに

至り」たる（未だ必らずしも然らず）由を言ひ、別に國民は十年一日の向上的熱心を以て新詩形を慕ひ求むと說きぬ。これ事實なり、國民が十年一日の熱心を以て憧れ求むる所は、實に新體詩の新律格にあること、滿天下の認むる所なり。律語の範圍に於て、如何にせば最も適當に感想を發露し得べきか、小說は之れあり、劇詩は之れあり、缺くる所はそれたゞ抒情歌、吾れ人は何によりて此のミューズの靈音を調べんか。實際上目下第一の研究はこれに外ならず。然るに論者は此の點に於て突飛しぬ。論者は七五、五七の不適當なるを斷ずるに共に、顧みて他種の律格に考へ及ぶことなく、直に一躍して律そのものゝ根柢に立ち入り、或る論據によりて、天地間一切の律語の領分を奪ひ了んぬ。あはれシエレー、バイロンのともがらを始とし、世界の文學史に頭をつらねて累々たる律語詩家等は、論者のために其が半生徒勞の愚を笑はれんとす。聞きたるは其の斯かる結案に到達せる理路なり論據なり。新體詩に律格は必要なるかといふの疑案に對し不必要と斷ずるはそも〳〵如何なる前提ありての事なるか。論者答へて曰はく、他なし、たゞ詩の形式は其が內容によりて定まるべければなりと。復言すれば「詩の形式はすべて前定すべきものにあらず、律語は前定すべきものなり、故に律語は詩の形式にあらず」、といはんが如し。論果たして當たれりや。

　吾人の見る所を以てするときは、この論は形式といふ語を濫用して誤謬の結案に終れるものなり。論者は詩形は凡て前定すべきものにあらずといふの前提、すなはち形式は常に內容の奴隸なりといふの第一斷に於て、いみじき錯誤をなせり。形式と內容との意義を極むるときは、或る意味に於ては、實に內容に從ひて僅に定まるべき形式もあるべし、此種の形式は內容の萬殊なるにつれて殆ど普遍の性を有せず。然れども又或る意味にては、形式は內容と同等の位置を保ち、否、むしろ別なる形式に對し二者合して內容の位置を保ち、以て一圓の美を全うす。論者は此等の區別に心を潛めざりしため、全稱なら

ぬ命題を全稱に取りなすの弊に陷れり、水は凡て流動體なりといひ、而して凍水は流れざるが故に水にあらずと强ゆるの類、論者之れに近し。吾人をして、更にこまかに內容外形の論を悉さしめよ。

三

詩とは、いふまでもなく、美象を言語文字に結び付けたるものなり、されば詩人の技倆は、まづ美象を主觀のうちに形づくり、而して之れを、言語文字の手段を假りて及ぶべきだけ圓滿に發表するにあり。更に之れを分析すれば、先づその美象を形づくるに於て、幾等の階段あるべく、幾樣の種類あるべし。或るものは、深く現世の罪惡に感發して、此に若干架空の人物を設け、事件を編み、これを美的現象に醇化して、一團の美象をなす。或るものはまた、現世の罪惡を悲むといふが如き定着したる感想の代りに、一事件一人物の運命に同感しては、悲劇の落想を此に得、斷烟廢墟の景、林泉幽淸の趣に興を發しては轉々詩情の切なるを覺え、さてのち、心織意匠の効を積みて、個の美象を作り出だす（簡單なるものに至りては、此等の階段を、殆ど一時に經過することもあらんか）。今、かくして成れる我が心內の美象のみにつきて、內容といひ形式といふべきものありやと問はゞ、吾人は答へん、およそ甲乙丙丁四種の內容外形ありと。

時としては、上に擧げたる階段中の、第一發奮の感想を取り出でゝ、之れを作家の理想といひ、作の趣意または想といひて、暗に內容の地を與へ、之れに對して此の想を宿すべき人物事件景色などの結象的要素を、形といふことあり。「想は佛敎的にして形は花鳥風月の外に出でず」などいふは此の意味なり。又は、覆載間の萬物はすべて自主獨得の性を有し天職を有し、各々その本然を發揮して、以て唯一眞宰の手に支配せらるといふを、造化の理想の姿と假定し、而してこの理想を成ず

る有樣を、萬物の特性的といひ、美の根柢を此處に置くとすれば、斯の美すなはち造化圓滿の理想を小天地的に模寫して表する美象を、其の統一主宰の點より見て、想といひ內容といひ、相寄りて此の想を成就する種々の分子を外形といふことゝあり。これも前者と相通ずるの論なり。以上を甲種の內容外形と名くべし。

次に乙種の區分法あり、上に言へる美象の二面、すなはち統一主宰の面と個々差別の面とに論なく、甲乙黒白といふが如き定着したる名目（意味）を有する邊を、すべて內容と稱し、これら內容の全體上の形式の邊、すなはち美象中より意味ある象を抽きたる邊を（假に此の如く分かち得べしとして）之れに對せしむるのもの是れなり。幹あり枝あり、花を着け葉を芽ぐみて、茲に箇の樹といふ美象を作り上げたりとせよ、其の獨自圓滿の姿をなせる箇の樹といふ意味、及び幹枝花葉といふ諸多の意味、これらは凡て斯く理解せられ名付けらるゝ點に於て象の內容と呼ばるゝなり。而して件の幹枝花葉が有機的關係により、相助け相成して一箇の樹といふ小天地的、特性的の相を形づくるにあたり、其の中より、樹といひ幹枝花葉といふが如き一切の名目を拔き去り（得と假定し）て、單にその有機的、小天地的、特性的の全形、すなはち直感せらるべき邊のみを取り出で、云々するを、象の形式といふ。夫の美を二大別して內容美、形式美とするの根原は此の區分法にあり。

次は丙種の區別なり、此にては、一美象內の諸分子を、內容といひ、此れが相寄りて作り上ぐる一團體を形式といふ。前の例にて言はゞ、幹枝花葉の諸材料は內容にして、此の上に成立する箇の樹は外形なり。されば美象の特性的は、其が材料たる內容の豐富なるにしたがひて、次第に高等のものとなるべく、一般の人といふ類想は一個特殊の人といふ個想よりも內容貧しきの故を以て、特性的結合の度少し。復言すれば、部分の複雜なるだけ、有機的關係に成る全體の組織高等なり。而してこの複雜なる部分は即ち內容にして、高等なる全體は即ち形式なり。審美學者が、美を、その結象の度によりて、逐次

形式的より結象的に進むとやうに分類するは、一面この原理に基けるに外ならず。

次に、丁種の內容外形とは、美象中の象の面を內容とし、之れを圍繞する情の面を外形とするの謂なり。山あり水あり、日常差別の我れと利害の關係を脫して、假象中のものとなる、之れを稱して美象の半面なる象と呼び、之れに伴ひて生ずる雜多の假情を稱して、美象の他の半面なる情といふときは、此の山水は內容にして、之れに對する雜多の情は外形なり。

以上はすべて美象以內の區別なるが、一步を進め之れに實質を與へて、外界に現存せしむるに及べば、此に戊種の外形內容を生ず。詩の上にては、詩人の主觀に現前せる美象と、其を客觀界に定着し留置せしむる音聲的記號と、一を內容といひ、他を外形といふべし。本論に最も關係深きは、此の意にての內容外形なり。

內容外形の別以上の如く其れ雜多なり、吾人はさらに之れを、本論の眼目たる內容と外形との關係より見ざるべからず。まづ、甲にありては、內容はすなはち主想にして、外形は之れを寓する諸現象なるが故に、二者固より價値の上に輕重の分なしといへども、詩人が之れを作り上ぐるに於ては、先後の次第あるを得べし。時としては眞詩人の責なきものが、熟錬の餘に得たる才能を運用して、製作に從事するにあたり、意匠脚色先づ成りて、後に主想を之れに附加することもなきにあらざれど、此等は論外とし大抵は、前に內容ありて、外形は之れに恰好なる限に於て結選せらるべし。（結選の方法が半意識、半無意識の詩的想像の力に因るべきものなるは、言ふまでもなからん）。次に乙種の內容外形の關係は如何。此處にいはゆる內容、即ち意味的存在と、外形即ち全局の姿趣關係とにつきては、由來前後輕重の分を說くべからず、內容相寄り內容的關係によりて內容美を成すとき、形式はおのづから之れに伴至し、之れと同住し、內容の外に形式なく、形式の外に內容なければばなり。次に丙なる內容外形の別は、詮する所乙と同理に歸すべく、隨つて其の內容外形の關係に於ても、先後輕重の

乙の場合の如し。たゞ此方にありては、實在上にも形式のみを引き離して現せしめ得るの差あるのみ、次に丁には、外形は美象の半面たる情にして、内容は他の半面なる想、又は象なるがゆゑに、完全なる美象の兩面、象と情との間に、輕重の分なきは勿論の事なるべし。但し生起の次第に前後の別を附するは不可なきに似たり、就中、鋭敏なる詩人の頭腦には、象のみを受くるも直に情を繰り出だして之れに聯絡するを得て、心理的に多少象前情後の順序を定め得べければなり。此の點にては、外形即ち情の色合は、内容即ち象の色合に從ひて定まるものといふを妨げず。若し夫れ、象、情併せ寫して、美術品が夫の無趣味なる記事文、寫眞畫と異なる所以を明にし、象に常に情の靈火を加へて、以て塵世の風に凍り果てたる凡夫の靈性に、一脈の春温を附與するは、洵に詩人の本懐なり、また要務なり。象なき所に情あるを得ざると共に、情なき所に象あるを得ず。否、情なき所必ずしも象なきにあらずといへども、斯かる象は美の約束にかなはざるもの、隨ひて審美界には、情なき所、象なしといふも不可なきなり。殊に詩にありては、象、情、遂に偏重すべからず、時としては情のために象の明瞭を犠牲にすることもあるべく、時としては象のために情の幾分を減殺して顧みざることもあるべし。此の點にては外形は内容の奴隷なりとも限らねば、内容は外形に制せらるべしとも限らず。願ふ所は、二者共に圓現して微瑕なからんにあり。果たして然らば、象を寫し情を寫すの道如何。此に至りて、論はおのづから、戊の内容外形説に移るべし。

戊は、音聲を外形とし、美象を内容とするものなり、隨つて、その内容といふうちには、前段に論じたる内容、外形のすべてを含むべく、外形はさらに此の外にあり。されば、此の際に内容外形の關係如何と尋ぬるは、やがて、美象中の内容、外形と音聲との關係を究むるに同じ。美象中の内容外形は、要するに幾類に分かるゝか。甲と丙とは、本論と相關せざるが

故に、しばらく措き、乙にありては、意味即ち象に屬する邊を內容とし、之れに對する全局の虛なる關係、むしろ全美象の調子を外形とす。美象の象、美象の調子、これ美象の二義なり。而してさらに之れに丁種の內容外形を混和するときは、丁は、情を外形とし象を內容とするのゆゑを以て內容のみ乙と合體すべし。即ち、內容一義、外形二義となるなり。又は一、美象中の象、二、美象中の情、三、美象全局の調子の三面より、美象を論ずべきなり。さてこの三面と音聲との關係は如何。第一、象を音聲に結び付くるの道は、言ふまでもなく言語にあり。音聲をば、其が第一義たる音そのものとして用ひず、之れに他の心的活動を連絡し置きて、一音到るごとに音自身の印象と異なる象を、心に印せしむ、之れなべての言語の性質なり。此の塲合に外形たる音聲が、內容即ち其の表出する意味に對して先後輕重を爭ふべき些の權利なきは勿論の事なるべし。第二、情を音聲に寓する事、第三、全局の調子を音聲に託する事の二件は、所謂聲調の作用によりて達せらる。聲調とは、言語以外に、音聲其のものゝ固有の性質を利用するの謂也。蓋し、遠く人間が心の活動を聲音に寄せし始に溯るときは、言語は單に知にのみ隷すべきものならずして、却りて情の自然流露の結果なりし事もあるべく、なべて知、情の界限なき、漠然たる心象を表するが常なりしこともあるべし。されど斯くして出で來し言語も、襲用久しく、人智漸く發達して知情別途に趨くに及びては、復た往日の態を保持する能はず、言語はやゝもすれば、知の一方に傾かんとするに至れり。詩人乃ち種々の方法によりて、言語に情の分子を荷はしめんとす、夫の修辭術の示す所に從ひて、極めてサゼスチーヴの語句を擇び用ふるが如きも其の一なり。聲調はた之れと同樣の任務を帶ぶ、言語が示す當面の意味以外、人心の秘密を不語の際に語るは、實に聲調の力なり。或はおもへらく、象情既に一體なりといはゞ、何ぞ忠實にその寫し得べき象を寫して、情のおのづから之れに伴ひ來たるを待たざると。これ一を知つて二を知らざるの論なり。靈妙にして殆ど無限に近き心內の働を、有限不完

全なる物質界の產物、言語といふが如きものに託して表出せんとす、所期の盡くされざるは怪むに足らざるなり。明ならん限り、象を餘さず洩らさず列記することは或は能くせんも、斯くして得たる象の記述は、これ死象のみ、既に箇中の生趣なし、知性の餌とはなり得んも、情必ず之れに伴ふべしとはいふべからず。到底詩にありては、音聲は、象の意味を傳ふるかたはら、別にこれを美的、情的ならしむるの用を兼ねざるべからず。此れ紅、彼れ紫、言ひ得るものを言ふは容易の業なれど、其の奧に潛める心の妙調は、遂に言說すべき限にあらざるなり。詩歌はいふに及ばず、散文といふとも、凡そ古今の詩的述作が、其の妙所に達する每に、朗々として金玉の聲をなすは、聲調の美に外ならず。以上言語と聲調とを、戊種外形の二面とす。

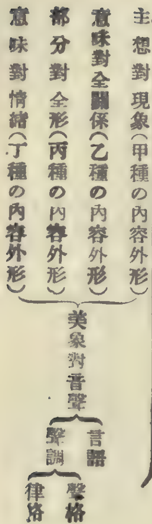
而して聲調といふに更に二義あり、一は、音そのものが、種々の關係よりして、直接に種々の情緖を挑發することなり、之れを稱して聲格といふべし。聲格は多く吟誦の際に發するものにして「秋山のもみぢ哀にうらぶれて入りにし妹は待てど來まさぬ」といふさきは、これらの語が直接間接に傳ふる悲涼なる事柄すなはち意味の外に、一句の語音の抑揚、開閉、長短によりて、無限の情緖を附加するを得べく、聲によりて直に我が心の琴をしらべらるゝ心地すべし。是れ決して、一派の論者のいふ如く、意味の上の作用を聲格の作用と思ひ誤れるにあらざるなり。夫の外山氏の朗讀文の、文としてさしたる妙味もなきに朗讀を聞けば悚々人を動かすに足るものありといふが如きも、畢竟聲格の理を證せるもの、詩の要義は、この聲格に客觀的價値をたもたしむるにあり。されば、聲格といふとも、これのみ意味以外に獨立して存すべしといふにあらざるは勿論なり。聲格が傳ふる所の情は卽ち當の語意、句意、題意があらはす所の象に適應すべきものならざるべからず何となれば情はもと象に後れて至るもの、象にしたがひて定まるものなること、前に言へる如くなれば也。この意義にては、聲格

はまた他の外形なる言語の後に定まるべきものといふべし、言情の方面を先にして、而してのち其が聲格の面を吟味す、これ自然の順序なり。但し、象を表するの言語は即ち、情を調ぶるの聲格にして、二者とも一體なるが故に燃ゆるが如き詩人の想像の之れを選ぶにあたりては、殆ど前後の別なきことあるべしといへども、理はすなはち上の如し。詮ずる所、聲格は聲格みづから情を勝手に挑發し得べしといふにあらずして、言語の傳ふる象に恰合すべき限り之れを許すといふなり。言語としても、象を傳ふると共に幾分の情を惹くことなきにあらねど、聲格はこの幾分の情を外より助け長せしめて、十分十二分の情を有たしむるを目的とす。この故に前後の別はありとするも、言語と聲格とに決して輕重の分なきこと、象と情との場合の如くなるべし。若し、十分の言語と十分の聲調と相捍格することあらば、場合によりて、語意明瞭を缺くも むしろ聲格の十分なる擇び得ることを、詩の特權なり、内容外形の關係上詩の達意を主とするの文と異なるところは此にあり。

聲調の他の一は、律格是れなり、律格とは音を組み合はする上に一定の規律を立て、以て全章の種々音を一律に歸納せしむるの謂也。換言すれば、音聲の、言語としての外なる、他の半面、即ち音そのものゝ上に、形式美の原理を應用したるもの、これ律格なり。律格の價値は其の形式美の原理に根ざせる所にあり。されば、律格の詩に對する關係はまた、形式美の美象に對する關係に外ならず。形式美はそも〳〵、如何なる點に於て美象を發揮するの用をなすべきか。吾人は、前に既にこの問題の一端を解釋しぬ。畢竟ずるに形式美とは主觀の美的活動の輪廓を、自然界に獨立存在の價値なき色、線、音等の材料に藉りて、形式的に寫し出だすの謂なり。他語にて言はゞ人心の美的活動の調子を、或は空間的、或は時間的に模するもの、之れ形式美の由來なり、而して其の性質をいへば、廣き意義にての變化裡の統一、統一裡の變化、差別即平等、平等即差別、又は有機的、小天地的、特性的結象の形式なり。其の所在をいへば、人巧によりて色、線、音等の上に、之れのみ

假現せしむるをも得べく、人巧天產の別なく、內容の上に覆被せられ、內容結象美として存するをも得べし。前者は當然形式美といふべく、後者は、嚴には、內容美といはんよりも、結象美といふを當たれりとす、何となれば、後者は形式の發達して有意味に結象せるものとも見らるべければなり。さらに、形式美の効果につきては、其の由來すでに人心の美的調子を寫すにあるが故に、之れを他の人心に觸着せしむるときは、人心の普遍の方面に於てまた、始めこれを寫せしときと同一の調子を起こさしむべし。同一の調子とは即ち美的活動なり。美的活動の形式一たび定まるときは、極めて劣等にして、殆んど情緒的の價値なきものはしばらく措き、音樂の如き高等のものに至りては、之れを感受するの人心は、美的活動を挑發せらるゝにつれ、一音〳〵の快といふが如き賤劣の美をば打ち忘れて必然此の全形式に恰好すべき雜多の情を連起し象を連起し來たるべし。心理學上に所謂、情より思に連なるの作用これなり。形式美の効果は單に感覺を喜ばしむるのみならで、進みて人心を美的に整調するにあり、ショオペンハウエルが口を極めて音樂の妙をたゝへたるも、畢竟此の消息に外ならざるべし。

形式美の原理以上の如し、されば律格の詩に於ける地位はた之れに同じ。外形の上にて言はゞ、言語は象に訴へ、聲格は象と同至すべき情に訴へ、律格は此の美象全體の調子、即ち全關的美情を皷舞して讀者の心に美的活動を盛ならしむ。而して以上の三役は、すべて音聲が荷ふ所の要務なり。前來の論の要旨を圖示すれば下の如し、



吾人は以上の論據によりて『帝國文學』の論者が詩の一切の外形を輕じ去りたる論の當否を判せんとす。

四

論者が、詩のすべての形式を價値なきものと斷ずるの理由は、極めて粗雜なり、今その要點と見ゆるもの二三を拾ひ上ぐれば、(一)、形式は素と内容の自然の、又必然の發表に過ぎずといふ事、(二)、内容は内容みづから形式を有し、形式は形式みづからの内容を有すといふ事、(三)、形式と内容とは哲學上に於ける二元と等しく矛盾すといふ事、(四)、人心の發達と共に詩の形式は變遷すべしといふ事、およそかくの如くなるべし。此等の言は何ほどまで眞なるか。

(一)、形式は内容の自然の、又必然の發表に過ぎずとは如何なる意味か。立論の趣意及び結案より察するときは、論者は、此の理由によりて詩形の一面たる律格を排せんとするなり、平仄七五といふが如きものを排せんとするなり。されば、此に形式といへるは言ふまでもなく、其の排せんとする律格が屬する所の外形、すなはち音聲、すなはち吾人のいはゆる戊種の外形なるべく、之れに對する内容とは、主觀内の美象なるべし、別言すれば、形式は内容の自然の、又必然の發表なりといふは、聲音は美象の自然必然の發表なりといふに異ならず、これ一解なり。果たして此の如しとせば、凡そ音聲が美象の命のまゝに發表の任を盡くすべしといふに、天下また異議を唱ふるものあらんや。音聲そのものは、微塵だも美象の命令以外に馳するの自由なく、形式は常に内容の必然の發表なるべきこと、殆ど自明の道理なり、之れにつきて喋々するは畢竟贅辯のみ。試に思へ、今の時にあたりて新體詩に指を染めんほどのものが、假りにも音聲を美象の發表以上に使用し得べしと信ずべしや。世の新體詩人等が、一篇よみ出づる毎に、律格の末に苦慮する所以のものは、少くとも、律格を以て論者のいは

ゆる一內容の發表に對する必然なる方便」と認識せしによらずんばあらず。律格は美象の發表には益なきも、詩の先天的形式なるが故に是非なく之れに從ふといふが如き愚見を懷けるもの今の詩を論ずるもの丶中にありといふに至りては、誰れか誣言の甚だしきに驚かざらんや。

要するに、上の如き意味にては論者が律格排斥論の根據として提出せる前提すなはち、外形は內容の必然自然の發表なりといふの一命題は正當なり。唯此の一命題のみは正當なり。

既に外形は內容の必然の發表なりとせば、之を理由として律格を排するは、論の當を得たるものなりや。音聲は美象の發表する限に於て使用せらるべし、たとへば、之を言語としては象を表し、之を聲格としては情を表すといふが如し。然らば之れを律格としての音聲は何のために用ひらるゝか。こたへて曰く、形式美の性質にしたがひて、人心の美的活動を助けんがためなりと、所謂形式美の原理之れなり。一定の平仄あり押韻あるものが默讀音讀に拘らず、凡て讀誦の際に漠然たる一種の快感を生ずるは爭ふべからざる事實にして、或は之れを口調善しといひ、或は之れを流麗といひ、優美といひ、名はさまざまなりといへども、歸する所は、我れの美的想像力の活動を刺戟するの謂に外ならず。之れを唱歌の伴はざる音樂を聞くに譬ふ、初は音そのもの丶快不快のみ耳だてど、急絃緩絃、次第に曲の妙所に近づくにしたがひ、我れは限なき無語の妙語を聞く心地して、其の曲の性質のまゝ、或は夕殿孤螢の思となり、或は天涯淪落の情となるべし。たゞこれのみにては、心內に現じ來たる美象の象の面、甚だ漠として定着せざるのみ、若し之れにほゞ相應すべき幾分の定まりたる意味すなはち言語の分子を附加して、之れを導くを得ば、情は導かるゝまにまに象に追隨して違背せざるべし。今はこの順序を轉倒して、言語即ち象を先づ作ると共に、之れに纏綿する情を豐富ならしめん爲に聲調を利用し、聲調の中にても、聲格の上に律格を

重用して情の美的活動を滑ならしむ、律語詩は此の如くして成り立つなり。されば詩に律呂あるは、内容を限らんためにもあらねば、既定の内容以外に他の内容を加へんとてにもあらず、却りて既定の内容を助けて、其の美を容易に感受せしめんの方便なり。試に天下の律語詩人に問へ、彼等の誰れかは、律語を内容の發表に必要なる方便とせずして用ふるものぞ。夫れ既に律格も内容の發表に外ならずとせば、前段、外形は内容の自然の又必然の發表に過ぎずといふの故を以て律格を斥くるの論は成立せざるにあらずや。

他の解は此の場合の外形内容を吾人のいはゆる乙種また丁種の外形内容と見做すにあり。之れはた、美象内にありては、外形は内容の發表、又は外形は内容についで至るものといふを得べし。されど此は未だ之れを音聲界に附託せざる以前の事のみ、一たび之れを音聲に結び付けんとするに及びては、必ずしも美象内に於て先至せるものを先とせざるべからずといふの理由はあらず、抒情の詩歌にありては、寧ろ後至せる情を先とし、之れを整ふるの聲格律格を、言語よりも重ずることあるべし。これ、言語の不完全にして、到底情の一面を傳ふるに足らざるより來たる結果にして、如何ばかりの天才といふとも、此の際に多少の意料を用ひざるを得ざるは當然の事なり。即ち論者のいはゆる内容外形を、本段の意味に解するも、之れによりて律格を否定するの理由はなし。縱し幾分の理由ありとするも論未だ之れに達せず。

或はおもふ、論者は「自然の又必然の發表」といへるに力を置きて、律語は自然ならず必然ならざるが故に適當の詩形にあらずといはんとするか。果たして然らば、吾人はまづ、其の自然といひ必然といふの意味をたしかめざるべからず。所謂自然の發表とは何ぞや、人巧をまたずしておのづから表はれ來たるといふの意か。所謂必然の發表とは何ぞや、何の場合にも遍在すべしといふの義か。而して律格はすべて此等の條件に違背するが故に非なりといふか。若し此の如くんば、論者は、

自然ならずといふに於て律格の性質を解せざるなり、必然ならずといふに於て詩中に差別あることを認めざるなり。更に精しく論ぜんに、律格の性質につきては、律格は論者の考ふる如く不自然のものにあらず。むかし抒情的詩歌の始めて發生するや、未だ今日の如く定まりたる律呂はあらざりきと雖も、その内自然に律呂の萠芽を含みたりき、後人乃ち之れを醇化して、ます／＼律呂の本性を發揮しぬ、所謂律格これなり。韻脚といひ平仄といひ五七言といふ、畢竟美的感情の自然の發露につきて、之れを彫琢したる形式に外ならず、故に學者は律語詩を稱して實に自然の語ともいふなり。たとへ律格の半面に人巧の跡はありとするも、自然を助くるの人巧なるに於ては何ぞ之れを累とせんや。斯かるたぐひの人巧をも、人巧なるが故に非なりといふは、美術上の技倆と意匠との何物たるを解せざるの言といふべし。次に律格は必然的ならざるが故に非なりとは、固より理なきの言なり。シェークスピアの作に於て、情に訴ふるを主とする所と然らざる所との別に從ひ、律、散の錯綜自在なるを證言するの學者は、また抒情的ならぬ詩の散格にしたがひ得べきを證すると共に、抒情的詩歌の自然に律語的ならんとし又必然律語的ならざるべからざるを證するにあらずや。激烈なる日常の實感そのまゝを現はすに於ては、或は聲格のみにて律格を要せざることもあるべく、また律格と相調和せざることもあるべし、何となれば、此の種の感情は美的約束に從はざれば也。されど一旦美の世界に入るに及びては、如何なる感情も、其の活動の全形式に於て決して形式美即ち律格と相背馳せず、蓋し、形式美は美の原理の關係の上に現じたるものに外ならざるの理、前に論ぜし如くなれば也。要するに、律格は、抒情的の範圍に於ては、必然的なるべし、過去の事實と上來の論とは、之れを證して餘あり。抒情的ならぬ、例へば叙事詩の如きものといふとも、苟も美象の發表なる限は、本來律格と相戻るの謂なく、天才の手には、律格を以て叙事詩を飾るを得たる例もあるべしといへども、既に叙事といふ以上は、事すなはち象を寫して餘さゞらんために、勢ひ

言の繁に流るゝを免れず、言の繁なるは律の成りがたき所以にして、叙事詩の極意とする所と律格とは、音聲といへる物質界の材料の有限なるに制せられて、相背き易きに終る。この際には、言語と律格と、彼れを抑へて抒情詩に近づくも可、此れを略してます／＼叙事の本意を全うするも可、律格は必然の性を有せざるなり。

之れを要するに、外形が内容の自然の、又必然の發表なるべきは言ふまでもなし、たゞ、百の内容もし百の殊相を有すると共に百種一様の性をも有したらば、之れを表するの形式も百の殊相と一の通相とを具ふべきの理ならずや。言語、聲格は即ち、内容の殊相の面に應ずるの形式なり、律格は即ちその通相の面に應ずるの形式なり。形式上既に遍通の一邊ありとせば、之れを豫匠して製作を容易ならしむるに何の妨かあらん。内に其の素あり、外より着意の一指頭を觸れて之れが迸出を容易ならしむ、形の豫匠する所はすなはち内容の趣向せんとする所に外ならず、美術家の三昧はむしろ此にあるべし。夫れ律格を難ずるは形の豫定を惡むが故にして、形の豫定を惡むは形に一定普遍の所なきを信ずればなり。形に一定普遍の所なきを信ずるものが、之れを證するの理由として、形式は内容の發表なればなりといひて已む、論の徹底せざるを見るべし。おもふに、詩形に一定普遍の所なきを證せんとするものは、當然たゞちに其の内容に立ち入りて、美象の上に普遍の所ありやなしやと尋ぬべし。即ち此處にては、論の肯綮は移りて、吾人の所謂乙種内容外形の關係にあるなり。換言すれば、美象は一面に於て千種萬類なると共に、千種萬類すべて一定の形式を有するが故に美なるにもあらざるか。ます／＼差別的なるはます／＼平等的なる所以なるの原理に於て萬古不易の姿あり以て初級の形式美より結象美の頂上にまで一貫するにあらざるか、具象的一元論の價値は形式を拒排せずしてむしろ之れを取り入るゝ所に存するにあらざるか。非律格論者は宜しく重ねて此の點より論着し來たるべし。吾人は斷片的ながらも、本論に必要なる限り此等の點に吾人が見る所の解釋を下したり

と信ず。

其の他、(二)、人心の發達と共に詩形は變遷すべしといふは、變遷すべき形式を知りて變遷せざる形式を知らざるの論なる事、(三)、內容は內容みづからの形式を有し形式は形式みづからの內容を有すといふは、詩形を論ずる上に無意味なること猶一枚の紙につき裏は表を有し表は裏を有すといふが如きものなる事、(四)、形式と內容とは哲學上の二元論の如く矛盾すといふの不當喩なる事等は、上の論によりておのづから明かなるべしと信じ、此に絮說せず。

終りに小說脚本の詩なることを知れる社會は、詩に散文詩あることを認めたるの社會なるに、自ら科學に對する時の詩と散文詩に對するときの詩と、語義に二ある所以を思はずして、漫に詩と詩ならぬものとの別を論ずるの無意義、形式は內容の發表なるが故に內容を本とす、何となれば內容と形式とは矛盾なれば也といふの奇論法、これらさへあるに、シラの詩に律格あるは、其の獨逸人が獨逸的思想を歌へるもの、若しくはシラ的思想を歌へるものなるの結果なりといふに至りては、吾人復た言の加ふべきを知らざるなり。(明治二十八年)

絢爛と平淡

蘇東坡が姪に與ふる書中に文を論じて漸熟乃造平淡といへる、『隨園詩話』に太巧之朴、濃後之淡を說ける、此等の論ありてよりこのかた、和漢の學者多くは、絢爛の極即ち平淡に歸すといふをもて作文の眞諦となせり。其の跡に就きて言ふときは吾人はた同意なり。然れども、此の說往々初めて文を學ぶものを誤まるを思はゞ、其の裡に似て非なる道理の混せるを知るに難からじ。學者動もすればおもへらく、平淡と自然とは文の極なり、宜しく一切の彫琢を廢して、一氣奔放に慣るべしと。若しくはおもへらく、文を爲りて之を彫琢するは、絢爛華麗の光澤を銷して樸素に歸せしめんの用意と。要するに彼等は始より文學の鍛錬を拒まんとするなり、又は鍛錬してことさらに淡々水の如くならしめんとするなり。此をもて其の弊や生硬粗雜。然らざれば平板にして些の活氣なき文字を連ねて得たりとなす。知らず、作文者の本意は斯かるべきものか、案ずるに然らざるべし。粗樸より出でゝ絢爛に入り、而してのち復び平淡に到る、これ作文の常道にして、世の文章家とたたへらるゝほどのものは、恐らく經驗に徵して然りと首肯かん。いはゆる平淡は絢爛なきの平淡にあらずして絢爛の極、頓足一旋、無方無涯の本然に還れるの平淡なり。平淡は絢爛に倦めるものゝ目的とすべき所、未だ絢爛に入らずして、始より

ひたすらこれを希はんは、垂髫の兒童をして大人の儀容に嫻はしめんとするが如し、青年の活氣を殺了せずば幸なり。粗樸にありて絢爛を襲ひ、絢爛にありて平淡を襲ふ、人心は常に一端より他端に向かひて動き、一往一反おのづから三段開發の次第をなす。文を學ぶ者この大則を破り第一境にありてみだりに第三境を望むとせば、其の弊に陷る怪しむに足らんや。啻に作文のみならず、人事此のたぐひの弊多し、調和は天地の眞理なるべしといへども、未だ矛盾の兩端を經ずして先づ之れに到らんとせば、其の結果圓滿を得ずしていたづらに曖昧疑似を得、夫の無定見を以て超主義となし、無心を以て大悟となすものゝ如きは此の例。彼等は畢竟鵠を刻みて鶩に類せしむるの徒なり。始めて文を作らんものは勇猛精進到らん處に到るべし、絢爛を重ね彫琢を凝らすも、苟も達意を害せざる限りは、吾人之を咎めじ。しかも絢爛を極むればおのづから平淡に歸らんこと自然の理なり。

　絢爛極まりて平淡に歸るといふ、其の間如何なる關係あるか。文を屬して絢爛に重ぬるに絢爛を以てし、積みて千萬篇に至るも、絢爛は終に絢爛のみ、平淡直に絢爛の極にあらざるや勿論なり、惟ふに一より他に移るの消息は之れを作文者の心の上に求むべし。天地の眞相はもと絶對無限、到底吾人の知量をもて盡すべからず。人心の本然また此の性を享けて、表面に事物の明劃ならんを欲すると共に、裏面に私かに神秘不可思議を樂ふ。蓋し一方より見れば、美の根柢此にあり、ライプニッツの半解をもて觀美の要件とせるも、多少の道理なしとせんや。殊に東洋にありては、此の種の思想廣く行はる、古歌に「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜に若くものぞなき」といへるがごとき、審美の訣はこれに盡きたり。人心の本然既に斯の如し、此を以て其のはじめ、ハミルトンのいはゆる無智の出立點より一歩するや、小慧細智至らざるなく、綵を剪りて花を作り、石を蒐めて山を築き、以て天地の美、宇宙の眞を隻手に束ね了れりとなす。さはれ美や、眞や、彼れもと

絶大無限、終によく區々の人巧を以て之を掩ふを得ず、巧を弄して愈々拙、奇を衒ひて益々妙ならず、漸く繁縟の厭ふべく、不自然の惡むべきを知りて、翻りて秀靈自然の極致を慕ふ。珠簾玉櫳の眺に厭きて都門を出づれば、雨後の青山當頭に起こり、鞋底の白水一段の趣を寓するのたぐひなり。文を作るものゝ絢爛に厭きて平淡に還へる、實に此の理に外ならず。斯くして蔗境に入らば、文味はおのづから熟せん、要は脩養にあり、世間滔々として似て非なる論理に誤まらるゝの今日、吾人豈に徒に辯を構ふるものならんや。（明治二十八年）

戰爭後の國文學

歲序改まりぬ、請ふらくは吾人をして明窓の前、淨几のほとり、しばらく一切の妄念を鎭めて我が文學の前途を觀せしめよ、孤心耿々たりといへども、衷情また喜ぶべきなからんや、何をもて喜ぶべしといふ、東風度りて南枝綻び、日本文學渾成のいさぐち、年とゝもに開けんとするの故をもて。

顧みて歷史消長のあとを想ふ、人心もと忽然として動くものにあらず、人事はた倏爾として生滅起伏せんや。彼れ此れを喚べば此れ彼れを誘ひ、因々果々、環の端なきが如く、四時の勸れざるに似たるは物質界と思想界と相作用する所以の實相也。さはれまた、人事の多樣にして世波の曲折なるに驚くもの、誰れか其の奥に人心の活動霎時も止まざるものあるを思はざらん。國家興亡の樞機社會變遷の命根は、擧げて思想の活動に繫れりとも謂ひつべし。精しく言はんか、凡智が示す所、天地は常に兩儀に象る、しかも人心は兩極を避けて一に合せんことを樂ふ、彼れは相對の姿なり、此れは絕對の趣なり、それ唯絕對の趣を追ふの心をもて相對の天地に處す、此に於てや欲望限なうして滿足長永に到らず、陰は陽に往き陽は陰に還り一正一反端より端を趨ひて止むことなし、思想活動の原則疑ふらくはこゝにあるべし、此の原則を因とし外境の事件を緣

とし、因緣和合して雜たる斯の世間相を現ず。之れを物質界にしては維新の大變もと曠古絕世、されど其の由來を繹ぬれば、德川氏の社會に於ける反動的思想の結果に外ならず、而して維新の事一たび成るや、累年の屈抑一時に伸び、人心は決河滔滔の勢を以て歐米の文化に向へりき。その果は如何なりしぞ。幕府の壓制を解きて內に自主獨立の地を固めたりといへども、外更に文明の鐵鎖に縛せられ、殆ど自家に創思創想の自由權利あるを忘れたらんが如くなりしもの、之れ豈維新に次ぎて來れる思想の大勢にあらずや。乃ち一波は一波を起こし、原動は反動を招きて、西歐心酔、國粹保存の聲漸く響き渡りぬ。案ずるにかの國粹保存論者、動々もすれば一念地を排してわが佛尊しとのみ執着するが如く解せらるれど、其が本意はさにあらじ。たゞ奈何せん、雪に點ずるの炭は益々黑からざるを得ず、拜歐の餘に激せられて勢、排歐攘夷の色を帶ぶに至れるを。されば斯かる圭角あるの思想は、何時か漸く琢磨せられて、對外硬といひ自主といふが如き稍々圓含のものとなれり。世の論客或は國粹保存の自主にあらざるを辨せんとすれど兩者の到底一系に屬すべきは、思想運行の理之れを證す區々の辭を以て誣ゆべからざるなり。さて國粹保存といひ對外自主といふ、これら積漸の勢をもて壓し來れる思想の潮流は終に坦々蕩々流れ去りて跡なかるべきか。蓋し人心は鬱結する每に常に事に發してみづから伸ぶ、磅礴たる此の氣、斷隙の乘ずべきを外にせんや。征淸の事に會して一瀉千里、汨々として四百洲の山河を浸さんとするものは此の思潮の餘勢也。

吾人が征淸事件の動機を解するは是の如し、されど動機は凡て目的にあらず、また結果とも別なり。政治家は言ふ、征淸の目的は呑噬にあらずして膺懲啓發にありと。吾人は此の點につきて必ずしも多說せず、直に一躍してかゝる征淸の目的達せられたりと假定し、さてそが人心の上に及ぼす結果如何を觀んとす。およそ何れの國たるを問はず、新に戰ひ勝てる國民が自家の優等を自識して滿肚の豪心禁じ難き思をなすは、當に然るべきの理、個人の上に徵するも怪むに足らず、既にまづみ

づから自家を優等の地に置く、此に於てか胸字朗郭おのづから大人の風をなす、夫の勝ちて益々驕横、他の長を容れず己れの短を改めざるものゝ如きはもと算外として更に今日の情態に徴するに征清事件の原動たる自主獨立の精神は、戰勝の一關を境として內外の兩面に展開すべし、戰爭以前にありては、彼れまづ內に向ひて自家の地位を明めまくす、而して戰爭を經て此の希望一たび成ずるや、彼れは進みて外に向かひ自家の長所を執りて他を化せんとす。之れを他語にて言はゞ、一面、差別の一分たる己れを重ずるとともに、他面、己の武を布き文を施して、自他慶福を偕にする平等の致をなさんとするに至るもの、之れを戰爭の結果となす。自主の思想をして圓滿の發達をなさしむ、到達する處はこの他に出でじ、國民といふの眞義はた然らずとせんや。

吾人は本と文學を論ずるもの、今征清事件の始終を討ねて、國民的思想の變遷を叙するに忠なるは、文學の深く之れに根帶するを信ずればなり。それ思想の隆替を明むるときは文學の盛衰隨つて知り難からず、維新の後殆んど二十年、西歐崇拜の俗天下を風靡するや、文學また其餘弊を受けて、詩歌小說乃至文體文字の末に至るまで、擧げて歐化せられんとしき。吾人は之を模倣時代と呼ぶべし。而して國粹論者の反動起これるにつれ、久しく高閣に束ねられたる和文學、漢文學勃然として復興し、つぎて東西文學調和の聲も聞こえき。蓋し調和（ハーモニー）は折衷（エクレクチック）の義にあらず、折衷とは漫然異分子を結合するの謂なれど、調和とは此等を鎔化して改めて自己の所產となすの謂なり、されば調和文學の說は自から政治の方面に於ける自主の說と相通じて、當代社會の思想を現せるのおもむきあり。論じて此に至れば戰爭後に於ける日本文學の趨勢略々察するを得べし、おもへらく、內日本國民の天禀の決して人後に落つべき者にあらざるを信じて畏避逡巡の陋習を脫するとゝもに外歐の英を咀ひ米の華を嚼み、渾化鎔成して別に世界に誇るべき日本國民固有の文學を創設せんとする、之れ戰爭後の文學の傾向ならん

か。語を切にして言はゞ模倣にあらず、折衷にあらず、自國民を主とし他を從とする特殊の國民的文學を創成せんこと之れなり。吾人は宗教に於て早く既に創作期に入らんとするの傾あるを見る、近日の哲學また然らんとす、文學豈ひとり之れに漏れて可ならんや。かくして燦爛たる日本文學の光、能く八表を照すの曉は、庶幾はくば日本國民が其の天職を成ずるの始ならんか。日本國民の天職とは何ぞ、吾人は信ず西文東漸の波を迎へて、却りて東文西漸の巨浪を捲き返へすにあるを。

日本文學將來の大勢は以上の如し、さはれまづ如何なる點に於て件の進歩を始むべきか、日本國民を中心とすとせば日本國民の精髓は何れにあるか、一言以て掩へば、日本國民たるべき生命は何ぞ。歴史は答ふらく、武士道也、大和魂也と、げにや斯の一道の氣、千古萬古に徹して渝はらず、往くものとして化せざるはなく來るものとして容れざるはなし、日本文學をして日本文學たらしめんもの、之れを措きて他あらんや。若し夫れ科學の手を伸べて此の上に解剖の刀を加へんとするは吾人の意にあらず、昔は十八世紀のはじめレッシング未だ出でざるの前、獨逸の國文學は混沌として其の形を成さず、上流社會はた自國文學の何物なるかを知らず、擧世滔々として外國文學もしくは上代文學に頭を埋むるに際し、國王が政治上の大功業は端なくも間接に國文學の恩人レッシングを起して軒昂せる國民の感情を歌はしめき。今やわが國情恰も之れに類す。空閨膓を斷つの處、征鞍骨を委ぬるの邊、吾人必ずしも詩題をかゝる表面的のものに求むべしと言はず、されど征淸の事に觸れて發越し來たれる日本國民の感情は陰に陽に今後の日本文學が依りて立つの地にあらずとせんや。我がミンナ、フオン、バルンヘルムの成るはそれ何れの時ぞ。（明治二十八年）

詩人と實驗

吾人をして冒頭まづ一案を斷せしめよ。何ぞや。曰はく、詩人は模倣者にあらず、また發見者にあらず、詩人は創造者ならざるべからずと。審に言へば、實際世間に起伏する人情の委曲を經驗し觀察してこゝに斯く／＼の美あり、かしこに爾か爾かの妙ありといひ、而して之れを臨模し、之れを醇化し、之れを結合す、ハルトマンが美術的作業の最下層に置けるは是なり。然れども詩人の能事豈此の如くして已まんや。經驗を博うするは善し、之れによりて詩人が天稟の才を琢磨し、以て美を結構するは、おのづから經驗その物と別なり。經驗界にも當然美あるべし、しかも詩人の作れる美は、經驗界に存せし美其の物の模寫なるべからず、此の意にて詩人は創造者なり。詩人に於ける實驗の價値はこの點より打算し來たるを得べき也。

實驗を喜ぶものは以爲へらく、人事の微妙にして多趣なるや、深さに於ては、記錄、話説の上の智識は實觀の確なるに如かず、實觀の確なるは身みづから事に當たれるの切なるに如かず。更に廣さに於ては、向三軒兩隣的經驗は、普く世路の坎坷を涉り盡くせるの通なるに如かずと。其の極遂に良心を犧牲として實驗の智識を得まくするものあるに至る。或は穩當な

近松の研究

『槍權三重帷子』

由來

抱月曰　或はまた『高麗茶碗』の丙年とあるは誤寫にて、原文には酉年とありしを、版木師などにて誤りしものならんか、酉年とは書けど、單に干のみを擧げて丙年と署するも異樣なり、かた〴〵丙の酉の誤なるべし、即ち近松が、

ア丶わけもない母は三十七の酉父樣は一廻り上の酉で四十九これ十二ちがうても見ん事わがみ達の樣な子を持つた權三樣は一廻り下の酉で二十五そなたは酉で十三、十二の違いは丁どよい似合ひ頃

と酉の因緣をきかせしも、畢竟昔語に寄せて享保二酉年の出來事を臭はせしものと知らる、源次、松江、宗茂等の年齡が恰も十二違ひの同名となりし事なども偶然とは言へ面白き因緣なり、近松は之れを一年づゝ繰り上げて利用せるまでなるべけれど、當時の社會は必ずや、妻敵討の噂に加へて、此の奇しき因緣をも持て囃しゝなるべし。

性格

抱月曰　權三、忠太兵衞、伴之丞以下の人物につきては、逍遙氏の見に同じて贊せず、おさゐの性質の根柢が、せッかいにして我强く多血多情にして嫉妬深く、思ふ事口に出して憚らず、容貌と共に氣も伊達にわかく、槪して境遇によりては、淫婦ともなり得べき生來なる事も、諸家の說を通じて、動かざるに似たり、此の點までは、おさゐの言動、作者の揷評、說明等『重帷子』一篇の表裏に明に現はれたり、しかのみならず、おさゐの育ちし家庭、嫁ぎし身分等は、寧ろ件の天性を當頭壓倒せんとする者なりき、此に於てか、往々敏慧の人を鍛ひ成すに必要と認められたる、境遇と天性との軋轢の結果は生得の我と境遇の我との相反せる二面を具至して、箇のおさゐの性格を作り出だすに至れり、されど以上は唯是れおさゐが性質の素地のみ、輪廓のみ、之れに息を入れ睛を點ずるは、他の問題を闡釋したる後ならざるべからず、他の問題とは、第一、おさゐは權三に戀慕したりしか否、第二、おさゐ權三は遂に身を汚せしか如何といふ點なり、此の二問の解釋次第にて、おさゐの性格は黑とも白とも定まるべし、更に抽象して言へば、おさゐの性質は、終に生得の我、亢進して一躍邪淫に入りしか、又は境遇の我能く之れを保護して生我を純白の儘に持し得しか、權三、伴之丞、愛娘等の惡外緣に觸れて、おさゐの本性はいかゞ反應せしか、是れ眼目の問題なり、第一おさゐは權三に多少の戀情を寄せたりしか、是れに樣々の答あり、或は半無意識に此の事ありたりといふ、逍遙氏の解の如き是れ也、或は一步を進めて、始より意識して戀せりといふ、宙外氏の解の如き是れ也、或はまた戀慕といふが如き念一切おさゐの心中に存せざりきとも見るを得べし、第一說に從へば、上卷の末、數寄屋の大葛藤以前に於けるおさゐの言行の怪しき節々は、凡て其の嫉妬心に驅られ、多血性に驅られ經佛に驅られた

る者と解し、之に有意無意の際なる戀情をも加味するが故に、縈紆の態自から備はるの利あり、數寄屋の大事件以後は半無意識の戀漸く其形を露はしゝか、又は死に抵るまで、依然半無意識の戀として過ぎ去りしか、此れも亦た二樣の見解なり、前者ならば、第二の問題たる肉交の有無も隨つて有と定まるべく、後者ならば無と定まるべし。而して事の實際を穿てば前者實に近く、作の表よりいへば後者實に近し。次に第二說に從へば、數寄屋の事の前後を通じて、常に文字の表以下に別なる一脈の動機を求めざる可からず、能く之を求め得ば、此の見解によりて最も容易に性格を一貫せしめ活動せしめ得るの利あるべし、次に第三說はこれ亦作の表面に一貫したる性質を指摘して、第二說に對する、他面のおさゐを說明せるもの、言葉にも行ひにも思ふ事を輕々しく打ち出だし、嫉妬の爲には思慮分別をも缺くに至る彼が本性の弱點は、彼をして心ある者の爲す能はざる事をも平然遂行して顧みざらしむ、而も此の間に一點の曇あることなし、「そなたがいやなら云々」といひ「ほんに市之進と云ふ男を持たねば云々」といひ「わたしが戀婿云々」といふたぐひ、眞に權三の男振りなり、氣立てなりを愛でたる語には相違なけれど、唯愛づるといふに止まりて、未だ之れを慕ふには至らず、斯かることを公言して怪まざる所、やがておさゐのおさゐたる所以なり、「廿年の馴染にはわしや易へぬぞ」といふに始まりて、討たるゝと知りつゝも、「なう懐しや」と本夫の傍に驅け寄る最期まで、おさゐの本心は渝らず、「不義者に成り極めて市之進殿に討たれて男の一分立ッて進せて下され」との不當にして而も切なる賴に引かされし權三は、當時おさゐの分別以上に得出でざりしものといふべし、而して此の解に從へば、おさゐ、權三は勿論身を汚すに及ばざりしなり、要するに、おさゐが本性の弱點主なる因となり、伴之丞等の所行緣となり、おさゐ權三の短慮淺見之れを高めて、何人の眼にも妻敵討つ人討たるゝ人共に悲むべしと見ゆる結果に至らしむ、此れをおさゐの上なる生得の我の、境遇の我に善導せられたるものといふ、思ふに此の種の解釋は動々もす

れば皮相に止まりて人物の活趣を失ふの恐あると共に、最も此の作者の本意にかなふ事あるべし、其の理は意匠の條下に述べん。

意匠

抱月曰　此の篇を讀みて何人も先づ感ずるは、おさゐの性行の黒白明ならず、延いて脚色に不自然の廉見ゆる事なり、現に道行の章二三行中にすら「姉とも云はゞ岩枕、かはす枕が思はくも影耻かしや云々」といふかとすれば「身のはぢもみぢ徒に染めぬ浮名の云々」といひて、既に枕かはせるが如く文さにもあらぬが如き（但し上掲の語は二者共にいづれとも解せらる）書きぶり、貶して解すれば作者みづからの胸底に、汚れたるおさゐと無垢なるおさゐと二人ありて、知らず〳〵交見せしには非ずやとも思はる、勿論、實際世間には、事の外見の善惡如何やうにも解せらるゝ例多かれば、單に此故のみをもて作者を難ずるは淺見なるべけれど、今の場合は之と異なり、人物事件の成るがまゝにおのづと無標榜なるにあらずして、作者の作意至らず、其が插める地の文にまで曖昧の色あらはれたるものなるを奈何にせん、或は一歩を讓りて、地の文といふも實は殆ど人物の科白と差別なきことゝ、此の種抒情に近き文字の常なりといはんも、尙この故をもて矛盾、模稜に近き本篇の描寫法を辯護し得たりとはいふべからず、如何となれば、おさゐの性行或は心の上にて、或は行の上にて、或時は不義者の如く、或時は貞女の如く、終りまで此の二面並存して、調和せりとも見えざればなり、自然に出づる所行は、たとひ一見矛盾の觀あるも人をして其の以上の調和を暝々の裡に感知せしめ、滿足せしむるの理、言ふまでもなし、更に仔細に察すれば、通篇の矛盾といふもの、概ねおさゐが言（及び地の文意）と行（及び事の迹）との矛盾といふを得べし、此の矛盾を

解しておさゐの双身（性格論參照）といふに歸するの說もあれど、意匠の上より見て、既に一體双身といふ限りは其の間必ず不即不離の關係なかるべからず、さるに本篇に見えたる所は、黒白二身の別あまりと截然たり、何を思ふと咎めてもなき夜半の緣先に、おさゐが獨りごつ所を聞けば、

エ、思案する程妬ましい大ていの男を可愛い娘に添はせうか我が身が連れそふ心にて吟味に吟味、思ひこうだ稀男なればこそ大事の娘に添はするもの恪氣せずに置かうか云々

斯かる眞心流露の場合にすら、なほ飽くまで娘の爲と口に出だして露疑はず、娘の爲の吟味なればこそ、權三を稀男とも思ひ込め、過にも自身の好みを先に立てゝ、其れより思ひ付ける婿定めとの口氣は吐かず、「かゝが男に持つぞや」の言語道斷なる語をすら、作者は、子を寵愛のあひだてなき坐興の深ざれと輕く抹し去りぬ、言の上より見たるおさゐは殆ど無垢に近きに非ずや、若し一寸たりとも不淨の心あらんには、如何に無意不識とことわるも、斯かる場合に徹頭徹尾言を矯め語を淸うし果するを得んや、されど翻りて其の行迹を見れば、數寄屋にて泣くやらたゝくやらの狂態の前後はいふに及ばず、樽を緣の橋渡しの怪しきより、夫に討たるゝ間際となりての逃げ隱れ、必死極まれるを見て、「懐かしや」と白刄の下に驅け寄る振舞の今更めきて疑はるゝ迄、縱令技藝の上、性格の上に幾多の言ひ譯は具へたるにもせよ、到底おさゐを貞操の婦とは言ひ難し、此の方面にては、彼れは殆ど始より巧みに巧める不義の淫婦なり、斯く無垢のおさゐの勝てる場合と、不義のおさゐの勝てる場合との兩端の外、更に二面等分に觸接せる場合は、則ち水と油とを強ひて一器に盛りたらんが如く、相和せずして不自然の破綻を遺す、數寄屋にての帶の事、又は二人驅け落ちと決心する際の事の如き、其の著き例なり、或は之れを解して、嫉妬、顛倒の爲に常識を缺けるに因るとせんか、無常識の人物には不相應なる分別くさき口實の其の事に伴へる、

愈々不自然ならずや、或は本心不義を行ひながら、表面に潔白を裝へるものとせんか、さまで巧むもの、所爲としては、如何に元祿時代の女なればとて、淺薄、むしろ馬鹿げたる計策の多き、此れも不自然ならずや、或はまた、口實も本心、所行も本心にして、何とはなしに無意識の底より出づる所行を、意識上飽くまでも眞面目に是認し辯解せるものとせんか、此には幾多の心理的問題簇り起こるべしと雖も、不意の欲望が彼れの如き大變事の際にすら尙殊勝らしき分疎を作爲して其の目的を達せんとするとは、第一うなづき難きことならずや。

以上の理由によりて、われは本篇の脚色を不自然なりと斷せんとす、蓋し作の種となりし事實、及び作の上の事迹よりいへば、元來不義密通を基の悲劇なりしを、公儀を憚り、掛り合ひを憚り、人氣の向背を憚りなどして、篁村氏の所謂双方に人情を持たせ道理を持たせんとせる結果、作者の筆底に二樣の人物出で來て、事の成り行より見れば、飽くまで不義の人ならざるべからざるおさゐが、作者の筆によりて上邊だけ拭ひ清められ、言ふ所は常に潔白の婦人の如く、行ふ所は常に不義の疑を招ぐに至れるならんか、固より馬琴一流の筆によりておさゐを不義の惡名より救はんは、容易の事なるべきを、近松は流石に生木を枯らしても矯めんとはせざりしなるべし、畢竟本篇にては、近松が人物擒縱の術十分に成功せずして破綻を生せしものなり、同じ手並の巧拙は次に許すべき『浪の鼓』に至りて一段明に、『杜曆』に至りて更に妙なるを見ん。

修辭

抱月曰　語法上自他、能所、主客混亂して意義の精確ならぬ句多し、お雪が言葉に、

此の帶の如くいつまでもお腰もとを離れず添ひ纏うてやさうじやぞや

など、帶がお雪か定かならず、斯かる例は倘多し、また近松ならぬものにもあるべし、畢竟一氣に書き流せる文なればか、又作者が當時眞にお雪の心と同化して作者とお雪と帶との間に差別なかりしにも由るべし、妙文は必ずしも語法の囚うどならずとは此等を言ふか、異日近松修辭書を編むの日あらば、特に標すべき一體ならん。

又曰　字謎の名は本と「文體明辨」に見えたり、龜といふ字を「頭如レ刀尾如レ鉤中央橫廣、四角六抽、右面負二兩刀一左邊屬二雙牛二」などいへり、又離合體の一種に松間樹の三字を詩に寓して「子山園靜憐二幽木一、公（木公合成松字）幹詞淸詠二華門一、月（門月合成閒字）上風微蕭灑甚斗（甚斗合成斟字）酌何惜置二盈樽一」などいへるものあり、何れも文字の上の戲れなり、此等に比すれば、松の凉しくの文字の如きは、幾分か味ありといふべし。

又曰　近松の文は多く一瀉千里の書き流しなると、俗語格を自由自在に混用せると口調を先にせる所あるとより、語法上の累は極めて多し、其を此に咎め立てせんとにはあらねど、念の爲め一二數へ置かんに「蹄をろくぢにつけばこそ」は「蹄をろくぢにつくればこそ」のテニハ違ひ、動詞違ひ也、「せゝり探して置かうやそりや成りませぬ」は恐らく「せゝり探させて置かうや」又は「せゝり探して置かうとや」の能所違ひならん、「比翼の惡緣こそ深き」「どこぞに埋んでおけの輪と言はねど物が言はせたる」「拔け穴とぞなりてけり」の類は古今此の種の文に最も多くある係結の違ひ也、「中有のあかりに迷ひを晴れ」も「迷ひを晴らし」又は「迷ひ晴れ」の動詞違ひにて俗語格也、近松が當時の語法上の知識は有無如何なりけん。

又曰　作文の伎倆は最もよく其のフイギユアの用ひざまによりて察せらる。翰藻に乏しきものゝフイギユアは、多く筆癖によりて二三種に偏り、又は陳套、不自然、艱澁の跡あるを常とす、獨り近松の文に至りては、殆どあらゆるフイギユアを

用ひざるなく、間々屑もあれど、概して輕、儁併せ得たり、一々は此に數へざるべし。

又曰　至文の必ずしも修辭法に縛せられざるは、語法の塲合と同じ、「姉ともいはゞ岩枕、かはす枕が思はくも影恥かしや野邊の草」は故なくして枕といふ語を復用せる同語重複の弊あり、或は「姉ともいはゞ岩枕かはすかいなが思はくも」などあるべきかなれど、影恥かしやの語に響かするは枕の方遙に適切なるを見れば、改むべからざるに似たり、「鬼神退治の大江山、峰は青葉につゝまれて谷の尾上もしん／＼と山のふりさへ愛想なくくすみきりたる松の下かげ」の如きも分析すれば山を說くこと稍々煩なる趣もあれど、一氣に讀み下して爾か感せず、總じて感情高き文、一氣呵成の文には、修辭の法則上弊あるものにして、而も讀過却りて妙深きものあり、近松の文の如き此の例多し。

雑

抱月曰　露の笹原やッとん／＼、連れだち走る、踏みわけ走る、磯の千鳥をぼッかけて、石づき摑んですんずとのばしやる／＼サアえいさッさ」も當時の流行唄なりしが、「生玉心中」には「戀ひのいち酒やとん／＼、手元でかゝる、押さへてかゝる、………すねる男をぼッかけて、そこら／＼をずんずと飲ましやる／＼、サアえいさん／＼」とあり、「酒壺から云々」の句と共に、同じ節の唄なりしを、近松が臨時に讀みかへしものと見るべくや。（明治廿九年十月、近松研究第一會にて）

「堀川浪之鼓」

性格

抱月曰　或はまた夫留守中のお種が心は、夫戀しといふよりも、一歩を進めて只管男子戀しの情慾盛なりしにあらざるか、寢ても寤めても夫の事を忘れぬも、所詮この情慾を元にしての事なるべし、されば必ずしも源右衛門其の人に心を寄するといふに非ざるも、たゞ何となく男嬉しく其れが爲め好んでかいま見覗きもし、酒の合手もせしにあらざるか、勿論進んで肉慾を遂ぐるなんどの野心、寧ろ勇氣は初より露なかりしに似たれど、我れひとりの心の上のいたづら、而もほんの一時のいたづら位は、當初或は無かりきとも限らず、此所有意無意の境分けがたし。

又曰　斯かる筆法に從ひて解釋すれば、源右衛門とてなか〳〵油斷はならず、お種に初對面の挨拶ぶり、萬端の氣の利きたるは言ふに及ばず、鼓を打つての嚇しより「聞いたでもなく聞かねでもなく」のぢらし鹽梅以下、宛然たる俗才子の面目とも見るべく、お種が「年よりに聞こえ候が」の輕口より、盃とつての交り、床右衛門をたらす樣子など見聞しては、さまで堅固とも見えざる源右衛門の道念必ずしも搖かずとは定まらず、「お袋さまと差しで是れには如何なり」「女中ばかりは遠

慮に存ず」などの潔白は、固より大事の前の躊躇に伴ふ常情、この際に何の價値をも有せず、「色よし香よし」の容振りは當にお種に仇と響きしのみならず、初より微に煩惱の息を含みしにはあらぬか、皷を打つて嚇す、ぢらして振り切り出づると見する、取り縋られてわけもなくつけざし押し戴く、遂に我が身の戀となる、此等凡て同じ煩惱の影と見るも一解ならずとせず、斯く解する時は、後手ながらも源右衛門の罪、たしかにお種と互先の價値はあるべし。

意匠

抱月曰　お種が床右衛門を「たらさばやと分別し」源右衛門の「口どめせん爲に態と戯れ仕掛け」るなど、夫の留守の心細さと咄嗟に迫れる女の猿智慧とに因るとはいへ、武家女房の心がけならず、武家女房の心がけには背けど、本篇の主人公としての性格は首尾略々整へること、逍遙氏の言のごとし、若し此等の汚點を一すぢに拭ひ去らんとすれば、虻蜂取らずの結果となること『重帷子』の塲合の如くならん、近松は寧ろお種の武家女房なることを忘れて、能く此の悲劇の主人公たるお種に同情せりともいふべし、お種の彼れが如き人物に出來上がりしは、元祿女の通性か、はたお種一人の本性か、近松の同情し得る人物は多く斯かる階級なりし爲か、はた是れならでは見物が承知せざりしに由るか、此は他の諸作と比較して研究すべき近松が伎倆の問題なり。

又お種の個性が何程まで結體せるかは觀る人々の感の厚薄によりて定まるべけれど、前回『重帷子』のおさゐよりは一段明に彫り浮べられて、さしたる矛盾もなきが如し、且つ全體の結構單純なるだけに引き締まりて、自然の致を失はず、お種が身を汚す塲のごとき、殆ど今の心理小説中にも見出ださるべき呼吸あるに似たり、たゞ罪を犯す徑行の描寫斯く心理的な

るに引きかへ、其の以後のお種がやゝ芝居がゝりとなり、二の位となりて、彦九郎に消壓されたる趣あり、蓋し場面の性質の然らしむる所か、されば上の巻の中心はお種なれど、中の巻にては彦九郎之れに代はり、お種は僅に巴千氏の引かれたる條及び他の一二ヶ所に哀れを見するのみ、下の巻に至りては、單に妻敵討の局を結べるまでなり、下の巻の斯く妻敵討のみなると共に、通常此の巻の初にあるべき道行文が中巻の初に出で、且つ彦九郎歸國の事を歌へるものなるは、飽き足らぬ心地す、思ふに淨瑠璃に於ける道行文の效用は（語り物としての效果は別とす）暗に主人公が犯罪後の心裡の煩悶を抒ぶる具となるにあらん、作者の立意はさるむづかしきものならざりきとするも、自然の結果は斯く見ゆるなり、而して本篇は犯罪後のお種の影うすれ行くと共に、此の美しき述懐をも缺けり。

本篇が酒を罪過の本とせるは「重帷子」の嫉妬と通ひ、此方の床右衛門は彼方の伴之丞に當たり、お種の猿智慧はおさゐの猿智慧と似たり、されど此等の緣相助けて罪過を構成する次第は彼此反對なり、おさゐが犯罪の因縁は、嫉妬癖に始まり猿智慧に終れど、お種のは反りて猿智慧に始まり酒癖に終れり、又思ふに、昔の作には智量の淺はかといふ事に重きを置き、之れを悲劇の要因とせるもの多きが如し、畢竟社會の幼稚なりしに由るか。

お種源右衛門不義の所へ床右衛門音づるゝ條、床右衛門を全く忠太夫に仕立てゝ、詐りと見物へ知らせざりしは、見物を驚かさん爲か、はた始は忠太夫の積りに仕組みしを、筆に隨つて床右衛門と變へ、前を引き直すことを忘れしものか、何れにしても通常の場合と殊なりて見ゆ。

修辭

抱月曰　例の語格違の主なるものをひろへば「さてはお前は今の事お耳に入つたるや」「不義者證據を取つたると」「夫の心もつくやとて」「皷に心を慰むなり」「斯かる姿を咎むやと」「皷の胴こそ握るとも」「闇のうつゝぞうつくしや」等あり、「私心は猶此の文に云々」は『重帷子』の「お雪使やら云々」と同じく「の」の字を省ける格なるべし、「上より取つて押ゆればはね返さんと挑みあひ途に脇差もぎ取つたり」などは例の一筆雙叙法。

總じて本篇は對話に力ある句多くして、地の文に佳句尠し。

下卷、彦九郎等が敵の第に來客あるを遠見する條、「頭を振り廻つて口上のべ云々」の前後、覩るやうに面白し。

場合によりて樣々の物に誓文かくるは東西ともに同例なり、『重帷子』の「たつた今此の馬から眞逆さまにころりと落ち踏み殺さるゝ法もあれ」此篇の「歩に首打たるゝ法もあれ」の如き是れなり。

下卷の始め、切つた、切らず、の辻占は何時もながらしつこき心地す、前兆といふことは、筋の成り行きを豫想せしむる爲、劇に必要なる場合多く、シエークスピアの作にも屢々見えたれど、近松のは、今日より見れば稍々諄きが如し、作者は此れによりて當の人物が疑懼煩悶の狀を映出せんとせしものか、そも／＼單に時勢が斯かる迷信的の事を喜びしに由るか。

中卷の末、お種最後の所、お種が言葉の哀れ深きと共に、「主人少しも騷がず女房共來たれせがれ文六來たれと詞すくなに呼びければ」の意到徹して「ム、是非に及ばずそれ持佛堂に火をともせ女立て持佛へ來たれ」「彦九郎刄を拔き取つて引きよせぐつと刺しかへす刀にとゞめをさし死骸をしやり刀を拭ひしづ／＼仕まうて立つたりし武士の仕方のすゝどさよ今朝ぬぎすてし旅衣裳又おつ取つて笠草鞋云々」より「物の哀れやものゝふの身こそ仇なるならひなれ」まで、彦九郎の言葉と地の文と共に妙なり、總じて此の篇には、言葉に力ある句多くして、地の文に佳句少なきが如し。

雜

抱月曰「扨ても行平云々、かとりの衣の空だきなり」「かたみこそ今は仇なれ云々、思ひこそ深けれ」「あらたのもしの云々、風も狂して」等は謠曲「松風」の文句にして、「邪淫の惡鬼は云々、如何に恐ろしや」は同じく「女郎花」に見えたり、本篇特に「松風」をもじりし箇所多きは、靑々園のいはれし如く實説に憑りしものなるべく、源右衞門が御目見えに「松風」を謠ひしは、因幡に因める句あるが爲かとも思はる。（明治廿九年、近松研究第二會にて）

「戀八卦柱暦」

性格

抱月曰　おさんの性質はさすがに復雜なり、今の人をして描かしめば當に宙外氏の解釋の如き人物となるべし、されど近松が作の上には更に他のおさんありて活動するに似たり、但し男女(ふたり)驅け落の間際までは、おさんが茂兵衛に對するは無意識裡の思慕と意識裡の歎美とに止まり、戀しとは露ほども意識せねど、たゞ情深き人、好ましき人といふ心より、褒めもし、たよりにもし、又この意にて慕ひもしたりといふ所までは宙外氏の説に同感なり、たゞ此後の所、おさんは遂に無意識のうちに潜みし、思慕の情を意識の上に持ち上げて、戀といふものゝ片影とまで育てしや否やといふに至ては頗る疑はし、驅け落して後捕へらるゝまで三四十日間のおさんは、果たして宙外氏のいはるゝ如く、大絶望中に戀の小滿足を得たりしか、又は滿足なき疑懼煩悶の中に埋沒せられたりしか、此の解釋最も本論の眼目たり、作の上に此の間たゞ三四ケ條の消息あるのみにて滿足とも不滿足とも明に斷りなければ、此の三四ケ條以外滿足の體なきが故に不滿足なりきとも、又不滿足の體なきが故に滿足せりとも言ふべからざるは勿論なり、おさんが此の間の心情は如何なりしか。

第一、之れを墮落中のおさんの言動に徴す、「神佛にも人間にもうとまれ果てし身の上云々」の條は是れおさんが自ら身を怨むの言にして「神佛にも人間にも」の語は直に飜りて夫を怨み宿命を怨むの意と通じ「不義のあやまりは微塵ほどもなけれど、ほんの因果の廻りあひ」の條に至りて、心は飽くまですゞしけれど、宿命によりて斯かる身の上といふもの是れ怨嗟の意いよ〳〵しるし、即ち此の二條の意は「よしなき女の悋氣ゆゑ」との自責の念を裏に包みて、諦めを宿命がなす業といふに歸したるものといふべし。さればおさんが居常諦め顏に因果〳〵といふものは、實は其の裏面にともすれば人を怨み世を怨む愚痴の涙の絶えねばなり、因果なり宿命なりとは、彼れが世を怨み人を怨まんとして忽ち其の身の過去に思ひ到り顏あからめて自ら抑ふる愚痴の聲なり、彼れは此に至りて寧ろ因果といふものを怨む、畢竟己の罪過を自ら公言するは彼れの勝氣なる性の堪へざる所なり、次に「とてものがれぬ命の內」の條「そなたと肌ふれ寢たは定」のくだりは、おさんは兎も角も仇し男と枕かはせりといふ罪過を深く身に被て、死の已むべからざるを覺悟、むしろ承知せるを示す、中卷おさん茂兵衞浪々中の消息は唯以上の四ヶ條あるのみ、此等によりて推す時はおさんは此間ちらとも滿足怡悅の心を外にあらはさず、又此の間女の持前なる愚痴全たくなかりきとも云ひがたきに似たり、たゞ其の性と過失を悔ゆる念とに作用せられて、愚痴の少しく形をかへたりしのみ、或はおさん十八の娘あがりを以て常に二十四の茂兵衞を慰め諭すが如き口氣あるは尋常にては出來難き事なりといふ、されど此は本件の起こりが元來男女兩方に過失あるやう仕組まれ、茂兵衞は茂兵衞の罪に被、おさんはおさんの罪に被て、互に氣の毒と思ふ氣味あると、茂兵衞は手代、おさんは主人の關係あると、茂兵衞は正直、おさんは勝氣の性なるとの致す所なることを、見のがしたる論なり、茂兵衞の方には常に謝罪の口氣あり、おさんはさすがに我れこそ科あれとは云ひ出し難く、さりとて茂兵衞にあやまらせては心安からず、さてこそ一も二もなく茂兵衞の言葉を打ち

消して、一時胸に釘うたるゝ思を避けんとはするなれ、此の所眞に悟りての慰諭にもあらねば、戀に安んじての平氣にもあらず、慰諭平氣の裏には苦悶の狀見え透く心地す、或はまたおさん全く茂兵衞に戀慕の心なかりしものならば、何故に茂兵衞と別かれて其の潔白をば證せざりしといふ、此は女子に求むるの苛なるものなり、いづれ死すべき身と定まりては此の世さすがに心細く、知らぬ旅路に踏み出せる身の如何に心づよければとて、たよりに思ふ茂兵衞と別かれてまで、身のあかし立てせんとは思ひ付かざるこそ人情なるべけれ、此の際のおさんが心には、始終茂兵衞と別に走るといふ分別起こる餘裕はなかりしものと見るを可とす、宙外氏が「變に應じて節を全うする策なからんやなどの分別、かゝる年わかき女子に求め難きは勿論なり」といへるは、假りて以て此の非難に答ふるを得べし、且つ總じて此の時代の人は男女とも外部一旦汚るゝ上は心の潔白は死を以てせざれば證し難しとやうなる考を持せるが多きに似たり、此れも思ひ合はすべき一點なり。

第二、之れを捕縛前後の事情に徵す、萬歲に隱れ家を見あらはされて、おさんうつとりとなる所へ茂兵衞立ち歸れば「エゝきり〱戻りはせず、此の身になつて惠方參り所か」と常には似ぬ慳貪に「どうやら此所もこわげがたつて」と逃相談のくだり、凡夫のあさましさには、とてものがれぬ命と知りつゝも、暫し居なれては尙一日を長うせん心、哀れにして自然なり、此場合をも、予は茂兵衞戀しさが爲めの命惜みとは見ず、生を愛する人間の本然に歸せんとす、「同じことばかり云々」の條は最も明におさんの胸中を寫せるものといふべし。「又同じ事ばかりそれは互の因果づく」といふ例の悟り顏なる慰諭の語、もし他の場合と同じく戀の滿足を元にしての意なりとせば、「みじん濁らぬ此の心」句は勿論「扨ていとしいは幼なじみの以春さま」の句の如き、(斯かる場合にまで飾りに飾れる嬌情の語と解すれば知らず、苟も眞心より出でしものとする限りは)決して此れに直接して出づべき言葉ならず、試に思へ、今召し捕らるゝ恐ろしさに復も手を取り走んといふ間際、微

塵にても其の男可愛しと思ふものが「私しゆゑに大事のお身を」と男にわびられて「其れは互の因果づく」と慰むる口の下より、心は濁らず、舊夫いとしなどいひ得べきものなるか、予は此の語を非常なる矯飾の言葉と解すべき理由を知らざると共に、此の場合にのみ唐突に良心の影見えたるものと解すべき理由をも認めず、寧ろ首尾一貫せるならんの眞情と見るなり、最後「おさん樣もうのがれぬ未練な働き遊ばすなオ、覺悟した合點じや」の所は正さにおさんが心機一轉の際にして、顏色變せずしばられし男も女もけなげさに」といふより、引きまはしとなりて愈々最期ときまりし時、始めて「よしなき女の悋氣ゆゑ何のとがなきそなたまで……唯何事もかんにん」と、胸につかへ〳〵し眞意の詫言、千萬無量の味あり、此の意に於て言や善しともいふべきか、思ふにおさんもし現世にて茂兵衞を心に許しぬとせば、或は此の利那に於て然るべし、又縱令戀といふまでの事は全くなかりきとするも、此の刹那こそは、二人が中の障壁全く取り去られて、神の御かゞみには淸き夫婦とうつりしなるべし。

第三、之れを性格境遇の自然に徵す、兎も角も一度肌ふれしは定の男と女、世にも神佛にもうとまれはてし身の、動々ともすれば誠の戀に陷り易きは人情なり、此の邊より立論して演繹し來たる時は、上來陳べたる如くおさんの戀といふほどのものはなかりしを見る、故に予は此れを推して、おさんが何故に誠の戀に陷らざりしかを、逆に其の性格と事情とに求むるを至當の順序と信ず、案ずるにおさんが斯かる境に處して猶且つ心を戀に動かさゞりしものは、第一庭訓の力強く不義姦通の磔刑にも當るべき大罪なることを深く心に銘せし事（猫の條、影ぼうしの條參考）第二隨つて悔恨の念深かりし事、第三茂兵衞との事は過失、偶然、宿命の然らしむる所にて、心は飽くまで潔白なりといふを唯一の申譯とし自ら此の點に安立せんとしたりし事（「みじん濁らぬ」の條、「不義のあやまりは云々」の條其の他所々に此の意見えたり、）第四時日の僅に三四十日に過ぎざりし事等の制埒ありしに由る、此の境遇此の事件をし

て半年一年の長きに亘らしめば、おさんの心或は遂に動きしやも計られねど、月餘の日子を以てしては、歎美、依頼の心未だ戀と進化するに及ばず、予は反對論者が一躍して之れを戀とまで仕上げし理由、即ち人情の自然といふ事を、寧ろ傾向といふに止めんとす、戀に進化する傾向、若しくはポシビリチーは慥に之れありしならん、されど上に種々の制裁力ありて、最後に及ぶまで遂に意識の上に戀と名乘り得ざりしもの、おさんが罪過後の心なるべし、但し此に制裁力といへる、强ち冷なる義理の力にあらずして、一種感情の色を帶びたるものなりし事、言ふまでもなし、おさん、情に深しとはいへ『重帷子』のおさゐ『波の鼓』のおたねとは趣かはりて、只管男女間の情に熱するもの、即ち一歩すれば淫婦ともなるべきものとはおのづから選を異にせる所あり、全體の言動おさゐおたね等ほど色氣濃かならざるに似たり、是れおさんの色情が他の感情に制せられ易き一因なるべし。

　要するに宙外氏の見は普通の女子の情には近かるべけれど、おさんの言動は却りて之れと遠きに似たり、予は寧ろ此等を正面より解して、おさんを憫むべき罪過より救はんとす。

意匠

　抱月曰　まづ大體の趣向よりいへば、此の篇は疑もなく闇中人ちがひの密通といふに想ひ着きしものなるべし之れに對して、第一會の『重帷子』は異樣の嫉妬が本の濡衣悲劇ともいふべく、第二の『波の鼓』は酒がさせし不義の悲劇ともいふべし、近松は此の人ちがひの密通といふ着想(或は種子)を如何に意匠し結構して首尾全き悲劇となしたりしか、之れを此の作の本かとも見ゆる西鶴の『五人女』おさん茂右衞門が物語に比ぶるに、頗る面白き差異あり、第一は事のまちがひ、西鶴にありて

は、おさんが寢ごみなりしに本づき、近松にては男女共に取みだして氣せきの際互にそれと誤認せしに因ることなり、第二の差は、西鶴にては、其の後おさん「この上は身を捨て命かぎりに名を立て茂右衛門と死出の旅路の道づれと猶やみがたく」茂右衛門も「乘りかゝりたる馬はあれど、君を思へば夜毎に通ひ人のとがめも顧みず」遂に全く有罪の域に入り、近松にては、是れとうらうへに、男女とも斷えず心の潔白、身の因果をかこつなり、尙此の他にも前後に著き相違多かれど、要するに上の二點に根元するものと見て可ならん、西鶴にては多く獸慾七分の人物なるを、近松は改めておのづからなる道德性を之れに鹽梅したるものといふべし、而して事の結果より普通の人情より、敷衍せし事實の狀勢より察する時は、西鶴風の結構却りて自然なるべしと思はるる箇所に、此の鹽梅法を用ひしため、往々兩元の調和し兼ぬる弊あることは『重帷子』の評にいへるが如し、此の篇に於てもやゝ其氣味あり、宙外氏が裡面的解釋の性格許成立せしは、即ち此の缺點あるが故也、たゞ「重帷子」のおさゐ權三等が、表を飽くまでも淸くせしに拘らず、所々に破綻をあらはしゝと比べて、おさん茂兵衛は比較的に始終貫通、色慾以上に立ち得たる觀あるのみ、「波の鼓」のおたねに至りては、酒といふ便利の道具ありしだけ、前後の調合めでたく、且つ筋の單純なる代りに、全體引きしまりて、頗る當世向なる所あり、一部の劇として、人物の活現、事件進行の自然なる點は、三篇中蓋し「波の鼓」を第一とすべきに似たり、されど脚色複雜にして場面廣く、やゝ平坦なるうちに人情の至極を含めたる節多きは、此の『杜曆』や最なるべき、其のおさゐおたね等が夫に對してさしたる不足不快もなく、亦た權三、源右衛門等に對して何の情誼なかりしに比して、おさんが以春に對し、茂兵衛に對する關係の尋常ならざりしが如き、此の篇の脚色の、他よりも價値ある所以なり、前二者にては、男女の離合する樣たゞ〳〵機會の湊合、惡人の障碍に由ると見ゆるのみにて、境遇と主人公との間に深く潛める關係なく、不時の嵐に盛の花のむざと散る哀れにも似て、吹かでかなは

ず、散らでかなはぬ内部の機緣熟せず、此の篇のおさんは之れに反して里方の無心に心を痛め茂兵衞に內談する所まづ自然にして、好き人、頼み甲斐ある人、氣の毒、感謝など、茂兵衞に對する好意、同情、十分なると共に、本夫の薄情、家內の冷淡、彼れが如くなれば、たとひ此際思ひ切りておさんを誠の戀に擠すとも、誰れか無理と言はん、まして玉、助右衞門など、配色いやが上にも複雜にて、事は偶然の行違ひなるをや、たゞ偶然を弄する條やゝ湊合に過ぎて不自然の痕迹を殘したるは、不倒氏の言の如し、此の所げにも西鶴のかた勝れるに似たり、序ながらおさん茂兵衞等が世を狹う人目を忍ぶ身の、風の音にも心置く疑懼の狀を茂兵衞が人の噂の立ち聞き、舊主人の影のぞきて悚然とせしに寄せて寫せるは西鶴なり、近松が之れをおさんと萬歳との上に取りなし、茂兵衞はたゞ隣村にて捕手の噂聞きぬといふに止めたるは、筋の上、舞臺の上よりの用意なるべけれど、小說としては西鶴の方心理的にして感深きやうなり、試に此の篇の荒筋を表とすれば、

因緣 { おさんが里方の貧困○夫を措いて手代への相談○おさんの悋氣○延いて輕るはづみの計略○茂兵衞が主の爲の一時の横道○夜中の忍び○以春の惡性○隨つて夫婦間の疎隔○助右衞門の惡意地、助右衞門、玉、以春が戀の行違ひ○及び其の意趣 }

偶然―おさん茂兵衞同衾

{ おさん茂兵衞の最後○梅龍が苦心○玉が死○道順夫婦の愁嘆○助作助右衞門等が末期 } 結果

此のうち、主なる有意の罪因とも見るべきはおさんが如何につらき事情あるにもせよ、夫を措いて手代へ內談せし事、輕卒に寢所取りかへの計略などせし事、茂兵衞が主の爲と一時の横道を働きし事等にて、他は凡て從因たるに過ぎずまた此等の因緣は、道ならぬ戀慕といふ一業火にかけて、純然たる姦通罪と鑄成さゞる限りは、此のまゝ如何に一所に結び合はするも、未だ男女が不慮の情交といふ一種奇態の罪案を構成するに足らず、此に於てか作者は偶然といふ一勢力を假り來たりて、暗まぎれの勘ちがひに、遂に無中有を生せしめき、おさゐには誣ひ言、おたねには酒の力、おさんには偶然の行違ひ、此等

すべて作者が事の間際に主人公を純然たる有意の罪過より救ひて、觀者の同情を惹かんとせる手段といふべし、されば以上の三作に見えたる人物、情に熱することは強けれど色情の强旺なる爲に、知りながら義理を破るといふ類の性質ならず、情に乘じて疎忽はすれど、之を續け又は進めて罪の深みに自ら入ることゝなし、他の讒構、事の齟齬、本心の喪失等、特別なる事情を待ちて始て罪案に轉ずるなり、換言すれば、過誤の本たるべき主人公の性癖が、境遇と相結びて自罪を構ふるにあらで、此等生具の缺點を罪に轉ずるものは外界の力なるに似たり、境遇悲劇、社會悲劇の語を推しひろめて、外界悲劇などいふを得とせば、近松の此の三作は外界悲劇に近く、あらはに個人の罪を削り四圍の罪大なるを示せるものといふべし、總じて社會的立脚地より見るときは、如何なる罪人にも憐むべき點あるは勿論なれど、此等の作は、社會的などのむづかしき事を待つまでもなく、たやすく個人の憐むべく四圍の惡むべく、因果の測るべからざることを世俗に了得せしむる、言はゞ露淺膚の外界悲劇なり、但し斯くいふは、直に近松を厭世的なりといふに非ず、近松は界外悲劇を擴充して全社會此の如しと觀せしにあらで、單に世相の種々なる中より斯かる一部を取り出で寫せるに過ぎざること明なれば也、尙此等の關係は他諸篇を許したる後に審なるべし、主人公の地位此の如くなるが故に、罪過後も、彼等は常に身の過失を悔むと共に一方に因果のつれなきを恨む、彼等の因果といふ中には、境遇、運命、偶然、機會等すべて其の自由意志以外の勢力を指す意籠れり、而して一方より見れば、此の因果を恨み身をかこつ筆の巧拙によりて眞心とも虛僞とも、外界悲劇とも性格悲劇とも、人物描寫の善惡は定まるなり、此の點にておたね第一、おさん第二、おさゐ第三ならんとは前にいへり。

其他の三篇の意匠相通ずる節を擧ぐれば、第一、卷のかはる每に情趣輻輳の轂となるべき人物かはる（其の理前々號坪內氏の說參看）『重帷子』にては舅忠太兵衛轂たり、『波の皷』にては本夫彥九郎轂たり、『昔曆』にてはおさんの親道順夫婦

輻輳たり、第二『重帷子』の伴の丞、『波の鼓』の床右衛門、『柱曆』の助右衛門、みな無體の戀に失敗して却りて寇をなす所、同轍なり、第三、女が死する間際となりて、本の夫を想ふ意を一言する所、似たり、第四、女主人公が悋氣激しき爲日頃のたしなみを打ち忘るゝことも三篇に通じて之れあり、おさゐが風がはりの嫉妬は言ふまでもなく、おたねが妹ふぢを打擲する條、おさんが夫以春を懲らさんとする條など、凡て同調なり、青々園氏のいはれたる立役敵役を芝居全體の紋切形とすれば、此等は三篇に通じ、若しくは近松の世話物に通ずる型ともいふべきか、尚考ふべき價値あると共に、一見兎も角も重複單調の觀あるを免れず。

修辭

抱月曰　本篇の文章中には、曆づくしあり、芝居で覺えし傾城詞あり、萬歳の詞あり、太平記講釋に關するものあり、『波の鼓』の謠曲、武具づくし、『重帷子』の騎馬づくし、茶事づくし、俗謠等と共に、後日の參考たるべし。（明治二十九年十一月、近松研究第三會にて）

「冥途の飛脚」

性格

抱月曰　是れまでに評せし「重帷子」「柱暦」「波の鼓」三世話物、いづれも材料を狹斜以外に取りて、筋の上に頗る曲折波瀾あるのみならず、主人公は等しく女の方に歸し、おさゐ、おさん、おたね、三樣の人物性格ほゞ描き成されたる觀ありき、然るに此の度は「冥途の飛脚」を始として、狹斜に緣あるもの丶みを擇り出で評することゝなれるがゆゑ、頗る前回と趣を異にし、隨つて注意すべき點も多し、前三篇の女主人公なるに引かへ、此の篇の主人公は却りて忠兵衞にあること、まづ面目のかはれる一點なり、全體より見て此の作にはおさん、おさゐ、おたねなどの如く鋭くあらはれたる人物なし、是れ一つには筋の單純にして、性格を發揮するに充分なる境少なきに由るか、其の中にては忠兵衞第一、梅川第二なるべし、忠兵衞が八右衞門の惡口聞いて赫とし前後の辨もなくなりて屋敷の金に手をかくるは此の塲合には大抵の人皆さる事にて、あながち忠兵衞の特性より出たる心の轉變にはあらず、「短氣は損氣の忠兵衞」とあれど、是れにてはたゞの短氣なり逆上なり、特性としての短氣とは見えず、むしろ鳥渡したる事にも下女を濡れにて騙し、母の手前を醬水入にて黑むる頓才に、「虛

が重なつて初手の實も虛となれば今は何を云うても誠には思はれじ」と明に自家の地を意識し說明し得る知慧を加へて「女郎衆の前といひ身代を見立てられ猶返さねば一分立ぬ」といふ虛榮心（女郎の前の意氣地は槪して意の力にあらず情がさする果敢なき虛榮心なり）をかぶせたる位が其の性質なり、他に見ゆるものは此の種の人にありがちの薄志と柔情とのみ、「此の金持つては遣ひたからう置いて呉れうか往つてのけうか」と躊躇する所も力なくして分別と情とが鬪ふさまなり、要するに忠兵衛には聰慧といふ知の分子と一と通りの情と薄志とを加へたる色男といふ以上の性質なし、梅川は其の出のあたり「テモ逢ひたいが定ぢやもの憎いなら來て摑かんせ」の前後に一種の氣風見えたるやうなれど、退いて思ふに此はむしろ遊女の俠といふ型に過ぎざるべきか、その前後に絕えて之れに應ずる言動見えざればなり、忠兵衛にいふ言葉、孫右衛門への仕打等に、此の女が情のやさしく何所となく温き所あることは知れたり、詮ずるに此の作は性格描寫の上に好地位を占むるものにはあらざるが如し。

意匠

抱月曰　此の作性格の描寫は思はしからねど、されど猶讀み了りて心に沁みたるものあるが如し、是れ此の篇が性格以外に妙所あるの致す所ならん、思ふに前回の三篇は何れも性格描寫に可なり成功せし趣なる所、假に之れをドラマチックといふべくは、此の篇はリヽカルといふに勝れる如し、全篇短く引きしまりて、人物の特性やゝ埋もるゝかはりに全局の調子高まり、忠兵衛を見るよりも「傾城に誠なしと世の人の申せども」と竹本賴母が淨るり其まゝの味あり。

斯く忠兵衛の性格に讀者の胸をどらす程の所なきと共に、甚しき破綻も亦た見えず、心につれて事柄の移り行くあはひな

ど殆ど隙のなきまで巧に描きたり、今日の心理小說中につき出しても耻しからぬ出來といふべし、筋はたゞ忠兵衛が里の金につまりて屋敷の金を費ひ込み捕へらるゝといふばかりなれど、委託金を費さゞるを得ざるまでの道ゆき、さま／＼の道具によりてせり出され、而も甚だ自然なり渾成なり、初め八右衛門への金が「ふらりと上るを何がなしに懐に押し込んで新町まで一散にどう飛んだやら覺えばこそ」といふ同じ呼吸に、堂島の屋敷の三百兩懐中したまゝ「心は北へ行く／＼と思ひながらも身は南」狐がばかすか氏神のお誘ひかと、知りつゝ踏みまよふ、是れ忠兵衛が心の上の動機なり、一期の浮沈は此の時までに定まれり、されど只此れのみにて其の金つかはすはあつけなしと見て作者さらに八右衛門が惡口に女郎衆の手前梅川あはれといふ械を持ち來たる、寸分の隙なしとは此所をいふなり。

修辭

抱月曰　此の作には複雜なる人情をよく一章一句の中にコンデンスしたる鋭き文多し、継母が言葉に「せは／＼いふよりいはぬ身を耻ぢ入らせうと思うて目をねぶッても聞き所見所は見て居る」後に忠兵衛が身の仇となりしは此の義理人情なり「いつの間にやら大氣になりのべの鼻紙二枚三枚手に當たり次第重ねながら鼻かみやる云々」母を活現せしむるに妙、また前に引きし「ふらりと上るを何がなしに懐に押込んで云々」も「虛に虛が重なッて云々」も皆其の中に無限の人情こもりて、げにも悲劇の素因なり、忠兵衛しほれ返ッて居る所へお屋敷の三百兩、人の金ながら見るより勢ひよく、懐中して思案不思案有耶無耶の間に足は南に向かふ所の妙はいふに及ばず、「今の身を少しは泣いて貰ひたや」もよく「テモ逢ひたいが定ぢやもの」もよく「友女郎の眞中で可愛い男が耻辱を取りそなたの心の無念さを晴らしたいと思ふよりふいと金に手をかけても

う引かれぬは男の役」もよし、末段忠三が家に小息みして、「ハア降ッて來たさうなと西うけの竹欞子反古障子を細目に明けて見るや野風の畠道後しぶきに降る雨はかたげて急ぐ阿彌陀笠道場參打ちつれしはアレ皆在所の知ッた衆」以下叙し〳〵て親父の孫右衛門に及ぶ所、點出の妙あると共に、景も事も頗る此の場合に適合して、目のあたりに見る如し、「夜半の嵐に呼ばれては答ふる野邊のかぶろ松」の一句何の意もなきが如くして不言の味あり兼ねて修辭上活喩の好例と見るべし。

雜

抱月曰　西鶴の『五人女』おさん茂右衛門の末に「地獄の上の一足飛玉なる汗をかきて」といふことあり、近松の此の作にも「地獄の上の一足飛、飛んでたもや」とあり、此等は當時の流行語なりしか、または如何にも氣も魂も身に添はぬ樣を形容して妙なるより、近松が西鶴のを學びしものか、考證家の敎を待つ。（明治三十年七月、近松研究第七會にて）

「天の網島」

性格

抱月曰 本篇にあらはれたる人物、上の卷河庄店の塲にては小春、治兵衞、孫右衞門、太兵衞等、中の卷治兵衞宅の塲にては治兵衞、おさん、孫右衞門、五左衞門、等下の卷大和屋前の塲及情死の塲にては小春、治兵衞等あれども、心となるは言ふまでもなく小春、治兵衞の二人にして、性格の最も尋ねべきもの亦た此の二人に如くなし、餘の人物にてはおさんを最とし、五左衞門など之れに次ぐべくや、太兵衞に於ても孫右衞門に於ても、特癖は劃然として描き分けられたり、さて小春治兵衞の性格については嘗て(本誌早稻田文學)に逍遙氏が詳論せられたれば、吾人の此の論或は重複にわたる條もあるべけれど省かずして揭ぐることゝせり。

之れを小春に見る、治兵衞と二人が戀中を樓主にはせかれ、太兵衞には金で向ふを張られ、此の上は逢ふを二人が最期日と毎夜〳〵の死に覺悟までせし中、外より如何なる故障起こるも此の戀醒めぬ中は情死を思ひ止まる筈なきが通例の塲合なるを、小春は孫右衞門に向かひて治兵衞の愛想づかし、男が起證投げ返す間際になりても、自若として「心得やした」と我

れも守袋を投げ出だす、此の所小春が尋常の女性以上に何物かを有するを見るべし、おさんが言葉に女は相互の事切られぬ所を思ひ切り夫の命を頼む〳〵とかき口說いた文を感じ「身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合ひ思ひ切るとの返事」とあり小春が性の或るものは正しく此の引かれぬ義理合に刺戟せられて動きしなり「一坐流れの勤めのもの義理知らず僞り者と世の人千人萬人よりおさん樣一人のさげしみ恨み憎みも嘸と思ひやり云々」の末期の言葉は益々此の性を顯著ならしむるに足る「少しも氣遣ひなされな假令こなさんと緣切添はれぬ身になッたりとも、太兵衞めには受け出されぬ」「若し金せきで親方から遣るならば物の見事に死んで見しよ」と治兵衞を慰むる言葉には乃ち、凛として一點犯し難き操守のほの見ゆるにあらずや、此等を綜合し來たる時は、小春の特性は略々髣髴し得べし、彼れは天性の聰明に里の意氣地の薫染して、茲に操守の爲には我が身と二なき戀をも捨てんとする一種の性を成せるなり、「世の人千人萬人よりおさん樣一人のさげしみ」といふ所、さすがに女の眞情を穿てるものなれど、而も之れを斯く明さまに意識し道破し得るは女と女の立て引き緊き、かゝる境界に身を寄せしものならでは叶はぬ事なるべし。

治兵衞の小春に對する言動を見れば、常に小春に敎へられ導かるゝ側に立てり、「離別の女に何の義理云々」の條の如き其の一例なり、また其のおさんに對するも同じ趣あり、「あの無心中者何の死なう云々」の條など見るべし、末節さすがに死に際の覺悟はたしかなれども、全體に於て情の動くがまゝに飜轉して、反省熟慮の決斷些も伴ふことなし、情に驅られし盲動の外、動くものは治兵衞なるも、之れを動かすものは多く小春又たはおさんに外ならざるを見る、蓋し逍遙氏の所謂「をんばの日から傘すぼめると同時に若旦那ともてはやされし」外にさしたることなきもの、やがて治兵衞の性格にはあらざるか、小春の愛想づかしを聞いては赫と怒り、孫右衞門の意見には心から感じて一圖に思ひ切るの誓紙書き、五左衞門に嚇されて

は血の涙流して詫言言ひ、おさんの眞心に感じてはおさんに忍び得ず、小春の心意氣を聞いては小春不便に太兵衞への意氣地、世間の手前といふも、本は戀の未練が言はする言前と見るべく、要するに刹那〳〵の情の外には、殆ど思慮分別を此の人物に見出だし難し。

おさんは何所までも情ありて優しき賢婦に出來居り、讀過の際同情は小春治兵衞にも劣らず注がるゝなり、五左衞門のきび〳〵したるもよく、孫右衞門の分別男もよく、太兵衞の敵役もよし。

意匠

抱月曰　結構の上よりいへば、篇中同情の中心は治兵衞に集めらるゝこと勿論なり、小春とおさんとは左右の翼たり、何の譯もなく一直線に死地に奔るべき治兵衞の運命を、まづ小春おさんのいきさつによりて一曲折せしめ、五左衞門の頑固によりて更に之れを窮谷に擠し、今さら退きも進みも出來ざるに至りて始めて情死の本題に入る、一歩は一歩より途を險にして死を迫り出だす呼吸、今の作家も及ばざるものあり、また大まかに之れを見れば、おさんは分別、小春は義理、治兵衞は情の三者を綯ひまぜて、此の悲劇はなれるものといふべし、結末男女が髮を切るといふ趣向、若し之れを事實によりて潤色せしものとすれば、事實は單に浮世の爲といふが如きものなりしを、妻への義理立といふことに飜案せしものかとも思はる、此等些末の事なれども作者が意匠の行方見えて面白し、また死にやうに樣々ありて、首つりなどは何となく興醒むる心地するものなれど、之れを使ひこなしゝはうれし、但し沙翁などに死を美化して叙する筆法あり、此の篇の「しばし苦む生り瓢、風に揺らるゝ如くにて」といへる如きは稍々之れに近けれど、尚何となく物足らず、生り瓢の風に揺らるゝ風情は、以て狡

死を美化するの力なきなり。（明治三十年十月、近松研究第八會にて）

「雪女五枚羽子板」

意匠（脚色及び人物）

抱月曰　世話物は勿論、少し讀みごたへある他の時代物などの後に此の作を讀めば、雜炎のあとの茶漬一杯、サラ〳〵としたる所に味あり、可笑しいも、悲しいも只ワッといへば其れで胸がすき、腹には何も殘らぬ所、誠に恰好の正月物なり、善人といひ惡黨といひ、何れも見かけ一ぱいの罪なき人物ばかりなるは、諸作大抵似たれど、此の篇取りわけて其の氣味あり、篇中の山とも見ゆるは、中川が降りつむ雪に凍え死ぬる哀れと、小晒が似せ婿の可笑しみと、義將が諫言の胸すかしとにて、他に諸氏の敎へられたる雜多の趣向を副へたる所、夢幻劇といふもの丶あらゆる要素を縮寫して幻燈にかけたる如し、この事は尙他の諸篇を評したる後にいふべし、又作者が筋に重きを置かざりし證據には、苧卷、玉椿、琵琶の君、小晒など立消えとなりし人物多く、事件總じてばッとして締まらぬ節あり、一色大炊介が素性の知れるまでのふるまひ善とも惡とも判然せぬは、此の種の作に不似合なり、自然に近しといふものあるかは知らねど、此所にては作者の怪我なること明けし、馬琴の『美少年錄』などの例と等しなみに見るべからず、又篇中所々逍遙氏のいはゆる恐縮的の文句擧動、他の作よりも多

きこころ、却りて一部の人氣に叶ひしにあらぬか。（明治二十九年十二月、近松研究第四會にて）

「國性爺合戰」

意匠

抱月曰　一讀の後此の作の意匠に關して感せし事ども少なからねど、玆に主なる非難の一を言はゞ武士氣質の見せ具合に慊らぬ節あること最もあたらし、總じて時代物に個人の性格といふが如きものゝ明かなる人物少なきことは、既にしば〳〵言はれたれば省きつ、此作の如きも主とする所は日本武士の氣象を國性爺はじめ各種の人物に寓して、李蹈天等以下の人物には外國人氣質、むしろ日本武士の氣質と直反對に卑劣なる一種の言語動作を持たせ兩々相映發して武士氣質を一段明瞭ならしめんとするにあるべし、然るに此の武士氣質といふものゝたゞきはめて漠然たる模型的人物となりて出でたるは勿論、模型的にすら十分熟成せざりし觀あるは、吾人が此に慊らずといふ所以なり、作中に見えたる武士氣質の中には、作者もしば〳〵斷れる如く、義理も武勇も具へたる上に情を知り涙に弱き所あるを極致とする趣あれど、武勇は論外とし、義理といふものゝ頗るうなづき難き箇所あるはいかに、殊に理と情との和し難き塲合に處して枉げても情を捨て理に循ふは、觀る者に取りても一倍悲しき事にはあれど、之れを賣り物にし又無理强いせらるゝに至りては、辟易せざるを得ざるべし、近松が

時代物中の義理、人情、多くは此の氣味あり、義理といふもの概して無理こじつけ、隨つて是れと人情との衝突も不自然なり、語をかへて言へば、物の哀れを知る人の型、まづ可なりとするも、之れをして義理の人たらしむるに到りて、遂に矯飾のみ、自ら好んで義理を作るの人のみ、餘りに仰山、餘りに淺薄、また餘りに牽强なる所一點の眞趣を欠けり、固より稀には此の例に漏るゝ人物、塲合もあるべけれど、要するに概ね此の傾あるを免れざるなり、甘輝、錦祥女を殺して和藤内に味方せんといふくだりの如き、親子三人が義理人情にからまれての大愁嘆はさることながら、觀る者に取りては、其の斯くの如くならざるべからざる因由に思ひ到る時、索然として同感の妙味は消え失すべし、之を悲しと見るは必ずしも本の因由に思ひ到らずして、單に夫は義の爲に姉を殺さんとし、親は義の爲に之れを止めんとすといふ悲しかるべき事柄にのみ同感し、足らざる所は我れより種々の感想を加へて之を補ひたるに由る、吾人は此の塲合に、眞に理情を融合せる武士氣質の模型だに認め得ざるなり、但し義理といひ人情といふもの凡て名聞の上の事にして之れを衒ふ氣味ある所却りて當時の武士の風なりといはゞ、其は別問題なり、眞の武士氣質を描かんとして虛僞の武士氣質に陷れる點あれば、少なくとも其の點だけは詩人として描寫の到らざるものといはざるべからず、尙近松の時代物が武士氣質を寫せりといふ說につきては後回に總論することあらん。

修辭

抱月曰　近松には時代より世話に砕ける趣、筆の上にもありて、其の砕けざまに一種の妙あり、また此の爲凡ての人物事件が町家ナイズせらるゝことあり、眞面目なるべき所をも此のために打ち壞はすことあり。

管絃の道文の道文字もはたらく口ずさみ日本で歌といふげなが男女を和らぐとや云々
伽の女官召しよせて浮世話もさゝやきの耳は戀する眼は睨む心が伽羅の焚さしの云々
帝も后も掴め取つて味方に降り韃靼王の臺所につくばい炊水でも啜つて命をつけ云々

此の例尚多けれど省く。

又例の字謎には明の字の講釋三ケ所まで見えたり、物づくしには「濱づたひ」の章に貝づくしあり「九仙山」の章に碁づくしあり。（明治三十年一月、近松研究第五會にて）

「曾我會稽山」

意匠

抱月曰　此の作には照織といふことを本にしたる面白味殊に多し、まづ十郎と五郎との、一は和く一は荒きが目立ち、次には大序、女性ばかりの列座評定といふこと平生諸士のそれに對照しておもしろく、巴　剛力は普通の女子のかよわきに對しておもしろく、朝比奈、五郎等の一方に強く一方に小供のやうなる所も照りあひて面白く、其の他善と惡、眞面目と滑稽などの取り合はせをかしきは例の通りなり。

又曰　舊史劇には、悲しといふよりは寧ろ有りがたしといふ感激の情を刺戟するを中心とせるもの多し、本篇の結末、時宗が繩かけらるゝ條、頼朝みづから手を下し、

さりながら一騎當千のつはもの雑兵に繩かけさせんは弓矢の冥加も恐れあり頼朝が繩かけんと忝くも御大將白洲に飛びおり眞紅の總うつたる御鐙あげまき取つて押したぐり

の邊以下最もよく此の消息を傳へたるものにあらざるか。

修辭

抱月曰　譬喩、造句の新しくして味あるもの多きは近松が文の特色なること、今さら言ふまでもなけれど、新らしからぬ語の誠によく其の場合にかなひて面白き使ひざまなるも多し、鬼王が蒲殿に見參のくだり、

昔のつるぎ錆浪人貧き家には故人疎く世にも人にも侮づられいつ花咲かん埋もれ木の身の無念存じ合はせて不覺の涙

といふ所何となく悲しく假屋にて龜菊が曾我兄弟の逸（はや）るをなだむる條、酒にたとへての言ひまはしの妙なるは、勿論、其の末、

是れを本望本酒の手柄といふわいなさりながら此の菊もいつぞや山下宿で三日三夜和田さんの大よせに朝比奈さんの無理酒には誓文さんといきついた

のあたり如何にもおもしろし。（明治三十年五月、近松研究第六會にて）

『假名手本忠臣藏』

抱月曰　吾人今日にては、殆ど此の淨瑠璃を讀本としてのみ批判する能はず、其は此の作の脚本となりて舞臺に演せらるゝものに目なれて、讀下直に舞臺面の幻影目睫の際に浮び、讀むと觀るとを分離するの餘裕なければなり、吾人は信ず、此の所却りて脚本を評するの本旨にして、本篇の如きは、畢竟脚本として成功したるものに外ならざるを。

此の作の劇として空前の喝采を博せし由は、諸家の說之れを悉せり、其の斯くの如くなりし所以のもの、必ず理由あるべし、誠に之れを數ふれば、第一は題目の妙なることなり、君父の仇を報ずといふ、事すでに我が封建時代の武士、むしろ全大和民族が理想の一部を代表す、士民の翕然として之れに景仰の念を寄するもの、誠に故あることなり、而も況んや、事は一藩の浮沈にかゝり、四十餘人の士が義心を鐵石の堅に比して、同契是れを成す、當に我が舊國民に取りては、駭心盪魄の事なるべきをや。

第二は理想的人物の表現是れなり、主人公たる大星由良の助は、たしかに當時の上下にわたれる理想的人物を代表せるものゝ如し、其の智勇兼備は勿論、武士の動々もすれば缺く所、また之れを缺くを以て得意とせし所の、情の一面、就中洒

脫風流の一面をも併有して、七段目の嚴肅と綺艶とを殆ど一身に融合し、而も猶一身巍然として、千樣の情波、萬種の曲折を脚下に集むるが如き觀あり、渾然として無碍の態ある所、決して夫の芝居の上の畠山重忠、駒澤次郎左衞門などいふ、屑屑者の流亞にあらず、また八犬士流の偏固窮屈の態をも脫せり、蓋しあらゆる方面に圓熟せる元祿時代の理想が、略々圓滿に近かりしの致す所か、後世は則ち索然として箇裡の温味甘味を失し、矯飾となり、勃窣となる、由良之助の人物の、町家一般の見物にまで滿幅の同情を徵せし所以のもの、恐らく此にあるべし、切言すれば、由良之助は一面に武士的本性を有すると共に、他面殆ど市井の所謂大通者の面目を具する所に、全社會の景慕を惹き得しなり。

第三に忠義、義俠等の諸方面に、其の社會々々の極致的人物を有することとなり、就中町家的觀客に取りては、勘平、おかる、天川屋義平などいふ人物を、よく此の大事件中に襯染したること、幾層の興味の源なるか、知るべからず。

第四に武士的と、市井的とを調和せしむる所に手加減の妙なるものあり、近松以來多くの淨瑠璃が、武士的題目を擇ぶも猶其の結果に於て市井的なるを免れざりしは、一は見物の種類にもより、一は作者の身分にも由れど、本篇の如きは、武士的題目を市井的境遇に引き下げたりといふよりも、むしろ此の二面を一點に調合したる觀あり、勿論間々、町人が武士の眞似事に類するものなきにあらねど、要するに前段由良之助の性格の二面に於て、また、

第五、筋の大本、君仇を報せんと謀る武士が遊蕩の間に跡を晦ますといふ有趣絕妙の結構とに於て、武士的と市井的とは能く調和せられたるなり。

第六は、以上の諸元素を統合して、忽にして壯嚴、忽にして悠揚、忽にして艶絕、忽にして淒絕、或は滑稽、或は愼肅、一善一惡一柔一剛隣比して、眼應接に遑なく、心觀望に暇なき底の所謂夢幻的結構を恣にしたるも、此の作の特長なり。

第七は必ずしも夢幻的といはず、舞臺の上、見るものとしての趣向おのづから奇想の域に入り、美趣の掬すべきものある所、最も劇としての緊切事なるべし、吾人は此の一點を本篇第七段、所謂茶屋場の條に由りて細拆し試みんとす、蓋し此の作中推して第一とすべきは七段目にして、一篇の詩趣は殆ど此の一齣に集中せられたるの觀あり、此の場を評するはまた忠臣藏の全體を評すると同じかるべきなり。

第一段は兜改め、師直と若狹之助の衝突を示して、本篇の骨子に比すれば稍々枝譚に渉るの嫌あれども、翻つて見れば、是れ決して枝譚にあらず、師直の人物を彫り浮めんため、また後に出づる重要人物鹽冶が性格を活動せしめんため、鹽冶と略略相似て而も多少の相違（例へば判官にして一層の短慮未熟といふが如き點）ある、而して師直とは全く相違せる若狹之助を點出して、暗に照緻對照の用をなさしむ、作者に其の意はなきとするも、其の迹は嚴にいふ性格刻畫の準備あるものなり、然れども、未だ巧み得て妙なるものといふべからず。

第二段、若狹が館、本藏を點出して暗に判官が身を亡すの根本を若狹が上に見せしまでなり、前を受けたるのみ、他奇なし。

第三段、御門前匆忙の際におかる勘平を出して、本篇中最艶のぬれ場となす、照緻の法といふの外、何事もなし、殿中の場は、此の劇の起頭にして判官、若狹兩箇の似たる人物が、最も失敗すべきものゝ成功して、比較的成功すべきものゝ失敗せる兩樣の因果を現ず、着意や善しといへども、事は淺薄、到底今日の理心高き觀者を滿足せしめ難かるべし。

第四段、判官切腹、何の奇もなし、たゞ全篇の骨髓たる由良之助を始めて場に上すため、切腹間際の判官が待望、寄託、諸士の景慕等あらゆる準備をなす所、作家の苦心の要なるべし、城明渡しは、近く團洲の技に、之れを抒情的一齣として初

めて妙なるを見る。

第五段山崎街道の場は、「金が敵ぢやいとしぽや」の哀れを見せしまでなれども、後段の序として別に一箇の悲劇をなす、此の邊より劇漸く趣味を加へ來たる、情の一味深ければなり。

第六段はおかるが身賣、勘平が切腹、固より本筋と藕絲相ひけれども、而も前段山崎街道の場に始まりて、後段茶屋場「勿體ないが父さんは」の條に結びて、別一條の好悲劇、忠臣藏中に人のおかる勘平を說くものは、實に忠臣藏以外に一の悲劇を見るなり。

斯くの如くにして、步一步、興汪し神馳するの境に達したるを、第七段目茶屋の場のくだりとなす、地は是れ紅燈綠酒金衣舞ひ白馬驕るの歡樂郷なり、人は是れ四十七の棟梁として、一代を驚かすの壯絕快絕事を胸に藏するの義士なり、人間の兩面はゆくりなくも此の一場に會して、歡樂裡に哀傷あり、哀傷裡に歡樂あり、悲壯の情、痛刻の感、人の腸に沁す、此の情感はやがて忠臣藏一篇の情感にして、吾等が前々來の所說、要するに此の一齣に盡きたり、はじめ先づ千崎等の訪ね來たりて、由良之助が本心を疑ふに幕を開く、平右衞門ありて、「呑んだ酒ならさめずばなるまい」の痛切語を點じ事をして益々實ならしむ、次いで力彌が忍びの使事、一方千崎等に對せし由良之助が裏を見せて、劇に必要なる、少なくとも當時の觀客には無かるべからざる、詭謀の解釋を與ふると共に、他方本齣に緊要なる御臺の文を此に致す、文既に至る、おかるはあり、九太夫なかるべからず、而も其の由良之助が本心をためさんとする酒間の些事の如き、今日より見れば、畢竟兒戲のみ、これ作者が惡人に重きを置かず、從つて之れに同情することなきの致す所、惡人と淺薄、此は舊劇の特弊なり、かくして樓上にはおかる緣の下には九太夫、艶と醜とを上下に配して、中間に一個の英雄漢由良之助を點す、文は優しき水莖のあとに、

復仇の大事を說く、謂ひつべし、天地間有數の壯觀また奇觀たりと、作者の技巧も此に至りて極まれる哉、延べ鏡の荒誕はいはずもあれ、おかるの身うけ平右衞門おかるの邂逅、すべて斷腸の事ならざるはなし、形の上に於て、また其の中心の意味に於て、七段目ありて始めて忠臣藏ありといふべし、吾人は此の一場の好結構の粉本を、前人の作に求めず、また後人の此れに摸するも　を取らず、所謂一ありて二あるべからざるの趣向といはんとす。

第八段目、九段目、山科にお石、となせ、小浪、本藏、力彌の錯綜は、是れまた切り放して別の一悲劇を見得べきこと、おかる勘平の場合の如し、而も彼れに比して情趣の至らざるや論なし、門に立つ虛無僧が尺八の音と、內に娘を斬らんと振り上ぐる烈婦が柄の冴と、奧に御無用の掛聲と、三者不離不即のあはひに何となき一種の味あるを取るのみ。

第十段目敵討は、一篇の歸結而已。

以上、吾人は主として此の作の美所を稱說せり、其の惡所短所は、今之れを細說せず、一言以ていへば、性格の描寫に於ても、悲劇的布置に於ても、未熟なり、幼稚なり、淺薄なる、舊劇の圏內をば脫せず。（明治三十一年一月、近松研究會にて）

理想美と節奏

一つ歌の節奏のことに就て話して見やうと思ふ。節奏、又は音質律と云ふやうな音の性質に基く律は、凡て二ッずゝの音の湊合し對照して成立つものと云つてよい。先づ此の原則を假定して置き、さうして西洋の詩とか音樂、殊に極く普通な粗末な樂隊歌杯の上で見て見ると、概してあちらのものは音の抑揚が極めて著しく耳に立つ、西洋の吟聲などで見ても非常に上げたり下げたりする、一言を以て言へば抑揚二つの對照だね、アレが音の質に基いた節奏と云ふものを極く簡單に現はしたものと思ふ。して見ると結局詩の上にでも同じ原則に依て抑揚と云ふ二つの相對したもので調子を付ける日になると、一對即ち偶數に依て一つの調子が出來る譯である、であるからして其調子を七つなら七つ續ける、三つなら三つ續けるとしても、結局其數の總體は偶數にしなければならぬ、二つ宛重ねて往くのである。であるから一番了ひになつて所謂韻と云ふものを置いて、上來偶數で重ねて來たもの、即ち平行均整といふやうな單調な形式美で續けて來たものを、一つの長い破格な音を付けて即ち奇數を一つ挾んで、ちやんと休息の狀態に任せしめてしまふ。今まで波の如く紆行つて上り下りして來た偶數の音列が一つの長い音に依て休まつて了ふのが、極く乾燥無味に分析して見れば詩の音の性質に基いた律、即ち調子の原

則だらうと思ふ。譬へば「君が代は」と云ふのだね、「君」で上り下りがあつて、「が代」で上り下りがあつて、「は」と云ふので、一つの休みがあるのだ、デあるから詰り之を言ひ換へて見れば、詩の調子と云ふものは偶數の或る數を重ねた一番お終ひに、奇數の長いものを置いてソコで休息の情態を示すと云ふのが、韻を備へた平仄の結果であると思ふのである。支那の詩で言つても五言の詩と言つても七言の詩と言つても皆其意味を現はして居るので、即ち五言といつても二音づゝのフートが二つあつて終ひに一つの休みがある。七言になると二音づゝのフートが三つ重なつて終に一つの休みがあると云ふのが原則のやうである。また單に音數のみの律から言つても、二二一で五言句が成りたち、二二二一で七言句が成り立つ、即ち口調の上にやはり前言つた形式美の原則が行はれてゐるのである。七言の句が、意味からいへば三四や四三や五二などに切れるやうに見えるのは、實は間違ひで、みんな或る對偶數の後に一音の休み音の添はつたのである。七言とか五言とか云ふ奇數が、不思議にも東西を通じて詩の音の數になつた理由は、少くとも一つの根據が此處にあると思ふ。然らば日本のはどうであるかと云ふに、日本でも矢張り七五と云ふことを云ふ、又五七と云ふことも云ふ、然るに日本の言葉は本來シラビックであるに拘はらず支那のシラビックでない、即ち一音に澤山の意味を含んだ言葉で成立つて居る漢詩と同じやうに極めて數が少ない、西洋の例に倣つたならば、日本のやうなシラビックの言葉ならば、詩の一句の數がモッと長くなければならぬ。ソレでないと或る程度まで意味の充分な言葉を一句の中に含めることが出來なくなつてしまふのである。餘り句の切りやうが日本の言葉の性質としては短か過ぎる、然るにも拘はらず日本は五言七言はいつか續いて五七又は七五と連續的の意味となり例へば七五なるものは七言五言と云ふことを意味せずして、自然の結果七に五を加へたもの乃ち十二言と云ふ句になつてしまふ。昔し五七であつたものが七五に變つた、其の論は別として七五と云ふことを言ひ換へれば十二言と云ふ一句にならなければ

ならぬ傾向になつた。十二言と云ふのは七言と五言と合せ用ゐると云ふ意味ではない。更に言ひ換へれば句を長くすると云ふことであつた。デあるから其結果はどうなつたかと云ふと一つの矛盾が其處へ出て來る。若し七言五言を續けて見ると十二音になる。デあるからして之を謳ひ若くは吟ずる場合に於て、節奏の自然の原則に從つて偶數のフートを或る程度まで重ねて、其終りに一つの休め音を置いて句の終つたことを現はすと云ふことに合はなくなつて來て、十二音即ち偶數の音で終らなければならぬことになる。此に於て乎一言缺乏を生ずる七五言といふものは、であるからして之を謡ひものに合せる場合になると何處かに一音を補ふか、左もなければ一音を減さなければ節奏の原則に合はなくなつて來る。之が果して事實の上にどう現はれたかと云ふと、勿論私の觀察がまだ專門の部面に這入つて觀察しないのだから分らぬけれども、一番手近かな學校の子供の謳ふ唱歌に就て見ても、皆五七の調子で往つて唄を謳ふのに七言を八言に言ひ延ばして居る。例へば抑揚の極く粗雜な鐵道唱歌に就いて見ても「汽笛一聲新橋を」といふべきを「きいてきいつせい」と七言を八言に延し、さうして「しんばしを」の五言を加へる。つまりが十三音になる、十三音になるからしてソレを數學的に割つて見ると、二つ宛のフートが六つ即ち二六の十二音、お終ひに「を」と云ふ休め音が一つ、ソレで前に言つた調子の原則に合ふやうになつて來る、さうして見ると日本の七言と云ふのは實は八音ではないか、又更に言ひ換へて見れば八言と言ひ切る必要もなくして、結局十三音句と云ふのが一番至當ではないかと思はれる。ソレなら假りに七言と云ふのは八言、七五といふのはつまり十三音句であるとして、吾々が歌を詠んで見るときにあつて、果して八言と云ふ口調が口に快いかどうかと云ふことを調べて見ると、どうも吾々が普通に詩や歌を詠み若くは吟ずる位の程度では八言は何んだか可笑しいのである。矢張り七言の方がソコに一種の節があつて味ひがある。さうして見ると前に言つた事實及び原理のあるにも拘はらず、矢張り一方で言ふと七五と云ふも

のも無意味ではないやうである。それなら何せさう云ふ矛盾が生じたかといふに、是れもまだ詳しい論は立たないのであるが、先づ私の思ひ付いた唯一の原因であらうと思はれるのは、詰り日本の歌に抑揚即ち平仄と云ふものが全くおろそかにせられて居る結果、吾々の耳と云ふものは少くとも朗吟する位の程度に於ては、耳に之を聽かうと云ふ習慣も趣味も全くなくなつてしまつて居る、唯だ音の數の上計りに或る制限を見付けやうとして居る、此に於てか十三音若しくは十二音といふやうな長い句は此の音數律ばかりでは背負ひ切れなくなつて、中間に小休みが入用になつてくる。やはり前半にも節をつけ後半にも節をつけ七五とか五七とかにする、此に至つては最早八五では原則に合はぬから詮ずる所七五すなはち上にも下にも奇數、句を作り短くちよい〳〵と切つて自分の耳に善いやうに感じさせるのである。若し吾々が意味にも拘はらず可笑しく聞えるにも拘はらず、八五の句を或る樂隊的の極めて可笑しい調子でも構はぬけれども、一言づゝ上げ下げして試に讀んで見ると矢張り七及び五と間に小休みをして、七五に戻つてしまふ、さうして見るとどうも音の性質に關した律と云ふものがソコに缺けて居る爲めに、日本の詩は長い意味を含ませた所の十三言と云ふやうな句は今の儘ではどうしても成立たずして、矢張り意味の如何に切々なるにも拘はらず、又短い同じやうなものを屢々繰返されるが爲めに耳が單調になつてしまつて、七五と云ふやうな考へ計り頭に這入つて來て、嫌氣になるにも拘はらず七五でなくてはどうしても可かなくなつて來る。十三言の長い句と云ふものは、吾々の耳に快からず聞えると云ふ結果になる、斯う私は思ふのである。今迄言ふた事を更にモウ一度括つて言へば、七五と云ふものを七音五音に切つて見るときは、平仄の律なしに唯だ音の數の上の律のみと云ふものが吾々の頭に這入つて、ソレは一種の調子はあるけれども其短い、同じやうなものが屢々繰返される、其結果耳が單調になつて所謂七五の厭味が出て來る。然らば此數を替へて七五を全く續けやうとすると、一音増す必要があると共に、通

例は平仄がない爲めに吾々の耳に快く聞くことが出來なくなる。平仄を持ッた音律ならば必ず八五即ち十三言の長いものも聞かれるが、平仄のないものは二つに分かれて七五別々に聞かれるやうになる。斯ういふ結果になるのである。此の話は先づ此れ位で止めて置かう。

今一つは美學に關した話である。是は更に纒つて居ない極く斷片である。實はアノ高山君の例の抽象美の論に就て何か書くことになつて居るので調べ掛かつたのであるが、少しまだ纒まらないので、ソレから脇に逸れた話である。色々調べた材料も少しあるけれども、それは拔きにして他日の事として置いて、唯だ私の思ひついた一點だけを言へば、抑々高山君の抽象美といふ言葉が惡るいのであらう。あの論にも或る程度までは慥に眞理があると思ふが、抽象美抔と云ふ言葉が抑々いけないので、せめて抽象理想美と言つたら、あれほど面倒にならずに或る程度までは通過させられたのであらう、少くとも一方には同意せられたであらうと思ふ。抽象美と云ふ爲めに誤解を招く所があると思つて居る。併し高山君の論としては立つにしても、抽象理想美と云ふ議論が果して吾々を滿足させるものであるか否かは別問題である。寧ろ吾々はどつちかと言へば反對の方向に立ちたいのである。ソレとは道の逸れて居る話であるが、私は寧ろ今日の所謂具象美性情美の議論に對して別の方面を望むといふ塲合には昔の形式美の論をモウ少し調和することが出來はしないかといふ問題を提出する。若し高山君の如く新しい題を提げて立つならば、形式美の調和論と云ふやうな題を提げて立つことが出來ると考へるのである。詰り美學上の思想を近世と上古とに分けて見れば、上古思想の中心は何處までも形式美が焼點になつて居る。ソレから近世思想の中心は矢張り特性美、即ちキャラクタリスチック、ビユーチーの方が中心になつて居る。此の二大反對說と云ふものゝ移り變りの時代に幾多の思想の出た中には、丁度此二つのものを調和すると云はうか、或は一方から他に移る所の橋渡しと云

はうか、この、形式美の原理が特性物の發現存在の根本になつてゐるといふやうな傾向の説も見え掛かつて居る、けれども思想の進歩の原則としてさう云ふ中間的即ち鼠色のものは許されなくして、古代思想の形式美の論からして近世思想の特性美の論にズツト移つて、さうしてそれが極端まで往つたのが例のハルトマンであるが、寧ろ吾々が今日の近世思想の極端にまで往つたハルトマン等の特性美の論に對して不滿足を感ずるのは、形式美の論が餘りに壓倒せられ過ぎて居るといふことである。總ての考へに形式と內容との調和を要するやうな工合に、美論の上にも昔の形式美と近世の特性美とは少くも五分五分の地位を保つて、調和した點が見出されるであらうと思はれるのであるが、丁度ソコ等の説に都合の好い一つの例は英吉利のレーノルヅの説である。即ち天地の現象は皆神の目論だ一つの目的に適合するやうに形もスツカリ出來て居る、更に言ひ換へれば總ての形が一點に皆統一せられて居る。ソレが即ち美なる所以であると云ふ説に立てゝあるのだ。勿論萬物の目的といふことはカント其他の學者もいふ所であるが、其見方がカントはまだよしとして、其以後になつては吾々形式美の説と背いて來る。レーノルヅの此説と云ふものが詰り一方から言ふと昔の變化の統一、即ちユニチー、オブ、バラエチーを着物にして居つて、中味をば近世の特性美の説にしてゐるのである。即ち啻に形の上で形式美の原則が行はれて居るのみならず、形式美の其原則は又確かに塊つて內容の意味になつて居る。吾々の個々の性質、各々自ら持つて居る特性と云ふやうなものは皆或る一點を中心にして居つて、即ち神が此物なら此物を造つた其目的、又彼の物ならば彼の物を造つた其目的其一點を中心として總ての性質が皆それに赴いて居ると云ふ其意味が近世の所謂特性美であつて、而して又其姿を言へば變化の統一と云ふ昔の形式美の原理と合して居る。カントのパーバシヴチスの説の如きも解しやうによつては此の言に合すると見られる。斯う云ふ風に近世の所謂特性美の性質を説明すれば、昔の形式美の説と近世の特性美の説とは相一致する點が見

出されるであらうと思ふ、丁度其一致の道を示すものが今言ふたレーノルヅなどの說であらう。殊に斯う云ふ風な說明にして置くと云ふと、東洋の美術を說明するに大變都合の好いことが出て來る。高山君の所謂抽象美の論の出た其動機の一斑も此說に依て或る程度まで蔽ふことが出來ようし、併せて近世の美學の餘りに片一方にのみ行過ぎたのを引戾して、新しい局面を開くことが出來はすまいかと思ふ。勿論西洋の美學の最近の傾向は心理的の方面に生面を開かうと努め、又開かれんとしつゝあるのであるが、其方面でなく哲學的の方面から見ても、斯う云ふ方面ならば或は新しい局面が展開せられる。必ずしも心理學の方面にのみ赴かずとも、哲學的の方面から見て何か面白いことが言はれはしないか、併し此論は極めて不備なるものであるが、唯だ私の思付いた點だけを述べたのである。（明治三十四年一月筆記）

思想問題

されば此の國の風氣に染むにつれ、最も先づ我等の心に壓し來たるものは、宗教問題に候ふべし。御承知の如く目下政治部面に於いて黨のあひだ、人のあひだに火花を散らして戰はるゝ敎育案の爭ひの如き、やがて直ちに此の國の宗教問題、道德問題、人心問題の現狀を曝露したるものには候はずや。否な、延いて歐洲の全局にわたれる思想界亂調のキーノートとも見るべきものに候はずや、思ふに宗教の前途はまことに測りがたう安んじがたきものゝ一つに候ふべし。吾人が目下の見を以てすれば、少なくとも歐洲の基督敎は眼前に非常の危機を控へ居るものに候。此の點我等の日本にありて、日本の宗教的狀態に鑑みて推測せるところと、此の地に來たりて密に事實に觸れて考ふるところと、大差無し。常英國を標準として申すときは、歐洲の社會といへども、宗教が人心に對する眞實の勢力は決して誇るに足るべきものならず。少なくとも吾人が宗教といふ一語によりて思念する、一種超越にして熱力あり莊嚴あり依賴あり鼓吹あるが如き眞個の宗教的信仰が社會の人心を支配し道德を維持すとは夢にも思はれず候。大陸の諸國に比するときは、英國は最も宗教的道德的なりと申す、而も其の英國に於ける內面の宗教的勢力が既に甚だ賴むべからざるものたるは、少しく洞察の力あるものゝ等しく否む能はざる事實と

存じ候、此の事實に異存を挟むものあらば、其は必ずや天性負け惜みの强き當國人みづからが彌縫の言か、然らずんば此の種の言に聽いて而して事の裏面を觀るの明なき徒が、膚淺の立說と存じ候。

然れども、之れを大陸の諸國に比するときは玆に英國の沒すべからざる特色を保有し居ること勿論に候。現時大陸に於ける基督敎の眞地位は、殆んど零と申すも大過無きものゝやうに候へば、舊宗敎はかしこに於いて先づ内より崩れたりとも申さんか。固より敎會あり、勵行あり、誓文に基督の名を呼び、國に基督敎國の名を冠するが如きは、滔々たる習風今なほ古の如くなるを得んも、此等の事實、宗敎の眞生命に何程の價値をか添へ候はんや。覺醒ある人心の奥に於いて、舊宗敎はすでに其の積極的威力を失へりと申すべし。

吾人はこゝに積極的威力といふ、其の意、宗敎の鼓吹的方面なり、宗敎的信仰が積極的に道德を指導するの謂ひなり。宗敎と道德との關係といふが如き論は、現下なほ日本の論壇にも榮へ居るやうに候へど、歸するところ、從來世人の漠として唱へ來たれる宗敎的信仰といふもの若しくは其が威力には、積極消極の二面あり。積極に於いては、彼等は宗敎的信仰といふ美しき名によりて、人生不斷の指導者を得、鼓吹者を得、保助者を得んと致す、絕えず人心の一隅に神の名と抱和したる一道の熱火あり、人生の行路すなはち道德の神秘的直射的なる燈明となり氣力となると想像致すものに候。また宗敎的信仰の消極とは、彼等必ずしも不斷といはず、鼓吹といはず、指導といはず、たゞ暫時隨所に休息を得、安慰を得、沒入を得んとするものに候。彼等は決して日常不斷の道德的行爲に一々神の信念を呼び出だすを須ひず、或は在來習俗の道德により、或は自家特殊の理窟により、たゞ正直に殆んど自ら是非を疑ふといふが如き境に想ひ到ることすら無くして、此の世を過し行くものに候へど、一朝身世の不如意、人事の蹉跎に遭遇し、煩悶し、嗟嘆し、困憊して爲す所を知らざるに至るや、こゝ

に仰いで訴ふる所を得んとす。退いて息ふ所を得んとす。これやがて消極なる宗敎的信仰の作用するところに候ふべし。神といふ、大樹の蔭に、しばしが程の安息を得んとす。安息し了れば復たび新たなる旅程に上る。而も吾人は安息によりて唯一時の慰藉を得たるのみ回復を得たるのみ新たなる旅程の岐路を之れによりて指導すべき別種の力を得んとは必すべからず。要するに宗敎的信仰の積極は發動的にして消極は受動的なり、一は皷吹にして、一は安息なり、一は行住坐臥なるべく、一は隨緣時發なるべし。積極消極の意これのみ。嚴にいふ宗敎的信仰の威力はこの外にあるべからずと存じ候。

而して大陸の宗敎が事實に於いて其の生命の大半たる積極的威力を失ひ了せりと致さば、換言すれば、眞實、神の爲に戰に赴くの勇卒、來世の念、敬神の心に信念の基礎を置きて信ずる所に忠なるの國士、神の榮光に接すと意識して此の世を樂しく送るの良民、此等のもの漸く世の進步といひ、知識といひ、自覺といふ社會より跡を絕たんとすと致さば、剩すところは知るべきのみ。基督敎は唯僅かに消極的生命を敗殘の餘に保つものと申すべし。寂寞たる敎會の薄暮、冷かなる腰掛の片隅に、一人默然として祈禱の願を得も上げざるものは、蓋し半生の罪惡身を責めて、神の大悲に安息せんとするものなるべし。弊衣蒼面の人が仰いで薄運を嘆じ俯して神の慰藉に依らんとするもまた此の處なり。日曜の敎會に集まる老幼も、敎會の重き空氣に包まれ、撫するが如き讃美の樂に心耳を澄ます間は、暫く浮世の愛惡を忘れて、玲瓏の境に沒入するを得。此等は宗敎の消極的効果に候はずや。されど一步敎會を出で、一旦境遇を異にする時は、宗敎的態度は忽消し了す。敎會は畢竟我に淸き安慰を與へ、思念反省の機を與へて以て遷善改化の緒を作らしむるの道具たり。神の名に於て之れを莊嚴し、音樂唱歌色彩建築等の美術的威力を以て之れを有力にしたる一の道德的器具たり。其の以上今の敎會、今の宗敎が人に何程の不朽の精神を皷吹し得べしとも覺えず候。固より少數の無邪無識なる人々に殘れる舊信仰の威力は論外と御覽あるべく候。

斯くして歐洲の基督教は空なる名と、空なる會堂と空なる儀式と、空心なる牧師、空心なる信徒との外、たゞ消極的信仰に其の餘命を保つものと存せられ候。

されど其の消極的餘命と申すものすら、大陸は既に之れを亡じたるに近し。彼等基督教徒に取りては一週の聖日たる、日曜のさまに御覽せよ、前より此の地の人々が論ずる日曜の性質論の如き、最もよくこの間の消息を漏らすものに候はずや。大陸的日曜のたゞバンクホリデーたるに止まるは果たして可なりや。日曜は決して娛樂の日にあらず、少なくとも其の娛樂は宗教的安息、宗教的反省に伴ふの娛樂ならざるべからずとは英國的日曜の性質に候。大陸はすなはち英國民がせめて一週に一度たりとも靜に神を思はんといふ消極的態度をすら既に脫し去りて、所謂紳士淑女といふものゝ中、日曜の教會にすら行くを必せざるもの多きに非ずや。教會に行かざるもの必ずしも神を拒否し宗教を拒否するものに非ざるは言ふまでもなく候へど、之れと同時にまた神無しといふ社會に立つも彼等は何の痛痒をも感ぜざるべく候、彼等が行住坐臥の念頭に宗教の威力なきは、畢竟宗教的信仰の頹然として內より崩れたれば也。此の點に於いて英國はなほ大に持する所あり。

併しながら英國といへども決して宗教安泰の國にあらざるは始めに申せし通りに候。唯保守力に富める國民だけに、宗教破壞の潮流に後れ居るまでに候。されば大陸が既に經過したりし宗教、道德の行程をも、猶ほ將來若しくは現前に具有して、舊信仰舊宗教の大海に洶湧する、あらゆる波瀾を一國の思潮の中に收めたるは、やがて此の國の最も我等が觀察に趣味ある所以に候。老幼と語れば老幼見を異にし、僧俗と語れば僧俗說を異にし、公園に宗論を鬪はすもの、食卓に基督を議するもの、凡て基督教破壞の大潮に一水を注ぎ一波を添ふるものに非ざるは無しと申すべく候。我等は如何に宗教的信仰の生命あるかを見んとするよりも寧ろ如何に宗教的信仰の破壞せられ行くかを見んがために此の國に來たるべし。更に精しく申さば

如何に英國民が基督教の破壞を防がんとして苦悶しつゝも大潮のために押し流され行くかを見るべく候。

教育案は畢竟國家が基督教の力を初等教育の中に保持せしめんとするものに非ずや。チエームバレンの演說、政治上の意義勿論理由は單一ならざるべしといへども、之れを思想の上に及ぼす効果より申せば、國家の威信やうやく崩れんとして、政府之れを少年子弟の教育の上に防がんとするものと申すに不可なし。然れども斯くの如くして果たして幾ばくかよく個人が思想の自然の發展を防遏し得べしと思ぼさるゝぞ。

はたまた一面にオーソドックスの强き根據を有する當國は、他面に最も反對なるユニテリアニズムの存立をも容認するに候はずや。英國教會派の中にすら、十字架の禮拜を拒むの潮流は漲りつゝあるに候はずや。凡そ舊約書を信じ、奇蹟を信じ、儀式を重んじ、十字架を拜し、基督を神とするものよりして、舊約書を斥け、奇蹟を斥け、十字架を斥け、基督を人にし神を理體とすら見んとするに至るまで、苟くも基督教が宗教の名の下に存立し得ん限りの宗派宗論はこゝに集まりて舊信仰破壞の潮流に瀾をなし淵をなす。此等の事象、大陸には古くして當國に新しきものと申すべし。はた恐らくは尙ほ幾歲月の間當國にありては此等の事象を常に新しと見ざるを得ざるべし。これやがて此の國の宗教が長く觀察者に趣味ある所以に候。

基督教の斯くの如く崩れんとするは、固より一旦夕の事に非ざるの理、歐洲の哲學史、宗教史を一見せる者の夙に知る所に候はん。緣は多かるべしといへども、主因は智識の進歩に伴ふ理と信との乖背にあること動かすべからず、十九世紀は十九世紀の知識が是認するの內容を、其の宗教的信仰の中に求めて、此れに合せざるものを毀てるにて候。彼等は先づ宗教的信仰が要とする一種の莊嚴崇拜の情に向かつて、其の客體の人格神といひ不思議力といふが如きものに輕侮の感を挾み、こゝに內心の莊嚴を破り崇拜を破り、宗教の威力をして道德の上より引き退かしめたるに候はずや。之れ實際に於ける舊宗教

の敗亡なり。而して更に其の理の鋭きものは、其の殘骸に向つて解剖の刀を加へ、遂に之れを形實ともに解體し盡さずんば已まざらんとす。舊宗敎は實に理の下に崩れたるにて候。

さらば英國民は宗敎の實勢力より獨立して如何にせんとするか。曰はく彼等の尤なるものは其の敎育により歷史により、天性により國家によりて造り上げられたる一種の强き性格を有す、之れによりて彼等の道德は常に飜悔せられ行くが故に、彼等を以て大陸の國民に比するときは、道德に於いて正しく一步を拔くの觀を成す。宗敎的威力國民の內心より衰へ去るも、彼等は毅然として動かざるの道德的性格を有す。道德的性格はやがて道德的信仰と同義たり。將來の此の國の道德は知らず、現下にありては、英國民は宗敎的といふよりも遙に道德的といふを常たれりと致すべし。夫の單に國敎や儀式や宣誓や、世に行はるゝものゝ外形によりて、直ちに英國を宗敎的國家と嘆美するが如き徒、世上には間々ありと申す。何等の短見ぞや。斯くの如きの徒はまた、西洋の結婚の神の名によりて行はるゝを見て宗敎的結婚と驚駭し讃嘆するの徒なるべく候。笑べし。

思ふに英國民が槪しての道德的傾向と、及び、彼等が宗敎の形式に突飛の破壞を企てざる保守性とは、相合して皮相者流に宗敎堅固の國といふの念を抱かしむるの原因たるべく候。英國民が宗敎的信仰以外、基督敎を一種の國家的觀念歷史的觀念より愛重し保持せんとするの傾きは、宗敎的國家にあらずして國家的宗敎といふの觀を呈し候。彼等が宗派心の强きもまた同じく彼等の固着性を主因とするのみ、宗敎的信仰は此の間に幾ばくの生命をも有せず候。

翻つて大陸の樣を察するに、こゝには宗敎の敗頽と或は前し或は後して、舊道德また肆然として亡びんとするものゝ如く候。此は必ずしも宗敎敗頽の場合と同一にあらざることと論なし。原因は極めて複雜なるべしといへども現當の事實に於い

て、自家を中心とせる感情の勃興が其の最强破壞力たるは、認め易き事實と存じ候。即ち現在の事實に於いて、此の種の感情のために夫妻の關係亂れ親子の情誼沒せんとするもの多きは、大陸道德の情勢と相見え候、是等の事必ずしも此に實例を引くまでもなく、大陸諸國の社會方面を見聞するもの丶直ちに首肯する所と存じ候、語をかへて申さば、個性欲の强梁なるがために、舊道德の羈絏え果てんとするもの、今日の歐洲大陸に於ける裏面的社會なり。

然らば彼等は舊宗敎を破り舊道德を破りてこゝに滿足を得、飽和を得たりや。曰はく否な。彼等は此の上に更に特殊の要求を有す。蓋し彼等が一切の此の種の行爲は、事實に於いて裏面的なり。竊盜的なり。白晝公然人の妻に姦し、面前人に誇りて胎兒を墮するものは、未だ正當の社會に、絕えて無し。彼等の個性欲の跋扈が多くの場合に於いて反對の羈約を感ずるを知るなり。玆に於いてか彼等の心は悶々の苦みに堪えずして、何れの方面にか解決を要求し來たる。今日の此等の國民、否凡そ斯くの如き道德的過渡に立てるの國民は、何れを問はず此の解決の要求を彼等が最要事の一と感せざるは無かるべく候、或るものは感情の行くがまゝを恣にせんがため、ひたすら之れを是認せしむるの口實を要求す、言ひ前を要求す。これも解決の要求に候。また或るものは此の感情を和げんとして偏へに反對の力を强うするの道を講ず、是れも解決の要求に候。解決の要求とは畢竟人生に對し道德に對する最上原理の要求なり。人心の何れの部分をも滿足せしむべき信仰なり。更に申さば賴るに足る主義の要求なり。之れによりて何れにか我が苦悶の斷除を得んとするものに候。今日の大陸國民は眞箇切實に此の如き主義を要求しつゝあるものと申すべし。

此の一事直ちに今日の思想界の現狀と相照應す。倫理學を立つるもの多きも、新宗敎の必要を說くものあるも、小說詩歌に主張を喜ぶの傾向あるも、すべて是れ感情理性の今更らの矛盾に悶ふるものが、何れにか解決を得、口實を得んとする所

謂主義の要求に反應するものに非ざるは無く候。

なほ此の點の細說に入るに先だつて、後のために一言注意を喚び置くべきは、解決の要求といふことが、正しく斯く意識する一刹那よりして、截然として理性の過程に入れることに候。如何にして安易に斯の欲を遂ぐべきか、如何にして反對の原理を調和し若しくは之れを折伏すべきかと思念するは、直ちに是れ工風なり懺悔なり。感情豈工風を有せんや。懺悔を有せんや。必ずしも一系の哲學を成すを要せず、苟くも工風の門を潜りて後ちに來たれるものは、半行の結論たりとも、理性の共同を拒否する能はず候。

そも／＼懷疑とは知識の不滿足の謂ひなり、何故にと尋究するの意なり。知識的結論を得て滿足せんとするの義なり。されば知識以外、懷疑を解くの途はたゞ其の懷疑の發足點たる矛盾と苦悶とを事實の上に除くの外なし。一派の論者動もすれば懷疑と感情の矛盾とを混同して懷疑そのものが結論の滿足を待たずして直ちに感情の矛盾をも調攝し得るかの如く誤解するものあり。自ら理性乃至知識を嫌ふと唱へながら何故にと問ふの懷疑を以て感情體達の道とし、懷疑に入れよ悟るを得ん、而も其の悟りには知識與からずなどいふ。理に昧き者とは此等の謂ひなり。斯かる徒が悟道ぶりて禪僧などの套口吻を眞似るの言に、何程の眞實と價値とあるかは疑はしきものに候はずや。此の點に關しては、夫の禪家の術さらに怜悧なり。彼等は始めより何故にと問ふの懷疑を斥け、全く無念にして證悟せよといふ。此の說の實證すら頗るむづかしきものなるべきを、始めより疑ひて而して知識の階程を經ざるの證悟に入れとは、木に緣りて魚の譬へも物かはと存せられ候。

さて歐洲の天地が斯くの如くして主義を要求するにあたり、之れに應じて出でたるもの大小限りなしといへども此等みな旣に世に公けにするの主義たり原理たり信仰たる以上は、之れを以て世の檢斷を受けんと擬したるものに候。一世の何程か

よく此の主義を受容し得るぞ。一世は此の受驗者に對してテスチフアイする所無かるべからず。斯くして或る主義は捨てられ、或る主義は取られ或る主義は變せられたりといへども、而かも疑ひは尙ほ心の奧に消えざるもの多く、遂に五十年の世路、千卷の讀書も得る所なきを嘆ずるのファウストを實現するに至る斯かるものは悟れるに非ずしてなほ迷へるものなるが故に、遂にひとり自ら毒を仰いで死するか、ひとり自暴自棄して惡魔の子弟となるの外なし。新宗敎若し來たらば切に此の苦悶に會するものならざるべからず。將來の大宗敎は原罪を濟ふの宗敎にも非ず、世の罪惡を勸化するの宗敎にも非ずして、最も此の人生の苦悶を救ふものならざるべからず。

世にある幾多の主義のうち、始めより感情を壓して之れを罪惡視するものは姑く措き、專ら感情を立てゝ之れにのみ依らんとするもの、即ち個性欲を第一義に置く主義の中には、曰はく、個人中心主義、曰はく快樂中心主義、曰はく戀愛中心主義、而して個人中心主義は遂に其の個人を大なる個人若しくは多數の個人といふ意に緩和し變形して世の檢斷に合せんとせり。此に於いてか主義の生命は却つて個性欲以外の何物にか移り行かんとす。快樂中心主義は即ち其の快樂を廣き快樂、高き滿足といふが如きものに限りて是れまた主義の生命を個性欲の外に移し、戀愛中心主義は、其の戀愛を更に博愛、同情といふが如きものに變じて、是れはた個性欲以外に生命を求めんとす。世の思慮あるものゝ中、絕對の戀愛中心主義を實行し絕對の快樂中心主義を實行し、絕對の個人中心主義を實行したるものなく、實行して滿足したるもの絕えて無し。世の主義に對する檢斷は實に斯くの如き結果を生せるにて候。

夫の今以て我が文壇に餘炎を留むるすら奇怪至極なるニイチエ主義の如きも、如上の主義の一つに候。

ニイチエを主義として見るときは、詮ずる所個性欲を極端にまで伸長せしむといふに、要旨は盡き申すべし。而して歐洲

に於ける其の祖述者（?）が彼れを稱讚する第一の理由は、曰はく基督敎の下にありては前人も流石に斷言するを憚りし近世思潮の暗流を、大膽に世に推薦したるにありと。即ち基督敎の下に掩蔽せられたりし個性欲を世に顯示したるを其の効と致すなり。されども斯くの如きはたゞ其の勇氣を讃すといふに止まりて、主義其のもの丶善惡には何の關する所もあるまじく候。主義は當さに之れより世の檢斷を受くべきものなるべく候。而して吾人の見るところを以てするときは、此の主義も必ずまた先きの塲合と同じく一部の緩和を得て始めて是認せらるゝものとなるべく候。

其の理由は申すまでもなく、人間心底の一側を見落としたるものなればなり。本來基督敎が今日の社會道德に及ぼすの力はさまで大なるものなりやといふこと、根本の疑問なるは前に論ぜる所の如くに候。即ちニイチエが嘲る所の今の道德は、必ずしも基督敎の掩護を假らずまた基督敎を源とせずして發し來たるを得べく、是れ實に人間の奥にひそめる理性の聲を說くものに候へば也。基督敎は寧ろ斯の如き道德の領內に於いて生を保たざるを得ざるに至らんとせるもの、現時の大勢には候はずや。されば實際道德の上にありては、基督敎は既にニイチエを待たずして壓倒せられたるものに候。若し今の世の道德界に、個性欲を壓して立たんとするの威力ありとせば、其は基督敎にあらずして實に理性なり。神に非ずして人間なり個人そのものなり。少なくとも個人の中に住して個性の半體たるの神なり。基督敎の神を倒すに於いてニイチエに何程の効か候はんや。ニイチエが此の點に一歩を過てるものなることは、此の地の贔負者の或るもの丶如きも之れを認めながら、猶ほ之れを他の論點に移して輕く摩し去らんとするは何ぞ。是れ實にニイチエが効績に關する要點の一に候はずや。即ち彼れは事實に於いても、また其の言說中に於いても理性其のものを排却するものに候。されど理性の聲果して塞ぎつくすを得べきものなりや。之れを迷ひとして斥け去る所に如何の滿足か得らるべき。理性も所詮は我が五尺の身體の爲に存するものなる

こと、或はニイチエのいふが如くなるかも知るべからず。而かも猶ほ斯くの如くして理性は眞なるを妨げず候。吾人がニイチエの說の必ず緩和を要するものなるを思ふの根本は、到底個性欲と理性欲と兩元の共に眞實なるを否む能はざる點に候。

去りて日本の文壇如何にと御覽あれ。僅かに一部の書一篇の文を讀んで之れに會心の所あれば、直ちに全身を之れ呑まれて、其の外を回顧するの餘裕を有せず。ニイチエ乃至は美的生活とやらんの事々しさよ。而して世上また今更らしう是れに追隨するの徒、尤らしき口吻もて之れに好意の解釋を附せんとするの輩、彼等の前には歐洲の思想界が經歷し來たる經驗は何の意義もなかるべく、否な恐らく讀書嫌ひの彼等はろく〳〵書物をも讀まずして、たゞ我が佛尊しとのみ騷ぎ上ぐるものに候ふべし、思ひ來たれば一面のポンチ畫場、試みに其の二三を描き候はんか。

先づ最負連に見るべし。彼等が此の種の說に道理を附する第一の理由は、時勢の產物也といふにあり。善し。時勢の產物とは、譬へば病める血にわくバチルスの如きものをいふ也。また此のバチルスに反して生ずる一種の毒素の如きをもいふ也。斯くの如くして造化の體制は自治自療の道を有す。欲性主義は其の何れなりといふや。

いふまでもなく彼等は之れを以てバチルスに對するの毒素なりといふべし。即ち人體に對するの藥素なり。さらば此の見に何程の根據を有するや。彼等常に本國獨逸の狀態を口にす、曰はく、個人の權能蹂躙せらるゝの今の世には此の種の說の要ありと。即ち個人の無視はバチルス也、欲性主義は斯くの如き社會の組織を斃さんとするものなるが故に人生の良藥なりといふなり。假りに此の根據は是なりとするも、何ぞ其の根據を見るに寬にして、其の結果を見るに偏なるや、豪なるや。記せよ、造化は決してバチルスを斃すの毒素が人體をも併せて毒するが如き拙惡の例を人間に示すものに非ざるを。假りに欲性主義を以て、今の社會組織、國家組織を破壞し得とするも、是れ無謀の破壞也、無思慮の破壞也、建設の豫期なく進備

なくして企つるの破壞也。破壞荒廢の後に何物か殘ると思ふぞ。靜に思へ、公平に思へ。留まるものは唯自家の欲性に猛り立つの個人のみならずや。是れを豺狼野に相食ひ、鷲鷙空に相擊つの狀に思ひ比べて、何所に相違を見んとするぞ。斯くの如くして何所に欲性の滿足を得んとするぞ。今日社會の國家も昔しは一たび斯くの如くなりしならんか。理性の光り之れを導びいて今日あるを致す今日の社會や國家や、皆存立の根據を有す。病あらば改むべし、破壞も可ならざるに非ず、必ず改造を以て之れに繼がざるべからず。而して感情みづからは唯進むを知りて形を有せず、形を造るといふは常に理性の共同作用といふこと也。結局欲性主義の結論は或は現社會の組織を斃すべしといへども、併せて人生を斃すもの也。個人を斃すもの也、欲性みづから縊死せんとするもの也。此等の理、殆ど言を須たざるが如くにして、而かも夫の聰明寬大なる贔負の徒の參照する所とならざるは何ぞや。欲性主義の根據に向かつて寬大ならんとするものは、同時にまた之れが結果に向かつても聰明ならざるべからず、彼等もまた多忙なる哉。

然り、彼等の或る者は聰明を忘るゝものに非ず。茲に於いてか曰はく、上の如き結果を恐るゝが故に唯其の一部を取りて之れを緩和すべしと。言ふこゝろは理性によりて之れを鹽梅せんといふなり。まことに至當の見なり。されども至當化すると共に欲性主義を贔負するの根據は瓦解し了するに心づけりや。欲性主義の面目は其の理性を拒斥する所にあり、感情の往くに任す所にあり。之れに理性の案排を加ふるは欲性主義を破毀するなり。何の理由あつてか而かく自ら破毀するものに執着せんとするや。

彼等更に辭を設けて曰はく、唯其の感情欲性にエンフアシスを與へ、之れを忘れざらしめし所に價値ありと。粗心の至りなり。凡そ世の快樂主義、社會主義といふが如きもの〻中に、欲性に重きを置いて發足し、個人に重きを置いて發足せし主

義の僂指に堪へたるものあるを知れりや。而して是等の主義がニイチェ等を待たずして世に存せしものなるを知れりや。はたまたニイチェ出でゝより其の効によりて世の幾ばくの主義か感情に更に重きを置くに至りしぞ。否、重きを置くに至りしものは是れあるべし。而も此等のもの能く幾ばくか之れによりて一層多く時代に滿足を與ふるものなりしぞ。之れを要するに、世は彼れが如き無謀無斷の方法に於いて感情欲性を皷吹するの必要を有せざるなり。世間はむしろ欲性に於いて夫の主義者よりも一歩を先んじたる也。

蟲負の徒また曰はく、我等はたゞ之れに同感するのみと、彼等が心の底に觸るゝものあるに同感するのみと。此は畢竟彼等の心幼稚なればなり。世波に搖らるゝこと少なく、書を讀むこと足らず、材質空にして唯みづから自家の幼稚なる多感性にのみ顧省するが故に、世上更に高大なる同感の味あることを知らざるなり。そも〳〵心の底とは何ぞや。我等が長へに自家の快樂滿足を思慕するの念なるべし。然れども單に之れに觸るゝのみならば、何の讃美ありや。彼等は何故に同一理由によりて貧の盜みするもの、人の妻を姦するものに讃美を捧げざるや。若し此の如きものを以て心の底といはゞ、その底は淺きものなり。其の同感は小さきものなり。我等が眞の同感は欲性其のものゝ認諾にあらずして、欲性の上に理性の反對を認諾する所に生ず。即ち大同感は一元の上に立たずして二元の上に立つ、二元に同一の認諾を與ふるときは、矛盾を生じて此に人生の涙あり、此の涙に同感するに至りて始めて眞の同感に非ずや、彼等曲げて此の深き同感を欲性論者の說中にまで羅織し出ださんとするか、何の必要ありてかしかく牽强附會の勞を積みても毒中に藥を求めんとはするぞ、欲性によりて理性を拂拭する、其の結論に欲性主義の生命あることを忘れざれ。

遮莫此の種の追拜者流が青年に多きを見て、吾人はうたゝ彼等が讀文力の卑きを思はずんばあらず。文を讀んで眞個に之

れを味ふを知らず。少しく筆力の强き文に逢へば、其の筆華に魅せられ了して醉へるが如く、一切の思慮を忘じ去つて顧みず。文に讀まるゝものとは此の徒なり、彼等は文を讀んで文の奥に横たはるの文體其のものに翫味し到る能はず。我が前にあるものゝ眞僞を之れによりて斷ずる能はざる也。それ文體はやがて筆者の人格に非ずや、文の精神に非ずや。形に囚へられて精神を見得ざるの讀文者何すれぞ世に多き。夫の欲性主義を唱ふるものゝ文辭中、最も有力と目せらるゝもの、即ち最も矯飾の文なることを感ぜざるか。吾人此の種の文に對して常に思ふ。一讀して化せらるゝが如し。再讀して即ち矯飾の氣を感じ、卒讀して靜に思念するとき、人格の眼前に髣髴たるを覺ゆと。少なくとも我等を動かすの文は必ず眞なるべし一なるべし。寸毫の僞を容れざるなり。

論緒少しく前にかへりて、彼等が欲性主義推讚の理由を世の個性の無視にありといふ中には、啻に獨逸の國家、露西亞の國家といふよりも一層多き意義を有す。即ち夫の感情非認主義の道徳に反動すといふなり。されども今日の歐洲は事實に於いて感情非認主義の道德が支配する所にあらず。偏狹なる獻身主義や、禁欲主義や今日の道德界に弊となる程の地步を占めたるものに非ず。寧ろ欲性の勃興は早く旣に之れを破り去りたるにあらずや。今日の歐洲が獻身主義、禁欲主義の抑壓に苦むとは何人の觀察なりや。獻身主義破れ、禁欲主義破れて、獻身主義禁欲主義ならぬものすら是認するを得ざるの獸欲、社會の裏面に橫行し、而して尙ほ或る自由を此の上に得んとするは今日の實勢なり。されば今日に欲性主義を唱ふるは、反動にあらずして旨意なり、代表なり。むしろ一世の獸欲に媚びて叢與を此に求めんとするものなり。公平に之れを思へ、今日の社會に一層欲性の自由を加ふることが、更に幸福なる時勢を生むべしとは何人か斷言し得るぞ。此の理、曩に「馬骨人言」の記者が事例を擧げ文書に參歷し論破して、遺憾なかりしにも拘らず、狡猾なるものは辭を設けて之れと爭ふを避け、迂愚

なるものは己れ之れと同一の結論に陷りながら、自面の身を以て之れを漫罵し去らんとせり。之れを要するに如上の範圍に於いて、何れの點に欲性主義が現下の道德頽廢に反動して一層幸福なる社會を豫期すべき事實ありや、根據ありや。辯せんとするものは明白なる答へを與へよ。

更に欲性主義の主張者に見よ。彼等の書と文とは、個性欲の敵として啻に在來の社會國家と道德宗敎とを指摘するのみならず進んで其の根本を拒斥せんとせり。即ち上來しば〳〵いふ所の理性の拒絶是れなり。玆に理性といふ語を用ふるは、カント哲學の理性の意に於いてするものと、單に知識性といふ義に於いてするものと、二義を兼ねたりと見て可なり。此の二者を連續せしむる吾人の見解に異議を挾むものありとも、其は今の場合に無用の論たり、何となれば、欲性論者は明かに道德を斥け、知識を斥け、併せて道德の大源たる一種の非個性欲的意識をも斥くるものなればなり。斯くして欲性論者は理性を斥く、彼等往々にして他の論詰にあふや、彼等の慣用手段たる兩端模稜の辭を弄して、本體の曝露を避けんとすれども、彼等若し欲性の中に一分たりとも理性の混入を許すが如きことを明言せば、立地に其の說の他の部分は自殺し去ることを覺悟せざるべからず。社會の中より個人を取り個人の中より自性欲を取り、而して之れを進化的相對的に見ずして絕對的に見たるの彼等は、如何に辭を弄するも此の埒外に一步をも移すを得ず、移すは即ち自滅なることを覺悟せざるべからず。

彼等の本領すでに欲性を煽動して理性を呵斥するの一點に集まれりとせば、而して是れ彼等の信仰なり結論なり主義なりといはゞ、而して彼等の慣用語として體達實踐の外を許さずといはゞ、此に吾人の要求する所は、說者の速かに之れを實行して世に示さんことなり。何故に彼等は喋々の辯をのみ事として、速かに之れを體現せざるや。人格若しくは天才の感化が人生の最大勢力なることは、彼等の最も善く知りて、最も之れを說くを好む所なり。何故に彼等は其の美しき道德觀を實踐

せざるや。社會の組織之れを沮むといふか。善し。社會の之れを沮まざる部面に於てせよ。日本は幸にして未だ有妻の男子が女を容るゝを禁せざるなり。所謂佳人の歡會なるものを妻子の前に於いて恣まゝにし見よ。而して其の結果を採りて天下に布けよ。在來の道德が之れを非難することあるも彼等に取りては、固より何の痛痒をも感せざるべき也。或は妻子を有するの制度既に非なりといふか。何ぞ速かに之れを去らざるや、而して欲性の狂ふ所、更に一女と姦し二女と姦すとせよ。狂人ならざる限り、其の結果は想像し得べきのみ。彼等何ぞ速かに之れを體現して濟世の大願を成せんとせざるや。若し之れを爲すの勇なしといはゞ、卑怯漢なり。之れを爲すまでの信仰なしといはゞ、信仰ありげに天下に壯語せるもの僞に非らずや。

由來我等の疑ふ所は、彼等眞に欲性一面の外に何の聲をも心內に聞くことなく、欲性の滿足する所、絶えて反對の苦痛を感せざる、所謂解脫の境を實證したりや否といふことなり。彼等の言を聞くときは、彼等は知識思念によらず實證によりて此の境に入れるものゝ如し。世人は公平に觀察して何と判斷するぞ。我等は其の眞の證悟ならんことを望むものなりといへども、若し未だ解脫の境に入らず、依然として兩元の矛盾に苦みながら、而かも其の一元を壓して他元を立つるの結論を得たるなりといはゞ、是れ直ちに知識ならざるべからず。唯彼等呆心にして未だ其の知的工風なりしことを自覺し得ざるのみ彼等が好んで用ふる覺醒といふ語は斯くの如き場合にも要あるものなり。若しまた知識にもあらずして尙ほ決斷なりといはば、玆に彼等は魔術師と成り了せるなり。彼等が淺はかなる誤解を以て天下を瞞過せんとせるなり。孺子僞瞞の途を誤れり。何ぞや。世の所謂體達悟道の語は、其の信仰する所に身みづから到り得たるの謂なり。自ら之れに居るが故に寸毫の疑をも容れずといふものなり。疑ひこゝに至りて消ゆるなり、疑ひの事實失せたる也。然るに彼等は身未だ欲性自足の境に居

る能はず、而も知識は更らに與からずして或る不思議なる信仰を空より拈出したりといふ。之れを彼等は稱して體達とも悟入ともいふが如し。若し果たして然りとせば、何等の滑稽ぞや、何等の淺薄ぞや。眼をとぢて恍惚たりし時、忽然として「欲性の滿足のみ眞也」との斷定が腦裡に湧出したり、彼等此れより不思議に此の斷定に信仰を感じたり、噫彼等の悟入といひ信仰といふは實に斯くの如きもの也、何ぞそれ世の御夢想といふものに似たるや。禪家の初心者また一たびは此くの如き謬見を抱いて隻手の音聲に頭を惱ましたるべし。斯くの如きものを以て主義信仰を天下に呼號せんとは、事も愚かや。

之れを要する、欲性主義者の說、眞實體達の信仰ならば速かに之れを體現すべし。否體現し來たらざるを得ざるの理也。天下環視して之れを待たん。若し體達に非ずといはゞ、知識の產物ならざるべからず、則ち知識を排するの失言を天下に謝して推理の前に檢斷を待つべし。若し知識にも非ずといはゞ、御夢想を悟入と心得るの名を甘んじて、其の是非を爭ふべし。說者は三樣の何れを選ぶか。

說者は遁辭に巧みなるもの也。玆に豫め之れを擧げ置くべし。世の贔負の徒動々もすれば曰はく、是れ詩也極論すべからずと。說者即ち時としては是れに應じて遁路を穿ち、抒情の外に何の目的も無しといふが如き態度を示す。されども是れ最も非なり。詩といふを以て架空といふ義とすれば、說者が主義皷吹の文、決して架空事にあらず。又詩といふを以て單に抒情の文といふ義とすれば、詩といふを以て責を辭するの謂れ少しもあらざるなり。天下に告白して人を動かさんとしたるものは必ず其の責を負はざるべからず。

說者また是等はたゞ慨世の餘に出でたる極端の辭なりといふか。世人往々にして此の口實を以て今の場合に擬せんとす。他より之れをいふは罪淺し。說者みづから若し斯くの如くいふとすれば、輕薄なり、不埒なり。一席の話談に殊さらに激語

を用ふるが如きは間々あるの例なりといへども、今の場合は事苟くも主義に關す、信仰と號するものに關す、彼れが如く人前に言質を立てながら、辭屈すれば、是れ自らも大中至正と信ずる所に非ずと辯せんか。天下は之れを何とか言はん。說者能く斯くの如くなりや否や。

或は我れは天下に說くものに非ずといはんか。卑怯なる言ひ前なり。既に一旦己が感想を文字に記して天下に公けにする限り、天下と其の影響を一にせざるべからざるは言ふまでもなし、且つ既に明かに世の人に向かつて醒悟の道を奬說せる限り、此の如き口實は一切用を成さゞる也。

或は以上の批難以外に理を有すれども到底知識を以て述ぶべからずといふか。恐らく理に非ずして所謂信仰なるべし。體達の信仰か、體現すべし。夢想の信仰か此の名を甘諾すべし。說者既に人生に於いて事を起こせる以上、吾人も人生の一員として說者に之れを迫るの權利を有す。

或は說者の懷抱するところ遂に言辭を以て辯ずべからずといふか。しば／＼例にかれる禪家の故智に遁路を求めたるなり。されども禪家の祖は說者よりも賢なりしことを記憶せよ。彼れは始めより不立文字と銘うちたり。說者は何故に喋々の辯を世に公けにして自家の信仰を之れに託したりや。或るときは說法、或るときは不說說、兩端を持して之れを追へば彼れに遁れ、彼れを追へば此れに遁る。鼬のぬけ穴といふものに似て笑ふべし。然れども所詮口を噤むといふものは强いて之れを開かしむるに由なし。是れよりしばらく說者に口なきものとして一二を言はんか。

說者が慣用の遁辭はなほ多し。說者の說によれば、其の說に反するものは凡て常に說者を解し得ざるものなり。而してまた說者は常に己れを解し得ざるものと爭ふを好まざるものなり。此の種の言の中には如何なる意味ありや、說者一人若しく

は之れと欲性主義を共にするものゝ外は、天下の人凡て說者を解し得ざるの昧者なり。說者は非常非凡の怪物なり、一代のエニグマなり。噴飯に非ずや。既にみづから自己を一代の題目と自稱する限りは吾人こゝに其の人物の閱歷より推して、其の人格を想望するも可ならずや。

吾人の見る所を以てすれば、說者は年未だ三十を多く超えず。世の辛酸風雨をいかばかり身にしめたりとも覺えず。而かも彼れは體達悟入の境に入りて我等を瞻若たらしめんとす。而して人の之れを疑ふものあれば、庭前數尺の觀察、下宿屋三年の人生も、我れには體達の因緣たるべしといふ。而して同じ人は常に他を罵るとき生ま若き道學者といふが如き口吻を擬するを好めり。斯くの如きエニグマの人格を世は何と解するぞ。再び噴飯。

また此の人學窓の生活を了へてより數年を出でず。自からは我れ豈理を以て爭ふ能はざらんやといふと雖も、其の理論の言といふものには、我等不幸にして甚だ多くの推理を觀取する能はず。而も同じ人は一切の智識の價値を否定するの勇氣あるものなり。人は萬卷の書をも讀破したる半白の老學究が成れの果てかとも思ふべし。三十左右の修業ざかりとは誰れか思はんや。三たび噴飯。

說者はまた一年ばかりの前、其の所謂悟りに入りてより所說を一變したるものなり。變說は必ずしも不可なかるべし。唯其の悟りの因緣を重しとするのみ。夫の自家が便宜によりて豹變を恣にする、世の無定見者流といへども、時々の豹變みな悟りなりといふを得べければ也。說者若し眞の體達豹變ならば、其の前期はこれが準備期すなはち體に苦悶を感ずるの時ならざるべからず。其の述作に其の跡ありや。はた一時の苦悶によりて解脫したりといふか。苦悶なくして不思議に解脫したりといふか、何れとするも說者の解脫は最も怪しむべきものに屬す。そも〳〵說者は議論を得、思想を得てたゞ進據の學說を

變じたるものに非ざるか。

歸する所說者等の分際を以て、己れを解せざるものを昧とし、體達を說いて己れを暗うすると共に、知識を輕んじて其の價値を否定するは、吾人の眼より見るとき、僭上至極の沙汰と斷ずるものなり。

說者は曾て反對者の言辭輕佻なるが故に答へずといひて一たび難詰を遁れたり。また其の言辭匿名なりしが故に答へずといひて二たび難詰を遁れたり。小兒輩と爭はずといひて三たび難詰を遁れたり。學究先生の知る所にあらずと號して四たび難詰を遁れたり。言說にあらずして人にありと稱して五たび難詰を遁れたり。己れを解せざるものと語るを欲せずと唱へて六たび難詰を遁れたり。何ぞそれ遁るゝの術に巧みなるや。

そも〳〵顏を抗げて人と辯ずること能はず。迫ふものあれば直ちに暗所に遁れて之れを漫罵し、餘暇あれば同臭の人と三昧に似たるの言を弄し誇耀して以て己れを高うせんとす。醜と謂つべき也。說者が世間の己れと臭味を異にするものを罵るや、學究先生といひ、道學先生といひ、部門的學究といひ、何といひ何といふ、到らざるなし。而して文壇の作法を說くものは彼れなり。はたまた心あるものが午餐の用意をもする頃に、夜明けたりと大聲疾呼して起き出づるものは彼れなり。而して體達して人生の悟道に入れるものは彼れなり。而して一代を敎へ、一代に豫言せんとするものは彼れなり。バイブルを讀めばバイブルの口眞似し、平家を讀めば平家の口眞似し、ニイチエを讀めばニイチエの口眞似し、日蓮を讀めば日蓮の口眞似するものは彼れなり、日本國小なりといへども、之れを以て一世の豫言者とせんには、餘りに怜悧ならずや、餘りに矮小ならずや、また餘りに滑稽ならずや。

さて以上、論はやゝ體を失へりといへども、詈罵の外を知らざるものは、我れまた誅するに詈罵を以てすべし。斯くの如

きの徒をして一日其の驕慢を強うせしむるは、一日少年をして學業を疎んじ獸欲を逞しうするの端を得しむるものに候。我等の見地より申すとき、斯くの如きは人道の賊なり。此の遍促の言を成すに異議なしと存候。匆々。

尙ほ思ふに前文は日本の欲性論者を難ずる方が主になつたれど、ニイチエ其のものに對して吾人が好意を表すれば、唯其の詩人といふことだ。哲學者として、豫言者として、批評家としていふやうな當代批評家の最負觀は、吾人に何程の感をも與へぬ。何となれば、一たび智識の光りによりて之れを見るときは、到底健全のものといはれぬが故である。而も彼れが書を讀めば面白い、人生半面の事實が詩の特色によつて誇張的に發展し、以て吾人の情に觸れて來る。されども此の瞬間の我が心ざまは、審美的である。世に若し象を用ふること少なく、理を其のまゝに用ふること多くして而かも美術的製作たるを得るの方法ありとすれば、即ち是れである。今の欲性論者の一人が、先年抽象美といふことを論じたことがある。若しあれを抽象理が或る塲合に於いては裸體のまゝ審美的効果を得るといふ趣意とすれば、即ちニイチエの塲合なのだ。隨つて此の塲合の抽象理の必然の要件として理の明白即ち論理的徹底を缺いて居なくてはならぬ。漠然たるものでなければならぬ。何となれば、抽象理の美となる事情は、其が不定着なる人生雜多の事象と漫然連結する所に存すればである。即ち此の塲合にも實は理が理として美なるのではなく、其の理の下に潛んでゐる無數類似の事象が、其の理の實例として採用せられんと競爭的に浮び來たる所に美が生ずるのだ。之れを抽象美といふのは惡くはないが、今の論者は悟りを開いて豹變して以來勿論こんなことは忘れてゐるであらう。

それでツアラツーストラの塲合などが最もよい例だ。また最も其の體を得たものである。何となれば、其の言說が凡て人間ならぬ人間を相手にし、また其の修辭が凡て譬喩的に、皮肉な所に一分の滑稽もまじつて、此の種の美文たる資格を具へ

てゐるからである。日本でいつたら、寧ろ青柳君などの筆脈から這入るべきだ。讀んで面白く、何か甚深の眞理がちらついてゐるやう、其れで再讀して靜に考へると不條理、寧ろ不可能といふことが分かる。即ち初めの場合は審美の力に打たれてゐるのだ。理想派の美學でいつたら、假象の世界に這入つてゐるのだ。それで靜に再考する時は、審美の世界を出で道德の世界に來るのだ。「石川や濱の眞砂は盡るとも、世に盜人の種は絶えまじ」といふ歌が芝居學問の人の耳に一種の感想を鼓吹したなども、同じ理だ。されば、吾人が取る所のニイチエから言へば、宜しく人々書齋の中で翫讀してほゝ笑むべきものであり假りの世界に這入つて樂むべきものである。また若し其の美感から殘留した實の印銘があるとすれば、其れは何所までも實の印銘として取り扱はねばならぬ。美のために誇張せられた感情を離れての勘考にしなくてはならぬ。即ち公平なる知識の鑑識に待つべきものだ、審美の世界と道德の世界とは、截然として之れを區別し得るのが我等の性格のプライドでなくてはならぬ。世の感情を說き信仰を說きロマンチックを說くものが動々もすれば感情の內容に知識あり理性あるべきを忘れて、美に醉ふの心を直ちに實にせんとするのは、吾人の與せぬ所である。將たまた美に醉へる感情與奮の態度を以て事に足るの要ある場合には、其の感情が必ず知識と乖背せざるの保證を有するものでなくてはならぬ。何となれば此の保證なきものは、軌道を逸せる奔車の如く進んで自ら覆滅するを免れぬものであるから。

然るに日本のニイチエはどうである。口には樣々の勝手を言ふに拘らず、哲學たり主義たり道德たる方面のニイチエを、眞正面に生まじめに、其のまだ感じ易い天下の靑年に實行させやうと煽[illegible]て[illegible]。無方者とは是等の謂である。性格に根據あるものが僅に把翫して可なるべきものを、公衆の前に直ちに行ひ得るまでに曳き下して、說法の材料に供してゐる。現實の世界に行ふべからざるものを行はせんとしてゐる。吾人が彼等に對する批難の中心はこゝにあるのだ。斯やうにして彼

等は放蕩無頼を眞理とし强慾非道を理想とするの結果となる。而かも彼等は放蕩といひ强慾といふ名を嘲けつて高く標置せんとしてゐる。譬へばモルヒ子も藥だといつて分量知らずに呑ませる輩であらう、アルコホルも酒だといつて其のまゝあほらせやうとしてゐる徒だ。それで毒とは人間が付けた名だフヽンなぞと非人間的なことを言つて澄ましてゐる連中だ。天下にニイチエを會したるものは己れ一人なるが如く大言して、其の實己れがまづ分量違ひをして、毒にあてられて噪ぐものは彼等だ。固陋の見とは是等をいふ、書を讀んで書を解するの道を知らぬとは是等を云ふ。狂人に剃刀とは是等をいふのだ。凡そ斯くの如きの徒に對しては、彼等をして先づみづから其の主義の効果する所を實驗せしむるの外は無い。即ち敢て吾人が其の實踐を迫る所以である。

　ニイチエの哲學としては、其の肉體の外に心なきを說く所に拾ふべき眞理あれども、是れ豈ニイチエを待つべき思想であらうや。彼れの要求する地位もまた是れにあらずして、實は肉體の外といふと共に肉體內の必然の現象としても之を排却する所にある。右に廻るが本能の時計のぜんまいにですら、左から來る制車の齒が必要な事實を、ニイチエは無視する所に立つてゐる。ダーウヰンの、弱肉强食主義のと言つても、之ればかりを道德主義の上に發展させた結果は、所詮極致ばかりを一足飛びに見て、時間の圍の中に徐步してゐる人生の現事實を忘れた非進化論たるを免れぬ。山は眞直に麓から頂上へが一番近いといふけれども、垂線的に見あげた山の頂邊へ、一足飛びに駈け上がらうとする馬鹿者があつたらどうであらう。

　今一つニイチエに人を引く所があるといへば、其れは彼れの人物性格と其の主張との關係だ。如何にも蛇や鷲を友達にでもしさうな顏色の中に、正直一徹な所もあるやうで、持つて生れた皮肉もありさうな、此所等を其所說に比べて見れば、此にも審美上の元素はある。且つ彼れの警句はオリジナルだ。それで恐らく誠實でもあつたらう。日本のニイチエなどのやう

に假聲を使つたり、悟つて豹變したりするものでは無い。全體日本のニイチエは餘りに利巧ではないか。幾多の單純な讀書者があんなものに嚇かされるのは、畢竟これも讀書が足りないからだ。前に本家を見て置けば、假聲の出た時に吹き出す位で濟むのだ。此の後こんな議論が續くやうなら、量見の据らぬ人は、議論に耳を假す前に先づ原書を見るがよい。今は上野の圖書館にもあらう。丸善にも來て居やう。早稻田の圖書館にもある筈だ。獨逸の讀めない人は英譯でも澤山だ。誰れか此の前、英譯で讀むやうではなぞと、大きな事を言つてるものがあつたかと記憶するが、あれは皆世間の不誠實な徒が、人を淩がん爲に駄法螺を吹くのだ。何で今の若い讀書子が、五年や七年日本で獨逸語を習つたからといつて、それで英譯と獨文との間に生ずる文味の相違など仔細に嚙み分けることが出來やう。幾らか手取り早い英譯の方を內々讀みながら、クオテーションを人に見せる時だけ原書にするといふ手合が多いのだ。こんな人々のいふことに耳をかす、必要は無い。これは原書に如くはなからうが、英譯でも今出で居るものは評判のいゝ譯書集の三卷まで出てゐる。何でもお互ひに、も少しどつしりした人間になつて、フハフハ吹けば飛ぶやうな文壇の風氣を一新したいものだ。（明治三十五年十月十八日稿）

（明治三十九年五月追記）此の文が專ら論難の的とせし個人格は故高山樗牛君なりしこと、當時『帝國文學』に於いて登張竹風君の指摘せしに違はず。而も予が此の文を草してより朞月、當の論敵樗牛君は、予の文を見るに及ばずして、病を以て逝けり。大澤に長蛇を逸するの憾みは予に於いて無きに非ざりしも、身世蹉跎の感、覺えず予をして愴然たらしめき。夫れ紫の朱を奪ふものを惡むは此の文の動機なり。されども生きたる人を擊つと死せる人の思想を破するとは、態度おのづから別ならざるを得ず。故人を評するは理情の並び到るに如くは無し。現人を擊たんとせば、擊つて必ず胸に最後の一刀を加ふるを要す。此の文は實に現人を擊たんとするもの、時處合期せずして論敵の死此に公にせらる。予は之れを思ふ每に故人に對

して一の悲哀を感ずるなり。黒といひ白と立して相争ふも、所詮は差別の五十年のみ。一たびは我れと他と、鹹淡同味の海に溶け去るべきなり。噫。

如是文藝

開欄の辭に代へて

東京日々新聞主筆記者足下、文約未だ果たすに及ばずして、月は既に更まらんとす。草々の情、何をか先づ此の欄の聖壇に具へて、文運の前途を祝し申すべき。

夫れ靈の火ほがらかに、文藝至上の威は、長へに人間を被ふべし。予若し、予の爲に割かるゝ此の一欄を以て、文權擁護の砦と致さば、而して社會の事、既往に於いて然りしが如く、今もなほ、多く文藝の獨步的傾向と相軋るの事實之れ有らば、社會經營を以て任とするの記者足下、能く幾ばくの自由を此の欄に御與へあるべきか。社會は一大組織なり、社會は即ち共同なり、道德は畢竟共同的生存を全うするの道に外ならず。文藝若し拔群獨步を標榜して進むことあらば、社會の衆俗これと共同すること能はず。步調亂れ、秩序破る。而も尚社會は文藝をして其の欲する所を恣にせしむるの量ありや。是の如く問ひ來らば、一般の答は極めて簡單に候ふべし、曰はく、否文藝も亦社會內に存立するの一現象なればなりと。然れども、足下の見は未だ必ずしも斯くの如く簡單ならざるべしと信じ候。言を插むものは申すらく、抱月君說くを休めよ。君が擁護

せんとすといふもの、若し日本の文藝にありとせば、憫むべし、其の文藝は未だ現社會の道德と同一の水平面に達せざるなり。道德以下にあり、衆俗以後に落ちて列を紊すが故に、かるが故に之れを擊つのみ。彼等に何の拔群あらんや、何の獨步あらんや、と。されども、刑を編むものは常に罪を設けて勘當せんと致す。文藝の眞義は微妙なり。此のもの果たして道德の以下にありや。此のもの果たして道德の以上にありや。輕々しく斷じ去つて、罪案こゝに定まるとなすものは、短見の徒に候ふべし。是の如きの場合、文藝は一毫も自家の權威を傷けらるゝことなくして、たゞ誣ひられたる而已、たゞ迫害せられたる而已、更に一層高き判決を求むるの理由あるべしと存じ候。而して我が現下の文藝壇、また必ずしも此の類の枉屈無しとせざるに似たり、遺憾のことに候はずや。就中戰後の斯の方面に於いて、寒心すべきものゝ一つは是れなるべきか。今に及んで思を致すべきに候ふかな。

但し、此の論に於いて言ふ所の文藝は、必ずしも狹く我が國の現勢のみを指すものに候はず。東西を通じ、はたまた古今に通じて、文藝史の一面は、常に文藝對社會の爭鬪なり、凡そ大なる文藝の、世に對するや如何なる點に於いてか、格を破らんとす、一味卓拔の氣を帶びんとす。茲に於いてか或者は見て以て、墮落なりと致し、或者は見て以て妄進なりと致す。墮落者は姑らく措いて可なり。群に離れて挺進する者は果たして批難せらるべきか。言を換へて申さば、少數の進みたるものは、多數の後れたるものゝ爲に、其の步趨を緩めざるべからずといふの哲理ありや。是れ文明進轉の樣式に干する、一根本觀にして、然りと答ふると、否と答ふると、おのづから矛盾せる二種の文明論たるべしと存じ候。

此の疑問に對して、予はむしろ否と答ふるものに候。されど此の場合に於いての予は嚴に文藝といふ特殊の範圍に立脚すること、申すまでも無し。他の諸方面にありては、事常に人生存立の實活動と相接するが故に、こゝに道德の一味を着け來

たらざる能はず、而して道德的活動の一切は、すべて相互的、並立的、從つて調和的、讓步的なり。此の精神の存する限りに於いてのみ、少數の進める者は、多數の後れたるものに挺んずるを得べし。退讓調和は直ちに存在なり、之れに背くものは凡て滅亡なり、差別的生存の樣式はたゞ斯くの如きのみ。獨り文藝は此の點に於いて無類と申すべし。

十九世紀の文明は、社會を擧げて俗衆主義に化せしめんとせり。現在主義に化せしめんとせり。法律主義に化せしめんとせり。事頭漸く已甚に近し。活動の氣象將に衰へんとして反動の機早く到らんとするは、固より其の處なりといへども、一語、存在といふ根本の命題にして變せざる限りは、道德の精神に於いて、決して古今あるべからずと存じ候。文藝は此の點に干して無類絕倫たり。

文藝絕對

前便、文藝は社會の道德的羈絆に對して無類なりと申し候。其義如何。曰く、文藝は絕對なれば也。曰く文藝は自在なれば也。文藝の心は絕對なり。比較を要せず、商量を要せず、打算を要せず。比較、商量、打算は凡べて知識なり。文藝の心は當さに知識に絕すべし。知識の磽确盡くる所、千波萬波たゞ是れ感情の海にして、一帆恍惚として其の間に去來するものは、文藝の舟なり。舟中の人、また陸上の紛々と相關せず。

然れども海は陸を掇いて始めて景あり。個中陶然の情趣に、知識與らざるには非ず。空に線を展べ、水に影を染むるものは、林巒岬岫の自然なり。之れを省いて舟中の景を解かんは、難かるべし。たゞ林巒の色、岬岫の形、此の時にありては、趨つて一面蕩々の海に歸す。島嶼は恍として夢の如く、漁村遙に他界に連なるの感をなさん。陸上一切のもの、大海の趣に

埋沒せられて、心鏡一如、陸あれども陸無し、唯海あり。文藝の詮議は感情にして、知識の之れに覆被せられたる姿は、件の如し。而して道德の意識は知識に攝取せらる。故に知識の覆はるゝ時は、道德從ひて隱る。文藝の潮湧き立つとき、道德は沈みたる岩となるべし。文藝乃ち道德に超するなり。眞の文藝は常に斯くの如くならざるべからず。是れを文藝の絶對價と稱す。是れに對當して、文藝また相對價を有す。蓋し文藝の心が絶對不亂の狀にあるは、刹那的なり。動々もすれば則ち醒めて、知識に還らんとす。前の瞬時に於いて、絶對無類の妙怡悅に耽りしものも、後の瞬間は、早く已に之れを提出して知量の題目となさんとするなり。文藝が當然の意味に於いて、道德の俎上に來たるの端はこゝにあり。たゞ此の點に於いてのみ文藝と道德とは相交涉すべし。否、事實としては、此のとき旣に、文藝が其の妙相を脫したるなり。文藝の妙相を脫したるが故に、やがて道德の範圍に入れるなり。文藝の絶對價には些の疑ひもあらず。而して斯くの如き心上の轉換は、多く瞬間的なるの理により、眞の文藝、大なる文藝は、常に此傾向に應ずるの準備を要す、文藝の價値の高下は是れより生ずべし。詮ずる所、是れ文藝の相對價にあらずや。

然らば文藝や、此に於いて終に道德に媚びざるべからざるか。曰はく、否、玆に文藝の第二の天地は展開せらるべし。

記者足下、如上、理を論じて稍精しからんと致せば、筆則ち膠の如く、文則ち砂の如し。慚愧の情に堪へず候。次稿には、文藝相對價論の見地よりして、病友綱島梁川子の近著『病間錄』の一節に、短評を加へ試みんと存じ居り候。此の書に關しては、曾て足下が激賞の語をも承はり候まゝ、此のこゝろを申し添へ候。

文藝と宗教

文藝の絶對的狀態はたゞ圓具なり、微妙なり、幽玄なり、感じて之れを悅ぶとき、物我全く一に歸して、何ものゝ思議といふとも、加ふに端なかるべし。されど一たび心の眼を轉ずる時は、天地遽然として、知識に化す。こゝに區々の商量あるなり、比較あるなり。而して或る者は直ちに假實眞僞の意識に入る。文藝が科學によりて征せらるゝなり。また或る者は誤つて善惡利害の意識に入る。文藝が日常の道德によりて征せらるゝなり。斯くの如きは凡て文藝の外道たり。

若し或は、如何なる文藝に對しても、此の外に出づること能はずといはゞ、是れ斯の道に於いて、未だ度せられざる者なり。文藝の堂宇は開濶自在。宜しく來たつて參機の緣を結ぶべきにあらずや。正しく文藝を解すると否との差は、僅々心眼一廻轉の呼吸のみ。さればまた、文藝は、自ら玄妙の門を出でゝ此等無緣の人を救ふこと能はず。此のもの、初めより唯一なり、折衷調攝によりて、人巧的中間の狀態を作るは、文藝の高き所以に非ず。道德上の事物は常に緩和中庸によりて、進める者と後れたる者とを連結するの途を有すれども、文藝この意を酌むときは、みづから滅亡す。文藝に中庸無し。

若し或は、何人を以てするも、科學、乃至日常道德に墮つるの外無き文藝なりといはゞ、斯くの如きは極めて憫むべきものなり。獨立して詩神の命を傳ふるに堪へざるの文藝なり。當然下つて道德若しくは科學の門に哀を乞ふべし。言ふところは、勸善乃至合善といふ名によりて僅かに允可せらるゝもの、實の至眞といふ名によりて僅かに存立し得るもの、是等は畢竟寄生文藝たるを免れざるが故に、相對價に於いて、其の位甚だ低し。

次に列するもの、事象に歸趨あり、思想に根柢あるときは、絕對的意識一たび破るゝも、心は善惡に觸れず、假實に滯らずして直ちに一層高遠の處に遊ぶ。之れを哲理的、瞑想的の文藝と呼ばんか。蓋し此の一連續の意識や、科學の意識に比して遙かに不精確、從つて空想的また感情的なり。是れ其の我れを得て再び絕對感情の堂に陞らしむるの容易なる所以。斯く

の如きの文藝は、一たび知識に墮して更に解脱するが故に、感銘長く、興趣盡きず。相對價の高きに位するは是れがためなり。

併しながら、哲理はまた科學の連續なり。若し其の文藝が擁する思想の歸趣といふもの、所謂人生諸種の問題に對する解決を知識の上に掲げ得べしといふにありとせば、斯くの如き哲理的文藝は、把翫のあひだ、知識の手澤之れを滑かにし了して、また情味の其の膚皺より滲透するもの無きに至らんを恐る、文藝再び知識に征せらるゝなり。されば此の種の文藝は、哲學的なるを欲す。哲學も說明すること能はざるものを捉へて、たゞ瞑想的なれば、則ち足る。事象の奥に、烱然として何物かの大動するを示せば可、やがて哲學をも超するなり。玆に至りて、文藝は直ちに宗教の意識に接す。

夫れ宗教の對當とする所は、一切の知識に絕したるものなり、宗教家之れを名づけて神といふ。而して凡そ宇宙のあひだ、知識にあらざるの現象は、たゞ感情のみ。知識と感情と、此の二つのものを除くときは、物なく、我なく、天地なし。されば神の人間に來格するや、知識の絕するところ、感情に於いて之れを觀るべきに似たり。歐米にありては、近時夫のサイキカル、レサーチ一派の學者が蒐集せる此の種の實驗談といふもの、結論には先入的假定の臭味ありて、遽に之れと同意すべからずといへども、解釋すべき事例を其の中より得んは、容易なり。我が邦にありて、最近此等の書と相并びて思索界に多大の興味を喚起すべき名著は、梁川氏の『病間錄』なるべし。予は其の『見神の實驗』と題する一節中より數句を引きて、著者が宗教を見る所に、予はむしろ文藝を見るの理を明かにせんとす。

記者足下、紙幅限りあるべくして、意容易に盡きず、この文尚一日長かるべく候。

『病間錄』に文藝を見る

『病間錄』見神の實驗の一節に申すらく、

げに彼の夜は物靜かなる夜にて候ひき。一燈の下、小生は筆を取りて何事をか物し候ひし折のことなり、如何なる心の機(はづみ)にか候ひけむ、唯だ忽然はッと思ふやがて、今までの我が我ならぬ我と相成、筆の動くそのまゝ、墨の紙上に聲するそのまゝ、すべて一々超絕的不思議となつて眼前に輝き申候。この間僅に何分時といふ程に過ぎずと覺ゆれど、而かもこの短時間に於ける、謂はゞ無限の深き寂しさの底ひより、堂々と現前せる大いなる靈的活物と、はたと行き會ひたるやうの一種の錯愕、驚喜の意識は、到底筆舌の盡し得る所にあらず候。（下略）

宜なり著者が之れを以て驚絕駭絕の事實と致すことや。單に之れを讀み候のみにても、既に胸躍り魂轟くの概あり。知識の盡頭に立つて、廓然無方の大絕對を望むの感有之候。文章また優に妙域に入る。誰れか此の一文を讀みて筆者の三昧地を想望致さゞらんや。

然れども、予が性の傾向は、斯くの如き三昧の境を以て、即ち文藝の心の至極せるものとなすを禁じ得ず候。

たゞ、尋常の塲合にありては、文藝に對する妙悅は、順序を有し、事象を有して來る。突然にあらず、また無象にあらず。故に其の喜びに驚の分子なく、愕の分子なし。然れども、堂々といひ、大といひ、靈的といふの形容は、要するに、我の擴大の感なり、我の光耀の感なり、我が絕對に抱和す の感なり。一言にて盡さば、絕對的悅樂の境にあるの我れを、自ら客觀に提起して、形容したるの名たるべく候。すなはち、文藝と宗敎と、名は異なりといへども、其の指すところの三昧は

一のみ。

然らば、斯くの如く文藝と宗教と、同體異名の奇觀は何によりて生ずるか。曰はく文藝は外より發し、宗教は内より發するを常と致せばなり。眼に色を示し、耳に音を與へ、心に事を想はしめて、而して終に是等事象の上に絶對無類の妙悦を織り成すものは文藝に候へど、宗教は、其の人の機根熟するに從ひて、此の如き事象乃至は根據を要せず、みづから空に同一の結果を構成す。若しかの冷かなる科學をして是れを說明せしめば、是れ血液の腦部に注ぎ來たる一種の狀態のみ、或は病的、或は習慣的、凡て生理上の假定によりて解決するを得べし、とも申し候はん。されど是の如きは、或は事實の一面たるをば得候はんも、貧しき說明たるを免れず。宗教は事象を拔き去りたるの文藝なり。文藝は他發の宗教にして、宗教は自發の文藝なりと申すべし。

されば此の理を明かにすべき證據は、之れを事象なき文藝に徵すべく、事象ある宗教に徵すべし。文藝には事象あるを常と致す、されども稀に是れ無きに近き文藝あり、音樂の如き、即ち是れなり。音樂には音といふ事象はあれども、他の文藝の如く直ちに之れを心の象に化することとなくして、快感先づ到る。たま〳〵心の象起らんとするも、其の狀態は到底不定着なり、漠然たり。此に於てか、之れを思念するもの、一種神秘の氣に打たるゝを禁ずる能はず。我等が音樂に於て最も容易に文藝的悦樂の極地に達し得べしと感ずるは、此の爲に候はん。また音樂のみは文藝の中にありて一種超越的のものなりと信ずるの思想、東は韓非の古きよりして、西はショーペンハウエルの新しきに及ぶまで、僂指するに堪へざるものあるも、此の爲に候ふべし。即ち事象無き文藝は宗教に迫るの證に候はずや。

之れに反して、事象無かるべき宗教若し事象を着け來たる時は、茲に宗教は文藝と化す。彼の經文、聖書の類に散見する

奇蹟を以て、是れ詩なりと解する人の心は此の意に候ふべし。はたまた寺院教會の盛觀、勤行禮拜の盛儀を見るごとに、予は、覺えず、是れ一大幅の文藝也、と叫ぶを禁じ得ず候。而して、斯くの如く、事象あるとき文藝となり、事象なきとき宗教となるの妙體は、其の理を考ふるに及びて、的然、予の所謂文藝相對價論に達すべしと存じ候。

夫れ文藝の心が、絕對的狀態より、降つて相對的すなはち知識思量の境に歸るときは、其の事象の路を辿りて、或は哲理的瞑想に入りて再び絕對に還沒し、或は事實を追ひて道德的商量に入る。是れ文藝に相對價の生ずる所以とは、前來しば〳〵論せし所に候。然るに我等が宗教のコンヴーション若くはエクスタシーの感より、一旦平常狀態に歸還するにあたりては、其の處に事象の確として尋ぬべきなし。而も我等の知識的要求は、確たるものなき所に、確たるものを得んとして休まず。遂に其の絕對の感情そのものを知識の手に掴みて、之れに名を附し、之れに商量を加ふ。曰く、此の絕對不可思議のもの何れにありて、而して如何の關係を我れと相有するかと。而して斯くの如き思議に對して、是れ客觀に何物かの絕大なるものあるなりと答へ得るの性格者は、之れに驚愕を感じ、喜悅を感ず。是等は畢竟文藝若しくは宗教の絕對的瞬間に續いて生ずる、第二の天地に候。此の第二の天地と、第一の天地と結合致すとき、玆に文藝の絕對感は相對價すなはち道德價の保證を得て、實生活を內容とする一種特殊の現象と相成り申すべし。是れ宗教に候はずや。

要するに文藝の絕對的感情そのものに、直ちに相對的思議を加へて、而して再び文藝に入らず、また日常道德乃至科學に入らず、兩者を攝して、申さば實質ある文藝を作すもの宗教に候ふべし。

さればまた、絕對感は一なり、是れ文藝なりや、是れ宗教なりやの名は、第二境に於いて始めて定まるべしと存じ候。

「病間錄」の著者、果たして此の理に首肯いたすべきや否や。

記者足下、閑情の辭覺えず數回を重ねて、勃窣の論に陷りし罪淺からず候。（明治三十八年十一月）

秋夜放談（一）

（客）あなたの「如是文藝」に出た文につき『毎日』新聞の評者は之れを一讀再讀したが晦澁空疎で分からない、哲學的囈語だと書いて居ます。

（主人）僕のあの文を一讀再讀せられたといふ、其の熱心には敬意を拂ひますが、併し文みづからが晦澁だと云ふ評は、失禮ながら當ッて居ないと信じます。分からないのは思想のせいでせう。思想が分からないといふのなら致方も無い。分かる人には分かりませう。分からないと言ッても、あんなものは、讀者に漠然たる省察心を起こさすれば、其れだけでもよいのです。文章としてはあれだけの範圍で言へるだけの事は言ッたつもりですから、あの思想をあの長さで、一層有力明確に書き現はすことが出來るといふのなら、行ッて見せて貰ひたい。また空疎といふことが、若し引例などが無くて具象してゐないといふのであらば、それは事實であらうが、無理の註文でせう。若しまた例の外國のオーソリチースが擧げて無いといふ感じなら、構ひません。外國のオーソリチースの受賣より外、サブスタンシアルな信憑すべき議論は無いと考へるなどは、惡い癖でせう。何ぞ議論の是非は議論そのものに就いて斷ぜられないのであるか。其の他哲學的囈語などといふ評は、理由なくし

て放つ惡罵に近い、無禮でせう。評者が士人なら、取り消すべきです。

（客）戰後の文壇といふことで大分、大家先生方のお説があるやうですが、何んなものでせう。戰後の日本は自分で自分のゑらさを悟ッた勢ひで、文藝の方に目ざましい現象を起こすだらうといふ意見は、當を得たものでせうか。

（主人）左樣、自分で自分のゑらさを覺るといふことゝ、其の者が大なる事業を成すといふことゝは、必ずしもさう簡單に連續し得るタームスでは無いかも知れない。隨分世間には、自分で自分のゑらさを、知り過ぎる程知ッてゐる人が多いやうだが、それが必ずしも目ざましい活動の源とはなッて居ないぢやありませんか。

（客）では戰後の文壇といふ問題は、

（主人）戰爭といふものが人心の奧底に非常の刺戟を與へて、斯う、何といひませうか、我々の靈魂を攪き亂し沸き立たすといふやうな結果を世に與へるのは、それは明白な事實でせう。而して斯くの如く一旦撼搖し興奮せられたる精神が、必ず何れの方面にか其の結果を實現せざれば已まない、それも否むべからざる理勢でせう。併しながら、斯やうにして活動し來たる其の事業は、社會のいづれの方面に於いて最も花々しいであらうか。勿論いづれの方面に於いても、皆分相應の活氣は帶びて來るであらうが、日本の現時のやうな、精力の餘裕未だ十分ならざる社會にあッては、動々もすると一方面の活動盛んなるが爲め、他の方面は荒らされてしまふ。物事が燒點的方式で進んで行く。而して戰後の文壇が萬一にも此の荒らされる組に這入ッたら何うであらう。玆に文壇の未來は樂觀とも悲觀ともなる譯ですね。だから我々文壇に携はる者は、むしろ是れから戰に入るの決心で、大勇猛心を振りおこし、社會活動の燒點に立つといふ抱負がなくては叶ひますまい。それと同時に、若し眞に文壇の戰後を豫測しようといふのなら、單に史上、殊に事情の違ふ西洋の歴史的結果のみで比較の論を立て

るのは、愚な話でせう。日本近時の社會的狀態といふものに深く思ひを潜めて、其の自然の傾斜を明かにすることが必要です。

（客）然らば近時の我が文壇の傾向は如何でせう。

（主人）說あり。

秋夜放談（二）

（客）現時の我が文壇の傾向は何うでせうか。

（主人）説はあるが、到底一場の座談で盡すわけには行きますまい。其のうち長いもので一つ論じて見たいと思ひます。假に其の一端を言ッて見ると、今の日本文壇の傾向、少なくとも其の一部の傾向は、西洋的風格から日本的風格に歸りつゝあるの氣味でせう。と言ッても、其の意味は、例の國民文學勃興若しくは國民的自覺などいふことゝは違ひます。茲でいふ日本的風格は、むしろ西洋から這入つて來てゐる。之れに向ひつゝある人々も、みづから西洋の最新傾向を追ッてゐるものとのみしてゐるらしい。所謂シムボリズムなどいふものが、即ち是れでせう。さすれば、其源が佛蘭西獨逸のそれにあるのも事實です、併しながら、斯くの如き風格の文藝が西洋に起つた所以、乃至其の物みづからの意義を考へて見ますと、日本的、若しくは東洋的といふ傾向になつて來ます。ヘーゲルがジムボーリッシュ即ち東洋的と解した時の意義は、言ふまでもなく貶下の心を含んでゐますが、今の場合では輕々しく之を貶下する譯には行かぬ。由來文藝上の作品を、其の形式、主義、風格などゝいふものゝ上から全稱的に批難するといふことは、あるまじき事でせう。文藝は此の點に於いて十分の自由を主張

する權利がある。

さて斯やうなシムボリズムなど申すものが何故に東洋的かといひますと、相對界を消して行く形の思想に應ずるからである。之れを消極的とも言ひませうか。凡そ如何なる社會にあッても、相對的若しくは物質的活動の豐富を是認して、其の頂點に安立の地を見出ださんとするものと、其の反對に相對的活動を滅却し滅却して、而して終に安固の境に達せんとするものと、おのづから二大別した思潮が存してゐます。而して此の二つのものは、時代により、國によッて、消長を殊にしてゐます。茲で東洋的と申すのは、右の後者を東洋思想の一層いちゞるしい特色と見た意味であるから、即ちシムボリズムなどを日本的風格と呼びますのは、其の根本が相對的色彩を貧にして絶對に跡歸りせんとする思想であるといふ義になります。此の結果を推して行くときは、貧枯、寂寞、孤獨、悲哀といふやうな調子の悦びに到達するでせう。而して此くの如き趣味がまた捨つべからざる文藝界の一面たることは申すまでもないのです。

西洋では色々の事情からして、此くの如き風格の思想が渦卷き返して來るの理由がある、日本も恐らく一面に於てさうでせう。併しながら、日本の近代文明の變遷は、御覽の如く、歷史的すなはち時間的といふよりも、寧ろ地理的すなはち空間的といふ氣味であるから、あらゆるものが縮圖的に共存して互に推し合ひ牽き合ッてゐます。西洋では、百年二百年の間に交互して起つた事柄が、日本では、今現に我々の目の前に走馬燈の如く廻轉し起伏しつゝある。之れを考へて見ると、今の日本は世界あッて以來の奇觀また壯觀を極めてゐる。念こゝに及べば、覺えず眉を揚げて「いかに四海の人、來たッて我を見ずや」と叫びたくなりますね。

斯やうにして、現下の日本文明には、地理あッて歷史がない、從ッて殆どあらゆる者が存立の意義を有してゐる。就中思

想界に於いて然りでせう。されば我々は、明日の新を求るに熱心なると同時に、昨日の舊をも十分に發達せしめて、其の意義のある所を盡させなくてはなりますまい。若し輕々しく一を棄てゝ他に移れば、其の棄てられたるものが復た必ず盛りかへし來て、幼稚なる競爭已む時なく、進歩の速度が爲に緩くなりませう。

そこで結論としては、戰爭の後、社會若しくは人心が貧枯になれば、文藝がおのづから其れに應ずるものを要すべく、是れが豐富になれば、またそれに應ずる文藝を要求して來る。現在の文藝的傾向が如何あらうに拘らず、戰後の文壇は、戰後の社會的狀態によッて、更に異なッたもの、例へば一層積極的のもの、一層豐富なものをも、必ず盛ならしめると思ふのです。

（客去る、うなづけるや否やを知らず）（明治三十八年十一月）

囚はれたる文藝

第一

去年八月三日の夜は、我れ伊太利ナポリの港に舟がゝりして、感慨の事ども多かりし。中にも分けて老いたる文明のいぢらしさ。文藝の伊太利は死なざれど、さりながら、今の世に亡軀を曝らす哀れさよ。更にアドリアチコの海一つ越えては、同じ命運の岸に、苦しき息吹の身を横たふる希臘。世は二十世紀の叫びけたゝましき頃を、御身も尚ほ求むる所ありてや、見る眼も傷ましき覺悟かな。

兎かう思ふ頃日は、ヴェシゥヸアス山の背後に沈んで、跡に曳く五彩の輝かしさ「死に行くものは皆斯くの如く」と天の示しに會ふ心地して、やがて浪の染め色、人の面の染め色、みな消ゆると見れば、そこにヴェシゥヸアスの活きたる火こそ我が胸を焦したれ。

ポムペイの町々に花と咲いたる藝術を、一夜の怒りに、永劫の夢と埋め了んぬる千八百餘年の昔語りは、今も尚ほ此の山の烟と共に長くして、其の同じ烟の、晝は黑く世を愁ひの息にも包まん氣色すれど、夜の眺めはまた更に凄じ。見られよ。

渦巻き上る烟の根、今は次第に焰となつて、明くまた暗く、おのづから呼吸を宇宙の胸の動悸に合はすならずや。其の底に萬年消えず燃ゆる思ひの潛めばこそ、夜ごと天に向つて噴く熱氣には、石も熔けやう空も焦げやうなれ。あはれ囚はれたる此の火、太古以前は世を擧げて皆御身の領なりしならんを、冷めたるものつれなく、殼となり層となつて御身の周圍を鎖ざし了うせり。百年千年に一たびは、忍耐の紐きれて、山を裂き都を埋むる自暴の振舞も、思へば恕すべき謂はれはあり。我等もまた命を造化に享け、熱を御身と分かちて、此の熱、此の命を保たんが爲めに、仁義の縛め、博愛の繩、幾その羈絆に身をもだへしことか。あゝ、されども此の羈絆は遂に斷つべからず、一たび之を斷つときは、軌道よりすべりし星の如く、一切の人見る〳〵溶け去つて、無相の海に入滅す。なまなか我れに智識あり、此の理を知るが故に、みづから、流るゝ星の如く美しく消えんとも得せず。さりとて胸に一念の火は盡きざるをいかにせん。

　はかなき罅隙を窃みては燃え上る夫の火柱よ、道義の繩に縛られて、世を引かれ者と過ごさすが造化の趣意ならば、何故人間に感情といふ凶器をば與へたる。昔全能の神は、アダムを造りて、地球の邊に横たへ、彼方太虛の世界より、指頭を延ばして、そこに生命あらしむ。人の命といふもの、譬へば月の光を葉頭の一滴露に溶かして、永劫不斷と引くが如く、此の時始て、妙へにして見るべからざる一縷の流れとなりて神の指頭よりアダムの指頭に通ひ來たり。かしこ羅馬の法王殿の天井は、ミクランゼロが絶代の筆と稱して、此の崇高なる詩歌を、今も觀者の想像に活かしたり。あゝ此の全能の神は、斯の如くして生命を我等に分かちながら、何故に其の行く道を二手には築きし。左に沿ふものは感情の下り路にして、右は智識の坂、道德の峠なり。登らで叶はぬが人の世の道ならば、假りそめにも降ることの易きを味はす造化は、つれなからずや。また降るが正しき道ならば、登る苦勞は始めより省いてこそ欲しきなれ。

ホルマン、ハントが一代の名畫「世界の光」は、一切眞理の幽微と玄黒とを擧げて、基督が携ふる一燭のために明白々たりと描けり。されば、我がオクスフオドのキーブルカレッヂに此の繪を見し夜は、我はまた眞理の明燭を片手に掲げ、紫微の御門の扉を敲いて「あはれ萬能造物の御神、世は待對矛盾の塊にして、其所やがて調和を要し、節制を要し、努力を要し、道德を要し、苦痛を要するの根原たり、そも〳〵待對矛盾として此の世を表白し給ひし理趣如何」と詰らまほしの情に禁(た)へざりしが。

我が瞑想のやうやく理に入らんとする時、ヴェシゥヸアス山は、再び其の面目を展開したり。今まで黒き衣に覆ひかくせし胸を披くと見れば、慘ましくも一痕の生ま傷、たとへば、みづから哀心の苦悶に堪へずして、爬き刳りたる深手(ふかで)とも見えて、山腹の谷間(たにあひ)にラヴの流れ尚ほ燃え殘れり、晝は心づく人もなし、夜に入れば其の色血よりも赤く、おのづから人の膽にこたへて物々し。

此の時夜はすでに更けたり。我が立つ上甲板の端のあたりは唯闇くして人も居らず。耳を欹つれば、何れの岩に住むざれ貝が、何れの岸の藻の花に便り送るか、四方ただひた〳〵と浪のさゞめきのみ聞こゆ。

と見るに、山腹なるラヴの火よりか抜け出でたる、異裝の者一人、頭に頭巾を戴き、眞紅の長衣を垂れ、彼方の岸に立ちて我を招くと覺えしが、我れや行きし、彼れや來たりし、知るべからず、彼れと我れとは忽然として幷び立つたり。

此の異裝の友こそは伊太利繪畫の祖、ジオットーが筆を傳へらるゝフォレンチェのダンテが肖像そのまゝなりけれ。

第　二

彼れは徐ろに手を擧げ遙かに白む地平線のあたりを指しながら、

「見られよ、東海の客。我れ足下のために古今を示すべし。かしこ天と水と相迫るところに、かすかに髪の如き一道の明るみあるを見たまはずや。天地いかに晦朦の夜なりとも、此の一線の明白は、曾て消ゆることなし。闇より滑り出でゝまた闇に入るべき一葉舟の微といへども、一たびこの白光域に來たるときは、詳細に其の本體を露呈す。彼の岸と此の岸と始終と周圍とは、凡て黑漫々として知るべからざれども、ひとり中間の一線のみは極めて明徹、極めて白精、來たるものを照破せずといふことなし。我れ今此の白光の中に古今を觀せまくす。しばし待ち給へ東海の客。唇を動かし給ふは、白光とは何ぞと問はん心なるべし。其の答はかしこにこそ。」

指ざす方を望めば、光道おのづから二列に分かれて、一は物みな青く、一は物みな赤く映ずと見えたり。たとへば、一は赤き雲、一は青き雲なんどにて敷き詰めたる道ともいふべし。其の折忽ち一群の人數、彼方の闇より我等が視界の地平線に過り入つたり。

「いかに東海の客、夫の一群は、青き道をこそ驅けぬけんとはするらし。其の先頭にある寛衣の紳士等は、希臘のプラトーン及びアリストテレースなり。中にもプラトーンは、殆んど半脚を赤き道に踏み入れんとしては、また引き戻す。手に携ふる所は『フヰードラス』の卷か『シムポジアム』の卷か、はた『レパブリツク』の卷なるべし。最上絶對の郷を忘じ得ず、夢の如くかすかに之れを追慕して、憧れ仰ぐの情に堪へずと說きしプラトニツク、ラヴの心根は、赤き道行く人に近からずや。されど其の最上絶對のエロスは、遂に智識によりて近づくべき理體たるを免れざりき。此の人もまた、理により、知識によつて闇黑を照破せんとするならずや。アリストテレースに至つては、其の淨化（カタルシス）の說、一點の別彩となつて彼れの詩論を麗

しくするにも拘はらず、思想方式の調子、手障り、みな赤き道に上るべき人とも覺えず。知識、理性を以て萬象を照らさんとするに於いては、他の哲學者流と異なるところなし。

東海の客、我れは哲學に於いても、此の以外のものを求めんとするなり。

中世の哲學は基督教の註釋なり。知識の燭を掲げて、宗教の靈龕を照さんとはしたれど、神秘の一扉これを遮ぎりて通せず。其の光は空しく反射して、自己の上に落ちたり。見られよ、かしこに佛のデカート等再び青き道に據り、群をなして登場せり、彼等が自己の左右を顧みて叫ぶを聞き給はずや。曰く、己れとは何物ぞや、と。是れ所謂近世哲學の開始を報ずる聲なり。されども斯くの如き思想の流れは、知識の範圍に於いてのみ完結せんとする限り、尚我が胸の深海には達すべくもあらず、唯これ表面の窪みを傳ふ一系の水脈に過ぎざるなり。我れも一たびは同じ道を尋ねんとしたれど、末は詩の都、神の宮殿とこそ心ざしたれ。

こゝに嬉しきは、カントかな。知識、理性に無上の權威をば持たせながら、傍らに一種の別なる力あることをも忘れず、純理性、實理性の上に、更に微妙なる判斷力といふものゝ存在を認めて、而して此の判斷力の重なる發現は、快不快等の感にありとなす。味ひ深く、優しく、温く、懐かしき觀方にはあらずや。見られよ、カントが場を降るとき、青赤の兩道は殆んど相合せんとしてまた分かれたり。

次いで心ゆくものは、ショーペンハワーが意志の説なり。彼れに取りては一切の根元實在は意志なり。されども我れは此の所に於いて意志といふ名を嫌ふ。我が内的經驗には情といふ名こそ一層明瞭にして事實に切なるを覺ゆれ。

我れとショーペンハワー等と、押さへたるは同一實在の活動ならんこと有り得べき結論なり。されども之れを意志と呼ぶと

きは、黒、冷、力の氣餘りに盛んなり、我はむしろ、熱あり、光りあり、色彩あり、香芬ある活動を想像して、情念と呼ぶものに與せんと欲す。カントは判斷力と稱して我が思ふ所の一半を說き、ショーペンハワーは意志と稱して我が思ふ所の一半を說けり。二つのものは、相合して人生至高の力の府たるにあらざるか。而して一切の學問知見は綜括して此の一團力に觸れ來らざる限り、未完成のものたるをば免れざらん。斯くの如きは主義無く生命無く、言はゞ急所を有せざる學問となるべきなり。我れは急所ある哲學を求む。

十九世紀の或る部分は、科學萬能の旗下に奔趨したれども、世紀末に於ける彼等の叫び聲は失望なりし。何ぞや、知識の根本を忘れたればなり。我等が燭を秉ッて闇夜を照らすとき、見んと欲するものは向ふにあり、されども、見て以て何とせんかと問はゞ反射して自家に還る。我れ彼の物に對して覺悟を定めんが爲めならずや。かくの如くして、知識の根本は物我の干係を定むるにあるが故に學問は凡て此の點に達して始めて完結す。此の一結を缺くものは、不滿足なり、倘何物をか要求せざれば已まず。一切の學問は哲學に入り、哲學は我れの安立の情を揣摩するに及んで始めて眞に意義あり生命ありといふべし。此の意に於いて哲學は科學の仕上げなり、畫龍の點睛たりといふを妨げず。」

第三

「あゝ我が言說復た抽象に走せたり。許されよ東海の客。來たつて文藝の跡を見たまへ。赤き道の末、朦朧たるが中に一列の長き影うごめくは、中世紀のさまなり。青き道の遙かに後れて明るきは、知識が感情に追ひ越されたるさまとや見ん。赤き感情の路にあるものは、之れを意ともせずして猛進す。其の重なる人數は、歷代の法王等か。朦朧たるが中に、只一點輝

くものあるは、黄金の十字架なり。あゝ是れ十字軍!。

げにも中世の歴史に於いて最も麗しく夢の如きものは十字軍なり。中世の暗黒なる歴史も、是れを燒點として見るときは、則ち許多の光耀あり。

それ信仰感情の絶對權未だ衰へず、隱者ピーターの勸進に始まりて、幾萬の士女が始めてゼリゥサレムの聖地の前に泣き伏せしまで、おのづから是れ一篇の詩を實行に移せるものなり。何等の情致ぞや。中世に文藝なし、一切の感情は馳せて宗教に之いたり、而して其の磅礴する所、遂に發して自然の文藝となれるものは、十字軍ならずや。而して闇黒時代の濃霧尙ほ歐洲の都市を蔽して垂れかゝりたる中より、かしこナポリの丘腹に挺然たる寺塔の十字架のみ已に燦然として光を放ちたり。是れかすかに天の一角に芽ぐめる文藝復興の第一光が早くも頭地を拔ける塔の頂に反射せるならずや。やがて黄金の如き光線は、林を浸し野に溢れ、天地はじめて一朗、人畜共に舞ひ、百禽聲を揃へて歌ひ出づるの盛觀を呈したり。世に若し斯くの如き文藝復興の圖あらば、其の壯麗いかばかりならん、想像しても見給へや。

さて十字軍の一隊は過ぎ去れり。後れて一人、長衣の袖を叉ぬきて、俯き勝ちに赤き道を辿り來るは、誰れと思はるゝぞ。靑き道にもしば〳〵跨ぎ入るを見ずや。あゝ東海の客、足下うなづく所あるか。斯くて兩道に携はれるモンク頭巾の彼れこそは、我れダンテの前身なれ。

我れは今も一代の事業を誤れりとは思はず。文藝復興の夜明けの鐘は、我れ撞けりとこそ信ずれ。唯だ、過ぎし我が意を、今の我が意にて解釋すれば、多少の言ふべき節なきにしもあらず。

我れはもと二つの傾きを有して生まれたり。一つは理に行くの癖にして、一つは情に行くの性なり。わかゝりし我が生涯、

は抑へがたき情のさすらひにして、情の熱する所、周圍を顧みれば不平あり、我が思ふところを行へば葛藤あり。斯くの如くして我が五十七年は、ローマを追はれ、ヹロナに隱れ、フランスに避けたる、流離遁竄の歷史となれり。されども、我れはまた盲なる情の一面のみには從ひ得ざりき。我が理智性は、生れ得て鋭敏『神曲』中の理趣は言はずもあれ、夫の悲哀に富める『新生涯』の一卷すら、記叙の方式に究理の調あるは、足下も心づき給ふ所か。さればこそ、中世、闇黑の覆ひの下に潛み通へる學問興復の氣に、我れは逸早くも衆に先だちて感染したるなれ。知によりて過現を照し、情によりて未來を察す。斯くて我が情は闇中模索の妄飛躍をば嫌へども、知識の盡くる所、飛躍の外に途なしといふ時は、則ち情の翼に羽打つて飛躍せんことを願ふ、未來に對して無限に向上せんとする所以なり。然れども、我れは遂に之れに向つて突進することを能はず。之れを爲さんには我れ餘りに聰明なりき。內に憂愁を抱いて、一代を轗軻の間に送るの人たりしこと、また憐むべしとは見給はずや。」

第四

「さらば當時我が豫見せし未來は如何なりしぞと問はるゝか。『神曲』淨罪界の初めに、我が意は盡きたり。下界にては見し事もなき四つの星、燦然としてきらめき出づれば、天に歡喜の光り滿つる、其の天こそ我が理想なれ。四つの星に額を照らされて面も輝くかと見ゆる一老翁は、問うて曰ひけらく「語れ、御身は何者ぞ、此の眼しいたる流れを溯り、彼の永劫の牢屋より遁れ出でしと覺ゆるは」我が東道の主人ヴージルは答へて曰はく「自由を索めんがために旅するものぞ」と。あゝさなり、精神の自由、語は陳なれど、之れよりも切に此の一塊の思想を表白すべき言葉はあらざるべし。當時、政敎混亂して

一となり、一切の主權は擧げて法王の手に委ねられたり。政治はいふに及ばず、學問藝術みな舊敎の隷屬たるを免れず。而して舊敎はすでに其の生氣を失ひて、地中より掘り出だせる巨獸の骸の如く、徒らに大に、徒らに人を壓するのみ滔々として寄せ來たる智識の潮をばおろかにも自ら體を横たへて防止せんと欲したれど、そは無益なりし。精神の上に牢獄を築いて我等を囚へんとする者は眞に此の巨怪なりしなり。我れ乃ちおもへらく、是れ基督敎の罪にあらず、俗輩之れを汚して斯くの如くならしめたるのみ。眞の神、眞の愛の尊とさは、古今いさゝかも變りあらずして、現に我が胸に躍々たり。此の清き愛、此の絶大なる想ひは、直ちに是れ内在經驗の事實ならずや。我れは今より後、唯之れを追うてあこがれんのみ。新生命に入り、新光明に接せんが爲めには、先づ舊敎義舊慣例の我れに邪魔するものを擺脱せんと念ふ。我が精神を法王專制、敎義專制の羈約より拯うて、そこに大自由を得せしめんことは我が願ひなり、と。

斯くの如く思惟して、我れは基督敎の精神に新たなる光を注がんとはしたり。後世のニーチェ等が如く、直ちに走りて基督敎を破壞せんには、我が知識餘りに聰明に、また我が基督敎に對する愛着の情餘りに强かりき。されどこゝに顯はれたる世界の一傾斜は、此の後永く平衡に返ることなく、延びて二十世紀の今日に及んだり。後れたりし靑き知識の道にあるもの、感情一存の振舞に快からず、赤き道にあるものを追ひ越して久しき枉屈を伸べんと奮起せる有樣は、やがて我が身に代表したりし文藝復興の夜明けなり。コンスタンチノープルの落滅、印刷機械の發明と、史家が數ふる文藝復興の外緣は多けれど、一味の温光は、早くほの〴〵の夜明けより、人の心の底に通ひたり、畢竟は是れ自然なる命數の循環のみ、節奏のみ。世は知識と感情との一大競爭塲にして、二者の漲落は世態の變遷なり。今文藝復興の初めにあたりて、知識は千年の長き屈伏より起き、淸新の光りを放つて四方を照破す。新日昇つて山河鮮やかなるの概あるも宜なるかな。

知識の汪溢、若しくは知識の勝利、是れまことは十三四世紀以後、延いて今日に及ぶまでの歐洲思想界の原動力にして、此の間は唯だ一傾斜のみ。文藝復興乃至學問興復といふものは即ち知識の復興にして、十六、七、八、九世紀は其の連續たり。史家の所謂近世是れなり。而して、知識の流れと相沿ふべき感情の領土は知識の流勢のすさまじさに壓倒せられて動々もすれば其の氾濫に任せんとす。文藝の森、宗教の園、是等は凡て道德といひ、科學といふが如き知識の流れと對映して感情の領土を代表する者なるにも拘はらず、近世の文藝は、殆ど常に、かしこの木の間に科學の泉、ここの木の間に道德の盃池を隱見せしめて、其の森の姿勢を整へんとす。宗教また、知識の流れを引いて其の園に灌ぐを禁じ得ず。斯くの如くして止まる所なくんば文藝の森、宗教の園は終に知識の水底に溺れ果つべし。夫の科學興こりて詩歌亡ぶと叫びし者の聲を聞かずや。また夫の科學興こりて宗教亡ぶと叫びし者の聲を聞かずや。十四、五世紀に於ける文藝復興の氣運は、十九世紀の末、當然の結果として斯かる叫びに到達したるなり。知識全盛、感情屏息の義、明かならずや。」

第五

「されども我れは單に概般の理を語れり、更にかの赤き雲の道行く我が姿を見られよ。窶れたらずや。我が煩悶は闇黑不快の世より出でゝ早く光明自在の天地に到らんと願ふにあれども、斯かる願の本となりて、打つとも踏むとも變るまじき、大地の如き誠の上に我れを据ゑしは、あゝ其のかみよ、愛の一念力なり。我れは何事を思ふにも眞率誠實の外に行くこと能はず。眞率誠實は、涙を盛りたる袋の如きものか。之れに觸るれば涙出づ。我れは事を想って深く誠なる毎に涙のはふり落つるを禁ずることだに能はず。あゝ此の涙こそは、我が早き生涯に於いて愛より受けし賜物なれ。我が愛の名はベアトリチェなり。

うるはしき其の名かな。之れを聞けるのみにてだに、胸は春の野と開けて、得も知らぬ芬芳の香に、魂銷ゆると覺ゆ。頃は千二百七十四年五月、花祭りの日なり。ベアトリチェは九歳の春なほ淺く、我れはやがて十歳ともなるべき兒にして、二人は、此の日初めてしみ〴〵と相見たり。ベアトリチェの父が春の宴には、我が父も列なれり。我れは父の跡につゞきて、奥なる客室に導かれしが、此の時客は既に半ばをも越えたりと覺ぼしく、歡聲笑語湧き立ちて、窓の前に相對するもの、隅なる安樂椅子に身を横たふるもの、卓を圍みて座するもの、立つて室内を歩むもの、女、男、黄に赤に緑に色彩の輝かしさは目もまばゆきばかり。暫くありて、再び裳の戸に觸るゝ音ありと見れば、母と共に入り來たりたるベアトリチェの立姿、氣高くも美しかりし面影よ。

天降りたる星かと見えて、今立てるは水色窓掛の前なり。衣裳は抑へ薄めたる眞紅の色にして、帶、胸、頸の飾りは、天つ乙女が集めたる珠のかず〴〵、塵の世の人品とも思はれず。

少女は默してにこやかに我が會釋を受けしまゝ、はにかめる我が姿をつく〴〵と見ぬ。我れも一たびは其の眼を見たり。されど其はたゞ刹那にして、長くは見るに堪へざりし。長くは見得ざりしかども、此の一瞥こそは、我れに永久の神秘となりて殘りたれ。深くも潜める我が靈は、此の時全身に動悸を傳へて打ち震ふと覺えしが、之れより永く其の身を愛に捧げたり。

九年は仇と過ぎて、二たびベアトリチェに巡り會ひしは、十八の春、フヰレンチェの町に人の往き來も繁き頃なりし、此の婦人、われには尋常の人蓄とも思はれず。天人などにやあらん。此の日は純白の粧ひして、二人の年長けたる婦人を左右に伴へり。我れは、はたと彼等に行き合ひて耻しさに顏も得擧げず、此方の軒下に身を避けしが、之れを見たりしベアトリチェ

は、世にも心を籠めて我が方に會釋を送りぬ。情ある會釋の言葉なりしよ。始めて之れを聞きし我が嬉しさは、推察あれや東海の客。命かぎりの幸福は是れを極みぞと思ひて、我れはたゞ醉ひたり、恍惚として夢心地となりぬ。淋しき我が家に歸りては、尚さらに、一念ベアトリチェが其の日の事を忘れ得ず。不思議の夢も見たりけり。

後は語らずもがな。十六年の雨風、卑怯なりし我れよ、女々しかりし我れよ、はた思ひ迫つては遣る瀨もなかりし我れ、薄倖にして多感なりし我れ。我れはたゞ失望、憂愁の雲に鎖ざゝれて、後世『ヹルテル』のゲーテ『チャイルド、ハロールド』のバイロン等と一つ思ひに身をもだへたり。而してベアトリチェは千二百九十年、明け行く空の星と消え去りぬ。殘る想ひは、我が胸に秘めたれども、如何にせんや、眉目人の心を語る、世にダンテが面型といふもの、客も見知り給ふべし。されども東海の客、我が此の胸裡には指さば指にも觸るべき一塊の物あり、名づけて誠といふ。是れあるが爲めに我が思ふ所は悉く涙なり。感激にも涙來たり、喜悦にも涙來たり、悲哀にも涙來たる。而して此の優しき涙の源を穿ちしものは如上の戀の歷史に外ならず、清き戀に泣き盡くせし人は、必ずや、眞率誠實の情に富むべきなり。」

第六

ダンテの影去りて、赤き道には登場の人しばし荒んだり。と見る間に、後れて來たりし青き道の人數も、今は一散に驅けぬけて、赤き道にあるものと先きを爭はん氣配あり。世は早や近世に移れりと覺ゆ。中に二人の風骨すぐれたる紳士あり、赤き道より上り來たる。ダンテは之れを指して、

「彼等は伊太利の畫家及彫刻家、ラファエロとミケランゼローとなり。中にもラファエロが聖母の圖は、遂に古今を絕して、

彼れの外に出づるものなし。足下は彼れが歐洲近世の思潮と如何なる交渉を有するかを知れりや。其の點二つあり、曰はく一味の知識なり、曰はく一味の人間なり。

由來知識の勃興に伴ひて起こるべき文藝上の變動は、外形には常に寫實といふことゝなりて見はる。文藝復興期の文藝が當然其の色を帶ぶべきは言ふに及ばざるべし。古き批評家はいふ、ラファエロはミケランゼローの寫實的なるに反して、理想的なるが故に、些細なる點にまで知識の要求を充たすべき寫實をば敢てせざりきと。されども此は寫實理想の語を妄用して自ら矛盾の結論に陷る滔々者流の筆法なり。古今同嘆、深く論ずるに足らず。ラファエロの寫實は必ずしも定規を手にし解剖學書を傍らに置き乍らといふが如きものにはあらざりしならん。されど其の疎描たると、密描たるとに論なく、背景に於いて、遠近、布置に於いて、明暗、權衡に於いて、歩一歩前代の稚氣を脱し行くの觀あるは、大局に於ける寫實的精神の發展なり、理想は目的として之れあるを妨げず、手段としての寫實的精神の發展、すなはち知識の光明を增せる徵候は、ラファエロが畫に於いて歴々數ふべし。是れ疑ひもなく、彼れの畫をして、何所ともなく一種近世的、若しくは近世にも尙且活きたりといふが如き感を呼ばしむる所以ならずや。

但し此の如きは、所詮外形の論たり。彼れの繪畫には、知識あり人間あり。是れ近世の氣運を當時に權化せるものといふべし。

ラファエロが一代は凡そ三期に分かちて見るべし、第一期は尙ほ師ペリウジノー等の跡を追ひて、古畫風に囚へられし頃なり。第二期はフォレンチエに來たりて、レォナルド、ダ、井ンチ及ミケランゼロー等の影響を受けし時代なり。第三期はラファエロみづからの時代ともいふべし。今は此の三期に亘りて、彼れが聖母の圖を援き來たらんに、第一期は即ち、むしろ文藝

復興以前の思潮を見はしたり。ローマの法王殿なる『マリアの戴冠』の圖は、最もよき此の期の代表畫たるべし。周圍の如何は問はずもあれ。中央に坐し合掌して今や將に聖冠を頭に受けんとするマリアの顔の表情は、唯是れ信仰なり、無我なり、清淨なり、柔和なり、之れを見つむること少時なる時は、我も又、先づ頭腦より徐ろに溶けて消え入るが如き心地す。即ち宗敎畫として偉大の力を有する所以なり、されども一たび頭を回らして之れを思ふときは、我が心中に尙ほ何者かの不滿あるが如し。此の畫に、神聖は是れあり、耽溺は之れあり。人の心のさま尙中世の如くして、既成の基督敎義に絕對の威權ありし世は、是れを以ても足れりとせしならむ。否、此の書はすなはち此の如き世を代表したる者なるべし。是れわが古派と名づくる所以なり。然れども、時移りて、文藝復興の氣に感染したりし人は、必ずや之れを十分の滿足とはなし得ざりしならん。蓋し此のマリアは餘りに神聖なればなり、餘りに信仰一圖、神々しさ一邊にして、動もすれば模型的となり、抽象的となり、血あり肉ある此の世の人と遠ざかるの度餘りに大なればなり。一言以て言はゞ、生命は無し、否、生命は無きにあらざるも、狹隘なる既成敎義の下にのみ生ける生命なり、不自然に抑壓したる生命なり、若しくは人世の行路に惱み疲れたる、氣魄悄沈、寒枯痩貧の生命なり。近世の始めは正しく此くの如き宗敎的抑壓の下より醒起して、光明、活氣、自由、豐富、積極といふが如きものを得んとするの氣に充てる時なり。第一期のラファエロは、以て之れに當たるべくもあらず。

此に於いてか第二期の彼れは出でたり。今フォレンチェにある聖母の諸畫、例へば『太公家のマドンナ』『金翅雀とマドンナ』の如きは皆よく此の期を代表す。而して此の期の彼れが特色は、聖母の顔に、一味の知識の光りを漏し來たれること是なり。此の點に關しては歐洲の評家も已にいへる所あり。『太公家のマドンナ』を以て此の傾向の初頭に置くを例とす。されども、其の最もよく此の事實を示すものは『金翅雀とマドンナ』の圖に如くはなし。金翅雀を持てる聖兒等を膝に倚りかゝら

せながら、左手には書を緘きたる聖母の顏に、一點現實の氣の漲り來たると共に、其最も著しき表情は、怜悧、聰明、といふが如き標徴なり。されば之れを見るに、賢女の相あり、而もなほ、溫良、純潔、信仰といふが如き感は油然として人の胸に湧くを覺ゆ。ただ斯くの如くして、近世の知識的傾向は、中世の信仰感情と調和の形を示したれども、之れが爲めに、其の耽溺一邊なりし神聖といふが如き意義は些も損失を豪らざりしか。或る種の人が、此の期以後のラファエロ、マドンナを以て俗氣ありとなし、却つて初期の抽象的なる聖母像に心を寄せんとするものは、むしろ注意すべき一現象にあらざるか。更に言ひかふれば近世の藝術が漸く人間と相接近せんとするに從ひ、超人間的なる宗教の生命は多少の變改を來たさざるを得ず。此に於てか或者は知識に媚びて人間に墮せんよりも、理は如何ともいへ、去つて單一なる宗教的感情に身を捧げんと願ふ。此の如きは、知識に慣れず、近世に慣れざるものか、然らずんば知識に慊たらず、近世に慊たらざるものゝ行くべき道なり。復古の思想こゝに於いてか起こる。此は十八世紀末及び十九世紀末の事實ならずや。此の理は倚後にこそ。」

第七

「第三期のラファエロは、獨逸ドレスデンの畫堂にある、サン、シストーのマドンナを以て、遺憾なく表出するを得べし。此の畫は、彼れが死する前二年、千五百十八年の作と傳へられ、或る評家は、之れを以てラファエロが一代の聖母像中最も傑出せる者なりとす。少なくとも第三期のラファエロを見るに於いて、之れに勝る圖はあるべしとも覺えず。薄き暖色の光りを徐ろに集中したる中央に、聖母は雲を踏んで立てり。抱いたる聖兒の額は、母の頰にもたれ、其の裸體なる肉の丸み及び色合には、現實の味ひこぼるゝが如し。聖母が穿てる袴は、深藍の染め色に、神秘、永久の意を現はし、膝のあたりに至りて、

强き光線を反射せしむ。上衣は氣高き赤にして、之れまた小兒を抱ける左手の肱より腕にかけて、光線を出だせり。總じて之れをいふに、母子の顔、小兒の肌、聖母が膝、腕に受けたる光線、及び聖母像の半身程に高まりたる左右のシスタンとバーバラとが、肩、背の明るみ等を中心として有名なる明暗の分布、變化、まづ少なからず人の注目を惹く。青、赤、黄、白、茶、橄欖等の色の鮮やかにして、而かも沈痛の氣を失はざる、脚下及び周圍の群のおのづから尋常の物ならずと思はるゝ、是等は玆にくだくだしく言ふ迄もなかるべし。最も驚かるゝは、此の聖母が顔なり。中にも其の眼こそ世界の不思議といふべけれ。

サン、シストーのマドンナは遂に人間のものとなれり。其顔には、我等と同じく、活きたる血通へり。第二期に於いて見はれたる知識 聰明の相は、尙ほ是れあれども、其の以上更に何物をか加へたり。其は人間的意義、即ち是れなり。始めて此の畵に對するものが、一見先づ其の餘りに近世的なるに驚き、唯是れ一幅の無邪氣なる田舍乙女が圖にはあらずやと訝るたぐひは、此の理を說明して餘りあり。第二期の聖母にすら既に快からざりしものは、此の畵を見るに及んで、あゝ、ラファエロ遂に人間に墮したりと叫ぶなるべし。然れども、此の圖の中に、尙ほ一道の神聖なる表情なしとはいふべからず。全局の調子はたしかに人間化したり。されど、人間化して、尙ほそこに神的清淨あらば、是れ神と人との和合にはあらずや。隔絕不可思議を許さずして、むしろ之れを人間に引き下さんとせるは、やがて近世思潮の意義なり。神人一致、語は古けれども、意は常に新たにして、近世は實にあらゆるものを人間化せんとしたり、知識化せんとしたり、我が摸索の内に置かんとしたり。神も此れが對當たるをば免れず。されば、第三期に於けるマドンナが人間となれるは、實に時勢の影なり。近世を豫表するの大藝術たる所以こゝにあり。何ぞ異しむを須ゐんや。此の如くにして、ラファエロは始めて大なり。

母子の顔には、單に無邪氣、聰明、優美といふが如き表現あるのみならず。また實に神聖あり。神聖といふに解あらば、たゞ心を靜かにして、數分間其の眉目の邊を注視せよ。玆にも亦第一期のラファエロに於いて最も赤裸々に見はれたる、一種の幽致を認むるに至るべし。其の情は明かに說きがたきも、譬へば我が體漸く虛靈となつて、永久無限の邊に導かれ行くが如く、優しく、心細く、物哀れなる心地となるにあらずや。是れ凡て大なる宗教畫が有する一作用にして、畫家の宗教的感情が、おのづから光澤となつて、畫面に流れ出でたるなり。

聖母の眼は、更に一段の驚異なり。第二期までの圖にありては、兩眼常に下に向かひて俯したり『ワージンの戴冠』に於いて、『太公家のマドンナ』に於いて、『金翅雀とマドンナ』に於いて、はた巴里ルーブルのマドンナに於いて、みな然るを見る、思ふに、是れ人世の消極を意味し、悲哀を意味するものにはあらざるか。眼は感情の窓なり、之れを鮮やかに開きて、望み見るに便ならしむるときは胸中に燃ゆる感情の火、其の色に從つて一々外に輝き出でんことを恐る。別言すれば、生きたる感情之れより漏れて、聖母は遂に人間に墮せんことを憂ふ。畫家はすなはち易きに就いて眼を俯しにせしめ、感情を隱して其の光りを消し、以て僅かに其の神々しさを保たんとせるなり。一切の感情を活かして、直ちに神に合せんとするは、積極たり。之れを消して神に合せんとするは、消極たり。眼を伏せて感情の窓を閉づるものは、消極に行けるにあらずや。また伏し目は常に悲哀憂愁を意味す、孤獨なり、寂寞なり、小弱なり、逡巡なり。前に目的とすべき光明なく、希望なく、また之れに向かつて猛進すべき英氣なし。悲觀的たり。

此の如き意義を有する第一、二期のマドンナの眼は、第三期に入りて、深夜の星影よりもあざやかに見開かれたり。其の瞳は下を見ずして正面に向かへり。霧とかゝりし愁の雲は消ゆると共に、星の瞳は燦爛として麗しき光りを放ち來たりぬ。

天地始めて光明あり、希望あり、生氣あり。生きたる感情も此れより輝き出づるよ。其の感情を直ちに導いて、永劫に入らしむるも、此の眼ならずや。美術史家リュブケはおもへらく、ラファエロは、此の圖によりて自家の最も深遠なる思想と最も美しき人とを結合せんとせるかと。ラファエロの心は知るべからずといへども、事實の跡は、是れよりも更に〳〵深き意義を示すに似たり。彼れは、此の畫によりて實に神と人とを合一せんとしたり。而して是れが爲めには、舊來の信仰一邊なるものを損するの危險を恐れず、活きたる人間の感情と知識とを之れに導き入るゝを辭せざりき。知識的、而して人間的、是れこそ誠に近世を標榜する根本精神にはあらずや。」

第八

「あれ見給へ、東海の客、靑き道には早くも宗敎革命の大旗を飜へし來たるものあり。獨のマルチン、ルーテルに紛れもなし　宗敎として地歩を占めたる中世の感情が、近世の知識の爲めに征服せられ行く世相は是れなり。

次いで赤き道より快活の態度にて上り來たるものは、シェークスピーアなるか。濃紫に黄金の縁つけたるガウンの袖を反しながら、左右を顧みて諧謔一番するに似たり。彼れ今は詩國の帝座について久しければ、儀容おのづから王氣を帶ぶと覺ゆ。

彼れが文藝上の地位は、一大驚嘆なり。凡そ古往今來彼れが如く時代を破り、彙類を破りしもの他にありや。當時歐洲が中世の長き眠りより醒めて、文藝復興の光りにより、ここに新鮮の天地を見たりし喜びは、おのづから映じて彼れが一代の作にあり。彼れの諸作を通じて見たる天地は、エリザ王朝のそれの如く、豐富なり、燦爛たり。廓寥として底に無限の淋し

みを藏する中世の調子とは、おのづから類を異にす。加ふるに彼れが興味の中心の人間にありし、はた其の、事に逢へば直ちに之れを戯曲化し、客觀化する力の逞しかりし、凡て是れ近世的傾向の特色にして、ラファエロが第三期に於いて成さんとせし所のものを、シェークスピーアは一代の事業として大成せるの觀あり。其の他『マクベス』、『ハムレット』、就中『ハムレット』に於いては、彼れまた近世の 識作傾向を最も明らかに表出したり。されども、彼れはまた矛盾の一面を有す。『ハムレット』『マクベス』の類より『眞夏の夜の夢』『あらし』の如きに至るまで、諸作に一貫して存するものは、一種の超人間的興味なり。單に超人間的といふは尙ほ盡きず。ローマンチックといはゞ、或は一層便なることもあらむ。『眞夏の夜の夢』『あらし』等が、全篇此の調子に滿てるはいふに及ばず、『ハムレット』の亡靈、『マクベス』の妖婆、皆超人間的若しくは傳奇的空想的風味を、彼れが作に注加する所以なり。而して此の如き風味は、溯つては之れを中世に求むべく、下つては之れを十八世紀の末に起こりしローマンチシズムに見出だすを得ん。ラファエロは、始終宗教の藩籬に賴りしが故に、中世の感情を宗教、若しくは神、若しくは信仰として保留し、之に人間を和合せしめんとしたれど、シェークスピーアは宗教に執せずして中世を見たり。故に、其中世は傳說的、妖怪的、騎士的、巡禮的、超人間的といふが如き、ローマンチシズムとして彼の心に留まれり。近世の評論家、ローマンチックといふ語を直ちに中世的といふ義に解するものすらあるに至るは以て如何に此の二つのものゝ相接するかを證するに足らん。而してシェークスピーアが作中のローマンチックなる風味、若し源を此に汲むとすれば彼れは、斯くの如くして近世と中世とを一に會流せしめたりと謂つべし。人間的、知識的、戯曲的は近世の潮流にして、超人間的若しくはローマンチックは中世の潮流なり。更に簡單にいはゞ、ラファエロは人間と神、シェークスピーアは人間と超人間、といふ形に於いて近世と中世との精神を一身に湊めたり。

それより二百年のあひだ、ラファエロが爲せし所と同精神なるものには、ミルトンの『失樂園』クロップストックの『メシアス』ハンデル、ハイヅン等が聖劇歌、乃至近くは英の畫家ワッツ、露の作者トルストイ等ありといへども、是等は未だ一時代を畫するに至らず、之れに反してシェークスピーアの爲せし所は、十八世紀の末に及び、一大潮流となつて再び全歐文藝の岸を洗ひたり、史家之れを名づけてローマンチシズムといふ。さればシェークスピーアが作中のローマンチシズムは、一方之れを中世に尋ね上りて、此處に中世と近世との會合を認め得べきと共に、他方は之れを十八世紀末に尋ね下りて、此所に學問興復の近世と、二百年の後之れに對して起これる反動的氣運との會合を見るを得べし。畢竟ずるに、彼れは中世と近世との調和なるか、將た近世と其反動との豫表なるか。そも〳〵また兩つながら之れを其の身に總ぶるものか。彼れが地位の重大且つ無類なる所以はこゝにあり。」

第九

論ます〳〵進まんとして、シェークスピーアは早くも我が眼界より去れり。懷かしかりし人の面影かなと思ふうち、ダンテは再び指を擧ぐ。

「群を成してシェークスピーアの後に續くものは、十七世紀の文藝星等なり。十六世紀は、ラファエロ等あるが爲めに前半を伊太利の文明に捧げ、シェークスピーアあるが爲めに、前半を英國の文明に獻ず。十七八世紀は佛蘭西及英國の天下たり。彼の一列は佛のコーチイユ以下ヴォルテヤ等を前隊として、英のドライデン、ポープ等を從詰とせる人衆と覺ゆ。何れも身だしなみ上品に、整然また瀟洒としては居ながら氣力光彩に乏しと見ゆるは、十九世紀の反動の羽風に、あさましくも褪み

落されし爲めなるか。更に異しきは、見よ、彼等其の赤き道より轉じて、やうやく靑き雲の道に移らんとするならずや、赤き道次第に落漠たり。文藝傾けるか、感情は遂に知識の急なる追躡に堪へ得ずして、其の僭越なる地歩を他に讓らんとするに似たり。學問興復の自然の結果は、此の外なること能はず。

此の期に屬する文藝の理想は、前列の一人たるブワローが詩論に明けし。模範は希臘、羅典にありとおぼしく、其の項目は、曰はく理を輕んずべからず、曰はく思想形式共に明瞭なるべし、曰はく外形の統一均整は必要なり、曰はく尋常なるべくして奇怪なるべからず、曰はく諷刺は眞理なり、曰はく詩の各體には各越ゆべからざる制限ありと。凡そ此くの如きものは、十七八世紀にわたれる英佛の大文藝が有せる特色なり。之れを概括するときは、形式的、理知的、尋常的、嘲笑的となる。更らに言はゞ、一切是れ感情を薄めて知識の間に工風を費やさんとする文藝の傾向にはあらずや。形式の整理、理知を容れたる詩、畵、常規を逸せざる思想、嘲笑し諷刺して、熱怒せず、同感せざる氣風、數へ來たれば、すべて知識の按排によりて始めて成就し得べき事項たり。知識的といふ一語は、實に此の種の文藝の生命なり。

斯くの如き十八世紀に反抗して起こりしものを、十九世紀初頭の歐洲文藝とす。或は呼んで之れをローマンチシズムといふ。我れは意義の直截明確ならむことを欲して、之れを感情的、若しくは情緒的といはん。蓋し天地の間知識にあらざる存在は情緒にして、情緒にあらざる存在は知識なり。こゝに我家の哲學あり。故に我は十八世紀の知識的文藝に反抗するものは、當然情緒的ならざるべからずといふ。更に精しく言はゞ、形式的なるものに反抗するの心は、赤裸々の中身を抉出せんとして、ルーソーの「自然に還れ」となり、ワーヅワースの「感情の自然の流れ」となり、ゲーテ、シェリー等が理想となる。理知的なるもの、嘲笑的なるものに快からざるの心は、また、情熱主義となり、多感主義となりて、ゲーテの前半、ハイ

ネ、バイロン、キーツ等を生ずべし。尋常的といふことを嫌ふものは、則ち非常非凡の想像を超自然に求め、神秘に求め、往古に求む。スコット、コールリッヂ、ワグナー等の傳奇、驚異、神秘、超自然はこれならん。

さはあれど、是等のもの多くは一に會して感情の本に歸るといへども、或るものは外れて再び舊の知識に行かんとするを免れず。已に自然といふ語生まる、之を推し廣むる時は、所謂自然主義となるも已みがたき狀態ならずや。已に理想といひ、宗敎といふ語用ひらる、其結論が哲理となり、敎義となるもまた是非なき趨向にあらずや。而して、自然主義は、夫の寫實といふ近世の一潮流を併呑して、ます〳〵惡路に入り、遂に科學主義にまで墮せんとせり。佛のゾラ等は之れが代表者なり。哲理主義は、道德問題、哲學問題、人生問題となりて、一派の作風を成せり。諾威のイプセン等是れに據る。また敎義は遂にトルストイを宗敎化したり。

我れ語れば多辯にして、談は十八世紀より十九世紀の後半にまで飛躍したり。言ふべき事盡きずして、夜はいたづらに更けんとす。中間は省除して、直ちに現代の二三子を場に登らすべし。」

第十

「十九世紀末の文藝は、實に目もあやなる雜多の潮流の會湊なりき。前にいへるラスキン、ゾラ等の自然主義、ニイチェ、イプセン等の道德問題、ワッツ。トルストイ等の敎義的宗敎の外、多感派の脈を引ける新ローマンチシズム、神秘派と見るべきベクリン、はた自然主義の別流とも見るべき、英のロセチ等がラファエル前派、佛のマネー、モネー等が印象派、近くは佛に起こりて獨に及べるカーン、マラールメ、ハートレーベン等が標象派、殆んど數ふるに遑あらず。

されども、中に就いて最も著かりしものは、自然主義と道德問題との二流なるべし。自然主義は近世を一貫したる夫の寫實的潮流と合して、殆んど全歐洲の文藝を風靡したり。此の點より見る時は、十九世紀の後半は、自然主義、寫實主義の時代なりきといふを妨げず。されども自然主義といふ中には、種々の波瀾を藏したり。自然を自然のまゝに、若しくは現實を現實のまゝにといふが如き口氣は、ラスキンに於いて、ゾラに於て、聞くを得れども、此は餘りに輪廓的たり、漠然たり。事實に於いても、自然を自然のまゝに寫せるものが、必ずしも十分なるにはあらず。此に於てか、或者は知的工風によつて別の力を藉り來たり、之によりて興味の源を涸らさざらんとす。心理學なり、遺傳論なり、社會問題なり。寫實主義自然主義が落ち込まんとする穽は、常に此の邊にあり。之れを文藝上の科學主義といふ。此に至れば、文藝は科學、否、自然主義に囚はれたるなり。更に適切にいはゞ、文藝は再び知識に囚はれたるなり。

此くの如き意義ある自然主義に對しては、勢ひ感情の反抗、知識の憎惡を表すべき氣運所々に起こらざるを得ず。歐洲の評壇に、近時、科學的文藝評の多く喜ばれざる、ラフアエル前派、ワッツ等の畵風の復興を見んとする、若くは白耳義のマーテルリンク等が神秘主義を取ッて立つと稱せらるゝ、皆此の意氣がさする業なるべし、而して前にいひたる佛、獨の標象主義といふものこそ、千八百九十年前後より廣まりて、自然主義に抗せんとする凡ての傾向を總括したるが如き名にはあれ。十九世紀の始めには十八世紀末の古典主義に反動したる彼れが如き雜多の思潮を概稱して、ローマンチックと呼びぬ。今は二十世紀の始め十九世紀末の自然主義に取つて代らんとする諸思潮を概稱して、シンボリックといはんとす。面白き對照なるかな。

標象的といふ語は、上は希臘のプラトーンが美論より、下ッてはニイチェが「ツァラツーストラ」にまで冠せらるゝ名なり。

更に下りては、則ち今の標象派詩文人之れを標榜す。獨乙の一評家は、之れを分解しておもへらく、標象主義の中には、少なくとも三方面あり、頽廢期的兼女性的（デカデント、フェミニスチッシェ）快樂的兼超人間的（ディオニシッシュ、ユーバーメンシュリッヘ）及び神秘的兼初心的（ミスチッシュ、プリミチーフェ）是れなりと。されども此の流派が果して將來長く此等の氣運を統率するの名たるに堪ふるや否や。此は未解の問題なり。同じ評家は謂へらく、獨乙人等は佛人より標象主義の名を借りて已に十數年、之れに代はるべき新しき題目をば得たしと思へど、未だ之れを發見せざるを如何にせんと。

標象主義は、小説劇等の上にも見はれたり。獨乙のハウプトマンが『沈鐘』は其の好例たるべし。佛のサードゥが英の名優アーヸングの爲めに我れダンテを材とせる劇『ダンテ』も此の部たり。溯りてはイブセン、ニイチェ等にすら、早く已に其の徴を見るといふならずや。

更に試みに學者といふものが理によりて解する標象主義の意義を聞け。現代の歐洲の美學者中、最も覇を稱するは、蘇格蘭セント、アンドリュ大學のボザンケ、獨乙ミュンヘン大學のリップス、獨乙ライプチヒ大學のフォルケルト等ならん。ボザンケには美學史の著あり。近代歐洲に出でたる美學史中の白眉と稱せらる。書中、希臘の美論を評する爲めに掲げたる三標準の一として、著者は標象的と模寫的との對照を作れり。言ふ心は、模寫とは只だ見ゆるがまゝ聞こゆるがまゝの寫本を極意とするといふなり。標象とは、見ゆるもの以上、聞こゆるもの以上にある一物、すなはち見えざるもの、聞えざるものを拉し來つて、見ゆるもの聞こゆるものに寓するを目的とすといふなり。而して希臘にありては、プラトーンすら尙ほ美術は模寫なりといふを憚らず。されども、其の終に眼に見るべがらず、耳に聞くべからず、唯心に思念して憧憬し得るものをも模寫すといふに至りては、プラトーンの模寫論はおのづから破綻を生せざるを得ず。此の破綻こそ、後に及びて一段高尙な

ろ標象觀の出で來たる端緒なれとは、此の著者の言ふ所たり。此の意を推し廣むるときは、文藝は、時勢につれて標象的となり行くを進步の路程とするなり。ただボザンケは、別にハルトマン等の理想具象觀を援取する所あるが故に、近世の文藝を直ちに凡て標象的とは言ひ得ざらむ。されども、下の一事は明らかなり。曰はく、內在の一物と外在の事象と、二重なるものが、如何なる方式を以てか相結合する所に、標象的といふことを生ずと。同じく二重なるもの丶干係なりといふに論を起こせるは、フォルケルトが今春公にせし「美學系統」第一卷の標象論の條なり。此の人はおもへらく、標象は日常の事にもあり、十字架を以て耶蘇敎を標するの類は是れなり。されども是れを導いて審美の世界に入る丶時は、別なる意味を生ぜん。第一は有相的標象（フォールシュテルングス、ジムボリーク）なり。人事の進行の中に、明らかに思念し得べき別の感想を寄するをいふ。ベクリンが「人生は短き夢」の圖に於いて、花に戯る丶少女等、戎衣の袖も赤き騎士、やがては老い行き、死に行く、白頭の人、是等を配して、我等がはかなき夢と空想とを以て飾れる人生、其の終局の慘澹さなどいふ思想を寓したるが如きは、即ち是れなり。次は全化的標象（フェヤアルゲマイチルンデ、ジムボリーク）といふべし。事象の一部を取りて其の類の全階級を之れに表出せしめんとするなり。個を其のまゝ全の地に高むるなり。ゲーテのファウストが或る意味に於いて全人間を代表するのたぐひならずや。終りは情趣的標象（スチンムングス、ジムボリーク）といふ。第一の場合に於いて內在の一物が、明白なる感想なるに反し、茲なるは全く無相、たゞ一の名狀しがたき情趣の縱橫に浮動するを覺ゆるものなり。此の種の標象美術は、多く其の材を非情物に求む、單なる色、音、模樣、建築といふが如きものに最も多し。人事を避けたるなりと。兎にも角にも、此等の解釋はみな、標象的文藝の要素たるべきこと、爭ふべからず。然れども、我れは斯くの如き標象主義及び、之れに漏れて而して尙ほ十九世紀後半の自然的潮流に反動し來たるべき、幾多の傾向を、總稱する別

の名を有す。之れを横より呼ぶときは情趣的なり。之れを縱より呼ぶときは宗教的なり。」

第十一

「情趣的といふ語は、我れすでに之れを屢々繰り返せり。所謂自然主義が知識の工風、知識の補助に墮せんとするとき、悍然として之れに反抗するものは、其の主義所執の如何に拘はらず、必ず何れの邊にか感情を生命とせざるべからず。例へば夫の理想といふが如きものも、知識の跋扈を惡みて之れに對立せんとする場合にあつては、其形必ず漠たる感情ならざるを得ず。明白なる理想は、知識に入るものなればなり。其の他快樂的といひ、女性的といひ、神秘的といひ初心的といふが如きは、すべて知識の明確以外、感情の自由なる天地に出でんとする傾向の變形たるを見る。更に之れに多感的傾向も加はり來たることあるべく、超自然的傾向も馳せ參ずることあるべく、往古的傾向も來たらば拒むことなかるべし。此等の一切を總括するものは、情趣主義なり。

更に繰り返して之れを思ふ、文藝は囚はれたり。十九世紀の後半に於いて遂に精力非凡なる知識の爲めに囚はれたり、追ひ越されたり。我れは、ミューズの壇前に靈火を焚いて、囚はれたる文藝の爲めに義軍を擧ぐるものゝ意を諒とす。

今の文藝は一旦、全く知識の羈約より切り放たるべし。而して其の放浪する所は情の大海なるべし。情の海より搖れ來たる千波萬波は、斷えず我が胸の岸邊にそゝろの音を立つれども、彼方の岸は究むべからず。今の文藝は先づ此の海に入りて自由を得よ、其の垢を洗へよ。」

第十二

「さは言へども、我れは自然主義を呪咀し去らんとするものにあらず。十九世紀の大なる文藝は、大半此の主義の影響を蒙りて生じたり。惡む所はただ其の極端のみ、知識に隷してより後の自然主義のみ。されば此の主義が更に一たび其の自然に還りて、飾らず、矯めざる自然の感情の源を穿つに至らば、是れもまた情海の旅程に帆を弁ぶる一同行たらん。且つや、自然主義は、十九世紀の後半に於いて、彼れが如くならざるを得ざりし理由あり。ローマンチシズムの浪は如何に寄せ返したりとも、一方に於ける知識の進步普及は、駸々として秒時も止まらず。現に眼に見、耳に聞く所の驚嘆は、すべて知識の事業なり。斯くして、知識は遂に牢乎移すべからざる基礎を近代の人心に据ゑたり。何人が如何に活動を起こさんとするにあたりても、傍に知識の一席あるをば無視することを能はず。自然は當に何事にも其の言を挿むを忘れざりし。之れを觀るときは、自然主義はまた時勢なり。されど茲に自然主義と手を分かちて行きし一派あり。十九世紀の兒と生まれし限りは、事に觸れ物に接して、知識は泉と湧き絲と縺れて止め途なし。彼等は、此の含蓄豐かなる知識をとりて、生きたるまゝ直ちに文藝の俎上に抛たんとす。科學者の爲す如く、死なして之れを截り出ださんは容易の業なれど、願はくは之れを活きたる一塊の物として解きほぐしたし。如何にせば、我等が胸底の知の泉は其の甘味を失はずして世に流布せんか。彼等は斯くの如く案じわづらひたり。古のローマンチシストは「感情の自然の流れ」と叫びたれど、今は「知識の自然の流れ」と叫ぶものあらんとす。イプセン等が行けるは此の道なり。

イプセン來たりぬ。老體を杖に支へながら、巧みに靑赤兩道の中間をあやどり行くを見られよ。彼れは所謂近世問題劇(プ

ロプレム、プレー)の祖なり。問題劇といふ語の意義は廣けれども、近時歐洲に於いて、此の名を冠するは、普通に道德問題と相渉れるものなり。或者は、之をイブセンの社會問題劇といふ。されども、イブセンが取り扱ひたる問題は、ゾラが、飲酒問題、金力問題、敎權問題といふが如きものを取り扱ひたるの故を以て、社會問題に携はれりと稱せらるゝとは類を殊にす。イブセンの問題は更に深し、道德問題なり、而かも第二義道德にはあらずして、第一義道德の問題なり、道德の根本に關する問題なり、哲學的、人生觀的なり。

八年の間、我れ我れを知らねば、人をも知らず。唯不自然なる人形の如く日を送り來しノラが、一日俄然として眼を開けば、我れは尊き自然の我れを僞はりたり。我が眞を追はん爲には、慈愛ある夫も、いとしき我が子も、顧みるには足らず、籠の戸潜りし小鳥の如く、まつしぐらに高行く感情と翔りたる、また哀れならずや。罪もなき夫を鰥にし、罪もなき我が子を孤にする、それも道德の心に苦しからずとは言はず。されど我れは之れよりも尊きものを見出だせり、之れよりも高き道德を認めたり。我が自然の自由を追うて走る心中の情は、夫のため、子のための道德よりも更に尊からずや。一篇の『ノラ』は斯く問ひぬ。やがて是れイブセンが提起せる道德問題なり。我れは思ふ、是れ好個の哲學なり、含蓄ある知識なり、イブセンは、巧みに之れを感情の海にすくひ取りて、一流の文藝をなせり。されども、其の所含あまりに明瞭なるが爲め、新奇の色を失はざる限りは、人の視聽をも動かせど、終には墮して、知識に消化せられ了せん事を恐る。知識に囚はれたりとはいはず、一歩すれば則ち囚はれんとするものなりといふ。されば知識に飽きたる十九世紀末は、此の異彩ある文藝を早くも反動の氣勢によりて拂拭し去らんとす。我れはむしろ此の種のものに一片の愛着心を有するなり。

次に來たらんとするものは、獨のハウプトマン、ズーダーマン、英のピネロ等ならむ。前なる二人はイブセンの跡に續きな

がら、斷えず身を赤き道に傾くるを見ずや。後の一人ピネロは、むしろ一路にイプセンが跡のみを追ふと見えたり。

ピネロは地位に於いてアーサー、ジョーンスと共に英國劇作者界の泰斗たれども、イプセン風なる問題劇の末路甚だ振はず。動々もすれば過去に屬する者と見られんとす。其の回頭期を示したる『後のタンカレー夫人』以來、また一世を動かすべき作なし。此の作と並ぶべきものは、ズーダーマンが『其代榮へよ』の一篇ならんか。二つながら一婦人が夫に對する我れと過去の我れ若しくは他面の我れとの衝突を主題とし、其の婦人の滅亡によりて僅に其の衝突も滅亡すと描く。之れより來たる解決の感は、人によりて種々なるを得べし。我れは以上の作風を名づけて哲理的といはん。」

第十三

「哲理的なる文藝は、近代の知識の非常なる發射力に應じて生せしものなり。而して斯くの如き思想上の形勢は、實に文藝復興以降數百年に亘れる一大經過の結果なるが故に、萬人如何ともすること能はず。凡そ一旦十九世紀に身を置いたる者は、文藝に於いても宗教に於いても、決して知識の壓迫力を度外視するを得ざるなり。さるが故に、工風はおのづから如何にして、此の知識を文藝の海に溺らしむるを得んかといふ一點に集まる。知識は常に感情を手取りにして、解體し殺戮せんとす、是れ事實なり。文藝はすなはち感情を斯くの如き危險より拯はんが爲め、知識の足がゝりとなり爪がゝりとなるべき一切のものを包被し、若しくは除去せんとすることとあり。之れを、我れは名づけて神秘的といふ。哲理的文藝は、大膽にありのままに理知を結撰して、そこに文藝を見んとすれども、神秘的文藝は、退いて十九世紀が集積したる知識より回避せんと欲す。明らかなる月の夜に爛熳の花を見んは、妙ならぬにあらざれど、俗事の眼を遮り來たるを如何にせん。暗夜靜かに滿天の星

と語るの神秘さいかばかりぞや。知識は限りあり。感情は限りなし。知識の盡く所はやがて神秘なり。

獨乙近代の畫家をいふときは、人まづベクリンとメンチェルを擧ぐ、メンチェルが畫ける所は、宮廷的貴族的のもの多くして、最も有名なるは今伯林の王城にある先帝戴冠式の圖なり。寫實派の巨擘と稱す。之れに對してベクリンは過去數十年を代表すべき理想派畫家の棟梁といはるれども、特色は、其の神秘なる暗色乃至對照色を用ひて、幽玄の情を之れに寄するにあり。有名なる『墓島』の圖は、最もよく此の作者を代表す。蠢々として大魔王の如く并び立てる杉檜なんどの、只輪廓のみ青く黒く染め出だされて、凄涼の氣まづ人を襲ふ所に、樹間極めて小さく、而も極めて鮮やかに一基の墓石立てり。其の前には白衣の女、髪ふり亂したるが、之れも墓石に釣り合ふ程に小さく、鮮やかに、膝を折りて禮拜の掌を合す。繋ぎ捨てたる舟は彼方にあり。全幅の色調、寂然、また蕭然、神秘の氣咄々として人に迫るを覺ゆ。斯くの如き畫に就いて見るも、神秘的文藝は理知を要せず、また之れを有せず。尋常の事象よりして、直ちに或る深奥不可思議なる感情に闖入す。中間に理知の容喙を許さず、是れ其の知識的文藝に反して起こるべき資を有する所以なり。

更にまた神秘的と連續して見らるゝは、超自然的といふことなれども、茲には之れを神秘的といふ項下に合せんとす。蓋し超自然に材を取るの發意は、是れによりて知識の干渉を一排し、以て自由廣濶なる感情の天地に翔うたんとするにあればなり。超自然的、超人間的なるが故に、ここに驚異來たり、不可思議來たり、神秘來たるは當然の數なるべし。

超自然的文藝の好例はオペラに多し。音樂界にありてローマンチシズムの近祖と稱せらるゝ獨のヴェーバーが『フライシユッツ』中、主人公が惡魔に敎へられて魔術の彈丸を鑄る一場は、下には巖穴の間に髑髏の影亂離として、上には妖雲起つて頻に東西し、全面の光景おのづから遠く人間界を出で、鬼氣人を襲ふと共に、沈痛、雄大、神秘なる音樂は、我れを導いて、

廓落涯りなき世界に入らしむ。此の瞬間、我れはまた知識を以て其の境の假實を檢するに堪へざるなり。其の他ワグナーのジーグフリートが、鳥の高音に導かれて、歌ひつれながら、ブリュンヒルデの長夜の眠りを醒さんと火もて圍める巖上に登り行くあたり、ロルチンダのウンデヰ子が、男の邸宅見る〳〵海底と變りたる龍宮に、始めて男と戀を全うする一齣、みな知識以外に出で、近代文藝の大を致せるためしなり。我れは之れを總稱して神秘的といふ。知識を絶し、若しくは知識を消したる形といふ義なり。」

第十四

「今若し上の如き諸多の思潮を、縱に次第して見る時は、またおのづから別樣の意義あるを感ず。即ち自然主義哲理主義よりして神秘主義乃至標象主義に至れる傾向を推し延ばすときは、次に來たるべき頂點は、おのづから明らかなるにあらずや。曰はく、宗教的といふこと是れなり。

宗教的といふときは、人は直ちに露西亞のトルストイを連想するならん。されども玆にいふところは之れと異なり。思ふに、トルストイは既成宗教に囚はれたるにあらざるか。見よ、彼方の赤き道より、殿として登場するものは、此の聖人なり。彼れが敎義を具象的に見得る好作の一例は、『復活』ならんか。主人公子クリユドフと、女主人公カチューシャとが、西比利亞の荒原に於いて、遂に博愛献身の大精神を全うしたる、はた其の取材取景の上に見はれたる所々の基督敎的感想は、げに誠實と聖えたり。一味の誠實、是れだにあらば、如何なる感情か描いて人を動かさゞるべき。トルストイの文藝は實に宗教的なり。されども、此の場合に於ける宗教は基督敎なり。トルストイは所詮基督敎的なり。彼れは既成宗教に囚はれたりとは、

此の義に外ならず。それ基督教の教義は、大體に於いて已に餘りに明白なり。愛といふ一語、枝葉の解釋は幾ばくあらんも、其の根本的意義は殆んど自明なり。直覺なり。又其の範圍は餘りに廣大にして、抽象に近づき、刺戟力を缺く。此等の理由よりして、我れは此のもの文藝全般の生命となるべき題目にはあらずと斷ぜんとす。感情の海は無邊際なり。若し一切の文藝は愛（廣義の）の說法ならざるべからずといはゞ、百弊は立どころに生ぜん。前に擧げたるイブセンの『ノラ』は、斯くの如き基督教義をば、宣傳せざれども、其の大文藝たる既得の地位は何人も奪ふこと能はざるべし。トルストイが『藝術論』中の美論に見るときは、彼れが其の結論を基督教に嫁せしめたるの嫌は避くべからず。彼れおもへらく、美の客觀的說明は次第に蹉躓し去りて、主觀の感情のみとなれり。文藝は快感情にして、また他に對して感染力を有するものなり。文藝は文藝の爲めにあらずして、人間の爲めに存在す。故に又道德とも無交涉なること能はず。文藝が感染的に人と人とを結合するは善事ならずや。此等の點よりいふも、最も文藝に適したる感情は基督教の精神なり。但し玆に基督教といふは、其の踏襲的意味をいふにはあらず、眞精神を指すなりと。眞精神は可なり。されども、尙ほ之れを基督教と限るが故に、之れに合せざるものは不善となり、不美となりて斥けらる。殊に近代の文藝に至りては、此の如き、藩籬の中に入り得ざるもの、數ふに遑なからん。而も我れは此等の凡てを一掃して火中に投ずるの勇氣を有せず。トルストイは基督教に囚はれたるにあらざるか。

文藝の上にて、宗教的といふときは、其の意一層深し。我等が凡ての文藝に對するときは一種微妙の快味を感ず。前後左右を忘却して醉ひ入りたるが如き醇味を嘗む。蓋し快樂の擴充せられたる狀態なり。此の點よりいふときは、文藝の悅樂には高下の品等なし、凡て絕對、唯一、平等なり。されども斯くの如き感情の下に潛める知識は、到底永く無言にして已むべくも

あらず。或る場合には、日常道德の聲となつて、善惡の批議を試み、或る場合には科學の聲となつて、眞僞の判斷を下すならん。哲理的文藝は則ち之れを導いて、理趣そのまゝを情の衣に包みたり、味ある文藝の一方式たり。神秘的、標象的文藝はまた、此の知識の明りを閉ぢ去つて、感情の暗所空所に美の神を安置せんとせり。之れも風情ある文藝の一方式たるを失はず。去りながら、此等のもの單に此に止まらば、美の最上座は尚ほ一扉の奥にあるべし。我等が眞に大なる文藝に於いて味ふ最後の者は、言ひ難き一種の妙機なり。我れ之れを何とか說かん。譬へば讀下に、徹底に、鏗然戛然として音を成すが如き機微あるなり。魂魄愕くの境あるなり。事は一小部なれども、其事直ちに全人間、否我が全經驗に響きわたりて、人生、運命などいふものに今更の如く頭を回らし來たるの情禁じがたきの謂なり、哲理的より進んで、其の上に悟入あるなり、神秘的より進んで、其の奥に直觀あるなり。之れを宗教的といふ。要するに此くの如き主義にての宗教的とは、人生最後の命運に回顧するの情を刺戟するなり。文藝の奥に、廓落として、廣大無邊の天地は開け來たるなり。文藝は此の域に達して始めて眞に大なりと謂ふべし。」

第十五

「東海の客。我が宗教的文藝といふの意義を領せられしか、いかに。文藝一たび此の妙相を着くる時は、たとひ其は刹那的たらんとも、聊かも厭ふところにあらず、文藝は滿足すべし。之れを讀むもの、見るもの、聞くもの、みな必ず是れによりて忘れがたき妙旨を味ひ得べし。

而して文藝が漸く此くの如き域に向かはんとすると共に、全般の思想界また、傾き行く所は宗教にあるか。世人或は未だ

意識せずして、さま〴〵のものを要求しつゝあることもあらん、而も其の落ちつく所は宗教を求むるの聲なりしことを發見するの日、必ず來たるべし。たゞ我がいふ宗教は、此の所にも既成の宗教を指すにあらず、一層廣き意味に於いてするなり。各個人各個の教義出づるも妨げず。またわが求むる宗教は、理知の調和を要するものに非ず。宗教は所詮感情なり、理知の絕したる所に生ずる一種の感情ならざるべからず。從つて之れに到達する方式は、悟入的、頓悟的なるの外なからんか。而かして此くの如き感情は、傳染的なるか、または個々自發ならざるべからざるか。此は我が茲に答ふる能はざる所なり。

宗教の意義、上の如くなる時は、之れに入らんこと甚だ容易、また隨意とはいふべからず。一旦之れに入る時は、其の持續及び復現も必ずしも難事にあらざることゝ、學者等のいふが如きものあらん。されども、先づ入ること、易からず。此に於いてか文藝の門を開いて、我等は、そこに少時ながら、妙法を示さんと欲す。

あゝ我れ論に興湧きて、いたくも夜を更かしたり。今夜はさらば。」

名殘惜しく、袖を引き止めんとするに、妾は早くも失せて、彼方水天の極みに、青赤の雲道虹の如く消ゆると見れば、今まで開いたりし天と水とは再び相迫つて、僅にもとの一髮線の明るみを殘すのみ。天地闇々、山腹なるラヷの火もまた火勢衰へたりと覺し。

後の半夜は、狹き船室の寢床に、眠りもやらで過ごせしが、船は未明に錨を拔いたり。而して歸來早くも百餘日、ヴェシュヸアスの火は今も燃ゆるなるべし。

附記

わがナポリの沖の一夜の瞑想は、ダンテをして我れに情趣的、宗教的の二語を語らしめたり。文藝の舟を知識の杭より解き放ち、情趣の海に浮んで宗教の岸に到らしめよ。取るべき針路は、哲理的、可なり、神秘的、可なり、標象的、可なり、はた自然的、可なり、寫實的、可なり。要は目ざす所に一境非凡のもの、人をして、胸躍らしむるものあるに止まる。是れ幻中のダンテが說法なり。

我れおもへらく、情趣的よし、宗教的よし。されども尙此の外に、日本の現代といふ特殊の事情に應ずべき文藝觀なかるべからず。其は、正しく日本的若しくは東洋的文藝の發揮といふことならんか。時は國興こり、國民的自覺生ずるの秋なり。東西洋の感情には根柢に於いて到底容易に混ずべからざるの相違あり。此の感情の發揮たる文藝は、さればまた、東西別彩として存するも當然の事ならずや。文藝若し終には世界に統一せらるべしといはゞ、それにても可ならん。只其の前に當つて、先づ十分に自家を發展せしめんと要するなり。我れ嘗て匈牙利に遊び、劣りたる西亞の文明が、千年の間に如何に全く勝りたる東歐の文明に征服せられ滅亡せられたるかを見て、涙のにじむを禁じ得ざりし。日本は先づ日本乃至東洋の文明を確立するの必要を感ぜんか。

英にキップリング等の英帝國主義を歌へるあり。獨逸の文藝は世界にありて、最も多く國民的といふことに意を注げるものなるべし。十八世紀後半以後の、いはゆるローマンチックの文藝が、此の一語によりていかに滋養を加へ、奮發を加へたるかは、史を讀めるものゝ知る所なり。近くは標象的文藝の蔭に、早くも自國文藝（ハイマート、クンスト）を喚ぶものあるも、此の國なり。日本文藝の特殊の刺戟は、それ東洋趣味の發揮といふことにあるか。

情趣的、宗教的、東洋的、此の關係論はなほあるべきなり「放たれたる文藝」を說いて更に我が想を尋ねん。（明治三十九年一月）

新春の第一頁

予は新春第一の日曜文壇で、老文傑櫻痴居士福地源一郎氏を弔ふに至つたことを悲しむ。さはれ居士が一代の閲歴は、予に取つては必ずしも文壇のそれに情懐ありといふにも非ず、將た政界のそれに思慕の心ありといふにも非ず。故人を思ふとき、髣髴として心の眼に浮ぶものは、色彩あり變化ある此の人の一代である、浮沈榮枯の跡とでも言はうか。一篇の物語を讀んで、而して其の主人公を思ふの情と相似てゐる。斯くの如きの數奇、斯の如きの起伏は、此の人の感情に當時一々に如何の反應を呈したであらうか。內面から故人が情の扉を覗いたら、そこに如何の人生が觀ぜられたであらうか。思ふは此の點である。

下に採錄した文章の著者吉澤君は、曩に「每日」紙上に一文を揭げ、予の文藝と宗教の關係論を低しとして以爲へらく、宗教の煌燭を以て照らすときは、美も亦始めて明かなりと。言ふところは、宗教の三昧地に達したものは、其の力で必ずまた美をも觀照し得て誤らぬといふのである。併し是れは必ずしも然りとは斷言が出來ぬ。宗教と文藝と、或る一境に於いて

光を共にすることをば、予は信ぜざるを得ないが、それと共に、兩者が全く相違した境地を有することをも、予は決して拒むものでは無い。たゞ宗教の機に參した者は、必ず常に文藝の機にも參し得べしといふ一斷に對しては事實理論ともに、尚ほ多くの研究を要するのである。其の他面も亦同じこと、文藝の機に參し得るものは直ちに宗教の機にも參し得べしとは、何人も云ひ得まい。

昨年末本紙に載つた孤島君の文に、批評の意義は文藝を社會若しくは道德と對立せしめて見る所に生ずといふ論があつた。卽ち文藝の絕對價よりも寧ろ其の相對價を定むる所に批評は成立するといふ論であらうか。若しさうとすれば、其れには聊かも異存はない。是れが予の文藝絕對觀と隔絕するといふ言は受け取れない。予の立脚地は斯やうな一抗議の爲めに崩れる程狹隘微弱なものとも思はぬ。人間が此の世でする仕事である以上は、文藝とても、何で全く相對價の外に立つて行くことが出來やう。從つて文藝の批評が此の第二價（予は敢て之れを第二價と呼ぶ）に涉るも當然また必要の事であらう。批評といふことに評價といふ意味のある限り、それが相對的のものならざるべからざるは、言ふまでも無いのである。唯其の相對價が、美から離れ若しくは美と背いた相對價であつたら、其所に文藝批評の意義は亡ぶであらう。言ひ換へれば、文藝の社會的、道德的、文明史的批評は、其の評價の奥に、必らず美の裁可が無くてはならぬ。更に別言すれば其の批評の根柢には、道德と審美との關係といふ難問題に何樣かの解決若しくは覺悟が据つてゐなくてはならぬ。是れ無くして文藝の社會的價値を云々するが如きは、笑ふべき事であらう。また論じて此の根本問題に觸着せざる批評は、甚だ深いものとも思はれぬ。此の解決なくして文藝の相對價が附けられるといふものあらば、奇といはねばならぬ。（明治三十九年一月）

王氣

昔は支那の歴史に、天下たゞ覇者あつて王者無しと嘆じた者がある。今の世に於いても、所謂覇氣ある者は少なくもないが、王氣の鬱勃たる者に至つては、甚だ稀である。人間はよろしく王氣を帶びんと志すべし。

御代は三十九年の春、我が日本こそは、二千年の長夜の幕を揚げて、東洋の大波逆捲く岸頭に、亞細亞の五億民衆の誇りとなつて立ち現はれるのでは無いか。此の興國の曉は、紫色金色、あらゆる造化の光彩を假りに裝飾するも、尚足らざる程の眩ゆさでなくてはならぬ。王氣が征服の楯に倚りたる瞬間の氣象は、また直ちに今の國人の胸中でなくてはならぬ。

聖人となるものはおのづから別途であるが、我れは寧ろ、其の中に、一味の積極、一味の英氣、一味の活動、一味の强大を加へた風格を愛する。たゞ今の世に多くあるものは、之れが反對なり。消極、纖細、萎黴、尫弱、而して嫉妬、憎怨、疑惧、躊躇。而從して背誣すること腐婦の如く、小憤を構へて復讐の一念に執するは蛇の如し。斯の如きものが幸にして一旦得意の境に到れば、ひたすらに傍人を淩がんと欲して、所謂覇氣ある人物となる。燧石を寄せたる如く、たゞ〳〵圭角あるを以て能とする輩に至ッては憫笑にだも値せざるや勿論。

王氣には温潤あり、宏大あり、寛裕あり、所謂寛仁大度の上に更に英氣を加へ、活動を加へ、强大を加へ、積極を加へたる、言はゞ征服と調和退讓とを一に合したるが如き氣風である。我は王氣の高い人格を慕ふ。

新春は或る意味に於いて、人皆に幾分の王氣を着けしむる趣がある。天事人事共に清新といふ感は、おのづから人に爽快の氣を起さしめる。氣分爽快なる時は、性習また悠然閑雅の態に化して、爭氣なく苛氣なし。昨夕の鬼が禮に來る太平の姿も、新春のめでたさとは云へ、自然の心理ではないか。而して是れに、過ごさぬほどの酒を加ふ。然り、酒あるが爲めに豪興逸發、小心の人といへども、春のみはそゞろに我れを大とし天地を小とするの感に醉はされる。所謂英邁の氣は是れから生ずる。堂々として而かも春温の情に滿つるものは王者の氣であらうか。

酒には、古來多くの意義がある。醉ふといふ語、醇といふ語が雜多の比喩に用ひられて、凡て塵世の繫累、粗俗の品等以上に想忘し超脫するといふ義を帶びるは云ふに及ばず、酒中の趣の文藝に入れる例は長安酒家の太白以來枚擧に遑あらず。

蓋し酒の能は、我等の生理作用に變態を生ぜしめて多量の血を腦に注ぐにあること勿論であらう。其の結果は我等の推理性、關係性を鈍くして、唯ひとへに當局面のみの興奮を盛んにする。言ひかへれば一事物を他と絕緣して感ぜしめる、唯其の事のみに思ひ入り感じ入らしむるに容易である。我れと相忘れ世と相忘れるとは此の謂であらう。耽溺の趣、是れが即ち酒の意義でまた實に美といふものゝ凡てに通ずる重大な意義である。

美といふものゝ重大な一意義は耽溺といふことで、而して斯やうな美を人生に布くものは文藝である。併しながら文藝の耽溺は酒中の耽溺とは違つて、普通道德の上に有害の恐れあるまじきものである。其處が文藝の一種の妙作用でなくてはならぬ。酒は之れに反して、若し之れに耽れば忽ち道德的結果を惹き起すことを免れぬ。即ち是れ酒と文藝と、趣は似たれど

も價値は異なる所以である。

酒と相似たるは夫の阿片などの類であらう、酒と同じく人を醉はす、人を知識から放ッて感情に引き入れる、耽溺の狀に留まらしむる。併しながら其の普通道德の上から惡結果を齎らす度の酒よりも大なるは論を待たぬ事實である。西洋では、英國の文人でコールリツヂ、デクヰンシー等が阿片の毒によつて一種奇怪の想像力を助長した例である。古今東西の文藝には、酒の香に染みたものが頗る多いと共に、阿片の臭氣もまた其の跡を殘してゐると言はずばなるまい。

要するに酒だけは、道德上の惡結果を來たさゞる限り之れを愛するものあるに對して、我等文藝に携はる者が特殊の同感を有すと云ふも、誰れか是れを不思議としよう。新春の旦、微醺を帶びるもの大いに可、天才に、酒によるの人爲的天才ある如く、酒によッて發する一時の王氣を味ふも亦た妙ではないか。（明治三十九年一月）

文藝協會と大隈伯（解嘲の辯）

予は文藝協會幹事の一人として、本紙の一欄を借り、玆に世の協會を嘲る者の爲めに惑を解きたいと思ふ。

過日の「二六」紙上には我凡と名のる人の此の會に對する嘲罵の文が出てゐた。主意は大隈伯の會頭たることを批難するにあつたらしいが、是れは一面に於て啻に此の論者のみならず、一派の人々が動もすれば懐かんとする感想であるから、言はゞ代表的の批難と認めて、之れに對する我等の見解を述べやう。

其の他、組織の粗大であるといふことも世間の或る部面には批難せられてゐるらしい。また早稻田派云々の言をも耳にした。皆我等の本意と違ふ說である。

此の會の成つた發端は、今更ら言ふまでも無いが、文藝上、机邊や、製作室のみで成就せられる事業以外、直ちに實世間と相觸れて成立する方面、たとへば多くの演藝といふ如きもの〻善導に先づ力を致さんとする所にある。即ち文藝の公衆的方面に新機運、新活動を誘起したいといふのが其の素願であツた。

二つには、一般の文藝といへども、是れを普及せしむるため、又是れを刺戟し興奮せしむるためには、社會全體の之れに

對する注意力、要求力を覺醒することは最も必要である。文藝家も人である以上は、何で全く世の景氣、機會といふやうなものを懸絶することを得やう。成程文藝家みづからも或程度からは其の作品のみで景氣を造り機會を造ることをも得やうが、同時に心あるものが外間から之れを誘致し推奬するに聊かも批難の理由は無いと信ずる。文藝協會は要するに我が文藝の世間的、公衆的方面に、聊かたりとも貢獻する所あらばといふ誠意を旗標としてゐるものである。

斯やうな團體が大隈伯を會頭に推してゐる。それが滑稽とは我等の同意し難い說である。

文藝協會は決して世の所謂早稻田派を立せんがためなどゝいふ私意をば、微塵も挿んで居らぬ。及ぶ限り日本の文藝、否、世界の文藝といふ地盤に立つて應分の職を盡したいとこそは願つてゐれ、何で此の人物缺乏の藝苑に、區々たる小黨派を結んで快しとしようや。我等は天下のあらゆる方面から同志者の來たり會せんことを希ふの情に禁ぬへ。唯如何にせんや、我等交遊の道狹く、當初まづ事を起こさんとするに、多く同窓熟知の人々を糾合する外無きに至つたのは、一部少數者の間に夫の黨派云々の誤解を招いた所以であらう。蓋し我等が互に其の志を知り、傾向を知り合ふといへば、其れは熟知昵近であればこそのこと、其れ等の同志者が先づ相結んで事を擧げる、是れ人情理數の當然の結果では無いか。所詮の是非は將來の我等が行動に徵して知らるべき事であらう。

而して本會創立の事に當たつた我等の多くは、社會的地位名望の府たるべき人々のうち、最も多く大隈伯に緣故を有するものである　同氏は早稻田大學の創立者で、また現に早稻田に邸を卜してゐる人である。早稻田大學に緣故多き我等が、社會的名望の府たるべき人を求めて、大隈伯に之けるは、決して夫の河水を引いて楚の野に注がんとする、世間滔々の風と同一に論ずべきものでは無いと信ずる。是等は情誼の自然である。

然らば何ゆゑ殊更に社會的地位名望の府たるべき人に緣故を求めたか。是れが恐らくは批難者の中心の意義であらう。我等の見解は斯うである。

古來文藝史の一面は、實に文藝と道德との爭鬪である。是れは過般「讀賣」の評論家も道破してゐた言と記憶するが、名言である。而して茲に道德といふものは直ちに實世間といふことを意味する。文藝と實世間、實生活との關係は、古今東西に亙つて解きがたき、而かも如何にか處置せでは叶はざる一大根本問題である。更に適切に言へば、一般公衆と文藝との關係といふことが、此の問題の重要部を成してゐる。由來動々もすれば、世と離れんとする運命を持つてゐるのが、文藝の特殊の性であつて、或は世よりも早く進むが爲めに離れることもあらう、或は世から外れたるために離れることもあらうが、兎に角社會の他の各部面と同一步調を保つことの難いものである。併しながらまた、既に人生の要求として此の世に存立するものである限りは、全く世と絕ち世と背いて安全を得るものでは決してあるまい。如何なる方式に於いてか、此の關係問題が解決せられてゐなくては、其れが生存しやう筈は無い。而して文藝其のものに非常な優越の力があつて、それで世を征服し了すれば、それも一つの解決であるが、併し此くの如き域に文藝みづからが達し得るまでには、如何に多くの犧牲を要することか、逆境に生まれた文藝が一代を征服するに及ぶまでの歷史は、たゞ涙ではないか。また此くの如き犧牲の負擔に堪へずして、中途に亡びた文藝が、無いとは誰れが斷言し得やう。此等の事實を想ふものは、茲に立つて一臂の力を、此の不思議な運命を有する文藝のために假さんとする。換言すれば文藝と社會公衆との關係問題に、外間から解決の道を講じて見る。是れが即ち公衆的社會的方面に關する文藝協會の事業の要部である。極端といへば、此の一面が無かッたら、文藝協會といふやうな團體の組織は無用であッたらう。而して文藝と一般公衆との關係問題を實行の上に解くの方策は、前に言つた

如く文藝が公衆を征服する外は、たゞ文藝を公衆に降らせて、其の進める足幷を跡へ返すか、然らずんば公衆を提げて文藝の進める歩趨に追ひ附かしめんと勉むるのみであらうと信ずる。我等は進むべき運命を有する文藝を強いて引き下して公衆と歩趨を同じくせしむるの情に忍びず、則ち敢て公衆提醒の策を講じたいと思ひ立ッたのである。

斯くの如き趣意で一般公衆と相觸れて事を成さんとする、其處に必要なものは文藝以外の力である。然り文藝以外あらゆる意味に於いて力は此の場合の必須條件である。公衆に理を説く、理以外に力の伴はざるものは、其の實際の効果幾ばくとも思はれぬ。世間の皆が單に理説によつて動かさるゝ程ならば、始めより提醒の必要は無いのであらう。

而して此の場合に於て力の府となるものは、社會上の地位名望より善きは無い。今の我が國は、尙ほ政治中心の社會である。政治上の地位名望は、直ちに社會の各方面を掩ふべき威權の府である。今の日本に於ては一般公衆に對する此の種の人の一言よりも有力なるものは無いのである。されば若し此の種の人にして、來たつて誠意に我等が事業を援助せんと云はゞ、我等は之れを賴んで力の府とするに、何の疚しい所も無いと思ふ。我等は斯くの如き見地から、大隈伯に會頭の任を託した。大隈伯が文藝家で無いのは、英國大學の學長に學者で無い人のあるのと同じく、事實である。我等不敏といへども、今ま大隈伯を煩はして一篇の新體詩を得、一幕の新脚本を得んとは夢にも思はぬ。我等は同氏を以て社會に尊重せらるべき大經營家の一人と信じ、斯くの如き人をして之れが總裁の下に統一せられんと企てたのである。

予の親しく大隈伯に接したのは、文藝協會幹事として、兩三度同邸に出入した以來の事であるが、予の見る所を以てすれば、同氏の頭腦は、其の會得力と同化力とに於いて正しく尋常に絕してゐる。加ふるに恐らく他面、政事的活動に幾分の餘裕あるの致す所か、精神的方面に對する同氏が近來の知識慾は非常に盛んである。從つて其の文藝を談ずるの言は、遙かに

夫の一派の政治家流と倫を異にしてゐる。此等の知識は如何にして集積せらるゝも可、此の大政治家のドローイング、ルームに、殆んど今の文藝壇の最新方面と同一水平にある談論を聞くのが、最も予の意外とした所である。其の客室のストーヴの前には、二三の所謂政客と席を並べて文藝を語つたこともあるが、斯かる場合に於いて最も驚かるゝは、其の主人公と政客と、文藝乃至精神上の事に關する趣味、知識、態度の優劣の甚だしいことである。是れについては、語るべき實例の逸話をも有するが、茲に公表すべきものではあるまい。兎に角、趣味の説、人情の説、快樂慰安の説などに、あれ程の見識があれば、自ら文藝に携はるもので無い以上は、不足はないと見受ける。予はむしろ大隈伯を會頭に推した文藝協會の爲めに、人々が得たことを祝するものである。而して大隈伯に對しては、政治上の事は予の言を挿み得る所にあらざれど、教育の方面に於いて、其の半生の傳記が幾多の光彩を添へたことは明かである。されば予輩の希ふ所は氏の今後の舞臺が、文藝の背景によつて更に〱其の色彩を增さんことである。

要するに文藝協會と大隈伯と、其の結合だに誠實ならば、批難の理由は無からうと思ふ。「二六」の論者、其の他、同一の感を有する人々は、以上の意を諒とするか否。

組織の粗大といふことは、一方今後の實行で補ひ行くより外、致方の無いものである。我等とても、あれ丈の事業を一時に遺憾無く展開し得やうとは期せぬ。順を追うて歩を進むべきは勿論である。唯我等が發表した計畫の多くは、種々の度に於いて皆すでに實行方案の胸算あるもの、若しくは現に實行に着手して萌芽を成し居るものである。單なる計畫といふよりも以上の意義を有して居る。之れを數へて世に發表したのは、一方之れによつて我等の趣意を明かにすると共に、他方には、之れで我等みづからが事業に對する義務の決心を強くしようとの心であつた。蓋し一個人の事業ならば、自分一人の決心次

第で云ふよりも先に行ふといふ方式をも取り用ふるを得やうが、協會の如き性質の事業では、むしろ先づ其の計畫を公けのものにして、之れをして約束、義務といふが如き形で當事者に迫り來たらしむる方式が、有効ではあるまいか。我等は或る意味に於いて背水の陣を布いたものである。打ち出した以上は、仆れるまで遣らねばならぬ。浮氣では無い。力盡きて仆れるのなら、仆れても男兒の本懷である。

終りに、「二六」の難者は、批難の的を坪内逍遙氏に置いたやうであるが、逍遙氏には就中劇壇の實際方面の革新に就き、十幾年來苦心の準備がある。是れが如何なる形で何時見はれるかは、未だ與り聞かぬが、他日若し此の事業と文藝協會と連結し得る時があつたら、其の時其の部面に於いてこそ、殆ど專ら逍遙氏の責任となるべき事業も生ずるであらうが、今の文藝協會は、必ずしも責を逍遙氏一人に嫁すべき性質のものでは無い。我等幹事の多數と同氏とは、師弟の關係をも有してゐるから、一言同氏のために辯じて置く。（明治三十九年一月）

演劇時間の短縮（法律の保護）

或は問うて曰く、文藝の法權によつて保護せらるべき範圍如何と。吾人おもへらく、文藝は殆ど曾て法權によりて保護せられ、若しくは援助せられたることなく、寧ろ常に法權によツて睨視せられ、抑制せられたり。法權曰はく、文藝は社會に存する危險分子の一なり、監視怠りあるべからず、是を譬へば猶ほ浮浪の徒の、寸時も油斷なり難きが如きものなりと。斯の如きは實に政法が文藝に對するの態度なりき。茲に於てか法權、否な我が國家が專ら文藝を制縛し監督するの地のみに立ツて、曾て直接に之れを保護し助長するの地に立ちしことあらず、權勢富貴の府にあるものが、稀れに保護者の地に立ちしことは之れあるも、是等はたゞ多くは個人の私事として營める事業たるに過ぎず。國家の威權といふものが、正當に文藝の身方となつて發動せる例は多からざるなり。彼の版權興行權などいふものに關する裁判沙汰の如きは、或る意味に於いて法權が文藝の上に蒙らせたるの保護なるべし。されども、是れはた頗る受動的のものたるを免れず。畢竟文藝は法權によつて保護せらるゝを要するが如き危殆の地に立つの憂なきものなるか。

吾人の見る所を以てすれば、現下の我が演藝壇に一つの事例あり。在來の劇場に纏綿したる情弊の、ひとり國家の權力に

よりてのみ除却せらるべきものあること是れなり。何ぞや。夫の場内にありて飲食物の押賣其他の是れに類する業を營み、唯此の一私利の存續を許らんが爲に、天下公衆の利便慰樂を蹂躙して顧みざるの一類を、法權一下の功によつて屛息せしめんと欲するなり。さらば何ゆゑに斯かる一些事を法權にたよりて成就せんとするか。

蓋し此等の徒は、後へに一種の威嚇力を有する無頼の破落戸漢を使嗾して、所謂人氣商賣の弱點に附入り、是等の改善を企つる演劇當事者を制肘して已まず。即ち斯くの如き改善の前には、腕力の抵抗あるなり。而して腕力の抵抗を除き得る正當の力は、たゞ銃と劍とを後に具へたる政法の權に非ずや。

固より吾人は正式の商業として場内に飲食物を鬻ぐものに、一點の反感をも有せず。世界いづれの劇場といへども、中に此の種の設備あらざるはなく、買ふものと賣るものと、そは相互の自由たり、何人も傍より是れに異議を挿むの謂れはあらざるべし。然れども、障害は下の如き順序によりて生じ來たる。吾人が劇壇のせめてもの外形的改良として、第一に行はれんことを希望するものは、興行時間の短縮なり。八時間以上の演技といふが如きことは、實際唯觀客をして疲勞せしめ不愉快ならしむるの外、何等の所得もあることなし。今の多數の觀客に取りては、觀劇は一の苦痛を豫定したる樂みなり。勿論罕には、劇場内にあるの時間長からざれば、其の支拂ひたる場代に對して己が功利打算の心滿足せずといふが如き固陋の觀客も無きには非ざるべし。されども、此の如き下劣遲鈍の小數者（敢て小數者といふ）に媚ぶるの故を以て、進歩を代表し、將來を代表する多數聰明の人の要求を無視するが如きは、愚の至りなり。

一日演技の時間を短縮する時は、啻に觀客をして心力過勞の苦患を脱せしむるのみならず、劇そのものゝ上にも、利ありて害なし。今の新舊劇の甚しく散漫冗長に失して、觀客はたゞ偏へに脚色の組み合はせにのみ興を繋ぐるに至るが如き、は

た是れすら終に一日の劇たるべき長さには不足を生じて、無意義無方の中幕といふが如きものを眞面目なる劇的幻想の進行中に闖入せしめて異しまず、甚しきに至つては相應の長さある劇を二つ以上も一日のうちに人に强ひ、若しくは無要の疣贅を旣成の作品に附加して藝術の全円を破却するをも厭はざるに至るが如き、皆時間の短縮によりて除き得べき弊害の例なり。幕間の長びく弊の如きも亦た同列と見るべし。要するに、劇のため、はた觀客の便利、經濟、慰樂のため、最も先づ企つべき外形上の改良は、一日の演技時間を短くするにあるか。

而して斯の如き見易き改良すら興行者等がみづから進んで實行するに至らざる所以のものは、是れによりて自己の營利に影響せんことを恐るゝ、所謂劇場の寄生蟲等が、後へに無賴漢的復讐の意を示して之れを威嚇し、若しくは少なくとも斯くの如き威嚇を想像して當事者等が逡巡するの致すところといふに非ずや。午餐は勿論、晩餐をすら劇內若しくは其の附近に於いて爲さしめんがためには、觀客をして十二時よりも前に入場せしめて、六時七時よりも後に退散せしむるの要あるなり。夫のカベスの不愉快なる食物はいふに及ばず、辨當類の徒に高價にして不潔無氣味なるが如き、且つ此等のものを座右に陳列して貪り喰ひながら技を觀るものゝ醜態を極むる。吾人は電車の中の公德に心を注げる當局者が、何ゆゑに劇場の內部に思を致さゞるかを怪しむ。劇そのものゝ風敎に及ぼす結果を憂ふること彼れが如き當局者は、また此等の點にも特殊の工風を費さんことを望む。

或はおもへらく、斯の如きは宜しく當事者みづから之れを成すべし、事後若し復讐妨害等の憎むべき所行をなすものあらば、其の時にこそ警察權は立つて當事者を保護すべきなれと。然れども事後を豫約するの保護は此の場合に何の用をも爲すこと無し。是れ現在の事實なり、要は初より復讐、妨害を加ふるの的無からしむるにあり。「法規命令なれば致方無し」と

いふに及んで、はじめて當事者は、安んじて之れを斷行し得べきなり。

而して之れが實行案は、思ふに西洋の三時間乃至三時間半といふこと、恐らく我が邦にあッても、最短の標準ならんか。其の以上延びて四時間乃至五時間には尙ほ及ぶを得べし。されども五時間は旣に稍々長し。また時間の配置をも、併せて一定し置くの要あらん。例へば午前興行は八時より十二時まで四時間以內、午後興行は一時より六時まで五時間以內、夜興行は六時より十一時まで五時間以內と規定するが如き是れなり。或は舊劇中の或物を全部演出せんがために特に六時間を要し七時間を要すといふが如き場合あらば、其が眞に藝術のためなるの證據だに立たば、時に之れを特許するの例を設くるも亦た可ならんか。されども吾人は、藝術上より見て、斯の如き特例の必要は殆ど全く之れ無しと信ずるものなり。（明治三十九年二月）

近時の宗教的傾向

近時の我が思想界、就中其の最も遷轉し易き方面を代表する青年社會の思想が、嘗ては日中の月ほども心に懸けざりし宗教といふものを引き來たッて、興味の中心とせんとするの傾向あるは、頗る注意に値すべき現象ならずや。憶ふに是れ感情を求むるの聲にはあらざるか。

併しながら、此の感情の要求は道德の源より來たるか、將た文藝の源より來たるか、大に觀察を要し考慮を要するものあるに似たり。實生活の煩悶苦痛に惱みて、所謂解脫を求め、救濟を求め、安立を求むるの義なりといはゞ、是れ所詮は道德的精神の要求なり、若し我が實生活の間に於いて慰安を求め放焉を求め快感を求むるの心が、今の文藝に之れを得ずして宗教的感情の中に飽くところあらんとするもの是なりといはゞ、此の如きは文藝的精神の要求に他ならざらん。

凡そ今の弱き人にして、旱燥無味なる今の我が社會に飽き足らず、仰いで何物かの、我が心の奥、感情の中心に磨擦し來たらんことを要望せざるものは、多くあらざるべし。時代の要求の重なる一つは是れなり。

而して今や宗教は來たッて此の點に觸れんとす。吾人は、近時の宗教的傾向が果してよく如何なる程度まで解脫、安立の

意に於いて現下の青年思想界に迎へらるゝかを知らず。また其の成果の幾許かよく此の要望に應ずるをも與り聞かず。唯多くの人々が、此の種の文字を讀み、此の種の會合に集まり、此の種の談論を聽いて、暫時たりとも、渇したる感情に水かひ得たるの情あるべきを想像するなり。別言すれば、是等は一種の精神的滋養物なり。吾人は少なくとも此の意義に於いて今の宗教的傾向を是認せんとす。歸するところ、斯くの如き範圍に於いては、宗教は變形したる一の文藝なり、趣味の對當なり。

大なる文藝は常に其の保證として誠實といふことを要す。笑ふに於いても、泣くに於いても、其の情は必ず誠實ならざるべからず、輕浮を嫌ふなり、僞造を嫌ふなり。而して此の誠實といふもの一つ、蟠つて實に文藝と宗教との境界を埋沒す。人は誠實なる文藝を要して宗教に之けるものならざるか。

之れによりて想ふ、近時の此の傾向の我が文藝に影響する所は必ず小ならざるべし、否、小ならざらんことを希ふ。聰明なる我が文藝家は、斯くの如き世潮の決して無意義にして起こるものに非らざることを領したらん。此等の宗教的運動にのみ是あり、また是れあるが如く見えて、今の文藝には多く是れ無き或る物の、今の精神界若しくは感情に要求せられ居ることを觀取するに吝ならざるものは、進んで斯かる機運の影響を感受するに於いても、また甚だ吝ならざるべしと信ずるなり。

但し誤解は之れを避けんことを欲す。吾人は如上の說に於いて、決して世のいはゆる宗教小說、宗教詩の類をのみ文藝の至極せるものとは主張せず。題材を宗教に取り、目的を宗教に置くといふが如きは、文藝の本義に於いて禁ずべき理由なきと共に主張すべき理由をも有せず。斯くの如きは他の教育小說が教育の題材を取りて教育の爲に作られ、廣告小說（といふが如き名あらば）が廣告に便利なる題材を取りて其の目的の爲めに作らるゝと毫も異なる所なし。其の結果にして文藝の園

に不朽ならば、凡て是れ大なる文藝なり。宗教といはず、道德といはず、哲學といはず、文藝の上座には、之れを驅使して隷屬せしむる他の分科あること無けん。若し是れありと云はゞ、直ちに是れ人生なり。文藝は他の宗教道德と共に、人生の直參にして陪臣にあらず。世の宗教に據り、道德に據り、教育に據り、政治に據るものが、ひとり自ら高しとして文藝に獨立同等の一席を與ふるを惜むの類は、固より陋見のみ。

吾人は斯くの如くして、文藝獨立の見地にあること依然たり。而かも傍に世潮の宗教的傾向と相合したるの文藝を求む。矛盾か。否。吾人が宗教的といふの意義は廣く弘し。玆に一物あり、之れ神秘微妙の境なり。文藝も之れに參し、宗教も之れに參して、しかも文藝と宗教と各々ひとり之れを擅にすべきものには非ず。直ちに之れ人生の根本義なり。たゞ吾人が有するあらゆる名目のうち、最も之れが指標たるに適せるものは、宗教といふ語なるべし。故に假りて之れを名とするのみ。

吾人の觀るところを以てすれば、宗教といふ既成概念の中には、其の獨自完結即ち精神の滿足興奮妙悅といふが如き一面と、之れより生ずる道德的効果を豫想するの一面とを包含す。然れども此の兩面の連續については、尚多くの疑議を容るゝを得べければ、吾人はこゝに之れを輕斷するを避くべし。たゞ前者が即ち吾人の廣き意義に於いて宗教的と呼ぶものなることを明かにすれば足る。

更に之れを思ふ、感情と理性との爭鬪は人生を一貫せる長き〳〵歷史なり。宗教と哲學との形に於いて、此の二面の爭ひは歐洲の思想史中最も重要の地位を占む。我が國また輓近に於いて此の經過を著しくせり。

而して吾人が更に玆に聞かんとする所は、宗教と道德との關係問題なり。今の宗教家は、道德に對して如何の交渉を有すと信じ、また其の事實を擧示せんとするか。宗教上最も興味ありてまた最も直截なりと見ゆる現下の問題は是れならんか。

三四年以前、吾人は英國より書を「新小說」の滯歐文談欄に寄せて、歐洲現時の宗敎に對する觀察の一斑を述べ、且つ宗敎といふものに就いて一層多くの注意を要すべき趣意を論じたり。恰も之れと前後して倫敦の一隅に、愛敎といふもの起り、みづから基督の再來なりと號して一世を驚かしたるものありき。是れまた吾人が當時「讀賣」紙上に寄書して其の僞物なるべき恐あるの理由を報じたるところ。然るに爾來兩三年の間にありて、英國ウエールス地方を中心とし、一種の宗敎熱といふもの勃興し來たりぬ。奇蹟的現象の噂に伴ひて、一種の旺盛なる精神的傳染の事實諸方に現はれ來たれり。近時彼の地の新聞紙雜誌類には、此の宗敎熱復興の記事殆ど絕ゆることなし。此くの如き現象は彼の地に於ける全局の思潮と如何の關係を有するか、注目するに堪へたり。唯彼れにありては、其の事專ら農夫、工夫、漁民の間に起り、我れにありては敎育ある青年の思想に相似たる傾向を生じたり。此の對照もまた社會國土を異にしたる當然の結果にして、其の底には深甚の意味あるものにあらざるか。吾人は機を得て更に審に此等の點を研究せんと欲す。（明治三十九年二月）

問題的文藝

問題劇、問題小說といふ名は我が日本にも來てゐるが、事實は未だ之れに叶ッてゐるとも思はれぬ。歐羅巴で問題劇、問題小說といへば、低きは所謂貧富問題、勞働問題等の社會問題から、高きは、人生問題、道德根本の問題等にわたッて、作者が感ずる此の種の問題を、最も痛切に讀者觀者に感ぜしむるもの、又は作者が此の種の問題に對して懷抱する解決を、讀者觀者に訴へる文學である。

而して斯の如き文學は、今尙ほ多少の變形の下に重要なる地位を彼の邦の文壇に有してはゐるが、其の全盛期は既に過ぎ去ッたものといはねばならぬ。今は更に斯の如き傾向の上に、一層神秘的な、一層超越的なものを追うて走らんとしてゐる趣が見える。

過去でいへば、佛のゾラが小說の或るもの、諾威のイブセンが劇の多く、此等は問題小說、問題劇の作中最も大なる名であらう。而して日本の文壇にも是等は早くから紹介せれてゐる人々である。然るにも拘らず、此の作風は日本の文學に何等の大なる影響をも與へずして、今や西歐最近の潮流を追ふといふ名の下に、輕く次の過程に移り入らんとしてゐる。

併し現在の日本にあッては、過ぎ去ッたものが眞實に過ぎ去ッたものとはならぬ。新陳代謝といッても、一方が必ずしも其の爲すべき所を爲しつくして、實行の上で世に饜かれたが爲めに新しいものに地歩を讓るといふのでは無い。言はゞ人巧的に新しいものを擔ぎ來たッては、舊いものを押し除けやうとするに過ぎない。自然の變遷ではない。此に於いてか、我が邦にあッて過去に屬したと稱するもの丶多くは、實は尙ほ大に現在に榮ふべき運命を有すること丶なる。

之れを小說界に見ても、漠然單に寫實主義、自然主義と稱した一種の作風が、明治二十年前後から今に及んで略ぼ行き得る所を究めたと見ゆる外は、所謂理想小說、所謂傾向小說、所謂觀念小說の如き、槪ねみな試驗品たるの度にすら達して居らぬではないか。まして況んや問題小說と呼ぶべきものをや。

此等の點から見ると、我が文壇は、正しく眼高手低の嫌あるを免れぬ。議論見識の方面は全速力で前進しつ丶あるに拘はらず實行すなはち創作の方面は、二段三段の跡に後れて來てゐる。

蓋し世のいはゆる議論見識といふものは、多く知識上の作業であるから、根柢の深淺は別として、或程度までは何人も領得し得るもの、從つて之れを我がものらしく發表することも容易であるが、創作の上では、其の見識が全く我れと飽和して自分のものとならぬ限りは到底之を描いて人を動かすことは出來まい。されば世にある新議論新見識といふものが、眞に其の社會のものとなッたか否かは、其の創作壇に照して見て最もよく知らる丶であらう。

夫の觀念小說、傾向小說、乃至問題小說といふが如き見識は、たゞ呼聲のみであッて、實はまだ我が社會のものとはなッて居らぬ。我が社會は未だ文學に溢れ出るまでの思想觀念を有して居らぬと言はねばならぬ。また斯やうに貧弱な思想觀念であるからは、其の中に結ぼれて來る葛藤も、深遠な問題には觸れぬ譯である。

然るに近來青年間に於ける精神的方面の知識やうやく增進すると共に、社會一般の思想も漸次に內省的、自覺的、意識的となり來たッて、一方には既に其の弊すら見えると共に、他方大いに痛切な思想問題に近づかんとしてゐるのは、祝すべきことゝ言はねばならぬ。個人と社會との衝突、文藝と道德との衝突、戀愛と社會形式との衝突、科學と宗教との衝突といふ如き深い問題は固より是れある社會が幸福の社會であるとは言はれぬが、併し必ず一度は觸れざるを得ない問題で、また現に一つ〳〵實現せられつゝある問題である。眼を掩ひ耳を塞いで、斯くの如く顯然また必然たるべき趨勢を無視し去らんとするが如きは、愚な話であらう。されば今後の社會は、必ずや步一步此の種の問題に對する自覺を痛切にすることゝ信ずる。一方には早く已に解脫を說き、救世を說くものあると共に、一般社會は今後はじめて先づ其の入門たるべき問題に意識し及ぶであらう。

是の如き趨勢から察するときは、我が文藝は是れから眞に歐洲のいはゆる問題的作品に步を向け來たるのでは無からうか。從來の我が小說壇にも、或る程度まで思想觀念を寓した作品は無いでも無かつたが、多くは單に或る思想、或る觀念を寓すといふに止まッて、それが痛切にして深奧な人生問題、社會問題として活きてゐる思想觀念でなかッた、云ひかへれば、此等は單に思想觀念の作品で、未だ問題的作品といふだけの權威を持つには至らなかッたのである。（明治三十九年二月）

隨感（詩、法律）

歸來事に追はれて、まだ多く新體詩集といふものを讀まねば、精しいことは玆に論ずるを得ないが、折々の雜誌に出るもの、また二三の集などによツて瞥見すると、今の詩壇に最も著しい調子は、歐洲の評論家がいはゆるクラシシズムにあるかを感ぜられる。吾人がこゝにクラシシズムといふ名を用ゐるの意は、其の作品が結局知識に支配せられ、技巧に支配せられた形を有するの謂ひである。讀者に冷静な美しさ、整頓の美しさといふが如き感を押しつける謂ひである。

例へば去年シムボリズムの論があツたといふ、蒲原有明子の作の如きは、此の好例であらう。此の人の作が如何なる程度までシムボリズムとして成功してゐるかは別論として、由來シムボリズムといふもの其れみづからが、一面には寫實的傾に反したもの、隨ツて之れより延ひては反知識的のものであると共に、他面には頗る知識的のものである。即ち云ひかふればローマンチシズムにもクラシシズムにも行き得るものである。

薄田泣菫子の作に於いても、吾人は全體に同じ調子を感受する。勿論詩である以上は、其の想に一味熱情の氣を帶び、若しくは帶びしめんとしてあるのは當然であるが、而も其の熱調のムーヴメントが緩徐である、技巧すなはち知的工風をして

尙ほ多大に其の間に入り來たらしむる底のものである。

英のラフアエル前派といふものが、脈は情緒的なローマンチシズムに引きながら、なほ其處に奇態にもクラシカルな一面を持ツてゐたのも、今の場合と思ひ合はされる。粗雜な比較ではあるが、假りにダンテ、ロゼチを以て泣菫子に比し、ウ井リアム、モーリスを以て有明子に比したらば何うであらう。ロゼチのパツションやセンジユアリズムは泣菫子には無からうが、何處にか一味の類似を有してゐる。有明子とモーリスとも亦た然りである。更に顧みてマシユー、アーノルドに比すべき人を求めたら、是れまた他の諸家中に見當らぬものでもあるまい。

今の社會は、冷かなる知識に非ざれば、焦るが如き自己中心の感情である。而して人はやうやく此の二つのものに疲れて頭を擧げて焦燥なき平和の一境を求めんとするの端を示した。我が現下の思想界は、實に刻々にして移りつゝあるではないか。

知識のやうやく理窟に墮して、以て社會に專制的暴威を逞しうしつゝある代表者は、彼の法律と呼ぶものであらう。法律を司るものに云はせたらば、今の社會は之れなければ一日も存立せぬといふであらう。而してまたそれが事實でもあらう。併しながら其れと同時に、柱に膠するといふ世の諺を權化させたやうな、小面倒な小うるさい、煩瑣で究屈で、それで人間の感情の醇味を蹂び暴して憚らぬものも法律である。法は疎なる所に妙があらう。司法者は人情に同感する所に光彩を發する。

近時法律を改正することに、運用の餘地といふ考へは必ず加はツて行くとは、嘗て友人の法律家から聞いたことであるが、吾人は之れと同時に司法者、たとへば裁判官、辯護士などいふ方面の人々が、更に多く人情といふものに同感して、之れを

輕視し蹂躙するの度を減じ行かんことを望むの情に堪へぬ。勿論人情と云つても、自己中心の私情ではない、同感といふ飾をかけた醇味の人情である。

更に之れを他面から言へば、文學の味が法廷官衙に這入つて來たらばと望むのである。曾ては某事件の判決文があまりに文學的であッたため、却ッて內部の批難を蒙ッたといふ、而して是等は强ち文字の修飾のために理路が朦朧であッたといふのではない、人情に訴へるの意すなはち文學的精神があまりに露なためなりしといふではないか。人情といふものゝ凡てを蔑視する陋見が、玆にはなほ跡を存してゐる。

吾人は英國の新聞紙を讀んで、其の裁判といふものゝ文學的なのに尠なからず興味を感ずる。或る意味に於いて、大岡捌式である。專門家は是れを目して、時代に後れたものと言ふが、併し人情の温みを持ッた英國式と、全く之れを拔き去ッた石の如く冷い日本式と、利害の大小は容易に計量し去らるゝものではあるまい。是等は歷史の相違から來た對照でもあらうが、要するに吾人は、新式の法治國なりといふ我が社會の、是れがために荒涼となり無趣味となり、僞人情となるを堪へがたしとするものである。

是れは些細の事例であるが、此の頃雜誌事業の關係から、一つの苦情を聞いた。當今は多くの雜誌の表裝といふものが、あの如く意匠の凝ッたものである所から、當事者は一點の色、一畫の墨をも無駄には其の上に塗るまいと苦心してゐる。美術としての用意はさもあるべきことである。然るに玆に此の美術的精神を法律の權威で蹂躙し去るものは、例の第三種郵便物遞信省認可云々の肩書である。此の非美術的な兩三行の活字を、雜誌の表面に必ず摺り込まざるを得ないために、折角意匠を凝らした表紙の純粹といふことが、無慘にも破壞せられて終ふ。而も此の文字は丁寧にも雜誌の裏面と表面とに必ず刷

出せよといふ。若し是れが其の認可物たるを認むるに便ならしめん爲であるなら、何故單に、見易き箇所にと布令しなかッたのであらう。箇所を定めるとしても、裏面一つで用は足りるではないか。要するに斯かる微細の事にまで、法規の跋扈してゐる社會の影が映ずる。（明治三十九年二月）

新意を薦むるの書

貴簡に對する僕の答は簡單なるべく候。足下小説を作ッて幾篇なるも尙未だ顯はるゝ所無しといふ。僕試に足下が作れるものを取ッて披閲するに、斯の如きはむしろ當然の運命に候はんか。足下の作、想に於いては申すに及ばず、形に於いても何の新意か候ふや。凡そ新たに文壇に打ッて出でんと志すほどのもの、而も識あり氣あること足下の如き青年が、唯在來の形式内容を右に遷し左に運ぶのみにして、既に地を得たる諸氏の驥尾に附着し得れば則ち足れりとする底の作物を世に公にし、以ッて世に顯れんことを求むるに至ッては、愚、むしろ及ぶべからず。足下若し自家の作の從來あらざる所の「新」ありと信ぜば、試に其の點を摘示せよ。自ら信ずる所の「新」なくして、而も之れを世に公にすといはゞ、是れ無用の業たるべく候。既にあるところのものすら多きに過ぐ。何の必要ありてか更に足下等の是れに加ふるを須たんや。

「新」と申せば、夫の用心深くして後へに退くに敏なること土龍の如き人々は、直ちに見て之れに呪咀の名を附せんと致す。曰はく、是れ輕草なり、是れ突飛なり、是れ未熟なりと。然れども、自ら何事をも爲すこと能はずして、而も輕草ならず、突飛ならず　未熟ならざる老大家の、生きて何の益する所も無きに比ぶれば、輕草未熟の「新」は敬すべく愛すべきものと

申すべし。己れ愼重の用意の後には、未熟ならず、輕草ならざる何等かの新意を文藝の庭に齎らすべしと豫約し得るもの、而して一世また認めて彼には眞に斯くの如き豫標ありと許すもの　斯の如き人といへども、輕草未熟にして蹉る、「新」の犧牲者に對しては、「哀れ」の一言こそあるべけれ、之れを呪咀するの殘忍はあるべからずと存じ候。

まして己れに此の豫期なきものが、他者の努力に對して阻礙の言を挿むが如きは、僭越の沙汰と申すべし。且つや方今人心に詭氣多し。內心は己れも亦「新」を追うて焦燥しながら、唯他者に先じられたるの故を以て之れを呪ひ、みづからは稱して自重不發といふ。夜郎事大、憎むべきは此の輩に候ふべし。

既に「新」と申す以上、そは如何なる點に於いてか、舊來の格を破らんと志す工風の精神より來たるものたること勿論に候。思想結構の事は、複雜にして容易に言ふを得ざれど、形については、事例を求めること易し。之を文體に見るも、言文一致といへば、「のである」「のであつた」の陳列以外に體なきものとして、初より工風の精神に思ひ及ばず。曰はく紅葉體、曰はく鏡花體、たゞ型を模することのみ知れる今の青年作家もまた無氣魄に候ふかな。足下、若し眞に斯壇に一旗を樹てんとの思召あらば、先づ退いて、思想結構乃至文體作句法に、全く別異なる一味を調へんと肝膽を碎きたまふべし。其は殊さらに別異を求むるものたるも妨げず、殊さらに新奇を競ふ尤も妙なるべし。覺悟工風の第一歩は此の外にあるべからずと存じ候。斯くの如き工風の結果は必ず無意義ならざるべし。と思ふ仔細ありて、以上の言を薦め候、不悉。（明治三十九年三月）

雅劇妹山脊山

過日の紅葉館に於ける文藝協會發會式餘興演藝のうち雅劇に關して、幹事側の一人たる僕の批評を聞きに來たものがある。腹藏なくいへば當日の演藝の中心であッた雅劇『妹山脊山』、是れは前回牛込の清風亭で演じたといふ、其の折のものよりも不出來であッたらしい。前回のは話に聞いただけで、實見しなかつたから精しい比較は立たぬが、話の模樣によると、どうも今回のよりは前回のが善かッたらしい。今回のは動作が芝居になり過ぎた。是れが缺點である。演者の一人が自ら評して、歌舞伎へ逆戻りの氣味と言つたのは適切な言であらう。鳴物も淨瑠璃も無い素舞臺で、歌舞伎式の動作をやることが稍々多すぎた爲め、筋のムーヴメントが如何にも遲除たるの謗を免れなかッた。それと今一つは、脚本の上にも一工風が欲しい。勿論舊劇の「妹脊山」に則る以上、筋の變更といふことは六かしからうが、總體に今少しく引きしめて、例へば上手（かみて）下手（しもて）で巻きつ降しつする御簾なども一度づゝで濟むくらゐが頂上と思はれる。理窟を言つて見ると、此の場は全體の形式があの通り對行均整といふことの義を本として成り立ッてゐる。川を隔てゝ兩岸のかけ合ひといひ、凡て著るしく形式美の勝ッた、技巧の目にたつ、クラシカルな、見事な作品である。されば此の作に若し更に技巧の加ふべきものがあるとすれば、それは

此の上更に對行均整の美を増すの工風ではなく、むしろ之れを避ける工風でありたいと思ふ。否、あのまゝでは既に對行均整が多きに過ぎはしまいか、重復單調に陥るの弊は無からうか、若し此の次にあの作を試演する機會があつたら、作者空外氏の一工風を望みたいものである。

是れは舞臺の上、眼で見た上の評であるが、讀み物としては（早稻田文學第三號所載）あのまゝでも中々結構な物である。雅言であれほどに書きこなした手腕は敬服の外はない。苦心察すべしである。

更に感服したのは、「あが、はしき命の」式の古言で出來上つた臺辭を、立派に廻はし除けた演技者諸氏の、エロキユーシヨンの技倆である。實は分かるやうに言へるものかどうかと心配してゐたが、抑揚一つで、殆ど全文をテキスト無しに意味の通るほど明確に且つ活殺自在の調子で演述し去つたのは、今の專門の優人に眞似の出來ぬ藝であらう。

史劇「孤城落月」は成功であつたといふのが一般の評らしい。本來相方と伴つて發達した歌舞伎式の藝を、全く相方無しで感興十分に演じ了ッたといふこと、此の點が、恐らく當事者の苦心の存した所であらう。（明治三十九年三月）

文藝と黨派

英國の十九世紀初めの文壇、即ち彼の有名な雜誌「エヂンバラ、レヸウ」の出た前後の文壇は、一方に所謂ローマンチックの氣運が全歐洲を通じて盛に起こりつゝあつたと共に他方英國の政治的黨派の感情が文壇に混入して來て、批評などが甚だしく局促、偏執の氣を帶びてゐた。其の弊が年代と共に段々薄らいで行つて終に今日の如き狀態となつたのである。今日の英國文壇には黨派といふやうなものは、先づ絕えて無いといつてよい。

勿論黨派といつても、或は、思想感情の傾向を同じくしたものがおのづから親しくして一緒に事業をやるとか、或は一の新機運を起こさん爲に同志のものが團結するとかいふことは、別な話である。ロゼチ等がラフアエル前派を起こし、モリー、マチー等の團體がおのづから印象派と呼ばれるに至つたたぐひは、即ち是れであらう。茲で惡い意味の黨派といへば要するに、其の結合の理由が文藝以外にある事になる。

英國の文藝界で强いて黨派に近いものを求むれば夫の繪畫壇で今尙多少殘つてゐるローヤル、アカデミー派と、之れに反抗する一派との爭隙の如き、またはグーリック、レヷイヷル即ちアイルランドの言語文藝を興立するといふ趣意でやつてゐ

るショー、イーツ等の一派と、之れに快からぬ一派との關係の如きが、恐らく之れに近いものであらう。之れには畢竟或程度までアイルランドとイングランドといふやうな政治上社會上の關係がまじつて來るからである。

飜つて我文藝壇に觀るときは、玆には黨派といふことが今以て重要な區分法になつてゐる。但し英國の昔の例と違ふ所は、我にあつては黨派の別が直接に政治上社會上の理由から來てゐないといふことである。我が文藝家は、概して政治上社會上の見地から黨派を設けて相爭ふ程興味を是等方面の事には有して居らぬ。我が文藝壇の黨派は多く學閥門戸の餘弊から來てゐる。

やれ赤門派、やれ早稻田派、と我等みづからは、もう此の種の稱呼を聞くのに饜きてゐる。馬鹿々々しいと思ふ。唯記者が今經營してゐる雜誌の名が「早稻田文學」といふため、動々もすれば之れも黨を立するの意味かと誤解せられるのは口惜しい次第である。

此方では別に何とも思つてゐない塲合でも、外からは妙に對照して、けしかけるやうな筆法を用ひられると、兎も角變な行がゝりになるのが人情であるから、此邊はどうか世の所謂時文評家諸君が、文藝のためと思つて、寛大の所置を取り給はんことを希望する。もうそろ〳〵文壇の黨派なんぞといふものは、忘れられてよい時代であらう。

但し黨派が嫌ひだからといつて殊さらに自分の所屬黨派の兄弟分を凌辱して身方を卑めることによつて自分が高まらうなどいふ卑怯な行方は同じく唾棄すべきものたるや勿論。要するに黨派といはず個人といはず、私情から發して來る紛爭は如何にも醜い。今の文藝壇の之れが爲めに累せられてゐる程度は決して少小ではあるまい。

今の學閥といへば、官學私學の爭ひが其最も著しいものであるが、之れには二つの意義がある、一は學力の優劣に關する

爭ひで、官學の人は動々もすると、私學の人を頭から劣等と見下だして罵る。併し是れは愚な話であらう。學力の優劣は實地に比較して見れば直ぐ分かることである。爭議には及ばぬ、實力の問題である。幾ら官學の人が優等だと定めて置いても劣等な人が出れば即刻その定めは破れて了ふ話で、何の役にも立たぬ。然るに更にをかしいのは、私學の人が此の種の批難に對して酬ゆる所の言葉である。彼等は右の直截明快な實地の判決に訴へずして、却つて路傍から之れに相應な誹謗を云々して快とするやうである、無氣魄といはずばなるまい。彼等は何故に進んで腕を以て之に答へんとはせぬぞ。

思ふに若し官學私學の爭に此等の外の理由があるとすれば、それは立派にいへば國家の統一教育と、自由教育との根本主義の相違から來るものでなくてはならぬ。更に穿つて言へば政權に寵せられる學府と寵せられざる學府との紛爭である。官學は後へに政權すなはち銃と劍との力を荷つて、種々の便宜を占有してゐる。之れに反して私學は此の種の便宜を有しないのみならず、却つて虐げられる塲合すらある。といふのが私學黨の抗議の第一の理由でなくてはなるまい。併し此等の紛爭すらも結局實力判決の前には姿を隱して了ふべきである。學閥などいふことも下らぬものだ。（明治三十九年三月）

精神的社會問題、個人の寂寥

社會問題といへば直ちに社會主義に連想するものがある。而して社會主義といへば、専ら其の物質的のみを指すことゝ心得てゐる。貧者小者下層者に同感して、富者大者上層者に反抗する。就中貧富問題といふ經濟上の理由を其の主要部としてゐるものが多い。

而して斯くの如き社會主義の文藝に這入つて來たのは西洋の例に見てもさして新しいことではない。英國の小說で言つたら例のヂッケンスの社會主義、乃至溯れば其の前にも端緒はある。下つては佛のゾラ等の社會問題の如きも此の方面に近いものであらう。

然るに輓近彼の獨逸の新スツールム、ウント、ドラングの脈に屬する人々が感觸した社會問題は、此の主義の精神的方面を示してゐる。云ひかへれば問題の意義が貧者對富者の爭でなくして、個人對社會の爭である。若しくは、更に廣くいへば理想對現實の爭である。我等が個人の理想とする所と、之れを制縛する現實社會の約束と、到底相容れざるが如き現勢を如何に解釋すべきか。此の衝突を調和し得て而も社會的生活を持續し得るの方法があるとすれば、此の如き社會は如何にして

實現するを得やうか。若しくは人生は到底現實の社會的生活を拋棄する外、其の最高理想に近づくの途は無いのであらうか。此の疑問に觸着するに及んで、始めて精神的社會問題に到達したものであらう。精神的社會主義も此の問題に連ならなければ無意義である。

さて此の種の社會問題の歐洲文藝に入り來たるや、其の結果は解決で無くして第二の疑問であつた。といふ意味は、夫のイプセン以下歐洲の自然派文藝は、斯くの如き問題に解決を與へたと信じて實は何の解決をも與へず。今日から見れば問題的文藝は文字通りの問題的文藝であつた。是等はたゞ問題を一層強く言ひあらはして、其の自然の傾向の赴かんとする所を極めしめたといふに過ぎぬ。語を更へて言へば、上の如き社會問題、道德問題、人生問題の奥に、何物かの別な目的があると感せしめて、さて此の目的物は何物であらうかとの第二の問題に達せしめた。

自然派の問題的文藝は、當然の傾向として、概して個人の絕體的自由に同感するの度が、社會の制約に同感するの度よりも強かつた。其の結果は個人をして社會といふ同伴者から引き離すことゝなり、茲で所謂個人の寂寥といふ第二の苦痛を生じた。此の個人の寂寥といふ第二苦痛を脫せんがためには、個人はさらに其の單獨絕對を破つて何物かの新しき同伴者を得んとする。或は之れを宗敎的要求といふも可、或は之れを理想的要求といふも可、或は之れを精神的要求といふも可、將た或は之れを一種の新社會の要求といふも不可ではあるまい。自然派の後に動き來たらんとしつゝある思想文藝が、現に此の方向に之きつゝあるか否かは別問題とするも、其の必ず之れに觸るべきものであることを、予輩は信ずるのである。(明治三十九年三月)

衆俗的勢力と新聞雜誌

歐羅巴の近世社會、ことに此の十九世紀以後の社會に最も著しい一現象は、下層階級の勃興といふことである、とは能く人の唱ふる所である。夫の佛蘭西革命が歐洲の天地に齎らした使命は實に是れであつたともいふ。而して是れと相つらなつて、夫の亞米利加主義の普及と共に、多數衆俗の勢力といふことが、また近世社會の顯著な一現象となつた。デモクラチックの勢力は、社會のあらゆる方面に影響を及ぼして、延いて遂に文藝の上にまで及んだ。由來衆俗の批判といふことが果して如何なる程度まで文藝上の正しい判斷と相交渉するかといふことは、一つの問題であるが、假りに衆俗的好尙がよく文藝中の不朽の生命を見出だす役を勤めた例はあるとしても、然もなほ之れが他の一面には眞の好尙を蹂躪して、之れを墮落せしむることもあるは、何人も否み得ざる事實であらう。

多數衆俗の趣味好尙には、勿論社會的に見てそこに意義がある。また實際社會に對しては、是れが結局優者勝者であるの事例も拒むことは出來ぬ。唯文藝が概して此の以上に立つて、之れを提撕し行くべきものであることは、多く言ふを俟つまい。

英國の新聞雜誌界の歷史を觀ると、此の消息が疾くに其の中にあらはれてゐる。今の英國でレギウ即ち評論雜誌の最も古く且つ著しいのは、言ふまでもなくエヂンバラ、レギウ續いてはクオタリー、レギウであるが、是等は孰れも十九世紀の始めに起こつたもの、引き續いて夫のブラックウッドス、マガジンが出るに及んで茲にマガと通稱せられる、いはゞ文字通りの雜誌とも名づくべき者が始めて見はれた。

マガとレギウとの相違は、一言以て掩へば、一は人を敎へんとし、人を導かんとする、他は人氣に投じて人を娯しましめんとする。されば當初こそは、マガと言ふ語に一種の輕蔑の意も籠つてゐたが、併し此の方が結局衆俗的であつた。價を廉にする、讀物をたゞ一時おもしろくと心がける、筆者に聲譽あるものを集めて署名制を採る。凡て多衆の意を迎へるのを主眼としてゐた。されば結果は遂に成功で、今や動かすべからざる社會の一機關、一勢力となつたのである。之れを雜誌界に於ける敎導主義から娯樂主義への僊移、乃至小數聰明者主義から、多數衆俗主義への僊移といつてよからう。

新聞紙界にありては、最近十數年の間に一革命があつたと言はれる。それは夫のデーリー、メール及びデーリー、エキスプレッス等の所謂半片新聞(はーふぺんにー)、すなはち小新聞が初めて起こつて、是れが新聞紙界を蹂躪するの形勢を示したからである。而して是れまた最も明かな衆俗的傾向の發現で、タイムス、モーニングポストなどの、格の古い新聞紙が、一言以て時の內閣をも動かさうと志した時代とは、社會の狀勢が變つて來たのである。今でもタイムスなどの大新聞紙が、敎導の方面に於いての大勢力であることは言ふまでもないが、同時に多數衆俗を後へに率うる半片新聞が、一方には惡く言はれながらも、尙且つ居然たる社會の勢力であることも看過してはならぬ。最近時に及んでは、デーリークロニクル、デーリーニユースの如き新聞すら漸次其の大新聞たる地位を保ち兼ねて、少なくとも價に於いて先づ半片新聞に化してしまつた。唯注目すべきは

將來斯くして幾ばくまで能く其の內容に於ける舊態を保ち得るかといふことである。

但し實際に於いては、今日では、もはや大新聞と小新聞との間、內容上あまりの相違は無いやうになりかゝつてゐる。思ふに實際界の眞理はやはり兩者の中間にあるのでは無いか。

我が國でも新聞紙界の近狀、乃至新たに出る趣味、娛樂方面の雜誌などに鑑みて、同じやうな傾向が見られる。新聞紙界雜誌界の前途は頗る興味ある研究ものである。（明治三十九年四月）

新精神的傾向と教育

最近數年の日本の社會で、最も著しい變化をなしたものゝ一つは、靑年思想界の好尙である。而して其の最好目標は、彼等の多數が切に要求する讀料の如何といふことである。所謂ハイカラー趣味といふもの、嘲罵の中から出て、今日では既に動かすべからざる靑年趣味の基礎の一部となつた氣味ではないか。之れを數年前の事情に思ひ比べて見ると、時勢の推移の實に急且つ大なるに驚かざるを得ない。

ハイカラー趣味といふに好ましからぬ意味があるならば、別の名を用ひても宜しい。要するに此の一種の傾向若しくは好尙は、ウエスターンである、文藝的である、精神的、就中情的である、而して動々もすれば佛人のいはゆるファン、ド、シエクル即ち世紀末の氣勢に感染してゐる。

明治二十年前後に一度歐化熱といふものが日本に起こつた。併し彼れは專ら物質文明の輸入から生じた、外形的の歐化熱であつた。之れに反して、今回のは、若し之れが歐化熱といひ得べくんば、精神的方面で歐化熱である。就中文藝宗教の方面に於ける歐化熱である。又歐化といつても、其の歐羅巴は過去の歐羅巴でなくつて、實に現在目前の歐羅巴である。而し

て此の事實を等閑視する者は悉く路傍に遺却せられ行かんとする形勢を示して來た。むしろ驚くべき變化ではないか。たゞ斯やうな狀勢は、彼れにあつては自然の順序とも見られ、また、之れが自發するだけの根柢もあつての事であるが、我れに於いては、强いて暖室の中で咲かした花の如く、弱々しい所のあるを免れぬ。動々ともすれば作り聲になる、輕薄である、嫌味を帶びる、衒耀にもなる。即ち之れが態度の上に深切誠實の氣を缺いて來る。此の、態度上の批難がやがて所謂ハイカラーといふ語の嘲笑の源でなくてはならぬ。要するに思想界に於ける近時のいはゆるハイカラー趣味といふものは、之れが態度の外、其の內容に於いては未だ明かに批難の理由を自證しては居らぬ。

されば、若し晩近歐羅巴の思潮、ことに其の世紀末的思潮の根本に批難の理由を有してゐるものが、之れを揭げて攻擊の地に立つ場合は可、また我が日本は特に西歐の思潮に化せらるべからずといふ哲理からでも來る批難なら、それも不可とはいへまいが、獨り夫のハイカラーと呼ばるゝ一部の態度を忌むの故を以て、直ちに其の內容たる新傾向そのものをも排除し去らんとするが如きは、無謀の至りであらう。

此の滔々として押し寄せる靑年社會の新潮勢を、微々たる學校敎育の力なぞで防ぎ止めやうとは、誠に大局の見えぬ話である。例の消極好きの、用心深い敎育家連は、早くも其の得意の奥の手を出して、退却安全の御符を播き始めたといふ。哲學的の遺書をして自殺したといふ女學生があれば、もう其の學校の生徒は哲學書類を讀んではならぬことになるさうだ。小說が戀愛を書くからといつて文學は女學校の門を通さぬことにしたものがあるさうだ。新聞紙も世間の雜報を載せてゐる限りは讀ませぬといふ。同じ論法で押せば、此の世間がそも／＼、讀むどころの沙汰ではない、哲學や、文學や、新聞にある通りのことを實現して見せてゐるのだから、今に靑年男女は一時世間から追ひ拂つて置くのが敎育の最上法だといふことにな

るであらう。滑稽の至りではないか。一方には賢明な人々が斯やうな妙案に腦漿を涸らしつゝあるあひだ、他方には、丁度其の逆な潮が、小さな垣や堤防には頓着なく漲り蔓つて行く。之れを傍から觀てゐると、さながら一幅の諷刺畫に對するやうな氣がする。此の種の教育家などは、みづからクラウンになつて、諷刺劇を演じて見せて吳れるものらしい。

之れを要するに利弊ともに目下の精神的新潮は到底避けんとして避けられぬ、言はゞ人生必至の一經過である。弊があるなら、それは通り抜けなくてはならぬものだ。回避して逡巡して無難に濟まさうなぞと、そんな姑息な料簡で、それも一人や二人ならいざ知らず、目に餘る天下の青年が何で救はれよう。此の必至の勢に見据がつかぬとすれば、目先の利かぬ人達である。それとも難所と見たら後へ下れとばかり教へるか、頼もしくない教育家である。人生訓練の必要は何時でも其の積極の側にある。何せ進んで其の難所を乘り越える訓練を與へないのであらう。志操堅實の人間がそんな不自然な、消極的な教育法で出來上つたら見物である。人の子を賊ふものは却て此の種固陋の教育家である。（明治三十九年四月）

教育と精神的革新

文部大臣牧野氏が教育界の時弊に關する談話といふものを、「國民新聞」紙上で讀んだ。其の學生風儀の頽廢を數へた箇條は、一昨日の本紙片々欄にも見えた如く、第一華美浮薄に傾き、第二空理悲觀に陷り、第三不誠實にして義務に忠實ならず、第四職業地位のために學問し、第五男女間の關係正しからず、といふのである。是れは如何にも事實であらう。併しながら此の事實の解釋、すなはち斯くの如き現象が含んでゐる意義は何であらうか。

牧野氏は上の如き時弊を以て、精神教育の弛廢に基づくとした。就中學校に於ける德育方面の不備に基づくとした。また一昨日の「讀賣新聞」の社説は、之を以てむしろ文部當局に人無かりしの致すところと解した。

予輩政界の細故に通せず、また現在の國民德育に關係薄きものに取つては、此等兩樣の解釋が如何なる程度まで眞實を得てゐるかは不判明であるが、予輩の見るところを以てすれば、前掲の諸事實が所有してゐる意義は、單に學校教育の不備、乃至教育政務者の不能といふが如きことから來るものでは無いやうである。もつと深い理由で無くてはならぬ。

五ケ條の中でも、第三の、不誠實不忠實といふが如き氣風は、必ずしも學生間にのみ著しい現象では無く、言はゞ今の我

が文明に附屬してゐる一弊とも見られる。是れは全然の弊害たるや勿論であらう。されば社會經營の事に當る人が、其の一方法として學校の德育に其の救濟策の種子を蒔くのは異とするに足らぬ。

之れに反して他の諸箇條、浮華とか、空理悲觀とか、職業の爲に學問をするとか、男女間の不正關係とかいふことは、其の事全部が罪惡とは定まつて居らぬ。一時の弊害として之れを全排し去らうとしても、然うはならぬ性質のものでは無いか。是等の事實が提示してゐる眞理の方面を無視してかゝる以上、之れが救治策は決して成功する望は無い。

浮華といふ中には、風俗に華美を好むといふことゝ、薄志弱行、または不誠實不忠實といふことゝを合併した意味があらう。併しながら不誠實乃至薄志弱行といふことが華美といふことの必至の結論では無い。不誠實、薄志强行は罪惡であらうが、華美は罪惡とは定まらぬ。或る時期の文明には、實に已むを得ざる一現象として好尙の華美といふことが生じて來る。今の學生の好尙が華美であるとすれば、其の底には必らず意義があらう。

また空理悲觀といふに就いては、最も當事者の注意を要する。空理とは、例へば夫のアングロサクソン民族の、常識を貴び實際を貴ぶといふが如きに對した語か。さなりとすれば、對岸、獨逸民族の、好んで高遠な理に馳せて而かも之れを實人生と隔離せしめず、以て今日の繁榮を保つ所以は如何。若しくは空理とは夫のラテン民族の、動ともすれば極端なる理論に走つて實際を閑却するといはれるたぐひを指すか。斯くの如きは或は日本人と佛蘭西人との類似を說くものが數へんとする大和民族の一特色かも知れぬが、併し、さうと假定しても、それは現在にのみ發生した弊害では無くして、民族性の發現といふに歸する。予輩は現下の學生間に見える特殊の現象として、むしろ彼等が高遠の望に馳せ、哲學的宗教的ならんとするの事實を指摘しやう。而して牧野氏の指すところも亦之れにあると見たい。さすれば此の事實もまた遙かに敎育上の弊とのみ

は見すごされぬものであらう。

職業地位のために學問をするとは、是れらこそ純教育の方面に關した弊害であらうが、併しそれすら一面には我が社會生活の狀勢と相俟つた意義がある。是れに就いては予輩は他日別に言ひたい事がある。

若し夫れ男女學生間の關係に至つては、流弊はたしかにあるであらうが、さればと言つて直ちに其の事全部を禁壓することは到底出來ない話であらう。要するに此の部面の弊害は程度問題に歸しはせぬか。其の事みづからには、茲にも必至の眞理が含まれては居らぬか。

之れを總括するに、青年學生が華美を喜び、高遠の理に趨き、男女の關係の自由を恣にする。是等の事實の奥には我が精神的文明の廻轉機といふ一大意義が潜んで居るのではないか。思ふに西洋の衣食住を取り、西洋の政治法律を取り、西洋の工藝學術を取つた日本の社會は、當然の結果として、精神的方面にも此等物質的方面の變化に反應する變化が起らなくてはならぬ。

其の變化は縱し國民性の根本をば動かさぬとしても、必ずそこに若干の變形が生じなくてはならぬ。而して近日の我が社會、中んづく其の青年社會に於ける種々の事情を綜合して考へると、上の如き精神的變動が今將に起こりつゝあるのでは無いかと思はれる。是れ、言はゞ精神界に於ける一種の革命運動である、必至不可避の大勢である。前條數へ來たつた諸事項の如きは、畢竟此の大勢の發現ではなからうか。

無論餘弊はそこにある。教育事業に與かるものが事毎に其の弊を少くせんと工風するのは、當然の務であらう。併し上の如き根本の意義を胸中に諒として、是れで一切の方策を調攝せざる限りは、其の方策は生命を逸したものとなるであらう、

自然の大勢に逆行して自ら敗るゝものとなるであらう。（明治三十九年六月）

重て新精神と教育とを論ず

西曆千八百八十二年、英國オックスフォード大學の一生は、同大學に於けるエスセチシズムに就いて一論文を公にした。蓋しエスセチシズムとは丁度此の頃歐洲の文藝壇に唱へられてゐた、尙美主義とも譯すべき一種の傾向である、が茲では同大學の學生間に當時相幷立して軋りあつてゐた二つの潮流の一つ、言はゞ學生氣風の一種を指したものである。他の一つは之れをアスレチシズム即ち運動主義とも名づくべきものであつた。語を換へて言へば、尙美派と尙武派との軋轢である。而して此の尙美派たる所の一生が論じた趣意は、曰く「近來此の學校で頻りに尙美派を攻擊すると號して暴力を振ふものあるのは甚だ不都合である。優美な色の襟飾を用ふるとか、孔雀の羽をひけらかすとか、アポロ神を部屋に勸請するとか、教會堂に出るに香水をつけるとかいふことを、凡て學校の體面を傷つけるものとして擯斥し、之れを爲すものあれば其の寄宿してゐる部屋に暴れ込む等のこともあるは、何事ぞや。尙美派に之くも、尙武派に之くも、皆ひとしく個人の自由ではないか。尙美派が殊に大學氣風に害があるといふ理由は何處に存するぞ。」といふのである。

又尙武派は頭髮なども殊さらに短く刈込んで、日本ならば衣骭に到り袖腕に到るといふ風で校中を押し廻はしたといふこ

である。而して之が今から二十三四年前の事である。之れを我が學生界の狀勢に思ひ比べて、甚だ興味ある類似ではないか。

さらば斯くの如き歷史ある彼の地の學生が今日の狀態は如何といふに、其の風尙に於いては、むしろ尙美派の勝利と言つてよからう。必ずしも華美とは言はぬまでも、決して粗野な風を以て腕力的豪傑を裝ふの氣味は無い。所謂紳士の風に加ふるに、青年の自然の發相たる華麗豐富の好みを以てするのが、彼等の概しての傾向である。之れを我が邦に移せば、即ち所謂ハイカラーの好みとなるのであらう。ハイカラーといふものに今は複雜な意義が生じて、其の一面に種々の病弊を伴ふと共に、他面には西歐の精神的文明の滔々として流れ込むにつれた、好尙の必然の變化といふ意義をも含んでゐることは、我等が嘗ても言つた通りである。

社會に於ける感情の要素を蔑視し、快樂の要素を忌避し、富麗の要素を厭惡して、ひたすらに意志的、ひたすらに禁欲的、ひたすらに消極的ならんとする在來の東洋思想脈に、多少たりとも變化を與へんとする現下の我が文明は、到底偏狹なる往時の勤儉尙武的精神を以て之れを指揮し得るものでは無い。感情の眞の意義を認め、快樂に正當の地位を許し、以て社會の色彩をして一層富麗ならしめんとする積極的氣象こそ、今日の我が國民の元氣を養ふ根本義でなくてはならぬ。固陋なる嚴刻主義、枯禪主義、禁遏主義を取つて、此の文明過渡の非常の際に立てる青年が思想感情の自由を壓制せんとするものあらば、其は進步の敵として反抗せらるべきものであらう。

我等は前回の月曜文壇で文相牧野氏の教育談といふものを評したが、其れに引きつづいて同氏の訓令といふものを讀んだ。而して之れに對する世評のかず／＼をも聞いた。大體に於いて我等が牧野氏に望むところは、根本の生命を如上の寬宏雄大なる規模に托することを忘れぬやうといふ一點である。彼れが如き訓令は、其の實行の末に於いて、屹度嚴刻主義に墮して

反人情不自然の難行を青年に強ひ、其の花の如く火の如き活氣を銷沈せしめる。又屹度禁遏主義に墮して青年の好尙から衣服調度の末にまで馬鹿々々しい干涉を試みる。また屹度尙武主義に墮して文藝を輕んじ、精神を輕んずるの氣風を增長せしめる。是れが從來の事例から推した形勢である。我等は今回の事の成行如何に注目することを忘れてはならぬ。

夫の訓令箇條の中、我等が最も心元なく感じたのは、圖書禁遏の件である。有害無害の判斷は一に當該敎員なり校長なりの見識にあるとすれば、此の一令が齎らし得る慘毒は今から想像するに難く無い。警視廳なり內務省なりが一般社會に下す規令ならばまだしもであらう。文部大臣が學校や敎育者に下す訓令として、圖書禁遏などいふ苛棘の氣、壓制の臭ある不快の語を用ひたのは、我等の遺憾とするところである。（明治三十九年六月）

新宗教家は實感情小說を作るべし

予輩は文字ある今の宗教家諸君が詩を作り、小說を作り劇を作らんことを望むものである。

凡そ精神界の事、理を人に傳ふるは難事とも覺えぬが、感情を人に傳ふるは容易の業にあらず。人生恐らくは我等の活きたる感情を最も痛切に表白し傳達するに於いて、文學の右に出づるものはあるまい。否、文學藝術を離れては、感情表白の方法は一も存せぬといつてよい。更に之れを轉倒していふときは、感情の表白は凡て直ちに文藝である。演說說敎の類といへども、活きて人を動かすに至れば、そこには必ず感情の色彩香芬が出て來る。此の時、其の演說や說敎やは、文學に交觸したものである。はた學術史傳の文章といふとも、人を動かす邊は文學と生命を同じくする。感情の表白は常に文藝である。

而して宗敎は畢竟感情の事である。宗敎の發現がおのづから文藝を成すは、異しむに足らぬ。されば自ら內に湛うるの宗敎はしばらく措くも、之れを外に發して他者に傳へんとするに及べば、或る特殊の標徵に依る場合の外、其の人は必ず如何なる形に於いてか文藝の補助を待たざるを得ない。此の點から一步を外らせば、文藝と宗敎とは實に一またぎである。

宗敎は或は情の外さらに理の眞實、若しくは少なくとも理の不矛盾を要するかも知れぬ。之れに反して文藝は必ずしも理

の價値を問はぬ塲合があり得る。併し情は必ず眞實で無くてはならぬ。情の眞摯誠實といふことに於いては、文藝と宗敎と全く相合するではないか。

我が文壇に假情假感といふ語が實情實感といふ語に對し用ひられるにつれて、文藝上に少なからぬ誤謬を誘致したと見えるのは、情の眞實熱誠を輕んずるの風である。文藝はよし遊戲であつても、幻境であつても、其の遊戲たり幻境たる間の情はそれみづから眞實でなくてはならぬ、絕體最上の價値でなくてはならぬ。比較商量を待たずして我れを滿足せしめ且つ我れの全意識を占領して顧慮疑惑の餘裕なからしむるものでなくてはならぬ。是れが實に文藝と文藝ならざる娛樂との分かれ目である。而して斯の如き眞實の情を文藝に寓せんとするは、決して彼の戲作三昧の徒の能くする所で無い。作者自身の感情が之れと同一の眞摯熱誠を有して居なくてはならぬ。文藝上の著作といふことは此の點から見ても一大勞苦である、作業である。決して遊戲道樂では無い。

予輩は想ふ、今の文壇に最も要するものは感情の眞摯誠實といふことでは無いか。

されば此の缺陷を充たし若しくは此の風氣を新たにせんが爲めには、最も多く眞摯たる實感情を胸に蓄ふる人をして、進んで其の鬱勃を文字に託せしめて見たい。

予輩は敢て實感情といふ、是れ最も假感情に累せられたる現下の文壇に適切の語ではあるまいか。社會、宗敎、道德、政治、いづれにてもよろしい、望むところは實の感情を引いて文學の野に漑ぎたいといふのである。

而して現下の我が邦に於いて、最も此の種の感情に關係深く、彼等みづからも亦た然か信ずると見えるのは、宗敎方面の人々である。勿論茲で宗敎方面といふのは新與の宗敎的機運に與つてゐる人々を指すのである。予輩は此の種の人々に文字

の才あるもの多きを見て、之れを文學の庭に請じやうとするのである。

予輩はまた文學といふ、小説を作られよ、詩を作られよといふ、何となれば、諸君が理を說き、實訓を示さんとするとき、却つて其の實理に累せらるゝの氣味あるを見て、氣の毒の情に堪へぬからである。理を離れ、事實を離れられよ、而して其の情の眞實を保證せられよ。則ち諸君は文藝に入つて實感情の自由を得ると共に、文藝は是れによつて一味淸新の氣をも加へ得るであらう。（明治三十九年五月）

精神の强弱と國民的趣味

人間には心的精力（メンタル、エナージー）といふものがある。而して此の精力の消長が結局專ら血液の分量及び其の循環の具合によるものであるか否かといふことは、未決の問題であるとするも、或る病的な場合の外、我等の肉體の方面に見はれてゐる生理的精力が、必ず常に心的精力と比例して行くものであることだけは明白な事實のやうである。予は心精力と肉精力との兩元背信をば信じ得ぬなり。而してまた、此の心精力の基礎たる生理的精力の强弱は、多く衣食住の狀態によつて變ずる。西洋人の生理的精　が概して日本人の其れよりも强大であるのは、主として長い間の衣食住、中にも其の食物の關係に基づくものでは無いか。勿論世には特に菜食の効を說くものもあるが、ヴエゼタリアンの効能はどうも人體の消極方面に對するものらしい。公平な事實は矢張り肉食が一層多く人の精力を强くするといふに歸する。

斯やうにして生理上の關係に根據を有する我等の精力は、指導の仕方一つで樣々の結果を生ずる。また其の人の健康狀態の種々なるに從つて利害のいづれともならう。或る種類の身體には、精力の强大といふことは却つて不健康の因となる。斯かる場合には、むしろ强い食物を廢して精力を減少する方が一層健康である。前に消極的といつたのは即ち是れに外なら

けれども消極といふには今一つ精神上の重要なる意味がある。肉體は必ずしもさう不健康で無い普通の人でも、凡て精神は澁滯を嫌ひ葛藤を嫌うて、疏通暢達を喜ぶの性を持つてゐるから、此の性を成さんが爲め、消極的に精力を抑へて周圍との衝突を避けんとする。所謂心の平和を樂しまんとするものが、一つは進んで一切の葛藤矛盾を征服し了つた所に安立を得んとし、一つは自から退いて葛藤矛盾の力を鎭めた所に安立を得んとする。其の後者は即ち是れであらう。樹下石上の人、葷酒を斷ち木實蔬菜を食とするの敎には、氣候風土の關係以外、また如上の意味が存して居るに違ひない。

同じ原理はまた趣味文藝の上にも現はれてゐる。文藝といひ趣味といふものゝ至極は、結局如何なる形に於いてかの調和、統一、圓滿である。雜多の感想が去來する、雜多の事象が起伏する、而もそれらが何れの點に於いてか圓滿統一の姿に融合する、文藝の妙味は其所から生ずるのである。蓋し調和、統一、圓滿はやがて精力を暢達して澁滯せざる方式である。文藝の悅樂も畢竟は此の性の滿足から生ずる。

然るに雜多な事象感想は、其の雜然多樣の度が大なれば大なる程、統一して全圓の相を帶びしむるは困難である。此に於てか精力の旺盛なるものは進んで此の困難を征服した所に美妙の悅びを得んとすれども、精力の弱小なるものは、寧ろ其の雜然多樣の度を減じて、小變化の上に小統一を成就せんとする。小と大とは異なるも、其、統一に達したる悅びは一であらう。斯の如くして文藝にもおのづから二樣の傾向を現ずる。

精力の強大に應ずる文藝は濃厚豐富の調を帶び、精力の小弱に應ずる文藝は淡雅洒脫の調を帶びる。西洋の文物に一通する重なる調子はすなはち前者で、後者は我が茶味、禪味、閑寂の味等に共存する一特徵である。

固より趣味の修養ある階級では、濃淡自在、何れをも味ひ得やうし殊には節奏變化の理からして濃味の後に淡味を喜び、淡味の後に濃味を欲するは自然の情であらう。且つ同じ人の一代にあつても、青春の精力と老成期の精力とは度が違ふ。されども之れを國民全體の嗜好の調子から言つて、上の如き區別あることは爭はれまい。

思ふに我が國民全般の嗜好の調子は從來淡雅精微にあつたには相違ないが、此の方面の相違は早晩變化しはすまいか。而して其の變化の根據は我が衣食住の變化、從つて生理的狀態の變化に存するのでは無からうか。成程西洋の思想感情は今盛んに這入つて來つゝあるが、是れだけでは右にいつた我國民的嗜好の調子は容易に動くまい。たゞ生理的狀態、就中その精力の狀態に變動を來たすことがあれば、其の時が國民的嗜好の變ずべき端緒であらう。（明治三十九年五月）

近代批評の意義

眞理と快樂とは我等人生の闇の荒野にさまよつてゐる姉と妹とである。互ひに呼びかはす聲は相聞きながらも、絶えてめぐり逢はず。逢へりと思ひしは假り寢の夢。何時かは再び相抱かう。思ふに人の世一切の努力は皆此の一つの願ひである。批評も亦た其の數には漏れぬ。

さて玆に批評といふのは專ら文藝の上の批評を指す、狹い意義である。或る文學美術の作品を取つて之れに或は說明を與へ或は評價を附するそれが文藝上の批評である。

而して批評の意義といふのは、就中其の近代批評の意義といふのは、是れが時代の遷移につれ近く十九世紀の末に於いて如何に目的風格を變じたかといふことである。勿論我が過去の文藝壇には、西洋のそれに對當し得る程の批評といふ者はなかつた。從つて其の歷史的變遷といふが如き者にも、取り出して論ずべき意義は無いのであるが、西洋に在つては文藝の他の一方即ち創作の方面と相幷んで、批評も盛に行はれ、また批評そのものに關する議論なども屢々繰り返されてゐる。我が文壇でも近時批評無用有用の論などが盛んであつたやうに記憶する。支那では流石に文學の國であるだけに、古くから批評

が可なり盛んであつた。夫の六朝あたりから起つて唐宋、就中宋以後に榮へた修辭、詩話、文話の類、其他畫話、金石談の如きから、金元以後には金聖嘆等が小說批評の如きすら出て來た。古人をして宋に詩なくして談詩ありといはしめたのを見ても、其の如何に批評の盛であつたかは推し測られる。唯此等斷片の批評を全體の上から見て、そこに一貫した意義乃至傾向といふやうなものを見出だす研究が缺けてゐたのである。されば本論は自然西洋の批評を中心として立言することゝなる。但し今は敢て科學的に批評といふものゝ定義を下さうとするのでは無い。批評は勿論有用である。古來批評といふことありしがために、文藝が其の眞價を發見せられ、其の生命を永くせられ、其の內容を展開し增加せられたことは明白な事實ではないか。

また批評そのものゝ定義解釋についても、專門的に論ずれば未決の大問題が殘つてゐる。前に言つた文藝上の作品を取り扱ふ二方法、即ち一はそれが說明一はこれが評價についても、或は前者が主であるといひ、或は、後者が主であるといふ。而して此の爭論を解くのは決して容易で無い。實は批評といふものゝ根本問題乃至批評の變遷原理は此の二句の消長にあるといつてもよい。

玆で文藝上の作品に對する說明といふのは、何も訓詁註解の意味では無い。其の作品の有してゐる、形式や中身やの生命を、或は分解し、或は綜合して解說するのである。又評價といふものは、文字通りに其の作品の價値の高下を何等かの標準尺度に照して判定するの謂である。

斯やうに說き去れば何事も無いやうであるが、此の二命題からして批評は申すに及ばず、文藝全體の運命を左右するやうな疑問をも提出することが出來る。吾人は先づ下に批評の二面について實例を示し、論の出立點を一層明にして置かうと思ふ。

西洋の批評史の中で最も有名な出來事の一節は十八世紀の中頃獨逸で起つた夫の美術史家ヴヰンケルマンと批評家レスシングのラオコーン論であらう。ラオコーンとは今伊太利羅馬の法王殿附屬の一博物館にある彫刻像の名で、ラオコーンといふトロイの僧が、親子三人大蛇に取り卷かれて死なんとする斷末魔の苦惱を現はしたもの、よく寫眞版になつて我邦にも來てゐる。此の彫刻の出來た年代は或は西洋紀元前五世紀ともいひ或は同一世紀だともいふが、蓋し後說が正しいやうである。即ち世は希臘の末、將に羅馬時代に移らんとせる頃で作者はローデヰアン派といつて、小亞細亞沖のローヅ島に根據を有する一派の美術家が三人の合作、十六世紀にチチュスの温泉場から掘り出された。

而して世界近世の最大彫刻家といはれるミケランゼロは當時之れを見て驚嘆のあまり「藝術の不思議」と叫んだといふ。思ふにラオコーン像は、此の大彫刻家が一呌の批評によつて先づ世の注意力を吸收し得たこと幾ばくであらうか。言はゞ此の一句の批評は今や此の作品の威嚴の源となつてゐるのである。

さて此の彫刻像は博物館中では同じく有名な、世界に二つとないベルヴェデヰアのアポロと相隣して、何れも別格の取扱を受けてゐる。傳說によるとラオコーンはトロイ人のために希臘の神子ブチューンに捧げ物をせんとしてアポロの怒に觸れ、海から上つて來た二頭の大蛇のために、先づ二人の子を聖壇の前で捕られ、之れを助けんとした父みづからも遂に取り殺されたといふ。

彫像は即ち此の親子三人が大蛇に取り卷かれた瀕死の瞬間を刻んだもので、其の大蛇に締めつけられる七轉八倒の苦みを現はしたのである。中央に立てるラオコーンが體は、そつて、右の手に大蛇の胴を高く揭げ、左の手は將に腰のあたりに咬み入らんとする首を摑んで、體軀手足の筋肉の怒張に、非常なる苦鬪の力を表し、顏は絶望の眼と呻吟の口とに限り無き苦痛

を藏してゐる。

斯やうなラオコーン像に對して、初めて有名な評を下したのが獨逸のヴヰンケルマンで、其の名著『古代美術史』は實に美術研究の上に一期を劃したもの、ヴヰンケルマンみづから、希臘美術に精通して、秀抜な鑑識力を有した人であつた。彼れがラオコーン論は「繪畫及び彫刻に於ける希臘作品の模倣に就いての說」と題する評論文中の一節で、今は其の美術史の末に採刊せられてゐる。「浪の表は如何に荒れ增さるとも底ひは寂然として騷がざる大海の如く希臘の彫像に見はれし表情は、如何なる感情に於ても常に偉大にして節制ある精神を表出す。ラオコーンの顏面に見ゆるものは此の精神なり」といつて、啻に顏面の表情のみならず、全體の筋肉に漲りわたつた大苦痛の狀を說明し、希臘人が如何なる苦痛をも冷靜沈着の大忍耐を以て迎へる偉大の性格こゝに現じたりと讃美するのが其の趣意である。

然るに獨逸國民文學の先聲者レッシングは、上の如き論を以て慊たらずとし、『ラオコーン』と題する長論文を公にして、詩と彫刻との限界を論じた。蓋し同じオラコーンの傳說は、羅馬の詩人ヴージルも其の作『エーチイド』に於いて使用してゐる。されば論はおのづから兩者の比較に移つて、詩が言語を以て現ほし得るところは轉瞬に遷り行く感情の動き方であるといふ。而して彫刻の爲し得るところは此の遷り行く感情の一轉瞬を石に附するのであるから、刻々に動くべきものが却つて定着したものになり、同一感情が其のまゝ其處に殘留し永續することゝなる、即ち不自然の狀態となる。從つて其の力は弱はり其の性質は變ずる。今ラオコーンの像が斷末魔の大苦痛を見はしながら、尙且つ一味の平靜を其の中に有するは、畢竟彫刻の現じ得る感情が其の制限度に達したからである。彫刻では是れ以上の熱烈な感情は表出せられないのである。必ずしも希臘國民性の然らしむる所ではない。といふがレッシングの趣意である。

予は此所で此の兩說を是非しやうといふのでは無い。其孰れが是としても、面白い說明である。此等の批評ありしが爲にラオコーンといふ一藝術品は幾層倍味ひの源を豐にし得たか測られまい。今日では此の一團の彫刻像から如上の批評を分け去ることは出來ぬ。此の批評は殆ど作品そのもの丶生命の一部と化し了つたといつても差しつかへはあるまい。我等が此の像を打ち仰いで見てゐる刹那ヴヰンケルマンやレッシングの言つた所を想ひ起こして、成程斯うもあるか、あ丶もあるかと思念するときは、即ち趣味の分量がそれだけ豐富になつたのである。而して此の種の批評は實に說明的批評である。ラオコーン像が有する生命を、推理を交へて說明せんとしたものである、取り廣げて其の成分を解說せんとしたものである。

之れに反して評價的批評とは或る既定の尺度標準に照して作品の價値に高下を附するものをいふ。我が舊時の歌俳諧の批評など丶いふものには是れが多い。短歌は必ず二段切れで無くてはならぬといふ規則を設ければ三段切の歌は幾ら面白いと思つても右の規則に合はぬから、腰折れとして、價値の低いものとする外は無い。俳句には必ず季を入れよといふ以上は、若し季の無い句で面白いのが出來ても、それは取るに足らぬものとせらる丶であらう。西洋には人も知る通り古來劇の三一致といふ法則があつて、時の一致、事の一致、處の一致を缺いた劇は價値の少ないものとせられた。他の人々が許して世界の最大戲曲家とするシエークスピーアも佛蘭西の此の派の批評家には上の理由で野蠻の作と罵られた。

佛蘭西近世の文學史で最も面白い一節は、夫の十九世紀の初めがた史家がローマンチシズムと呼ぶ歐洲共通の新文藝の始めて巴里に凱歌を揚げた時である。由來佛蘭西人の爲す所は概して革命的激變的であるといはれる。頃は千八百三十年二月廿五日の夜、あらゆる戰鬪準備を整へて鐵の如き決意を合言葉に、テアターフランセースの劇場に新文藝の狼烟を擧げたものはヴヰクトル、ユーゴーといふ若い詩人であつた。作は『エルナニ』。夕方から新派に味方するものは後ろや二階の席あた

りにひし／＼と詰めかける。平土間、うづらには當時文壇の主權を擁してゐた反對派クラシシズムの人々が陣取つてゐる。而して幕は明いた。ユーゴーが思ふ圖は外れず、開卷第一に舞臺の上なる女主人公が戶の音に耳を傾けながら唱ひ出だす句は、ことさらに巧んで舊來の格を破つた跨ぎ句であつた。當時の古典的な好尙には、詩の句は必ず一句の境が一意の境であつて欲しい。斯やうにすればおのづから句法が整然として、明晰典雅の調を具して來る。けれどもユーゴーは之れを避けた。整正を破り典雅明晰を破つてそこに格以外、調以外の激越の音を求めんとした。一つは是れがやがて舊派に對する第一の矢文であつた、挑戰狀であつた。舊派の面々も、其の金科玉條とするものを無視せられて、何條默して已まう。忽ち矢聲は場の一隅に擧つた。身方も豫期したることと、関をつくつて之れに應戰し、玆に『エルナニ』を中に据えたる新舊二思潮の決戰が開かれた。而して終宵熱罵怒號の聲休まず。斯やうにして此の劇は遂に四十餘回を重ぬるに至つたが、結局最後の勝利は新文藝の手に歸し、新しい趣味は革命的に佛の文藝壇を席捲し了すると共に、ユーゴーが第一流詩人の地位は之れによつて固まつたといふ。此の時古典派が擧げた第一の叫びを解釋すれば、曰はく詩は必ず句意共に切るゝを法則とす、之れに合せざる作品は劣等なり。といふに歸するであらう。之れを評價的批評といふ。

說明的と評價的、此の二面の交代によつて、近く十九世紀歐羅巴の批評は其の端緒を開いたといつてよい。歐洲の十七八世紀は人も知る如く佛蘭西文藝全盛の時代で各國とも多少其の感化を蒙らぬは無いといふ狀勢であつた。而して當年の佛文學は世にいふクラシシズム、卽ち古典的趣味を生命としたものである。されば批評も亦た其の數には漏れず、十九世紀の初頭まで傳下したものは、所謂古典的批評である。

古典的批評の特色は上に說いた評價批評を主とするにあつて、其の評價の標準は概して狹隘陳套、且つ多くは形式上の法則

といふが如きものに拘泥する。希臘のアリストートル、伊太利のカステルヴエトロ、佛蘭西のブワロー等が垂訓は永く軌範の淵源とせられた。是れ恰も我歌俳諧の上に奥義口傳の沙汰ありしと同一轍である。

十九世紀の新批評は他の創作、乃至政治社會萬般の上に見えしと同じ精神を以て、此の舊式の批評から脱出して生きたる新しき天地に入らんとする一種の自由運動であつた。從つて其の特色は古典批評の評價的なるに對して説明的ならんとするにあつた。史家之れを名づけて批評界のローマンチシズムといふ。獨乙のレスシング、ヴヰルケルマンは早く秀抜なる其の批評に於いて此方面を開拓したが、海を渡つて英國に來ると、詩壇に於ける同一機運の先達たる湖畔詩人ワーヅワース、コールリッヂ、中にもワーヅワースによつて批評壇の新聲が最も明快に發唱せられた。即ち彼れがコールリッヂと合著の第一詩集第二版の有名な序文は、詩界に新光明を注がんとすると同時に批評の標準に根本的變動を起すべき者であつた。其の結論は詩を感情の自然自由の流露にありとする所から、延いて詩句法といふものゝ之れを拘束するを惡み、一切のポエチック、デヰクションを斥けんとするの極端にまで走つた。而して傍らにはハズリット等の如き純批評家として大なる文星が同じ方向に來たり會する、此等の勞力で佛國傳統の古典批評は略ぼ顛覆せられたと見て差つかへない。之れが十九世紀始めの二三十年代である。佛國では稍後れてサントブーヴ出でゝ批評界の形勢が定まつた。佛蘭西近代の最大批評家たる彼れも亦たローマンチシズムの新批評を主張して舊來の古典批評を排斥し、批評は凡て評者が作品から得るところの印象の記述であるが如き觀を呈せしめた。

斯やうにして十九世紀の上半は批評界の革命期である。狹隘な定規標準で評價を下す舊來の批評は破壞せられて、説明的な批評が勃興して來た。今此の新批評が提唱する所を聞くに、從來の偏狹に對しては、曰はく趣味の寬宏、多様。從來の拘

束的なるに對しては、曰はく自由の判定。從來の推理的傾向に對しては、曰はく感情を重んぜよ。從來の附會的なるに對しては、曰はく印象を先にせよ。從來の缺點を穿鑿するものに對しては、曰はく美所を發見するを本意とせよ。從來の叱責的なるものに對しては曰く作そのものゝ鑑賞を本とせよと。寛宏（カソリシチー）自由（フリードム）感情（フヰーリング）印象（イムプレッション）發見（ディスカヴァリー）同情（シムパシー）鑑賞（アプレシエーション）。凡そ是等のものが新批評の合言葉である。

更に之れを別の方面からいふと舊批評は自然其の判斷の標準を客觀に幷べ立てるに反し、新批評は之れを單に評者の心内にあるものとして明白に標準を定立することをば避くるが故に、之れを名づけて主觀的といひ得やう。また蘇格蘭エヂンバラ大學の教授セーンツベリー氏は、其の批評史第三卷に於いて、此の種の批評を名づけて一は先天的（ア、プリオリ）一は後天的（ア、ポステリオリ）と呼んだ。即ち客觀的な批評にあつては、其の作品の產まるゝよりも以前に標準が先づ生じてゐるから、先天的である。ローマンチックの主觀評はすなはち作品あつて後はじめて判斷の標準もそれに應じたのが立つ、後天的たる所以であらう。是れ亦た事實に當たつた名目ではないか。要するに近代の批評は主觀的後天的に端を開いたのである。

併しながら斯くの如き批評が十九世紀の中葉以後に帶着し來たつた重要なる意義傾向は、實は此の點から始まる。蓋し批評が創作と異なる最大理由は其の如何なる方式に於てか一層多く知識推理の作用を有する點に存する。自然の事象に感じて之を文學に托すれば創作を成し、創作中の事象に感じて之れを文字に托すれば批評を成す。批評と創作と同じく感情を根本とすべきは勿論であるが、唯是れにありては其の感情を攄ぶる間に理智の案排を要すること多く、彼れにありては寧ろ之れ

を感情的に埋沒せしめんと欲するの差がある。或は作品の鑑賞享樂を其のまゝに寫し出だして、文字通りの第二の創作を成すを批評の本意と說くものも無いではないが、是れはどうも我等が懷く批評といふ語の意義とは違ふやうである。鑑賞享樂の域に如何なる方式を以てか理知の味ひを加へて描出する、それに眞の批評といふ意識は發しなくてはならぬ。

然るに一旦斯くの如き意識の竄入を我等の心作用に許すときは、初はたとへ半步であらうとも、其は既に全步を許したと同じ結果になる。我等の理知は究極するところ事物の理由を知らんとするにあるべければ、之れを與へざる限り、其の批評は到底動搖を免れぬ。而して批評の理由はすなはち標準で標準を與ふるはやがて評價の始めである。批評の歸適するところは結局評價ではないか。此の一意識を拔き去つた批評は完成しないものではあるまいか。

一代の才人紀の貫之は『古今』の序に於いて「月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我身一つは元の身にして」の作者在原の業平を評して「その心餘りありて言葉足らず、萎める花の色なくて香ひ殘れるが如し」と言つた。玆に一輪の名花の、色は無慚に褪せ形は哀れに萎んでも、蘊に薫ずる淸香は尙蝶の羽の移り香に鎭魂の思を殘す。簡にして美なる絕好の說明批評と稱してよからう。而も之れすら「心餘りありて言葉足らず」といふ推理の辭を冠するを禁じ得なかつた。文屋の康秀を評して「あき人の善きゝぬ着たらんが如し」といひ「言葉巧みにて其のさま身におはず」と推理したのも、小野の小町を評して「よき女の惱める所あるに似たり」といひ「强からぬはおうなの歌なればなるべし」と推理したのも皆同一經過である。唯貫之は業平の評に於いて、康秀の評に於いて豫め「歌は凡て言葉と感想と一致せざるべからず」といふ規則をば有してゐなかつた。また小町の評に於いて「歌は凡て作者の人物を現出す」といふ結論をも作らなかつた。是れその說明批評に屬する所以である。けれども是れから一步して規則標準を作り出だすのは譯も無いこと、成程貫之は「言葉と感想とは常に一致せざる

べからず、業平康秀の歌は此の理に合せざるが故に完美ならず」とは言はなかつたが、之れを逆にして「業平康秀の歌は言葉と感想と一致せずして完美ならざりき、されば完美の歌は兩者常に一致せざるべからず」とは容易に言はせ得やう。

前に引いたヴヰンケルマンの場合の如きは一層明白に此の過渡を示してゐる。彼れはラオコーン像を以て、表面の强烈な感情の裏に偉大な冷靜の覺悟の潜んでゐる所に美があるとした。而して同時に彼れが美學上の原理は、斯やうな反對なものゝ調和といふことに存した。兩者は相待ち相照してゐる氣味である。ヴヰンケルマンのみならず、古來の評價批評といへども、其の前提としてゐる規則標準は必ずしも先天的とは限らぬ。劇の三一致といふことは、コーチイユやヴォルテールや、後の批評家が之れを應用すれば先天的、演繹的でもあらうが、アリストートルが始めて其の『詩論』で筋の一致といふことを提唱した時は、彼れは「『オデッセー』を作るときホーマーはユーリッセスに關せし事柄をば一も語らざりき。たとへばパーナッサス山にて傷つきしこと及び希臘軍にて狂氣を粧ひしことの如き、一あれば他はあるを要せず、またあるべくもあらざるの類なり。斯くして彼れはオデッセーをイリアッドと同じく一事件の上に作成したり」といつて、ホーマーを其の歸納的根據としてゐる。降つては伊太利のカステルヴェトロ等が之れに時の一致、處の一致を竄入するに至つたのも結局は彼等が先づ作品の上に經驗したところから歸納した後天的のものであるかも知れぬ。

論じて玆まで來れば、說明的と評價的、後天的と先天的、主觀的と客觀的の批評の區界は甚だ模稜たるものとなる。所詮は連續した一大作用の右と左の兩端のみを取り出した名目に過ぎない。且つ其の兩端に於いてすら二者は互に相結合して存し得ること、恰も夫の論理學が取り扱ふ演繹歸納の二方式の關係に於けるが如し。客觀的批評の中にも、其の客觀の標準を擬する前豫め心中に此の作は佳し彼の作は惡しといふ判斷成つて、而して後ち其の佳き所以惡しき理由を既成の標準で說明

したものがあり得やう。また主觀的批評といふものも、其の一作品を佳しと鑑賞する裏面には、惡しと否認する作のあり得ることを拒む理由はあらず。而して佳し惡しの判斷は一種の評價である　縱ひ其の標準は明に客觀には揭げられずとするも、主觀の心の底に埋まつて存してゐることは疑ふべくもあらぬ。意識の閾の外で之れに照準したに過ぎない。從つて之れを我等が知識作用の自然に任ずれば、主觀の底に埋沒してゐる標準を其のまゝに埋沒せしめ置くことは不滿足である。之れを發掘して明に客觀に揭出せんとするのが、おのづからの傾向である。此の傾向の好實例は、前に點出した佛の批評家サント、ブーヴの上にも見られる。佛文學史に於いて近代の典據たり、且つ彼の國第一の評論雜誌レヸウ、デ、ダー、モントの主宰者たるブリュンチエール氏は、彼れの批評を目して單に自家印象の日記たるが如き主觀批評から、漸次に方面を轉じて其の作者の上に考量を及ぼし、作者の性風感想を研究する心理的批評に移つたものとしてゐる。即ち自家の主觀にのみ依賴せんとしてゐたものが、それに不滿足を感じて作者の性風といふが如き客觀的のものに批判の根據を托せんとするに至つたのではないか。而して此の傾向は更に發展して彼れが餘風を追うたといふ夫の、我が讀書社會に能く知られた英文學史の著者テーンに及び、遂に立派なる一種の客觀的標準を形成することゝなつた。即ちテーンが作者の境遇、時勢、人種の三標準を揭げて、是れで一切の作品を批評せんとしたのは、サント、ブーヴに見えた思想の同じ流れと見てよろしい。史家之れを呼んで科學的批評といふ。

さらば窮まるところ十九世紀の新批評は如何なる意義を有するか。豫期に於いては新批評家等は舊來の評價的標準的客觀的なる批評を根本から破壞せんとした。併し結果は稍々豫期と異なるものであつた。何となれば眞の評價批評、標準批評、客觀批評は之れが爲めに滅びず、唯其の地位を變じたのみであるから。而して所謂地位を變ずるとは、丁度哲學と科學と

の近代に於ける關係と同じく、始め先天批評から出立するに重きを置いたものが、後には後天批評から出立するを本意とするの形勢となつたことである。昔は「先づ理法を習へ、而して作品を之れによりて評價せよ」といつたのが、今は顚倒して「先づ作品を鑑味せよ而して其の中に理法を見出だせ」といふに歸した。演繹から歸納に入つたものが歸納から演繹に入ることゝなつたのである。是れが概般の形勢から見て、近代批評の我等に敎ふる事實である。

然らば斯くの如くして近代批評が求めんとする新標準は何であるか。

舊批評の標準は破れた。跡は批評壇の亂世とならざるを得ない。標準はたゞ主觀にあるべしといふ。要は其の主觀が完全なものでなくてはならぬ。主觀に受けたる印象のまゝを記するといふ印象派の批評も、若し不幸にして其の主觀が歪んだものであつた時は、舊批評の狹隘から來る弊と何の甲乙もない結果となるであらう。たよる所はたゞ主觀である。此に於いてか彼等は先づ其の主觀の完成に根據を求めた。批評上の歷史派比較研究派が廣く古今東西の文藝に通ぜんと要した一理由は此の意に外ならぬ。而も尙ほ無標準の批評界にはあらゆるものが跋扈し得る。偏狹なる個人の好惡、恩怨に基ゐする個人の愛憎、政治宗敎等の相違より來る黨派心、是等のものが他の正しい標準と相班して侵入し來たるは誠に巳むを得ぬ次第であつた。英國の十九世紀上半に於ける批評壇はまたよく此の事實を證明する。マシュー、アーノルドも指摘してゐる如く、英國評論壇の檜舞臺たりし『エヂンバラ、レヸウ』の自由黨に於ける、之れに對峙して起こつた『クオターリー、レヸウ』の保守黨に於ける、黨派の感情が當時如何に多く文藝の批評に累を及ぼしたかは人の知るところである。

されば到底批評壇は舊標準に代つて立つべき新標準を何れにか見出ださゞるを得ない狀勢となつた。此の時にあたり劃然異なつた二つの重大なる傾向を代表して英國の批評壇に見はれたものがカーライルとマシュー、アーノルドとである。カーラ

イルは人も知る如く英國精神界の豫言者と歌はれ、現在の社會に慊たらずして、新天地新文明を絶叫し、いはゆる文明の批評家指導者を以て一代の任とした人であるが、其の半面はやはり文藝の批評家である。

マシュー、アーノルドはカーライルに比すれば、後一輩の關係である。カーライルをして十九世紀の中葉を代表せしめれば、アーノルドは其の次の一ゼネレーションを代表する。但し彼れは一方に於いて當時詩壇の知識派ともいふべきものに重要の地位を有すると共に、純批評家としては、恐らく近世の最大家の一人であらう。獨のレッシング、佛のサント、ブーヴと幷んで近代の三大批評家とたゝへられる。

さて此の二人が代表するところの傾向を觀るに、カーライルは批評の最後の標準を實人生に求めんとし、アーノルドは之れを實人生より獨立して文藝そのものゝ上に求めんとする。カーライルに取つては、其の『英雄崇拜論』中ダンテ、シェークスピーアを論じた條などがよく立證する如く、詩人と豫言者は同一である。美と眞理至善とは同一である。眞理を宣傳し新文明新人生を豫言する者が詩人でなくてはならぬ、兩つながらゲーテがいはゆる造化の「公然の秘密」に透入する者でなくてはならぬ。唯一は之れを啓示し他は之れを好愛せしむるの差あるのみ。されば詩人ダンテが大なる所以も亦此所にある。其の眞摯誠實にして深く〳〵胸の奥に徹する所が價値の源である。ダンテの濃厚熱烈は是れから來る。「ダンテは廣く寛なる心の人として我等に對するに非ず。むしろ狹く片寄れる心の人として立つなり。」「彼れが世界大なるは世界廣なるが故に非ずして世界深なるが故なり。」カーライルは斯くの如き見地に立つて批評を始めた。是れ批評の標準を人生そのもの文明そのものゝ上に求むるの思想ではないか。されば彼れは晩年に及ぶに從ひます〳〵此の傾向を強くして『ラターデー、パンフレット』時代に及べば、文藝としての現在の文藝は彼れに半錢の價もあらず。縄飛び踊り、オペラ踊り、街道流しの音樂と何

の選ぶ所もなきものに、何で精神指導者の任が托されやう。一國の元氣精神は本來文藝によつて指導せらるべき筈である。文藝は一種の宗教でなくてはならぬ。と疾呼するに至つた。而して彼れみづから終には文藝批評の域から脱出して、純粋なる史家、文明批評家となり了つた。

アーノルドは其の批評論中「現代批評の職能」と題する文に於いて、有名なる批評の定義を下し「世に知られ若しくは考へられたる最好のものを知り且つ廣めんとする公平無私の努力」といつた。而して其の公平無私といふことを説明しては心を自由にして物みづからの本然の法則に從ふといひ、高く實際的見地、就中政治宗教の實際的見地より脱越せよといふ。文藝をして宗教たらしめよといふのカーライルに對して、高く實際的見地より脱越せよといふのアーノルドあるは、面白い照映ではないか。其の單に「最好のもの」といふは、何が最好であるかと問ひ得る限り無判斷不完結の語たるを免れぬが、是れは新派批評の當初の沒標準的傾向が別な定義らしい言葉で殘つてゐるものと見てもよい。アーノルドの特色として必要な點は其の「感じ且つ廣む」といはずして「知り且つ廣む」といふ所に知識的配色を多分に有すること、及び其の「實際的見地より脱越す」といひ「物みづからの本然の法則に從ふ」といひ「公平無私」といふ所に客觀的傾向をあらはすことである。

此に至つて想ひ起すのは創作方面に於ける自然派、及びそれと相混じてゐる「藝術は藝術の爲也」主義である。ブリュンチエール氏がアムパーソンナルといつたフローベール等が自然主義乃至之と連續したモーパッサン等が純客觀的描寫の「藝術は藝術の爲也」主義は要するに作品中から作者の個人格を抜き去らんとするものであらう。又「藝術は藝術の爲也」主義の他の一意味は之をして道德上の實目的から獨立せしむるにある。而してアーノルドの説くところも結局は文藝を道德上の實目的、若しくは評者の個人格から離れて批評せんといふに歸する。文藝は文藝みづからの目的法則に從つて判斷せよ、他より

標準を儼ひ來たる勿れといふのが中心の趣意である。アーノルドの說は批評界に於ける一種の「藝術は藝術の爲也」主義では無いか（彼れみづからは是れを認めざるに拘らず）。

要するにアーノルドは、文藝をして文藝みづからの標準に依らしめよといひ、カーライルは文藝をして實人生の標準に依らしめよといふ。思ふに是れが近代の批評に相矛盾して存する二大精神では無いか。文藝は文藝の爲めなりといふと文藝は人生の爲めなりといふと、二つの思潮は決して遽に一を眞とし他を妄とすべきものではない。吾人は實に此の二つのものゝ抱和した所に文藝の極致を求めんとするものである。

文藝は文藝の爲めなりといふ語には內容の變遷がある。今若し其の第二句たる「文藝の爲め」といふ意を「美のため」と解するときは、美そのものゝ說によつても標準は變ずる譯である。而して其の變じて近代に及んだ諸意義のうち、最も顯著なものは快樂的傾向であらう。此の主義に從へば、文藝は結局快樂の爲である。英國近代の批評壇では、ウォルター、ペーター乃至今のセーンツベリー氏等の唱ふる所が之に歸趨する。同時に文藝は人生のためなりといふものにも變遷がある。功利の爲め乃至敎訓勸懲のためといふ思想は、今は過去に屬する。近代の意義は人生最後の眞理と接觸するの謂ひである。文藝が快樂以外に求め得る最偉大のものは是れに外ならぬ。

快樂と人生最後の眞理と、近代の批評的精神が二途に分かれて相得んと爭ひつゝあるものは實に此の二者である。而して文藝上の快樂は萬境凡て同一味たゞ有りといひ無しといふの二斷あるのみ、所謂評價無し、大小高下無し。絕對的である。之れに反して人間の眞理は無限の階級を追うて發展する。文明の程度と相應じて變ずるを厭はぬ。相對的である。さりながら獨り此の眞理が文藝に入る時は、最後最上のものとなつて、しばらく絕對の相を着けなくてはならぬ。左なくば眞理は遂

に絶對性の姉妹たる快樂と安全に巡り合ふことは出來ぬであらう。たゞ其の最後最上たり絶對たるの假相が所詮人間のものであるため、時と共に、人と共に、種々として動搖するを免れず。即ち美の此の方面に於いて對比を許し評價を許す所以である。

重ねていふ、文藝の絶對的快樂と人間最後の眞理とは、何れの日か相抱和して不滅の淨光に此の世を包むであらうか。（明治三十九年六月）

「近代批評の意義」

先日の「二六」に光山と名のる人あり。予輩が六月の「早稲田文學」に載せたる「近代批評の意義」を評して、傍ら種々の暴言を予輩に加へたり。批評の要は、意義不明瞭にして、引例陳腐なりしといふにあるが如し。

意義不明瞭とあらば、今一度彼の一文の歸結を反覆すべし、曰はく、近代の批評は舊標準の破壞を以て始まり、新標準を求めて或る者は快樂に之き或る者は人生最後の眞理に之きたれども二つながら一元を以てしては未だ吾人を滿足せしむるに至らず、近代批評の意義は實に快樂と眞理との二元的動搖といふことなりと。

而して予輩は之れを史的事例に徵證せんとせり。史的事例は常に陳きものなり。陳き事例を統一して新しき結論を得んとするに何の批難ありや。

思ふに此の論者も亦た、清新とは單に多數人の知らざる人名事績を拉し來たることのみと信ぜるにや。笑ふべし。

論者はまた、今の文壇は上の如き論説を聽くほどに愚ならずといへり。其は予輩が論意の陳なるがためか、或は其の謬なるがためか。陳なりといはゞ其の證を擧げよ、謬ならば其の理を論ぜよ。顧みて他を言ふこと勿れ。

予輩を以て逆上して斯かる論を公にしたるに非ずやといへり。無禮の言條かな。論者は眞に逆上者にして始めて此の種の論を爲すべしと信じたるにや。但しは一時の失言なるか。（明治三十九年七月）

再び「近代批評の意義」について

やりかけた喧嘩で致方がない。讀者は今一度泥仕合見物の苦を忍ばれよ。

「二六」の論者は、愈々出でゝ愈々醜なる再度の惡罵文を公にした。他人に無禮といふ咎め立てをされて、一言の辯解も出來ねば、恥づる所以をも知らず、却つていよ〳〵猛々しげに惡罵を重ぬるとは、何たる不料簡ぞ。私心、邪念、復讐、讒誣と、あらゆる卑劣の動機から文を作つて恥ぢざる、良心麻痺の徒の少なからざる文壇に、此の論者の如きも、恐らく若い身空であらうに、新聞紙といふ言論の利器に携はつたが災難か、他と同じやうな墮落の路を歩んで行くとは、笑止のことだ。新聞紙は實に天下の公器でまた利器である。外の部面は知らぬこと、少なくとも文藝の一塲に於いては、範圍の狹い世界のことだから、お互に自重する所を知らなくてはならぬ。反響が急なだけ、天に向つて吐いた唾は、直ぐ自分の面上に落ちて來る。

本來ならば取り上げて言ふも足らぬ罵詈であるが、舞臺は廣く讀まるゝ新聞紙であるし、且つ其の後の同じ人の文を見ると、一面にあり〳〵「帝國文學」黨「早稻田文學」黨といふが如き私心を挿んで、一に黨し他を排せんとする邪念の動機か

ら來た形跡があると同時に、他面、筑水君の「レナウ論」を許するあたり、多少の眞面目な考は持つてゐる人と見たればこそ、去る月曜の本紙で試みに不審の箇條を質したのである。

然るに何事ぞ、答ふるところは、理よりも先づ無禮を再びして非を遂げんとするにあらうとは。

此の人は予輩の文を以て愚にもつかぬ淺薄の議論といふ。此の人が何んな甚深な議論を持つてゐるかは、不幸にしてまだ聞き知らぬが、斯やうな事を正氣で言ふところを見ると、何だかえらい人のやうでをかしい。たとへば予輩は「近代批評の意義」に於いて、近代の批評は眞理を求むるものと、快樂を求むるものと、二元の不調和、動搖であるといつた。此の論が愚にもつかぬ淺薄の見とは、何を標準にして斷じたのだ。公平眞實に言つて、右の一議論は「愚にもつかぬ淺薄の見」といふ苛烈な侮蔑的形容詞を蒙るべきものであらうか。是れは一般讀者の判斷に任して置く。たゞ論者は眞卒に之れを妥貼と信ずるか。衷心に其の過言を愧づるの情は無いか。之れが眞摯の言であるなら、今一度藉すに士人の道を以てしよう。理由を論證せよ。前回にも答ふべき點をば指示して置いたに、何故に之れには答へざりしぞ。凡そ人を罵るには理由を示すのが必要である。理由無き嘲罵を敢てするを許さば、人あつて此の論者を白痴と呼び奸佞と呼ぶも、何の爭ふべき根據も無きに至るであらう。押し返して問はれながら、何ゆゑに根據を示さずして人を罵るか。輕薄の至りである。

察するに此の論者も亦た、事理の當否をば外にして、たゞ空なる怒罵壯語に名を求めんとする子々者流の屬か、然らば寧ろ憫れむべし、憎むべからず。或は眞に事理を判ずること此の以外なるをば得ざる、腦力不具の徒か。そも〳〵私心邪念のためには、押し強くも是を非に言ひ曲げて耻とせざる良心痲痺の一類か。

論者が理を辯じたと見える末の一節は牽强附會である。「近代批評の意義」といふ題が、時代を標示した一つの史的研究

であることは、極めて明瞭ではないか。此の論題に對して、近代批評の事實を統一すればしかぐ〜の傾向に歸する、といふ結論を與へたに何の不明瞭があるか。近代批評はしかぐ〜の傾向を有するといふことゝ、總ての批評はしかぐ〜ならざるべからずといふことゝは、之れを別にするに就いて何の不都合があるか。「しかぐ〜ならざるべからず」に對する予輩の考も、「早稻田文學」中の一文には提示だけはして置いた。たゞ其のザインからゾルレンに移る點は大議論だ、なかく〜一席の講演ぐらゐで說きつくされるものではない。史的研究が傾向だけを論示したからと言つて、それが其のために「愚にもつかぬ淺薄」のものともならねば、不明瞭とはなほ更ならぬ。

「意義」といふ語は、「有樣」といふことではないなどゝ無用な事を言つたものだ。詭辯を以て余輩に對しようとは愚の話である。意義といふ語が、一皮剝いた底の存在といふ用例を有することには異存は無い。併しそれが此の場合に何で予輩の論を弱めるか。予輩とても其の通りの意味で此の句を用ひてゐる。たゞ論點は其の上の句にあるのだ。若し單に「批評の意義」と汎稱的にでも言つたら、或は論者のいふやうになるかも知れぬ、「批評はしかく〜ならざるべからず」といふのが正當の答かも知れぬ。けれども予輩は殊さらに「近代」といふ歷史的の制限を其の上に加へた。「近代批評の意義」といふ問に對して「批評はしかぐ〜ならざるべからず」と答へるものがあつたら、それこそ斷じて不穩當不明瞭である。「近代批評の斯く〜の事實を綜合すれば、しかぐ〜の傾向に統一せらる」と結論し解釋してこそ甚だ穩當明瞭ではないか。いかに論者、穩當明瞭といふ語の意義が分かつたか。

繰返していふ、「近代批評の意義」といふ問に對して、論者は「批評の意義」の答を要請してゐる。それで不明瞭呼ばはりをしてゐる。それで予輩が評論家たるの資格を云々してゐる、片はら痛い事だ。

史的事實の陳腐といふことについても、予輩が前回の諸問には答へ得ずして、たゞ其の非を押し遂げようとする卑怯の態度を取つてゐる。近代の批評史を論ずる上から、レッシングやヴヰンケルマンや、アーノルドやカーライルの名が陳いといつて斥ぞけたら、跡は何に徴して之を觀やうとするのであるか。魔法でも使ふのか。滑稽である。物を知らぬにも程があるではないか。（明治三十九年七月）

イブセンと社會的哀憐

諾威(ノルウェー)の大戯曲家イブセンも到頭死んだ。十九世紀の後半をさしも鮮かに彩つた文藝星等が、今や我が時去ると觀じてか、一つ〳〵に消え行くさまは、心細くもまた莊嚴である。定めて天國紫微 門外には、月桂樹冠を捧げた天つ乙女が列を造つて待つてゐるであらう。黄金の門扉は押し開かれて、奥には天人の樂嚠喨と、人の世の勇士が引き揚げ際の偉大さを嘆美してゐる。噫斯くの如くして逝くものは眞に偉大である。

英語で之をソーシアル、ピチーといふ。現社會の不備缺陷より生ずる樣々の不幸に對して、我等が發する哀憐悲痛の情は、近代の歐洲思想界に於ける一の特色である。イブセンは實に此の社會的哀憐の權化であつた。彼れは文藝の方式 の上では所謂自然派に屬した。晩年僅に夫のシムボリズムに脚を投じかけたとは言はるゝが、それはさして確乎たる轉歩では無かつた。彼れが技巧の上に家を成してゐるのは、依然として自然派たる點である。併しながら彼れが能く世界に大を致したる所以は、是れでは無い。即ちイブセンが作品の中に沸發したる社會的哀憐こそは、彼をして全歐洲の精神界に活きたる火たらしめた理由であらう。

彼れが「死より覺めたるとき」を初めて讀んだ歐洲の男女等は、如何に深く藝術と人生、本然の自由と現當社會との矛盾に回顧の情を寄せたであらう。はた彼れが「ノラ」の始めて獨逸に演ぜられしとき、獨逸の女子等は、如何に自家の運命の奇なるに驚いて、今更の如く左右を見廻したであらう。

イブセンの大はたゞに彼れみづからの作に於てのみでは無い。むしろ彼れに源を發して獨逸、英吉利、佛蘭西に其の追隨者を生じた其の追隨者によつて更に大を加へたのである、獨の現代戲曲の大家ズーダーマン等、英の現代戲曲の大家ピチロ等、乃至佛の小說家ゾラ等の如きすら、其の後半に於てイブセンの影響は認められたといふではないか。歐洲の近代文藝に感化を與へた點に於いては、露の聖人トルストイよりも更に顯著の功を有する。歐洲近代の所謂問題的文學は要するにイブセン的である。

而して歐洲の思想界は、今や社會的哀憐より轉じて、其の奥に横はる所の、神秘にして廓落無方なる大天地に眼を移さんとするに非ずやと見ゆるとき、社會的哀憐の權化イブセンは逝去した。噫これ何の意味であらう。

我が國はなほ依然として歐洲の後へについて走つてゐる。成程イブセン以後の最新の歐羅巴も我が國に見られぬではないが、同時にイブセン期も尙ほ現在もしくは未來として存してゐる。我が文藝界は當然是からイブセン期に入るであらうか。

（明治三十九年五月）

小說中のアドヱンチュアス

日本の近來の小說壇に家庭小說といふ語が流行してゐるが、家庭小說とは元來奈何いふ定義を有つた詞であるか、單に家庭若しくは家庭の周圍に日常起り得る事柄を題目とするといふ意味であるとか、又は事件の中に存在する道德が、當時の一般の社會道德と懸離れて居ない種類のものであるといふこと、即ち材料の家庭的日常的であること、及びコンモンモーラルと調和して居ることの二點を、假りに所謂家庭小說の特色として見ることが出來るならば、英吉利でいふ恰度十九世紀の終り、即ちスコットなどの出る以前の小說壇に出て居た二三の閨秀作家、例之、ゼーン、オーステン又はマリヤ、エッヂウオースなどの作が之れに近いものかも知れない。而して英吉利の文壇に於ても、亦たこれらの作を家庭小說といふやうな意味で取扱つて居る人もあります。所が此の百年ばかりも前に出た是等女作家の家庭小說が後に殘した系統は、却つて家庭的といふ點にあらずして、其の寫實的といふ方面であつた。

即ち寧ろ尋常な出來事を有りの儘に寫すといふやうな方面が其の特色となつて、一方にはスコット等の、所謂ローマンチックの小說が繁昌すると同時に、他方の寫實小說の脈が傳つた。而して人の知るごとく十九世紀の中葉に迨んでは、ヂッケ

ンス、サツカレー等の寫實小說が全盛の期に達して、更に其の流が下つてエリオツト乃至今生きて居る所のメレヂス以下の作者に及び、かの心理的寫實小說になつたのであります。

而して目下の小說壇の重なる潮勢は、依然として此の心理小說の方にある。所が此の心理的な寫實的な作風は、最早大分人に飽かれて來かゝつた氣味で、一般の人心は自然に何か新らしいものを要求する事になるのであります。而して此の要求に應じ、在來の心理的寫實小說に對して近代に現はれた小說が、即ち矢張り汎い意味でいふローマンチックの作風で、其最も好い代表者は夫のロバート、ルイス、スチーヴンソン乃至生きて居るキツプリング等であります。勿論十九世紀の後半は所謂自然主義といふものが、在來の寫實主義と合體して、心理的寫實的自然派的の作風はあらゆる文學に影響を及ぼし從つて其の以後の作物には、其の主義の那邊に在るに關らず、皆多少此の寫實的の影を止めて居ないものはない。キツプリングは申すに及ばず、スチーブンソンでも一面に心理的な寫實的な所をば明らかに具へて居ります。然れども大體の調子に於いてこれをローマンチックと名づけて差支へがなからうと思ふ。

然らばローマンチックの小說といへば、如何なる特色を有つて居るかと申しますと、それはローマンチックといふ詞そのものゝ定義の複雜である如く複雜になつて居る。玆には其中の一つを取り出して見るのですが、其の最も著しき一特色と申すのは小說上のアドヱンチユアス（冒險談）といふ事であります。元來寫實派の小說にあつては其の特色の一は性格描寫に最も重きを置くといふ事でありますが、ローマンチックの小說がアドヱンチユアスを要素とするのは、恰度此性格描寫と對峙した意味であるのです。それですからアドヱンチユアスといへば筋を主にして性格人物を從にする。可成人の空想を刺戟するやうな非常の事件を材料とする。されば小說上のアドヱンチユアスは、從來の譯語の如く冒險談といつでも惡くはないが、

然し乍ら其の場合には意味がず－つと廣くならざるを得ないのです。例へば人跡未到の地に探險を試みるとか、鯨船に乘つて大海に出て見るとかいふのも冒險談でありますが、同時に昔の武者修行も冒險談であるし、刑事探偵が罪人の跡を追ふのも一種の冒險談であります。要するに從多く空想的の事柄といふくらゐの意味に止る、これを稱してアドヹンチユアスといふのです。

さて寫實派に對して立つた所の作者は大抵皆此アドヹンチユアスを主にする傾向を有つて居る。所が茲に注目すべき事實は、斯樣に性格人物を後にして筋を先にする傾向は、軈て亦たやゝもすると其の作の文學的價値を下落せしむるといふ危險がある。唯知識的に新奇のものを發見するの喜びだけになるとか、或は唯形式的に目先きの變化のみを喜ぶといふやうな結果になつて、深く我々の情に觸れ胸に徹へるといふ味が亡くなる恐れがある。英吉利の過去の文壇で言ひますと、即ちスコツトの如きは先づ此種の作風でも大家といはれ、英吉利の小說壇では非常に重要の地位を占めて居りますが、これすら一方には上に申した意味で其の價値を疑ふものすらあるを免れないのであります。亦た佛蘭西でいつたら老デユーマ、日本でいつたら馬琴の如きが皆同じ傾向を持つて居ります。而して斯樣な危險のあるアドヹンチユアスを生命にして、寧ろ進んでそれを思ひ切つた所まで持つて行くと、茲に英吉利の文壇で所謂ポピユラー、ノヹルス(通俗小說)といふ一つの階級が出來るのです。我が邦に於ても是れは似てゐるが、英吉利に於いては此通俗小說といふものが多數の下級讀者を有してゐて、興味の中心を筋の變化活動の工夫といふことに置いてゐる。即ち前に申したローマンチツクの小說の特色を濫用して極點まで行つたもので、實際またこれが一番解り易く、趣味敎育の無い多數者を引き付けるに最も容易い方法であるのでせう。であるから眞にローマンチツクの小說家として此の方面に成功しようとするには、此通俗小說に墮するといふ危險を超越しなくては

ならぬ。即ち如何に多く之れを超越し得たかといふ點で、如何に多く其人がローマンチック派の小說家として成功して居るかを卜し得るのである。それ故に自然極低い所の通俗小說家から高いローマンチックの小說家に至るまでは中間に種々な度合の作者が出て來る譯になる。英吉利の近代の小說壇で、此の高い地位に達したのが即ち前にスチーヴンソン、後にキップリングなどゝいふところでありませう。低い方ではガイ、ブースビーとか、稍上つて、ライダー、ハガード、アンソニー、ホープ、亦はかの探偵小說の大家コナンドヰルなどゝいふ所が、所謂通俗小說の泰斗であつて、ホールケーンなどゝいふ所になると殆んど文壇的と通俗的の中間に立つて居る——若しくは殆んど文壇的小說の方に入つて居るといふ形勢であります。

而して此等の作に通じた特色の主なる一つは右にいつたアドヱンチユアスで、從つてこれから來る特色は例之非常な空想的の事であるため普通に見て居る所の自分の本國又は有名な都市などでは不都合であるといふ所から、好んで舞臺を外國に取る。それも亞弗利加であるとか、印度であるとかいふやうな歐洲人の多く知らない所、若しくは全く空想的な無人島などを取り出して其所で起つた事柄に作らへるとか、または時代が現在では都合が惡いといふ所から好んで過去を舞臺にする。また事柄の變化が主になる結果、自らシンミリとした情合例之普通の男女の戀愛などは多く入つて來ないで、調子が男性的になる女性の舞臺が尠くなつて來る。美妙といふよりも壯快といふ方の味に傾いて來る、明媚といふよりも壯大幽玄の味が勝つて來るといふのが、此派の特徵になるのであります。ライダー、ハガードの亞弗利加の冒險小說キング、ソロモンス、マインス、又アンソニー、ホープのプリゾナー、オブ、ゼング、コナン、ドヰルのアドヱンチユアス、オブ、シャーロック、ホームスなどは通俗小說として以上の傾向を最も明らかに示して居るものです。

又スチーヴンソンでは、プリンス、オツトーの如きは全く架空の時代小說である。キツプリングではかのソールヂアース、

スリー以下殆んど凡べて印度を材料にした兵士土人等の冒險小說が渠の特種の文壇的地位を保つ一理由になつて居る。要するにスコット以後殆んど全く通俗小說に墮落して居た所の小說界のアドヹンチユアスといふものが、スチーヴンソンに到つて再び文壇的の價値を有する地位に上り、以て當時文壇の大勢であつた所の心理的小說に飽きた眼を喜ばした。それがスチーヴンソンの一擧にして名を成した所以でもありましようし、キツプリングが今日の地位も一面は同じ意味であるのです。畢竟小說といふものが寫實主義自然主義の結果空想と離れ過ぎ知識的になり過ぎ、自由な感情の味はひといふものが薄れて來て、それを補ふが爲めに奔放自在な空想の天地を世間が渴望して來た。その渴望に應ぜんとして出たものゝ一つが即此のアドヹンチユアスの小說であるのです。これは恰度同じ理由から起つて來た所のかの近世の超自然文藝と同じ形勢である。

飜て我日本の小說壇を見ますと、ローマンチツクといふ呼び聲は隨分多く聞く所でありますし、又極少數の作家には超自然式のものも、又は冒險談式のものもないではありませんが、而し多數のアドヹンチユアス中心の作は未だ通俗小說の域を多くはなれないものではなからうか。しかのみならず、多數の讀者作者は始めからアドヹンチユアスをば小說界の邪道として斥けんとする傾きも見えますが、私の希望の一つは一層思ひ切つて此のアドヹンチユアスの方面から出立して、文壇的價値の十分に在るやうな作を造り出さうと試みる作者の出でんことである。アドヹンチユアス其ものには必ずしも罪は無い。寧ろ却つて想像をして大自由の天地に馳騁せしむるには此方面が容易くはないかと思はれる。又寫實小說に飽きんとしてゐる人心に對しては適切の一方法ではないかと思ひます。（明治三十九年六月）

文藝的理想

通俗に文藝上の理想といふことを說けよとの貴諭、案ずるに理想の說は、之れを長くすれば卷を重ぬるも尙足らざるを憂ふべし。簡にすれば則ち數言以て之れを掩ふを得んか。今若し科學に執して文藝を究むれば、何處の隅にも此の者理想の本體なりとして捕捉すべきものあることを無し。理想はたゞ文藝の哲學に入つて之れを認むべしと知り給へ。

文藝が取り扱ふところの理想はたゞ感悟すべくして言說すべからず、人生最後の理想なれば也。夫れ理想には絕對のものと相對のものと、二つあるを得べし。相對の理想は聰明なる人々が明かに思議し言說するを得るものにして、たゞ現在よりも進めるの故を以て理想たれども後に更に之よりも進めるものあるを得るよりいへば、最後不動の理想に到達すべき階段たるに外ならず。

文藝は斯くの如き理想を主眼とするものに非ず。文藝は直ちに最後最奥の理想を摸索するを以て生命となす。此のところ宗敎と相接する所以也。固より古來の文藝にして言說し得べき相對の理想を素材と爲し、之れより生ずるの悅びを以て生命としたるものも尠少にあらずといへども、斯の如きものに於いてすら、其の不朽の生命、不斷の悅びの係るところは、相對理想の奧、更に不可說の大理想の影響として橫たはる邊に存せずんばあらず。されば文藝內の理想はたゞ摸索すべく、翫味

すべく、感悟すべくして言說すべからず。强いて名づくれば宇宙の眞諦、人生の命運、萬物存在の秘鑰といふが如きものに觸着したりとの漠然たる感に過ぎざるべし。此の漠然たるところ實に文藝の妙味の懸るところにして、其の宗敎家が呼んで神と稱するものに迫る所以也。

されば夫の文藝の上の寫實派といひ、理想派といふもの、一はたゞ現實如是の法象によつて直ちに最奥の一物を摸索せしめんとし、他は其の間に存する階段的事象によつて之を摸索せしせんとするの區別に過ず。摸索の一諦に於いては何の差あることなし。所謂理想派といふものゝ理想は、文藝が生命とするところの理想とは截然區分するを要するなり。重ねて之れを言ふ、文藝上の理想は相對にあらず、動くことなし、說くべからず、說くときは黑白矛盾の說も等しく之れに合することゝあるべし、何となれば凡て之れ摸索に過ぎざればなり。之れを文藝的理想の絕對といふ。足下、頷するところありや。（明治三十九年四月）

戰後の社會が要求する娛樂の二意義

近來圖書、雜誌、新聞紙等の出版界に現はれ來たつた事實に徵するも、戰後の我が社會が、勞作の反對面なる娛樂といふことに、著しい要求を有してゐることは推察せられる。而して文藝が如何なる意味に於いてか快樂を生命とする限りは、之も廣い意味での娛樂の一つとなるは當然で、また已むを得ぬことであらう。併しながら文藝は果たして一口に娛樂也と言ひ去つて、何の不滿足も無いであらうか。

蓋し文藝の生命が美といふことにあるは言ふまでもないが、其の美といふことの生命が、快樂といふ廣い分野に屬することを、明瞭に、大膽に斷言するに至つたのは、近世の一特徵である。若し眞理が他の半面の生命であるなら、それすらも唯快樂化して始て文藝の要素となり得るのではないか。されば文藝は所詮娛樂と分離することの出來るものでは無い。只文藝の要求が娛樂性のみから來るとは限られぬといふ事實を見のがしてはならぬのである。

さて戰後の我が社會が多分の娛樂を要求する、其の自然の結果として文藝が榮えて來る。是れは一と通り尤の事のやうである、併しながら、戰後の社會が要求する娛樂といふものには、種々の意味があり得やう。其の重なる見方が二つある。一は國民精力の過剩に基ゐする娛樂の要求で、他は國民精力の疲勞に基ゐする娛樂である。

娯樂は前にも言つた如く元來が勞作の反對面である。先年死んだ英國の大哲學者スペンサーは、人も知る如く、文藝の本性を我等の生存作用から獨立する所にあるとした。之れは結局は所謂遊戯本能說、即ち人間には勞作と直反對の遊戯性といふものがあつて、それが發して文藝を成すといふ說から來たものである。けれども文藝がスペンサーの言ふ如く全く彼等の實生活と離れて存立すべきものであるか否かは、近代の學者の疑ふ所である。唯廣い意味での娯樂又は遊戯といふものが、實生活から離れる離れぬに拘はらず、精力活氣の自由なる放散であることだけは明かであらう。夫の有名な蓄財家千葉勝は、其の蓄へ得た紙幣を庫中に藏して、日々みづから之れに火熨斗をかけ皺を延すのを無上の快樂としたといふ。是れも其の人に取つて娯樂である限りは、一種の遊戯と見られる。たゞ一つの遊戯と勞作との限界は、それが自由なるべしといふことである。苦しくなつても休めてはならぬ、義務又は必要として、快樂の有無に拘はらず行はざるべからず、といふに至れば、其の事は最早遊戯娯樂ではなくなる。精力の自由の放散、自由の消費といふことが娯樂の生命である。

そこで問題は戰後の日本の社會に戾る。現時の社會が娯樂を要求するのは、精力に過剩があるからであらうか。若しくは精力に疲勞を覺えるからであらうか。日露戰爭は我が社會に非常異例の興奮を與へた。其の結果は國民精力の汪溢となつたとも見られやうが、同時に國民精力の疲弊となつたとも見られやう。娯樂の要求は此のいづれからも生じ得る。蓋し精力の疲勞から來る娯樂の要求は　靜止休息か　然らずんば其の精力を別の方面に自由に發散するかの二に出でぬ。前者ならば晝寢の狀態である。後者ならば遊戯の狀態である　若し社會が斯やうな意味での遊戯を要求してゐるのならば、我等は之れに應せんとする文藝が甚だ心元ないものではあるまいかと思ふ。歐羅巴の近時の演劇壇には、此の意味での趣味娯樂が中々の勢力となつて、高い文藝の趣味を蝕しつゝある。亞米利加の文藝壇は　少なくとも過去に於いて同じ形勢であつたらしい。

つまり實生活が忙がしい。一日の勞作を了つて後、多數の人が息つぎに行く文藝は、動々もすると餘に無意義のものになつて了ふ。またさうあらざるを得ぬ事情も存する。

之れに反して精力の過剩から來る娛樂の要求ならば、之を導いて文藝に向上せしむることは比較的容易である。何となれば殆ど或程度まで之れを第二の勞作として文藝に之かしめ得るから。即ち娛樂でありながら娛樂の性質を脫した一種の境地に人を誘ひ得るのである。而して斯くの如きは實に文藝の境地である。戰後の社會は果して此の兩者の何れを源として娛樂の要求に赴いたであらうか（明治三十九年六月）

職業と理想

年の六七月は、頗る意味多き月である。社會の如何なる部面、如何なる時代にも存する新舊二潮流の接觸といふことが、此の月に於いて最も直截に起こる。其の他空想と實際の衝突、現實と理想の衝突、理論と經濟の衝突、凡そ此の世で最も痛切な兩元性の矛盾といふものは、多く此頃を以て社會の表面に現はれ出る、其れは、所謂諸學校の卒業式といふものが實に其の源となるのである。

東京市内許りでも、年々何千といふ、專門の學科を修得した卒業生が出て來る。而して此等の人々が、此の變動極まり無き社會の新潮流を代表し、空想を代表し、理想を代表し、理論を代表し、功業を代表して、あらゆる方面に於ける其の反對者と接觸する。此に於いてか新陳代謝が行はれる、犧牲者、失敗者、不平家が生ずる、要するに激烈なる人生の波瀾は是れから湧くのである。

予輩は玆に新たに學窓を出づる人々に對して、一二の辭を薦めやうと思ふ。

案ずるに新卒業の人々は一たび學窓を出でゝ、前に擧げた如き諸種の反對者に出合ふとき、之れに處するの途はたゞ三つの外に無いといふことを悟るであらう。即ち第一は之れに降る也、第二は之れを遠かる也、第三は之れを征服する也。新卒

業者は其の何れを選ぶであらうか。

　我れ理想的の行動を取らんとするとき、現實の事情は忽ち迫り來たつて之れを阻礙する。我れ偉大なる功業の道に向上せんとするとき、生活は傍より聲を掛けて曰く、足下職業を蔑視するは餓死の道なりと。中にも生活の爲めの職業と我が志ざす功業との矛盾は、新たに世に出るものゝ最も先づ感ずる痛恨事である。

　勿論世には己れの執る職業と、己れの理想とする事業と方向を一にする場合も少なくは無い。斯くの如き人は尙さらの事、其の職業（プロフェッション）に降るか、其の職業と遠ざかるか、其の職業を征服するかで直ちに常人の價値運命は定まる。一層簡易な世路を歩んでゐるものと言つてよい。之れに反して、世にはまた職業と理想的事業との、どうしても一致しない場合が少くない。不幸なるは此の類の人である。他人の下僚となつて機械の如く働けば、若いプライドの上からは不平でならぬ、我が理想の事業とは日に〳〵疎遠となる、併しながら若し之れを止めれば忽ち糊口に窮する、此の矛盾を如何にして解かうか。思ふに幾多の新卒業者が念頭の第一事となる人生問題は、露骨に言へば是れが本であらう。

　而して或る者は遂に其の職業のため、生活のために征服せられて、之に降り了る。一生を齷齪の間に過して、頽然老衰の境に入り、いはゆる平凡なる良民と化し去るものが是れである。勿論是れも惡いことではなからう。また事實斯くの如き人が無かつたら、世の中は治まらぬかも知れぬ。また幾らもがいても、此の以上には出られぬ人も尠なくはあるまい。唯我等の本然はどうも斯くの如きを以て他に推奬するの理想とはなすに忍びぬ。平凡よりも傑出、被役よりも能役が、如何なる場合にも人間の本望のやうである。

　第二者は即ち己が理想の高く淸いものを犧牲にして、俗界に屈下するに忍びず、憤然去つて適所を他に求めんとするもの

である、斯くして何れに行くも不平不滿、彼れから是れへと流浪しあるく。自ら修めるの餘裕なきため、困窮疲勞のあひだに頽然として老朽し行くの結果は、是れ亦た前者と同一である。むしろ哀しき、人の一代では無いか。而して更に痛ましきは、斯くの如き氣鋭の人の甚だ少なからざることである。予輩は之れを以て人生の敗殘者と見よう。

されば我等が望むところは第三にある。征服！此の一語が人生に如何に多くの暗示を有してゐるかを考へるとき、我等は覺えず眉の揚がるを感ずるの情に堪へぬ。併しながら征服の語義は複雜である。予輩は茲に專ら職業と理想との關係について是れをいふ。大なる人は概して一たび其の生活問題、職業問題を征服した後に地歩を見出だすものではなからうか。之を平たく言へば、職業問題を征服して之れに煩はせられなくなつた上、徐ろに理想的事業に歩を進めるの覺悟あるものにして始めて確乎たる大成を期し得るのではないか。

而して征服には努力を要し、犧牲を要する。此犧牲と努力とは實に其の直接目的を職業そのものに置くが故に、一見理想と相渉らずして浪費たるに似たれども、間接目的が更に其の上にあることを意識して（而して此の意識の不斷なることがやがて之れを夫の降伏者と區別する所以である）之れによつて當面直接の目的はたゞ手段たるに過ぎざることを覺悟すれば、茲に其の浪費は變じて必要缺くべからざる一種の資本となるのである。

要するに始め先職業の前に節を屈せよ、職に忠實なれ、其のベストを盡せ、他に理想ありと號して現前の職業に輕薄なること無かれ、輕薄は如何なる場合にも罪惡ではないか。斯くの如くすれば、或る時日の後、必ず其の人は其の職に於いて優勝の地に上るのが自然の理數である。而して優勝の地に立つといふことはやがて身心ともに餘裕を生ずるといふことである、是れは尋常の場合に於いて皆さうである。既に一旦餘裕を生ずれば、是れが即ち職業の征服である。勇士は楯を回して

理想の壘に猛進するの糧を得たものではないか。此の餘裕を贏ち得んがため、我等は蟄伏の犧牲を要するのである。始めより強ひて職業と理想との一致を求むる勿れ、職業に輕薄なること勿れ、職業に於いて先づ征服者となれよ。思ふに最後の敎訓は此の平凡なる一途の外にあるまいと信ずる。（明治三十九年七月）

助六と道德

目下歌舞伎座で演じてゐる「助六」については、先頃の「時事新報」が、其の遊女遊廓を主題としてゐる點に於いて之れを明治の今日に演ずるの醜事であることを論じた。是れは勿論理由ある批難であるが、只其の根據に於いて言ひ足らぬ點があつたやうに記憶する。

遊廓といふ概念には、道德的批難が伴ふ。併し單に道德的批難が伴ふといふだけなら、例へば盜賊も不道德である、殺人も不道德である。決して此の理由のみで遊廓が藝術に入り得ぬといふ理由はない。

さらば「時事新報」の論せる如く、遠き過去の事なら構はぬが現に存續してゐるから惡いといふか。是も實は十分の理由とはならぬ。前に擧た盜賊でも殺人でも、皆古往今來に依然としてゐる事實である。

されば新時代の人が今日「助六」を見て、其の渾然たる一の藝術たるに拘らず中心に尙何ものかの賤侮の感を覺え、爲に觀美の滿足を傷けられるやうに思ふのは、畢竟以上の他に理由があるからでなくてはならぬ。

道德心を傷くるが如き場所や人物を用ひた劇は世に幾らも其の例がある。殊に近代の露佛あたりの作には此のためしが多い。好んで醜窩を舞臺に取つたやうな作もある。而かもそれが必ずしも批難の理由とはなつて居らぬ。

蓋し是非の分かるゝ所は、作の意義、若しくは作者が其の材を取り扱つた態度にある。「助六」は何故に下劣といふ感を伴ふか。曰はく之によつて遊廓そのものを讃美するの意義があるからである。曰はく、作者が遊廓といひ遊女といふものに尊敬、美望の意を捧げた氣味の、明かに其の中に讀まるゝからである。若し作者が揚卷助六を藉つて此の如き人生の裡にも尚ほ高大なる道德あることを示すとか、深奥の眞理あることを示すとかいふ意義であつたら、其の藝術としての成否は別とするも、上の如き道德的批難は蒙らぬであらう。

要するに文藝にあつては題材に固有の道德的價値は、其の作品としての中心思想の道德的價値によつて覆ひ隱されるものである。作品に對する道德的批難の根據は、其の中心思想の上に立つを要する。凡ての似て非なる作品は、知らず〳〵の間に其の道德的下劣の方面が中心思想の地位を占領してゐるものである。批難の感は是れから來るものである。（明治三十九年六月）

頭と手

今日の日本の社會は、すべての方面に於いて頭と手との分裂である。

頭とはいふまでもなく腦力を意味し、智識を意味し、思想を意味する。また手とは此の智識、此の思想を實現する技藝事務の方面の謂ひである、今日の社會には智識思想と技藝事務との不調和といふことが著しく目につく。

之を文藝の上から見ても、所謂外形と內容の不揃といふことが畢竟此れに外ならぬ。內容すなはち思想のみは立派であつても、之れを實現する技藝の方面が未熟であるために、完全な、人を動かすに至るの藝術とはならないが、我が文藝界、殊に其の新派と稱する側の通弊である。演劇に於いて、繪畫に於て、詩歌小說に於て皆その例は見出だされる。之れに反して舊派といふものが、槪して思想內容に於いて貧弱若しくは陳腐でありながら、其技藝に於て兎も角も一の藝術たるべき價値を有し行くは、之れまた何の方面にも見られる現象である。是等はいはゆる新舊の對照上に見はるゝ頭と手との乖背であらう。

また專門家と門外者乃至作者と評家との間に見える意見の齟齬も同じ意味を有する。勿論例外は幾らもあらうが、槪して

言ふと、專門に其の道に身を委ねてゐるもの殊にみづから之れを製作し實行するものは、何時と爲し細い技藝の末に腐心する苦勞の經驗から之れに同情し過ぎて實價以上の價値を持たせ大事な思想內容の價値をば忘却せんとする傾がある。專門家ならぬ人、乃至批評鑑賞を主とする人はすなはち、其の專門家たり實行者たる地位から遠ざかれば遠ざかるほど、技藝よりも思想內容の上に重きを置くの傾向を生ずる。是れまた現時の演劇、繪畫、音樂、文學の諸方面に徵して明かな事實ではないか。

文藝に非ざる方面では、殊に新舊の代謝、智識と經驗との競爭などいふ上に此の意味が認められる。舊い人は動々もすれば經驗といふ事の價値を重く積り過ぎる。之れに反して新らしい人には、學校で習得した智識を鼻にかけて、經驗の人を侮蔑する弊も無いではなからう。

而して最も穩健な途は此の兩端を如何にかして和衷協力せしむるにあること、固より言ふまでもあるまい。

併し、時勢は常に移るもの、舊は刻々新に征せられ行くべきものとすれば、若し此の兩者が到底協力合體する見込の無い場合には寧ろ經驗を棄てゝ、智識に之くのが識者の任でなくてはならぬ。固より彼れを棄てゝ此れに移るの順序方法には、急激なもの穩和なもの種々あるを妨げぬであらうが、根本は必ず一を後にして他を先にするといふ態度でなくてはなるまい。經驗を重んじ過ぎる傾向は、穩和健全を齎さずして往々因循姑息を持ち來たす。

技藝の性質を帶びた事業になると、熟練といふことが頗る重要になつて來る。幾ら學理や智識思想を習得した人でも、到底一日夕の間には其の技藝の成熟期に達し得ないのが例である。而も此の場合に於いてすら、已むを得ざる時に技藝の未熟を大目に見ても、其の內容思想の優れたものに身方をするのが、今の世の進歩を促す所以と信ずる。

之れを要するに批評、觀察の正道は常に矛盾する兩面の統一を標準とすべきと共に、之れが奇道權道としては、其の何れかに重きを置くの必要を認めるのが、世態の常である。而して今日の我が社會は尚ほ大に手を後にして頭を先とするを要するの時代ではないか。蓋し事物の急速な進轉は常に手よりも頭を先とする所に生ずるからである。（明治三十九年七月）

杆格偏倚の社會

前に頭と手との分離といふことを今の我が社會の一特徴だと言つたが、更に一つは社會各部の分離沒交涉といふことが最も目に着く。政治は政治、軍人は軍人、文藝は文藝といふ風に、孤立して相せめぐといふのが、我が社會の狀態であつた。實際方面の人が精神上の興味を缺いて、品位のない下劣な人格になつたり、文藝の人が其の研究し觀察すべき取材の方面を全社會に擴充することを能はずして、偏狹の結論、描寫に陷つたりするのは、皆この畸形的な社會の爲する業ではないか。

勿論社會の各部が有機的に交涉するといつても、何も各部の專門家が同じやうな精力の度合で他部の事をも取り扱ふといふのではない。政治家をして小說を作らしめよとも言はねば、文藝家をして政論をなさしめよとも言はぬ。たゞ空氣が勞せずして何人にも呼吸せられ、何所の果にも行きわたつてゐる如く、社會各部の事に關した智識が、或る度までは知らず〳〵の間に各種の人に行き渡つて、從つて文藝家も新聞紙にあらはれるくらゐの事は、政治でも法律でも軍事でも實業でも興味を以て讀む。政治家も軍人も、みづから詩歌小說を作りこそせざれ、雜誌店頭に新刊物には普き興味を有して眼を配るほどの用意がある。茲に至つて始めて社會は健全な狀態に達したのであらう。然るに我が社會はまだ此所まで來て居らぬ、支離滅

裂の社會である、互に相鬩ぐの社會である。就中文藝方面と政法工業の實際方面との分離杆格が劇しい。歐洲の社會とても時に此の兩面の杆格が無いではないが、其の程度方法は丸で違ふ。我が邦では頭から他のものを劣等視し罪惡視して、之を壓倒し去らんとするのが其の本意である。喰はず嫌ひ、知らず嫌ひである。互に其の存立の意義を尊敬して、相容れるといふ寬宏の態度を缺いてゐる。

此の社會狀態はまた一部が他部を壓倒するの結果、或る部分のみが社會の表面に輝き出でゝ、他の部分は蔭に埋沒せらるゝこととなる、偏倚した不具の社會となる。此の反映はよく今の新聞紙に見えてゐる。若し外國人が新聞紙の上のみで日本の社會を判斷したら、日本には政法工業の類のみがあつて、文藝學術は殆ど無いと思ふかも知れぬ。日本の人民はみな官吏乃至公職の人ばかりで、其の以外に人らしい人は居ないと思ふかも知れぬ。多數の新聞紙は實に官吏公職者の動靜記を以て中心としてゐる氣味ではないか。但し最近時に及んで、幾多の新聞紙が暗默の裡に進展擴充の氣勢を示して來たのは、我等とても見のがしては居らぬ。要するに新聞紙はあらゆる意味に於いて最好なる社會の反射鏡である、之れに社會の各部面が偏倚なく映ずるに及んで、始めて其の社會も不具の狀態から脫したものといへるであらう。(明治三十九年八月)

應用文學

文學に身を委ねんとするもの漸く多くして、而も詩歌小說の如き純粹文學に頭地を抜くことは中々容易でない、茲に於いてか或る種類の文學者は轉じて應用文學といふが如きものに向かふに至る。また必ずしも純文學の難易成功不成功に拘らず職業問題の自然の必要からも此の方面に眼を着ける。または自己の本領が其の方面にあると信じて之れに行くものもあらう。要するに動機は何れにありとするも、斯くの如きは當然生じ來たるべき現象でなくてはならぬ。殊に今日の我が邦の如きにあつては、此の必要が一段切ではないか。世の純文學に志を得ざる人々は、其の才識の許す限り、少しく眼界を轉じて、應用文學に自己の境地を開拓せんと試みるも妙ではないか。

應用文學といへば勿論範圍は廣い、歷史傳記の類、智識の啓發を主眼とした少年文學のたぐひ、此等は其の中心となるものであるが、其の他にも、文學の助を多分に借る事業には、文學を應用するがために其の効力を増すものが幾らもある。總じて專攻專門の部面を除いては、法律でも醫學でも、物理、化學、地理の如きでも、みな之れが叙述に文學を應用して、一般世人の有益な讀み物を作ることが出來やう。

法律、醫學、理化學などに文學を應用するといつても、何も夫の外國で一時流行つた科學小說、すなはち科學上の新發見や空想やを小說の趣向に取り入れたといふやうなものではない。むしろ主となるものは確乎たる知識で、文學はたゞ其の知識が自然に有し得る情を發掘し、吹き起こして、之れを以て智識を興味あるものにするだけの工風をすればよいのである。文學に科學の色を借りるのでなく、科學を說くの方法に文學の力を借りるのである。文學の形式を科學の內容に應用するのである。近日わが國でも科學的知識の通俗の說話が、一般讀書界の興味を惹くに至つたのは、著しい現象であるが、併し此等の說話の多くは、たゞ通俗平易に說くといふに止まつて、未だ應用文學の域に入つたものは多くないやうである。あれらの說話は今一ふるひかけて、啻に內容そのものが珍しいのみならず、書きやうが面白いといふものにして、それで而も空想と間違へられないものにすることが出來さうだ。是れをやるには、科學者みづからが同時に文學の筆と頭とを持つてゐれば是れに越すことはない。併し今のところ矢張り文學者が進んで科學の領分に脚を入れるのが早途でもあり、また文學者自身に取つても便益が尠くあるまい。斯やうな方面に工風をしたなら、家庭讀本などいふものゝ出所には困りさうもないが、どんなものか。勿論工風は何の場合にも入る、必ず何れの點にか獨創の所がなくては、別に其の人の新應用とはいへなくなるから。

若し夫れ歷史、傳記等の方面にあつては一層文學の力を加へたものが必要でありながら、未だ多くの新しい魅力あるものに接しない。傳すべき人は明治以後の歷史にても隨分ある。而も未だ此等の傳記で一世の讀書社會を傾倒せしめるといふやうなものは出ない。此等の方面にこそ技倆あるものが大に腕を揮ふべき餘地は殘つてゐると思はれる。（明治三十九年九月）

俳句的標象

僕、俳諧はせざれども、其の樣式に意味ありと信ずるなり。俳句の將來如何との尋ねには一寸答へかねれど、今までにある句について言へば、其の妙を思はるゝものには、一種の意味に於いて標象の極意あるべし。言ふこゝろは、極めて短き詩なるがゆゑに之れを靈活のものとせんために殆ど電光の闇を裂くが如き瞬間の深意を事物に求めんとす。妙句中の靈機は眞の閃光なり。前もなく後もなく、到底形似し說叙して盡すべきものに非ず。句はたゞ其の合圖を與ふれば足る、餘るところは讀むものゝ主觀の心々なり。一閃電が照せし暗中の光景を、己が心のまゝに想像し補充し展開し行くところに興味の源あり　畢竟はみづから想ふの樂みなり。句はたゞ之れに合圖を與へ、標示を與ふ、しかも極めて峻烈の刺戟性なる標示なり。斯くの如き意味に於いて、俳句といふ樣式の文學には標象的のもの多し。啻に俳句のみならず凡ての詩には此の性を極意とすること多し。俳句はたま〳〵樣式の短きを生命とするがゆゑに此の點ことさらに著しく見はるゝのみ。僕等は此れを以て俳句の特色と見んとす。

想味の閑寂といひ俳諧といふが如きは、只其の體又は類にして生命にあらず。俳句の想は閑寂ならざるべからず、俳諧な

らざるべからずとは、何人も限るべき理無かるべし。たゞ十七字、若しくは極短小といふ形式より來りたる特色が俳句と俳句ならざる詩との區別なるべし。

短小十七字といふ形式を規範とする限りは、こゝより必然生じ來たる特色は、其の感想の極めて閃電的なるを要すといふことなり。然れども詩美の本領は閃電の如く短小のものにあらずして、無限に廣き光明の天地を展べ來るにあるが故に、閃電は閃電に止まらずして、其の奧に十方遍照の大光明を牽ゐ來らざるべからず。すなはち此の意味に於いて句中の閃電的靈機は直ちに大光明の鋭き標示たらざるべからず。凡て詩はみな多少此の性を帶びざるなしといへども、俳句に於いて特に其の然るを見る。畢竟標示以上多くを説くべき餘地を有せざるの形式なればなり。

而して此の標象的なる特色は、之れを就中人事に求めて、廣く他の樣式の文藝に應用するときは、現代の新趣向に合すべき好尙となるを得べし。新代の人は、客觀に事象のこと〴〵く現はれたるよりも、むしろ其のうしろに深く潛みたるものを喜ぶ。何ものゝ刺戟をか得て自ら想はんことを願ふ。客觀はたゞ一の合圖にして、之れによつて實は際涯知れざる主觀のおのが內面の生活を讀み、歎へ、味はんとするなり。對當にはたゞ効果の峻烈なる標示を得れば足る。何事をか想はんとするなり、深く想はんとするなり、自ら想はんとするなり。是れ實に新代文藝の一大特色なるべし。

俳句が此の要求を一手にて充たし得るものなりや否やは、僕知らず、たゞ上に言ひしが如きもの、若し以て俳句の中樞性なりといふを得ば、之れを他の一層大幅なる文藝にも及ぼして、如上の意味にての俳句的なる味ひが新代の讀者に迎へらるゝものに非ざるかを思ふ。

すでに俳句的といふ以上、大幅なる文藝に於いては、點綴的にところ〴〵此の風格の妙句を嵌裝するも一方たるべしとい

へども、同時に部分局所は精細なる客觀的描寫に滿つるも可なるべく、此の場合には其の大幅の全局が一の標示となりて奥にある更に〳〵廣大なる天地を覗かしむれば足らん。要は擧ぐる所以上に想を馳するの無邊際あるべし。此の自由の一層大なるものは一層新代に近きものなるべし（明治三十九年十月）

文藝の調の飜譯

文藝の絶對價がたゞ其の感情の上にあるの理は、多く言ふまでもなからう。事を傳へるだけなら文藝の必要はない。又理を傳へるに於ても文藝の必要はない。ひとり其の事其の理を生きたものとして傳へんとするとき、そこに始めて文藝の光が欲しくなる。而して事や理の活きてくるのはたゞそれが感情の血に溶けて流動し始めるからである。此の流動の姿をそのまゝ手に取つて人に授けんとするのが文藝の要旨であらう。

併し流動の姿をそのまゝ手に取るといふことは知量の外である。感情そのものに直接に指を觸れた氣持は、之れを表白するに於いても、はた之れを感納するに於いても、到底證說の能くするところではない。之れを譬へば香ひの說き難きが如く光の捉らへ難きが如きものである。玆に吾人が調と名づけたのは此の一現象を指すに外ならない。

さればあらゆる文藝には調がある。而して猶夫の感情の一面全く普遍であると共に他面に個々特別の相を具して居ると同じく、文藝の調も種々の意味に於いて個々の面目を表してゐるのは勿論であらう。たゞ吾人は此所に種々の意味といふ。或者は大に個的なるべく、或者は少しく個的なるべく、又或者は國民性によつて別あるべく、或者は題材の種類によつて別あ

るべし。此の各自特有の調を感受するに至つて、始めて其の文藝は鑑賞せられたものといはれる。

批評の發足點に鑑賞の無かるべからざるは言ふ迄もないが、飜譯の發足點にも是れが無かつたら文藝の飜譯にはならない。文藝の飜譯に生命となるものは言葉でも筋でも落想でもなくして實に調であらう。調の飜譯といふことが缺けてゐたらそれは飜譯ではなくなる。而して調を飜譯せんとする以上、飜譯者が先づ其の原作の調を感受するの要あるは勿論である。

今の我が飜譯文學の多數には此の用意が頗る缺けてゐるやうだ。無論中には十分原作の調を鑑して、之れを譯文の上に流し出さうとはして居るが、技倆が足らず、乃至性向が合せずして、どうも其の調が出ない、自分の調になつてしまふといふものもあらう。併し初めから鑑識といふ域に至らずして之を譯したと見えるものも決して尠なくない。

此の種の飜譯には、啻に原作者の特調が香ひ出て居らぬのみならず、丸で題材民性の別すら棄てゝしまつたやうなものがある。原作者の個人格から來る調を譯し出さうといふのは、それは餘程老手でなければむづかしい事かも知らぬ。けれども題材民性の別から來る調ぐらゐは必らず譯して貰はなくてはならぬ。殊に題材の特質から來る調などに至つては、之を逸し又は變ずるが爲に文藝の醇味を破り去つてしまふ。時としては滑稽のものとなり了る。詩句の飜譯の如きに至つて、特に此の注意が必要である。極端に此れを言へば詩句の飜譯にあつては、句中の意義、言語の如きはどうでもよい。譯者はまづ其の句を誦して、言語以外主義以外に縹渺として心に殘る一種の情調を、如何なる方法に於いてか直下唇に上せて音にするといふ樣な工風をして貰ひたい。吾人は意味の明かな調の無い譯詩よりも、意味の支離滅裂なものでもよいから調の傳はつた譯詩を佳しとする。

同じ事は音樂の飜譯にもある。飜譯といつても樂譜は元のまゝであるから、こゝでは之に伴ふ歌詞の飜譯又は新作歌の臨

用といふことゝなるが、樂譜はやがて原作の調そのものゝ記號であるから、之れに新しい詞を後から引きあてる時、そこに文學の飜譯とは違つた一種の現象を生ずる。すなはち引きあてられた新詞が果してよく原作の調を傳へ得るや否やといふことが一聞して分かる。言ひかへれば、樂譜の調と新歌詞の調とがうまく相諧ふや否やといふことが直ちに其の試驗となる。而して若し歌調みづからの調が原音樂の調と合しない場合には不快または滑稽の感を起こす。樂劇の飜譯の如きは、歐洲諸國たとへば獨と英との如き差に於いてすら、しば〳〵此の弊あるを免れぬといふ。我國にあつて、西洋の樂曲に直ちに詞を附する唱歌の例の如きも、其の調の粗大雜駁なる場合にはさしたる不都合もないやうであるが、少しく微妙な情調にわたるときは、直ちに右の破綻を生ずる。不快かさもなければ滑稽なものとなり了る例が多い。

されば我國に作曲家が起つて曲と詞と皆邦人の手になるの日が來れば、其の時始めて、互に其の調を相味うて、乖離のない音樂が出來るであらう。それまでは西曲の借用も已むを得ぬ事として、たゞ其の飜譯歌詞若しくは新歌詞がみづから藏するの調を傷ふことなく、無理をせずして而も原曲の調と相諧ふやうに力むるの外はあるまい。即ち十分原曲の調を鑑識した上でそれを歌詞の上に流れ出でしめるだけの用意ある作詞者を得なくてはならぬ。要するに玆にも調の飜譯といふことが根本である。（明治四十年四月）

文藝瑣談（耳に訴へる文學の缺乏）

先日お招きにあづかつて本郷座の芝居を拜見にゆきましたが、森田氏の『無名氏』といふのを、西村君と佐野君とで、脚色せられた演題でした。西村君や佐野君などは多少物もお書きになつて、譯の分つて居るお方とおもつて居ましたが、存外お氣のつかれぬところが多いのに、太だ失望しました。いろ〳〵拜見して居る内に氣のついたところもありましたが、其の中で今記憶に殘つて居るのをお話しませう。（最も俳優又は藝の事については、『趣味』の方へ書く事にして置きましたから、脚本の事についてお話しませう。）第一科白の中で耳ざわりであつたのは、書生言葉の大變に多い事でした。全體書生言葉といふものは、吾々が普通座談の際に喋べつて居る時には大抵譯のわかるものであるが、書生以外の人、換言すれば、今日學校や寄宿舍で使ふやうな言葉を平生使ひなれぬ人などは、一寸聞いてもすぐ分りが六かしからうと思ふ。例令へばあの中に死屍に鞭打つといふ言葉があつた。死屍に鞭打つといふ言葉は吾々仲間で使ふてこそ譯が分るが、普通學以下の學程の人には恐らく一寸聞いても分るまいとおもふ。殊に死屍といふ言葉は發音學上では、シ、シ、といふのに餘程の時間と勞力を費やさなければならぬ事になつて居る。シ、といふ音は發音に要する筋肉のあらゆるものを動かさなければならぬ事になつて居

る。だから科白といふものは一種のエロクユーションであつて、なるべく滑かに、なるべく朗々と、聲を發するのに、安々と音が出て、人を感動させねばならぬものであるから、音を發する爲めに、筋力の運動に勞力を取られて居なければならぬやうな言葉が、はいつて居ては面白くない、殊にシ、シといふやうに發音學上、非常に重苦るしい、筋肉の運動に時間と勞力とを要するやうな言葉が二つも重なつては、外のしぐさにも間隙が、從つて出來るといふやうな事になる。猶氣をつけて見ると、死屍に鞭打つといふ言葉は、文字に書き現はせばその意味は分るが、たゞ口で『シ、ニムチウツ』と言つた丈では、無論前後の關係で判斷出來ぬ事もないが、氣のつかぬ時に一寸聞くと、獅子に鞭打つと聞えるかも知れないし、又四肢に鞭打つと聞えるかも知れない。兎に角かういふ損な言葉を入れるといふのは餘程氣をつけて貰はなければならぬ。小説ならば唯だ眼に訴へるものだから關はないけれども、脚本となるとさうは行かない。

かういふ具合で今日の文藝界で、一番缺けて居るのは、耳に訴へる文學である。お作りになる方も目に訴へる文學の方へ多く心を費いで耳に訴へる方を疎かにして見えるやうに思ふ。小説の方へはさまで此の議論を押し擴めて行く譯には行くまいが、新體詩などは、是非此論を採用して貰はねばならぬ。

今日の新體詩で、何處が最も缺點であるかといふたならば恐らく耳に訴へる方が忽かにしてあるといふ處であらう。尤も詩人の中でその方面に意を傾けて見える方もあらうが、まづ一般にその心がけが少ないやうに思はれる。小説は朗讀するもので無いかも知れぬ。則ち默讀して可いものであるかも知れぬ。然し新體詩は全然默讀すべきものだとは言へまい。少なくとも默吟すべきものであらう。若し默吟すべきものであれば又一方に默聞するといふ言葉が使へる筈だ。新體詩即ち韻文は默吟して默聞するものではあるまいか。詩と散文との區別は此處にあると思ふ。默吟、默聞といふ言葉はをかしく聞えるが、

實際默吟し默聞する事が出來る。讀んでゐる中に一種の節奏に操られて、調子に乘つて默吟する、さうすると生理學上の理によつて、空氣の媒介を借らずに耳に訴へる事が出來る。散文は唯だ目で見て心で讀む、けれども韻文はどうしても、目で見ても、やはり默吟で、耳には默聞すべきものである。

今日の新體詩界で此の方面に意を濺いでゐる人は誠に少ないやうに思はれる。唯だ單に目にのみ訴へて、耳に訴へる事のないつまり默讀すべきもので、默吟、默聞の出來ない文學が多いやうに思ふ。これは一般に脚本や韻文をお作りになる方がよく心得て居て貰はねばならないところである。だから私は、新體詩は、七五でなければいけぬ、又は八六でなければいけませぬといふやうな議論はしない。けれども、朗讀しても、人を高調に誘ふやうな節奏があつてほしいといふのである。默して讀んでも、思想上の節奏に合つて、默して居ながら、フト口吟さみたくなるやうな調子がほしいといふのである。

猶此頃では此の節奏の事に就て、いろ〳〵と變つた議論が起きて來て居ますけれども、一一紹介するのも長くなるから、今度はそれだけに止めて置きませう。（明治三十九年十一月）

考へさせる文藝と考へさせぬ文藝

今の社會の文藝趣味は、二大別して考へさせる文藝と考へさせぬ文藝とにすることが出來やう。

たゞ目や耳の快感に訴(うつた)へるのを主として、其の瞬間だけ何事も忘れて、心を全く空にして笑つたり喜んだりすればよいといふのが考へさせぬ文藝である。また目や耳を通り抜けて心の奥で何事をか深く考へ込ます所に妙味のあるものが考へさせる文藝に外ならぬ。

斯やうにざつと二大別して、さて世間に現存する文學美術 作品を見ると、此のどちらかに屬するものといふことが分かる。多分は無論考へさせぬ方であるが、考へさせる方のも無いではない。

どちらが善いかといへば、文壇的の立場から言へば考へさせる方が一層よいものと我等は信ずる。之が近代文藝の生命でもあらうかと思ふ。併し考へさせぬ文藝も社會の多數者のためには必要のものである。通俗文藝は何時の代でも此の風のものであらう。

社會の生存事業が段々忙しくなつて來て、過度に働く多數の人々は、其の一日の勞作を晩酌の一杯にでも慰めて、さて之

居にでも行かうといふとき、考へ込み鬱ぎ込ますやうな藝術よりも、大口を開いて譯もなく笑つて、美しい色や快い音に耳口の汚れを洗つて歸る。是れが彼等に取つては一つの事件である。斯やうな人は何時の世、如何なる國でも無くなるものではなからう。隨つて之に應ずる文藝も必ず在るべきであらう。

たゞ、我等の理想から言へば、體の勞れ、心の勞れも全く別種な文藝が與ふる精神上の作用で、洗淨する途のあることを普く世に知らせて、斯くの如き文藝出で、斯くの如き慰安の普及せんことを切望する外はない。

日本の今の芝居の如きは、概して考へさせぬ文藝である。但しそれにしても、尙餘りに隙りすぎて物足らぬ點の多いことは言ふまでもない。即ち新工風の通俗劇の必要なる所以である。

それには俳優の技藝、舞臺のメカニックス等にも改善の必要はあらうが、先づ何よりも急なのは脚本の改良であること、萬口一致の意見であらう。

近頃見た新脚本の中に、山崎紫紅氏の『七騎落』といふのがある。中の「佐良々越」などは前言つた考へさせる文藝の方にも近づいて、新作者の物としては、頗る注意すべきものと思ふ。新聞雜誌に多少の讃評はあつたやうだが、あのまゝさして世の注目も惹かずに過ぎ去つては、口惜しい。蓋し近來出た新脚本の中では、最も氣の利いた、前途を示した作の一つであらう。（明治三十九年十二月）

英國の尙美主義

是れから述べますのは英國尙美主義の話でありますが、尙美主義はまた唯美主義、審美主義とも譯しまして、英語のイーツセチシズム Aestheticism がそれです。即ち美といふ事を中心として一切の事を判斷するものです。無論この言葉の中味は複雜であるが、それは話して行きますと解つて來やうと思ひます。兎に角美を尙ぶ、美を人生の中心と觀るものと解して置いて差支へは無い、尙ほ英國の尙美主義といへば更に一層限られたものとなります。元來尙美主義は歐洲の他の國たとへば佛蘭西などにもあつた。それを茲では特に英國と限る譯です。さて私が此話を思付いたのは一つは此主義が日本現時の社會の種々の狀態と餘程通ずる點があるからである。例へば日本の文壇で新體詩に星菫主義といふものがあつた。それから近時は社會全體に渉つて高襟(ハイカラ)と云ふものがある。是等に通じた一種の傾向が英國の尙美主義と餘程よく似てゐる、面白い對照であらうと思ひます。假に英吉利のイーツセチシズムを高襟主義と斯う譯したら此れに附帶して種々の對照類似がそこに出て來る。例へば當時英國で尙美主義と盛に戰つた反對派をフヰリスチン (Philistine) と呼んだ、是れがちやうど日本の道學先生といふ言葉に當る、又同じく尙美主義の人達が同じく盛に使つた言葉でヴァルガー、ハード (Vulgar herd) と云ふ言葉が

ある、此れは日本で云ふ俗人原または鐵カラ黨の意に相當する。此等の言葉が當時の論壇に盛に使はれて互に鎬を削つたものである。要するにイーツセチシズムは英國の高襟主義といふことが出來ませう。高襟主義は日本では今の事であるが、英國にては丁度今から二十年乃至三十年許り前、即ち丁度一千八百六十年頃始つて、七十年八十年と二十年許りの間が倘美主義全盛の時代に當つてゐます。面白い事には凡て文藝上、社會上の新しいムウヴメントの本場は佛蘭西と云ふのが常であるが、此倘美主義の運動の起つた前後には却て平生おとなしい英國に種々の新運動が起つた。何々イズム、何々ムウヴメントと盛に新氣運を起さうとしたものである。夫の宗教上のオックスフォード、ムウヴメントまたは繪畫上のラファエル前派など皆それで、ついで一方には倘美主義の運動が起つたのであります。先づ活氣のあつた時代で、これは前申す如く一千八百六十年頃から八十年頃迄の事柄であつた。

さて此主義が如何にして起つたかと云ふ話に戻りますと――斷つて置きますが、之は英吉利のウォルター、ハミルトンと云ふ人の書いた書物を土臺にし、他の書物を參考として調べたのです――此派の運動はノルドオの說によると夫の佛蘭西のボードレール、今から丁度四十年許り前に死んだ詩人が本であつたらしい。此詩人が死ぬと同時に恰も昔アレキサンダア大王の死後諸侯が其領土を爭つて分け取つたやうに、此大詩人の崇拜者が四方から起つて惡るい善いの見境なく其の特色を諸方から模倣した。此等の詩人以後倘美主義に及ぶまで乃至其後までを引くるめてノルドォはデカダン即ち時代末詩人若しくは頽廢期詩人と謂ふ。即ち文明と云ふものが時期を限つて進み行くうち先づ一期の文明が頂點に達すれば爛熟して腐つて潰えんとする。而して之に新文明が代らんとする場合には先づ其爛熟した文明を破ると云ふ必要が出て來る。此種不安の時代は即ち、頽廢期であり又時代末である。

元來デカダンと云ふものは必ずしも佛蘭西に限らない、飛んで伊太利に往つては惡魔の歌を書いてデカダンの風に感染したと言はれるカルヅッチがある。獨逸は割に少いが英吉利に行つては殆んど此風潮の支店が出來た。それは即ち此の尙美主義である。斯樣にイーツセチシズムは佛のデカダンの別派とも見られるが一番初めに之に感染した人は詩人のスヰンバーンであるといふ。但し斯く尙美主義が佛の思想に本づかせるの當否は別として、實際スヰンバーンが英吉利に於ての此の運動の元祖であることは明かだ。そこでノルドオは例の猛烈な筆法を以て此等の人を罵つて、神經衰弱、墮落者、無暗に神經がつて、不思議がつて、高尙な事を云つて、無暗に道德に反抗する、罪惡を悅んで書く、肉の喜びや劣等の事を讃美する、惡魔主義、墮落主義であると口を極めて嘲つた。ノルドオは前の如く觀たのであるけれども、英國の尙美主義と云ふものが果して直接に佛蘭西から來たのであるかどうかは暫く別として、是れが一方英國の夫のラファエル前派運動といふものを父として生れて來たものであることは明かである。即ちラファエル前派の續きが尙美主義である。系統は左樣であるが、主義其者はと云へば大に變つてゐることをも認めねばなりません。

元來此ラファエル前派運動といふものは御承知の如く當時の若い畫家彫刻家詩人等が六七人集つて、英國文藝界の現狀に滿足せずして、就中繪畫の方を中心として一種の新運動を起したのである。歐洲繪畫の本元は人も知る如く伊太利であるけれども、彼の伊太利繪畫の黃金時代たるラファエル、ミケランゼロ等の出た頃から段々繪が完成すると共に種々の型や法則が出來て、後人はたゞそれを手本とする許り、次第に自然と遠ざかつて仕舞つた。我等は自然を手本にして自然に立還らなければならぬ、所謂リターン、ツー、チーチュア主義でなくてはならぬ。それには古伊太利のラファエル以前の畫家の態度が慕はしいといふ所からラファエル前派と名のつたのですが、是が丁度千八百五十年頃即ち尙美主義より十年餘り早く起つたのです。其

時の人々は夫のロゼチの外ホルマン、ハントとかミレートとかいふ連中であつたが、其の主義は前いふ如く自然に還れといふ自然主義であると同時に、又寫實主義も含まれて居り、濃厚の感情主義も含まれてゐた。中にも寫實主義自然主義と感情主義とは矛盾した性質を有つて居るもので、斯やうに不統一な主義であつた爲でもあらうが、此派は當時は餘り成功しなかつた。千八百五十二三年頃には早くもちりぢりばらばらの姿になつてしまひました。而して其の一人たるロゼチは自分獨自の傾向を追うて專ら感情的方面に特色を發揮することゝなりました。無論種々の特色も他にあるが、濃厚な情緒といふことが彼の畫や詩の中心の特色であつた。斯くて或時彼は當時の學問の府である處のオックスフォードに招かれて繪を書きに行きました。すると平常から彼を崇拜して居る一二の學生がやつて來た。その人々はウイリヤム、モーリスと云ふ美術家、スヰンバーンと云ふ若い詩人などで、是等の人々がロゼチの餘風を逐うて一つの團體を組織した、是が即ち尙美運動の端緒である。

人によつては種々な人をまで此の尙美運動の圈内に入れようとしてゐる。例へばブラウニング、テニスン、亞米利加のホイットマン、獨逸のワグナーまでも引き入れる。斯うして見ると十九世紀後半の文學者は尙美主義に入ら無い者はないことになります。是れは餘り擴げ過ぎたものであるが、兎に角十九世紀後半を通じて當時の文藝家で多少此の風潮に染まぬものは無いといふ氣味であつたのでせう。そこで一體尙美派と云ふものはどう云ふ事を主張するのであるかといふに、先づ其の特色といふものを見ると、詩では概じて言葉が綺麗で繪のやうで敍述が繪の樣、すなはちピクチュレスクで、インテンス即ち感情の濃厚と云ふ事を生命としてゐる。濃厚の感情は一方には動もすれば事物を誇大にする結果、其の產物が虛飾的浮華的になるを免れぬが、詩にあつては調子が音樂的な綺麗なものにもなる。

此尙美主義が始めて世に出た時は非常に世間から攻擊を受け、爾後引きつゞいて二十年間四面楚歌の聲といふ形勢で嘲弄

攻擊の矢表に立つてゐた。併し是れは主義そのものゝ特色といふよりも他に理由があつたのでせう。さらば斯やうに英吉利のやうな大人しい國の論壇に訴訟沙汰となるほど騷しい論爭を惹き起こした理由は何であるかといふに、全體此の主義の人々はどんな連中であるかといふに先づ前に云つたウイリヤム、モーリス、此人は裝飾美術の專門家で、今日歐洲の壁紙の裝飾模樣などは多くモーリス式であります。此の方面に革新を起こした人で、又詩人でもあつた。次は同じく前に云つたスヰンバーン、其の外ではオスカー、ワイルドといふのが最も注意すべき人で、此れは詩人であつて詩も散文も書いて居ります。併し此人の尙美主義に於ける立場はむしろ實行者といふ點であつた。そこで先づ此のオスカー、ワイルドの尙美主義に下した定義といふものを見るに、第一、藝術は藝術みづからを目的とする。隨つて第二には藝術は人生、自然、思想などいふものに賴ることなし。惡藝術は此等を目的とする所に生ずる。總べて此等のものは一旦藝術の型に入れて始めて妙がある。第三に較もすれば人は藝術が人生を模すると云ふが倒樣である、人生が却て藝術を模するものである。人間は本來模倣性を有してゐるから一番美しい形式を以て自分の感情を表すものである限り、人間が其の目的とか乃至其の他の感情とかを表はす場合には藝術を眞似てこそ最も都合の好い譯である、といふに歸する。隨分思ひ切つた當時一般の風尙に對する反抗主義であつたのです。同じく人生を描くにしても成るたけ現代を離れるがよい、現在自分の痛切に感ずることは非藝術的である、といふのです。斯樣な主張を以て居ることが世間一般から極端な邪論として罵られる傾を以てゐる外、オスカー、ワイルドは前にもいふ如く此の尙美主義の實行者であつた。此れが亦少なからず世間に對して戰を挑んだ事になる。例へば彼れは着物からして變へて、審美的衣服と名づけたものを着た。我々の美の感情を滿足せしめるには普通に着るやうな無趣味な俗なものではいかぬと唱へて、昔に歸つて、中古風俗の色のけばけばしいものを着た。又向日葵や百合の花、此の二箇の花はど

う云ふものだか此の派の人に氣に入つたと見えて、外出の時は襟か胸に乾度百合の花か向日葵かを挿した、此等の花は此派の目じるしとなつた。又孔雀の羽根を卓子の上に置くとか、或は手に持つて行くとかして、之も此派の標象となりました。或は道學先生や俗人原を驚かして遣るといふので、ペルメルなど云ふロンドンの盛んな場所を此の風俗で練りあるいた。どう見ても狂氣か、さもなければ氣障な奴といふ風であつた。要するに奇矯を衒つた氣味であつたのが、少くとも反抗を受ける一箇の理由であつたのであります。其外日本で云へば奈良朝式とか、平安朝式とかいふやうな好みで、家などをも裝飾する、今の家は殺風景で俗でいかぬといふ所から、中古形の裝飾などを施し、ちよつと器具に彫刻をするにも必ず楔形、菱形といふ一種特殊の好みでなければ滿足せず、窓には繪硝子の古雅な物を用ゐ、古い陶磁器などを無暗に集めて、室内をさも〳〵おれは趣味があるぞといふ風に飾る、之が却つて普通の人にはやりすぎ、いやみといふやうに感ぜられた。斯くて二十年程も冷嘲熱罵の中に過ぎて、千八百八十二三年頃に及ぶと、世間も攻撃に倦れた氣味、又侚美派自身も世に揉まれて温和になつた。

さて此の主義の世に與へた効果はどうかと云ふに、少くともスヰンバーンのやうな一代の大詩人も是から出るし、又モーリスの盡力は竟に英國のみならず歐洲の室内裝飾に變革を來たし、之を高上せしめた。是等は侚美主義の賜であります。此主義が攻撃せられる最中の狀態は隨分烈しいものであつたらしい。英吉利の文壇も百年前には今日の日本など〻同じく隨分人身攻撃もやつたものであるが、近年すつかり論壇の調子がおとなしくなつて紳士的になつてゐる。そのおとなしい文壇が侚美主義を中心として一時非常に猛烈な喧嘩をやつて大波瀾を起して來た。中にも夫のロバート、ビュカナンは先達て死んだ人であるが、此人が反對派を代表して、啻に侚美運動のみならず、頽唐派と見られたラファエル前派までをも盛に攻撃したの

です。其の結果遂に自分から裁判沙汰を起すに至つた。彼れビユカナンは先づ、スヰンバーンが詩集を出した千八百六十五年頃にスヰンバーンを猛烈に攻擊した。「詩人の會合」と云ふやうな詩を書いて、それでもつてスヰンバーンを嘲弄したのである。或倶樂部で文人が會をしますと、ゲーテもテニスンも來て居りました其席に、スヰンバーンも矢張り遣つて來た。二十二三歲の壯者が髮を長くして蒼い顏をして遣つて來て、それで氣焰を吐いて狂氣の如く道德はくだらないものである、眞理とか神とかいふものは一向信ずるに足らぬなどゝ廣言を吐く、一座皆驚いて白けて了ふ。座長の計らひで其壯者を外に出して了つたが、此の下郎た壯者が即ちスヰンバーンであるといふ意味の人身攻擊でした。次にはラフアエル前派のロゼチの攻擊をやつた。之は有名なもので、ハムレットの芝居の役割にあてゝ此等の人を嘲つたのです。またロゼチ、スヰンバーン等の作風をビユカナンはフレッシュリー、スクール（Fleshly school）即肉體的感情許りを歌ふ派である、無暗に肉がかつた事を書くものであるから怪しからんと云ふ意味で專ら道德的の見地から攻擊した。要するに當時の道學先生側のチヤンピオンとして立つたのであります。所が前のハムレットの役割其他にも動ともするとビユカナン自らが匿名でありながら自分をば立派な詩人のやうに評して、自分で自分の名を善い席に据ゑるなどの事をした爲に、文壇からはビユカナンも非常に批難せられた。斯やうにして辯難攻擊が新聞や雜誌の上で交換せられ、尙美派側ではスヰンバーンなども惡戲をしてビユカナンを嘲弄し、遂にビユカナンから名譽回復の訴訟を起すに至つた。其の他一方では滑稽雜誌ポンチが一時盛に尙美派を嘲り、また此頃英國でやかましい「ミカド」オペラの作者が「ペーセンス」と云ふオペラを作つて同じく尙美派を題にし、同時に倫敦に二箇所の劇場で大當りを取つたなどいふ狀勢でした。

以上述べる如き事實が即ち尙美主義の話でありますが、今此の話を了るに臨んで、之に結論的批評を加へて見ますと、尙

美主義といふもの〻中には、凡そ三點の注意すべき箇條がある。即ち第一はビュカナンの所謂肉感的といふこと、第二は藝術は藝術みづからの爲と稱して思想道德の凡てから獨立しようとすること、第三は情緒の强いのを主とし自己といふものを餘りに明かに揭げ出さんとすること、是れであります。肉感的といふことはビュカナン等が考へるほど絕對に惡いことではない。肉と靈とを餘りに分ち過ぎる舊來の理想說はたしかに事實を逸したものである。併し無暗に肉の聲を聞かせすぎて嫌惡心を刺戟するのは無論弊でありませう。ビュカナン等は專ら道德的見地のみから藝術を限らんとしたものと見られる。併し此相對した見方の矛盾は何時の時代にもあります。又第二の藝術は藝術の爲といふことには、通例二種の意味がある、即ち一は藝術を道德眞理等に對せしめて、之から獨立するといふ意味と、一は藝術中の技巧を內容から獨立せしめて技巧即美と見る意味とであるが、併し此二樣の解釋も根本には通じた點があつて結局、美といふものは眞理や善德やの助を藉りずともみづからとして目的があるといふに歸します。たゞ其美といふ場合に技巧のみを取るか、今少し廣い意味にするかといふだけの差です。此の主義を尙美派は一層極端に持つて行つて、人世最高の支配權は美にあると見んとした所が道德派の反抗を招いた所以でありませう。美は宇宙人生の最高現象、少なくとも其の一であることは疑もないが、それで實際生活を支配せんとするには弊がある。夫の美的生活といふが如きものは、文藝の範圍に始終すべきものを實際生活の上に濫用するより生ずる一種の悲劇でありませう。次に第三の自己の發揚といふこと、是れにこそ重要の意味がある。蓋し當時動ともすれば科學的精神の勃興につれて客觀のために自己といふ主觀が埋沒し盡されんとする、之に慊らずして埋沒したる自己を搔き起こさうとしたのが即ち此の主張である。而して此の際自己を代表するには情緒の熱烈なる發動の外途がなかつた。所がそれもやはり例の極端に行つて、情緒の熱烈は誇張となり奇矯となり遂にオスカー、ワイルドの如き人を出して一擧一動みな自己

の廣告と見られるやうな事をする、ノルドオの所謂自己狂（エゴーマニヤ）となり了つたのであります。

此の自己主觀を先とする見解と、一方の客觀を主とする寫實的自然派的見解とは、是また由來容易に相合せざる一大矛盾でありますが、私の即今ひそかに考へてゐる所では、そこに一道の解釋がある。一言にて掩へば主觀の我はたゞ生命となつて一切の事象を客觀の指圖に任せ、そこに主客兩體の融合を見出だすといふ如き妙道を求めるのでありますが、是れは到底玆では述べつくせない、一つの纏まつた思想であるから他日を期するとして此の話を終ります。（明治三十九年講演筆記）

「五人女」に見えたる思想

上

西鶴が好色本に思想を云々するといへば、或は奇異の感を懐く人もあらう。所謂浮世草紙の片々たる小話、描くところはひたすらに色道の微細にわたり、脚色の不十分なるは以て後世の小説といふ名に適せず、目的はた偏へに猥雜者流の翫弄にまかすにあつて、絶えて其の以上の消息を意識せず。斯くの如き作品の中に思想をたづね哲學を索めるとは腐つた魚の眼を[illegible]強いて珠玉の扱ひにするにも增した無理ではないか。想ふに斯やうなる疑ひは、啻に西鶴物のみに限らず、多くの古風なる作品の研究に常に伴ひ起こる批難である。併し此の批難は必ずしも當つて居らぬ。

或は啻に古風なる作品のみならず、そも〳〵文藝上のもの一切は、之れに思想をたづね哲學を索むべき性質のものではないと觀る人もあるかも知れぬ。けれども是れはた一概に當を得た批難とは言はれまい。文藝の中には理を索め得る、また之れを索めることによつて始めて眞の文藝上の批判の成立する場合がある。從つてまた古風と今風とに論なく、すべての作品

は之れを思想の液に浸して始めて其の生命の不朽なる所以が明らめられる。吾等が今西鶴の「五人女」に思想を索めるのも此の意に外ならぬ。

總じて文藝上の作物が、其の發相に於いて情的なるべきの理は、何人といへども之れを否むものはあるまい。其の來たつて我れに觸れ、我れを動かし、我れを醉はすとき、味ひの情にあることは文藝上の第一事實である、何ものも此の事實を覆へす力はない。文藝は情の物である、其の生命の永遠なるは實に其の情の永遠なるが爲めである。情として來たるとき、始めて之れに文藝の銘を打ち、また情として存する限り之れを文藝の類に編み入れる。

されども――然り吾等は玆に重要なる一轉語を用ひて、されどもといふ――若し文藝の事實にして單に情といふに盡きたらば、文藝の意識は全く絕對のものとなり了るであらう。何となれば情には高下の相對比較が立たぬからである。情に活きてゐる限り、あらゆる作品は一樣に價値あり生命ある文藝といふの外は無い。而して之を享樂し居るもの〻刹那の心境からいへば、文藝はまた實に如是絕對である。文藝に高下の別は無い、文藝に醉うてゐる刹那の心には比較の意識は無い。されども、是れが文藝の一面であると同時に、他面には別の事實がある。即ち文藝の意識を時間に延ばして　ると、玆に事前すなはち享樂以前にあつて享樂の導かるべき案內の意識及び事後すなはち享樂以後に及んで回顧思念する批評の意識、この事前事後兩樣の意識が中間なる享樂の意識に首尾を附して始めて完全なる文藝の意識を完成する。文藝の心は決して單一なるものではない。學說硏究の上から言つても是の如く審美意識を單一ならざるものと見るところに近代の意味がある。審美意識を合成的と見ること、是れ吾等の重大事として豫め特記し置かんとする點である。

事前の意識、事後の意識、及び中間なる感興そのもの〻意識、此の三段は、時として斯くの如くあらはに分かれて營まれ

る場合もあらうが、また時としては密に相接して存する場合もあらう。吾等が茲に之れを分晝するのは、理論の明瞭を希ふがためである、事實すべて斯くの如く分立するといふのではない。而して斯くの如き三段の意識中、事前事後の兩者はすなはち知識理解を主とするの意識である。知識はやがて相對比較の心であるから、茲に文藝は分明に相對の一面を有し、比較の一面を有して來る。先づ感興享樂の前に於いて我が知識思想に種々なる想へをなすものがある。其の模樣によつてそこに雜多の情が震動を起こす、此の情の震動が感興の本體である。また更に享樂感興の刹那の終り毎に直ちに、之れに接して情裡の事どもを回顧してさまぐ\に思念反覆するの知識、延いて之れより生ずる第二境の情趣、此等の者は打して吾等が審美意識といふ一團の中に納むべきものである。文藝心は斯やうに複雜なものである。而して評價は實に此の兩樣の知識思想に存する。吾等の知識思想には如何なる標準に於いてか常に高下の價値がついてゐる。之を言はゞ文明の評價とも名づけ得樣か。文藝が相對比較に於いて、其中に存する知識の文明史的評價と運命を共にするの理はこゝに存する。要するところ、吾等が一作品に對するや、先づ感興の意識によつて其の文藝たるか然らざるかを定むる。而して後ち事前事後の意識によつて其の高級文藝たるか低級文藝たるかを判斷する。一は有か無かといふ絕對判定で、他は有中の大小如何といふ相對判定である。

以上の如き立ち場から、吾等は文藝上の作品に思想知識の品等を索むるものを是認する。而して其の如何なる思想知識が最も高級に位するかといふの論は、おのづから別の重大なる研究となる。たゞ其の思想知識が如何なる方式によつて文藝中に伏在するかといふの說は、こゝに一考の要がある。

そも／＼西鶴が浮世草紙の如きは、始めから思想の研究に斑すべきものでないといふ人は、文藝中の思想の伏在に少なくとも二樣若しくは三樣の方式のあり得ることを思はねばならぬ。作そのものゝ結果について見ても、潛在的と顯在的との二

樣の思想がある。「五人女」二の卷、おせん長左衞門の結尾に「あしき事はのがれず、あな恐ろしの世や」などいへる類は、馬琴等の勸懲家が口吻にも似て、理趣の最も顯著なものであらう。けれども西鶴本來の作意は此の點にあらずして、結構着想の間、隱約として寧ろ其のあしき事といへるものに滿幅の同情を注ぐの點にある。末の句はたゞ申譯の贅言とも見られる。即ち此の場合の西鶴が作は、顯在的思想として淺膚なる勸懲の理を含蓄しながら、潛在的思想としては、更に深奧なる人生の一面を說かんとしてゐる。斯かる事例は尙ほ枚擧に遑ないほどであらう。

また之れを作者の心の狀態から見れば、思想の作中に吹込まれるに凡そ三樣の方式があり得る。第一は殆ど無意識不用意の間に思想の響作中に傳はるもの、第二は明かに意識して思想を作の中心に構へるもの、第三は更に一步を進めて、意識して思想を構へながらわざと之れを埋伏せしめんとするものである。第一種はすなはち吾等が假りに名づけて古風といつたものである。古風といへばとてそれが必ずしも今日に行はれぬものといふのではないが、第二種第三種の比較的近代の傾向なるに對して、しばらく斯う名づけたのである。近代の歐洲文學は、其の思想知識の頗る顯著となり、且つ作者みづから明白に之れを主張として意識し居る點に其の特色の大部を托してゐるものではないか。而して之れに慊たらぬものが更に進んで意識して思想を結構し、意識して之れを神秘の奧に隱さんとするのではないか。此の境に至れば、文藝は顯はれたる思想をこそは有せざれ、却つて名狀し難い凄涼の氣ある大思想のそこに隱約するを覺えしむるが如きものとなる。今西鶴の「五人女」に伏在する思想を見れば、其の方式は明かに第一境にあつて無意識的潛在的である。從つて是れだけの事情をさへ許せば、西鶴が作中に思想を索むるも決して失當の事とはならぬ。彼れが作にして大なりとの感を吾等に與ふる限りは、其の理由を尋ねて感情前後の思想に及ぶのは必要の事でなくてはならぬ。

中

西鶴が作中の思想については、十年前に草した西鶴論の中に、

西鶴が作の原來小說にあらずして短き記事文なる由は既に申上候、隨ひて作者の理想を加へて結構せるもの尠く、多くは俗にいはゆる寫實に候。されど一方より申すときは、却りて頗る理想に近き點もなきにあらず、『一代男』『一代女』など、全體より見るときは、即ちこれに候、其ゆゑは、此等の作の表にては、人生は全く好色氣質の獨舞臺にして、何程蕩淫を極むるとも社會的制裁とか周圍の係累とか申すことは殆どなく、好色者流の理想鄕も斯くやと思はるゝ有樣に候へば也。すなはち個々の事柄は寫實なりといたすも、全局の上よりいふ時は、實際にあるまじき世相に候へば也。『一代男』『一代女』の描ける所は、好色といふ目安より割り出だせる一種の理想的社會にして、また西鶴が好色の窓より觀ぜる人生の極致に候。さもあらばあれ、是れ彼れが人生觀の一部のみ、之れを以て全西鶴を掩はんとするは僻事に候べし。夫の西鶴を禪の聖といひ又は高上の理想なき野人といふが如きは、貴ぶも賤むも、ともにこの間の消息を會得せざるによるものと存じ候。或は西鶴は何故にしかく不健全なる理想世間を不健全と知りつゝ描きしかと訝る者も候はんか、そは戲作者の本意を餘りに重く見たる論と申すべし。昔時は戲作者の筆を取り候や、まづ念頭に浮ぶは讀者を娛ましめんの事にあり。『一代男』『一代女』の成れる、はた此の目的にしたがへるに外ならず候。されば西鶴のはじめより人生に對する己が感情を歌はんとせるにあらざるは申すに及ばず、彼れは人生の圓滿を夢想して之れを謳歌せんとせるにも候はず。否、圓滿を夢想せんとは致したれど、其の圓滿は人生の圓滿にあらずして歡樂の圓滿に傾かしなり、世上強大の勢力ある色慾的歡樂の圓滿に候ひしなり。而して西鶴の之れを擇ぶに至りしは、彼れの時勢と彼れの地位との所以にして、猶馬琴が勸懲の眼鏡によりて仁義世界の圓滿を想望せるが如きものに候。たゞ馬琴は一途道念の滿足を得んと欲

して煩惱の念を拒斥し、之れを以て人生の圓滿と心得候へど、西鶴は然らず、西鶴が色欲の滿足をもて直に人生の圓滿と觀ぜしにあらざるは、『一代女』『五人女』などの中に勸懲の口氣を帶べる節少からぬを見ても知らるべく候。殊に自恣自由なる『一代女』を讀み了へたる眼を『五人女』に移すときは、此の事實最も著く見えすき申候。『五人女』は即ち西鶴の觀ぜし人間の全相なるからに、其の中なるは、色も戀も、『一代女』と異なり、極めて窮窟にして、煩惱の傍に常に何物かの看守するが如き心地いたし申候、例へば等しく肉欲の戀を寫し候も、『一代女』にありては、靑天白日誰れ憚る所なきに引きかへ、『五人女』にありては、お夏と淸十郎、お仙と長左衞門、おさんと茂右衞門、お七と吉三郎、何れも其の戀密事の性を有せるたぐひ、若しくは『世に神ありむくひあり、隱しても知るべし、人おそるべきは此の道なり』『あしき事はのがれず、あなおそろしの世や』等の評語を以てせるなど、明に西鶴が描ける人間の煩惱一偏に非ざりしを證するに候はずや。(『風雲集』)

と言つたのは、大體に於いて今も變はらぬ吾等が考である。彼れが作中、小說として最も傑れた『五人女』に於いては、さすがに人生が馬琴等の描いた如く不具でもなく、怪物でもなく、活きてしかも要を摘み得た全人生の縮圖が描き出されてゐる。而して斯くの如く描き出された人生は、其の歸趨に於いて一種の西鶴調を具してゐる、それがやがて彼れの人生に對する思想の影でなくてはならぬ。

いかにも彼れは色道の快樂を中心として其の作を仕組んだ。物語の表は快樂觀の人生である。併し其の底に作者の思想として潛んでゐるものは直反對なる哀傷である。一冊五篇の小說は悉く人生の悲哀を歌つたものと見られる。但し斯くいふのは必ずしも作の結末が悲劇であるためでないのは言ふまでもない。結末はたとひお夏が尼とならずして淸十郎の命を救はうとも、おさん茂右衞門が殺されずして隱れおほせやうとも、聊かも變りはない。全部讀みゆくうちに、吾等が心は一種のみ

じめにして濕つぽいやうな、もどかしくして胸の底をかきむしられるやうな、たまらぬ不滿足な感を發して來る。いはゞ厭世の感でもあらう、歡樂きはまつて哀傷多しといふ、其の套語の意味が正しくそれである。感情派が感情の行くところを窮めて、終に言ひがたき最後の不滿不安に到達し、絶望して自暴自棄に身を破る。此の間の心的狀態が作の生命で、また思想であらう。人生は所詮感情の悲劇の塲である。人生に對して我等の發する聲は、讃美にあらずして哀訴である、疑惑である、絶望である、自暴自棄である。西鶴はすなはち我等に代つて此の哀訴、疑惑、絶望、自暴自棄の聲を擧げたものではないか。

近松も西鶴と同じくいはゆる心中物の淨瑠璃を作つて同一材料をすら使つたが、彼れの見るところはまた西鶴のとも違つてゐる。近松の作は讀みゆくに何となくうれしい心地がする、暖かな、圓い花やかな、おだやかな所が彼れの調子である。同一悲劇でありながら、其の中の人生は賴み多い、ふつくりとしたものである。西鶴のは之れに反して賴み少ない、哀れに不安不滿な人生である。言はゞ近松の人生は社會性と個人性、道德と快樂との矛盾の底に其の歸一の望を見せたもの、西鶴の人生は個人性、快樂性、感情性の一圖の向上より生ずる寂寞不滿の感を見せたものではないか。此の意味よりいふときは西鶴の思想は多くの點に於いて却つて近代の歐洲文藝に見えたる思想と接近する。個人性の寂寞、感情性の不滿、快樂性の悲哀、これ併しながら已みがたき人生の眞相である。

其の頃おさんも茂右衞門つれて御寺にまゐり、花は命にたとへて、いつ散るべきも定めがたし、此の浦山をまた見る事の知れざれば今日の思ひ出にと、勢田より手ぐり船を借りて、長橋の賴みをかけても、短きは我々がたのしみと、浪は枕の床の山、あらはるゝまでの亂れ髮、もの思ひせし顏ばせを、鏡の山も曇る世に、鰐の御崎の遁れがたく、堅田の舟よばひも、若しや京よりの追手かと、心のたまも沈みて、ながらへて長柄山、我が年のほども此處にたとへて、都の富士二十にもたらずして頓て消ゆべき雪ならばと、幾たび袖をぬらし、志

賀の都は書語と我れもなるべき身の果てぞと一しほに悲しく、龍灯のあがるとき白髭の宮所につきて神いのるにぞ、いとゞ身の上はかなし。兎角世にながらへる程つれなき事こそまされ、此の湖に身を投げて長く佛國のかたらひ、といひければ、茂右衛門も、惜しからぬは命ながら、死んでの先は知らず、思ひつけたる事こそあれ、二人都への書置殘し、入水せりといはせて此所をたちのき、いかなる國里にも行きて年月を送らん云々(『五人女』三の卷)

または、

切戸の文珠堂に通夜してまどろみしに、夜半とおもふ時、あらたに靈夢あり、汝等世になきいたづらして、何所までか其の難をのがれがたし、されどもかへらぬ昔なり、向後浮世の姿をやめて、惜きと思ふ黑髮を切り出家となり、二人別れ〳〵に住みて、惡心さつて菩提の道に入らば、人も命を助くべしとありがたき夢心に、すゑ〳〵は何とならふと構はしやるな、こちや是がすきにて身に替ての脇こゝろ、文珠さまは衆道ばかりの御合點、女道は曾て知ろしめさるまじといふかと思へば、いやな夢さめて、橋立の松の風ふけば、塵の世ぢやものと、なほ〳〵やむ事のなかりし(同上)

其の松風の吹く曉、いやな夢心地のあとの氣持はどんなであつたらうか。みじめなる快樂、哀れつぽい人世の感は、殘りなく此等の情景に描き出だされてゐる。

尙ほ近松の『戀八卦柱暦』と西鶴のおさん茂右衛門との比較については、同じく『風雲集』中の論文で、

西鶴のおさんは近松のとも異なり、近松にありては、道念の手にさいなまれての墮落に候へど、西鶴にては、濡れぬ前こそ露をも厭への意氣ほの見え、道義世界に絶望せし極終に「此のうへは身をすて命かぎりに名を立てん」と一直線に煩惱に走れるおもむき有之候(中略)彼れに取りては道念の羈は以て狂へる意馬を制するに足らず隙だにあらば、驀地煩惱に馳せんとするを人間の本相とせるものに候」

といつたのも同じ意味である。

下

其の他西鶴が作の滑稽に至つては、德川期の散文々學中多く類を見ないほどの妙を有してゐる。他の多くの劣等なる滑稽と異なり、言々悉く眞味を帶びて、鋭く人生の矛盾を剔抉し、しかも冷刻に落ちずして、おつとりとした中に滑稽の色を配し、人をして快く之れを翫味するの情に堪へざらしめる。其の例は、

菊の節句より前に逢はし申すべしといへば、樽屋、いとゞかし燃ゆる胸に焚きつけ、かゝ樣、一代の茶の木は我等つゞけまゐらすべしと、人は長いきの知れぬうき世に、戀路とて大ぶんの事を請け合ふはをかし。『五　女』二の卷）

風呂敷包は大義ながら久七殿たのむといへば、久七とゞめけれども、いや〳〵奧さまに男ぐるひなどしたと思はれましてはいかゞと出て行く。大佛稻荷の前、藤の森に休みし茶の錢も、銘々拂ひにして下りける。（同上）

以下、石山寺の開帳の條、水茶屋の品定めの條、吉祥寺の小坊主のくだり、神佛のお告げ等、枚擧に遑あらず。記事の卑陋にわたる箇條すら、滑稽によつて微かに之れを緩和したるの氣味あるは、げにも夫の伊太利散文の父と言はれたるボッカチオが「百物語」を思ひ出さゞるを得ない。ボッカチオはた百物語に卑陋の事をも憚らず書いて一方道德の世界からは批難を受けることを免れぬが、それは以て彼れが文學史上の地位を動かすに足らぬ。詩のダンテ、畫のジォットーと共に、散文のボッカチオが名は、伊太利文學の存する限り亡ぶまい。百物語中の諸短篇が、嚴格なる意義に於いて小說といふ名に合しないのも、また其の有名なる卷首の疫病の記事以下、寫生の筆に獨特の妙ありといふ評も、チョーサー、ドライデン、レッシング、キーツ以下諸多の後代文學に詩材を給したといふ事も、乃至其の文體が後の伊太利の散文を支配して、幾多の追隨者を出し

だといふ事も、全體の記叙に一味の滑稽詼諧の氣あることも、凡てボッカチオを我が西鶴に對比する理由となるであらう。

（明治三十九年十二月）

問題文藝と其材料

問題文藝と云ふ事は、屢々吾人の繰り返して云ひ、又世間も知つて居る所であるが、其眞意即ち人生第一義の道德問題に觸るゝ文藝は、かくの如き問題を提出するに最便宜の方便、言ひ換ふれば現在社會の秩序を維持する根本原理である所の形式的道德と、之れに反抗する我等自然の欲望感情との最も強い對照、若しくは最も烈しい衝突と云ふ方面に、自ら其材料を採り來るのである。而して其最も好い例は戀愛と之れを束縛する條件、例へば夫婦關係など云ふが如きものとの葛藤の如きものであらう。一言以て之れを蔽へば姦通、若しくは結婚前の戀愛が他の男女との結婚の後に現れ來る葛藤など云ふものが即ちそれである。所謂姦通文學など云ふものゝ多いのも此理であり、又英國で Man's Past, Woman's Past 即ち男或は女の過去に關する文學と云ふ類のものは此意味に外ならぬ。かくの如き材料を採り來れば、自然にそれより廻つて前述の人生第一義の道德の問題に入り易い。此式の材料を三角形(Triangular)文學とも云ふ、其意は男と女——夫婦の關係、それに後に姦夫とか、又は其以前に關係した男女とかがあらはれ來つて悶着が起る、つまり男女二人の關係の中へ第三者が入り來り、三角形になる、即ち三人の關係になる所より呼びなしたものであらう。

數年前の英國劇壇に續出した此種の問題劇の中には、例へばかの今日英國作劇界の最高位を占めて居る Pinero の The Profligate であるとか、同じく脚本家の元老たる Sidny Grundy の A Debt of Honour であるとか云ふものが即ちそれである。此等は二つながら所謂「男の過去」を描いて、結婚後に其男の情婦の現れ來ると云ふ筋である、而して芝居の事であるから、結局何れも引けぬ義理となつて、最後は死と云ふ事を以て之を解決する。併し此場合其の作の上だけでは死と云ふ事が葛藤を消滅さする事實であつて、かゝる意味よりすれば解決であるが、果して人生の覺悟と云ふものに對して幾何たりとも解決を與へて居るか否かは疑問である。

是れは單に此劇のみでなく、凡て此種の問題的文藝に伴ふ疑問で、つまりは所謂問題的文藝は問題を提出するに止まつて眞の解決をば與へずして過ぐるものではなからうかと云ふに歸する。それについては丁度此頃同じやうな問題劇で靑年作者として第一位を占めてゐる Barrie の作に The Wedding Guest と云ふのがあつた。此作の結末は一方が終に我慢をして了簡をして治まると云ふので、やゝ喜劇の性質を帶びて居た、隨て或批評家は之れを以て解決なき問題劇なりと批難した。其時に之れを演じた俳優、即ち今の英國劇界では若手の錚々たる手腕家の一人で、オックスフォード出身のボーチアーが以上の評言を反駁して、必しも死のみが解決ではなくして、一方が忍んで退いて葛藤が消滅すれば、それが解決であると云ふやうな事を論じた事があつた。併し、私は思ふに此等は皆解決と云ふ語の意味による事で藝術としては兎も角も其人生の矛盾がそこに解けるから、それを一段として完結する即ち所謂問題解決の形をなして居るには相違ないが、それが此大なる人生全體の問題に對して解決を加へたとは斷ぜられない場合が多からうと思ふ。單に主人公が死んで葛藤が消滅すると云ふよりも我等は或以上の解決を要求するのであるから、其解決に到達せざる限りは實を云へば問題提出の範圍に止まつて居ると云

はねばならぬ。而してそれは恐らく作者の非常に大なる主觀の力を借りなければ萬人を滿足せしめ後世を滿足せしむる如き根本解決は與へられないものであつて、若し之れが眞に與へらるれば釋迦も基督もいらなくなるのであらう。が、兎に角如何なる形に於てか此問題に觸れる以上、解決の方向位は暗示すると云ふ意氣込はなくてはなるまいと思ふ。

我國の作でも、單に前述の三角形問題を捉へるだけならば、古來近松西鶴を始め現代の作家に至るまで數限りなく其類例は求むる事が出來るが、其等の多くは作者の腹の据ゑ所が近世の所謂問題文藝と云ふやうな點になかつたから、同じく藝術としては「おさん茂兵衞」も死ぬ、「小春治兵衞」も死ぬと云ふ解決はあつても、所謂人生に對する問題解決の方向には多く傾いて居なかつたのである。作の重力の中心が少しく違つた方面にあつたので、そこが即ち近世の問題文藝と舊來の同じ材料を採つた作物との間にある相違であつて、而も此二方面の系統は今も存するので、英國に於ても、前に述べた問題劇の諸作と同時に出た同じく劇界の泰斗たる Arthur Jones の Mrs. Dane's Defence と云ふ作の如きも同じやうな問題を材料としながら、作の重力の中心が其問題の解決と云ふよりも他の方面、例へば戀愛と云ふやうな所にあつて、而も佳作の一となつて居ると云ふやうなわけである。我國にも同じ例はいくらもあらうと思ふ。（明治三十九年談話筆記）

新舊演劇の前途

今茲では精密な評論的態度を以て云爲することは出來ないのであるから、専ら其演じ方について我邦演劇の將來如何といふことを考へて見るに、どうも今更別に卓抜な意見といふのも無いが、凡そ今日の舊劇は二元素に分解することが出來やう、もつと精細に分けて見ると三つになるかも知れぬ、そして其の中の二つが多少變形を受けて後に殘留する元素で、殘りの一つがやがて亡びはすまいか、その三元素とは

（一）舞踊的元素

（二）自然的元素

（三）誇大的元素

の三つである。是れがさま〴〵に化合若しくは混合して今の舊劇は組成せられてゐる。而して若し此の三元素を解體せしむれば、當然亡ぶべきは第三の元素であらう、即ち舊劇中の誇大的動作、誇張的表情、グロテスクの趣味といふものがそれである、誇大的技藝とは假令は今度の歌舞伎座でやつてゐる『川中島』の鬼兒島彌太郎の科白表情などの如きが其の最ゝ著しい

例で、其の他の舊劇に時代物世話物とも大部分を占めた、つまり人形の藝から多く離れてゐない凡ての技藝がそれである。人間がやゝ以上、筋肉で動かない人形を何の必要があつて眞似をするか。當然に自然的表情にかへるべき筈なのにたゞ之を藝せん爲めとか由緒來歷を喜ぶとかの動機で誇張に墮ちて仕舞つたのが此の誇大的技藝の馬鹿々々しさである。昔の絃にかゝつた人形なり乃至は其系統を脫し得ぬ時代の趣味には是れでも滿足が出來たか知らぬが、十九世紀の寫實主義自然主義の歐洲文藝の潮流を通過した後の日本の趣味には、迚も合はう筈がない。よし今日ではなほ新潮流に感せぬ人も多く、隨つてそんな事には氣の附かぬ人もないではなからうがそれは漸々減じて我々の次の「ゼチレーション」に到れば舊劇の誇大な藝風に到底同感の出來ぬ人許りとなるに違ひあるまい。

支那の芝居乃至西洋で折々やる未開人の芝居といふものに比して、我が舊劇の此の部分は正しく兄弟分といふ系統に居る、多少の彫琢はあるが結局はグロテスクの趣味に歸一する。さうすると此誇大的元素を舊劇から除けば、あとは舞踊的元素と自然的元素との二となる、舞踊的元素は即ち振事で、今度の東京座の道成寺の如き歌舞伎座の勢獅子の如きがそれで、或點を例外とすれば立派な一種の藝として長く生命を保ちうるものであることは爭はれぬ。丁度ワグナーオペラが幾十年後の今日なほ歐洲で流行の絕頂に立つてゐるのと同じことだ、それは時代に應じ多少の變化はあるかも知れんが、此風の藝は誇大的元素とは違つて人情自然の發表といふことに逆らつて成立したものでないから、文明の變化と共に亡ぶべきものでない、つまり音樂の力、舞踏の力を結合した純なる藝術で、之を文學に比べて見ると詩（ポエトリー）に相當する、或は詩が時代と共に亡んで詩形がなくなると論ずるものもあれど、それは大なる誤謬である、在來の詩の形は亡びても詩そのものゝ形の根本は人間の本性から發するのだから、舊亡へば新が代るといふ風に中々亡びやうはない、詩と詩ならぬ文學との境目は感情の濃厚の度

合で分つ、詩が濃厚な感情といふ本性を有する限は其形は必ず節奏的でなければならぬ、人間の感情が濃厚になれば必ず表情は節奏的であるのが自然である、激して物言ふ時には其言語におのづからに節がつき、激して動く時には其動作がおのづから舞踏的となるは其證據である。同じく劇の舞踊的元素に於ても、セリフに於て音樂的、シグサに於て舞踊的となるのは是れまた一種の自然の事實に合したものである、而し此「音樂的舞踊的なるはやがて自然的なるなり」といふことが即ち永久的なる所以である、舞踊的演藝と詩とは、同じ生命を有してゐる、これが又舊劇の重な一元素であるから舊劇は此部面で永久の生命に觸れてゐるではないか、斯やうに見れば、また永久なるべきものは常に自然的ならざるべからずともいへる。

併し舞踊的元素といつても現在のものには第一脚本の上にも到底時代と歩を同じうすることの出來ない分子もある、そこは例外として見らるべきである。また之れを藝の方から見ても色の使ひ方、手足の振、衣裳の恰好などいふ外形的のものは時代と共に變遷するかも知れぬ。又音樂も日本音樂が其メロディーまでも洋樂に悉く化し了るかどうかは疑問であらうが、少なくとも其の樂器、音の性質等の上には必ず洋樂の感化によつて多少の變化が起こるであらう、從つて、撥音の盛んな、斷音を中心とした三絃樂の如きもの丶みでは新時代の賞美に價することはむづかしくなるであらう、か丶る外形的の方面では、舞踊的元素も變形して行かうが、其の根本の藝風は同じ脈に屬して存續するであらう。又脚本の上からいへば前述の如き「勢獅子」「道成寺」一流のものは只見た目、きいた耳に訴へる而已である。いくら舞踊式でもそれ以上に考へた心といふもの丶興味を將來のものには必ず導き入れねばならぬ、是れが新時代文藝の根本の意味でなければならぬ、とにかくか樣な意味で大體に道成寺式藝術が舊劇中から趣味の變遷といふ實驗化學のガラス筒の內に分解せられて殘留し行くかと思はれる、即ち今日の振事風の藝術がより深い工夫を加へられたならば、永久の生命を有するであらう。坪內氏の所謂新樂劇なども

此方面から新藝術を導き來らんと企てられたのであらうと思れる。其次の自然的元素といふのは丁度文學に比べると小說の如き散文文學に該當する者である、東京座の「異風行列」で信長の阿呆のジグサの如き又は歌舞伎座でやつてゐる雁次郎物の、餘りの只事寫實に陷らずして而も誇大的たらざる或部分の如きは稍之れに近い。要するに前の誇大的とは程度の上の差に歸するかも知れぬが、誇大的い弊に陷らずして然かも舞臺にのつて落付のある自然的な藝が、演劇といふものゝ本領であらう。但し玆で自然的元素といふは寫實的や活歷とは違ふ、寫實といつて現代の寫眞のやうなものや、活歷といつて歷史にある通りの事を並べたりするのは、馬鹿氣た話であることゝ、今さら喋々するまでもない。

自然的元素といふのは感情の自然の表情を中心とするやり方である。其表情は人をして誇大的の感を引きおこさしめぬ度に於いて藝化せられるを要する。自然的で而も寫實的に非ざる場合は幾らもある、寫實でやるならばヒソ〳〵話をやる時などは棧敷へは其聲が聞へやう筈はないといふのが極端な寫實の言ひ前であるが、自然的の方では必ずしもそんな事には頓着せぬ。見物にその事を聞かさしむる必要があれば寫實ならぬこともやつてよい。只人情の自然の動き方に合して見物が誇大滑稽を感せずして之に同情し得れば夫でよいのである。これが玆でいふ自然的と寫實的との相違の點で、一は人情の自然の動き方を主眼とし一は專ら外形の寫實を貴ぶ、舊劇の中では概して世話物に此寫實ならぬ自然的な元素がより多く見つかる樣である。團十郎が腹藝で一家をなし得たといふ說を理窟にして說明したならば、あれは舊劇の誇張主義の弊を救はん爲め自然主義を加へたのだともいへる。即ち只目に見えてゐる激烈なる表情即ち誇大主義を補ふに目に見えぬ腹の中即ち人情の激烈を以てしたのである。彼にとつては誇大主義の表情を全廢するには流石に忍び得なかつた、そこで釣合をとつて、誇大に見えぬやう心中で補ふて、之れを緩和し或程度まで成功したるものである。

結局は「人情の自然の表白に歸れ」といふのが舊劇の弊に對する直截の忠言である。此自然的元素の影は折々在來の舊劇中にきらめいてゐる處もあるが、到底舞踊的元素の如く分解されて獨立して殘るべき力は、舊劇には、それ程多大に存してゐない、舊劇の大部分は誇大的元素と舞踊的元素とで占めてゐるから此點よりいへば、

舊劇┬舞踊的元素（存）
　　└誇大的元素（亡）

の運命である、つまり目を無理にむいたり、顏を仰山に曲がめたりする藝風は新代にはつゞくものでない、よしんば歷史物でも尚ほ且つ舞踊主義に非ずんば自然主義に歸へれ、是れより外舊劇風の將來に關する途はないと思ふ。

西洋の歷史物を見ても古い藝風を模してゐるのは少なくない、又しかずべき理由もない、あらゆるものが時代と共に變形するものとせば、芝居の如きも人情の自然といふ點でさへ不朽の處を有してゐたならば、表情動作の如きはその時代々々で是がむしろ當時の自然であつたらうと解釋せらるゝ形に變つて行けばよいのである、西洋で時代物たとへば沙翁劇などをやつても、原作はミーターあり調子のついた文句でも、之れが臺詞となり動作となるに及んでは、必ずしも不自然な七五や、ギクシャクした誇大的動作には陷らぬ、アーヸングは「ハムレット」を斯ういふ風にやつたが自分は斯う工夫してやつて見ようと前の俳優の型を削り自力でやらうとする、此塲合の各俳優の苦心は感情の自然の表白如何といふことである、中には稀にある程度迄西洋にも古名優等の型を模することもあるが、これは其方が一層自然的表情に叶ふと見るからでなくてはならぬ。無論弊に陷る時には例令ばフォーブス、ロバートソンが「オセロ」をやれば英國紳士になりすぎるとか、ジョージ、アレキサンダーが「ハムレット」をやれば英國の好男子になりすぎるとかいふやうな弊はあるけれど、それは餘弊である、又脚本について

云つても舊劇は隨分ある處〳〵には立派なものあり、ことに日本民族の一特色とみらるゝ武士道的精神に訴へた作は、此一脈を傳へた點に於いて將來とも折々古劇として演せらるゝことがあらう。また更にその上に武士道のみならぬ廣い意味での自然の感情の流が加つたものは一層うつくしい古藝として今後五十年百年までも折々演せらるゝであらう。忠臣藏の如き、その一例である。さらば將來舊劇の生命たる史劇は如何なる傾向を生じ來たるであらうか、新作も出來るのであらうと思ふが、もし新代の要求に應ずる史劇が現れたとせば、それは如何なる特色があるかといふに、思考(シンキング)に訴へるといふ點からして其材料が選ばれねばなるまい。(之は中身をいふのだからその上に甘い美しい情の衣がシックリと纏ひつけられねばそも〳〵藝術にならないことは言ふまでもない。)舞臺的專門的にも變化は加はらうが中心の見方は見物をば考へさすといふことに歸するであらう、其材は例へば我等の祖先から流てゐる血が是認する武士道的精神の外に、むしろ、われ〳〵が當然第二位に落すべきものと信じてゐたものゝ中から深い意味をば西洋文明に觸れて心づいて來る、此の矛盾から起る煩悶疑惑乃至新しい解決を材料にとり入れるといふ風でなくてはなるまい、これが十九世紀式二十世紀式の文藝で、史劇も同じ運命に逢ふを免れまい。

西洋でも近代史劇は英のスチーブン、フイリップスが書いたものとか白耳義のマーテルリンクの書いたものとか伊のダンヌンチオの書いたものとかには皆似たやうな意味がある。史劇とて武士道的精神や中古のシヷリーのみを現す者ときまつたものでない、他の一側を史上に見んと欲する所が新世紀の新史劇であらうと思ふ。つまり舊題に新意を見出すのだ。さてかく舊劇を見て新劇にうつれば今の新劇は舊劇中の誇大的元素と舞踊的元素とを取り去つた殘りの自然的元素を中心として出立せねばならぬ地位に立つてゐる、しかるに新劇の今迄の經過は自然的技藝と寫實的技藝とを混じてゐる、自然に歸れといふ

も寫實に歸れといふも一緒になつて仕舞つてゐる、無論新藝術の草創の際には止むを得ない現象ではあるが、是れが間違であることは言ふまでもない。

思ふに到底寫實のみを精神としたものでは藝術は成立せぬ。今日の新劇をみるに是れまた便宜上三つに分解することが出來る。即ちある所は全くの舊演劇である、歌舞伎式である、又ある所は全く舞臺にのらぬ素人藝である、又或る所は素人藝ならぬ、歌舞伎式ならぬ、一種の落付のある手障を有してゐる。

此三つが今日の新劇に不調和に混在してゐることは一見明かである、本郷座の「無名氏」に於ける毛雅の雪中の落ち入りなどは、少なくとも其臺詞に於いて舊劇臭の甚しいもの、すべて新劇では表情の強い處へ行くと皆歌舞伎式の誇大的趣味になる、これに反し平坦な、弱い表情の時は馴れたものは落付があつて歌舞伎式ならぬ、只の寫實ならぬ一種のうま味が現れかゝつてゐる、明治座の河合や本郷座の喜多村、高田、深澤等の藝の或る點は皆感情の動き方が平坦なる所だけは落付いてやつてゐて、一種の味が確にある、その落付のある所はやがて眞の藝術の湧き出す端緒であらう。

その他の多數は全く素人藝と同じき觀がある、これらの部分は無論新劇から當然消えて行かねばならぬものである、一方の歌舞伎式の臭味はあれなら態々新俳優を煩す要もない、人をして只奇異滑稽の感を引起さしむる而已である、されば平坦で落付のあるのが發達して、もつと熱烈な表情をも伴ふたならば、そこに誇大的でない一種の藝が出來るであらう、今の高田や河合の藝は平坦な感情丈に適して、動く變化ある熱烈の感情に適しない、といふのを事實とすれば、どうかしてそれを打破して冷たい固つた弊を脱却せしむることを得たならば、そこに我等の望んでゐる一種の新藝風が現出するであらう。要するに此等の人々の藝は今少し動的でなくてはならぬ。

これらの點から云て、所謂芝居の將來はドーモ一旦今の新劇にでも立還り再び新に出立したものでなければ我等が望める新演劇は完成しないのでないか。若し新史劇を作る人あらば舊俳優にやらせるよりも新俳優にやらして見た方が面白からう、また藤澤氏なり高田氏なり河合氏なり喜多村氏なり皆進んで史劇もやつて自らの日蓮や熊谷や由良之助を作り出さねば駄目だ。舊俳優と目をむき顔を曲めるやうなことで競爭せず、標準を感情の自然の表情に取り、誇大主義をやぶり、新時代に適する新脚本を用ひ、一方に固まつて仕舞はず益々つとめたならば、或は成功し得ると思ふ、新俳優が舊劇的の脚本、即ち日本の史劇などに手を出さぬのは愚なことである、今の歌舞伎式臭味を脱した新工夫でやらねば駄目である。之れを要するに舊劇の藝風から舞踊劇を成し、新劇の藝風から自然劇を成すとすれば、前者は目下の所やはり舊俳優の壇場であらうが、後者は寧ろ新俳優の前途に望をかけざるを得ぬ。（明治三十九年十一月談話筆記）

脚本をして先づ讀物たらしめよ

近來脚本が漸く世の注目を惹かんとするに至つた。就中先づ文壇に於ける讀み物としての脚本が、讀者の興味に接近して來た。脚本といへば讀んで興の無いものと頭から極められて居た從來の趨向が、一步を轉せんとするの徵である。既に作りつゝある人としては月郊、紫紅、天聲等の諸氏、また小說壇から此方面に手腕を示すべしと傳へられる人々としては二葉亭、天外、風葉の諸氏、みな今日では或は精讀せられ、或は讀物として期待せられる形勢となつた。吾人は此の傾向のます〳〵步を進めんことを切望する。

よい脚本は必ず讀んでも面白い。讀んで人を動かす程の脚本でなければ、舞臺に上つて成功しやう筈は無い。讀んで面白ければ凡て舞臺でも面白いとは言へぬが舞臺で面白いものは凡て讀んでも面白いとは言ひ得る。讀む興味と觀る興味とを全然別なものゝやうに言ひなすのは不精確な論である。では讀むものと觀るものとの關係はどうなるか。

蓋し之れを作者の側から言へば、脚本である限り演ずるもの、觀る者としてといふことを第一義に置いて書くべきは勿論である。演ずるものとしての言葉と、讀むものとしての言葉との間に微妙なる筆加減のあるべきは言ふを待たぬ。筆加減と

いつて、何も七五に調子を附けたり、殊更に自然を離れて誇張的の修辭法を用ひたりせよといふのではさら〳〵無いが、それで尙ほ聲を張り上げて言ふべき臺詞と默讀すべき小說中の言葉とは造句の用意を別にするやうである。殊に日本の文壇の現狀では、此の別が目につく。目につくのみならずまた肝要である。其の理由は日本の文章が漢字漢語使用の結果甚しく口から耳へ訴へるものと懸絕してゐるからである。漢語を下手に朗讀せられると、漢學の素養ある者ですら、聽いて居て判然せぬ。同音語のまぎらはしいのは多いし、音はつまつて且つ一向ユーフォニックでないのがあるし、結局日本語に插入した漢語といふものは耳に訴へる方面が殆ど錬磨せられてゐないから、何としても聞きづらい。漢字に寫して、眼で讀んでこそ納得も出來やうが、口で空にしやべられては何の事だか別からぬ例が幾らもある。是れが即ち讀むものと聞くものとに於ける日本文特有の不一致である。今の日本語では、言葉の選擇上、ぴつたりと其の感想に吻合する上に、更に耳ばかりで分かるやうにいふ特別の條件が必要になる。今の新作、殊に社會劇がゝつたものには多く此の言葉の選擇の熟錬が缺けてゐる。總じて所謂書生言葉が不用意に插入せられて、啻に耳の理解を妨げるのみならず、性格、甚しきは男女老若の類型をすら破壞して了ふ。惜しむべきでは無いか。

其の他一般には、前に言つた如くたゞ默讀して、跡は伸縮自在な想像に任せる小說中の言葉と、一々明白に音聲動作表情を伴はすべき脚本中の臺詞と、前者は比較的に延びてもまた書き餘ましたまゝでもさして邪魔にならぬ場合が多いが、後者はそれを許さぬといふ相違がある。併し是れは或は結局脚本本位で、脚本はまた人間本位であるから、作者が人間自然の言葉は斯うであると極めて書く以上、舞臺の約束はむしろ之に服從した以內の事であるといふ說も立つかも知れぬ。自然の言葉はそれが自然であるといふ點に絕對の權威を有してゐるから、舞臺こそ自然の言葉を迎へて之れにはまるやうに己れを

變形すべきである。言葉の方が舞臺を迎へて之れに適應しようとするのは間違だといふ論があるかも知れぬ。其の場合には標準はたゞ舞臺上の約束が自然を損ふや否やといふ事に歸する。自然を損ふの約束と、自然を助くるの約束と、此の判斷の如何によつて舞臺上の約束の價値は定まるのである。されば舊劇に於ける七五調の型すら未だ蟬脫しない上に演說調、言文一致調とでもいふべき一種の新型が早くも新劇の上に出來んとしてゐる目今の劇壇では、大に自然の言葉を貴んで、舞臺の約束も畢竟是れを侵さゞる範圍に於いてのみせしむる必要があるかも知れぬ。斯くの如くして劇が漸く生きた人間、自然の人情に近づくと共に、抱負ある俳優が自然の言葉を如何に言ひ廻はすべきかといふ新舞臺詞法の工風をする餘地も出て來る。

斯う見て來れば、小說中の對話と脚本の臺詞との相違の如きは、抑も末である。要は自然といふ一語に沒してしまふ。人物感想の自然に貼合する言葉でだにあれば、小說と脚本とに二つは無い。たゞそれが眞に自然であり、眞の人物感想と貼合するを要する。判別は此の點にのみ存する。對話と臺詞との差は、たゞ臺詞の一音一呼吸も不自然なるを許さぬに反して、對話は多少不自然の點があつても寬恕せられるといふ消極的の意味に過ぎぬ。一は緊張した自然で一は緊張を要せぬ自然である。理想的に言へば兩つながら毫髮の弛怠をも許さぬものであつて欲しい。而して吾人が今の新脚本の臺詞に不滿足を感ずるのは此の弛怠があるからである、所謂舞臺の約束に合はぬためでは無い。「是れではせりふが廻はされぬ」、と云ふ批評は、傳襲の型に合せぬが爲めといふことゝ、其人物感想の自然と合せぬが爲といふこととゝ、兩意のうち必ず後者でなくてはならぬ、前者ならば罪は廻し得ぬ方にある。眞に其の人物感想と吻合する言葉でさへあれば、人物感想の意氣を十分に胸に溢らしてゐる優人には其の言葉がおのづから臺詞となりて生きて來る筈と思ふ。今の劇壇の一病は、舞臺上の約束といふこ

とを自然から獨立して背行するものと考へるに存する。戲曲の法則は事實の後に生ずるといふイブセンの言は、此の塲合にも眞理たるを失はない。

吾人は讀んで面白いが必ずしも好脚本でないといふことを是認すると共に、好脚本は凡て讀んで面白いものであると信ずる。讀んで面白くないくらゐのものは演じても面白くはない。此の意味から言つて、新脚本は舞臺に上る前先づ讀物として文壇の批評に訴へる便宜を十分に持つてゐる。讀物として及第せぬ脚本は舞臺でも及第は覺束ない。先づ讀物として合格せよ、而して更に舞臺上のものとして合格せよ。新脚本作家は此の覺悟を以て奮起すべきと共に、讀者また脚本は常に讀んで興無きものと思ふの偏見を去つて、鑑賞の一半を脚本に移すの風を起さんことを。たま〲『都新聞』懸賞の新脚本『大農』の上塲を見、また紫紅、月郊諸家の新作を讀むと共に脚本界の新機運を論ずるの言を聞いて、以上の實際論を附加する。（明治四十年十月）

演劇の第二種第三種

必ずしも演劇のみに限らず、あらゆる文藝は之れを廣く社會現象の一つとして見るときは、三級の存在狀態を有する。すなはち美の最高標準を追うて、少數たりとも選擇したる讀者觀者を滿足せしむればそれでよいといふ理想的のものと、高下押しならした水平線、乃至其の以下にあつてひたすら多數者の驩心を得るを目的とする通俗的なものと、及び此の兩端の中間に立つて、餘りに多く理想的でもないが、さりとて全くの通俗的でも無く、謂はゞ兩趣味の折衷とも見るべき中間的のものと、是等を假りに呼んで文藝の第一種第二種第三種と名づける。而して玆では中んづく演劇の第二種第三種、通俗的と中間的との事を論じて見る。

如何なる國、如何なる時代にあつても、最高標準を追ふ藝術が最上のものであることは論を待たぬが、同時に通俗趣味に投ずる下級藝術の發生も殆んど必然の勢である。而して社會經營の眼から見るときは、此の種の通俗藝術も亦た必要のものと言はねばならぬ。文藝の使命が、少なくとも其の半面に慰樂といふことを含む以上は、慰樂せらるべき人々の機根に應じて文藝に差等を生ずるのも誠に已むを得ぬ次第である。講談筆記通俗小説のたぐひに由りてのみ精神上の慰樂を得るものに

取つては、文壇的價値の高い作品は何の意味をもなさぬ。而して斯かる低級文藝の愛好者は啻に如何なる時代にも跡を斷たざるのみならず、數に於いて却つて社會の優越者である。文藝を心とするものは此の事實を忘れてはならぬ。

或は、低級趣味はすなはち改むべきもの、導き進ましむべきものであるから、之れを本位とした文藝論は無用であると云ふかも知れぬ。けれどもそんな道理は無い。高いものを味ひ得ぬ多數者に對して、さらば何物をも與へないのが至當であらうか。はた適應したものを與へて漸次に之れを進益する策を講ずるのが至當であらうか。何物をも與へなければ、彼等は漸く精神欲饑えて肉體欲に其の補償を求めるに至る。肉體欲に墮せぬまでも精神欲はます〳〵乾枯し腐爛して、步一步向上の途から遠ざかる外は無い。此の點から言へば、必ずしも向上進步の緒を與ふるもので無いまでも、せめて現在の狀態から墮落せぬ程の精神的趣味は斷えず供給してやりたい。現に我が演劇界の狀態などに見るも、此の必要は切に感ぜられるでないか。

諸種の藝術中でも演劇は殊に公衆的のものである。最多數者が享け得る最大の文藝的慰樂は演劇に於いてするに若くは無い。上は文藝の士から下は殆んど酒色の外に何ものゝ快樂をも知らぬ低級趣味の人までが、演劇のみは一堂に集まつて之れを賞翫する。此に於いてか高級趣味と低級趣味との對照が此の方面に於いて最も明かに見はれ、少數者の喜ぶものは多數者の好まざる所、多數者の好むものは少數者の喜ばざる所となつて、茲に截然として二樣の演劇を生ずるに至る。之れを西洋の劇壇たとへばイギリスの其れに見ると、一方にバーリーが喜劇、フ井リツプスが悲劇、等の文壇的なものあると共に、他方、所謂滑稽オペラや通俗史劇喜劇やパントマイムの類が非常の人氣を以て歡迎せられる。先程日本に來たバンドマン一座のオペラといふもの、例へば『オーキツド』『エ、カンツリー、ガール』等の如きは皆この通俗趣味を代表して、一時ロンドン劇

壇を動顛せしめ、延いてヨーロッパに威を振つた滑稽オペラである。通俗劇が斯くの如き勢ひで跋扈するため、一方にはまた之によつて高い趣味が侵蝕せられると慨嘆するものも無いではない。併し事實は必ずしもさうと限らぬ。要は他方で之れを向上の途に導くことを忘れさへしなければ善いのであらう。案排が肝心なのである。終日勞作に疲れた勤め人や勞働者が、晩食の後に妻を携へ友を誘ひ劇場に一夕を譯も無くおもしろく過ごして、翌日の英氣を回復しようと願ふ。此の願を充たしてやらなければ、彼等は一層劣等なミユージツク、ホールに行く、又は酒を飲む、賭事をする。ろくな結果にはならないのが多い。通俗劇は少なくとも此の病の幾分を救ふ力がある。

振りかへつて我が社會を見ると、理想劇の思はしいのが無いは勿論、通俗劇すらも其の任を果たすに足るやうなのは極めて少ない。大多數は依然として百年前二百年前の通俗趣味の腐朽したのを繰りかへし〲てゐる。或る少部分を除いては、理想劇として不朽の價値を有しないは勿論、通俗劇としてすら餘りに陳腐、餘りに愚劣なもの許りではないか。所謂新派劇の中には、小説の飜案、西洋物の飜譯、新作の滑稽劇等に多少今日の通俗物たる役ぐらゐは勤め得る者が無いでもないが、それすら極めて微々たるものである。何かと言へば『不如歸』『金色夜叉』と、同じ所をのみ迷ひ廻つてゐるやうでは、今に舊派劇と擇ぶ所ない運命に陷りはせぬか。通俗趣味をすら滿足せしむるに足らぬものとなりはせぬか。懸念は是れである。

斯かる意味からして、吾人は第二種演劇の上に、作者も俳優も一考を費す必要があると思ふ。必ずしも直ちに西洋の滑稽オペラを摸倣せよとは言はぬ。けれども此等によつて何等かの工風を得る端緒は屹度見出だされやう。吾人も亦た機を得て案ずる所を説いて見よう。

終りに述べるのは第三種演劇の事である。全くの理想的でも無いが、さりとて全くの通俗的でもなく、穩和な、漸進的な、

いはゆる一歩づゝは進んで二歩づゝは進まぬといふ行きかたのものが、藝術にもたしかにあり得る。而して最も安全で、無難で、それで多數者にも驩迎せられるのは此の類の演劇である。文藝獨自の理想から言へば此れは頗る姑息なまだるつこいものであるが、社會の全局といふ着眼點から見ると、此れが一番好都合な演劇である。たとへばドイツ劇でいへば、吾人が嘗て雜誌『歌舞伎』に梗概を述べたマイヤー、フエルスターの『アルト、ハイデルベルヒ』イギリス劇では、同じく『新小説』に梗概を述べだデヴヰースの『カズン、ケート』乃至名優ウヰンダムが好んで出す『デウヰツド、ガーリツク』『ローズ、メーリー』などが、正に此の中間劇に相當して、しかも興行ごとに非常の盛況を呈する。西洋で全くの通俗趣味以外に最もあたる芝居は常に此の方面から出る。勿論範圍の廣い西洋のことであるから、文壇的なものでもよくさへなれば相當の入りは取るが、大入りといふのは概して第二種第三種にあることと東西を通じて變らぬ人情であらう。吾人は以上の意味から、我が國に第二種第三種の新劇を興するものゝ出でんことを望む。（明治四十年二月）

趣味の變化

西洋へ行つて二三年居ると誰しも趣味の變動するのは事實である。西洋趣味の濃厚なる方面――以前は直ぐ俗惡と感じたもの――が少なくとも厭でなくなる。それが賞翫(アツプレシエート)せられ、理解せられて來る。人によつては最う日本のは全然つまらぬと思ふ樣にもなる。但し私などは左樣でも無かつた。

が、容貌に對する美醜の標準などは、ずつと變つて來て、或る點までは、日本的のよりは、より多く西洋の方が優(よ)いと思ふ程になつた。表情の強い顏、又は發達した身體の形姿(かつこう)などは公平に言つて彼方(あつち)の方が優れてゐるやうに思ふやうになつた。

處が日本へ歸つて一二年も經つと、又彼方にゐた程でもなくなる。必ずしも強い、著しい、濃いものゝみが優いにも限らぬ。日本式の容貌は又それでよい。つまり日本のは日本ので佳く、西洋のは西洋ので佳いのだ、といふ樣な心地になつた。

併し公平に考へると、結局、容貌などはどうも西洋の方が優い。日本のは日本ので佳いと言ふが、それは其の趣味に馴染

んでゐるからで、又一つには自國のだといふ氣があるからで、それ等の先入見を一切放れて見ると西洋のが一層すぐれたものと思はれる。

又例へば、青い眼など、西洋ではあれを美貌の標識にして居るが、以前は何んだか厭らしく思はれて、死んだ魚の眼などを直に聯想したものだが、彼方に行つて見ると其感じは漸々なくなる。

總じて色彩の趣味が變つて來て、以前は日本流の淡泊な方が嬉しく、ごつてりしたのは直ぐ俗惡に思はれたのが、今は濃厚豐富な色彩で十分面白い。強く、際やかなものも結構といつた風になつて來る。

疑ひもなく是れは趣味の變遷で、自ら文章を綴るにも、何時となく、強い、濃厚なものを書く癖が付いて來た。が歸國後一二年、又成るべく艶を消して淡泊な風に書く、といふ樣にもなる。

斯やうに西洋に行くと趣味の變つてくる理由は種々あらう。西洋に居ては、見る者、聞く者、皆強く、盛大なる文明故、それに影響さるゝことも無論一原因であるが、又風土氣候の異なること、それに關聯する衣食の相違などが、餘程影響するであらう。肉食をする、體温をなるべく發散させぬやうな衣服を着る。強く盛んな精力の度が增して來て從つてそれに堪へるやうな趣味が、より滿足なものになる。色彩でも濃厚な、刺戟力の強いものが好ましくなる。つまり肉體的精力の度が強盛な刺戟に堪へ得るやうに、それを消化し得るやうになつて來たので、以前はそれに堪へずして俗惡と感じたのである。

さらば西洋人の濃厚な趣味のみに滿足し、又それが必ず優いかといふに、必ずしもさうではない。精力の度に從つて人各々それを滿足さすべき強いものを好むのは當然であるが、然し精力は限りあるもので、その極限分量を越えれば矢張疲れる。さうなると又飜つて淡泊な趣味が欲しくなる。そこは東西とも同じ事、唯その極限分量の度が違ふので、例へば日本人に五

十が極度でそれ以上になると厭氣がさす、西洋人は七十まで堪へるといふ樣なことはある。が極點まで達すると反動的に零へ戻らうとするは何處も同じこと。で、西洋にも其處から淡泊趣味が起つて居る。

だから或人は淡泊なるが極致だ、日本趣味の方が上だと言ふ。强く、增す方には際限がある　行き止りがある。行き止りはいつも疲勞倦怠である。そこを悟つて一飜して零に戻つて居る方が進んだ趣味だといふ。これは容易くは斷ぜられぬとて、人生問題に於いても活動し奮鬪すべしといふ主義もあれば、それは徒に疲勞を招くばかりだ、寧ろ山中に隱れて安靜に平和にしてゐるが幸福だといふ主義もあるやうなもの、積極趣味か消極趣味か。その優劣は輕々には論ぜられないが兎も角二種あつて、行きつ戻りつしてをるのは事實だ。

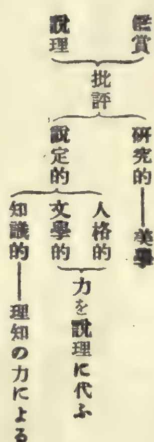
洋行前までの讀書の大概をですか。今は迚もそんなことは話せませんが、左樣、中學時代などは漢籍を好んで讀んだので、蘇東坡の文史記列傳中の面白いもの、諸子では莊子、韓非子、詩は太白、樂天などを愛讀したものだ。英文ではマコーレー物、アーヸングのスケッチブック、ゴールドスミスの物これ等は大抵の人が初期に面白がつて讀むものである。元來英文の讀み初めには、作家それ〳〵のスタイル、即ち文體の相違などは誰しも分らぬものであるが、私はマコーレーので初めてそれに合點が出來た。マコーレーのはあゝいふ文體であるから此の點が悟り易い。アーヸング、ゴールドスミスなど亦これに次いで早分りのするものである。

邦文では、八犬傳などは子供時代から多くの人と同じく讀んだもの、稍進んでは初めは、絢爛なもの、平家、謠曲、曾我物語、それから秋成の雨月物語、といふやうなものを多く讀んだ。次には近松物、同じ絢爛でも是れは又違ふ。立派なもの

だと今も思ふ。西鶴これは又絢爛ならずして絢爛なもの。情を表はすに於てあれ程のものは少ない。一種の絶品だ。

日本の文章と西洋の文章とでは、引きくるめて言ふと西洋の文章の方が發達したるものと思ふ。微細に感情思想を現はす力が優つてゐる。西洋語で話す際適當の語を見出せない時、どうも西洋語は廻りくどくて、感情の中心を直截に摑み出すことが出來ぬと思ふこともあるが、後になると、それは自分の知らなかつた爲めで、ちやんとそれに當たる、もつといゝ言葉が西洋にもある。成程これならば日本語で斯う言ふと符合だ、やつぱり有るのだと氣附く。處が日本語ではどうも西洋の語を譯しきれない場合がある。例へば極平凡な語で、アイ、アム、ハッピーと言ふ。其のハッピーを幸福では嚴つくていけず、嬉しいでは弱すぎる。うれしさに包まれて居る形、又は何か嬉しさが恁う胸の中に小さな粒のやうになつて居る心地の時、ふと何かの機會に觸れて思はず其の粒がとろつと溶けたやうになつた嬉しさを言ふものである。又年若い女の無邪氣なのなどがよくスヰートといふ語を使ふ。私はスヰートだといふ。優しい甘い、旨い、蜜のやうな情を有してゐるとの意味であるが、どうも日本語に遺憾なく譯されない。又一面からは是れらも東西趣味の差を語つてゐるのであらう。（明治四十年六月）

知識ある批評



今の文壇に奇異なる現象の一つは、創作界が却つて知識に少なからぬ尊敬を拂ふに反して、批評界が甚しく知識の權威を蔑視せんとするの事實である。文藝上の創作は常に中心の生命を感情に託するに拘らず、其の感情の深大を致さんがためには、知識の堀鑿に待つところ多き人格の泉に、先づ十分の水脈を引かねばならぬ。知識の水脈を穿つことゝいよ〳〵深ければ、之れに湧く感情は、いよ〳〵切に我等が生命の核心に肉薄して、我等が生命の全部を撼搖し、延いて其の背後に横たはる宇宙の生命にまで響くの趣を呈する。感情に高下の品があるとすれば、それは感情を荷ふところの知識の高下によつて附ける階等である。知識の展開はやがて感情の展開を意味するの理は、多く玆に言ふを須たぬ。創作に從事する人々が、漸く三昧

の境に出入して至醇の心を其の業に傾けるに至れば、おのづから此の源泉に深處大處の依頼あるを要するの理を感悟する。眞に豐熟した創作心には、決して知識の蔑視といふことは含まれて居らぬ。あらゆる知識、最高の知識を悉く自己以内に沒收し去らんとするところに、大なる創作心の威嚴が存するのであらう。創作に取つては、知識は擯斥すべきものでなく、招徠すべきものである。秀吉ほど家康に尊敬を拂つてゐるものは無い譯である、最高の知識に對して最高の尊敬を拂ふの必要を感せず、又之れを征服せんとするの希望をも有しない程の創作心は、なほ甚だ憫むべきものではないか。無論斯くして却つて知識に征せられるものあると否とは、其の作家の才分如何による。吾人は如上の意味で創作界が感情を生命としながら而も知識に尊敬を拂ひ知識に依頼を求めんとすることの至當且つ喜ぶべき現象たるを信ずるものである。

批評は之れに反して、始めから其の生命の多分を知識に發する。知識を疎外するところには、眞正の批評の成立する理が無い。然るに今の評壇には批評の筆を取るものみづから知識的條件を無視するを以て高しとするが如き稚態のなほ消えぬものが多い。知識は修養の結果である、上の如きは畢竟修養の足らざるものが、自ら其の足らざるの弱點を掩護せんためにする擬勢たるを免れぬ。

批評はそも／＼如何にして起こるか。一文藝に對して下したる價値の判斷、及び此の判斷の知識的説明、此の二要素が批評といふ言葉の正當な内容である。此の作品は美しい。彼の作品は美しく無い。美しいにも甲と乙とは程度が違ふ、丙と丁とは具合が違ふ。此所までは我等の文藝に對する價値の判斷である。之れを名づけて鑑賞の意識といつてよい。而して鑑賞の意識が發表せらるれば、玆に批評の半面が成立する。夫れ鑑賞は人々の自由である。從つて自己が自由の鑑賞意識を自由に發表する上に、他から何等の故障をも挿まるべき理由は無い。創作が作家の創作意識の自由なる發表であると同じく、鑑

賞評は評家の鑑賞意識の自由の發表である。

蓋し世の短見者流が往々にして懷く誤謬は、批評を以てさながら、創作者の爲めにするもの、随つて創作者は批評家に對して「我れは批評を要せず」といふの權利あるかの如く思惟すること、是れ一、次には批評が單に創作の後に生ずるといふを以て、直ちに批評は創作の下位に隷屬するが如く考へること、是れ二。中にも後者は最も笑ふべくして而もしば／＼耳にする陋見である。常識の上から言つても、玆に先づ一塊の土といふ事實が存する。人間の心といふ事實が之れと相觸れて考察、説明といふが如き次の事實を生ずる。彼れもおのづからにして生ずる事實であり、是れもおのづからにして生ずる事實である。類こそ違へ宇宙の事實たるに於いては兩者に何の等差もない、生起の先後といふことは以つて價値の高下を定めるに足らぬこと勿論。批評の創作に於けるも亦た同じ理である。文藝の作品は即ち與へられたるとき尊き事實である、之れに對する人々の鑑賞批評もまた件の事實に續いて發する尊き事實である、何ものか能く彼れは尊く此れは卑しいといふ位階を此の間につけ得やう。

斯くの如くして單に之れを存在觀事實觀の上から考へても、批評は夫の造化が自由に造る萬象、作家が自由に作る文藝品と同じく、評家が自由に形成する鑑賞意識の發表である。他の認諾を待つて始めて存するものでも無ければ、他に倍隸して存するものでも無い。然り、此の理は既に早く批評の半面たる鑑賞に於いて明白なること以上の如くである。

併しながら更に之れを目的觀、究竟觀の上から考へたらどうであるか。創作について言へば、或は理想の體現、或は眞理の闡發、或は利用、或は美德、或は淨樂慰藉の附與、何れを是とするも兎に角創作が概して目的を有して生ずることは明かである。而して之れによつて其の作品の人間に於ける地位が定まる、價値がつく。批評はすなはち何を究竟目的として起こ

つたであらうか。

此の疑問を釋くためには批評の他の半面を見ねばならぬ。即ち批評は鑑賞の上に之れが知識的説明を要する。鑑賞意識と説理意識の結合したものが眞の批評である、批評は單なる鑑賞ではない。批評の存立する必要は實に此の説理意識に在るといつてよい。批評の目的は此の半面によつて最もよく解釋せられる。言ひ換へれば、批評は本來知識の要求に應じて形をなしたものである。たとひ出發點たる鑑賞意識の發表、此れは美しい、彼れは美しくないといふに止まるの判斷は、尚ほおのづからにして發する叫び聲であると假定しても、之れに歴然たる目的觀を加へて、其の存立の意義を明にしたものでなければ今日の批評といふ概念は完成せぬであらう。單に鑑賞すなはち此れは美しい、彼れは美しく無いといふだけならば、批評は或は目的觀の上から閑却し去られるかも知れぬ、無くて濟むかも知れぬ、人間に必要なしと言はれても致方の無い場合が多いかも知れぬ。たゞ是れに説理意識の加はるに及んで、始めて人生必須の一現象となり、根を人間必然の要求に托するに至るのである。

世の輕卒なる者が批評の無用を唱へ若しくは批評の無根柢を難ずるに當たつて、多く陷るの弊は、此の鑑賞を批評の全部と速斷するにある。批評は鑑賞の上に説理を加へねば完結しない。批評は畢竟知識上の要求に應ぜんがために起こつたものである。

知識上の要求とは何であるか。曰はく、疑ひである。知らんと欲することである。此の簡單な命題を文藝の鑑賞に當てはめれば、其處に批評に必要といふ結論が出て來ると思ふ。

文藝の鑑賞に知識的要求の伴ふ場合が二つある。一はたゞ其の理が知りたいといふ自然たる要求である。二は甲乙鑑賞の

結果を異にしてゐる場合に、孰れが眞であるかを定めたいといふ要求である。前者は一見唯好奇の知識慾であるが、併しあらゆる高尙なる學問は此の知識慾を本とする、少しく深く考へれば其れが決して無意義のもので無く、實に遠く人生の根本に連なつてゐることに思ひあたるであらう。我等は何がゆゑに事物の根本理を知らんとするの慾を有するか。ショペンハワーの哲學を倩ひ來たるまでもなく、人は常に眼前の事物と自己との關係を最後まで明めねば安んせられぬといふ性を有してゐる。言ひ替へれば、其の事物が宇宙に列するの地位本來を知つて、我れの之れに對する覺悟を極めたいと思ふ。此の覺悟がつかねば、我は常に不安不定の念に禁へぬ、詮ずるに我れの安立のためである。此の要求は進步した頭腦の人ほど强い、即ち所謂哲學的要求である。之れを平凡に解すればたゞ其の事物の理が知りたいといふ漠然たる好奇心、乃至知識慾といふに歸するのであらう。而して此の要求は、當面の事物が知識的に明瞭で無ければ無いほど其の度を增すと見える。文藝鑑賞の如きは其の好例といふべく、美しい美しくないといふ趣味上の事實ほど知識的に確說し難いものは無い。且つ動ともすれば、文藝は利用厚生の上に無用の長物とすら見られて其の存立の意義最も不明瞭と考へられるものゝ一つである。之れに對して根本理を知らんとする要求の起こるのは至當の事ではないか。

斯くの如き要求から出發する批評は、鑑賞の上に說理を加へて文藝の最後の理に到達せんことを期する、其の終點は文藝の哲學である、所謂美學は之れに相當する。我等は文藝に如何の價値を附し如何の態度を以て之れを遇すべきか。文藝は宇宙の現象中如何なる位置に据わるものであらうか。要するに美學は批評のために區々たる尺度を給するよりも、寧ろ文藝の宇宙人生に於ける地位を明めんとするものである。批評は此の最後の原理に詣らんとする實驗的研究に外ならぬ。之れを研究的批評と呼んでよい。

次には鑑賞の彼此甲乙相合せざる場合、若しくは自己の鑑賞に他の鑑賞を合一せしめんとする場合に、之れを說明して、鑑賞の眞僞を定めんとする要求から、說定的批評とも呼ぶべきものが起こる。是れが最も普通な場合の批評で、詮ずるに自家の鑑賞を是として立てる、延いて他を之れに統一するといふ、言はゞ一層實際的な目的を含んだ批評である。明に或る目的を意識した以上に成立するもの、即ち完備した批評たるに於いては、研究的批評も說定的批評も同一であるが、其の目的に間接直接の差があるといふに歸する。さて斯やうな說定的批評の目的すなはち一鑑賞の定立といふことは、之れを成就するに於いて必ずしも一方法のみとは限らぬ。事實に徵するに、或は美しいといふ唯一言の鑑賞も、他の千萬言に勝つて人を服せしむるの力を有する、殆んど裸な鑑賞の發表のみと見える批評もある。又或は語を多く費したに拘らず、言ふ所は美しいといふ當初の鑑賞の叫びを繰り返すに過ぎず、文辭を彩り感情を連帶せしめて、自家を定立せんとするの批評がある。前者にあつては直ちに之れを發言する人格の信用威力が他を說定する役を務め、後者にあつては說者の文學的技倆が他を說定するの働をするのである。但文學的魅力を主とする批評は根本に評者の人格に對する信用が無ければ其の効を全うするを得ず、單なる文學的技倆のみで是が非に變り果すものではないから、結局は此の種の批評も矢張り人格の力を基礎としたものとなる。即ち此等の批評は理の上の是非によらずして、偏に發言者其の人の力によつて說定せんとするもの、鑑賞に加ふるに人格力を以てした一種の說定的批評であらう。また之れに對して專ら知識を方法とした說定的批評があり得る。「我れは之れを美しいと見る、其の理は云々なるが故に」といふ方式で自家を定立せんとするもの、知識的根據によつて他を說服せんとするものである。而して吾人が本章で特に提擧せんとするものは此の種の批評に外ならぬ。

以上吾人の論はやゝ微細の理に[illegible]たやうであるが、つゞまる所、我が現文壇の問題として先づ人格の力を題とする

ものと理知を積みとするものと二種の批評を並示して其の根柢を明にせんとするのが吾人の趣意である。すなはち茲に上來の論緒を結束して、今の批評壇は人格によるの批評と知識によるの批評と、若しくは一言にして東西を決する力の批評と、知識に照して是非を判かつ理の批評と、兩者いづれが時務に急なるかといふ問題に還る。

言ふまでもなく、全きを望めば力と理と並せ有するものが最上の批評である。併しながら是れは事實に於いて多く期待せられぬとすれば、先づ其の何れかに着いて評壇の流風を新たにするの策を講ずるのが目下の要であらう。思ふに今の評壇は人格の批評、力の批評の出來損つた餘弊に苦んでゐる氣味ではないか。夫のたゞ力を重んじ、たゞ結論判斷をのみ重んじて其の力の力たり判斷の判斷たる根本に常に知識の保證といふ威嚴の存すべきを忘れんとした一時の風潮は、青年の人を驅つて、ひとへに理知を輕んじて淺薄なる一時の妄斷放語に快を取らんとするに至らしめた。今の批評には理知の根柢いさゝかも無きが上に、之れに代はるべき力も無く、剩すところは、たゞ漫然たる鑑賞の發表に過ぎぬものとなつたのが多い。其の評定の根據が薄弱で、たゞふわ〳〵とした好惡の發表に過ぎぬといふ感を人に與へる。其の結果、或る時は、多少でも力ある批評が出れば、枯葉の風に隨ふ如く之れに附和し、又或る時は、極端にまで顚倒差錯した無統一の評壇と化し去る。要するに無定見の雷同か、然らずんば全然オーソリチーの權威を無視する破壞的亂脈かゞ、其現狀である所の我が批評界にあつては、幾分たりとも之を整調し得るの途は、其の批評をして知識の根據に立つものたらしむるにあると思ふ。例へば批評と批評とをして相較べしめるが如きも妙であらう。此の品が美しいといふ、要は知識の許す限りに於いて其の美しいといふ鑑賞の内面を展開し說明するにある。鑑賞の瞬間は多分に感情が作用してゐても、其の後に起こる意識、たとへば此の鑑賞は正しいか否かといふ疑惑の如きは明に知識の作用であるから、要求の本來から言つても、知識上の解說こそ最も此の際の用

を充たすに足るものであらう。

人或は、理知の上で正しいものが、必ずしも鑑賞の上で正しいとは限らぬといふ。併しそれは眞に理知上の滿足といふものを經驗したことのない人が言ふ僻說である。如何なる知識でも最後の一斷、之れで滿足といふ所は感情である。此の最後の滿足は何時でも知識から一步を超越してゐる。此所は飛躍である。如何に論理が徹底してゐても、此の最後の感情と接近する滿足がなければ人は承知せぬ。最も多く之れに接近した知識が最も多く正しい。知識は此所まで行けばよいのである。斯くして最後の滿足に一步は一步より接近し行く所に知識の進步はあるのだから、我等は我等が達し得る限りに於いて最後の判斷を下すに何の不都合も無い。斯くの如き意味で、正しい知識は必ず正しい鑑賞と一致する。

之れを總括するに、吾人は正しい鑑賞の上に十分なる理智あり議論ある批評を今日に要求する。之れによつて批評本來の面目も威嚴も庶幾はくば立つであらう。今の評壇は餘りに知識を忘れ過ぎてゐる。（明治四十年九月）

劇壇壁訴訟

自分等の關係してゐる事業を自分で批評するといふことはデリケートな問題だが、世上の之れに對する批評に不滿足のあつた場合に、何とか言つて置かねば腹の虫の承知せぬ事も屢々ある。

例へば去る十一月の本郷座に於ける文藝協會試演會でも一番目の『大極殿』は無味乾燥だといふ評が大分あつた。しかし僕が協會關係の人間であるといふ以外、批評家といふ地位に立つたら、あれにも特殊の味のあることを斷言するに憚らぬ。文藝協會劇の今回の取り合はせは、クラシカルとロマンチックといふ配合であつた。而して『大極殿』は其のクラシカルの趣味を目的として出したものである。然るに之れが淡味に過ぎるといふ批難は、クラシカルな藝術の中にロマンチックの趣味を求めるから生ずるのではないか。濃厚熱烈な情味といふロマンチックな味はむしろ次の『ハムレット』に求むべきで、『大極殿』は所謂雅劇の流である。典雅趣味を中心としたものである。言語に成るべく現代の意味抑揚を去り、之れに配するに衣裳背景の色彩美と動作形態の曲直線美とを以てして、一幅の典雅な繪卷物を展べたやうにといふのが其の期待し得られる限界であつた。さらりとして好い氣持に美しいといふ感じを與へれば、それでよい。而して出來榮も此の範圍に於いては、先づ失

敗で無かつたと思ふ。要するに味ひの問題であるから、洗ひは洗ひとして、蒲燒は蒲燒として翫味することが必要と信ずる。勿論あれが理想的なクラシシズムであるとも想はねば、役々無疵であつたとも考へぬが、演ずる方には以上の如き趣意のあつたことゝ察すると共に、文藝批評のカソリシチーといふことから見て、種々の味は種々に嚙み分けるのが、當然であらう。間々あの中に歌舞伎式乃至一歩を進めては自然派式なもの迄混入して不調和に演じてゐた塲所があつたやうだが、それは無論演藝者側のはきちがへから來た缺點である、これは何と批難されても致方のない所であらう。

『ハムレット』はまた『大極殿』がロマンチックの眼から批難されたと同じく、自然派寫實派の眼からの批難が多少あつたやうである。無論現代の寫實から見れば、あの中の臺詞なり動作なり、殆んど一として誇張ならぬは無く、不自然ならぬは無く、所謂非眞實の中の眞實、不自然の中の自然を味はぬ限りは馬鹿々々しいものとなることと當然の結果であらう。併しながら、斯んな批評はさすがに多くは無かつたやうである。文藝協會の演劇はクラシシズム、ロマンチシズム迄は行つてゐるが、まだ自然主義には手をつけて居らぬ。それは此れからである。若し夫れ役々に對する批評は、多くはそれ〴〵に理由あるものと見たが、春曙子のハムレットの拔群に見えたのは、一は作柄の上から來た結果であると共に一は全く熱誠と研究との結果に外ならぬ。熱誠と研究とが春曙子のハムレットを我が劇壇空前のものに仕上げたものである。他の諸子も春曙子ほどの熱誠と研究とを重ねたなら、其の出來榮は決してあれだけに止まらなかつたらうと思ふ。論より證據、薇陽子の王妃の如きは、稽古中の熱誠と研究とが不充分であつた爲、始め二日ばかりの間は僕等頗る不滿足に感じた。世評も多くは此の間の王妃を基礎として立てられた。然るに薇陽子其實地舞臺に上つた結果の容易ならぬに氣がつき、工風が一層熱心になり綿密になり眞面目になると共に、三日目あたりからの王妃は俄然として面目を改めて來た。三日目四日目の王妃の居間の如きは事實今の

劇壇に多く見られぬ藝術品となつてゐた。是れ偏に薇陽子の研究が春曙子の研究にぴたりと行き逢つた結果である（四日目の如きは、芝居を仕過ぎはせぬかと思はれる點あるまでに工風が行屆いてゐた）。あれ程の素質を持ちながら、熱心の十分でなかつたばかりに、初めの内は王妃みづから不評を招くと共に、劇そのものをして光彩を減せしめた應報覿面であると同時に、藝術上の仕事が如何に些末の點に至るまで熱心誠實の充實するを要するかゞ是れで證據だてられる。藝術は眞面目でなくてはならぬ。鐵笛子は性來の洒落で、怒つてゐるのか冗談を言つてゐるのか分からぬ人である。同じ筆法で熱心か熱心でないかも一寸判じかねる人であるが、天成の聲や柄で既に舞臺が調ふの得あると共に、之れに依頼する度の多すぎる缺點もある。今回のポローニヤスの如きも、妙は其の柄にあつて技に無い。技の上には薇陽子と同じ嫌があつた。「駱駝のやうにも見えまする」のあたり、研究が今一層深ければ、たしかに今一層の妙味を發揮して來るであらうと信ずる。

其の他古城子の王についても、また餘の諸子についても同じ希望を提出する謂れがある。例へば「誓言」の塲の如き、是れは春曙子にも望むことであるが（ハムレツトに對しては全體に沈鬱の調子を加へる工風が欲しいといふ一部の注文が最も當つてゐると思ふ）他の諸子何れもまた工風の餘地がある。何所かまだ急所に打ちあて得ない氣味があつて息も止まるやうな、凄い、しんとした味が出て來ない。ぴつたりと呼吸が合つてゐないのであらう。（明治四十一年一月）

小説――描寫、批評

凡て作物の中には、隨分事細かに描寫してあるのに讀んで見て何うも其の事件人物の横側を見てゐるやうで、眞正面から鮮明に活き〳〵と浮んで來ぬ、何だか凭う一重隔てゝ見てゐるやうな、といふ感じは往々有ることとでせう。其理由は、種々有るであらうが、一つはムード、即ち全體の氣分を寫すに關係のある事と思はれる。

ムード即ち氣分を寫す、と言つても無論作者自身の氣分をといふのでなく、其作中の事件事物其物に當然附隨する氣分――といふ意味で、それをよく描き出して印象を明瞭ならしめようといふのが、所謂印象派の自然主義である。(但し此處の問題は何も印象派に關係があるのでなく、印象派は寧ろ事細かに描寫しないで、といふ行方であるが、兎も角もこのムードをよく出さうといふことは現今の作家が頻に努めてをるのである。

處がその氣分といふのが、事件人物其物に必然附隨する氣分、即ちそれに對すれば萬人が萬人まで惹き起すやうな氣分か、もしくは自分一個の特殊な氣分か、それが混雜し易いものだから、不覺不熟練な作家になると、何時か知らず自分の小主觀を書いて了つて、其物自身の氣分を出さぬことになる。即ち自己の特殊な性格による自分だけの氣　を書いて了つて、萬人

に共通する興味のある、その物自身にしつくり合つた氣分を書かない。即ちムードがよく出ぬ。從つて其人物事件が活躍して來ぬ。これが割合に事細かに描寫してゐながら、却て印象不明瞭になる一理由であらう。

成程、一人稱で書いては其人物の輪廓などが瞭然せぬことはないかと……。私はさういふものではなからうと思ふ。一人稱で書く其事が何も不可のではあるまい。西洋の例？無論幾らも有りませう――一人稱で書いたもので鮮明と其人物の出てゐるのが、今別に書名は思ひ出せないが……。脚本などに至つては其人物の會話だけで性格を十分に現される。イプセン？無論さうです。これは恁う――強い、ボキリ〳〵した調子で書いてある。そして人物が實によく出てゐる。

一人稱で書いた場合に折々「自分は恁うしながら言ふた」と樣に、些々と其姿態擧動を挾む事など、如彼いふ事によつても其人物を現前せしむべきか、或は脚本の樣にさういふ筆を着けることなく、寧ろ偏に性格を寫すによつて其人物を活現するがよいかといふ質問？それは無論總てに依るべきであらう。よく言ふ通りハムレツト劇にしても、總じて周圍のものは皆ハムレツトの性格を現はさんが爲に描かれてある、と言つてもよい。小説にしても其の通り內外周圍總ての物によつて初めて其性格その人物も現れて來るのである。

* * * * * *

小説の批評は區々な事ですが、それは私も思つてゐたので……。元來批評の標準といふものが何處にあるのかも分らず、案外世間で評する方が正しくて、自分の考が誤つてゐるのかも知れないが、私の立場から言へば隨分かんどころの違つた批評が昨年中もあつたと思ふ。

近く私の方の『早稻田文學』に載つたのでもさう。比較的長篇はさておいて、短かいもので言はゞ秋田雨雀君の『同性の戀』。

あれなどは最つと批評壇の問題に上るべきものと思つた。誌上で載せる程のものは大抵、殊に新らしい作家のものなどは勿論私が一通り見るのですが、私はあれを、少なくともあの當時の文壇には傑れたものゝ一つと思つた。處が世間では餘り認めなかつた。私の見てゐる程度までに見た評はまことに少なかつた。唯一つ或程度まで透徹してゐると思つたのは、矢張『文章世界』でした。その外は皆どうもかんどころを拔いたものと認めてゐたが、これも存外見到つた評がなかつた。日本新聞では褒めてゐましたが……。

どういふ意味に於て取つたかといふのですが。勿論新進作家を世に紹介するといふ意味も一方にありますが、作其物として、『同性の戀』は――但し程經たので其時の感じ全體を記憶してはをらないが――今頭腦に殘つてゐるインプレッションだけをいつても、あれを讀むと何か恁う人生のもどかしいやうな、淋しいやうな、つらいやうな感じがする。……その恁う何とも言はれずもどかしいやうな感じがよく出てゐた。それ一つだけでも十分傑れてゐると思ふ。『親』の方は又、人生の當に合ふべくして然も勘定の合はぬ、一種齟齬の不安の便りない感じが現はれてゐて、そして又親に涙があつて、恁うほろりとさせる、子供を持つた經驗ある人の情が泌然と出て、若い作者に似合はず稍老練な處が見えてゐた。固より二篇とも猶缺點は免れぬ。『同性の戀』は修辭上の缺點が多くあり、『親』とてもまた性格を描く上などには至らぬ處があつて、あの際どい性格を鋭く出して見せるといふ様な正宗君などまでは達してゐないが、然しながら前申しただけの點でも十分價値あるものだと思ふ。どうも世間の批評が矢張見到つて居らぬやうに思はれる。（明治四十一年二月）

近代文藝の特色一二

日本の今の思想界、就中文學界は非常な勢を以て動きつゝある。物質が進歩した、何が進歩したと云ふても、文學の如く急速の進歩をしたものはあるまい。蓋し敎育倫理法律等に於いては、自ら他の總ての方面と關係を有するので、充分に自由に發達を遂げることが出來ない、然るに文學は比較的に多く獨立して自由に發達し得るから、其進歩は極めて急速である。

總て日本の文明は歴史を去らんとする觀がある。即ちタイムの力を殆んど認めて居ない。西洋に於ける百年以前のものと今日のものとを一時に吸收して、之を消化し去らむとするの槪がある。就中文學に於て此の現象が著しい。小說壇に於ける近時の有樣に見ても此の感はいとゞ深い。文壇近時の大事件といへば夫の自然主義であるが、此の自然主義は、日本には三十九年から四十年の間に特に人の注目を惹くやうになつた新しき現象である。此現象を以て、或る一派の人は皮相的小變化に過ぎずとなし、他の一派は之を以て重大なる一現象となす。予は寧ろ後者に與するものである。之を皮相的一現象に過ぎずとなすは、淺薄なる近眼者流のことである。我が小說壇の過去を一瞥するに、德川時代に於ける馬琴三馬一九等の文學は魯文、文京等に依りて傳へられ、而して此の種の純戯作的德川文學より明治文學の中間趣味を持つてゐるのが饗庭篁村氏等

であるとも見られる。次で新文學の建設に努めたのが坪内逍遙氏である。即ち當年春廼舍おぼろの『書生氣質』『小說神髓』は實に文壇の新機運を促した早鐘であつた。是れがざつと明治十七八年から二十年代のことである。其結果紅葉露伴の諸家並び起つて、明治小說を形成するに至つたのである。此等の諸氏は明治小說の元祖である。而して諸家各特色はあれど、之れを概括するに當時の新文學の中心は寫實主義である。而して最も此時代の代表的なるは紅葉若しくは所謂硯友社一派であつた。斯くて諸氏に由りて形作られた作風は、二十九年から四十年即ち昨年頃まで續いて居た。尤も此間に小波瀾があつた。泉鏡花後藤宙外小杉天外小栗風葉等の諸氏各作風を異にしたが兎に角新進の文運を齎らし在來の潮流を改善した。併し其大體の傾向は依然として動かなかつた。

何人も紅葉露伴等の諸氏に對しては、鼎の輕重を論じ得なかつた。

要するに二十年代の小說は、三十年代に於て小波瀾を生じ、多少の進歩をなしたが、大體に於て同じ流れを以て四十年に及んだ。而して其所に根本的變動を生ずるに至つた。從つて當年何人も其輕重を論じ得なかつた紅葉露伴等の諸家は、新代の趣味の中心から漸次遠ざかるに至つた。即ち一時代前の代表者として漸くクラシックの圈內に入りつゝあるの趣がある。併し二氏に價値がないと云ふのではない。たゞ歷史上の人として其の價値を保つことはあつても、新代の水平線にある人々を滿足せしむるに足らぬものとなりかゝつてゐると云ふのである。新代の人々は此等の諸氏に對して大膽に其價値を問ふを何とも思はなくなつて來た、新代の人の頭には此等諸氏の作は甚しく痛切の感じを與へぬことゝなつた。

斯くの如くして眞個文壇の廻轉期に達した。明治二十年來、二十年にして初めて起つた一大革命である。決して無意味の變動ではない。たゞ今の自然派が完璧と云ふ譯ではない。其根本の調子に於て、新しく有力なるものがあるといふのである。

此根本的調子こそ、今後五年十年二十年の根本となるべきキーノートを作るものと思ふ。

醜を描くは自然派の一面に過ぎぬ。換言せば醜を描くことが自然派の全體ではない。けれども寫實派は根本的變遷の時期に達したので、文壇は是れから有望である。自然派の眞價を見るは是れからである。痛切に人生と相わたる文學を研究せむとするものは、須く此新しき小說を研究せねばならぬ。而して古きそれと新しきそれと對比して宜しく眞價を理解すべきである。徒に古き習慣、古き趣味、古き讀書眼を以て、過去の作家を稱揚するは駄目である。大凡現今小說の讀者を分類するに五種位はあらうと思ふ。

(1)講談ものを愛讀するもの、
(2)浪六弦齋諸家の作物、例せば日の出島等を好むもの、
(3)家庭小說、例へば幽芳氏等の作品を喜ぶもの、
(4)紅葉露伴諸家を推稱するもの、
(5)最新趣味を代表するもの、即ち藤村、獨步、花袋、白鳥等の作品を愛讀し、前記の諸作はまだ〳〵人生を弄べるもの遊戲をなせるものと感じ其作品は人生の眞相に迫らずとなすもの、

如上五種の階級がある、若き新代の人々は最新の階級まで進んで貰ひたい。而して眞個の判斷をして貰ひたい。日本文壇の形勢は斯くの如くにして近代的に進んで居る。

却說、西洋にて近代（Modern）と云へば、政治史上十六世紀以後であるが文學上にては同一にも見るし又十九世紀の終りからとも見る。又特に二十年乃至三十年前からを近代的文學と云ふこともある。幵は最も新しい期間であつて、日本の現代

に於けると同じ文學の趨勢である。今最も狹き意味の Modernity の特色に就て一二を説明しよう

近代歐洲文藝の特色として、先づ近代的幽鬱 (Modern Melancholy) といふことを擧げねばならぬ。此傾向は、近代歐洲文藝の總てに漲り渡れる一大特色である。其原因として、私は次の二三を數へたい。

(a) 近代の重大なる現象は個人主義の勃興である。基督敎道德の權威を絕對に認めた時代にあつては、博愛の前には個人は無意味であつた。斯く極端に個人性を蹂躪した反動として、個人主義は勃興するに至つたのである。即ち個人の意思欲望を無視するの甚だしかつた反動として、個人性の尊重を自覺したのが個人主義である。然るに個人性の自覺は、一面に於て他を屈服せしむるか自ら屈服するかでなくては納まりがつかなくなる。即ち他と調和することが困難になる。從つて自ら引つ込んで他人との交渉を避けるか、又は他人を壓倒して一時の安を貪るか何れにしても結局淋しき生涯又は不安の生涯を送らねばならぬ。是れが幽鬱を生ずる一因である。ニイチエの生涯の如きは好個の代表である。至るところ不調和的で、其生涯は自然寂寞たるものであつた。彼は此思想の爲めに殉死した人とも見られる。近代戲曲の父と稱せらるゝイブセンの如きも之れに近い。彼れの手紙の中にも其の意味を言つたのがある。要するに個人主義が自己を中心として自らに忠實なるの結果は、他人との不調和を來し、終に淋しみを感ずるに至るのである。

(b) 科學の勃興に伴へる知識萬能の傾向は、亦幽鬱を來した一因である。即ち十九世紀に於ける學問の進歩は、細密なる研究、煩瑣なる立法等によりて、過度に知識を使用した結果は、知識の衰弱を來して、其處に一種の幽鬱的傾向を生ずるのであらう。

(c) 人口の增加と共に、生活の困難を感ずる結果からも、幽鬱的傾向は來た。十九世紀の後半よりして科學應用の影響と

して著しく人力を減じた。それと反對に勞働者は益々其數を増して、貧しきものは愈貧しく、富めるものは愈富を吸收して、其結果貧富の懸隔著しく、從つて多數の貧者は生活上の疲れを感じて、終に幽鬱的たらざるを得ぬのである。

(d) 現實の暴露から來る悲哀がある。一月の太陽に出た長谷川天溪君の『現實暴露の悲哀』はそれである。人が古き道徳に滿足して居る間は好からう。けれども是れが道徳だ正義だと思ひながら、猶其奧の方から汚い考が起つて來る。如何に外面は道徳的でも、如何に皮相は奇麗でも、夜半闃として人靜なる時、自ら自己を顧みて、其内心の汚醜に思ひ到れば、人は其滑稽なるを知るであらう。故に人生は外面を一皮去れば、實に慘憺たるものである。斯く現實の暴露人間本性の暴露によりて人は自ら悲觀せざるを得ざるに至る。

以上個人主義の影響、知識の疲勞、生活の困難、現實の暴露、是等が結合して神經衰弱的傾向即ち近代的幽欝を生ずるに至つたのである。近代の歐洲文學には必ず此影が潜んで居る。今此事實の例證として近代畫家の泰斗佛のミレーのアンゼラスを擧げよう。ミレーはテオドル、ルーソー等と繪畫上の自然主義を勃興せしめた人である。アンゼラスは鳶色の繪具を多く用ゐた油繪で、五十年以前の揮毫にかゝり、今は一佛人の私有に屬して居る。初め僅に七百圓にて人に購はれたものが、三十年後には實に三十二萬圓を以て賣買されたと云ふ。現に世界最大畫の一である。

アンゼラスは『夕の勤めの鐘』の意味で、若き百姓の夫婦が畠で芋を入れた籠を挾んで向き合つて、教會の夕べの勤めの鐘に心を澄ます態である。傍には鍬や荷車なども置いてある。背景は野原でかすかに教會の塔も見え、それから鐘が響いて四方は最う暮れかゝる光景である。だから此繪を表面から解釋すれば、今日一日の務めを終へた若き夫婦が、折しも教會より鳴り響く夕の勤めの鐘を聞いて天に感謝を捧げて居る極めて平和な光景である。此種の光景は常にミレーの繪に現れる特色

である。然るに夫婦が餘念なく神に感謝を捧ぐる奥の背景は、云ひ知れぬ幽欝悲哀の影を宿して居る。彼等夫婦の顔には哀れな生活に疲れた無限の表情がある。前途に花の如き夢を見てゐる筈の若き夫婦が、大自然の野田や風雨や日光や寒暑やと戰つて燃えて居る若き血は漸次涸らされて行く、一日働いて得る所芋一籠の外に幾ばくあらう。此薄き報酬を得つゝ、彼等自らは猶ほ何の不平もなく神に對して感謝を捧ぐる所がいじらしい。自ら滿足して居る所に多大のペーソスを生ずる。彼等は何故に一籠の芋の爲めにあたら血を涸らさねばならぬか。抑も人は斯くしても生きざるべからざるかを疑ひ來れば、實に憂愁の意が盡きぬのである。此深邃の意味を寓して此繪は多大の妙味を帶びて來る。ミレーの繪に深き意味を有するのは、其背景に人間の運命問題を寓してゐるからである。

アンゼラスの如きは生活の疲れ生存の疑問を描いてある。だから其背景には幽欝悲哀の影が潜んで居る。近代的幽欝とは此の如きものである。

次には近代的平凡 (Modern Common-placeness) である。從來のロマンチシズムやリアリズムは、其作物が餘りに都合よく出來すぎて居る。餘り首尾がつきすぎて居る。餘りに事件が大業である。餘りに傳奇的である。何んだか事實らしくない。其處で反動的に起つたのが近時の文學である。傳奇的を避けて奇ならざる眞の人生を描かむとするのである。殊更らに首尾整つた事件を描かずとも、身に染みる人生の一節を寫せば、却つて痛切なる感興を與へる。なまなか細工交りの、人生と交渉の少ないものを書くより、生きて温い血の通つてをる眞相の一片を寫した方が可いと云ふ樣になつた。例せば同じ死を描くにも從來は必ず大事件の終結として描いたものである。それは死が人生の重大事件であるから之れに達するには非常の大波瀾が無ければならぬ。然るに近代の文學は是れを以て面白からずとなし、重大なるものゝみではない。換言せば死は大波

瀾の後にのみ來るものではないと云ふ所から、同じ死を描いても平凡なる死を描くものがある、又之れと反對に近代文藝の主人公は容易に死なぬことが多い。此處に新しい文藝の趣味はある。昔の死なゝければ幕の引けなかつた文藝とは大に異つて居る。最近朝日新聞に掲載された、長谷川二葉亭氏の『其面影』の如きは半新半舊の作物である。が此作などでも主人公の死なゝい、新文學の一特色を具へて居る。要するに死は大事件で平凡の事件を厭はぬ近代文學では容易に書かぬのである。今平凡の死を描いた例證としてゴルキーの書いた獨譯『ナハタジール』(夜の隱れ家)を擧げよう。英名では Bottom of Life (人生の底)と云ふ。歐羅巴の演劇でも最も新しき面目を具へたものである。私は此劇を獨逸で觀た。到底日本の劇場などでは演じられぬ其仕組は平凡主義の極端なるもので、首尾のない極めて沒要領な宛然湯を呑む樣だと思ふ人もあらう。

筋は木賃宿に於ける出來事である。即ち露西亞の田舍、とある木賃宿に生活の敗殘者が集つての光景を描いたものである。普通ならば三幕だから背景も變らうに、此劇は序めから終りまで舞臺に變化がない。其處には鍵屋や、俳優や、帽子屋や病婦や、男爵と呼ぶ落ちぶれ者や、色々な生活の失敗者が落ち合つて居る。丁度日本の木賃宿で飴屋や、ホーカイ節や獅子舞や、總て人生下層の人々が雜居する通りである。此家の主婦がまづ油ぎつた何となく色濃い女である。夫を尻に敷いてペペルと云ふ二十七八で、仲間の中に幅の利いて居る遊人に情を賣らうとする。所が、其男は彼女の妹に戀して居るので、主婦は男を自分の方へ取らうとする。夫の外出した後で、主婦と其男と巫山戯まはる所もある。總て此處に宿つて居る者等が毎日歸つて來ての話は、一方に極めて劣等のことのみで、此邊に人生醜惡の一面を直寫した眞意義が現はれて居ると共に他方には博愛や道德を代表したものがあり、又一方には極端なる個人主義のものがあつて、頻りに人世哲學を論じ合ふ。此邊もなか〳〵趣味がある。此間に主婦は彼の男に夫を殺させやうとする。男は肯せない。然るに自分の戀する主婦の妹のこ

とていさかふ中に、其男が夫を撲ぐると、圖らず夫は死んで了ふ。乃で此男と主婦とは警察へ引かれる。最後の幕に此家に泊つて居る俳優の落ぶれ者が藝術家風の口吻で、吾々は何の爲めに斯うして生きて居るか分らない、などゝ頻りに人生哲學を說き出す。側のものが新生涯に入るべしといふやうなことをいふ。アラビヤ人との一寸した臺詞などあつて、其中に彼はウ井スキーを一杯飲んで、最う往かうと云つてフラリと出かける。間もなく他の一人が歸つて來て、俳優が首を縊つてゐるといふ。皆々が一時驚く、併しマア酒でも飮まうとまた〳〵飮み初める者がある。

要するに斯樣に脆い人生の運命を寫して、極めて平凡な死が描かれてある。此に至ると人の命は甚だ安價なものになる。併しながら是れも人生の眞實である。（明治四十一年三月）

人生を描くとは何ぞや

私は、人生を描くといふことゝ、人生を味ふといふことゝは、同じ意味を含んで居るものだと思ふ。で、この人生を味ふといふことは、藝術上にのみ言はるべきもので、實行の世界では言ひ得ないのである。即ち、其實行した事柄が過去の追憶となつた時、或は他の人の行爲を餘程特別な立場からして、自分が靜に觀察して居るといふ場合にのみ始めて味ひらしい味ひに接するのであつて、自分が實行して居たり、又は非常な密接な關係からして、見たり聽いたりして居る實際界では、到底その味ひは分るものでない。隨つて、藝術上にあらずして、實世間にあつて人生を味ふといふ議論には私は疑ひを持つて居る。實世間は唯熱心に活動する場所であつて、自分が熱心に研究して居るといふ時には、その事柄に附屬した喜怒哀樂の情は痛切に感じえられぬ。要するにその場合唯情のみである。唯アクセクして居るのみである。

然るに、味ふといふことは、このアクセクとして喜怒哀樂の情に囚へられてゐるその氣持とは違ふのである――と言つて全然その喜怒哀樂が消えてしまつた情の無い人生なら、テンデ死んだ人生であつて話にはならぬが、その喜怒哀樂は切に感じながら、それが、何だか斯うバランスの除れた、全體に行渡つたやうな心持で、その情をいとなんで居る。然ういふ風に

その情をいとなんで行くと、一種妙な氣持になつて、過去の人生が、何だか可懷しいやうな慕しいやうな、妙な氣持が出て來る、それが即ち人生の味ひである。

で、さういふ經驗から、吾々の本能の自然の順序として、頭の中の狀態を其處へぶちまけて、何となく描いてみたいといふ氣になる。その塲合出來るのが眞の價値ある文學であるまいか。

よく一派の讀者が、自分の胸に非常に熱した執着の感情があつて、それをうちまけねば苦しくつて我慢出來ぬ處から書く――といふ說は、或る一種の藝術にはあてはまるかも知れないが、大體眞の文學の原理には背いて居る。眞の文學は苦しいからうちまけるといふ姿ではなく、うちまけねば苦痛に堪へられん程に熱して居る情を、鳥渡自分から離して、批評したり打眺めたりするだけのゆとりが立つて來る。その瞬間、面白いとか、描いておきたいとかいふ氣が起る。それが眞の價値ある文學になる。即ち自分ながら營んでゐる自分の情の味ひが出て來ると、自然に描いてみたくなる。玆に於て、人生を描くと人生を味ふといふことは、同じ作用の裏表である。

それでは、然ういふ狀態で描かれた人生とは何ういふのかといふと、その人生は勿論描くといへば再現するといふことになる。再現されたる人間と、造化の造つた人間とは少し異つて來る。造化の造つた人間は、手や足があつて活くるが、再現せられたる人間は、それよりはズツト引下つて、頭の中だけで活くといふことになる。

處で、一方からみると、造化に造られた人生よりも、再現された、即ち描かれた人生が精神的に深みを持つてゐる。といふことが或は言ひ過ぎて居るとすれば、造化の造つた人生よりも多くセンシテイヴになつて居る。感じ易い人生になつて居るのであつて、即ち味ひである。味ひ易い人生になつて居る。

要するに、實際界の總ての現象を觀るに、吾々は自分以外、命とか生とかいふもの丶存在して居ることを推測は出來るけれども、經驗するといふことは出來ない。今私の前に君が坐つてゐる。君は私と同じやうに生きて居る――といふだけは推測出來るけれども、君の生きてる狀態を直接經驗することは出來ない。例はこれに止まらず、一切の狀態が皆悉く然うであるのだ。

然るに、描かれた人生――その充分描かれたものであるならば、その現象たる、命とか生とかいふものを直接經驗するやうな感が起る。いつか牽入れられて仕舞つて、その描かれたのと同じやうに心が働いて、描かれた通りに、その描かれた人生に自分をなりすさませて仕舞ふ。所謂主客一體の形である。これが即ち描かれた人生の、文學として價値ある所以である。

而して、實際界では、自分を離して、他の物と一緒になることは出來ない。彼は彼、我は我として働いてゐる。冷かな人生にかまけた推察をする事は出來ない。

之を要するに、人生を味ふといふことは、實行の世界では到底出來ない。之れがパストランスになるか、それでなければ第三者の地位に立つて觀る時に始めて人生の味ひを味ひ得ることが出來る。（明治四十一年九月）

文藝座談

小說全體に渉つて、新運動が起こつてから以來、文學と作者自身、若しくは作者の實感とが、遙に密接して來た。事實と文學、恐らく此の二の境は益々接近せんとする。これが又やがて、新運動の重要なる生命である。こんな風にして、文學と實經驗、即ち實感とを、全く距離のないものとしようとすることゝ、其の實感を實行しようといふことは、全く意味の違つてゐる事で、よし文學の中身を、實經驗と一にしても、それを味ふと、行ふとの區別は、どこまでも存して行かねばならぬ。實行と實感とには區別がある。觀照することと、味ふことは文學、實行は道德の事に屬する。この區分はいつまでも殘るのである。今日の新文學が狹い、偏してゐると言はれる非難は、新文學が、吾々の實感、實經驗と益々肉薄し、密着せんとする事實から來るので、成るほど、昔の作者は、確かに廣い、複雜な人生を物語つたが、それは其の筈、彼等は多くは書籍なり他人の作物なりを見て、修得した人生の知識、若しくは自ら經驗したにしても、唯うはの空で經驗し、唯知識上に知るのみ、所謂通人的知識であつて、切に生死に關して感じ得た痛切な人生でないから、勝手に複雜な材料を、腦中から索り出すことが出來るが、それが活きたものになつてゐない。のみならず、空想を多分に加へて、一見如何にも複雜な廣い人生が描かれ

たやうに見えるけれども、其の實、それ等は僞物で、死んでゐる。死んだ人生なら、いくら複雜に、廣く出て來ても役に立たね。それに比べると、新進作家等の描く人生は狹い。それも其の筈で、自分に痛切に感じた即ち活きたものしか取り出せぬ。またそれがさう廣く得らるゝ道理がない。狹くとも活きてゐる、眞實である人生が遙に勝つてゐる。換言すれば、多くは描けないが、描く限りは實であり、眞であると言ふのが近時の作物である。であるからこの態度を以て進んで行けば、新進作家も年を積むに從ふて、經驗も廣くなり、其の描く人生も廣く複雜になる。唯殘る問題は、世故經驗に長けて、或る程度に達すると、頭に妙にバランスが取れて、鋭く實感が出て來なくなる。廣くはなれど、さて以前の鋭い、活きた物は書けなくなると言ふ弊が起りはしないか。若い作家等が、果して、この難關を、如何に切り拔けるかといふことが、向ふ十年、二十年をかけて見物すべきことである。

當今、文壇のデカダンと言へば、善惡の意味を拔きにして　まづ德田秋江君などだらうといふ噂があつた。この人と正宗白鳥君とは、前から並んで文壇に立つて來たが、或る意味からいふと、所謂近代人の特性(モダーンキャラクター)を、違つた方面から、この二人が分け前してゐられる趣がありはしないか。即ち秋江君は、寧ろその弱い方、感情的の方、若しくは一口に言つて、デカダン的の方面を有つてゐる、すべてあの人の作物に、さう言ふ香がつきまはる。そこが、やがて面白い所以にもなつてをる。之れと對照して、白鳥君は、其の强い方、筋張つた方、若しくは知力的な方面を代表して、一種の際立つた性格を持つて居る。この性格が、やがて其の作に現はれて、面白味の源となる。勿論、新文人には皆それ〴〵特性がある。其の特性の多い程面白いものが出來てゐる。中に就いても、白鳥君は最も特色があつて、向ひあつて話してゐても、まるで違つた手障りがある人のやうに見える。やがて、今の文壇に於ける一種の調子を一身に權化したやうに見える所以であらう。要するに此等

の人の性格は、性格そのものがコンヱンショナルでない。近頃の人が、變つてゐるといふ點が面白く見えるのである。

國語假名遣問題で、文部省の官人が代る每に、右だ、左だと大騷ぎをやるが、あれは妙なものだ。細かい點に就いては、異存があるとしても、大體の主義に於ては、前のやり口に賛成する。唯今度のやうな醜體が演出せられる根本の一理由は、あれを役人の手一つで、其の手の屆く小學校から、押しつけて行くといふ根本のやり方が間違つてゐるのではなからうか。小學校の兒童から敎へ込んで行つたとて、世間に既に存在し、成人した人々を支配するものは文學の世界であつて、文學中心となつてゐる。この成立した文學の上から、この文學のやり口を、小學校の兒童に否應なしに行ふのは容易なこと、前のやり方と比べて、强弱からいへば全然倒である。よし一歩讓るとしても、少くとも兩方から相助けてやつたらよからう。文學は其のまゝ据置き、而して小學兒童だけ改良して行かうとしたのが、失敗の大原因である。例へば、新聞紙、雜誌、其の外人心を支配する色々の讀み物、此等が新方針に變らなければ、いくら文部省の努力も、小中學に强ふる位では、到底負けるに定まつてゐる。この點から言ふと、國語改良問題、假名遣問題などは、宜しく文壇の賛成を求めて、こゝより手をつけるか、或は少くとも、これと同時にやつて行かねば成就するものではない。今度、新文部省が、古い方針をやめるといふ理由を發表したのを見るに、眞先に、世間では之れを實地に行つて居ない、といつてゐる。これに依つて見ても從來の方針が違つてゐたこと、やり方の惡いことがわかる。

芝居の改良といふことに就いては、俳優の改良、脚本の改良、興行本の改良、それに續いて、見物の改良、劇評家の改良

といふことまでも唱へられてゐる。其の中で、見物の改良といふことは、往々、俳優の方から出ることであるが、口はゞつたい言ひ分である。好いものを見せずして、見物を改良しようとしたところが、出來るものぢやない。又ちつとやそつとの見物を改良したとて、後からだん〳〵新しい見物が出て來る。そして實際、社會にはこの方の見物の方が多い。所謂大向連が多いのであるから、その隅々までも改良が出來るものではない。斯くの如くして結局、西洋と同じやうに多數と、小數との見物に見せるものが、分かれて來る。日本の現在の社會でも、好いものを好いと見る見物は決して少くない。或る程度までは、之れを認める見物が立派にある。俳優側から、見物改良といふことは、言ふべきことではない。唯一つ局外から見て、見物改良が、いくらか出來るとすれば、其の唯一の方法は、劇評殊に新聞劇評が、其の廣く讀まれるといふことから、こゝ等に力を用ふれば少からず便宜である。新聞の劇評は、今までは俳優を敎ふる方が主であつたが、今後は寧ろ、見物を敎へ、面白い、面白いと思はせるやう、見物の判斷を進ませるやう、努められたい。行く〳〵は、この新劇評が出來るだらうと思ふ。例へば、「讀賣」の小山内薫君、又「早稻田文學」の赤とんぼ、あそこいらは、若い、そして素養ある將來の劇評家たるべき技倆を顯はしてゐる。かゝる人々は役者、作者に氣を兼ねず、道樂氣を離れ、眞面目に批評方面を開拓せられるから餘程面白い。要するに新聞紙の劇評は、餘り黑人くさくないものを書くやうに努めたらよからうと思ふ。(明治四十一年十月)

文藝は男子一生の事業とするに足らざる乎

別に纏つた話もないが、私等の今の立場から言へば、文藝は男子一生の事業とするに足らぬなど丶云ふ、そんな馬鹿なことはない。誰だつて自己の職業に對して、一度は然う云ふ疑ひを持つ時代はある。然し、然う云ふ風に疑つて來ると、單に文藝のみではない。世の中の總ゆる職業に對して、其疑ひは起つて來る。現に私なんか學校の敎師と云ふ職業を遣つて居る。敎師と云つても、單に字句の解釋のみに止まらず、それ以上のことを生徒の頭に理解させる仕事なので、同じ敎師としても非常に興味の多い方である。それで居ながら時々は自分の仕事に對して疑ひが起つて來る。長い講義の間であるからして、然う何時も〳〵自分の全力を打ち込んで講義が出來るものではない。寧ろ、吾が全力を打ち込むと云ふやうな場合は少くて、一度考へたことを年々學生が變るに從つて、同じやうなことを繰返して話して聞かせる。同時に敎場の威厳を保つためには、打ち寛いで冗談の言ひたい所は控へ目にするとか、笑ひたい所も笑はないで、何所かしかつめらしい樣子をして話して行かなければならぬ場合が多い。そんなことを倩々考へて見ると、隨分自分で自分に冷汗の流れるやうな場合があつて、若し事情が許すなら、自分の滿足することばかり遣つて居たい、職業として世間の人を相手に、謂はゞ己れの心にもない不自然な

ことをして飾らなければならぬと云ふのは、實に馬鹿々々しい。然う云ふ考へで人の遣つて居ることを見ても、人のことながら矢張り然う思へる。敎師なんてしかつめらしい顏をして敎場へ出て、あの氣取つた態度が癪に觸るとか、あの不自然な樣子が可笑しいとか、ひねくれた觀察も起つて來る譯で、然う思つて自分は敎場に出る以上は、出來る丈け自然に、氣取つた所や、不自然な虛僞を拔きにして、家で胡座を組んで話すやうな風に、少なくも自分一人は遣りたいと云ふ考へも起つて來るのであるが、既に、敎師として敎場に立ちながら、胡座を組んで話すと云ふ態度は、人に氣兼ね遠慮をせず、自分の仕度い三昧をして過すと云ふことゝ根本は同じである。其所まで來なくては、自分に充實した感じは與へられないと思ふ。何となく自分を僞つて居るやうで眞の自分でないやうな氣がして物足らなく思へる。例へば中學敎師なぞ、少し自覺心のある人には、隨分自分で自分を嘲るやうな馬鹿々々しい考へが起つて來はしないであらうか。詰り、自分が自分でないことを遣つて居ると云ふ氣持ちの起るところに、隙間が出來て來るのである。

之が文藝になると例の遊戲三昧と云ふ意識が、昔から遺傳的に附け加へられて居るので、何だか人がせつせと働いて居る中に、自分は遊び事をして居ると云ふ氣持ちが交つて居る。それで、文藝其物に何となく飽き足らないで、今少し自分の全力を盡すことの出來る仕事が、他にありさうに思へる。則ち、自分自身の職業其物に懷疑を持たずには居られないのである。或る程度まで達して自覺した人々には、誠に餘儀なく起つて來る所の懷疑で、其所が取りも直さず近代思想の影響を受けた近代人の特色である。然し斯うした懷疑は、苟めにも强い自信と自尊とを以て文藝を遣る人々には、切り拔けられないことはあるまいと思へる。自分が一生懸命に遣りながら未だ遊んで居るやうに思ふ間は、其人はとても打ち込んだ文藝は出來ない。必ずしも文藝のみが傑れた仕事であると思へと云ふではないが、少なくも外の仕事と同じく、矢張り一つの仕事なので

ある。人生の深い根據を持つて居る所の仕事なのである。

實際、今日眞面目に文藝をやつて居る者の本心にもどつて見れば、其處までは誰も持つて居る考へであらうと思ふ。だから、外の總ゆる仕事と同じやうに、或る程度に達すると、文藝も馬鹿々々しくなる。詰り、其事に頭を埋めて見ると、色々な隙が見えて來るからして、其隙間を何うして滿たしたら可いかと云ふことが、本當の問題になるのである。

其處までは言へるが、其以上は、單に文藝上の問題のみではなく、總ゆる人間が或る程度に達すると、自己の仕事に空虛を感じて來て、遂ひには一種の人生觀を作る。然う云ふことになつて來ると、ライフは如何にすべき乎といふ哲學上の難かしい問題であると思ふ。

つまり、私の考へでは、文藝が果たして男子一生の事業となすに足るとか、足らぬとか云ふやうな疑ひの起つて來たのは、一つは文藝と云ふものは、遊び半分のものであると云ふ、傳習的の考へと、今一つは總ゆる方面に關する自覺と、此二つの心持ちが原因して居ると思ふ。

然し、自己の職業に對する懷疑は單に文藝家のみではない。近代思想の影響を受けて、或る程度まで自覺した人々には、必然に起つて來る問題である。宗教家にしろ、政治家にしろ、自覺が或程度に達すると、自己の仕事と眞の自己と云ふものは離れ〲のやうな氣持ちがして來る。例へば、宗教家が講壇に立つて、眞面目に熱心に、神とか信仰とかを說いても、成程其刹那は誠實の氣に滿ちて居るかも知れないが、半夜夢醒めて頭がコールドになつた時、靜かに考へて見ると、講壇に立つた時の態度でも心持ちでも、何だか本當の自己ではなく人前に藝當をして見せて居るやうな氣持ちがして、時に馬鹿々々しい氣になる。斯う云ふことは、能く牧師などの自白の聲に聞くことがある。又、政治家でも、議事堂に立つて國家の政

治を議しても、皆凡人凡夫の行らない情實が、待合の裏座敷や、私宅の酒の席で定められて、それが明日は堂々と國家の政治となつて現はれるのだから、自覺ある者が自身を見たなら、何となく己を僞つて恥しい、自分で自分を嘲るの情に堪へないだらうと思ふ。單に文藝のみではない、世の中の總べてがそれだ。總ゆる仕事に、實際頭を埋めて見ると空虛がある。それで他の仕事に遷つて見た所で、要するに同じことなのだ。如何なる仕事に從つて見ても、滿足の地を見出すことが出來ない。所謂懷疑派である。所詮、自覺したる現代人には、懷疑で終るか、虛無で終るより外仕方がない。之れはあながち現代人にのみ限らず、昔から斯うした傾向はあると思ふ。即ち、酸ばいも甘いも嚙み分けた人――つまり通人がそれだ、何事に對しても、熱心もなければ、別に執着もない。何うでも可いと云つた、涅槃の心境で生を送る人である。然し、中には懷疑の極一種の悟りを開く人がないでもない。近い例がトルストイ翁で、翁は懷疑の極悟つた人である。悟つた人は、其悟りに對して、又初めのやうな熱心を以て吾が仕事に努力することが出來る。つまり、新らしい心持ちに返るのである。然し、トルストイが若し、之れから百年も生きて居る間に、今の安立に對して、又懷疑を持つやうになるかも知らぬ。

此の疑ふと云ふことは、自覺した人々に取つて誠に餘儀ないことである。文藝家はさながら自分等のみのことのやうに思つて居るが、私は、之れを單に文藝のみでなく總ゆる事業に對する人生問題として考へたい。(明治四十一年十一月)

三人の作物

今月の小說界で注目すべき重なる作物は藤村君の『壁』、風葉君の『世間師』、白鳥君の『明日』、まづこの三つであらうか。

藤村君の『壁』は、從來の行方とは多少異つたもので、讀者はまづ第一に新奇だ、調子の違つたものだ、といふ感にうたれるであらう。新奇といふことが文學的價値に多大の關係ありと思ふ批評家は、この點に於て『壁』を傑れたる作といはざるをえない。僕は初め一度讀んでみて、何を書いたものか十分に解しえなかつたので、更に再び讀みかへした。いふまでもなく標象的のもので、作者が覗つた點は、おぼろげながら會得することが出來る。描寫法に於ても出來るだけ、膩や艶を抜いて了つて、肝心な急所ばかりを現はしてゐる。從つて深(ディプ)だ。

慾をいへば、作者の覗つた點をば今少しく明かにしてほしかつた。上から覗いてみると、何となく深い暗い物凄い底に、或物が潜んでゐる、しかし讀者は其の或物を較遠く離れて觀るの嫌がある。どうか其の或物をば今少しく明かに、今少しく近くして貰ひたいものだ。

風葉君の『世間師』は、描寫法が如何にも巧みだ。成程、纒のないスケッチ風なところも無いではないが、兎も角始めから

終ひまで、面白く讀みをはらしめる腕は實に豪いものだ。「私」とい說話者が、初めの内は自身の感想や何かに就いて委しく話しておきながら、後半に於いては太だボンヤリしてゐるとの非難は、考ふべき問題であらう。兎に角、君の豐艶な筆は恁ういふ際の作には適してゐない。君は近來よくゴルキーなどの好んで描く、寂しい暗い陰氣なものを書かうとしてゐるが、それは風葉本來の傾きであるまい。君には矢張り『ぐうたら女』のやうな作物が最も適してゐると思ふ。

白鳥君の『明日』は、珍らしく女を中心として書いた、といふ點が殊に注目すべきことであらう。技巧は益々圓熟したやうだ。しかし此の新らしい傾向は、今の君に取つて果して喜ぶべきものかどうかは疑問だ。勿論君が此の方面に於て一生面を拓けば結構なことであるが、それにしても僕は尙、あの飽くまでシニカルな白鳥式を何所までも續けて行かれんことを希望する。（明治四十一年十月）

脚色論、壁論

此頃プロツトの論がやかましい様だが、僕にはプロツト論そのものとしては一向に興味を引かない、さほど緊切な問題とも思はぬ。シモンズ氏が言つてゐる如く、もう半世紀も前に落著のついた問題で、今以て其アポロジストのあるのは英國くらゐのものかも知れぬ。

僕の見る所では此問題の底にはつまり冷味の文學平凡味の文學と熱味の文學非凡味の文學との對稱があるのだらう。今のやうな冷味温味の文學でなく、もつと熱味非凡味の文學が欲しい。それには脚色のあるのが好都合ぢやないか。といふのだらう。斯う考へれば僕等にも問題とは見えるが、併し脚色なぞは實はどうでもよいのだ。熱味非凡味さへ得られゝばよいのであらう。

それなら脚色といふことを眞向に翳した論は少しく的外れの氣味でないか。冷味熱味の消長については大に議論もあらうが、脚色獎勵が熱味を生ずる最好唯一の方策であるか否かは頗る疑問だ。脚色の力で生じたざらの熱味非凡味には食傷して今の冷味に來た文壇だから、今後に味はんとする熱情はづつと光景の變つたものでなくてはならぬ。

藤村氏の「壁」の批評について、作者みづからは、あの作は何でも無いと言つてゐられるが、あれは謙遜の意味が正面の辯駁に誤り傳へられたのではないか。僕が嘗て本紙記者に話した批評にも關係がある樣だから、今一度僕の觀る所を述べて置く。あの時の話には趣意の徹底してゐない所があつたが、僕の意味を碎いて言へば斯うである。

「壁」が僕に與へる印象には二つの燒點がある。一は作そのものが與へる印象で、何だか物足りない、不滿足といふ感じである。暗中に或物の影は見たが正體が見えぬといふ感じである。名は分からずとも其或物がぴつたりと胸に來なければ其作は成功した作ぢやないだらう。

併し今一つの印象は作を通じて明に見える作者の態度で、此方が僕には同感を喚び起した。此燒點から僕は今以てあの作が十月の創作界でストライキングなものゝ一つだと信じてゐる。それは即ち筆使ひが同じ作者の『破戒』などゝずつと違つて、冷かに簡單になつて來たこと、壁の一結で今まで書いてゐた空氣を封じて、却てコンデンスしようとしたこと、及び其書くべく思ひついた空氣が一種の新らしい觀察眼を示してゐることなどである。だから、僕は此作が作者の目ざしただけの目的は達してゐないが、目ざし方と現はし方に新味があるといふ意味を述べた。

併し作者が其目ざしたものだといふ劣勝優敗の理は一向に出てゐないと思ふ。尤もこの淺明の理法なんかは出なかつたのが此作の幸福と信ずる。

此作の中心はやはり壁の一結に至つて生きるべき組織になつてゐる。壁といふ題を省いたらさうは見られまいといふ說は間違つてゐよう。あの作で一番强く響くのは終りの壁に向ひ合つてゐるといふ一節である。活字ならあそこだけイタリック

にしてありさうだ。ホーソーンなら四號活字の使つてある所といふ風な印象を僕等に殘す。題は吉さんでも何さんでも、壁といふ字が全體封じ目といふ風に浮き上つてゐるのが、あの作の結構である。作者が壁といふ題をつけなければよかつたといふのは、謙遜か、それでなければ氣づかないでやつた結構とでも解する外はない。（明治四十一年十一月）

口語詩問題

詩と散文との重なる差別は如何しても廣い意味でのミーター（律格）の有る無しに歸するから、如何に今の口語詩が宛らの情調を現はさんが爲めに、形式の自由を尊ぶからとて、敢て自然に出づる此約束をまで顧みぬ譯には行くまい、といふのは此の律格が元と吾人の生理的心理的狀態と交渉を有して居るものである、例へば濃厚の情には吾人の心臟は自らにして一高一低の鼓動を烈しくする、それが自然の律格、節奏である。而して感情が靜まれば鼓動も亦平靜に復する、此處が詩と散文との分るゝところで、前者よりは詩を生じ、後者よりは散文を生ずる。斯く考へればミーターは如何しても詩に於ける自然の約束である。

がミーター即ち律格と云ふにも二つある、一つはラングエージ、ミーター（言語的律格）とも呼ぶべく言語の上の節奏である。今一つはソートミーター即ち思想の上の節奏である。研究の必要は此處にあるので、前者であると人工的に豫じめ形式の上からキチンと制限して、行の長さを定めたり音律の數を定めたりするのであるが、感情の發動が必ずしも左樣あるべきではないから、それを株守すれば情調の自然の描寫を妨げられるといふ結果になる。此の點からは何も是れに縛られる必要

はないかも知れぬ。が少なくとも後者は如何あつても必要である。言語の形式の上でキチンと制限して置かずとも、而かもその折々の情調には又その折々の自からなるリズムを伴ふべきであるから。されば前者は人工的律格、後者は自然的律格と言つて、問題は此兩者の取捨に歸する。

一體口語詩の問題となる點は西洋では昔から二つに約められるし日本では之に今一つ特別のものを加へて三つと見ることが出來る。西洋で二つといふのはワーヅワース、ホイツトマン等に通じて流れてゐるポエチツク、デクシヨン即ち詩句法の論とミーター即ち律格の論とで、前者は詩が動々もすれば普通の言葉と違つた選擇（チヨイス、オブ、ワーヅ）及び語の排列（オーダー、オブ、ワーヅ）を要すると思ひなされてゐるのは間違でないかといふ問題である。又後者は即ち前に言つた律格といふものが本來不自然に後から言語の上に制限をつけたものでは無いかといふ問題である。而して今一つ日本で特別に附加せられる最後の問題といふのは、グラムマーの事である。であるから口語詩問題は此三點から研究して行けば明快に順序が立つと思ふ。併し無論茲で私がさやうの研究をしようといふのでは無い。たゞ大體の事を述べて見る。

詩句法と稱して詩に一種特別の措辭法があるやうに思ふのは間違だから平談俗語と少しも異ならない措辭法で行かうといふのがワーヅワース等の主張であるが、是れは古い一定の固着した句法に囚はれないで、自然の感情と密接した句法を取れといふ意味に解釋して始めて意味がある。詩にでもしようといふ自然の感想には、おのづからにして語の順序が轉倒したり、用語に選り好みが出たりする。之れ丈の範圍で詩に特殊の句法が出るのは些かも異しむに足るまい。こんな意味での詩句法はワーヅワース始め今の日本の口語詩人に至るまでも現に用ひてゐる。たゞ問題はそれが感想の自然の發露と密着してゐるか離れてゐるかの點である　密着してゐれば實は詩句法が殊更に詩句法といふ名を要せぬ位のものになる。詩的感想が頭の

中で發動して來る時は、閑なテニハや助動詞などは省けて行く。附屬辭が主辭の頭に附くこともある。こんな意味での詩句法論は今日殆んど無用であらう。甲の語句が自然だといふ人と乙の語句が自然だといふ人と、要はたゞ作詩の結果によつて分かるべきである。自然不自然の判斷は理論や法則では極まらない。

文法の論は一層明白な問題で而も是れが往々にして人の頭を混亂させてゐるやうに見えるのは奇だ。文章的文法と口語的文法と、前者が何等か連想の上などに永久の權威を有してゐるから、詩は之を用ひねばならぬと考へるものが若しあつたら笑ふべきであらうと思ふ。文法の根原といふものが本來一派の人々の考へたやうに人心普通な現象に發したのでなく、一の習慣法たるに過ぎないのだから、周圍の變遷と共に變ずるのが本則である。「行つた」といふのと「行きぬ」といふのとは措辭上から來る語の選擇でなくして、文法的の相違と見るべきであるから、前者が蕪雜で後者が雅醇だと思ふのは思ふのが後れた頭であることは、散文の上に於てすでに實證せられて了つた。一方が簡潔だとか一方が冗漫だとかいふ如きは今日ではもう過去の爭である。詩が獨り此の方法に離れて行かなくてはならぬといふ根據は何處にも無い。口語文法の根本生命に逆行するものは必ず衰へる。現今の口語詩運動には此の簡明にして而も誤られ易い問題を解決しようとする意味が多分に含まれてゐると思ふ。

以上の樣な順序で、所謂口語詩が、第一、律格を言語的律格から思想的律格に移さう、第二、詩句法を自然の句法にしよう、第三、文法を口語文法にしようといふ動機を含んでゐるとすれば、私は其何れにも贊成を表して、其成功を期待する。たゞ研究としては就中第一の點が難事業であらうと察して反對側の意見をも參考するだけの興味を有してゐる。（明治四十一年十一月）

四十一年文壇の回顧

文壇は此一年間に於て、非常にセンシチーブになつて來た。と、言ふのは……何と言つたらいゝか……まア感覺が鋭敏になつたとでも言はうか、謂ふ所の意は作者が曖昧な事を書いて行くと、その部分がすぐ發見されて、本當の自分と作品との間に寸毫の隙をも容さない。誤魔化しを容さないと言ふのである、尤もかういふ傾向は、自然主義が起つて來た昨年あたりから認められた事ではあるが、今年に至つて殊に強くなつた。是は單に小說界に就て言ふのであるが——隨つてさういふ缺點を見付けられた者は、直ちに其地位までも動かされるといふ風になつて來た。それは勿論讀書界の進歩であると共に、亦作者に取つては當然の報ひと言はねばならぬ、かうして行くと、本當の作者と、亡びる作者との區別がついて行く。

又今一つ言へば、嘗ても述べた如く、今年は自然主義と道德との衝突の年であつた。その結果として當然起つて來る問題は、單に自然主義と道德との關係でなくて、藝術と道德との關係論でなければならなかつた。それに就ては私もしば／＼藝術と道德とは違つたものだといふ立場で論じたつもりであるが、要するに自然主義が道德から過られ累された中心點は、自然主義を以て邪淫を人に勸めるもの、醜惡を人に行はしむるものと誤解されたるところにあつて、この惑ひ釋く唯一の方

法として藝術と道德との關係を明かにせなければならぬと考へたのである。で、眞文藝は人の實生活と少しも離れるところはないが、たゞ、それを深く思ひ、切に考へさせるもの、それが眞文藝の目的である。けれども、是を行はしむるものでないといふ意味に於て、藝術と道德とは其處に一線を劃して居る。實に感じ、實に思ふ事と、實に行ふといふ事とは別な事である。そこに道德と藝術との根本問題がある。といふのであつた。然るに一派の人々は、この道德と藝術との根本の相違を斷ち捨てゝ、實行の上にも及ぼすといふことを主張する者があつたが、それは私から言へば、寧ろローマンチシズムに歸るものだと言ひたい。何となれば自然主義は行へと叫ばずに、首を俛れて思ひに沈むといつたものである。一方は熱叫し、一方は靜思する。そこに相違があると思ふ。是はやゝ一方に立ち入つた問題であるが、然し過去一年の文壇に起つた、自然主義藝術と道德との關係論より生じた、當然の、そして又主要なる問題であると信ずる。

それから、新體詩の上に於ても、口語詩といふものが試みられるやうになつた。そしてすべての先驅者が遭遇すると同じく、口語詩も亦世間の批難嘲笑を受けたけれども、私は面白いと思ふ。初めから完全なものは出來ないから、今の作品は不完全でもたしかに前途のある事業と考へる。在來の形の新體詩があれはあれ丈で矢張り作者の思想感情を殘りなく言ひ得てゐると考へるのは、丁度漢詩人が自分ではあの漢字の排列で、自分の感想を言ひ得てゐると信じ又實際さうしようと熱心してゐるのと同じ理で、作者みづからの藝術本能の滿足感に過ぎない。埒を出てから眺めれば、到底其の何分一も目的を達して居なかつたことが分らう。口語がやつぱり、最上の現代語即生きた言語であることは疑ひないと思ふ。之を要するに新興文學の足跡は大膽で明白、紛々たる反對論の如きは事實に於て何の妨をも其進運に加へ得なかつたといつてよい。進歩の一年たることは否むべからず。（明治四十一年十二月）

行はせる藝術と考へさせる藝術

ロマンチシズム以來の文藝の移り變つて來た跡を見ると、其處に二つの著しき對照が認められる。一つは行ひ又は行はせんとする藝術、一つは考へ又考へさせる藝術、の二つであつて、前者の方は概してロマンチシズムの藝術に屬し、後者の方は専ら自然主義の藝術に屬する。行ひ行はせんとする藝術と云ふと、所謂熱烈の藝術、理想の藝術であつて、自分の胸に抱く實目的を、其儘さながらに文藝即實行と見て行きたい。文藝は要するに自己の熱望を達する方法に外ならないと考へる藝術。又考へ考へさせる藝術とは、右に云つた樣な實際的な思想をも、いざ實行せんとする其間際に於て、一寸透して、自分が夫れから一段上に浮び出でゝ、振り返つて見て描く、其結果として自分自らも大熱心を持つて考へて來てゐた事柄ではあるが、さてそれを今更の樣に向ふへ突き出して、打ち眺めて自分はこんな姿であるが、世の中はこんなものであるかと眤と考へ込む。又世間の人をしても其作を讀ましめて、自分と同樣に其事柄に對して深く考へて瞑想させる。要するに此二種類の藝術は共に其作者乃至讀者に極めて痛切であり、且つ信實であり、從つてしみ〴〵と胸にこたへる者ではあるが、最後の瞬間に到つて、一方は直に之れを實行し、若しくは實行せしめんとして、熱心にそれに執着するし、他の一方は實行の手を

留めて、それを瞑想する、若しくは靜觀する。此の靜觀的態度と實行的態度とに依つて、自ら藝術は二樣に分るゝと見らるゝのである。他の處でも云つた例であるが、日本で一例を取れば、故國木田獨步君の作物中の「牛肉と馬鈴薯」と云ふ小說が、現代の人の神經の强い刺激を要求する結果、非常な驚嘆の情を得んと欲する事實を書いたものとすれば、此の小說は現代人が要求してゐる驚嘆の情を、實地に充たさんとして起つたのでなく、寧ろ夫程迄に驚嘆の情を要求する現代人が、其の事實を今更の樣に氣づいて、回顧して見て、成程、代には此樣な精神上の深い消息があるなと思はしめる樣に書いたものだらうと思はれる。換言すれば驚嘆の情其物を書いたものに非ずして、驚嘆の情を要求する現代其物を描いたものであるに外ならない。即ち實行的要求より云へば、手取早く驚嘆の情其物を與へて貰へば夫れが一番好都合であつて、自分に痛切なものに相違ない。ロマンチシズムの藝術は此要求を滿さうとする。即ち藝術が進んで自ら左樣な實際上の現代的要求を果さうとしてゐる。けれども此は一方から云ふと無駄な話かも知れぬ。何故なれば驚嘆の情が、經驗して見たいと痛切に思つて、左樣な情に渴してゐる人に對しては、藝術等はまだ〳〵遲緩なもので、他にいくらでももつと〳〵痛切に其要求を滿すべき方法がある。例へば現代人の一部が非常に强い、肉の刺激を要求すると假定せば、夫れを藝術で與へんとするのは、いくら藝術が威張つてもとても追ひ附かない。それよりも全然藝術的ならざるもので造られたる書物なり、何なりを讀む方が功果が多い。更に進んでは自らが肉體上の行爲をすればそれが一番有効であつて殊更に藝術を要求する理由はなくなつて仕舞ふ。藝術が爲し得る仕事はそんな在つても無くつてもいゝものぢやないと我々は考へる。

即ち右の如く驚嘆の情を要求し、又は肉の刺激を要求するそれが、止み難い現代人の一部の運命であると假定すれば、其の運命であるなど云ふ事を考へさせる、それで以て人生を深く思ひ回して、限りなき瞑想に還入らしめる。其處が藝術の天職

ではないか。

古い藝術と比較べると、古い藝術はそんなおつくうなものを人に與へる迄もなく、唯仕事に疲勞れた人に一塲の娛樂を與へ、丁度熊公八公が浪花節の寄席を聞きに行つて、一日の勞苦を忘れると同樣の程度で、所謂社會のアミユザーとなり、社會に娛樂を與へればいゝと思つてゐた。けれ共實の所娛樂に餓えてゐる人々に娛樂を與へるのなら、藝術など云ふ廻りくどいものよりも、もつと直接のもので娛樂を與へるものがいくらでもある。藝術と名のつくものにした處が成る丈本當の意味の藝術と遠ざかつてゐるものより善く此の目的を達せられる譯である。

要するに我々の實際的感情の要求を滿すのが藝術なれば、其の一手段であるかも知れぬが極めて地位の低い、他の方法がなければそれでも滿足してゐようといふ程度のもの以上には出る事が出來ない。どうも藝術の本旨はさうでないらしい。左樣な意味で我々に感情の要求を滿すよりも、寧ろ熊公八公が浪花節を聞きに行く其姿を、成程之れも人生の眞理の一面だなと、深く思ひ回らさして貰ふ方が難有い。此の思ひ回らす味を與ふるものでなければ、どうも藝術の本來の使命を全たうしてゐないものと考へる。現代の藝術は此意味で作られ、又此意味で讀まるべきものだらうと考へる。然るに世間には往々にして自然主義論等と云ふものゝ中にすら、此の區別を混同して、實行即藝術と云ふ風に、然かも多くは口先許りで稱へるものがある。是等こそ總て自然主義其物を害つて、舊のロマンチシズムに引き戻すものだらうと考へる。勿論考へさせると云つても、考へさせるには、痛切な實感情も必要であつて、考へさせる爲めの材料としては、或る程度迄之を與へなければならないが、之にはおのづから二通りの方式が出て來る

即ち一つは智識の方面をも非常に明白に與へて、其明白の智識が主になつて、情も自ら起つて來る。乍然かう云ふ塲合の

情は概して熱烈でなくして、淡い微温的な情になる。斯樣にして明白な知識と、それに追從する微温的の情と、此の二つのものが材料となつて、其上に我々をして回顧沈思の情に耐へざらしめる。之れが一つ。今一つは其の知識の方をば必ずしも明白に寫さずして、知識や、感情の起つた全體の氣持と云ふ樣なものを、朦朧と寫す。即ち個々特種の知識を描くものでもなく、個々特種の感情を描くのでもなく、是等のものが一群となつて起つて總〆高の感情を描く。然しそれで以て我々をして回顧沈思の情に堪へざらしめる。即ち一方が純自然派脉であつて、一方が印象派的乃至は進んでシンボリズム等にも連續する行方に外ならない。こんな風で行方は幾通もあり得ようけれど、要するに其の目指す處は、右に行つた回顧沈思と云ふ點になるのが、新藝術の最も重要の一つであると我々は信ずる。考へ若しくは考へさせる藝術でなくては如何程それが熱烈であつても現代の人は滿足してゐまいと思ふ。（明治四十二年一月）

論議一二

一

何の爲めに小説を書くかと問はれ、或作者は食(パン)の爲めに書くと答へ、又或る作者は原稿を催促されるので、餘儀なく書くと言つてゐる。これ皆な僞らざる告白に相違ない。然し幾ら原稿料が欲しいとか、催促の烈しい爲めとかに書くにした處が、愈々筆を執つて紙に臨めば、必ずや藝術的本能によつて知らず〳〵其の作に心を奪はれて了つて、原稿料の事や催促の事は念頭に置かないであらう。正に然るべきことで、若しさやうな瞬間が全くなかつたならば、其の作は決して見るに足るものにはならないだらう。

思ふに食(パン)の爲めとか、催促の爲めとか云ふのは唯外部の動機である、假令着手は外部からの動機によるとしても、着手と共に内的動機即ち藝術的本能の衝動が起り、其處に初めて作は出來るのである。文藝の根本動機は自己表現にありと云ふ、多き作者の中には、唯だ斯う云つて内部動機のみにて作をするものも、稀にはないではあらうが、今の時代では、稿料とか名

響とかの觀念を離れて書くと云ふ事は、殆ど不可能であらう。

二

印象派と云ふのは、描寫に於ける一種の態度である。向ふのものをば、さながらに描き出さう、寫し取らうと云ふのではなく、一旦作者の頭に映じたものをば有りの儘に描寫しようと云ふのだ。

從來の寫實派の態度は、向ふに在るものを、そつくり其の儘、作に現はさうとするので、寫さんとする事象と作者との間には何等の仲介物――無論作者が見聞して其れを紙上に現はすと云ふ順序はあるにしても――の入るを許さぬ。處が印象派になると、人生なる對象を一度作者の頭に映らしめ、作者自身の氣もちの掩ひかぶさつたものを描き出すと云ふ順序で、云はゞ作者の頭と云ふ仲介物が中に入ることになる。勿論寫實派にしろ、全然作者が事象と作との間に立たぬと云ふことは出來ないが、此場合の作者の態度は、文字通りに明鏡の物を映すに等しい。故に今茲で見てゐる一枚の硝子障子を描くにしても、中央部は勿論、上下左右から隅の隅まではつきりと描かうとする。けれども印象派では、先づ硝子障子を見る。其時眼に映つた形――決して文字通りに鏡面のやうな譯にいかぬ。視界の燒點になつた一部がはつきりして、其れから遠ざかるに從ひ次第々々とぼんやり見える――其ありのまゝの作者の印象を實物の如何に拘はらず描寫しようとするのである。

三

批評にも印象批評と云ふのがある。此れは作物を讀んで、それから受けた印象を、そツくり其の儘打ちまけやうと云ふの

だ。此の種の批評は讀んで面白いは面白いが、其批評者の頭の中一つで、善くも惡くもなるし、又全體に往々餘りに智的分子が少くて、人間の疑惑慾を充たすことが出來ぬ場合が多い。何だか不徹底で不滿足だと思ふことがある、斯ういふ場合には自然に說理批評が起つて來て智識によつて其慾求を充さしめる。

然しそれは又稍々もすれば理窟にのみ走つて實の印象を殺すことがある。一長一短だ。兎に角に以上二つは批評のメソッドであるが、なほその立脚地(たちば)を異にするより批評は二種に分たれる。一は文藝作品を停處(エンド)とし、此れを自然現象で見て、他の科學者が自然現象を取扱ふと同じ態度で、既成物として、研究心、知識心の對象として、取扱ふのだ。他は文藝を緣として又はそれを通じて人生の批評をなさんとする所謂文明史的批評である。此の兩者は共存すべくして決して一方をなみすることは出來ない。唯だ時代によりて兩者のうちの一方を偏要する時がある。現代我社會乃至文壇は果して何れを多く要求してゐるだらうか。（明治四十二年一月）

解放文藝

篤學なる田中喜一氏は、廢刊前の雜誌『明星』で自然主義を論じて、僕の說の批評に及んだ末に、嘗て『早稻田文學』第一號に揭げた拙稿「囚はれたる文藝」を引き來たつて、あの立場から見れば自然主義は囚はれたものでは無いかと諷せられた。又この頃『新潮』の中にも僕が「囚はれたる文藝」に新ロマンチシズムを唱へてゐながら、自然主義に贊成したと嘲つたものがある。是れはもつともな疑だと思ふから、丁度明治四十年の總勘定に此の事を一言しよう。

殊に此の數年來の自分の趣味や感情の動搖は自分でも呆れる許りであるが、是れは種々な生理上の事情や、乃至何處からともなく誘ひ來る所謂時潮の然らしむる所であらうから、爲方がないと諦める外は無い。甚しいのは、少し骨を折つた著作物などになると、活字にし切つた瞬間は最早其の感想から脫化し去つた瞬間であるといふやうな例が稀でない。併し幾ら脫化し去るといつても、まる〱矛盾するものでは無いやうだ。

茲で問題になる「囚はれたる文藝」と自然主義論との如きも其の例である。「囚はれたる文藝」が今日から見て既に幾多の無用な言葉や思想を含んでゐることは論を待たない。けれ共其の立場の骨子は後の自然主義論と扞格しないのみならず、却

つて相補ふ性質のものである。たゞ一寸山の上から向ふを見晴し、一は下りて來て其の途をあるいてゐるといふだけの差だと思ふ。あの「囚はれたる文藝」には後があつて、「放たれたる文藝」と題して、一旦あらゆる囚はれ、即ちクラシシズムからも、リアリズムからも、ナチユラリズムからもシムボリズムからも脫した後の解放文藝が最後に再び囚へられるのは神秘的宗敎的、而してそれを相合すべき身即佛の東洋的といふやうなもので有らうとの意を說明するつもりであつた。所が次に言ふ如き事情の下に、此の企は今日まで果たされない。遠からず此等の文章を集めて本にする事となつてゐるから、其の節成るべく「放たれたる文藝」をも加へて、初志を完成したいとは考へてゐる。斯んな筋立であるから、其の立場から言へば、勿論自然主義は囚へられた側のものであると共に、決して新ロマンチシズムを襲說するものではない。彼の一文は、ヨーロッパの現在を基礎にして、あらゆる既成文藝を囚はれと見ようとする大仕掛のものであつた。而して之を日本の文壇にも期待して、當時の綱島梁川君等が代表してゐた神秘主義が直に新文藝の要求の前驅と見、從つて之を文藝に一轉化させる必要があると考へた。當時の僕の心を支配してゐた「新」の意氣及び趣味は斯んなものであつたことを今日自分で認め得る。

所が其の後半年足らずの內に島崎藤村君の『破戒』が出て、ヨーロッパで三四十年來開拓せられた土地に、日本では今始めて眞面目な勞作の鍬が這入つたやうに思はれた。而し僕みづからの趣味の底にも尠なからず此の方面の未練が殘つてゐたことを發見した。引きつゞいて國木田獨歩君、田山花袋君、小栗風葉君等の新藝術が世に認められると共に、我が邦現時の小說壇の是から通過すべき自然派的傾向が益々顯著になり、遂に幾多今日の新進作家を呼び起すに至つた。詮する所我が藝術は、中身に於いて未だ現實的要求を十分に塡充してゐなかつた、其の缺を補ふのが是れからだと心づいたのである。從つて「放たれたる文藝」に未來議をするよりは、先づ我が現在の新氣運を助長する方が善からうと考へ、僕は僕だけの兵粮彈藥

で應援に出かけた。斯んな次第であるから、今の自然主義運動に對する僕等の任務は援護軍といふ覺悟である、而して此の現在の頂點に「囚はれたる文藝」の結論を連續させて望んで居ることは、以前も今も變らない。

つひでに言ふが、德田秋江君は、僕が「早稻田文學」でロマンチシズム、宗教的傾向、自然主義運動といふ思想界の三遷移を認めよと書いたのに對して、「何ぞあたふたと流行を追ふの要あらんや。自然主義とやらも煙のやうに消え去つたら何うする」といふ調子で駁撃してゐるから、僕も一寸言つて置かう。と言つて何も君を相手に議論をするといふのぢやないが、君までが是等の事實を煙のやうに消える流行だと大言する勇氣があるとは異な事だ。幾ら印象批評が面白いからと言つて中身があんまりぐらついて居ては、一席のお慰みにしかなるまい。折角自重し給へ。

ロマンチシズムも自然主義も結局は個人の趣味性格が乙でなくては駄目な事勿論である。だから何も甲の人が乙の假聲を使ふ必要は無いに極まつて居る。けれ共一代の支配調が甲から乙へと遷つて行く事實があれば、之れを認めるのはおのづから別の事だ。事實を事實として認めるだけの餘裕の無い批評こそ、僕等には權威の無い批評と見える。

今の文壇に作の批評があり過ぎるといふ說があるが、僕等はさうは思はん。作者も凡夫である、全く批評の聲が止息したら嘸張合の無いことだらう。靜かに身後の知己の待てる人が幾人居るか。時々の批評が邪魔になる位の人なら、尙更の事であらう。批評があつて始めて文壇が活きる。作家は作家の好む所を爲し、批評家は批評家の欲する所を爲すがよい。批評する作品を緣として自分を發表する、秋江君のいはゆる人生批評と、作品そのものを自然現象と見て研究する科學的批評と共に、人生を最後の目的とするに於いて二つは無い。而して二つ共に我等の根本要求から起つて來た方法たるは同じである。批評といふ語を何ちらに冠するのが適當かは別問題としても一の事實で他の事實を滅することは出來ない。

又近來の作品批評が主義とやらから演繹して來たものだといふ說も受取り難い。寧ろ近時の批評は其の根柢が作の直接印象に接近して來た點に於いて進步をこそ示して居れ、決して以前より惡くなつては居らぬ。概して眞實の度を加へてゐる。評者が實際あの通り感じて言つてゐるのであることは類推せられる。批評といふものも第一步が作品のアプレシエーションにあつて、理論は其れの說明以後に加はるもの位のことは、西洋なら十九世紀の始め、我が邦でもハルトマン輸入當時にこそ事新しく言ふ必要があつたか知らぬが、今日の批評壇は、もうそこらは通り越してゐやう。見わたした所、作の善惡を科學や哲學の力でゴリースで判斷しようとする批評などは無いやうだ。寧ろ一步を踰えて理論そのもの〻統一が無さ過ぎる位だと思ふ。

終りに臨んで、此の文章は少なからず秋江君の言を道具に借りたが、あれを秋江君一人の意見と見たのではない。却つて君があの群に入るのを不審と思つたからである。君が本紙に寄せられる「無駄話」などは、樣式から來る味に於いて我が文壇に類の少ないものだと思ふが、慾を言へば內容に堅確の味が無さ過ぎる。センチメンタリズムに累はされ過ぎてゐる。それから思ふと、君の創作には其の累が少いのも奇だ。だから僕は君の自重と精進とを望むのである。斯う云つたら、君は僕に責任を負つてはゐないと言ふかも知れぬが、構はない、僕は僕の批評家たる權利で言ふのである。（明治四十二年一月）

文士推讃に就いて

推讃に付いて藤村、白鳥二氏を選んだ理由は、「早稻田文學」に書いてあるから其れを見て頂かう。一體個人として若しくは私人團體として、文藝上の功勞者中最も重な人に賞金を贈つたりするのは幾らも先例のある事だが、吾々には一つの、「早稻田文學」と云ふ雜誌があるのだから、それ丈にでも吾々の意見を發表したならば、幾分か文壇的興味のある事だらうと思つて去年から始めて見た。其折に例に引いたのはオリムピアの月桂冠の事であるが其れには本來違つた背景が附いてゐる。併し吾々は其精神に於ては相同じいといふ處から、殊にオリムピアの月桂冠は月桂冠其のものが、あらゆる富とあらゆる位よりも尊いと云ふ一點を中心としてゐる其の事が面白いと思つたので、例として見たのであるが、畢竟、「早稻田文學」記者、及び其周圍の一群が判斷する意志を正直に發表したまでゞ、それを以て直ちに天下の公論なりとプリテンドする積りでは無かつた。

然るに昨年は或る一部の人々が僭越であるとか云つて、非難がましい言を爲した。併し之は非難の的を外れた言葉であらうと思ふ。吾々はたゞ自己の批評を發表したのであるから、何人と云へども爲し得べき各個人の權利である。妄りに天下の

公論茲に在りと呼號したものとすれば、其處に非難の意義があるかも知れぬが、最も謙虚の心を以て前年度の文壇を讃美する者に對して、たゞ無暗に僭越呼ばゝりをするのは心得ない事である。幸ひにして吾々一群の判斷が天下多數の容るゝ所となれば、吾々の表旌する所亦天下の表旌する所と一致したのだから益々、以て滿足をする。若し不幸にして、判斷が齟齬したとするも、吾々は十分の考察と敬意とを以てした事ゆゑ其れで既に滿足する。要するに、自家の判斷を主張するに外ならないのだから何人にも自由である。だから事情の許す限りは繼續したいと思つてゐる。

今年の樣式も昨年と同じく、一年間の大勢を述べて、文藝界の各方面について其の中心たる人々を擧げ、就中最も眼目たるべき二氏を選んで表旌した。たゞ昨年の文藝を讃美する眼目として名を擧げたばかりである。ゆく〳〵は早稻田文學社に於て之を表旌すべき別の方法を取りたいのであるが今の處は、之以外に餘力もない。たゞ吾々の平生親しんでゐる筆を以て、且つ當面の便宜に渡つて、「早稻田文學」誌上で發表したに過ぎないのである。之れを以て決して最後の滿足とはしてゐない。　明治四十二年二月)

實行的人生と藝術的人生

實行上の人生と藝術上の人生と云ふことは、大問題には、相違ないが、然し、論點はさうやゝくるしいものではない。それにも拘らず拗ねた問題になつて居るのは、私に言はしむれば、私達の反對の立場に居る人々の言ふことが不透明であるからだ。之れを一々辯駁するのも煩はしいので其儘にしてあるが、どうも議論になつて居ないやうに思ふ。

田山花袋君も文章世界の一月二月に亙つて、此の問題を論じて居るやうだが、あの説には賛成である。實行と藝術とはああ有る可きもので、同君の説のこまかい點は知らないが、少なくも其結論に於てはあゝなくてはならぬと思ふ。

一體、此の議論の中心の要點を摑み出して云つて見ると、先づ之れだけのことは議論の要なきものとして、取りのけて置かなければならぬ。即ち第一、藝術が實人生の爲めに存在して居ると云ふことゝ、第二に藝術が實人生を内容にして居ると云ふこと、それから第三に、藝術はなる可く實人生を其まゝに接近したものを取扱はうとすること、之れは苟も近代藝術を論ずる者が、異存の挾める譯のものでない。誰れが藝術は人生の爲めに存在しないとか、藝術が人生を内容にして居ないとか、作者が藝術に人生の眞實を描かうとしないと云ふ奴があるか。近代藝術を口にするものが是位の事を知らないで論をする筈

はない。

然るに、藝術と實行は二に非ず一なりと云ふ人々の中には、此の知れ切つた個條を色々の形で云ひ表はして、吾々の議論がそれを否定するものであるかの如く云ふ。愚な話である。本當の問題はそんなことではない。世の中に人生と云ふものが現はれて來るものに、幾通りも其現はれ方がある。即ち、吾々が人生と云ふものを營み、經驗する方式は幾通りもある。其中の一つが實行と云ふ方式で營まれる。他の一つが藝術と云ふ方式で營まれる。此の二つは何れも人生であるが、唯、其營む方式が違ふ、隨つて各々別な意義を有したものだと云ふのが、私達の論である。例へば茲に吾々の咽の渇きに堪へないで冷たい清水を飲む、之れは立派な實行の人生である。其塲合に渇き切つた燒き付くやうな咽を、甘い清水が通つて何とも云へない好い氣持ちがする。それは先づ名付けて云つたら實行的意義とでもいふべきものである。けれ共人生と云ふものは、今一つ違つた味ひを持つて居る。それは即ち、清水が咽の渇きを濕ほして呉れると云ふ、其實行的人生の後ろに、一種違つた、例へば、やめられないとか、此世なつかしいとか、我が廣がるとか、若し此等の言葉が餘りに卑近に過ぎるならば、もつと違つた言葉で云ふと、何か吾々が夏の炎天の旅に疲れて渇き切つて居る時に山間の清水を掬んで、ほつと息を吐く其事柄を想像する時に、清水を飲んだ嬉しさ以外に、何とも云ひ難い全體的な氣持ちを感ずる。勿論其氣持ちは人々に依り、前後の事情に依つてさま／＼であるけれ共、要するに實行して居る事柄の情味以外に、全人生、全經驗、全運命と云ふやうなものと、連續した背景的な大いな一つの感じを覺えて、それを倩々嚙みしめ、思ひめぐらすと云ふ氣持ちがある。うつとりとして其の光景、其の景色に思ひ入つて了ふ。之れをば假りに名付けて其の物の味ひと云ふ。其れが通例の實行界では出て來ない、出て來る暇が無い。どちらも痛切たる人生が吾の中で營まれて居る形に外ならないけれ共、一方は實行を要し、又

た其の實行だけの事柄に執着した情味とでも云ふやうなものを意義されて營んで居る。又他の一方は必ずしも普通に云ふが如き意味での實行は要しない、藝術的形式を取つた人生でも關はない。而して、それが意義目的として營む所のものは、事柄から延いて、背後に浮び來つた全人生の味ひと云ふが如きものである。此の二つは違つたものであると云ふのが、吾々の議論の根本である。であるから藝術を作る上から比喩的に云つて見ると、藝術は實行的人生を境目として二つに分けても好い。即ち、一つは實行よりも手前に居て、實行的人生を想望する態度の藝術、今一つは實行を一足通り越して振り返つて、實行的人生の全局をつくづく思ひ返す藝術とであつて、近代藝術は、即ち、寧ろ後の者に屬する。唯々其中間、即ち手前から想望するものが、其想望の極、何等かのはづみで以て、實行的人生に飛び込んで了ふか又は、通り越す筈の藝術が何等かの事情で未だ通り越さない、即ち、實行的人生と、藝術的人生とが、全く一つになつて了つた瞬間があるとすれば、其時は成程一派の論者の云ふやうに、實行あるのみに相違ないけれ共、然し其場合には藝術が滅びて了つて、唯、單に實行のみが存在して居るのであるからそれは實行と藝術が一つになつたのではない。二つのものが一つになつたのだなど〻云ひ得る場合ではない。此所が此種の論者の誤謬に入る點で、渇して水を飲んで居る時は、唯、其水を飲むと云ふ實行的人生あるのみ、左樣なる實行的人生が吾に取つて非常に痛切なものであることは言ふを俟たぬ所であるけれ共、然しながら幾ら痛切であると云つても、それを營んで之れが藝術だと云つて居られる譯のものではない。まして况んや、之を外から見ると云ふ場合になつたら、人の實際に水を飲んで居る所を見て、藝術經驗など得られるものでない。而して、人間には自ら水を飲むと云ふ實行的人生以外に、斯樣なる人生を客觀に突き出して眺めて、若しくは振り返り回顧して、それの後ろに横はる全體的の意義をも、詳かに嘗め味ひたいと云ふ要求が、又實際に存在して居る、それが即ち吾々の藝術的要求であつて、人生の樞要な

る一發現に外ならないのであるから、水を飲みたいと云ふことゝ、水を飲むことの後ろに横はつて居る人生の意義が思ひめぐらしたいと云ふことは、二つながら痛切なる人生の要求であつて二つの異なりたる方法に依つて果さる可きものである。

如斯意味に於て、吾々は實行と藝術は二つであると云ふ。人生の二大發現であるといふ。（明治四十二年三月談話筆記）

演劇の保護

時節柄、文藝院の問題が何う展開するかは知らないが、假りに政府なり私人なりが文藝保護といふことを積極的にやって見ようとする、而して其の保護が專ら金錢上の助力であると豫想すれば我等は如何なる案を提出しようか。

たゞ漠然と貧乏な文藝家に金錢を給するといふのなら、受ける方でも餘り快くない場合があらう。仕給する方でも利害は容易に見定められないことが多い。保護といふことを絶對的に呪咀するのは一種の虚榮であり擬勢であつて、眞實の聲では無いと信ずるが、要は其方策如何に存する。中にも個人の將來を擔保にして之れを保護する場合は、愈々此の困難が多くならう。單に過去の事業を目安として慰勞金又は賞金を贈るのなら困難は餘程減ずる、唯人選が面倒だといふに歸するが、是れは案外うまく行くかも知れない。

夫の懸賞案の如きは全く望の無い事である。全體眞面目な懸賞の時代はもう過ぎ去つたといつてよい。

それよりも最も緊急で且つ有効確的なのは演劇の保護である。目下の我が文藝壇で、最も明白に物質上の保護を要するものは是れを措いて他にあるべしとも思へぬ。其の代り資金は稍々多分に入るかも知れぬが、筋道が如何にも明白である。凡

そ藝術の發表方法中演劇ほど贅澤な金のかゝるものは無いと共に、其の効果の及ぶ所が最も平民的である。單に社會風敎といふ如き立場にある者から見ても注意は却つて夫の小說などよりも先づ此の方に向かねばならぬ筈であるのに、保護問題が他の藝術には起つても此方面に起らないのは奇である。固より保護と言つても、脚本作家を保護せよといふのでもなければ、俳優を保護せよといふのでも無い、或種の演劇興行を保護するのである。つまり一般多數の見物の來ない、收支の償はない劇を演じて見させることである。假りに玆に名脚本が出來たとしても、名俳優が見はれたとしても、それが文藝的に眞價のあるものなら、それだけ多く世俗には受けないに極まつてゐる。夫の善いものさへ出れば、見物は之に順應してついて來るといふ說は進んだ後の話である、取りつきは必ず其反對であらう、而うして演劇の起つと倒れるとは實に取りつきの難易にある。思ひ切つて進んだものを出さうとするには、取つきから丸で一般には受けもしなければ、分かりすらしないものを行る覺悟でなくては無益だ。生中折衷の工風なぞして、多數趣味にもはまり、それで文藝的にもよいものを作らう演じやうなぞと慾の深いことを考へるために墮落したり失敗したりする劇が少くないと我等は考へる。こんな仲間のやり口も、出來れば一種の方便機關として面白い。我等も嘗て演劇の第二種第三種といふことを說いたことがある。けれ共劇の革新といふ見地からいふ時は斷じて之が妙案では無い。それで無ければ成立たないからといふ絕望的の意味が多分に籠つてゐる。矢張り出來れば思ひ切つて今の世俗の演劇趣味と懸絕したものをやるに限る。始めは面白く無いもの、つまらないもの、譯の分らないもの、それが骨を折つて見て行く內に結構なものと合點せられるやうな劇を演じたい。新文藝の興り始は常にさうである。小說然り、詩歌然り、今の我が劇壇も必ず一度は此の關を通り越さなくてはならぬ。一度通り越して兎も角も獨り立ちが出來るだけの新見物が附きさへすれば、跡は順潮になる。たゞじり〳〵と何時ともなく通り越すか、一思ひに乘り越すか

の問題である。此のまゝやつて行く中には何時かは自然の勢で通り越しもされようが、併しまだるつこい、心細いことだ。そこで何とかして一擧に此の難關を拔く工風は無いか。

革新も何も實行しないでは話にならない、それかと言つて、行らうとすれば算盤が立たない、經濟上から先づ崩れてしまふ。何とかして、損をしてもよい芝居を演じて見る工風は無いかなあ。是れが演劇に關する、我等念頭の常套語である。玆に物質上の保護が極めて適切のものとなる。初の内は所謂シレクト、フユーにのみ分かる、從つて收支償ふなどいふものでなく、損をするに極まつた劇を演ずる工風のつく迄はとても目ざましい劇壇の革新は出來ない。眞に劇壇の爲を謀るものがあつたら、此の點に保護を與ふべきである。

飜つて其の保護方法を考へて見るに、從來あつた國立劇場などいふ案はもつと後の事でよい。今は幸に小形のものでは有樂座も出來、大形のものではやがて帝國劇場も出來るのであるから、場所の設備はあれ丈でも澤山である。劇場建築の費用で以て演ずる劇そのものに金錢上の保護を與へる。そして觀客も成るべく識者招待の範圍を廣くすると共に一般觀客の入場にも學生以上の新敎育ある方面の爲に便宜を圖るがよい。而して又其の演ずる劇や俳優の選擇及び演じた結果の審査批評乃至賞典附與の方法等は即ち之を文藝院なり其他の特設團體に委托する。斯くの如くして始めて文藝保護の實が擧がると共に、劇が立派な文藝壇の一現象として活路を開き來たるであらう。我等は之を以て所謂文藝保護の最も急要な一つとする。

同時に文藝壇みづからは傑れた脚本を出し、新らしい俳優を出す責任があるが、脚本の方は必らずしも保護を要せずして望がある。又保護したから出ると極まつたものでも無い。一方に右のやうな保護があれば、それを當てに善い作も出る。唯俳優敎育の事は、一面右の保護と連續した事業として考へる必要があるかも知れぬ。之れについては又我等に別案がある。

（明治四十二年三月）

飜譯上の注意二三

今早稲田の文科で、特殊研究科の題目としてトルストイを研究してゐる。學生に其著名な作品を讀ませて、梗概を話させたり飜譯させたりしてゐるが、その飜譯に就て一二の所感を鳥渡話すことにしよう。

却説、飜譯といふものは、自分でやると中々骨が折れるが、人の譯したものを批評的に觀ると案外細微い箇所にまで氣が付く。多くの飜譯殊に此等學生の試驗的飜譯の中で、例へば夫婦間の會話などを見ると、細君の夫に對する言葉振などが多く日本のアイデヤで上品に拵らへ過ぎてあるといふことに氣が付く。これは西洋の夫婦乃至一般男女關係、その他交際社會の狀態などを餘り知らない所から、さうした結果になるのだと思ふ。例へば「アンナ、カレニナ」の中で、女主人公のアンナが、友人の宅で、男主人公のヴロンスキーに會つて、大分立入つた親しい交際をして夜深けに家に歸ると、本夫の某は妻よりも一足先きに戻つて居て、今夜のアンナの素振が癪に觸つてならぬので、ひとつ思ひさま言つてやらうと待構へてゐる。すると、其處へ、夜會服か何か裾長に着た派手なアンナが、ぽつと上氣して、しつとり汗ばんで、襟の邊を扇子であふぎながら、靴音輕く「あゝ疲れた」とか何とか言つて歸つて來ると、夫が難澁しい顏をしてツクチンとしてゐるので、鳥渡意外に思つて

たぢろいだが、何氣ない狀態をして "You are not a bed yet? What a miracle!" と言ふ。それを「貴方はまだお寢みになりませんでしたか、どうなさいましたのでせう……」と譯したとする。處で 西洋では貴夫人であらうが、何であらうが、概して斯んな場合では平民的な親しみのある言葉使が自然であるから、もつとより多くその感情を出さなければならぬ。此處はどうしても「まだおやすみにならないで？不思議だこと……」と譯さねばならぬと思ふ。概して言ふと、西洋の婦人の言葉動作の調子は上中流共親しい仲になると、殊に日本に比較して、大分平民めき黒人めいた處がある。餘程藝者式情調を帶びて居る。此點は注意すべきだと思ふ。

猶ひとつは、矢張「アンナ、カレニナ」の中で、副主人公のキテイが、初めて戀人の一人なるレビンといふ男を出迎へて、客間に差向ひとなり、處在無さに言ふ "Mamma will be here in a moment," の Mamma を「母」と譯して、「母も直ぐまゐりませう……」としたとすると、此處は Mamma なる語に重きを措かなければならぬと思ふ。西洋の娘の母親に對して持つてゐるあどけない親愛の感情が、「母」では思ふやうに出てゐない。「阿母さんもすぐまゐりませう……」としなければならぬと思ふ。

それから「チャイルドフッド」にも一つ例がある。それは、主人公の少年のニコレンカを初め、妹、兄、同年輩の娘、兩親など皆揃つて、田舍へ狩獵に行く處がある中で、狩が終つて、野遊をしてゐる塲がある。其處らの叙景の文章は妙を盡して居る。その中で、木の葉の裏に蟲が附いてゐるのを娘共が騷ぐので、皆して覗込んでゐる光景がある。ぐるりと取卷いて立つてゐる中に、十二三になる同居の娘が同じく覗込んで居ると、着物の襟がすべつて美くしい襟足が白く拔出てゐる。其背後からニコレンカも覗込んでゐたが、あたゝかい少女の肌の匂がほのかに顏に觸れて來る。少年ながら感覺が鋭いので、つい

恍惚となつて思はず白い女の襟足に接吻して仕舞ふ。それを下からニコレンカの兄が見つけて言つた言葉が"What tenderness!"此場合これだけの會話がある爲めに、文の單調を破つて、如何にも四邊の光景を生きさせてゐる。これを「なんて弱いことだらう」と譯した人があるとすると、此等は寧ろ誤譯ともいふべきもので、表面から言へば意味がつゞかぬでもないが、皮肉な侮辱の言葉の味を反對した意味にして仕舞つた。茲は前後の關係から考へて、どうしても「優しいこッたなア」とか、「親切だなア」とかしなければならぬ。此言葉は皮肉な意味に使はれたのであるから、「なんて弱いことだらう」では此場合の調子が出て來ない。斯う一々穿鑿して來ると、飜譯は隨分困難しいものだといふことが理解る。凡て西洋の書物は、今日の時勢上一方に早く澤山讀んで、而かも間違なく要點を摑む必要があると共に、他面又成るべく精細に讀んで精細に味ふ必要がある。殊に飜譯など試みる場合には此必要が多い。（明治四十二年四月）

新批評、新演劇

私が一二ケ月前の「早稻田文學」に個人的表白と題して、專ら自分の身の上に關した事、言はゞ挨拶なり自家防衞なりのやうなものを三四箇條書いた。其の末の項に「讀賣」の太田某君が云々と名を擧げた爲に、當の太田君は勿論、引つゞいて同じ紙上に之れを不當とする説が二三見えた。然し私は別に此の言葉に大した意味をつけた譯ではなく、實の所は太田正雄君といふ名が正じ明星派に見えるので、失禮だが是れと一方の太田君と同じことか否かを調べる暇なく、漫然書いた迄の事である。勿論あの文章を書く時の氣分は調和的のものでなかつたから、某君として置いても澤山だ位には思つて居た。從つて文章の末の方もまだ强い事を云つてあつたのだが、跡から考へ直して、餘り他人の人格を蹈みつけにするやうでは濟まぬと思つたから、校正の際星湖君に托して其處だけは削つて貰つた。けれ共跡の所に氣がつかなかつた爲めに、結果は同じ事になつたらしい。此の點だけは恐縮する。

以上の書き方に就いてゞあるが、其の文の主張に關しては、無論變りは無い。過去と現在との評壇の比較、及び現在の評壇の價値意義等に關しては、重要な幾多の解釋が存し得ると共に、私の觀る所はあの通りである。殊に現評壇の價値や意義と

いふ事に關しては、其の後も續々諸方に意見が現はれるやうだが、批評が今一層何うありたいといふ注文は別として、現在の文壇が幾分たりとも人心に活動を持ち來たすとすれば、それは必ずしも創作のみの力では無い。直接間接に評論と相結合した刺戟力に基づくものである。發聲の先後はあつても、精神上の同一傾向、同一趣味が創作批評の兩面に見はれ、互に相響應して其の波及力や震動力を大にして居る。

たゞ殘る問題は、例へば今の所謂新文學の興る當初にあつては、創作評論共に相獨立しても尙よく人心を動搖させた事例があると信ずるが、形勢の漸く定まらんとするに及んでは、趣味に一定の地盤の出來た結果、創作は獨立しても能く應分の活力を發揮し得るに反し、批評には獨立して創作と同じ刺戟を人心に與へるものが稀になつて來た。是れは何故であらうか。玆には問題が殘つて居る。つまり批評の半面には注文の餘地があると共に、半面には現に其の任務を盡しつゝあると見るのが、文壇全體の上から言つた公平な事實と信ずる。

違つた傾向、違つた趣味のものが反對批評の爲に阻害せられるといふ弊は、現下の文壇に無いとも限らぬ。併し今のやうな藝術上の傾向では一人の批評家に二樣以上の趣味傾向を公平に味ひ分けさせるといふ事は、殆ど不可能と見える。むしろ益々一方に偏つて進みはしないか、而して此の偏傾を超越して而も僞らぬ眞實の批評といふが如きものは到底今後の批評壇に望まれなくなりはしないか、左すれば結局別の傾向には別の評論といふ別かれ別かれの形となつて、いやでも主義流派の爭ひとなり行くのが今後の批評かも知れぬ。

文學の上の批評は斯んな形勢であるとして、最も切に批評の必要を感じて居るのは、他の藝術方面だと思ふ。繪畫、音樂、彫塑等にあつては、他人も既に言つてゐる如く、事實上殆ど力ある批評は皆無と稱してよい。是れではよし新藝術が作られ

ても、それが新氣運を喚起するまでには容易に至らない。まして新藝術のまだ起らない前、之れに渇し之れを感受する空氣を造るなどゝいふことは及びもつかぬことになる。新たに此の方面に志ざす人は、文學及び一般思想界と連絡を保つた新批評を興すことに工風するのが、目下の最急務ではないか。

文學以外の藝術中では演劇が比較的に新批評の可能性を多く有してゐる。此の方面には既に二三の人士によつて、其機運が促がされつゝあるとも見られる。其の新批評の根柢は言ふまでも無く他の方面と同じに、「人生に還れ、自然に還れ」といふ一命題を出でない。作は極端に人生たるを厭はず、藝は極端に自然なるを厭はない。新批評は此の一命題を提げて驀進する外は無いと思ふ。小山内氏なども何處かに引いて居たと記憶するが、マッカーシー氏の書中にコート、シアターやアイヤリッシユ、シアターや、テアトル、リーブルやの、彼の地劇壇に於ける新運動を記した中心思想の如きも煎じ詰めれば、やつぱり此の一命題に歸して了ふ。此の點に於いては東西二致なしである。又アメリカの一演劇學校の規則を見ると、演劇の術は積極的に敎へ習ふべきものではない、學校はたゞ其の自然の表情を容易ならしめるために、邪魔となる習慣などを取除く稽古をする消極的のものに過ぎないといふ意味が歌つてある。眞理のある言と思ふ。

私等の關係してゐる文藝協會でも、今度は一つ思ひ切つて眞新しいものを組織しようといふ計畫で、あの演劇研究科を設けたのであるが、甘く行けば全く舊劇に懸け離れた一群の技藝部員で、新しい飜譯劇なり新作劇なりを演じて見たいと云ふ、其下ごしらへに外ならない。文士劇協會の諸氏は新舊折衷の漸進主義を取り、小山内氏等の自由劇場は必ずしも演技者まで新仕立にしてかゝるといふ手數を省いて新しい事業を試みんとし、文藝協會のは演技者から新仕立にして見たいといふ、途は三樣に別れても、目ざす所は固より一つであらう。（明治四十二年二月）

現時文壇の缺陷

（淺薄なる社會觀と社會劇）

皮肉家のバーナード、ショーが、その作『マン、オブ、デスチニー』の中で、ナポレオンの口を借りて、ショー一流の皮肉な長臺詞で英吉利人を痛罵して居る。其の大要は英吉利人は、プリンシプル、則ち原則の國民だ、如何なる事をするにも先づ原則を作つて置いてゞなくては之を斷行し得ない。彼等は海外に領土が欲しくなると、基督敎文明の普及といふ原理原則を作つて、その條件の下に殖民地を拵へる。自分の國の商買を繁盛させたくなると、殖民地市場の爲めにといふ原則を作つて置いて、本國のものをドシ／＼賣込むといふ形で、彼等の行く如何なる處にも原則がチヤンと出來て居る、と云ふやうな意味である。つまり英吉利人は僞善の國民、都合の宜いやうな申譯を拵らへて置いて、惡い事を有理らしい顏をして行る奴だといふに歸する。此場合に限らず、ショーの作には、屢々出て來て、ショー一流の觀方でもつて、英國人の膓を抉るやうな皮肉を向額から浴びせてゐるのである。そして、何れも此の立場から睨んで喜劇の好材料にして居る。

これは啻にショーのみでなく、彼のジョーンスなどの喜劇にも屢々同じ調子が見えて居る。即ち、現代の倫敦生活の缺點を看破して、ショーの如く皮肉でなく、もそつと、あたしかな、ハッピーな言ひ方で、英吉利人の弱點を突込んで行く。そこが社會喜劇の好材料たる所以である。社會喜劇を作らうとするにはどうしてもかゝる點に注視して、深刻に、痛切に、何人にも首肯出來る現代生活の弱所を捉へて來なければならぬ。

却說、我が國の喜劇はといふに、此根本的の摑み處が一向に摑んでない。現今の日本國民の生活――就中首都の生活、汎くは日本國民性の乃至現代日本文明の中心缺點は何處にあるか、弱點は何處に、矛盾は何處に潜んで居るか、此方面の深刻な觀察が充分行渡つて居てこそ、始めて痛快な喜劇らしい喜劇が出來る、單に喜劇ばかりでなく悲劇にしても、此處に視點を決めて行けば面白いものが出來るだらう。それを例の淺いジンゴイズムや己惚で動もすれば、上つつらの奇麗立派な方面ばかりを觀ようとする。やれ東西文明の調和で候の武士道で候のと、光明だの剛健だのと俗論の表面に彷徨して居るので、淺薄極るものを作ることになる。深刻に皮肉に行かうとするには、如何なる場合にも自己の生活に己惚れて居ては駄目だ。弱い所、暗い方面を摑出さなければ到底社會劇らしいものは出來ぬ。（明治四十二年五月）

宗教の三分化と文藝

一

我等は現代の既成宗教に對して最も多く不滿足を唱へるものゝ一人であると共に、藝術觀の地盤から宗教の立場を威嚇し得るやうにも思ふものである。我等は事實、佛教に對してもキリスト教に對しても、たゞ其の經典や歴史が有する古藝術古哲學の外、殆ど何等の意義をも見出だし得ないのを遺憾とする。求めないから與へられないのだとは能く聞く宗教家側の反駁であるが、是れは極めて不條理な言分である。求めて而して得ざればこそ、斯やうな問題は起こるのであつて、特に我等のみが求めることを徹せず、又特に或る少數の人々のみが求め得て天の恩寵に與かつたのだとは自分勝手の言方かと思はれる。それでは何だか其等少數の人々のみ他と格段に違つた人類か何かのやうに聞こえる。又唯の言ひ拔けのやうにも聞こえる。求めないのでなくして與へ得ないのが現代宗教の眞相であると、我等は觀察する。此の點に於いて、我等は既に求めて而して摑み得たと公言する一切の宗教家諸君に重ねて深刻なる自己省察と正直なる現狀告白とを要求する。言ひ換へれば我等を

して敢て諸家の根本事實に疑を挿むの非禮を許し給へといふのである。少なくとも我等と同程度以上に知識の眼の覺めた人々が、何うして今の宗教に求むる所を見出だし得たか、それが我等には不思議でならない。畢竟するに我等が下根の致す所か。何うであらう。

二

我等は事實に於いて無宗教である、而して無宗教といふことに何等の悔恨をも覺えない。何れの宗教を見廻はしても、其の何れに入り得ないのを殘念に思ふといふものはない。むしろ何れの宗教をも信じない所に自由に考へ、自由に求め得る幸福があるやうに感ずる。つまり我等の宗教欲はあらゆる既成宗教以外のものに其のはけ口を求めてゐるのである。斯やうな氣分の中から宗教を振りかへつて見ると、却つてあざやかに其の實勢が察せられるやうに思ふ。現代の宗教は漸次解體しつつあるのでないか。分化して少なくとも三種の成分に變性しつゝあるのでないか。若し是れが實際であつたら、宗教家は當來を何うするであらうか。それが聞きたい。

宗教は亡びはしないか、少なくとも教育ある方面には、宗教といふものが本來無くなつて了ひはせぬか。是處まで大膽に言ひ切つたら、我が邦でも容易にさうだと同意するものは少なからう、何とか理由をつけて、宗教は人間の本性に發するものだとか、人生の歸趨を尋ねあぐんだ人の煩悶は凡て宗教の一面だとか、迷信が宗教の萌芽だとか無窮の觀念が宗教の端緒だとかいふに相違ない。けれ共事實は、決してそんな事ばかりで宗教といふ意義が充實するものぢやない。此等は縱しあつても分子たるに過ぎずして、宗教といふ語の內容はもつと複雜な化合物である。其の化合物たる成形宗教は即ち亡びて行く

のであるまいか。

ヨーロッパの社會では、簡單に是れだけの疑問を提出するのが容易でない、我等日本人は或る意味に於いて儒佛神の何れといはず、凡そ宗教と名のつく傳襲物をば、明治思潮の氾濫と共に惜氣もなく拋棄して了つた。事の善惡は別として、如何にも其の關係が單純明瞭である。さつぱりしてゐる。凡そ世界の文明國中、我が邦ほど宗教上の純白紙に還り得て居るものはあるまい。無宗教に近い狀態で、而もよく現在の文明を維持し行く國民の實例が見たいなら、我が國の如きは其の最好標本である。

西洋の社會狀態は、到底宗教に對して斯くの如く簡短明快な態度を取ることを許さない。そこに矛盾した奇現象を呈して來る。イギリスなりドイツなりに半年身を置いて見れば慧眼の人はすぐ此の矛盾の空氣に感觸するに違ひない。即ち西歐文明の形式は、まだ何と言つてもキリスト教の威容によつて支配せられてゐる。有形無形の日常生活は、それが表面的になればなる程キリスト教と離れ難くなる。然るに一たび其の表面的形式的な生活から、深く內面に沈潛して行くに從ひ、事實は段々キリスト教でないものに近づいて來る。神子說や三位一體說の支配は無論通り越す。オイツケン氏等の所謂教會的形式は何うならうと構はない、トルストイ等の所謂原始的キリスト教までに戾つて行く。けれ共此の邊はまだ何と言つた所でキリスト教である。今一步潛つて行くと、精神までがキリスト教でなくなる、啻にキリスト教でないのみならず、其の反對な、彼等の所謂異教的極端にも行き兼ねない。一神的よりも汎神的、神意よりも宿命、靈よりも肉、天よりも人といふ思潮が凄じい勢で押し寄せて來る、此の奧底の潮流と表面のキリスト教文明の形式とは、何と理窟は付けて見ても、矛盾となり衝突とならざるを得ない。此の矛盾から樣々の喜劇も悲劇も生ずる。而して最も大膽に是れが假面を破碎して、矛盾の本體を暴

露し來たるものは、文藝に如くはない。文藝を通じて現代ヨーロッパの社會相に觸れるものは、必ず此の事實に思ひ當たるであらう。

此等の點で、宗教に關する日本の社會現象は單純である、淡泊である、我等は最も容易に赤裸々の狀態で新しい宗教的經驗をやり直し得る便宜を有してゐる。

三

現在の宗教は少なくとも三つの元子に分化しつゝあるのでないか。所謂三つの元子とは、宗教的氣分と宗教的形體と宗教的効果との三面から見た觀照と迷信と倫理とである。

宗教の中にはたしかに一種の氣分がある。我等が宗教に接近するとき、眞の意味に於いて我等を刺戟する雰圍氣の源は此の氣分である。普通にいふ宗教的雰圍氣、例へば教會や寺院に出入して、あの鎭めるやうな讃美歌や祈禱や教會樂の調子、薄められた光線、香の薰り、淡い蠟燭の火影、重い色彩等の混合から生ずる一種の情趣に襲はれるとき、又は牧師僧侶などの型に入つた說教から來る一種の壓力や、所謂信徒氣質に付いて廻る一種のマンネリズムなどに觸れたときの氣持は、固より外形の事に過ぎない。眞の宗教的氣分は實に觀照といふ事にあると思ふ。精しく言へば人生の觀照である。而して我等が文藝と宗教との關係論をしようとするのも此の點が土臺である。此の點からして、宗教も一面にはエンジョイせられ得るもの、高尙な意味で耽溺鑑賞せられ得るものになる。我等は未だ曾て何等の宗教宗派にも信じ入つた事は無いが、宗教をエンジョイするものゝ一人としては、人後に落ちない積りで居る。さうだ、我等は宗教を信ずるよりもエンジョイしてゐる者で

ある。そして此の方面に於いてのみ、啻に我等ばかりでなく、一般世人が近づき得る宗教の生氣は殘つて居る。此の點で初めて宗教が普遍的になる、いやさうなると實はもう宗教の宗教たる所は破れたのかも知れない、ただ殘骸の一部に生氣が殘つてゐるといふのかも知れない。是れに反して、所謂信仰や見神や大悟やの神秘境になると、それが餘りに專門臭くていやだ。是れは神秘そのものが惡いのぢやなからう。說く人が惡いのである。さながら之れを、其等少數の專門家でなければ與かることが出來ないものゝやうに說いて、而して其等の專門家は特殊な精神機關でも具へて居る人かのやうな事を言ふ。宗教家の最後の逃げ込み場は、何時でも是れに極まつてゐる。宗教がさう專門的なものになつては仕樣があるまい。斯んな意味からして、我等は凡人の參與し得る宗教を其の氣分に求める、エンジョイし得るものとしての宗教である。而して此の氣分がやがて近代の藝術に入るに外ならない。其の氣分を名づけて玆では觀照と呼ぶ。

觀照とは、活きた痛切な現生命の經驗を全的に觀るとき先づ胸に一塊の不可知物を與へられて、それを種々の方面から情に溶して味ひ知に溶して想ふ氣分である。與へられたる一塊物の程度と之れを味ひ想ふ人の知情經驗の程度で、觀照の內容の深淺は千差萬別たるを厭はない。要は胸に悶々の一塊物を與へられて、それを一面には嫉妬、焦燥、悲哀をすら交へた一種のゆるやかな努力で智識の上に解きほぐさんと想像し瞑想する氣持とで包んだ經驗である。宗教も此處に根ざし藝術も此處に根ざす。

我等が世界諸種の大宗教の過去を想ふとき、此の氣分が最樞要の一部であつたことを信ぜざるを得ない。而して現代の宗教はキリスト教といふ名にも佛教といふ名にも、乃至教會寺院の建物にも讃美歌にも祈禱にもよらずして、獨り此の氣分によつて教養ある精神界を動かし得るのである。近代藝術は此の意味に於いて宗教の爲す所を爲さんとしてゐる。宗教がうか

うかしてゐる間に、藝術は其の領域を奪はんとしてゐる。

けれども宗教といふ完成概念の中には無論まだ他の要求が含まれてゐる、之れが解體して其の力を失ふと共に、一成分たる觀照の氣分が藝術に流れ入らんとして居る。であるから宗教と名のつく時、斯やうな氣分は先づ何よりも其の對當の本體を探し出す。若しオイツケン氏の言葉を借りれば、內的生活であると同時に世界的生活であらうとする。不可能を可能にしようとする。而して探し當てたと信ずる一物の本體が立ち現はれて來なければ、宗教といふ意識は完成しない。探し當て攫み得て、滿足し透徹し安神した氣持に移つた時、初めて宗教といふ概念は充實する、言ひ換へれば或一體を我れ見たりといふ信念一つである、たゞ信仰である。之れと觀照の氣分とが化合した時宗教になる。

四

宗教の形體は信仰であるが、是れが一たび宗教から游離する時は、迷信となつて地上に殘留する。よく世人が宗教心の滅し難い例に引く方位占易の類から、淺草、穴守等の妖祠類は言ふに及ばず、進んでは命數說靈魂說の如きに至るまで、廣く言へば皆同脈に屬する我等の迷信性の發現である。之れが宗教に合體しては其の中堅を形づくつて唯一神の信仰となり、解體して地上に落ちては迷信になる。而して現在の宗教は、此の形體に於いて最も不滿足な狀態にあると共に、其の同じ成分は迷信方面に於いて最も活氣を示して居る。即ち宗教の一成分は分化して迷信に流れ入つてゐるのでないか。我等は宗教の事を考へて此の點に想ひ及ぶとき、宗教の前途に重大な疑問の横はつて居ることを感ぜざるを得ない。斯やうな形體は果たして復び取り返されるものであらうか。我が胸にある內的生活が、迷信や幻象を離れてよく外的生活の絕對面と一になり、

而してそれが明々地に我等の羅拜の對當に立ち得ようか。トルストイは藝術の無意識的啓示といふことを難じたが、無名無意識の形でこそ、始めて啓示し得るのが絕對眞理の本來でないか。有名有意識の世界はたゞ現實相對の世界あるのみでないか。絕對を有名有意識にせんとする努力から、信仰といふ神秘境に遁れては宗敎となり、相對の言說に墮しては哲學となる。窮極はたゞ現實觀照の氣分の中にのみ眞理の全圓は髣髴せられるものでなからうか。

併しながら以上の疑ひはたゞ我等が現下の考察の半面である。半面斯やうな疑が消え難いと共に、半面には、いや何時かは遂に絕對を其のまゝ摑み得て名づけ得たりといふ境に達し得るかも知れぬといふ未練が殘つてゐる。而して其の境を空想して見ることもある。けれども結局それは空想に過ぎないで、他人の之れに關する實驗談や言說など、我等を動かして此の空想を實にせしめる力のあるものは一つもない。バイブルであらうが、經文であらうが、我等には空想的ならずして現實たり得る、深刻な古人の精神經驗の現狀記たる限りに於いてのみ、力ある觀照の材料となり得る。即ち我等が之れをエンジョイすると謂ふ所以である。

五

宗敎の効果といへば、一時之れを信じた人の日常生活の上に見はれる道德的色彩である。此方面がまだ完成宗敎には必然の結果として豫想せられざるを得ぬ、博愛といひ慈悲忍辱といふが如きは宗敎といふ概念を完成する上に是非とも無くてならぬ條件であらう。然るに宗敎の本體が衰へると共に此の方面が段段たゞの倫理になつて分化して來た。殊に近代のキリスト敎の如きは、此の方面が眼につく、夫の宗敎上の倫理運動などいふものに至つて、明に宗敎の原形は亡びんとして居るの

でないか。勿論他方には其の反動運動もある。けれ共之れを跡へ引戻した許りで果たして老衰したものが再び盛になるか否かは疑問である。單に倫理の側から見ても、近代精神の根本とは困難な關係が幾らも存して居る。ヘッケルが數へ擧げただけでも六ケ條ある。即ちキリスト教道德は第一、自愛を犧牲にして愛他を誇張する、第二、靈界を過重して肉界を賤しむ、第三、人類をのみ尊んで他の自然界を蔑視する、第四、他界を慕つて、此の世を涙の谷として棄てる。第五、家族生活を輕視した、第六、男女の愛を賤んだ、此等ヘッケルの擧げたものゝ外にも尙拾へばある。其の何れが善いか惡いかは別としても既に斯やうな矛盾が存する以上、キリスト教中の道德的効果は疑ひの材料となつて、當然分化し來たらざるを得ないのである。其の他の宗教にも同じ現象があつて、要するに宗教の此の方面は、倫理に流入し、そこで自由に時代の批判と是正とを受けなくてはならぬ運命なのかも知れぬ。

我等は、以上の如くして、宗教が三分化しつゝあるのではないかと思ふ。而して其の倫理に入るものは情味を失ひ、迷信に入るものは威嚴を失ひ、ひとり文藝に入る者に於いて、本來の餘香を留めて居る。斯やうな意味で文藝は宗教を威嚇して居るものでないか。我等は宗教家の是れに對する覺悟を聞きたいと思ふ。（明治四十二年六月）

『復活』私議

此頃トルストイの「復活」を研究する場合があつて幾年ぶりかで讀返して見た。そして、丁度近頃出版された內田魯庵氏の飜譯と突き合して色々學生などにも研究さして見た。「復活」其物に就ては歐羅巴でも、非常に重大視する觀方と、然うでない觀方との二つの傾向がはつきり岐れて居て、重大視する方の觀方は、大抵道德的社會的宗敎的方面よりするのであるが、自分は今取り出して見ても、依然としてあの作は然う大したものとは思はれない。ところ〴〵に鋭い光を放つて居る例のトルストイ一流な、薩張りとして居てそれで實に細かく行き屆いたところの叙景叙事の筆、それも以前の作ほどフレッシユでないけれども、兎に角昔の面影を殘して部分部分に鏤められて居る。其外は、あの作などは殆んど末の方三分の二位は、あつても無くても好い位なものと、先づ極言すればされる作だらうと思ふ。要するに例の主義でもつて、博愛献身の結論に達したいばかりに、强ひて事柄を引きずつて彼處まで延して行つたと云ふ感じが、何うしても自分等には邪魔になつてならない。それであの書き出しの所であるが、露西亞の原文は知らないのだからして、英譯本に就いて云ふのであるが、それに就いて見ると、先づ開卷第一の所で、吾々はトルストイ老いたりと云ふやうな感じを起さゞるを得ない。卽ち、書き出しの五

六行のところでもつて、彼は例の何うかと言へば、堂々たる調子で、一種の哲學めいた感慨を述べて居る。その意味は、何百萬と云ふ人間が、小さい土地の切れをいろ〳〵に捏ね廻し、掻き廻して居るけれども、春が來れば矢張り春である。と云ふやうなことが書いてある。そして本文に入つて居る。問題は書き出しなのである。二十年前のトルストイならば必ずこんな書き出し方はすまいと思はれる。如何にも幼稚な、舊い書き出し方であつて、それも深い眞に感慨に値ひするやうな哲理であるならば、それは場合に依つてそんな風に書き出したからと云つて、然う厭に思はれまいけれども、其哲理が極めて平凡極まるもので、人間がちつぽけな手細工をして居る間に、造化の計劃は何の變改もなく行はれて行くと云ふ、極くコンベンショナルな事がらに過ぎない。それをトルストイのあの筆でもつて、而も二十世紀にならうと云ふ間際に出た其作物の冒頭第一に掲げるなどゝ云ふのは、如何にも老いた遣り口ではなからうかと思ふ。日本などでも、何うしても、一時代前の作者が遣つた遣り口なので、極く安直な感激文と云ふ調子が原文にあると考へる。

そこで、之れを魯庵氏が何う云ふ風に譯されたかと思つて、『復活』の初めを開けて見ると、それは又さすがに老練な同氏のことであるからして、すつかりそれが耳觸りにならんやうに譯されてある。若し、魯庵氏の此の譯文に、全體の上に缺點と見る可きものがあるとすれば、概して自分などの想像して居るトルストイの元の調子よりも、輕く老練になり過ぎて居ると云ふことであらう。

即ち、魯庵氏特有の調子でもつて、今云つた書き出しの安直な感慨文、すつかり輕妙化されて了つて居る。即ち、英譯本に於ては、未だ餘程ものものしく耳立ち過ぎる。それが厭なのであるが、魯庵氏の譯文になると、それは亦耳立なさ過ぎて、不調和と感じないと同時に、例の役にも立たないことを書いたものだと云ふ感じが起る。芝居の仕出しのやうなものになつ

て了つて、例へば小さい土地と云ふところを、ちつぽけな猫の額ほどの土地と云ふとか、又は春はやつぱり春だと云ひ放つて了ふと云ふやうな、極く微妙な筆使ひでもつて、すつかり輕妙なものになつて了つて居る。批難すれば、トルストイは魯庵氏に依つて輕妙化せられ過ぎたとも言へるが、然し、好い方の意味からすれば、トルストイは「復活」の書き出しに於て、魯庵氏に救はれたとも言へる。此邊はどちらが好いのだか分らないとしても、兎に角譯本が魯庵氏の如き人の手になつた好譯本であるだけに、研究の價値ある事だと思ふ。（明治四十二年六月談話筆記）

藝術は何の爲めに存在するか

藝術論の中心となるべき問題は、藝術は何の爲めに存在するかと云ふことである。換言すれば、藝術と人生との關係如何といふ問題である。隨つてこの問題の終局は、藝術の範圍を論じ極めて、人生とは如何、人生の目的如何といふところまで來なければ收まりがつかない、けれども、さういふことは到底論じ盡し能はぬ問題であつて、啻に人生最後の結着如何といふことが未だ遠かに斷じ難きのみならず、さういふことを考へるのが可いか惡いかさへ解らぬのである。よく人の云ふ如く、我々は生中學問をしたり、精神上の經驗を積んだりした結果、覺醒した、眼の開いた人間となつた、而して此の眼を開いたといふことが、我々をして聽て人生の底の底までも見極めて置かねば滿足することが出來ないといふ氣持にならせて仕舞つた。是は一方から言へば、天地一切の現象が、有らゆる方面に於て、無意識狀態から自覺狀態に進んで行く必然の經過の頂上として、我々人間も自覺したのだといふことが言へる。然し――自覺といふことは、一方から言ふと、必ずしも――少くとも現在の狀態に於ては人間の幸福であるとは限れないかも知れぬ。それが爲に却て苦しむものに較べると、何の自覺もなくして唯明日の事、明後日の事といふ淺近な理想だけでバタ〳〵と片づけて、それだけの範圍でやつて行けば、それが人間

に取つては寧ろ幸福かも知れない。即ち我々には、自覺のあることが可いか惡いかの問題さへ決らぬのである。けれども茲では先づ自覺心はある方が一層よろしいといふことにしたい。又少くとも、斯ういふ地位に立つた以上は、在らせまいと思つても在らざるを得ないのだから仕方がない。さて斯やうに人生の中心の目的は分らぬにしても、藝術といふ一活動は我々をして此の自覺に到らしめようとする一の手段として世の中に存在して居るとしか思はれない。無論、歷史的に言へれば、卑近な實用功利の目的で存在して居た時代もあるし、また全く娛樂の機關として存在した時代もある。今でもさういふ元素が入り交つて居るのは事實であるが、觀照といふことを標準として考へると、結局、藝術は人間最後の目的を知らうとする自覺心を刺戟せんが爲に存在して居るものと見て差支へなからう。

勿論人間の最後の目的を知らうする自覺心を取扱ふ社會現象は、必ずしも藝術に限らない、宗敎の如き、哲學の如き皆さうである。けれども、藝術それ自らは哲學でもなければ宗敎でもなく、別に特殊な方法を以て同一の目的に向つて進んで行くのである。哲學の上から言へば、この社會の現象を寄せ集めて見ると、其處に何等かの最後の結着があつて、それに依つて動き進みつゝあるに相違ないと言ふ。即ち智識の上で、その最後の固まりがある筈と鑑定をして、それと同じ智識の上で追つ駈けて行くその活動が哲學である。ところが藝術になると、哲學の上で無くてならぬと鑑定して居るその固まりを、現在既成の物として現實の痛切な生命を材料につかひ我々の胸に直接植ゑ付けられるのである。けれども、それが強く植ゑ付けられてありながら、智識の上から振り返つて見ると、何だか分らぬやうに考へられる。言はゞ名づけやうのない一塊の感情を我々の胸に生かして呉れる。隨つてその當然の結果として、いろ〳〵な想像や推理を加へて、其固まりを解きほごさうとする知識上の努力が加はる。けれども、哲學の場合と違つて、第一に出立點が具體的に既に與へられたる物といふ特別の形に

現はれて來る。今一度言ひ換へれば、胸に一旦ある物を與へられて、それを解きほごさんとして悶えて居る心持、それが軈て藝術の三昧境ではあるまいかと思ふ。即ち胸の中には入つて居るけれども、然し何とも言ひやうのないといふもの、強て其の形を求めればたゞ現實が現實のまゝそこに横はつてゐるに過ぎぬ。是が先づ藝術の最も重要なる一面だと信ずる。

更に他の一面を言つて見ると、我々の藝術に對する時の精神狀態には必ず一種の廣い意味での快感が伴ふといふことである。この快感の源はいろ／＼說明することが出來るが、一言以て之を蔽へば、我々の精神生活は客觀化されると共に、水の堰を切り離したやうに、今まで停滯して居たものが流れ出して自由に八方に伸び擴がるといふ狀態である。精神が全的活動になつて來る。それが軈て快感の起る源である。即ち斯樣な快感と、一種不可思議なものを見せられたといふ判斷と、二つのものが結合して我々の藝術境の中心を形づくるものだと信ずる。（明治四十二年六月）

二葉亭論二則

一　浮雲の印象

始めて二葉亭の『浮雲』を讀んだのは、二十年近くも前の事であるが、其の後も一度や二度はあけて見たらう。併し今は其の書物が手元に無い始末だから、讀み返した覺は先づ近年に無い。餘程古い記憶である。けれども今日のあたりに思ひかへして見て、明治二十年期の作物中で最も明白に讀後の印象の頭に殘つてゐる一つは此の小說である。今でも、筋は朧に記憶してゐるが、男女主人公の名などは逸して了つた。主人公の肩付恰好が鐘何とやらいふ姿勢だといふ形容を、不思議に一箇條だけよく覺えてゐる。それから男主人公が女主人公の部屋で最後の答を迫る、それを女が透かして、鳥が飛んでるとか鳶が飛んでるとかいふ、あの一場の光景が最もあざやかに記憶の底に殘つてゐる。十八九の頃に讀んだのだから、何ういふ表裏でそんな事が深く記憶に浸み込んだのかは分からない。

讀後の印象として、今も尙明白に覺えてゐるのは、何だか是れまでに無い、自分等みづからの心中の秘密を穿つた小說だ

といふ感じであつた。紅葉の『色懺悔』を讀んでも、美妙齋の『胡蝶』を讀んでも、當時の若い血に醉はされるのは同じであつたが、是等は寧ろ向ふに在る他處事として面白かつたのである。それが『浮雲』になると他處事でなくなる。此の作者の前に出ると、自分等の現在の心事まで見透かされるのでは無いかと思つたり、作者が自分等と全く同じ心を持つてゐるのだらうと考へたりして、兎に角他とは截然類の違つたものを讀まされたといふ氣持が切に身に迫つた。是れを今日から解釋し見ると、つまり當時現在の我等が活きた血と肉とに觸れたのである。けれ共其の當時は無論それに伴ふ深い意義を理解し得よう筈も無く唯漫然右に言つたやうな印象に滿足してゐた。

其の後何かの評論文で、二葉亭の『浮雲』は新舊思想の衝突を描いたものだと言つてあるのを讀んだ。そして成程さういふものかと感心した。けれ共當時の記憶を辿つて見ると、此の感心は實は理窟の上の感心であつて、斯う明白に名を付け概念を與へられたが爲に、作に對する感納が變じたといふ譯では無い。面白いと思ふ時の氣持は、矢張り新舊思想の衝突といふ理解よりも、たゞ活きた我れに觸れたといふ感じで保留せられてゐた。まして其の活きた我といふのが、自分を領會し得ないもの、自分を感通し得ないものに對する苦悶の意義だなぞとは、到底當時の自分等が解釋し到るを得なかつた境である。作者の瞑想が果たして如何なる境地まで達してゐたかは分らないとしても、讀者の多數が此の作によつて達し得た自覺の境地は恐らく皆新舊思想の衝突といふ位の、空漠たるものであつたらうと察せられる。同じ作者が假りに二十餘年の今日あの作を書くとしたら、勿論男女主人公の精神的新意義は遙に〳〵深いものになつたであらうし、讀者の之れに對する觀照も其れに應じて深いものとなるのは言ふを俟たない。玆ではたゞ二十年の昔、早く既に讀者をして「我れの血と肉とに觸れる」と漠然ながらも思はせる文學のあつた、其の一事が萬事を意味することを注意すればよい。『浮雲』初讀の印象を思ひ起こして、私

はそこに重大な意義の潜んでゐた事を感ずる。

二 「文學では眞劍になれない」

二葉亭が一生の題目であつた、例の「文學では眞劍になれない」の説は、二つの眞理を語るものである。文學藝術は最も深切に我れの生命に觸れるもの、即ち現實の上に立つて、人生を瞑想する境地である。而して現實の最高度の發現は實行である。然るに文學の岸に立つて居る間は、何としても我等の實行は充實せられない。文學と實行とが一つに出來れば是れより以上の滿足は無いのであるが、それが出來ない。此の踰ゆべからざる一線を挾んで悶え惱んでゐるのが藝術家の心境の一面である。二葉亭は即ち文學的瞑想の岸から、思ひ切つて實行の岸に飛び越さうとした。實行は藝術でなく、藝術は實行でない。甲を取るか乙を取るかの煩悶を、身を以て解決せんとしたが彼れである。要するに文藝と實行とが最後の一點に於いて二元たらざるを得ない、悲しむべき眞理を語つてゐるのが、此の痛切な一語「文學では眞劍になれない」の意義と思はれる。

更に一つの眞理として此の語から提起せられ得るのは、第一義欲に覺到するものと、第二義に留まるものとの矛盾である。第一義そのものが果たして現實差別の世相に即して覺悟せられるものか否か、それとも昔の抽象思想家が夢想したやうに此の世から離れて存在するものでゞもあるか、そんな事は丸で分からないとしても、是れを我が主觀に引き取つて、我等の心内に第一義欲といふ欲望の形として存立することは疑ひも無い事實である。或る境遇を經過した人には必ずそれが起こる。第二義の決定では如何にしても滿足が出來なくて、底の底まで極めて置きたくなる。第一義欲の覺醒といふのがそれであらう。坪内氏其の他の人々の話によると、二葉亭の生涯が丁度それであつたらしい。考へるばかりで決行が出來ない。考へて、

考へて、考へ拔く底には第一義があり、決行を決行をと焦燥する底には第二義がある。此の矛盾が彼れの精神悲劇であつたのであらう。彼も亦た近代のハムレツトである。そしてみづから其の第一義欲の虜となつてゐるもどかしさに堪へずして、彼れはむしろ其の矛盾した第二義の世界、滿洲經營や日露交歡やの粗大な事業に思ひを馳せたのでないか。若しさうだとすれば、二葉亭が文學を避け經世を說いたのは、凡て精神に覺醒の眼を開いたものが、其の自覺の苦痛に堪へずして、覺醒の眼を閉ぢんと願ふ聲である。第一義欲を忘れんとする者の聲である。（明治四十二年六月）

作品に現はる可き作家の主觀

作家の主觀が作品の上に非常に強く現はれたものと、作品の奥深く沒して、觀たまゝの人生を客觀的に描いたものと、斯う二方面の傾向があることは事實だ。此の各々の傾向に就て、自分自らの好みから言へば、無論どちらも面白いとは思ふけれども、然し、どちらかと言へば、作家の主觀はなる可く奥へ引込めて、作品の上に餘り露骨に現はさぬ方が好い。けれどもそれが果して藝術の本旨に近いか何うかは、自分一個の作品に對する好惡から云つて、直ちに斷定することは出來ない。

讀んで居る中に主觀が全體の睨み方をして現はれて來る作品、例へばチエホフの或種の短篇などに見るあゝ云ふ味ひとか、日本の新作家の中でも、正宗白鳥氏の寧ろ前記の作品に、幾らか然う云つた氣味がある。あゝいふ風に現はれて來て居る主觀だと、鋭い、それで居て而も好い心持の刺戟を通じて大變面白いと思ふけれども、あれが最う一歩進んで、主觀の色がより以上濃くなつて來るとか、その同じ主觀の際立つた作品が、幾度でも繰返されて、吾々の眼前に出て來ると云ふやうな場合になると、窮屈を感じて來て、作品より享受する興味が薄くなる。

例へば、白鳥氏の近頃の作風などに、その主觀が、餘程甘味を持つて來たと云ふのは、それが更に作品の奥深く沈潛して

行き、又、行かしめんとして居る努力の結果ではないかと思ふ。斯くして作家の主觀がなるたけ奥深く沈んで行けば行くほど、何となく底光りのする、より多く吾々に滿足を與へる作品になつて來るのであらう。

併し他の一方の、主觀を潜めた主觀的な作風の方で云ふと、全く主觀を沒し隱して了ふと共に、普通の寫眞を見たやうな死寫實になつて了つて面白くなくなる恐れは勿論ある。けれ共その主觀が作品の奥深く沈んで居ると云ふ意味ならば、丁度そこで以て、前に云ふところの、主觀的作風から奥へ沈んで行くと云ふ行き方と合體して來る譯であつて、結局はどちらから行つても、歸趨する所は、同じにならなければならぬ。

兎に角、藝術品の面白いと云ふ味ひの源は、今云つたやうな意味で、主觀の深さにあることは、言ふを要しないことである。唯、その主觀が主觀らしく作品に現はれて來た時に、何となく味ひの淺いと云ふ感じを起さす譯になるのであつて、結局は、作家が人生の事實を提出して來て、此の事實に如斯眞理ありと云つて示してくれるその眞理に興味が淵源するのである。かくして、その眞理と云ふものは、やがて其事實が作者の主觀を通過する時に、そこへ浸み出して來るものに外ならぬ。故に、その提出された事實に含まれたる眞理が面白いといふのは、即ち作者の主觀が面白いと云ふことになる。而して、その眞理の深さは、即ち作者の深さと云ふことになる。だからして作品の上に何所にか作者の主觀が現はれて居なければ、藝術品の味ひは生じない譯だ。唯、云ふまでもなく然う云ふ場合に云ふ眞理は、抽象的な知識上の空な名ではなくして、言はば、情の形に取つて、その眞理は現はれて來ねばならぬ。眞理が情の形で現はれて來ると云ふことは、言ひ換へれば、或る何ものかの非常に尊いものを與へられた、然しながら、それが何であるかは、些つと自分でも分らない。あれか、此れか、と知識はそれを模索して、知識上の興味を覺えるし、感情の方では又、何等か尊い意味深いものを眼の前に見せられたと云

ふやうな感じで、一種の滿足を得ると云ふに外ならない。即ち、何とも解釋出來ないけれども、知識の上にも、感情の上にも、名狀することの出來ない尊い味ひ、それが、情の形に於て現はれたる眞理である。而して、斯樣な力は取りも直さず作者の主觀の力なのだから、此の意味を持つた主觀でさへあれば、無論これを嫌ふ理由はないのみならず、寧ろ藝術上の作品として、是非無くてはならない主觀なのである。その意味に達するに以前の主觀なれば、あるなしとも、藝術の樣式上の相違に過ぎないのであつて、邪魔にならない限り、どちらでも好いと思ふ。たゞ飽くまでも主觀を人に說法するものを嫌ふのである。(明治四十二年八月談話筆記)

批評に就いて

批評に就いての論議も既に幾度か繰り返され、古い問題となつてゐる。自分も二三年以前に「近代批評の意義」と言ふ論文を書いたが、結局近代藝術の赴く所は眞理に藝術の歡びを被せた者である、と言つたやうな論旨で、今考へると不完全なものである。

それと同じ題目で夫の米國「アウトルック」の記者メービー氏は、近代批評の覘ひ所は從來の審美的批評を措いて、寧ろ人生批評で遣らなければならぬと論じてゐる。現今、日本の論壇で尠くとも新しい思想を抱いた人の唱へるのと、同じ意味である。無論メービー氏の説に異存はないが、誰でも此方面まで筆を延してくると、次第に明瞭を缺いて來るやうになつて、審美批評と人生批評との關係――深い根柢に落合つた錯綜した意義を明白にし得ないのが多い。メービー氏のでも其處傾きがある。如何かすると、審美批評も審美批評だが、人生批評の方を盛んにしたい位な處で切り上げ、根本を明かにする段になると遠廻しの説明になつて了ふ。

で、批評と言つたからとて一部の人の言ふやうに、單に文藝上作品の高下を批判し鑑賞するのみに限つて居るなど丶思つ

てゐる者が今日あらう筈が無い。文學の批評ならリテラリー、クリチシズム、芝居の評ならドラマチック、クリチシズムとそれ〴〵個々の名稱があると共に、政治批評、宗教批評、道德批評皆その通りである。批評その物を直ちに文學の範圍にのみ限る譯はない、批評の領域は廣い、たゞ其の性質論の問題は其の以上に存するのである。之れを方法上から見るとき二通りとなり目的上から見る時又二通りになるのだと思ふ。即ち社會現象に對して受けた印象を其儘語るか、或は科學的、知識的に整理して語るか、其處に方法上の二種類が生ずるけれども此方は根本にはさして異る所はない。たゞ目的上での性質と云ふ側に立入つて考へると、論が深くなるだらう。茲では假りに特殊的と統一的とでもいふ名稱に當嵌めるのが手つ取り早い。凡て文學、政治、道德等を其の特殊な現象として研究する部分を特殊的だと呼びたい。つまり部分的な社會現象、例へば文學、其の中でも更に小說なり詩なり其の他政治、法律凡て重要な事象に出會す每に、此の事象は如何に成立し何を目的としてゐるかといふ點に疑ひを抱いた時に、此の種の批評が要求されるのである。それはとりもなほさず吾々の社會的活動の一部を對當としてだ、特に文學と言ふ形で活動し、政治といふ形で活動する、その特殊な文學なり、政治なりの名目の起るに伴れ疑ひの生ずる。結局が識りたいと言ふ所に發足するのである。

換言すれば、文學とは何ぞやと言ふ疑問を解釋しようと言ふ處から起つた批評である。其結論には善かれ惡かれ哲學の基礎が成り立つ、勢ひ茲に到るに違ひない、畢竟文藝の特殊批評の行き停りには文藝哲學——即ち美學が橫はつてゐる。だから、此の種の批評は總じて小說なり詩なりが、如何なる方法に依つて、何を目的として存在するかの研究——然うした方面のみを中心の意味としてゐるのだと思ふ。

然うして考へると從來の審美批評と同じ傾向を有する物に違ひない。處がそれと相俟つて他の一面に當然起るべきは、即

ち統一的批評である。此は人生批評といふのと同樣の意義を有する物と見るべきである。此の方面の評論が、比較的近代に至るまで明に地歩を占め來らなかつたのには、特殊的批評の結論と旨く伴はなかつたと言ふ理由がありはしないかと思ふ。何故かと言ふに昔の藝術哲學の結論に現はれた處では、較もすると藝術の行き停りを、卑近な實用や娛樂や又は遊戲などいふ長閑な所に置いたり、それとはズツと飛離れて神とか、理想とか言ふやうな餘り縁遠い處に祭り上げたりしてゐる。是では現實の生きる人生に對する痛刻な味ひが出ない、結果統一的な人生批評の發芽し成長し行く上に大なる禍ひとなつてゐる。活きた現實の、人生そのものと藝術の歸趨する處が一致すると言ふ風には解してゐなかつたからである。

だから、一方から言ふと、藝術に現はれた人生は何を意味するか、又は人生の意義を奈何にして藝術に取入れるか、と言ふ風な問題には多く考へを及ぼしてゐないのである。而して近代の藝術哲學の傾き來たつた經過には、結局到達すべき「美」そのものゝ內容にも甚しい變遷と、前者に比較して遙かに懸隔とがある。神と言ひ、理想と言ひ、乃至娛樂遊戲などいふ意義は湮滅して、「美」即「人生」、とまで極して來た。切實な人生そのものゝ味が美即ち藝術であるといふ。斯うなると藝術批評の最頂上に、人生と言ふ大なる動かし難い目的物が現はれてくる。從つて特殊の底には必ず藝術を通じて人生を味ひ、且つ批評しようと云ふ深い統一目的が生じて來る。統一批評とは是を指すのである。

畢竟するに、藝術が痛切なる人生そのものを目的として存在する以外には、何物も無いと言ふ所から人生批評が當然藝術批評に絡み合ひ、藝術批評は人生批評を抱いてゐるといふことになる。此の意味で此の二種の批評は、連續した系統のものであり、事實また近代人の批評らしい批評には此の二樣の味の存して居ないものはない。之は當然の事である。

次に是を今少し押擴げて、他の方面――即ち道德とか宗敎とか政治とかの批評が、現在の藝術批評に比し均衡を保ち能は

ぬ點、そこに苦情を並べて反省を乞ふたのは、道德、宗教、政治に渉つての批評が今以て多く特殊批評の範圍のみに彷徨してゐて、統一批評の味ひが、極めて乏しい事である。世間の政治批評、殊に其分身のやうな關係のある人物批評などを讀んで著しく不滿足を覺え、慊らぬ節の多いのは未だ第一義に至る深い精神的の味が加はらぬといふ一點だ、畢竟その方面の評家に第一義的の自覺が起らないので、何だか淺い上つらの處に停滯してゐるやうな工合で、突きぬけた味、徹底した味が無い、政治批評にも、社會批評にも常に一味の人生批評統一批評の要素がなければ眼の開かない佛像のやうな氣がする。(明治四十二年九月)

新史劇の試み

史劇を作つて見ようとする諸家に一つの希望を述べて見る。若しそんな物が何で舞臺に上るものかと言ふなら、何うせ新作が眞面目な意味で舞臺に上るのは容易の事でないのだから、上らないとして置いて先づ試にさういふものを見せて貰ひたいと思ふ。それが作として佳かつたら、結局は其の方式が舞臺を征服し得ると私は信ずる。

元來歴史物といへばたゞ史上の色彩や人名を古に借ればよいのだなどゝいふ議論も、一昔前にはあつたものだが、今日さういふ亂暴な事を言ふものはあるまい。それかと言つて、一方、彼の學海翁などの當年の作意と同じく、歴史を舞臺の上に展覽して見せるといふのも無意義であるのは論を待たない。歴史小說、歴史劇、歴史畫、何れにしても古實史實の知識が或程度まで必要なのは勿論であるが、其の古實史實の陳列が藝術でないことも勿論である。又二十世紀の感想にわざ／＼十六世紀の甲冑を被せて現はす必要のないことも見易い道理だ。何となれば二十世紀の感想は最もよく二十世紀の世相によつて具體せらるべきであるから。

だから史的藝術の第一目的は其の描く時代即ち過去の一人生期を當時在つたまゝの姿で圓現して來る點にある。現在の人

生を描くものに對して、過去の人生を描く。どちらも現實であるが ただ一は久しい以前に起こり、一は間近に起こつた人生といふだけの差に歸する。而して歴史物に關する從來の誤解はこの平凡な結論から生じてゐる。過去の人生を其のまゝ圓現するといふ所から、舞臺を例の史實の展覽場にしたり、歴史の文句を人間にしたやうな馬鹿々々しい眞似をする。眞に過去の人生を圓現するとは、むしろ其の事柄よりも空氣を描くの謂であらう。時代の觀念、場所の觀念を鮮かに空氣によつて描き出せば、それが即ち其の過去の生活の圓現である。幾ら過去の事柄を細かに陳列したからと言つて、それで過去の人生を活現して來るものでないことは、言ふまでもない。此の點は現在を描く世話物と少しも違つたことはない。此の意味で的確に時代を描き場所を描くといふ用意は、双方に通じた精神でなくてはならぬ。唯それだけの精神で過去を取り扱へばよいのだ。

　現代の感想を過去の色彩に包んで出すのだから、過去はたゞ借り物、手段たるに過ぎないといふ僻論は、また違つた源から發してゐる。是れも據り所のない說ではないが、其の據り所が誤解されたのだ。即ち例の藝術に現はれる主觀といふ問題が斯んな風に外れたのである。主觀とは其の作家が人生を解釋する力、若しくは人生を觀且つ想はしめる力である。此の力は勿論作家ごとに新鮮であり、深刻でなくてはならぬ。現代の人に現代の主觀があるのは當然の事だ。けれ共同時にそれによつて觀られ、想はれ、解釋せられる人生を主觀が勝手に構造してよいといふ理由は何處にも無い。描かれる人生は必ず現實でなくてはならぬ。現實とはアクチユアルといふ意味ぢやない、リアルといふ意味である。造化が既に與へた人生といふ信仰に立つて、其の人生を觀、想ひ、解釋する。既に現はれたものに就て未だ現はれないものを想はせる。たゞ想はせて呉れゝばよい。現はれて居ないものを無理をして現はして呉れるには及ばない。無理をして現はせば揑造の人生になり、揑造

の人生になれば、可い加減な事を言ふといふ破壞的觀念が竄入して來て、其の藝術を亡して了ふ、魔醉劑を用ひて一時假りに其の無理や破壞的觀念を防ぐのは、時間といふものに生きてる人間は滿足しない。醉つてる時間と醉の醒めた時間の、矛盾を何うする。醒めて馬鹿々々しくなるものは、醉中に何程の意味があらうとも、現代の人には無効力である。續かない眞理、時間の保證のつかない眞理は役にたゝぬ。

そこで此の破壞的觀念の竄入を防いで、而も最も多く醉醒二つの心に確實と信ぜられる方法は現實といふことになる。現實とは畢竟可い加減な拵へ事といふ破壞的觀念の竄入しないといふこと、プラス、それが醉醒兩時に亘つて永續するやうにといふことを條件とする狀態に外ならない。だから其の最好方法として結局は實經驗にまで根據を求めて行く。こゝまで來れば、實はリアルとアクチュアルとは別かつことは出來ない。成分の個々感情について言へば、みんな實際に經驗したものでなければ實は駄目なんだ。たゞそれを組み立てゝ連續した人生にするとき、必ずしも全部アクチュアルであるを要しないだけの自由を有する。此の自由の用ひ方でまた現實とも非現實ともなる。

過去の現實、それを空氣によつて描く、描くことの深淺は作者の主觀による。是れだけを史的藝術の要義と假定して、此の假定に達するために稍や細かい議論をしたのであるが、讀者は是れまでを此の文の背景若しくは豫備知識として讀まれたい。そして本文は極めて簡單である。

既に小說に於いてあれだけ大膽な試みの行はれる以上、劇とても同じ事のやつて見られない理由はない。即ち先づ史劇の中からヒロイックな分子を、拔き去つて見たら何うであらう、ヒロイックの分子を去るといふのは、何も人物を平凡の人のみにするといふ意味ではない。人物には史上の有名な人も出て來やうし、平凡な架空の人も出て來やう。たゞ筋をヒロイツ

クでなくするのである。人生の眞味を、むしろ平凡瑣屑な一齣から取り出すがよい。そしてそれを纏まつたお話しに拵へ上げないで、前から後への長い人生の一節を生きた血や肉のついたまゝ切り出したといふ形で置いて見る。固より現實である限りは大事件を材料にしたからと言つて、不都合はない譯だが、是れには少なくとも二つの弊が伴ふ。一つはそれが大事件であるだけに動々もすると作者までが其の事柄に釣り込まれて、無闇とそれを落ちにしたり、際立つたものにしたがる。即ち昔の人生は素晴らしい稀有の人物や事件ばかりごろ〳〵してゐたものゝやうに見え且つ起承轉結の合つたお話式に出來上がつて了ふ恐れがある。今一つは作者が何か面白い材料をと歴史を漁るときの氣持をして、微妙な點で邪道に外れしめる恐れがある。初からアクセントの强い大事件を大事件と目をつける癖がついて、世話物の場合に材料を選定する時の氣持と丸で違つたものになる。其の結果細かく深い人世の味ひを拾ふことを忘れて、仰山な事柄の興味にのみ氣を取られて了ふ。即純藝術の味が出なくなる恐れがある。今のバーナード、ショー氏などが書く歴史物の呼吸を參考するとおもしろい。

要するに過去の人生の一區域を一區域のまゝ空氣によつて舞臺の上に復活せしめる。我等をして眞に其の人生の中にあつて回顧し瞑想する心にならしめる。本當の意味で過去の人生を觀且つ想はしめて貰へば、それでよい。何も史上の大事件大人物乃至當時の人情風俗を見せて貰ふために史劇を觀る必要はない。

以上の希望と舞臺に上る上らぬの論とは無關係である。對話の長短應接などにこそ舞臺的約束といふものがあつても差支あるまいが、事件の上には舞臺といふことが何等の抑制權を有する筈はない。

小說なら無脚色も平凡もよいが、脚本はさうは行かぬなどゝは、今日まさかに言ふ者もあるまい。舞臺即脚色、舞臺即平凡とは、餘りに滑稽な命題である。此の意味に於いて、現代を小說にすると歴史を脚本にすると全く同じ態度でやつて見た

ら面白いものが出來はしないか。是れが私の提出する希望である。私なども其の内やつて見たいと思つてゐる。（明治四十二年十月）

最近英米文壇と現實主義の世界的傾向

「ハーパース、マガジン」の記者、オールデンと云ふ人の雜誌文學に關する新著の中に「新文學」と題して、英米文壇の中心として、最近の傾向を書いたものがある。今、その要點を話して見る。

動もすれば、人は英米の文壇を目して、大陸諸國の文壇と懸け離れた、保守的にばかり傾いて行つてゐるやうな風に考へて居るが、それは勿論間違である。此文章に依つて見ても、恰度今の我文壇乃至大陸諸國の文壇の形勢と同樣である事が分る。

さて其要點を言へば、現實主義が即ち現代の流れだといふに歸する。啻に現在のみならず近き未來までも支配するものは、眞の現實主義に外ならないと言つてゐる。若し主義といふ事が、誤解せられる恐れがあるとなれば、單に現實的傾向と云つても不可はない。それに就て、此人はいろ〳〵な新しい言葉を加へて――例へば新想像とか、新現實主義とか、新技巧とか云ふが如き言葉を夫れ〳〵當て嵌めて、內容を說明しようとしてゐる。

此人の言ふには、今の英國の欽定詩宗たるオースチンはだん〳〵世の趣味が墮落して來て、高尙な詩を理解する知識が缺

けて來たと云つてゐるが、それは間違つた話だ。何となれば今のウォード女史や、モーリス、ヒユーレットの小說が喜び讀まれる時代は、取りも直さず立派な知識が文壇に存在することを證據立てるからである。たゞ我々の文藝に對する滿足には二た通りある。其一つは、古い、過去の物に對して、一種の古實物を味はふやうな氣持ちで面白いと思ふのと、今一つは、我々の本當の活きた生命に接觸するものを見て面白いと思ふのと、此二つは何時でも並んで存在してゐる。欽定詩宗が云つたのは、言ふ迄もなく前者の立場からである。けれども、我々は尠くとも後者に據つて立派な知識を持つて進みつゝあるのである。要するに、此最近三十年からしての新時代と、その以前とは、ハツキリ傾向が變化したと言はなければならぬ。

勿論我々は、わが親愛なる老サツカレーよとか、わが親愛なる老ラムよとか云ふ事は、何時までも言つてゐるけれども、是等の人々はどうしても既う眞心から我々の方には顔を振り向けては吳れない。

作者で言へばヂツケンス、サツカレー、ジョージ・エリオツトなどの頃迄が昔の人で、ハーデ井ー、メレヂスを通過して、新しい時代はハツキリと現はれて來てゐる。コンラツド(Conrad)ヒユーレツト(Hiwlett)ヒツチエンス(Hichens)グラハム(K. Graham)オリバント(A. Ollivant)など云ふ名前が文壇の面に現はれて來たのは、如何に新しい現實主義が一世を支配して來たかと見るべき徵候である。

又詩で言つて見れば、あれ程廣く喜ばれたテニスンの時代が過ぎ去つて、却つて、マシユー、アーノルドの詩がだん〳〵讀まれるやうになつたのは、果して何の意味だらう。

更に米國に於ても、ゼームス(H. James)ハウエルス(Howells)等を初めとして、ハーランド(H. Harland)ウイスター(O. Wister)ホアートン(E. Wharton)マガレツト、デランド (M. Deland)メリ、オースチン(M. Austin)ショツク(G.

Schock) ダイヤー (M. Dyer) ゼンチツト、リー (J. Lee) マーガレツト、カメロン (M. Cameron) クリツセイ (T. Crissey)、ピーク (E. Peake) ケベル (J. Cabell) フオールマン (J. Forman) ダンカン (N. Duncan) チャンニング (G. Channing) 斯う云ふ人々が出て來て、盛んに新機運を作りつゝある。就中、米國に於ては最近十年間に於ける短篇小說の發達は目覺ましいものであつて、それが軈て新現實主義の發達に外ならなかつた。

又、評論文學の方から言つて見ても、コールリツヂ、ラスキン、カーライル、マコーレー、ドク井ンシー、エマースンなど云ふ名前は、最早や我々時代のものではなくなつて、是等の人々の思想はもう我々とは沒交渉になつて了つた。ペーター、サイモンズなどを通過して、マーテルリンク、ウイリヤム、ゼームスなど云ふ人々の思想が、我々を支配するやうになつた。

斯樣にして英米の文學は、所謂ビクトリヤ王朝文學と云ふものから全く分離してしまつた。

それでは、斯樣な新時代の新現實主義は何う云ふものであるかと云ふに、取りも直さず現實の人生に歸つて來ると云ふ、一つの動機に外ならない。もう昔のやうに、空な名を並べて、空な分類をして、空な處へ自分の視點を定めて、科學だの、哲學だのと言つて居られる時代ではなくなつた。ダーウインの研究すらも、此意味に於て段々變化を爲しつゝあるではないか。彼のウイリアム、ゼームス君に依つて唱へられるプラグマチズムなどが、最もよく是の傾向を示して居る。若し文學者のハウエルス君をして、文學上の現實主義と云ふ論文を書かせたならば、恐らく是と同じやうな事を言ふだらうと思ふやうな事を言つて居る。

最近の文壇に於て、小說なり論文なり形の上に來た一番目覺ましい變化は何かと言へば、昔のやうに苦心して彫琢せられ

た完全無缺の文體と云ふ如きものが無くなつて了つた事である。斯樣な意味に於て、技巧は確かに亡びた。けれども、それに代つて起つた新技巧と名ける事の出來るものは、即ち其書いた物が總ての事物の表面の現實から、中へ潛り入つて、今まで眼に見えて居なかつた無限の心理的現實をば、其種々雜多で而も個々特殊であるまゝ變形しないで捉へて來る其力が即ち新技巧である。

此頃「フイガロ新聞」紙上に於て、佛國のプレヴォ君が、世間に注意を與へた言葉に、近年の上流社會で、美人と云ふ標準が變りはしないか、即ち昔は顏だの、體だの、恰好だの、整つた肉體的美が、何と言つても其標準となつてゐたが、近年では心理的に際やかな事とか、愛嬌のある事とかゞ中心の標準となつて、昔の美人と云ふものとは變つて來たのぢやないかと云ふ事を言つた。世間もそれを否み得なかつた。それと同じ事實が文學上にも行はれて居る。昔のよい文學の標準と、今の文學の標準とが、恰度今言つたやうな差別である。要するに、深い心理から入つて行つて、生きた個々別々な現實にピツタりと行き逢はうと云ふのが、現在の實現主義に外ならない。

昔者ルーソーは「自然に歸れ」と言つた。けれども我々はルーソーの言ふやうな意味では、最早や自然に歸る事は出來ない。現代は無限に複雜であつて、一旦この複雜な世界に入つた最後、どう焦つてもルーソーの夢想したやうな、單純な自然に歸れやう筈がない。であるから、我々は寧ろ自然に歸ると云ふのでなくつて、自然を現代の我々の中に取り返して來ると云ふのが本當の意味である。ルーソーやニーチエの豫言は、現代の我々が行かんとして居る道とは隔たつて居る。

勿論、ロングフエーローの詩の文句ではないが、我々は無限に上に向はんとする希望は永く持つて居る。けれども、人生の發現、及びその觀察は、上に上る事に依つて得られずして下へ下る事に依つて得られる。而して以上の形勢は、啻に文學

に於てのみならず、繪畫に於ても、彫刻に於ても、將たまた音樂に於てすらも、等しく認めらるゝ事實である。凡そ小說家と名のつく限りは、昔の人と言つても、現實の人生を取り扱つて居たに違ひない。けれども、その現實は、淺薄な現實である。表面の現實である。之に反して、現代が取り扱ふ現實は深い現實である。内面の現實である。現代の要求する新想像とは、つまり此内面の人生に入り込む力に外ならないのだ。

斯う云ふ新現實主義に入ると云ふと、それが我々を今一度地上に連れ下ると見ゆると同時に、又地上をば高く引き上げて、今まで平凡と見えたる物の中に閑却されて居た新價値を發展させて行くものである。

以上述べたところが、このオールデン氏の說の要略である。勿論此本は昨年(一九〇八年)の出版であるが、言つてる事は我々に取つて別に珍らしくはない。けれども、少くも恰度我國と同じ程度の問題が、頓て英米の文壇に於て最新の問題であつて、且つそれを解釋する人、例へば此本の著者であるとか、メービー氏であるとか云ふ如き人の言ふ事と、我文壇の進步した方面の人々の言ふ事とが、同じ程度のものであると云ふ事の是が好い證據であらうと思ふ。(明治四十二年十月)

自由劇場に就いて

（頭の試驗である）

自由劇場の試みは無論劇界の新活動として双手を擧げて賛成する。イブセンを出さうといふのも勿論異議のない話である。たゞ特にボルクマンを選んだのは何ういふ譯か。終りの幕などには申分のある處だらう。が兎に角あれだけの新人情を幾分でも舞臺の上に解釋して見せることが出來れば、それだけでも大した仕事である。自分が此の芝居を見たのはベルリンのシラー座で、フリードリツヒ、ホルトハウスといふのがボルクマンを勤めたのだつたが、無論座も役者も一流のものでは無いのと、自分のドイツ語の耳が十分で無かつたのとで、何うも鮮かな印象が殘つて居ない。兎に角日本で之をやるといふのは見ものだ。

今一つは我々平生の持論で現今に於ける本邦の俳優連中でその新派舊派を問はず、イブセンの作中に出て居る心理を十分に發揮することが出來るや否や、俳優を個人的に知つて居ないからたしかな事は言へないが、どの位な程度まで行くかと內々

懸念だ。勿論イプセンの作は少々やり過ぎるまでに舞臺上の技巧に於て老功を極めてゐるから、我々が讀み味つて行くと內外相應じて塲面が引締つて來るが、併しそれには讀み味ふといふ事が伴ふからで、舞臺で演ずる時には、臺詞中心の西洋劇殊に感情よりも思想を主とするイプセン式の演劇であつて見ると、其の臺詞の內容を腹で溶して言葉の意氣組に充實させる伎倆一つで活きも死にもする。うつかり聞いては誠に家常茶飯の言葉でも其奥に全時代を蔽ふやうな人生問題が往々にして這入つて居る。それが出て來なかつたら、實につまらないものになるだらう。勿論下手に思ひ入れ澤山の厭味となつては困るが、要するに臺詞の精神を充分にインタープレットしてそれでつまらない唯言をも舞臺一杯に活かして見せる。イプセン劇を演ずる出來不出來は一に此外にあるまいと思ふ。云ひ換へれば俳優が腹で言ふべき臺詞であるから腹に寸分でも隙があれば間がぬけて了ふ。此の芝居は左團次たり河合たる人々に取つて藝の試驗でなく頭の試驗である。思想を解釋してそれを臺詞に活かして來る。其の度の深淺がやがて出來不出來の分かれ目である。（明治四十二年十一月談話筆記）

藝術の形式と內容

總べて、如何なる藝術でも、讀んだり見たりして、その後、自分の心の中にいろ〳〵云ふ可きことを與へるもの、言ひ換へれば、その藝術でもつて自分の心を豐富にし、それが自分を樂ませたが、その藝術が好いか惡いかは取り除くとしても、兎に角自分をして何事をか言はんと欲せしめるやうな刺戟を澤山に與へてくれるものは、生きた藝術と云つても好からうと思ふ。或は其藝術は死んでゐても其作者が自分の心に活きてゐて、其生死の矛盾が自分をして何事をか言はしめる場合もある。

此の意味に於て、此の十月の小說と、文部省の繪畫彫刻の展覽會は、吾々に言ふ可きさま〳〵の事柄を與へたと云ふ趣きがある。

十月の小說では彌張り世間で云つて居る如く「中央公論」「早稻田文學」に載せられたものなどが、一番刺戟が多かつたやうに思ふ。中でも評判の高い田山花袋君の「罠」、あれに就て私の思つたことを云つて見ると、書き方の上でエッセーと小說との、境の仕切りを打ち拔いたやうなものであつた、作者自身もそのことを畢竟書きやうが足らなかつた故爲だと、何處かで

云つて居たやうであるし、又、世評でも、具體しないで出たと云ふやうな批難があつたやうである。が、それは成程、客觀描寫や、平面描寫を唱へて居る作者の立場から言へば然うであらうが、結局の立場から言へば、その物が裸で出て來ようが、著物を著て出て來ようが、作者自らの現はさんとして居るそのライフと云ふものが生きて出て來て、そして、讀者にその生きた刺戟を傳へれば、それが旋て最高の藝術である。小說だとか論文だとか、裸體だとか、著物を著て居るのだとか云ふ說は實は何うでも好いことであると考へる。

藝術が客觀化されなくてはならぬと云ふことは、今日では必ずしもそれが他人の事にならなければならぬと云ふ意味とは違つて來て居るのであつて、作者の生命が作品の中に浮び出て居れば好いと云つたやうな、言はゞ、生命遊離說とでも云ふやうなことになるのであらうから、然う云ふ藝術觀から見ると云ふと、あれでも決して惡くはないと思ふ。『民』のやうな行き方でも差支へないと思ふ。唯、その聲が生命に滿ちた聲であるか、或は生命以上に誇張された聲であるか、作者の生命が客觀化されてゐるか否かと云ふことが問題なのである。其方面から見ると、『民』には何うも少し作者が叫び過ぎて、聲が皺嗄れてゐたやうな感じがあつた。

又、作者が例の『蒲團』以來持つて居るあの問題と云ふものを、一方では既に最う古いと云ふ人もあるけれども、それは關はないと思ふ。確かに、三十以上の人の心には、何時までも容易に滅びない問題の一つには相違ないから、而して又一面には社會道德と非常に深い矛盾を持つた問題であるから、若し、作者が本當に眞面目にあの問題の眼を覺まさせやうとするならば、まだ〳〵叫び足らないくらゐなものかも知れない。充り、深く蔽はれて居る度合が強いから、それを掘り起すのは一層骨の折れる譯なのである。

全體に於て此の作者は、例へば島崎藤村君が靜かに現實の人生を觀ずると云つたやうな味ひの人であるのに對して、寧ろ、問題的傾向を取り得る人の樣な趣きがある。と同時に、此作者にはあゝ云ふ思ひ切つた材料を取り扱ふに拘らず非常にモーラルな調子の多く含まれて居るのが目に付く。あの『罠』の如きでも第一其題の名からして、既に人間の本能を罠と見る所に、作全體の調子が與へる傾向を示して居る。

斯樣にしてあの作が第一書き方の上に於て論文と小說との區別を拔いて了つたやうな問題を、勿論、それが斬新であるとは言はれないまでも、兎に角それが日本の今の文壇に考へさせる所があるのは、事實である。又それと連つて、或る問題、或る思想をば、最早や具體化するだけの忍耐力がなくなつて、作者が赤裸々で野に出でゝ叫ぶと云つたやうな傾向が、將來の藝術に何等かの意味を持つて來るか否かと云ふやうなことも、漠然考へさせるし、と云つたやうな形で、兎に角私をして斯樣なことを云ふ可からしめるやうに刺戟したと云ふことが、少なくとも此作品の意義ある所以であらうと思ふ。即ち好い惡いと云ふよりも、シグニフヒカントな作であると云ふことが出來やう。（明治四十二年十二月）

新しき作家に

之れは自ら別な話であるが、新らしい人々の作に、早く好いものが出れば好いがと云ふ風に、自ら老婆心的な考へを持つのは私ばかりでもあるまい、啻にそれのみならず、此の全體の新らしく出て來る人に對してその人が未だ第一流の名を成して居ないと云ふと、何うしても批評家の方でも、自然の人情としてその作を粗末に見ると云ふ結果になり易い。藝術上の批判などゝ云ふものは實に微妙なものであるから、始めてその作品に對する時の心持を餘程謹んでかゝらないと、少しの氣の持ちやうで、迎へて見ると見ないでは、その作品に對する感心が全で違つて來る。その間に非常な相違があるものであるから、全然の無名な人で、而もその作品も相應に出來て居るものをば、それだけを目的にして批評して見ると云ふことが必要だと思つて、「早稻田文學」などでも然う云ふ欄を是非設けるやうに云つて居るのである。けれども一方では又、然う無暗に新しい人を闘ふのは却つて小さい野心を煽動する結果になつて面白くないと思ふ反對論などもある。然し私一個の考へでは、何うせどんな人だつて一度は有象無象の小さい鉛の中から出て行くのである。忽然として輝き出ると云ふのは、寧ろ稀なのであるから、眞面目に文學に志す青年なれば、その文學者として果して立つて行かれるか何うかと云ふ自己の天分を試みる

機會を與へ、又、それに對する親切なる批評も下した方が好いだらうと思ふ。

是れは新しく出る人といふのではないが、新進の作者については、十月の小説の中で、中村星湖君の書いたものなぞを見ると云ふと、所謂新しい人々の中からずつと進み出て行く道行きは能く見えて居る。あの作なぞは、例の如く固い味ひのものであるけれども、例へば、親子關係、兄弟關係と云ふやうなところに現はれる、人情とか道德とか云ふもの丶明らかに在來の日本と違つたもの丶面影が見えて居る。新しい來る可きゼネレーションと云つたやうなことを、人をして思はしめる作だと思ふ。

あの一種の運命に襲はれて居るやうな、廣い暗い御師の家と云ふものは、私には唯輪廓だけ描かれて居つて、この中の空氣が未だ十分に描かれなかつたと思ふけれども、無論それが背景となるだけの力を持つて居て、然う云ふ背景の中に行はれて行く新人情と云ふ様なものが、最も私の頭を動かす興味を惹いた。

今年の新進の作物の中から早稻田に關係ある人で今一つを言へば秋田雨雀君の脚本である。あの人のものにも、私は確かに來る物があると思つて居るのだが、小説の方では未だそれが十分に發展して來ない。何時かの「早稻田文學」に「紀念會前夜」と云ふ脚本がある。あれなぞは、脚本とは云ふもの丶實は小説と見て好い。あの作は不思議に一種の空氣をインプレスさせたもので、恐らく私の近頃讀んだもの丶中で、一番濃く、そして一番長くその空氣の頭に殘つたもの丶一は、あの作であると思つて居る。あの人なども行く／＼は自分自らを出して行く人と思ふ。（明治四十二年十二月）

明治四十二年文壇の回顧

（現實の歩み　猶確か也）

私は、特に此一年間にと言うて、わが文壇に格別の大變化や特徴が現はれたやうにも思はない。尤も、作物の個々に就いて、遺漏なく目を通したと云ふ譯でないから、其細かいところの變化や特徴に就いては輙く斷言は出來ないが、大體に於いて大なる變化と云ふべき程の現象に接しなかつたのは事實である。

唯、其間現實を描く文字、就中小說に於て言へば自分の事を書いたり、自分の周圍を書いたりして居る其材料を、だん〳〵使ひ盡して了つて、作品が動もすれば單調に流れ易くなつたと同時に、此單調と云ふ事は、軈て其作者のそれ〴〵の特色を一層明白に現はしたと云ふ事になつて居る。そして何等かの前途を開いて行かなければ、同じやうなものばかり書いても居れないと云ふ氣持で、ある者は其描き方の上に新境地を見出さうと努力して見たり、またある者は材料其物を是から廣く多く取り入れて來なくては困ると云ふ風に考へてやつて居る人があるやうに見える。現に白鳥君なども、この次から、本當の小

評家になる積なら、その覺悟でかゝらなければならぬと云ふ事を話して居たやうである。要するに、作者側に於ても、自分若くは其周圍以外の現實の中に浸入して行く必要を認めて來たと云ふに外ならない。併し此れは事實言ふべくして容易に行ふべからざることであらう。たゞ作者にその覺悟さへあれば、結果は自然の成行に待つ外はあるまい。之と共に作家が各自の特色を出すといふことは、直に其主觀の深淺强弱を段々明白に露呈して來る譯になるから、從つて其の存立の根據が明白に世に問はるゝことゝなり、作家をして全く眞劍生一本の自家の骨頭によつて立たしめることゝなつた。是れは頗る注意すべき現象である。あらゆる意味に於いて作家は其主觀を養ひ磨く必要が一層切になつたと言つてよい。四十一年を新文學の外に對する淘汰時代であつたとすれば四十二年はそれが内に對して淘汰する時代であつたとも言へやう。が要するに新興の文學は着々として其の行くべきを行つて居る。世間動もすれば、取るに足らない紛々の誹謗を取り集め羅織し來つて、新文學が今にも轉覆するやうな事を尤もらしく言ふものゝあるのは笑ふべきである。過去一年を總觀して苟も直接間接この新思潮に歸向するもの以外に何處に一つ特異の文學が起つたかと思はれる。

　評論家側に於いても、それと同じやうな形跡がある。即ち廣い意味に云ふ人生の現實其物を觀察なり研究なりすると云ふ方の興味を、一層切實に感じて來たやうである。其手初めとして、一番近い現實たる自分の研究といふ事を、人々が考へるやうになつて來た。又それと同時に、例の主觀とか、空想とか、熱情とか云ふやうな事も、大分、而かも若い人々の間に言はれたやうに思ふ。是は一つは單調に倦んだのでもあらうが、又一方から見れば、その客觀的藝術の反對の側に立たうと云ふ意味からも出て來たのであらうと思はれる。特に赤門側の二三の新しい人達が覺醒の狀に入つて來たのはよいが、其言ふ所考へる所は、當然今の新文學に赴くべき色合でありながら行懸りからでもあるのか、結論に於て、强て非自然主義の口吻

を擬するのは惜しいものである、それも自然主義以上新しいものを出して見せるのならよいが、逆に後戻して、例の革新會あたりへでも落て行かうとする老成ぶりは何たる事であらう。

私の考へでは、矢張り今の主唱では、殊に若い人にあつては、主觀を說き、空想を說くと云ふ事は、一層多くの危險が伴つて居るものと見て居る。勿論、こんな事は極めて抽象的な議論であつて、同じく主觀と言つても、其言葉は幾樣にも解せられるから、つまりは無意味な論になつて了ふけれども、意味に依つては主觀が大事であつたり、空想が必要であつたりすると云ふ事は勿論言へる。

早い話が、全然實際にあつた事を小說に書くにしたところで、蓄音機にでも取つて置かない限りは、話に前後長短を生じて來るのは勿論、それだけの選擇が何の力かと言へば、矢張り空想とも言へるのである。隨つて自分の特殊な頭の見方からして、人と違つて描いたものゝ現はれて來るのは當然な事であつて、それがあればこそ、甲の作者と乙の作者と違ひ、又その違つた二人の何方が可いか惡いか、深いか淺いかと云ふ問題も起つて來るのである。

さういふ意味から、主觀が必要である、空想が必要であると言へば、之は論を要しない事であるけれども、單に主觀を出せとか、空想を強くせよとか言へば、もつと違つた意味が生じて來る。隨つて本當の藝術觀照の心持になつて居ない主觀が出て來るから、下手になると折角今日まで進んで來たものが、も一度逆戻りする恐れを生ずるのである。のみならず、主觀でどう、空想でどうと云ふ事は、作者が意識してやるよりも、自らにして出て來るものに有り難味があつて、意識して、狙つて書く物は、矢張り無効だと言ふのが、藝術の立場として至當だと思ふ。

主觀を養はんとする努力は結構だが、主觀を立てんとあせるのは何んなものか。が、勿論、今言つた一部の主張は、それ

が善用せられゝば矢張り文學の色どりになるのである、たゞそれで以て今の大體の文壇の傾向を變更すると云ふ事が出來るものでもなく、まだ當分の間は此傾向で進むだらうと信じられる。又、そんなにがんどう返しに、現實主義の文學が、空想的、理想的、主觀的になれる譯のものでもない。

私は過ぐる一年のわが文壇は、さう云ふ事實を經て來て居るやうに思ふ。（明治四十二年十二月談話筆記）

文明思潮を描ける文學

私の演題は「文明思潮を描ける文學」と云ふ極めて漠とした題であります、皆さんも無論御承知の如く、近頃の日本の文學と申しますものは、就中小説などに於て段々書くことが細くなつて來た、例へば社會の全體に亙るやうな思想の潮流を描く、又は一國一代の運命を支配するやうな歴史上の英雄豪傑を描くやうな文學が段々無くなつて來て、寧ろ極く細い平凡な中に眞正の眞理を認めるとか、高い人性を認めるとかいふ行方が最近の文學の狀態で、凡人小説の名の因て起る所以である、而して吾々は左樣な文學がむしろ今日の日本に起ることは當然であつて、少くとも今暫くは段々同じ方角に進んで往くのが日本の文運の爲に宜いことゝ信ずるのでありますが、併ながら一方には絶えず大なる非凡なることを描く小説も無いではない、又偉人豪傑を描いた所謂ヒロイックな文學が出るのを望むと云ふ要求も絶えず一方から持出されて居る、殊に歴史的文學に於て此事實があります。私自らは歴史物に於てすらも反對の行方をして豪傑英雄そのものを凡人として取扱つた所に眞の人生が見えるのではないかと思ふのでありますけれども、兎に角凡人小説以外の物を一瞥する必要はある。そこで此事を事實に付て言つて見ようと思ふのが今日の論題であります。

是は今申したやうな理由でありますから日本の例は取られませぬ、日本には殆ど最近に於て文學的の價値のあるものに付て史上の大事件大人物を書いたものは無いと云つても宜い、無論日本にも昔のものには平家物語乃至は謠曲、下つては馬琴の小說に至る迄大部分それでありますが、之を以て直に現代に刺戟を與ふる所の文學としては餘りに物足りないのであるから、此例を取る譯に往きません。

凡そ如何なる文學と雖ども本當の意味で成功した文學であれば如何なる形に於てか文明の思潮に觸れてない文學は無い、文明の思潮に觸れない文學なら吾人を動かす力は無い、極めて平凡微賤なる事柄を書いても其の事柄の中に當代の活きた人物が躍動しそれを取り卷いてゐる活きた文明が出て來れば、即ち文明思潮に觸れたものと言つてよい。が、茲では前にも言ふ通り大きなグランドスゲールで文明を書いたものゝ例を擧げて見ようと思ふ、同時に其の描かれた文明思潮其のものゝ解釋を試みるのが主要の目的であります。

近代の西洋文學で此好例となるものが私が思ひ出す所では少くとも四つある、第一は獨逸のワグネルの書いたオペラで、中でもかの四曲つゞきの大作リング(Nibelungen Ring)の中に大きな人間の文明のカーレントが描かれて居る、もう一つはポーランドの小說家シェンキーヴヰッツの書いたクォヷヂス(Quo Vadis)是は近頃「何處へ行く」と題して飜譯書が出て居る、それからあとの二つは例の諾威のイプセンが二曲續きの劇でエンペラー、エンド、ガリリアン(Emperor and Galilean)と露西亞の近頃の小說家メレヂコウスキーの三曲續きの小說とである、此後の方の三つは私は英譯で讀んだものでありますが、先づ凡そ此四通りの文學を讀んで見ると、妙に近よつた題目、甚しいのは全く同じ題目を取り扱つてゐて、それで其取扱方によつて作者の文明觀も人生觀も藝術上の味も違つて來る。茲が研究の興味ある所以です。其の中でも初めの二つ即ちワグ

ネルの書いたオペラとシェンキーヴヰッツの書いた小說とは玆では稍々思潮の觀測として物足りない感があるから專ら後の二つに就て述べて見る。

先づ左樣なる文學がどう云ふ思潮を書いて居るかと云ふと、御承知でありませうが、彼の西洋の文明の歷史に於て極めて重大な、殆ど其の根源とも見るべき二大潮流の對照即ち英語で所謂ヘレニズムとヒブライズムとの關係であります。一は即ち希臘精神で一はヘブリウ思想又は其變遷した基督敎精神、此の二つの思潮が上世と中世と移り變りの際に橫つてゐた文明の二大思潮である。而してそれが今日といへども西洋文明の根本に樣々の形で橫つてゐる二大傾向である。希臘の文明が段段衰へると共に今までのヘレニズムに對して西洋紀元の初めに勢力を見はし來たつた所のヘブリウの思想、即ち彼の舊約全書に現はれて居る所の思想、即ち希臘思想と基督敎思想、此二つの思想の消長がやがて、西洋文明であるといつてもよい。此の二思潮の始めての交代期即ち上世と中世と入換はる頃を題目にして其前後に亙つた二大文明の爭鬪を描いたのが今申す文學に外ならないのである。

さてワグネルのリングと云ふオペラは此問題を何う書いたかといふと、話の筋は希臘の神々の物語であつて、希臘には基督敎の一つの神樣であるに對して色々の人間に近いやうな神樣がある、アポロであるとか、ヸナスであるとかいふのがそれでありまして、吾々が今日神話の中で聞いて居る、人間だか神樣だか分らぬやうな色々の形で希臘人に信せられて居た神々である、其神が亡んで行く道行を書いたのが此のオペラである。即ちラインの河底に指輪が沈んで居つた、其の指輪は人間的なる野心、天下を支配する權力の標象である、若し其指輪を拾ひ上げて所有する者があつたならば、其人は天下を取ることが出來るけれ共同時に愛といふものを捨てなくてはならぬ、愛を取るか權力を取るかといふ仕組に拵へて其指輪から話を

起してある。希臘の神々が、段々希臘の文明も末になつて新しい思想が起りかゝつてゐて、自分等の地位が危くなるからして今一度人間の支配權を得たいとの野心を起して人間界に降つて右の指輪を爭ふ、所が其指輪に災が付いて居つて其指輪を所有して居ると不幸が續くので結局神々が野心にあほられた結果として、自らも運命が危くなつて來て滅亡を早めて來る、さうしてとう／＼指輪は元の河の底に沈んで仕舞ふ、神々はヴルハラと云ふ高天原に上つて、そこで靜に自ら滅びて往く運命を待つ。下界の方では愛といふものが代つて世を支配する、愛の文明即ち基督敎の文明が光りをさす。斯う云つた意味を四つのオペラに仕組んだものがワグネルの思想である、希臘文明の精神が衰へてさうして基督敎の文明の精神が這入つて行くと云ふ、丁度上世と中世の文明交代の所を見せてさうして最後に新らしい時代が歐羅巴を支配する所を見せて終つたのである。更につゞめて言へば基督敎文明の勝利を見せたものである、而してたゞそれだけであるのが私の玆で題目にするには物足りないといふ所以です。

今一つのクオヴヂスと云ふ小說は、丁度西洋紀元の初めの有名なる羅馬の暴君ネロが、當時段々羅馬の基督敎に化して行くのに對して之を禁じて暴虐を行つた、其暴政を筋として描いたものと言つてよい。今是れを小說として味つた氣持を云へば、歷史小說としては面白い即ち小說的なる又は歷史小說的なる面白味は十分あります。「成程こんなものであつたらう、」殊にネロと云ふ人を中心にして、當時の羅馬生活の一面を見せた面白味はあります。併ながら刺戟的な興味以上十分な文學上の價値から云つて如何であらうか、大分疑問である。評判になつたもので傑作の一つになつて居るが、どうも吾々は讀んで、其れだけの深い意味があるか、どうか、疑はしいと思ひますが、兎に角題は前來の文明問題に觸れてゐる。ちよい／＼と、問題に觸れた言葉を挾んで居る。希臘的と基督敎的を肉の支配と靈の支配といふ風に見た說なども出てゐる。併しそれ

は極斷片である。而してネロが段々暴威を振つて基督敎徒を虐殺して往つて、使徒のピーターまでが段々迫害せられて危くなつて來た、ピーターの周圍には迫害を受けてゐる信者が集まつて居るけれども、もう自分の命も旦夕に迫つて來て羅馬には居られないからと云つて、羅馬の街を去りかけると、途で基督が幻に現れる。ピーターは驚いて「クオ、ヷヂス」即ち「何處へ行き給ふか」と叫ぶと、基督は、お前は折角基督敎を信じてお前の周圍に集まつて居る信徒を見捨てゝ去るのである。お前が羅馬の街を去るなら我は見て居るに忍びないから、代つて羅馬に行つて、さうして、もう一度十字架に懸つて人間を救ふのだと云ふ。ピーターは地に伏して謝罪して、さうして更に羅馬に引返した。それから側に附いて居つた者も段々殺されてゆく。結局は一時ネロの爲に非常に迫害される。けれども羅馬の街に基督敎の芽は枯れないで殘り榮えて行く。是が此の小說の大體の趣意と謂つて宜い。斯樣な意味があるのでありますが、是れも唯是れだけで、其以上右の二大思潮が如何になり行くかといふ事に關する深い考への興味は出てゐない。

然らば其あとの二つの作は何うであるかといふに、先づ其れに入る前に、今申した希臘思想と云ふことゝ、基督敎思想と云ふことは、どう云ふ意味かと云ふことを一言說明致しますと、是れは種々複雜な問題でありますから一言にして盡すのも無理かも知れませぬが、其初め雙方とも宗敎的なる色彩を帶びた形で見れば、基督敎と希臘敎との戰ひといふ風になつてゐる。而して其の宗敎と宗敎との間には如何なる差があるかと云へば、一方基督の敎はヘブリウの思想から出て來たのでありまして、人間の此世のライフ、此世の生活と云ふものをば先づ卑むことになる。而して寧ろ天國に重きを置く。であるから此世に在つては、貧しい者、賤しい者、凡て吾々が此世の生活に於て劣等であると思ふ者が、ヘブリウの思想に於ては寧ろ幸福である。さやうなものが一層多く天國に行く機緣を有する。であるから吾々の望み希ふものは、此世でなくして彼の世

である、人間の世でなくして神樣の方に行くのが結局は宜いのであつて、此世の生活と云ふものは餘り結構なものでないと云ふやうにして、此世を小さくして仕舞つて、來る世を大きくすると云ふのが、先づ基督敎の當時の根本思想である。それに對すると希臘の思想は其の反對であつて、此世を樂む、ジス、ライフをエンジョイする。此世の幸福を中心にして考へると云ふやうな考へ方でありますから、是れは即ち人間にゆくのであります。今日の言葉で此二者を對照していへば、いろ〳〵と云へませう。希臘敎は肉の世界を先にし、基督敎は靈の世界を先にする、と云ふやうな說明が一面には當はまる。凡て人間の方が神樣の方より先であり、智慧の方が信仰の方よりも先であると云ふ行き方と、神樣が主で人間は輕く、信仰が主で智慧の力は輕いと云ふ行き方の對立である。即ち智慧と信仰の衝突、此世と來世の衝突、人間と神樣の衝突と云ふやうな意味になつて、靈的な基督敎の思想と、人間的な希臘の思想とがいろいろな形で文明に色を着け文明を左右し消長せしめてゆく。其の二つの考へ方、此世を渡る氣の持ち方が衝突をして、宗敎の名を以て覇權を爭つた、それが千九百年昔の歐羅巴の文明交替期の有樣でありまして、さう云ふ大きな衝突、極めて大仕掛な社會狀態を描いたのが此等の文學です。イブセンのあの芝居には、英語でいふとワールド、ヒストリック、ドラマ即ち世界史的戲曲といふ添書きがしてある位ですから、隨分大きな大規模なものであつて、殆ど有らゆる文明の根本を描かうとして居る。今申したやうに、ワグチルの書いたものは、是れから基督敎が全盛であると云ふことを示したもの、シエンキーヴヰッツの書いたものは、歷史的小說として此の爭の當初を記述したものといふだけであつて、其以上に餘り深い問題は書かれては居ない。所がイブセンの書いた芝居とメレヂコウスキーの書いた小說とは作者が明白に意識して、自分が其れを書いて且つ解釋して見ようと云ふ氣持で筆を執つて、殆ど今の日本人にすらも痛切だと思はれる邊まで引ッ張つて來て描いたのであるから、まア色合が違ふと謂つて宜い。であるから私は

此處で、此の二つに就いて言つて見ようと思ふのであります。

イプセンの此の芝居は、寧ろイプセンがイプセンとしての本領を發揮した時代より前でありますから、實は劇としては餘り好いものではないと思ふ。イプセンの本領は、もつと後の作にあります。さて此處で論ずるエンペラー、エンド、ガリリアン即ち皇帝とガリリア人と題する劇――皇帝とは羅馬の紀元四世紀頃のジュリアン帝の事でガリリア人と云ふのは即ち基督のことを指した、即ち皇帝と基督といつたやうな意味の芝居であります。此の芝居は初め矢張り三曲續きのつもりで書いたものでありますが、どう云ふ理由か二曲しか出來なかつた。其の前部はシーザース、アポスタシー(Caesar's Apostasy)即ち王の脫敎と題して、ジュリアンがまだシーザーであつた頃、基督敎を棄てた事の芝居である。又後の方はエンペラー、ジュリアン(Emperor Julian)即ち皇帝ジュリアンと題して、皇帝の位についた後の彼れを書いた者である。此のジュリアンと云ふ人はコンスタンチン大帝の次の〳〵代かでありますが、あれを主人公にしてそれに希臘精神を代表させ周圍の羅馬が段々基督敎になり行くのと對立させて書いた芝居であります。細かいことはお話致す間もありませぬが、極く大體を申して見ますと、前の方でジュリアンの腹ちがひの兄弟か何かに、ガラスと云ふのがあつて、二人とも時の皇帝コンスタンチアスといふのに忌まれてガラスの方は早く殺された。ジュリアン自らも身が危くなつてゐる。そこが此劇の初になつて居る。丁度日本でいへば、少し場合は違ふけれども、賴朝が自分の弟範賴義經などを嫉妬を以て殺してゆく、それと同じ樣に、コンスタンチアスが自分の身寄の者を段々亡ぼして行つて、遂にジュリアンまでも殺さうとする。

所が此のジュリアンは武勇聰明な人であつて、夙くから一種の希臘の哲學などに深い興味を有つて居つた。さうして基督敎に反抗するやうな傾向があつた。其のジュリアンが段々大きくなるに隨つて、更に兄の後を繼いで王にして貰つた。而して皇

帝の妹を細君に貰ひ受けた。そこで初の内は無事であつた所が、段々功業を建て人望が附き名譽が揚がると共に丁度頼朝に於ける義經のやうな地位になつて來る。遂に皇帝が、是れを其儘差置く譯に往かぬと云ふので、策略を設け虜にして殺さうとする。虜にしようとすると兵卒が默つて居ない。とう〳〵ジュリアンを守立つて皇帝の位に即かせやうとする、丁度其間に皇帝が死んで結局ジュリアンが皇帝の位に上ぼつてしまふ。同時にコンスタンチアスの殘忍をも憤り基督教を棄てゝ了ふ。是が前部の筋である。

そこでジュリアンは、今まで基督教徒が自分を苛めて居たに反し、基督教を撲滅し希臘教の昔に返さうと云ふので、今まで廢せられて居つた希臘の神々の祭を復興して、さうして基督教の寺を毀してゆく、斯樣にして迫害を加へて居ると、今度は更にジュリアンの人望が落ちて行く。其内にジュリアンは、更に波斯征伐の野心を起して遂に陣中で傷を負ふて死んでしまふ。さうすると今まで迫害を加へられた所の基督教の反抗が一時に起つて來た。是が後部の筋である。斯う云ふ事件の大體は無論歴史上の事實と大差ありません。メレヂコウスキーのもやはり同じ事柄を書いたのであります。ジュリアン皇帝を中心にしてそれを新らしい解釋で、新たに吾々の文明なり生活なりに直接反映せしめて書かうとしたのが此等の作の價値ある所以であります。そこでイブセンの此劇を先づ藝術上から一言批評して見ると二曲續の前の方が宜い。後の方は寧ろ文學上の作品としてはヨリ多く失敗したものであります。二つとも實は他の社會劇即ちイブセン得意のものに比すれば、ずつと價値が尠ない、尠ないけれどもイブセンの文明思潮論として見るには是れに越したものはなく、其中でも前曲の方が宜いといふのである。

それではどう云ふ興味を與へるかと云ふと、吾々の方でドラマチックと言ひますがつまり樣々の事件が波のやうに次第に高

まつて行つて、或一點に集中された時人生の大事件大運命を機一髪の際に定めて了ふ。成程人間は斯う云ふ段取で大事件を仕出かすものであるかと云ふやうな意味を味はせるのである。さう云ふ意味で、前の方が面白い。ジュリアンが兵に擁立せられて皇帝にならうとする其段取がよく描けてゐる。後の方は其れが薄らいで居て文藝上の作品としては餘り成功したものでない。但し斯やうな戯曲的興味といふのは動もすると所謂芝居の山と稱する類でほんの技巧上の興奮の面白味に過ぎないことになる。そこに深い人生の意義が見はれてゐて面白いなどいふのとは違つて淺薄なものになる。イプセンの塲合に於ても是だけでは大したものと云へない。

所で一方の露西亞の作者の書いた三曲續きの小説では、就中最初の「神々の死」(The Death of the Gods)といふ小説が此問題に都合がよい。是れが丁度イプセンと同じ題目を取扱つたものであります。此の小説を讀んで文藝的にどう云ふ感じを與へるかと云へば、當時の宗教的な空氣を描いて社會の活調子を傳へると云ふ意味で、たしかに能く書けた作だと私は考へます。如何にも千五百年昔の羅馬の社會と云ふものは斯うでもあつたらうと思はれる。言ひ換へればファナチック即宗教狂的な社會の調がよく書けてゐる。世の中を擧げて一種の宗教氣狂ひのやうな有樣で、一番強く動いてゐるものは宗教心より外はなく、世人が皆目を釣り上げ足を空にして、神佛詣でをしたり宗論をしたりして居る。如何にも世の中全體が宗教氣狂ひのやうであつて、此世の歡樂などゝいふものは全然捨てゝ仕舞つて居る。さう云ふ空氣が極めてよく描かれてゐる、所がイプセンの劇では此空氣が何うも十分に出て居ない。勿論一つは小説であり一つは劇であるから、小説では細かく空氣を描くに便であり、劇では大まかな事件人物しか描けないといふ差はあらうけれども、兎に角小説の方が面白い。イプセン劇の方では何ちらかといへば二曲續の後の方が空氣を描いて居て前の方は、ジュリアンが皇帝になる間際といふ非凡な事件が興味の主

になつて居る。そんな風で後の方は、宗教氣狂ひ的の空氣を描いたものとしては上に位するが其空氣が十分に背景として我々の胸に沁み込んで來ない。以上は一寸文藝品としての出來不出來の評を挾んだのでありますが、話を前に戻して申しますと、イブセンはどう云ふ風に此劇の中で文明思潮を解釋したかと云ふに、此劇で一番重要な人はジュリアンに初から影の如く附いて廻つて居る所の一人である。全體イブセンの芝居には、何だか譯の分らぬやうな人間がよく一人づゝ必ず出て來る。此劇にもそれがある。而してそれがジュリアンと相並んで全篇の思想の生命となつてゐる。其人物はマキシモスと云ふ當時の仙術遣ひ、支那で言つたならば丹を錬る道士といつた風な人物で其れが絶えずジュリアンに附添ふて刺戟を與へ、死ぬ迄附いて居る。それとジュリアンとが中心になつて文明の二大思想の問題を進行させて居る。マキシモスとジュリアンとの對話が所々にあつて、それが一番明白に此問題を論じて居る。前部の劇の方では、或時ジュリアンが予の天職は何であるかと聞くとマキシモスは不思議の幻の聲をして、帝國を建てる事だと答へさせる。帝國とはと問ふと第三帝國の事であるとて、今までは智慧の樹の上に建つた第一帝國、十字架の樹の上に建つた第二帝國しか無かつたが、次には此兩者を統一した第三の帝國が來なくてはならぬといふ。即第一帝國は希臘文明、第二帝國は基督教文明であるが雙方とも偏してゐて弊がある、眞の文明は二者の統一調和せられた所に成立するといふ哲學を謎のやうにして說いた者である。又後部の劇の中では月の夜にアポロ神殿の中で兩人對話する有名の章がある。ジュリアンが自分の身の上を氣遣つて、自分は希臘教を奉じて基督教を亡さうとしたが不安でならない、結局此の世の中の運命はどうなるだらう、私が是で成功しなかつたならば來るべき時代を支配する者は誰か、といふやうな事からマキシモスが色々說明をして第三帝國の說を繰り返し、それはジュリアン皇帝でもなければガリリア人基督でもない。全體お前は子供がやつと青年時代になつたものを更に子供の時代に引返へさうとするから無駄で

ある、來るべき時代を支配するのは子供でもなければ生立つた所の青年でもない、其の次に來たるべき壯年の大人でなくてはならぬ。而して其大人は子供時代をも靑年時代をも統一したものである。即第三帝國である。エンペラー、ゴッド即ち帝と神との結合した第三者こそ此後を支配するものとして出で來るべきである。併し第三者に誰が成り得るかは分らぬと云ふ。それでは自分で第三帝國を建てんとするにはどうしたら宜からうと云ふと結局一種の自我敎に外ならぬ、先づ汝自からであれ、汝自らの意志を以て進んで往くと人神合一のものが出て來る。ジュリアンはマキシモスからさう云ふ風の說法を受けて、波斯征伐の途に上つた。けれども此野心は第三帝國に行くべき道ではなかつたものと見えて、彼は遂に陣中に於いて傷いて死んで仕舞つた。

斯う云ふ譯で結局ジュリアンの志は空しくなつて、もう一度基督が世を支配して來た。併しイブセンが說かんとした未來は第三帝國の說で明白である。言ひ換れば基督敎でも困る、希臘文明とが調和して、神も人間もおろそかにしない、肉も必要であるが靈も必要である、人間の欲望も大事、あるが神様を信仰することも必要である、智慧も必要であるけれども信仰も必要であるといふ風に二つの矛盾したものを統一した一つの文明が聽て來るべき文明である。斯う云ふ一種の文明史的哲學を打立てたのがイブセンの此の作である。所が此のイブセンの第三帝國と云ふ思想が果して來るべきものであるか否か、机上の空論とも思はれないでもない。それを更に事實の上で段々充實し解釋して何ういふ風に進行するかと云ふ事を示すやうな行方をして居るのが片一方のメレヂコウスキーの小說であるといつて宜い、作者自らはさう云ふ考へで書いたのではないかも知らぬが、結果はさうなつてゐる。

さて此メレヂコウスキーの小說はどうなつて居るかと云へば第一篇は前にも言つた如く「神々の死」と題してジュリアン眞

帝が中心であるが、第二篇になるとずつと飛んで歐羅巴の歴史上に有名な文藝復興と云ふ、十五、六世紀に亙つた時代の大藝術家の一人たるレオナルド、ダ、ヴヰンチといふ大人物を主人公にして書いたもので先驅者(The Forerunner)と題してある。

第三篇は更に飛んで露西亞のピーター大帝を主人公にして書いた、十八世紀時代で有ります、斯んな風で一番初めは紀元四世紀、其次が十六世紀其次は十八世紀の問題である、斯樣に時代が飛んで居るから殆んど二千年の歐羅巴の文明史を三所から書いたやうな大仕掛なものである、それでジュリアン皇帝が死ぬと基督敎が一時は勝利を得て希臘思想復活は無駄だつたと云ふ所で第一篇が終る。併しそれだけでは結局基督敎の全盛と云ふことを示すのみであるから此小說はそれに止めない、更に二篇に行つて、遙に千二百年許りの間を置て歐羅巴文明の根柢にある所の希臘思想は再び此の文藝復興の中に現はれて來た。それを一面から體現したのが此の文藝復興といふ新文明の先驅者レオナルドである。併しながら彼レオナルドも非基督敎的精神と基督敎的精神との矛盾に煩悶するけれども結局洗禮を受けて基督敎の前に平伏して死んで仕舞ふ。更に下つて十八世紀に至つて非基督敎徒と誹られるピーターと云ふ强い人物が出て來て、「我欲す故に我之れを爲す」と云つたやうな意氣込で自分の意志と基督敎とを一にしようとするが、是も末は基督の背景の中に沒し去つて了ふ。要するに歐羅巴の文明の中で、此二つのものが色々の形で爭つて頭を上げようとして居る、又色々の人物が出て之を統一しようとして亡びて行く。此消息を書かうとしたのがメレヂコウスキーの小說であります。

そこで此三篇の中の第一節「神々の死」では、イプセンのと違ふ點は最初にジュリアンが幼年の頃から兄ガラスと共に幽閉に等しい身でゐてプラトーンを讀んだりホーマーの詩を讀んだりして、段々非基督敎的精神を養ふといふ筋道を書いてあ

ることである。そしてイブセンの方で重きをなしたマキシモスといふ道士は此方ではさして重大な役をせず、其所謂靈肉神人統一の第三帝國の思想をば勿論第三帝國などいふ名を用ゐないで、一種の標象で以て、作の最後に至つてほのめかしてゐる。又此のジュリアンは初に基督敎を拒斥すると共にペルシア陣で更に舊來の希臘の多神をも拒斥して了ふ。而して新しい一神にあこがれて居る。斯くして自分の死後はガリリア人の天下となるといふ事を殘念がりながら死んで了ふ。彼が死ぬと果たして世は再び基督敎のものとなつて、ジュリアンの側に仕へて居た所の一歷史家と武官の二人及びジ■リアンが一度思ひを掛けた婦人、此三人が乘合船で羅馬を去らうとする、と船中で三人の間に色々議論が起つて武官の男が女に向つて此世の中は結局どうなるだらうといふと、一方の歷史家が云ふには結局基督敎も昔の希臘思想も同じことである、昔のプラトーンと云ふ哲學者と今の基督と根本は一つである、從つて行末は希臘精神と基督敎精神と統一せられる文明が起るに相違ないと說破する。其中に船では一方に基督敎の坊さんが讃美歌を神に捧げる聲が起り、一方には遙に希臘の神を讃美する牧笛の音がゆるく響いて來て、二つが妙にからみ合ふ。そして此等の凡てを乘せた船は夕暮の靄の中に次第に淡く消えて行く。此二思潮の統一を標象した景色の描寫は頗る詩的に出來て居る、即ち結論はイブセンと同じで、二つは必ず統一されるものである。而してどう云ふ風に調和されるかまで、殆ど見當を付けて書いたのが此小說のイブセンよりも更に思想の上で一歩を進めた所以である。

以上述べたやうな順序で二つの大なる文明思潮を描いた文學が出來て居る、併ながら此等の作が示してゐる解決の一面は果して吾々の實現し得るものであらうか。實際吾々は我等の靈と肉とをどう云ふ風にして調和し得るのであらうか。イブセン乃至メレヂコウスキーが與へた解決と云ふものは、吾々に取つては、成程さうもあらうかとは思はれますけれども、それ

ものが出來ることとか覺束ない心地がする。けれども其問題は千九百年の昔から今日に及ぶまでに變遷して段々色彩の變つたものになり、同時に我等と密邇したものになつて來てゐる。此變遷に意味がある。昔はあの通り希臘敎と基督敎の衝突であつた宗敎上の爭といふ形を取つてゐた其爲め今日の吾々には關係の少ないものであつた。けれども、十六世紀になつて見れば最早さう云ふ形で無くなつて仕舞つた、樣子が違つて來た、基督敎と希臘敎との爭でなくして基督敎と人間の意志本能との爭となつた。而して十八世紀に及んで益此形が明になつて來た。神と神との喧嘩でなくて寧ろ人間の意志欲望と、それを側から制限する者との爭ひになつた、初めは全部宗教的色彩を帶びて現れた所の文明思潮の爭ひが、時代を經るに從つて段々下界に下つて神と人間の喧嘩になつた、而して更に下つて之が現代の吾人の上になると一人間の中での靈性と肉性との爭となつて見れて居る。最早必ずしも基督敎の名を藉るまでもなく、我が胸に潛んでゐる靈性中に於て行はれて居る。一方には吾を中心として働き、名譽も欲しければ快樂も欲しいといふ。それに對照して一方には又人間は食ふ物を食はなくても宜いから悠久なる眞理を探究しなければならぬといふ靈欲も無いではない。食を廢して坐禪を組んでも悠久眞理に接したいといふ一面の人生と、働くだけ働いて甘い物を食つて仕たいだけの快樂を盡して己の生活を豐富にしたならばそれが最上であるといふ一面の人生と、此二つのものが吾々の心の中でも又人と人との間でも相分れて爭つて居る、昔は宗敎の爭ひであつたものが遷り下つて今は人間心內の靈肉の爭ひになつた、吾といふ一個の人間の胸の中で、第一帝國と第二帝國とは縮寫せられ形を變へられて爭つてゐる。如何にして吾々は第三帝國を此の我胸に建てることが出來やうか。是れが依然として我々の上に殘つて居る問題であらうと考へます。（明治四十三年一月談）

大正八年六月廿二日印刷
大正八年六月廿八日發行

（豫約出版）



著作者　故　島村抱月

東京市麹町區飯田町一丁目二番地
發行者　株式會社　天佑社
代表者　小林政治

東京市芝區愛宕下町二丁目五番地
印刷者　牛坂三郎

東京市芝區愛宕下町二丁目五番地
印刷所　邦文社

發行所
東京市麹町區飯田町一丁目二番地
株式會社　天佑社
電話番町（長）一一七九番
振替口座東京一〇一二八番






EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02954 9482